

# 波志江中宿遺跡

北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集

2001

日 本 道 路 公 団  
伊 勢 崎 市  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 序

北関東自動車道は、本県高崎市の関越自動車道から分岐し、茨城県那珂港にいたる延長約150kmの高速自動車道であります。その間、群馬・栃木・茨城各県の主要都市及び東北自動車道・常磐自動車道を結び、地域社会の発展に大きな役割を果たすものと期待されております。

この北関東自動車道の高崎～伊勢崎間約15kmの建設に先立って、平成7年6月から36の遺跡で発掘調査が行われましたが、当事業団ではその内、31の遺跡の発掘調査を担当しました。また、それらの遺跡の整理事業は平成10年度から実施しており、本書『波志江中宿遺跡』は、その発掘調査報告書第7集として刊行するものです。

本遺跡は伊勢崎市波志江町内に所在し、発掘調査は平成9年12月から平成11年10月まで、整理は平成12年度に実施しました。

その結果、旧石器時代・縄文時代の石器や、古墳時代の粘土採掘坑跡、平安時代の水田、中世・近世の土坑・溝等が確認されました。その中で注目されるものとして古墳時代前期の粘土採掘坑があります。この採掘坑は、県内で確認されている最も古い時代のものであるとともに、方形の二つの土坑がセットになるように計画的に採掘されたものです。弥生時代の土器とその後の古墳時代前期の土器とは、作り方や器形に大きな差異があります。この新しい土器を焼くための粘土を採掘したものと思われます。このことは、新しい文化を持った人達の移入が考えられ、弥生時代から古墳時代に移行する時代を明らかにする貴重な発見であると確信しています。

最後になりますが、日本道路公団東京建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった担当者、作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成13年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野 宇三郎



## 例 言

1. 本書は、北関東自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した「波志江中宿遺跡」(遺跡番号 KT-270) の発掘調査報告書である。
2. 本書の記載には、伊勢崎市教育委員会が埋蔵文化財発掘調査を実施した「中宿遺跡」及び「東原遺跡」を含んでいる。
3. 遺跡は、群馬県伊勢崎市波志江町地内に所在する。地番は下記の通りである。  
伊勢崎市波志江町3384-1 3385-1 3385-2 3385-3 3388-2 3388-3 3458 3459 3472 3473-1  
3473-2 3473-3 3474 3494 3495 3496-14 3497 3498 3499 3500-1 3500-3  
3500-4 3500-5 3500-7 3500-8 3500-10 3500-11 3500-12 3500-13 3553-3  
3606 3607 3610 3612 3621-2 3622 3625-1 3626-1 3628-1 3629-1 3629-2  
3630-1 3630-2 3631-1 3634-1 3637 3638-1 3638-3 3639-1 3639-3 3641-1  
3642 3644-1
4. 遺跡名称は、小字地名のうち調査範囲の大半を占める中宿の前に、大字地名に該当する波志江を冠して波志江中宿遺跡としている。
5. 事業主体 日本道路公団・伊勢崎市
6. 調査主体 群馬県埋蔵文化財調査事業団・伊勢崎市教育委員会
7. 調査期間 平成9年11月17日から平成11年10月21日
8. 調査組織 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
事務担当 小野宇三郎・菅野 清・赤山容造・原田恒弘・神保侑史・水田 稔・渡辺 健・住谷 進  
中束耕志・西田健彦・小淵 淳・坂本敏夫・笠原秀樹・井上 剛・小山建夫・須田朋子  
吉田有光・柳岡良宏・岡嶋伸昌・宮崎忠司・森下弘美・片岡徳雄・大澤友治・吉田恵子  
並木綾子・今井もと子・吉田笑子・内山佳子・星野美智子・羽鳥京子・佐藤美佐子  
本間久美子・北原かおり・安藤友美・狩野真子・松下次男・浅見宜記・吉田 茂・蕪原正義  
若田 誠  
調査担当 綿貫邦男・女屋和志雄・間庭 稔・関口美枝・熊谷 健・青木さおり・石川雅俊・内田敬久  
小林大悟・鹿取 涉  
伊勢崎市教育委員会  
事務担当 田島國明・細谷清三・阿部 正・中澤貞治・村田喜久夫  
調査担当 矢島克彦・早川隆弘・塚脇美緒・出浦 崇
9. 整理主体 群馬県埋蔵文化財調査事業団
10. 整理期間 平成12年4月1日から平成13年3月31日
11. 整理組織 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
整理担当 熊谷 健  
整理嘱託員 鹿沼敏子  
整理補助員 儘田澄子・猪野熊洋子・堀米弘美・勅使川原操子・石関富美代・萩原妙子  
遺物観察 綿貫邦男・大木紳一郎・女屋和志雄・谷藤保彦・大西雅広・檜崎修一郎

関口美枝・整理担当・整理嘱託員・整理補助員

遺物写真撮影 佐藤元彦

遺物保存処理 関 邦一・土橋まり子・小材浩一・高橋初美

木器実測 伊東博子・田中のぶ子

12. 分析・委託 石材同定 飯島静男（群馬地質研究会）

第5章 第2節 株式会社 古環境研究所

〃 第3節 パレオ・ラボ 藤根 久・今村美智子

〃 第4節 〃 松葉礼子

13. 発掘調査及び本書の作成にあたり、群馬県教育委員会・伊勢崎市教育委員会・日本道路公団・地元関係者各位並びに以下の方々に御指導・御鞭撻を戴いた。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

山田昌久・高橋 紘・青木 昇・和気清章・青木一男・赤塚次郎・小林健二・原田 幹

早野浩二・新名 強・加納俊介・若狭 徹・田口一郎・及川良彦・松村恵司・関口宗平

梅沢重昭・吉川和男・佐藤満雄・外山政子・三浦京子・岩沢五夫・下城 正・橋本澄朗

五味孝雄・鹿田雄三・井上光夫・服部信博・井上昌美・小泉範明・桑原秀栄・原 眞

荒木幸治・若月省吾・増田 修

14. 本書の執筆は以下の通りである。

第1章 第1節 (中束耕志)

第4章 第6節2・3 (関口美枝)

第4章 第7節3 (関口美枝)

第6章 第1節 (女屋和志雄)

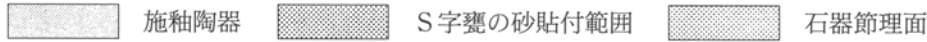
上記以外 (熊谷 健)

15. 本遺跡の記録図、記録写真、出土遺物は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団及び伊勢崎市教育委員会が管理し、群馬県埋蔵文化財調査センター及び伊勢崎市教育委員会に保管している。

## 凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、座標北を表す。
2. 遺構図、遺物図の縮尺については、各挿図中のスケールを参照していただきたい。
3. 遺物写真については、遺物図と同じ縮尺で掲載し、S字状口縁台付甕については1/6で掲載している。
4. 遺構番号は、原則として各区毎、各遺構別に1番から付しているが、整理作業時に付け替えたものがある。その対照は、第4章の各節の遺構名称変更一覧を参照していただきたい。
5. 遺構番号を付したもののうち、発掘調査終了後、明らかに近代と判明したものについては、第4章第1節文末に近代以降報告書未掲載遺構として掲載している。

6. 遺構図中に括弧書きで表記した遺構名称は、近代以降の所産と判明したもののうち、それ以前の遺構と重複するために、新しい攪乱として掲載したものである。
7. 各遺構の位置は、北を基準とし、代表して南東隅のグリットを1m単位で記した。
8. 遺構図で使用したスクリーントーンは、各図中に凡例を示している。
9. 遺物図で使用したスクリーントーンは、陶器は施釉を、S字甕では砂が多い粘土の範囲を表している。

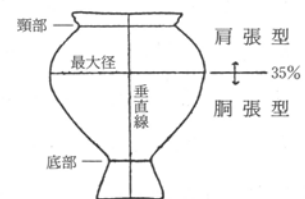


10. 遺物図の中心線は、1/2以上残存するものについては実線で表し、それ以外については破線で表している。
11. 本書で用いたテフラの略号は、下記の通りである。

浅間A軽石 = As-A	浅間B軽石 = As-B	榛名二ツ岳渋川火山灰 = Hr-FA
浅間C軽石 = As-C	浅間板鼻黄色軽石 = As-YP	浅間大窪沢第一軽石 = As-OP 1
浅間板鼻褐色軽石 = As-BP	浅間室田軽石 = As-MP	始良丹沢火山灰 = AT
榛名八崎軽石 = Hr-HP		

尚、Hr-FAについては、略称としてFAを使用している。

12. 遺物番号は、各時代毎に遺構出土、遺構外出土の別に1番から順に番号を付している。
13. 遺物観察は以下の通りである。
  - ・番号は、遺構図中の遺物番号、挿図中の遺物番号、写真図版中の遺物番号と同一である。尚、挿図番号と遺物番号、ハイフンを使用して繋げて表記している。
  - ・出土位置中の(+)の表記は、底面からの高さを表し、単位はcmである。尚、粘土採掘坑出土遺物については、接合関係がある中で、底面に最も近い破片の数値を表記している。
  - ・( ) の計測値は推定値を表し、< > の計測値は残存値を表す。
  - ・石器類の重量はすべて残存値を表す。
  - ・色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に基づいている。
  - ・成・整形の特徴、技法については、原則として実測図で表現できないものについて表記する。
  - ・遺物の部位の表記については、通例通りとする。
  - ・粘土採掘坑出土S字状口縁台付甕のうち完形品については、肩張型、胴張型に分類している。分類方法は、口縁に対して垂直線を引き、頸部と底部の最もくびれた部分間の長さに対して、最大径の位置が頸部より35%以下を肩張型、以上を胴張型としている。



14. 粘土採掘坑については下記の通りの表記とする。
  - ・長軸方位は、上端の長辺方向を表す。計測値は、上端において実測しているが、( ) 内の計測値は粘土量の計算のために中端を実測したものである。
  - ・粘土量については、長辺×短辺×厚さにより計算している。
  - ・断面の各層位の厚さは、現場調査時に計測したものである。
  - ・現場で未調査の抉れ部分の内、特に大きく抉れる箇所については、延長線を用いて表記している。
  - ・接合関係のある採掘坑は、○で囲んだ採掘坑も含めて、文中に採掘坑番号を記載している。

# 目次

口絵	
序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 調査の方法	3
第1節 調査区の設定	3
第2節 基本土層	4
第3章 遺跡の立地	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第4章 確認された遺構・遺物について	11
第1節 概要	11
第2節 中世以降	12
第3節 古代1面 (As-B直下)	67
第4節 古代2面 (As-B降下以前)	73
第5節 古墳時代	81
第6節 縄文時代	209
第7節 旧石器時代	221
第5章 理科学分析	240
第1節 理科学分析にあたって	240
第2節 自然科学分析	241
第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴	262
第4節 木製品と自然木の樹種同定について	278
第6章 まとめ	287
第1節 波志江中宿遺跡出土木製品について	287
第2節 粘土採掘坑出土のS字状口縁台付甕について	289
報告書抄録	
写真図版	



# 挿 図 目 次

第 1 図	波志江中宿遺跡位置図	1	第 50 図	B 区11・12号溝断面	76
第 2 図	調査範囲図	2	第 51 図	C 区 1～3 号溝断面	76
第 3 図	調査区設定図	3	第 52 図	C 区古代 2 面遺構全体図	77
第 4 図	波志江中宿遺跡基本土層図	4	第 53 図	D 区古代 2 面遺構全体図	78
第 5 図	周辺の地形	6	第 54 図	D 区北区画古代 2 面水田	79
第 6 図	周辺の遺跡	8	第 55 図	遺構外出土遺物 (1)	79
第 7 図	A 区中世以降遺構全体図	17	第 56 図	遺構外出土遺物 (2)	80
第 8 図	A 区 1 号溝	18	第 57 図	A 区古墳時代遺構全体図	81
第 9 図	A 区 7・8・11・17・18・23号溝断面及び10・12・15号溝平面、断面	19	第 58 図	A 区 As・B 堆積範囲	82
第 10 図	A 区 1・2 号畠跡	20	第 59 図	A 区 1 号住居跡 (1)	87
第 11 図	A 区 3・4 号畠跡	21	第 60 図	A 区 1 号住居跡 (2)	88
第 12 図	A 区 1～8 号土坑	22	第 61 図	A 区 1 号住居跡出土遺物	89
第 13 図	A 区 9・16～19号土坑、1 号ピット	23	第 62 図	A 区粘土探掘坑に伴う作業道復元図	91
第 14 図	A 区10～15号土坑断面	24	第 63 図	A 区粘土探掘坑完掘状態図	92
第 15 図	A 区溝、土坑出土遺物	24	第 64 図	A 区36・40・41・45・55・58・59・62・64号粘土探掘坑、作業道断面	93
第 16 図	B 区中世以降遺構全体図	折り込み	第 65 図	A 区 1 号粘土探掘坑	94
第 17 図	B 区 1 号掘立柱建物跡	27	第 66 図	A 区 3 号粘土探掘坑	95
第 18 図	B 区 2 号掘立柱建物跡	28	第 67 図	A 区 4 号粘土探掘坑	96
第 19 図	B 区 1 号柵列、4・5・7 号ピット、1 号井戸	29	第 68 図	A 区 5 号粘土探掘坑	97
第 20 図	B 区 4 号溝	30	第 69 図	A 区 6 号粘土探掘坑	98
第 21 図	B 区 2・6・7・11・14号土坑	31	第 70 図	A 区 7 号粘土探掘坑	99
第 22 図	B 区18～22・50号土坑	32	第 71 図	A 区 8 号粘土探掘坑	100
第 23 図	B 区15・38・49号土坑	33	第 72 図	A 区 9 号粘土探掘坑	101
第 24 図	B 区溝、土坑出土遺物	33	第 73 図	A 区10号粘土探掘坑	102
第 25 図	D 区中世以降遺構全体図	34	第 74 図	A 区11号粘土探掘坑	103
第 26 図	D 区 5・6 号溝と出土遺物	35	第 75 図	A 区12号粘土探掘坑	104
第 27 図	D 区 3・8・9・13・20～29号ピット	36	第 76 図	A 区13号粘土探掘坑	105
—中世以降遺物写真(磁器)—			第 77 図	A 区14号粘土探掘坑	106
写真 1	遺構外出土遺物 (1)	39	第 78 図	A 区15号粘土探掘坑	107
写真 2	遺構外出土遺物 (2)	40	第 79 図	A 区16号粘土探掘坑	108
写真 3	遺構外出土遺物 (3)	41	第 80 図	A 区17号粘土探掘坑	109
写真 4	遺構外出土遺物 (4)	42	第 81 図	A 区18号粘土探掘坑	110
写真 5	遺構外出土遺物 (5)	43	第 82 図	A 区20号粘土探掘坑	111
写真 6	遺構外出土遺物 (6)	44	第 83 図	A 区21号粘土探掘坑	112
第 28 図	遺構外出土遺物 (7)	45	第 84 図	A 区22号粘土探掘坑	113
第 29 図	遺構外出土遺物 (8)	46	第 85 図	A 区23号粘土探掘坑	114
第 30 図	遺構外出土遺物 (9)	47	第 86 図	A 区24号粘土探掘坑	115
第 31 図	遺構外出土遺物 (10)	48	第 87 図	A 区25号粘土探掘坑	116
第 32 図	遺構外出土遺物 (11)	49	第 88 図	A 区26号粘土探掘坑	117
第 33 図	遺構外出土遺物 (12)	50	第 89 図	A 区27号粘土探掘坑	118
第 34 図	遺構外出土遺物 (13)	51	第 90 図	A 区28号粘土探掘坑	119
第 35 図	遺構外出土遺物 (14)	52	第 91 図	A 区29号粘土探掘坑	120
第 36 図	遺構外出土遺物 (15)	53	第 92 図	A 区30号粘土探掘坑	121
第 37 図	遺構外出土遺物 (16)	54	第 93 図	A 区31号粘土探掘坑	122
第 38 図	遺構外出土遺物 (17)	55	第 94 図	A 区32号粘土探掘坑	123
第 39 図	遺構外出土遺物 (18)	56	第 95 図	A 区33号粘土探掘坑	124
第 40 図	遺構外出土遺物 (19)	57	第 96 図	A 区34号粘土探掘坑	125
第 41 図	遺構外出土遺物 (20)	58	第 97 図	A 区35号粘土探掘坑	126
第 42 図	B 区古代 1 面遺構全体図	68	第 98 図	A 区36号粘土探掘坑	127
第 43 図	C 区古代 1 面遺構全体図	69	第 99 図	A 区37号粘土探掘坑	128
第 44 図	D 区古代 1 面遺構全体図	70	第100図	A 区39号粘土探掘坑	129
第 45 図	D 区北区画古代 1 面水田	71	第101図	A 区40号粘土探掘坑	130
第 46 図	D 区 9 号溝断面と出土遺物	71	第102図	A 区41号粘土探掘坑	131
第 47 図	遺構外出土遺物	72	第103図	A 区42号粘土探掘坑	132
第 48 図	B 区古代 2 面遺構全体図	74	第104図	A 区43号粘土探掘坑	133
第 49 図	B 区 5・12号溝	75	第105図	A 区44号粘土探掘坑	134

第106図	A区45号粘土採掘坑	135	第168図	C区石器出土状況	211
第107図	A区46号粘土採掘坑	136	第169図	縄文時代の石器	212
第108図	A区47号粘土採掘坑	137	第170図	接合資料-1(1)	212
第109図	A区48号粘土採掘坑	138	第171図	接合資料-1(2)・2	213
第110図	A区49号粘土採掘坑	139	第172図	縄文時代出土遺物2-(1)	215
第111図	A区50号粘土採掘坑	140	第173図	縄文時代出土遺物2-(2)	216
第112図	A区51号粘土採掘坑	141	第174図	縄文時代出土遺物2-(3)	217
第113図	A区53号粘土採掘坑	142	第175図	縄文時代出土遺物2-(4)	218
第114図	A区54号粘土採掘坑	143	第176図	縄文時代出土遺物2-(5)	219
第115図	A区55号粘土採掘坑	144	第177図	調査区全体図	221
第116図	A区56号粘土採掘坑	145	第178図	基本土層図及び各区の標準土層図	222
第117図	A区57号粘土採掘坑	146	第179図	D区石材別石器出土状況	223
第118図	A区58号粘土採掘坑	147	第180図	D区石器出土状況	224
第119図	A区59号粘土採掘坑	148	第181図	D区Bブロック石器出土状況	225
第120図	A区60号粘土採掘坑	149	第182図	D区C・Dブロック石器出土状況	226
第121図	A区61号粘土採掘坑	150	第183図	第I文化層出土石器(1)	227
第122図	A区62号粘土採掘坑	151	第184図	第I文化層出土石器(2)	228
第123図	A区63号粘土採掘坑	152	第185図	第I文化層出土石器(3)	229
第124図	A区64号粘土採掘坑	153	第186図	接合資料-1(1)	230
第125図	A区65号粘土採掘坑	154	第187図	接合資料-1(2)	231
第126図	A区粘土採掘坑出土遺物(1)	155	第188図	接合資料-2	232
第127図	A区粘土採掘坑出土遺物(2)	156	第189図	接合資料-3・4(1)	233
第128図	A区粘土採掘坑出土遺物(3)	157	第190図	接合資料-4(2)	234
第129図	A区粘土採掘坑出土遺物(4)	158	第191図	接合資料-4(3)	235
第130図	A区粘土採掘坑出土遺物(5)	159	第192図	第II文化層出土石器	236
第131図	A区粘土採掘坑出土遺物(6)	160	第193図	分析試料採取地点	240
第132図	A区粘土採掘坑出土遺物(7)	161		一理科学分析	
第133図	A区粘土採掘坑出土遺物(8)	162	図表1	テフラ分析土層柱状図	252
第134図	A区粘土採掘坑出土遺物(9)	163	図表2	テフラ分析結果	253
第135図	A区粘土採掘坑出土遺物(10)	164	図表3	植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果(1)	254
第136図	A区粘土採掘坑出土遺物(11)	165	図表4	植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果(2)	255
第137図	A区粘土採掘坑出土遺物(12)	166	図表5	花粉分析(1)、種実同定結果	256
第138図	A区粘土採掘坑出土遺物(13)	167	図表6	花粉分析結果(2)	257
第139図	A区粘土採掘坑出土遺物(14)	168	写真1	植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真	258
第140図	A区粘土採掘坑出土遺物(15)	169	写真2	A区採取の花粉・孢子遺体	259
第141図	A区粘土採掘坑出土遺物(16)	170	写真3	D区採取の花粉・孢子遺体	260
第142図	A区粘土採掘坑出土遺物(17)	171	写真4	D区採取の種実	261
第143図	A区粘土採掘坑出土遺物(18)	172	図表7	木製品、自然木の樹種同定結果と粘土、土器胎土分析の土層柱状図、粒子組成表(1)	271
第144図	A区粘土採掘坑出土遺物(19)	173	図表8	粘土、土器胎土分析の粒子組成表(2)	272
第145図	A区粘土採掘坑出土遺物(20)	174	図表9	粘土、土器胎土分析の粒子組成表(3)	273
第146図	A区粘土採掘坑出土遺物(21)	175	写真5	粘土中の粒子顕微鏡写真	274
第147図	A区粘土採掘坑出土遺物(22)	176	写真6	粘土中の微化石類顕微鏡写真	275
第148図	A区粘土採掘坑出土遺物(23)	177	写真7	土器胎土中の粒子顕微鏡写真(1)	276
第149図	A区粘土採掘坑出土遺物(24)	178	写真8	土器胎土中の粒子顕微鏡写真(2)	277
第150図	A区粘土採掘坑出土遺物(25)	179	写真9	木材組織顕微鏡写真(1)	280
第151図	A区粘土採掘坑出土遺物(26)	180	写真10	木材組織顕微鏡写真(2)	281
第152図	A区粘土採掘坑出土遺物(27)	181	写真11	木材組織顕微鏡写真(3)	282
第153図	B区古墳時代遺構全体図	182	写真12	木材組織顕微鏡写真(4)	283
第154図	B区13~16号溝、92号土坑	183	写真13	木材組織顕微鏡写真(5)	284
第155図	C区古墳時代遺構全体図	184	写真14	木材組織顕微鏡写真(6)	285
第156図	C区FA堆積範囲	折り込み	写真15	木材組織顕微鏡写真(7)	286
第157図	D区11~14号溝断面	188	第194図	A区24・39号粘土採掘坑出土木製品	288
第158図	D区古墳時代遺構全体図	189			
第159図	D区11号溝出土遺物	190			
第160図	D区旧河道	191			
第161図	D区旧河道出土遺物(1)	192			
第162図	D区旧河道出土遺物(2)	193			
第163図	遺構外出土遺物(1)	203			
第164図	遺構外出土遺物(2)	204			
第165図	遺構外出土遺物(3)	205			
第166図	B区・C区石器出土状況	209			
第167図	B区石器出土状況	210			

# 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	9	第6表 古墳時代遺構名称変更一覧	188
第2表 中世以降遺構名称変更一覧	16	第7表 石器属性表	214
第3表 近代以降報告書未掲載遺構一覧	16	第8表 第I文化層石器属性表	237
第4表 中世以降遺構一覧	37	第9表 第II文化層石器属性表	239
第5表 古代2面遺構名称変更一覧	73		

# 写真図版目次

## 口絵 1

粘土採掘坑確認面全景 北に赤城山、西に波志江沼を望む（南から）

粘土採掘坑の完掘状態全景（東から）

## 口絵 2

54号粘土採掘坑—最初に調査した（南から）

43号粘土採掘坑—天地返しので埋没している（北から）

P L. 1	1	A区全景（上方が北）	10	A区1号畠跡（南から）	
	2	B区南西部全景（東から）	P L. 7	1	B区2号掘立柱建物跡1号ピット（南から）
	3	A区北東部全景（南から）		2	B区2号掘立柱建物跡2号ピット（南から）
	4	B区南東部全景（北から）		3	B区2号掘立柱建物跡3号ピット（東から）
P L. 2	1	B区東半部全景（上方が北）		4	B区2号掘立柱建物跡4号ピット（南から）
	2	B区東半部全景（上方が北）		5	B区2号掘立柱建物跡5号ピット（北西から）
	3	C区全景（左方が北）		6	B区2号掘立柱建物跡6号ピット（西から）
	4	C区全景（左方が北）		7	B区2号掘立柱建物跡8号ピット（南から）
P L. 3	1	D区全景（左方が北）		8	B区2号掘立柱建物跡9号ピット（南から）
	2	D区全景（左方が北）	P L. 8	1	B区2号掘立柱建物跡10号ピット（西から）
	3	B区北東部全景（南から）		2	B区2号掘立柱建物跡11号ピット（北から）
	4	B区北東部全景（南から）		3	B区2号掘立柱建物跡12号ピット（北から）
	5	C区西桂川以東全景（南から）		4	B区2号掘立柱建物跡13号ピット（北から）
	6	C区西桂川以東全景（北から）		5	A区23号溝（西から）
P L. 4	1	D区全景（上方が北）		6	B区4号溝（東から）
	2	C区北西部全景（東から）		7	A区2号畠跡（東から）
	3	C区北西部全景（東から）		8	B区2号掘立柱建物跡7号ピット（北から）
	4	A区1号溝（西から）		9	D区水田2・3号畦（北から）
	5	A区7・8号溝（南西から）	P L. 9	1	D区水田4号畦（西から）
	6	A区12号溝（南から）		2	D区水田5号畦（西から）
	7	D区5号溝（北から）		3	D区水田1号畦（北から）
	8	D区6号溝（北から）		4	D区水田2号畦（北から）
	9	B区1号柵列（西から）		5	D区水田3号畦（南から）
P L. 5	1	B区2号土坑（南から）		6	D区水田4号畦（南から）
	2	B区6号土坑（西から）		7	D区水田5号畦（南から）
	3	B区7号土坑（南から）		8	D区水田6号畦（西から）
	4	B区11号土坑（南から）		9	D区水田7号畦（西から）
	5	B区14号土坑（西から）	P L. 10	1	D区水田8号畦（西から）
	6	B区15号土坑（南から）		2	D区水田9号畦（西から）
	7	B区18号土坑（北から）			
	8	B区19号土坑（西から）			
	9	B区20号土坑（北から）			
P L. 6	1	B区21・22号土坑（西から）			
	2	B区38号土坑（西から）			
	3	B区50号土坑（東から）			
	4	A区17(左)・18(右)号土坑（西から）			
	5	B区49号土坑（西から）			
	6	A区19号土坑（南から）			
	7	A区16号土坑（西から）			
	8	B区1号井戸（西から）			
	9	B区1号掘立柱建物跡（南から）			

- 3 D区9号溝 (北から)  
4 B区12号溝西半部 (東から)  
5 B区12号溝東半部 (西から)  
6 C区2号溝 (南東から)  
7 B区11号溝 (南から)  
8 C区1号溝 (西から)  
9 C区3号溝 (南から)
- P L. 11 1 C区水田検出状況 (北から)  
2 D区北区画水田検出状況 (南西から)  
3 D区北区画水田検出状況 (北東から)  
4 D区北区画5・6号溝 (西から)  
5 A区1号住居跡炭化材出土状況 (西から)  
6 A区1号住居跡 (西から)  
7 A区1号住居跡掘り方 (西から)  
8 A区1号住居跡遺物出土状況 (西から)
- P L. 12 1 A区1号粘土採掘坑セクション (東から)  
2 A区1号粘土採掘坑遺物出土状況 (東から)  
3 A区3(左)・9(右)号粘土採掘坑 (南から)  
4 A区4(左)・5(右)号粘土採掘坑 (東から)  
5 A区6号粘土採掘坑 (南から)  
6 A区7号粘土採掘坑 (西から)  
7 A区8号粘土採掘坑セクション (南から)  
8 A区16号粘土採掘坑セクション (南から)
- P L. 13 1 A区15号粘土採掘坑 (南から)  
2 A区8・14・15・16号粘土採掘坑 (東から)  
3 A区10号粘土採掘坑遺物出土状況 (北から)  
4 A区10号粘土採掘坑 (南から)  
5 A区11号粘土採掘坑セクション (南から)  
6 A区11号粘土採掘坑 (南から)  
7 A区12号粘土採掘坑セクション (北から)  
8 A区12号粘土採掘坑遺物出土状況 (北から)
- P L. 14 1 A区12号粘土採掘坑遺物出土状況 (南から)  
2 A区12号粘土採掘坑 (南から)  
3 A区13号粘土採掘坑セクション (北から)  
4 A区13号粘土採掘坑 (南から)  
5 A区17号粘土採掘坑 (南から)  
6 A区18号粘土採掘坑遺物出土状況 (南から)  
7 A区18号粘土採掘坑 (南から)  
8 A区20号粘土採掘坑 (東から)
- P L. 15 1 A区21号粘土採掘坑遺物出土状況 (東から)  
2 A区21号粘土採掘坑遺物出土状況 (北から)  
3 A区21号粘土採掘坑 (西から)  
4 A区22号粘土採掘坑遺物出土状況 (西から)
- 5 A区22号粘土採掘坑 (東から)  
6 A区23号粘土採掘坑 (西から)  
7 A区24号粘土採掘坑セクション (西から)  
8 A区24号粘土採掘坑 (南から)
- P L. 16 1 A区26号粘土採掘坑遺物出土状況 (西から)  
2 A区26号粘土採掘坑 (西から)  
3 A区27号粘土採掘坑遺物出土状況 (南から)  
4 A区27号粘土採掘坑 (北から)  
5 A区28号粘土採掘坑 (北から)  
6 A区29号粘土採掘坑セクション (西から)  
7 A区29号粘土採掘坑 (東から)  
8 A区30号粘土採掘坑遺物出土状況 (北から)
- P L. 17 1 A区30号粘土採掘坑 (東から)  
2 A区31号粘土採掘坑セクション (南から)  
3 A区31号粘土採掘坑 (東から)  
4 A区32号粘土採掘坑 (南から)  
5 A区33号粘土採掘坑セクション (南東から)  
6 A区33号粘土採掘坑 (南から)  
7 A区34号粘土採掘坑セクション (南から)  
8 A区34号粘土採掘坑遺物出土状況 (南から)
- P L. 18 1 A区34号粘土採掘坑 (南から)  
2 A区35号粘土採掘坑遺物出土状況 (西から)  
3 A区35号粘土採掘坑 (東から)  
4 A区36号粘土採掘坑抉れ部検出状況 (北から)  
5 A区36号粘土採掘坑遺物出土状況 (西から)  
6 A区36号粘土採掘坑 (西から)  
7 A区37号粘土採掘坑遺物出土状況 (東から)  
8 A区37号粘土採掘坑 (東から)
- P L. 19 1 A区39号粘土採掘坑遺物出土状況 (南から)  
2 A区39号粘土採掘坑 (東から)  
3 A区40号粘土採掘坑遺物出土状況 (東から)  
4 A区40号粘土採掘坑 (西から)  
5 A区41号粘土採掘坑遺物出土状況 (北から)  
6 A区41号粘土採掘坑 (東から)  
7 A区42号粘土採掘坑セクション (南から)  
8 A区42号粘土採掘坑 (東から)
- P L. 20 1 A区43号粘土採掘坑 (東から)  
2 A区44号粘土採掘坑 (東から)  
3 A区45号粘土採掘坑 (東から)  
4 A区46号粘土採掘坑 (東から)  
5 A区47号粘土採掘坑セクション (北から)  
6 A区47号粘土採掘坑 (西から)  
7 A区48号粘土採掘坑セクション (東から)

- 8 A区48号粘土採掘坑遺物出土状況  
(西から)
- P L. 21 1 A区48号粘土採掘坑(東から)  
2 A区49号粘土採掘坑(北から)  
3 A区50号粘土採掘坑遺物出土状況  
(北から)  
4 A区53号粘土採掘坑(北から)  
5 A区55号粘土採掘坑セクション  
(北から)  
6 A区55号粘土採掘坑(東から)  
7 A区57号粘土採掘坑セクション  
(東から)  
8 A区57号粘土採掘坑遺物出土状況  
(北から)
- P L. 22 1 A区56(前)・57(奥)号粘土採掘坑(北  
から)  
2 A区58号粘土採掘坑セクション  
(西から)  
3 A区58号粘土採掘坑(北から)  
4 A区59号粘土採掘坑遺物出土状況  
(西から)  
5 A区59号粘土採掘坑(東から)  
6 A区60号粘土採掘坑(南から)  
7 A区61号粘土採掘坑(東から)  
8 A区62号粘土採掘坑遺物出土状況  
(南から)
- P L. 23 1 A区62号粘土採掘坑(東から)  
2 A区63号粘土採掘坑セクション  
(北から)  
3 A区63号粘土採掘坑(東から)  
4 A区64号粘土採掘坑セクション  
(西から)  
5 A区64号粘土採掘坑遺物出土状況  
(南から)  
6 A区64号粘土採掘坑(南から)  
7 A区65号粘土採掘坑遺物出土状況  
(北東から)  
8 A区65号粘土採掘坑(東から)
- P L. 24 1 A区1号粘土採掘坑(西から)  
2 A区13号粘土採掘坑(北から)  
3 A区25号粘土採掘坑(東から)  
4 A区62号粘土採掘坑(東から)  
5 D区11号溝(南から)  
6 D区12号溝(南から)  
7 D区水田検出状況(西から)  
8 D区旧河道自然木出土状況(東から)
- P L. 25 1 B区aブロック石器分布状況  
(南から)  
2 C区b・cブロック石器分布状況  
(北東から)  
3 C区cブロック石器分布状況  
(東から)  
4 D区石器分布状況(西から)  
5 D区Aブロック石器分布状況  
(東から)  
6 D区Bブロック石器分布状況  
(西から)
- 7 D区Cブロック石器分布状況  
(北から)
- 8 D区Dブロック石器分布状況  
(東から)
- P L. 26 中世以降出土遺物
- P L. 27 中世以降遺構外出土遺物(1)
- P L. 28 中世以降遺構外出土遺物(2)
- P L. 29 中世以降遺構外出土遺物(3)
- P L. 30 中世以降遺構外出土遺物(4)
- P L. 31 中世以降遺構外出土遺物(5)
- P L. 32 中世以降遺構外出土遺物(6)
- P L. 33 中世以降遺構外出土遺物(7)
- P L. 34 中世以降遺構外出土遺物(8)
- P L. 35 中世以降遺構外出土遺物(9)
- P L. 36 中世以降遺構外出土遺物(10)
- P L. 37 中世以降遺構外出土遺物(11)
- P L. 38 中世以降遺構外出土遺物(12)
- P L. 39 古代1面出土遺物  
古代2面遺構外出土遺物(1)
- P L. 40 古代2面遺構外出土遺物(2)
- P L. 41 古墳時代出土遺物(1)
- P L. 42 古墳時代出土遺物(2)
- P L. 43 古墳時代出土遺物(3)
- P L. 44 古墳時代出土遺物(4)
- P L. 45 古墳時代出土遺物(5)
- P L. 46 古墳時代出土遺物(6)
- P L. 47 古墳時代出土遺物(7)
- P L. 48 古墳時代出土遺物(8)
- P L. 49 古墳時代出土遺物(9)
- P L. 50 古墳時代出土遺物(10)
- P L. 51 古墳時代出土遺物(11)
- P L. 52 古墳時代出土遺物(12)
- P L. 53 古墳時代出土遺物(13)
- P L. 54 古墳時代出土遺物(14)
- P L. 55 古墳時代出土遺物(15)
- P L. 56 古墳時代出土遺物(16)
- P L. 57 古墳時代出土遺物(17)
- P L. 58 古墳時代出土遺物(18)
- P L. 59 古墳時代出土遺物(19)
- P L. 60 古墳時代出土遺物(20)
- P L. 61 古墳時代出土遺物(21)
- P L. 62 古墳時代遺構外出土遺物(1)
- P L. 63 古墳時代遺構外出土遺物(2)
- P L. 64 古墳時代遺構外出土遺物(3)  
弥生時代遺構外出土遺物
- P L. 65 縄文時代出土遺物 2-(1)
- P L. 66 縄文時代出土遺物 2-(2)
- P L. 67 縄文時代出土遺物 2-(3)
- P L. 68 縄文時代出土遺物 2-(4)
- P L. 69 縄文時代出土遺物 1  
第I文化層出土石器(1)
- P L. 70 第I文化層出土石器(2)
- P L. 71 第I文化層出土石器(3)  
第II文化層出土石器



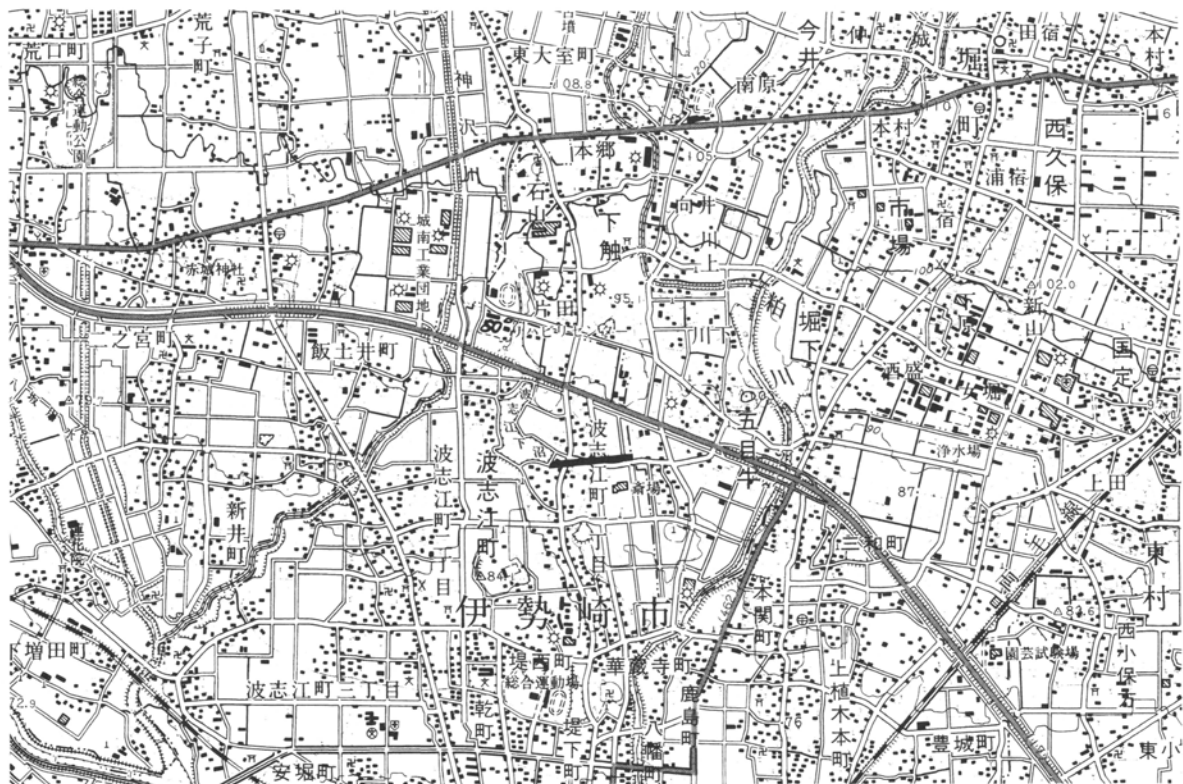
# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

平成8年8月と11月の2回に渡り、県教育委員会文化財保護課がB・C・D区の範囲確認調査を実施した。その結果、一部にAs-Bの堆積が認められ、水田が検出される可能性が推測された。よって、平成9年11月17日から、アバット・ピア―工事が計画されかつ、最も用地の買収が進んでいたC区から本調査に着手した。

また、範囲確認調査では、STA125～127区間（確認調査時の区名称E・F区）は削平されていて遺構が確認できなかったため、調査対象外と判断していた。その後、五日牛新田遺跡から繋がるローム台地がF区側へ連続していることと、西側低地部分に水田が形成されていることが判明したため、再度調査対象地に組み込み、平成10年度に調査を実施することになった（調査時D区と改称）。さらに、西桂川左岸に接した地点もAs-Bが確認されたため、同年10月に本調査を実施するに決定した。伊勢崎聖苑敷地部分については、同月に確認調査を実施したが、攪乱のため遺構は検出できなかった。

一方、A区については、平成10年10月に文化財保護課と事業団により確認調査を実施した。その結果、古墳時代の溝とAs-Bの堆積、及び中・近世の溝を確認した。問題点として遺構面が波志江下沼の水面より低くなり、出水対策と堰堤の防護が、検討課題としてあげられた。そして、同年11月から本調査を実施することになった。なお、調査実施中の平成11年2月、出水による壁面の崩落が始まり、堰堤側に亀裂のおよぶ危険性が予測されたため、急遽調整会議を開催し、鋼矢板山留壁の安全対策を施すことに決定し、同年3月に施工し平成11年度から調査を再開した。



第1図 波志江中宿遺跡位置図（国土地理院 1/50000「前橋」使用）

## 第2節 調査の経過

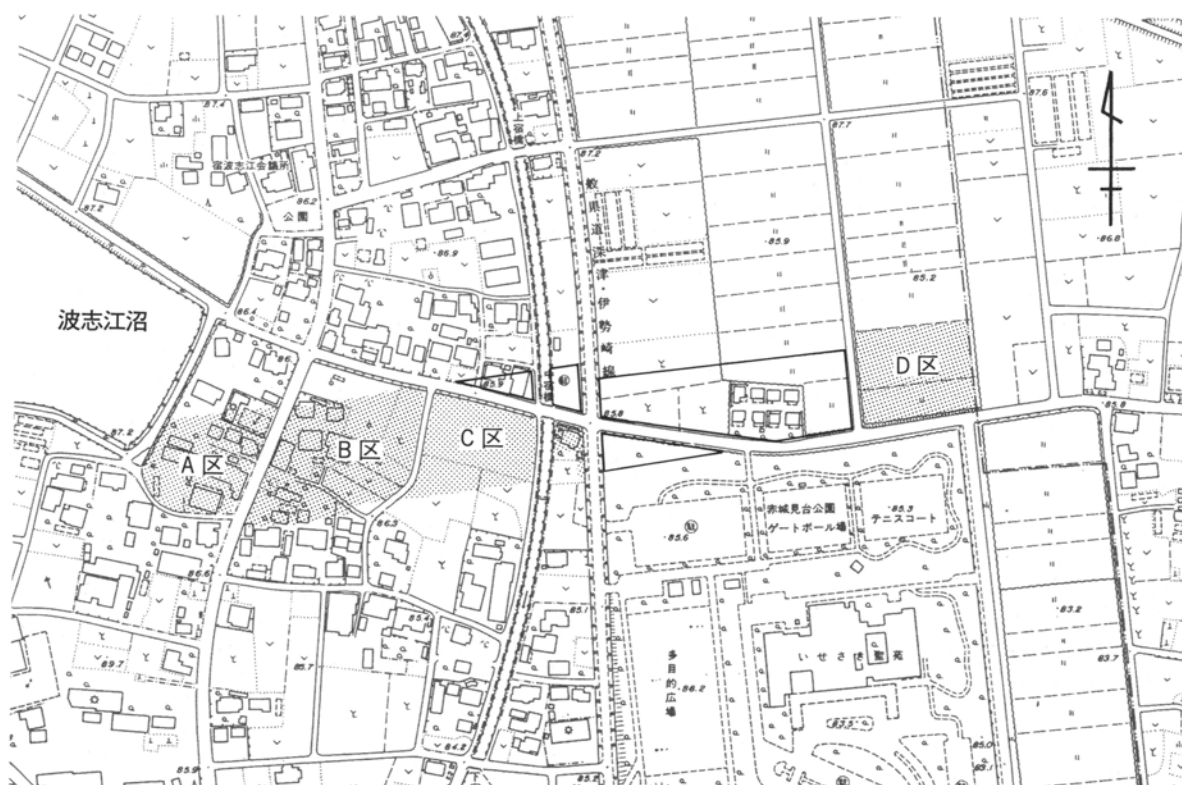
発掘調査の、調査対象表面積は19,174㎡、延面積は36,193㎡であった。便宜上A～D区の4区画を設定し、順次調査を実施した。各区の位置については、第2章第1節「調査区の設定」を参照されたい。また、C区とD区の間は一級河川西桂川の旧流路に該当し、試掘調査の結果、遺構が認められなかったため発掘調査対象区域外となっている。

平成9年度は、年度後半の11月17日よりC区の発掘調査に着手した。平成10年3月中旬に実施した旧石器時代の試掘調査により、調査区南西端で石器が出土したため、旧石器本調査は平成10年度に継続されることとなった。その間の2月27日、西桂川以東の試掘調査を実施した結果、D区は発掘調査対象区域となった。

平成10年度は、4月当初よりカルバートボックス工事が急務のD区で調査を先行した。D区の調査終了後、C区の旧石器時代及び未調査部分の調査を実施した。10月22日、A区及びB区の試掘の結果、遺構が確認されたため、B区では11月9日より、A区では新たに別班を編成して11月12日より調査を実施した。

平成11年1月20日、A区で粘土採掘坑が確認された。A区は「波志江下沼」の堤防下に位置しており、また、粘土採掘坑は約2mの深さがあることから、非常に危険であり、十分な安全対策を施した上で発掘調査を実施することとなった。そのため、堤防下で総延長33.4mにわたって、長さ11mの鋼矢板72本の打設工事を行った。工事は、2月22日より開始され3月23日に終了した。A区の発掘調査は、平成11年4月から再開されることとなった。

平成11年度は、上記粘土採掘坑の調査を実施した。調査は危険の伴うものであったが、事故等も無く8月31日に終了した。7月10日には、隣接する波志江西宿遺跡と合同で現地説明会を行い、524名の見学者を数えた。それに先立って、7月7日には報道関係機関に対し、共同記者発表を行っている。B区では、立退きが遅れていた西半部の調査を実施した。平成11年10月21日をもって、すべての発掘調査を終了した。



第2図 調査範囲図 (伊勢崎市都市計画図1/5000使用)



## 第2章 調査の方法

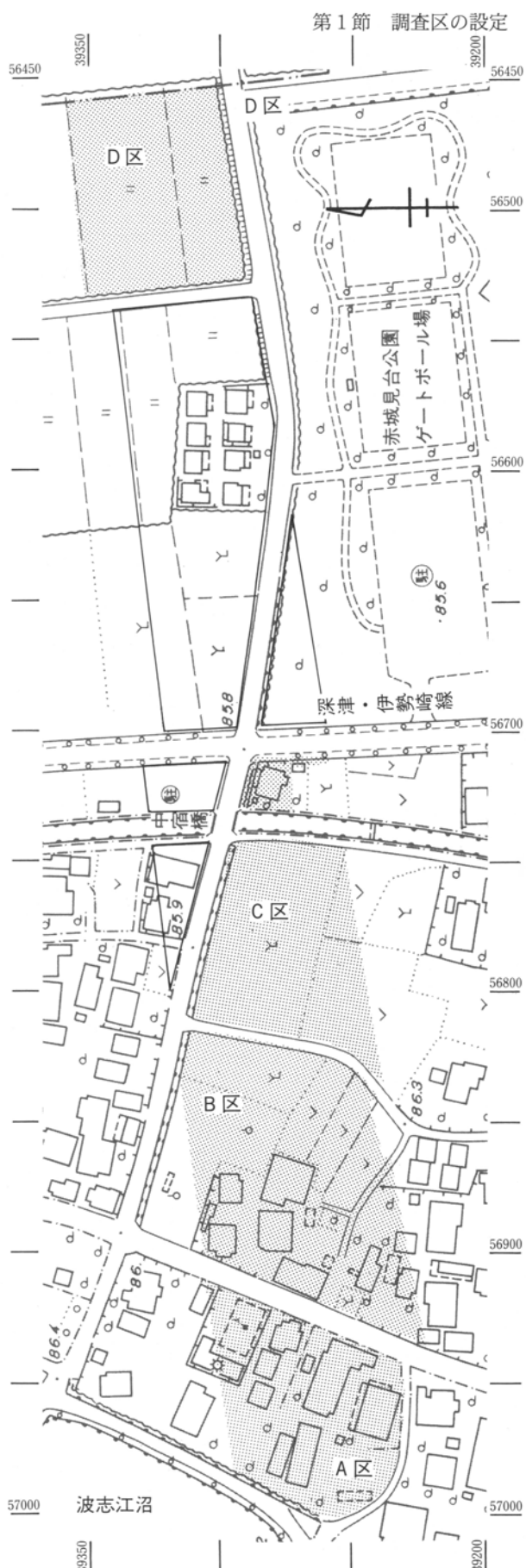
### 第1節 調査区の設定

本遺跡では、発掘調査にあたり遺跡内を南北に横切る現道を境として、便宜上調査区を4区画に区切っている。名称は、西から順にA・B・C・D区と付した。県道深津・伊勢崎線（旧道）の西側をA区、東側をB区、県道深津・伊勢崎線（新道）の西側をC区、「赤城見台公園」北側の区画のうち、佐波郡赤堀町寄りをD区とした。

発掘調査開始以前には、県道深津・伊勢崎線（新道）の東側の3区画に、西から順にそれぞれD・E・F区と付したが、D・E区は試掘調査の結果、一級河川西桂川の旧流路に該当し遺構が認められなかったため、発掘調査対象区域外となった。そこで、新たにF区をD区と名称変更して調査を実施した。

北関東自動車道（高崎～伊勢崎）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施されるに当たり、統一したグリッド仕様の必要性から、路線内全ての発掘現場で国家座標第IX系を用いることが確認された。本遺跡もそれに準じたグリッド設定を行っている。

グリッドポイントは、1m四方を最小単位とし、南東隅の数値を用いて表記している。表記の仕方については、調査区内全ての地点で、X軸・Y軸ともに座標値の下3桁の数値が重複しないことから、下3桁のみの表記とした。一例としてX=39,300、Y=-56,800の場合、X300、Y800となる。本報告書に於いても同様とする。グリッド杭については、各調査年度の地上測量業者に委託して、グリッドポイント上で10m間隔を基本として設置し、必要に応じて増加している。ベンチマークについては、各調査区周辺の水準点を既知点として、2箇所を基本に設置している。

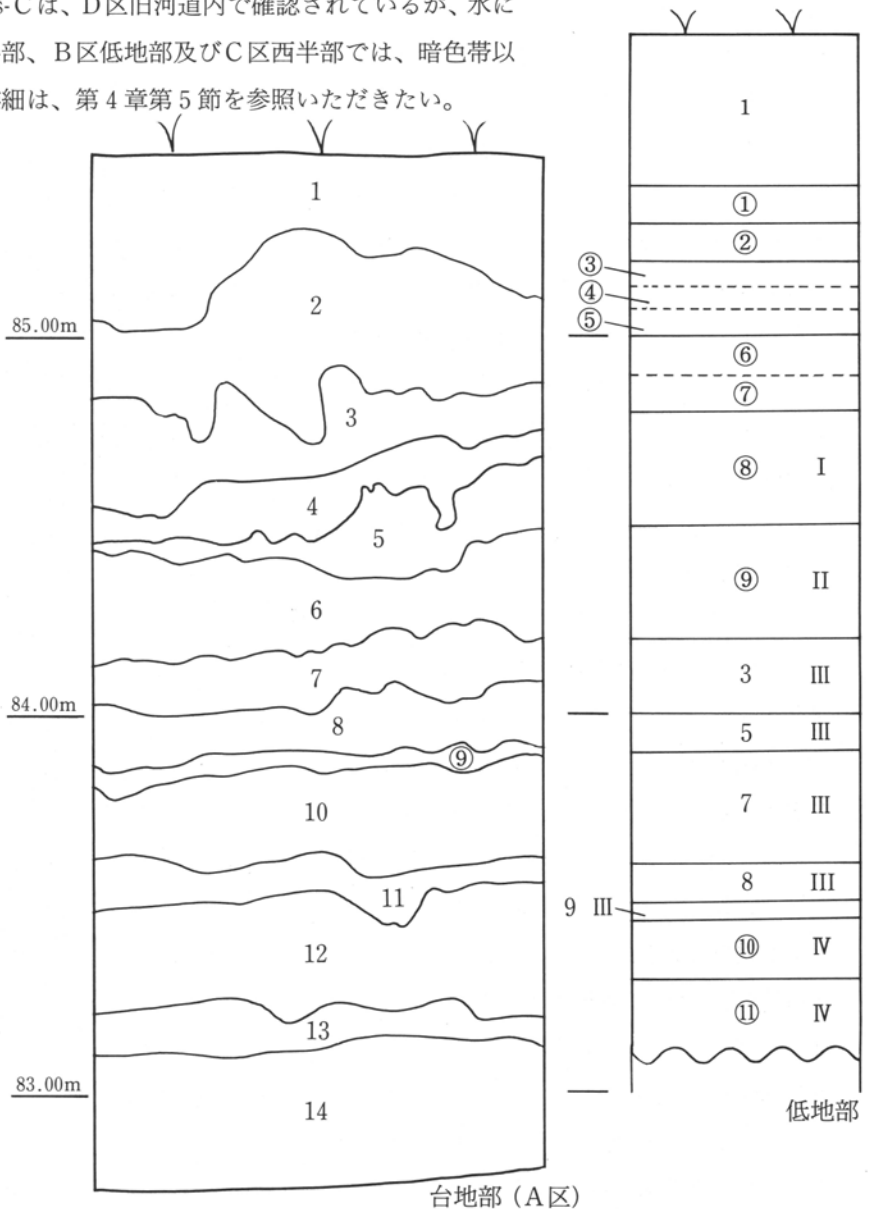


## 第2節 基本土層

本遺跡は、赤城山南麓末端の洪積台地と、赤城山頂付近より流下している中小河川の浸食により形成された沖積低地上に立地する。洪積台地は中部ローム以上が安定して堆積し、群馬県平野部で一般的な指標テフラを確認できる。ロームの堆積は、A・B・C区のほぼ全域とD区台地部で確認されている。そのうち、ローム上面でAs-Bが確認された範囲については、便宜上低地部として扱う。ローム上面の標高は概ね85m前後で、最高標高はB区南西端の凡そ86.9mである。発掘調査は、これらのテフラ層及びテフラ混土層を鍵層として実施している。県道深津・伊勢崎線（新道）からD区旧河道部にかけては、ロームの堆積は認められず、シルト層若しくは砂層が堆積する。当該箇所は、一級河川西桂川の旧流路に該当する低地部である。

台地部の基本土層は、A区北東部のものである。基盤層の上面には、Hr-HP以上のロームが堆積し、暗色帯以上の各層では、良好な状態で指標テフラを確認できる。低地部の基本土層は、B区東半部のものに各区で確認されたテフラ層を追加し、模式的に表したものである。ロームの堆積は各区とも概ね良好で、基本的には台地部と同様である。As-Bは、各区とも5~10cm程度の堆積である。FAは、A区粘土採掘坑上面とC区南西端で確認されている。As-Cは、D区旧河道内で確認されているが、水に流された形跡がある。A区西半部、B区低地部及びC区西半部では、暗色帯以下の各層が粘土化している。詳細は、第4章第5節を参照いただきたい。

- |              |                                       |
|--------------|---------------------------------------|
| 台地部          |                                       |
| 1 表土         |                                       |
| 2 暗褐色土       | ローム漸移層                                |
| 3 黄褐色土       | As-YPを塊状に混入                           |
| 4 黄褐色土       | 黄色パミス少混                               |
| 5 黄褐色土       | As-OP1多混                              |
| 6 黄褐色土       | 3層近似                                  |
| 7 黄褐色土       | パミスは見えない                              |
| 8 茶褐色土       | As-BP混土                               |
| 9 黄褐色土       | As-MP再堆積層                             |
| 10 黄白色土      | AT層                                   |
| 11 暗色帯       | 粘性強い。<br>下部に黄色パミス、炭化物粒混入。<br>低地部⑩層に相当 |
| 12 黄褐色土      | 黄色パミス、炭化物粒混入。<br>低地部⑩層に相当             |
| 13 明黄褐色土     | 黄色パミス、炭化物粒混入。<br>低地部⑩層に相当             |
| 14 灰白色土      | Hr-HP混入。<br>低地部褐色粘土層に相当               |
| 低地部          |                                       |
| ① 灰褐色土       | As-B混土                                |
| ② As-B       | 各区で確認                                 |
| ③ As-B下黒色粘質土 | D区のみ確認                                |
| ④ 暗灰褐色土      | Hr-FA混土                               |
| ⑤ Hr-FA      | A・C区のみ確認                              |
| ⑥ 黒褐色土       | As-C混土                                |
| ⑦ As-C       | D区のみ確認。<br>水に流された痕跡                   |
| ⑧ 黒褐色土       | 植物繊維多混                                |
| ⑨ 暗褐色土       | 植物繊維少混<br>台地部2層に相当か                   |
| ⑩ 黒灰色粘質土     | 台地部10層に相当                             |
| ⑪ 青灰色粘質土     | 台地部11層12層に相当                          |



第4図 波志江中宿遺跡基本土層図

## 第3章 遺跡の立地

### 第1節 地理的環境

波志江中宿遺跡は、群馬県伊勢崎市波志江町の北東端に所在する。行政上は、D区東端部において佐波郡赤堀町と境界を成している。遺跡地での標高は、概ね85m程度である。遺跡周辺は、赤城山南麓末端の樹枝状に開析された低台地が広がり、北から南へ緩斜面が続いている。赤城山南麓末端では、南北に細長く舌状にのびる洪積台地と、赤城山頂付近から流下している中小河川の浸食により形成された開析谷（沖積低地）が交互に南下し、放射状に発達している（第5図 周辺の地形）。

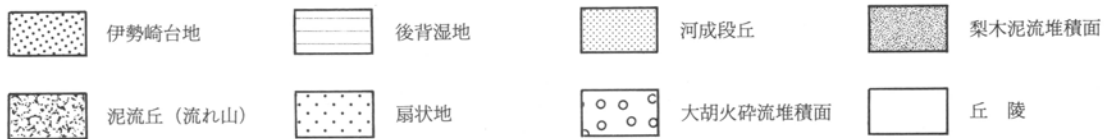
台地末端付近は、約20～30万年前に発生した赤城山の梨木泥流堆積物に覆われており、多くの泥流丘（流れ山）が形成されている。八寸権現山の(87)、華蔵寺公園の小丘(71)、波志江権現山(72)、蟹沼東(66)、石山(46)、洞山(60)、地藏山(65)などがその代表例である。これらの泥流丘には、いずれも古墳群が形成されている（第6図 周辺の遺跡）。

本遺跡の東方約1kmに流路をとる一級河川粕川以東は、大間々扇状地桐原面の広大な低台地が広がっている。同扇状地は、渡良瀬川が更新世に形成した扇状地で、山田郡大間々町桐原を扇頂とし、南北16km、扇端の幅12kmの広い地域の範囲を示す。同扇状地は、渡良瀬川の下刻運動によって形成され、桐原面、岩宿面、藪塚面の3面があり、扇状地面の形成時期が3回あったことが知られている。伊勢崎市周辺の地形を形成しているのは桐原面である。

本遺跡の南方は、赤城山斜面から大量に発生した砂質物質が比較的短時間に流出、堆積して現在の伊勢崎市街地が立地する台地地形を形成している。形成時期は、約1万年前の洪積世最末期から沖積世初頭と推定されている。この台地を伊勢崎台地と呼ぶ。その南側には、利根川により形成された沖積平野が広がっている。この低地帯は、現在広瀬川低地帯と呼ばれている。

本遺跡の周辺地形では、近世に開発された沼（溜め池）も欠かせない存在の一つである。伊勢崎市北部には、江戸時代に伊勢崎藩の新田開発を目的として造成された溜め池が点在している。波志江町内では、本遺跡の西に隣接する波志江沼と、南に近接する蟹沼がある。波志江沼は上沼と下沼とに分かれ、伊勢崎市内で最大の溜め池である。蟹沼よりさらに南下すると、現在では華蔵寺公園となっている区域内に華蔵寺沼がある。同沼もかつては上沼と下沼に分かれていたが、現在では上沼は水性植物園に変貌をとげている。粕川左岸には、隣接して新沼があり、その東には鯉沼がある。これらの溜め池は、養鯉に使われ残存しているが、市内では、近年埋め立てられ消滅している溜め池が幾つかある。

近世に造成されたこれらの溜め池には、記録が残っており築造時期が確認されているが、本遺跡と最も関わりが深く、市内最大の波志江沼については、その築造年代が判明していない。しかし、周辺の他の溜め池と築造方法（形状）に共通点が存在するため、極端に時代が異なるものではないと推測される。共通点は、本遺跡周辺の地形にも起因することであるが、溜め池の一部（南側が多い）にのみ堤防が存在し、他の部分には堤防が存在しない点である。築造方法は、元来地形に起伏があった部分の低地側に堤防を築き、上流から水を流し込んだり、湧水を利用して水を溜めるといったものである。これはまさに、赤城山南麓末端の複雑に交錯した低台地と、豊富な湧水を巧みに利用した英知ということができる。



第5図 周辺の地形 1/75000 (国土地理院 1/50000 「前橋」「高崎」「桐生及足利」「深谷」使用)  
群馬県史通史編1付図2 群馬県内主要地域の地形分類図に加筆

## 第2節 歴史的環境

本遺跡の周辺は、赤城山南麓末端に展開する洪積台地や沖積低地が広がり、中小河川や湧水地等にも恵まれていることから、各時代にわたって数多くの遺跡の分布が認められる（第6図 周辺の遺跡）。

旧石器時代の遺跡は、本遺跡D区北方の台地上に所在する堀下八幡遺跡(25)で、暗色帯から約1000点の石器が出土している。その他、下触牛伏遺跡(50)、書上本山遺跡(23)、石山遺跡(46)等が確認されているが、舞台遺跡(16)、光仙房遺跡(14)、三和工業団地遺跡(18・19)、波志江西宿遺跡(2)、伊勢山遺跡(3)、岡屋敷遺跡(7)等で近年石器の出土が相次ぎ、確実に増加の傾向を示している。

縄文時代の遺跡は、草創期から晩期に至るまでの全ての時期で確認されている。東に隣接する五目牛新田遺跡(8)では、発見当時県内最古とされた草創期の住居跡が2軒確認されている。その他、下触牛伏遺跡(50)、波志江天神山遺跡(28)、堀下八幡遺跡(25)、舞台遺跡(16)、五目牛南組遺跡(10)、五目牛東遺跡群(63)、鯉沼東遺跡(22)等がある。

一方、弥生時代の遺跡の調査例は少なく、後期の住居跡36軒が調査された今井南原遺跡(38)の他は、分布図圏外で、伊勢崎市に西太田遺跡や中組遺跡が所在する程度である。しかし、本遺跡でも弥生土器数点が出土しており、周辺地域に同時代の遺跡が存在する可能性が考えられる。

古墳時代では一転して、数多くの遺跡が確認されている。周辺地域は、5～7世紀代の古墳群がひしめくように集中しており、また、集落跡の調査例も多い。

本遺跡の南方には、赤城山南麓最古の前方後円墳である華蔵寺裏山古墳(71)や、帆立貝式の丸塚山古墳(78)の他、蟹沼東古墳群(66)、地藏山古墳群(65)、台所山古墳群(70)等多くの群集墳が所在する。波志江沼周辺には、波志江今宮遺跡(29)、宮貝戸古墳群(52)、牛伏古墳群(53)等が所在する。また、分布図圏外では、伊勢崎市安堀町に市内最大規模を誇る前方後円墳のお富士山古墳がある。これらの古墳群のうち、最古とされる華蔵寺裏山古墳の時期は5世紀初頭である。本遺跡の粘土採掘坑は時期がやや異なるため、周辺の古墳群とは直接の関わりがないと考えられる。

集落跡も濃密な分布を示しており、川上遺跡(39)、中畑遺跡(44)、舞台遺跡(16)、三和工業団地遺跡(18・19)等、多数の調査が行われている。本遺跡D区の東側に隣接する五目牛新田遺跡(8)では、住居跡が数軒調査されている。D区の旧河道埋没土上面で確認された古墳時代の甕、高坏等の遺物は、同遺跡と密接な関わりがあると推測される。水田跡は、波志江中屋敷東遺跡(4)で検出されている。その他、環濠居館が確認された原之城遺跡(80)がある。館跡は、分布地点やや南方の分布図圏外に所在する。

古代の遺跡は、集落跡とAs-B下水田跡に二分される。集落跡は、堀下八幡遺跡(25)、上植木壱町田遺跡(21)、上植木光仙房遺跡(15)、舞台遺跡(16)、三和工業団地遺跡(18・19)、恵下遺跡(84)、書上上原之城遺跡(24)、今井南原遺跡(38)等で顕著である。水田跡は、五目牛清水田遺跡(13)、波志江中峰岸遺跡(26)、波志江今宮遺跡(29)、波志江六反田遺跡(27)、波志江中屋敷東遺跡(4)等で検出されている。白鳳時代の創建とされる上植木廃寺(75)は、伽藍配置をもった本格的寺院として知られる。

中世では、12世紀初頭に開削された用水路である女堀(47)がある。また、波志江中屋敷遺跡(5)、波志江中屋敷西遺跡(6)では館跡が検出されている。

近世では、岡屋敷遺跡(7)で環濠屋敷が検出されている。また、本遺跡名に付されている「中宿」の由来は、南北に石山街道、東西に玉村街道があり、交差部分に宿が形成され、その中心部分が中宿と呼ばれたことによる。当該地区は、近世波志江地区で唯一の宿を形成しており、発掘調査においても屋敷跡(推定)が確認されるなど、その繁栄の一端が窺える。



第1表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	遺跡の概要	文献等
1	波志江中宿遺跡	本報告書の遺跡	
2	波志江西宿遺跡	旧石器。古墳時代の住居跡、中世・近世の土坑等を検出。	「年報」18、19 群埋文
3	伊勢山遺跡	旧石器。近世の土坑墓等を検出。	「年報」19 群埋文
4	波志江中屋敷東遺跡	平安時代のAs・B下水田跡等を検出。	「年報」17、18 群埋文
5	波志江中屋敷西遺跡	古墳時代の水田跡、平安時代の住居跡、中世・近世の屋敷跡等。	「年報」18、19 群埋文
6	波志江中屋敷西遺跡	古墳時代の水田跡、中世の館跡、水田跡等を検出。	「年報」17、18 群埋文
7	岡屋敷遺跡	旧石器。古墳時代の住居跡、平安時代の住居跡、中世の館跡等。	「年報」18、19 群埋文
8	五目牛新田遺跡	旧石器。縄文時代草創期、古墳時代、平安時代の住居跡等。	「年報」17、18、19 群埋文
9	五目牛南組遺跡	縄文時代の住居跡、古墳、近世の屋敷跡等を検出。	「年報」18、19 群埋文
10	五目牛南組遺跡	縄文時代の住居跡4軒、古墳5基、近世の屋敷跡等を検出。	「五目牛南組遺跡」群埋文
11	稲荷山古墳	古墳1基、古墳時代の水田跡、畠跡等を検出。	「年報」17、19 群埋文
12	五目牛清水田遺跡	古墳、古墳時代の住居跡、水田跡等を検出。	「年報」17、18、19 群埋文
13	五目牛清水田遺跡	縄文、古墳、平安時代の住居跡、古墳、平安時代の水田跡等。	「五目牛清水田遺跡」群埋文
14	光仙房遺跡	旧石器。古墳時代の粘土採掘坑、平安の住居跡、須恵器窯跡等。	「年報」16、17、18、19 群埋文
15	上植木光仙房遺跡	5世紀末～7世紀の古墳10基、平安時代の小鍛冶跡等を検出。	「上植木光仙房遺跡」群埋文
16	舞台遺跡	旧石器。縄文から平安の住居跡、方形周溝墓、須恵器窯跡等。	「舞台遺跡」[「年報」16～19 群埋文]
17	舞台遺跡	古墳時代前期から奈良時代の住居跡、溝等を検出。	「鯉沼東遺跡・舞台遺跡」伊
18	三和工業団地I遺跡	旧石器。縄文時代前期、古墳時代、平安時代の住居跡等を検出。	「三和工業団地I遺跡」群埋文
19	三和工業団地II～IV遺跡	旧石器。縄文前期、古墳、平安時代の住居跡、方形周溝墓等。	「年報」15、16 群埋文
20	下植木沓町田遺跡	古墳、平安時代の住居跡、中世館跡、時期不明の粘土採掘坑。	「下植木沓町田遺跡」群埋文
21	上植木沓町田遺跡	縄文時代中期から平安時代の住居跡等を検出。	「書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木沓町田遺跡」群埋文
22	鯉沼東遺跡	古墳時代から平安時代の住居跡、土坑、火葬跡等を検出。	「鯉沼東遺跡・舞台遺跡」伊
23	書上本山遺跡	旧石器。古墳時代の住居跡、平安時代の掘立柱建物跡、溝等を検出。	「書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡」群埋文
24	書上上原之城遺跡	掘立柱建物跡、粘土採掘坑等を検出。多数の墨書土器が出土。	「書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木沓町田遺跡」群埋文
25	堀下八幡遺跡	旧石器。縄文時代前期、奈良・平安時代の住居跡等を検出。	「堀下八幡遺跡」群埋文
26	波志江中峰岸遺跡	平安時代のAs・B下水田跡、溝等を検出。	「飯土井上組遺跡・波志江中峰岸遺跡」群埋文
27	波志江六反田遺跡	平安時代の住居跡、As・B下水田跡等を検出。	「書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡」群埋文
28	波志江天神山遺跡	縄文時代、近世の溝、土坑等を検出。	「書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡」群埋文
29	波志江今宮遺跡	6～7世紀の古墳8基、平安時代のAs・B下水田跡等を検出。	「波志江今宮遺跡」群埋文
30	飯土井二本松遺跡	旧石器。古墳時代、奈良・平安時代の住居跡等を検出。	「飯土井二本松遺跡・下江田前遺跡」群埋文
31	荒砥東原遺跡	古墳時代前期から平安時代の住居跡等を検出。	「荒砥東原遺跡」群埋文
32	多田山古墳群	旧石器。縄文時代住居跡、古墳11基、平安時代住居跡、製煉炉。	「年報」17、18、19 群埋文
33	田向遺跡	縄文時代から平安時代の住居跡等を検出。	「今井柳田遺跡発掘調査概報」赤
34	柳田遺跡	縄文時代から平安時代の住居跡等を検出。	「今井柳田遺跡発掘調査概報」赤
35	今井学校遺跡	古墳時代の住居跡等を検出。	「町内遺跡発掘調査概報」赤
36	市場寺回遺跡	縄文時代前期後半の土坑等を検出。	「昭和60年度埋蔵文化財発掘調査概報」赤堀町教育委員会
37	南原古墳群	「上毛古墳総覧」では円墳27基確認。6基が調査されている。	「群馬県史資料編3」県史編集委員会
38	今井南原遺跡	縄文時代前期、弥生から古墳時代、奈良・平安時代の住居跡等。	「今井南原遺跡発掘調査概報」赤
39	川上遺跡	古墳時代、平安時代の住居跡等を検出。	「川上遺跡・女堀遺構発掘調査概報」赤堀町教育委員会
40	今井赤坂南遺跡	縄文時代から平安時代の住居跡等を検出。	「今井赤坂南遺跡発掘調査概報」赤
41	下触向井遺跡	古墳時代後期から平安時代の住居跡等を検出。	「洞山古墳群及び北通・鷹巣遺跡発掘調査概報」赤堀町教育委員会
42	向井古墳群	古墳1基を調査。	「群馬県遺跡台帳I」県教委
43	下触下寺遺跡	4世紀末から5世紀の周溝墓、古墳時代から平安時代の住居跡等を検出。	「下触下寺遺跡及び磯十二所遺跡発掘調査概報」赤堀町教育委員会
44	中畑遺跡	古墳時代中・後期の住居跡等を検出。	「中畑遺跡・女堀用水遺構発掘調査概報」赤堀町教育委員会
45	下触片田古墳群	「上毛古墳総覧」では70基以上が分布。盾持人物埴輪が出土。	「昭和63年度埋蔵文化財発掘調査概報」赤堀町教育委員会
46	石山遺跡	縄文時代の尖頭器、剥片等が出土。	「考古学ジャーナル6」
47	女堀	幅15～30m、深さ3～4m、延長12.75kmの用水遺構。	「女堀」群埋文

第3章 遺跡の立地

No	遺 跡 名	遺 跡 の 概 要	文 献 等
48	庚塚遺跡	縄文時代前期の土器片、6世紀末の小石室遺構、7世紀の古墳。	「昭和63年度埋蔵文化財発掘調査概報」赤堀町教育委員会
49	二本松遺跡	縄文時代、奈良・平安時代の住居跡等を検出。	「飯土井中央遺跡」群埋文
50	下触牛伏遺跡	旧石器。縄文時代前期、古墳時代後期の遺構、遺物等を検出。	「下触牛伏遺跡」群埋文
51	荒砥二之堰遺跡	縄文時代、古墳時代の住居跡、方形周溝墓等を検出。	「荒砥二之堰遺跡」群埋文
52	宮貝戸古墳群	古墳4基を調査。	「宮貝戸古墳群・蟹沼東古墳群」伊
53	牛伏古墳群	1号墳は直径約30mの円墳で、主体部は角閃石安山岩使用の横穴式石室をもつ。	「牛伏古墳群・祝堂遺跡・大沼上遺跡」伊勢崎市教育委員会
54	祝堂遺跡	主体部は角閃石安山岩使用の横穴式石室をもつ。	「牛伏古墳群・祝堂遺跡・大沼上遺跡」伊勢崎市教育委員会「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊
55	宮貝戸下遺跡	奈良時代の住居跡1軒を検出。	「蟹沼東古墳群・宮貝戸下遺跡」伊
56	大沼上遺跡	土師器使用の住居跡1軒を検出。	「牛伏古墳群・祝堂遺跡・大沼上遺跡」伊勢崎市教育委員会
57	八幡林古墳群	縄文時代の住居跡と6～7世紀構築の古墳4基を検出。	「八幡林古墳群及び縄文住居跡調査概報」赤堀町教育委員会
58	鷹巣遺跡	縄文時代前期と奈良・平安時代の住居跡等を検出。	「洞山古墳群及び北通・鷹巣遺跡発掘調査概報」赤堀町教育委員会
59	北通遺跡	縄文時代から平安時代の住居跡等を検出。	「洞山古墳群及び北通・鷹巣遺跡発掘調査概報」赤堀町教育委員会
60	洞山古墳群	「上毛古墳総覧」では17基確認され、7基が調査されている。	「洞山古墳群及び北通・鷹巣遺跡発掘調査概報」赤堀町教育委員会
61	推定東山道(あづま道)	上野国南部を横断する古代の官道。	「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊「東村誌」東村誌編集委員会
62	五目牛洞山遺跡	縄文時代後期の住居跡、土坑等を検出。	「五目牛洞山遺跡発掘調査概報」赤
63	五目牛東遺跡群	縄文時代から平安時代の住居跡等を検出。	「五目牛東遺跡群及び赤堀村8号墳発掘調査概報」赤堀村教育委員会
64	関山古墳群	7～8世紀初頭に形成された古墳群。	「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊
65	地蔵山古墳群	5～8世紀の古墳55基が群集する。	「赤堀村地蔵山の古墳」1、2 赤
66	蟹沼東古墳群	縄文時代、古墳時代前期の住居跡、方形周溝墓等を検出。6～7世紀の円墳70基以上を確認。	「宮貝戸古墳群・蟹沼東古墳群」「蟹沼東古墳群・宮貝戸下遺跡」「蟹沼東古墳群」伊
67	間之山遺跡	縄文時代草創期の土器、As-Cで覆われた住居跡1軒等を検出。	「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊
68	間之山東遺跡	縄文時代中期の土器、奈良・平安時代の住居跡等を検出。	「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊
69	上西根遺跡	古墳時代前期から奈良時代の住居跡、古墳時代の方形周溝墓等。調査された1基は凝灰岩製の箱式石棺の主体部をもつ。	「上西根遺跡」伊勢崎市教育委員会
70	台所山古墳群	主軸長約40mの前方後円墳、5世紀初頭と推定。	「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊
71	華蔵寺裏山古墳	縄文時代早期の土器、石器が出土。	「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊
72	波志江権現山遺跡	古墳時代、奈良時代、平安時代の溝、井戸等を検出。	「大沼下遺跡・西稲岡遺跡」伊
73	西稲岡遺跡	古墳時代の住居跡、平安時代の溝等を検出。	「八幡町遺跡」伊勢崎市教育委員会
74	八幡町遺跡	7世紀後半に創建され、約300年間存続したと推定される寺院跡。	「上植木庵寺-昭和62年度発掘調査概報-」伊勢崎市教育委員会
75	上植木庵寺	7世紀初頭の古墳3基を調査。	「高山遺跡・天ヶ堤遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡」伊勢崎市教育委員会
76	高山古墳群	縄文時代前期の住居跡等を検出。	「高山遺跡・天ヶ堤遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡」伊勢崎市教育委員会
77	高山遺跡	5世紀後半に構築された全長81mの帆立貝式前方後円墳。	「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊
78	丸塚山古墳	「上毛古墳総覧」では30基確認されているが、現在では平夷。	「書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木庵町田遺跡」群埋文
79	書上古墳群	古墳時代中期の環濠居館跡、住居跡、掘立柱建物跡等を検出。	「原之城遺跡発掘調査報告書」伊
80	原之城遺跡	古墳時代末期の住居跡を検出。	「高山遺跡・天ヶ堤遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡」伊勢崎市教育委員会
81	天野沼遺跡	開墾等により、構築の時期や状態は不明。	「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊
82	大道東古墳群	3基の古墳が調査されている。	「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊
83	大道西古墳群	古墳時代前期から平安時代の住居跡等を検出。	「恵下遺跡」伊勢崎市教育委員会
84	恵下遺跡	6世紀中頃に構築された古墳。	「恵下遺跡」伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊
85	恵下古墳群	台帳では4基が確認されているが、現在では平夷されている。	「群馬県遺跡台帳Ⅰ」県教委
86	権現山北古墳群	6～7世紀に構築された古墳4基が調査されている。	「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」伊
87	権現山古墳群	旧石器の配石遺構。古墳時代の畠跡、平安時代の溝等を検出。	「年報」19 群埋文
88	大井戸遺跡		

略称 群埋文：勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 県教委：群馬県教育委員会 伊：伊勢崎市教育委員会 赤：赤堀町教育委員会



## 第4章 確認された遺構・遺物について

### 第1節 概要

波志江中宿遺跡の発掘調査では、旧石器時代から近世以降に至るまでの各時代の遺構や遺物が確認されている。以下にその概要を記載する。

旧石器時代では、D区でAT相当・BP相当の2文化層より石器が出土している。BP相当では石器が集中して出土しており、接合状況から石器製作跡と考えられる。

縄文時代は、B・C区のAs-YP層よりも上位で石器が集中して出土しているが、具体的な遺構の確認には至っていない。また、遺構外から土器が数点出土している。

弥生時代も具体的な遺構の確認には至っていないが、遺構外から土器が数点出土していることから、周辺地域に遺構が所在する可能性が考えられる。

古墳時代の遺構は、粘土採掘坑、住居跡、溝、水田等が確認されている。粘土採掘坑からはS字状口縁台付甕や、粘土採掘に使用された木製品が出土している。遺構外出土遺物には、B・C区で数点の埴輪片、D区で多量の土師器片がある。

古代の遺構は、2つの時期に大別することができる。As-B直下とそれ以前の2時期である。前者はB・C・D区で水田、D区で溝が確認されている。後者はB・C区で溝、D区で水田が確認されている。

中世・近世では、掘立柱建物跡、井戸、柱穴列、溝、畠跡、土坑、ピット等が確認されている。出土遺物には陶磁器類・古銭・金属類等があるが、その殆どは新しい時代の溝や遺構外からの出土である。

最後に、明治時代以降については、旧地権者等の証言により以下のことが判明している。内容には、波志江地区の近代化の中で特筆されるべき事項も含まれているので、記載しておきたい。

A区では、排水溝、井戸等が確認されている。当該地区は、波志江下沼の影響で常に湿った状態であり、湿気防止のため屋敷内に深さ1m以上の溝を掘り、排水溝として使用していたようである。溝が使用された時期は、旧地権者の祖父に当たる人物が20世紀初頭に居を構えてから、戦後、波志江下沼の護岸工事が完成するまでの間である。溝の埋没土中から確認された、近世以降の陶磁器類や焙烙等を主とする遺物については、遺構外出土遺物として扱い、必要なものについては掲載することにした。これらの遺物は、生活に必要な道具類が一式揃っており、当時の波志江地区の生活習慣を知る上で貴重なものである。

B区では、旧地権者の祖父に当たる人物が、自宅の庭先で瓦を焼いた窯の跡が確認されている。『伊勢崎市史』には、戦前、波志江下沼の東で良質な粘土が確認され、採掘されたことが記されているが、波志江地区の地場産業的な要素としても、注目すべき事柄であろう。その他、As-A混土やさらに新しい灰褐色土で埋没している溝等を確認している。

D区では、以下の各節で記載する通り、古墳時代の旧河道の埋没以降、台地から低地への地形の変換点付近で、断続的に溝が使用されている。その下限は、明治時代以降近年の土地改良まで使用された用水路である。同用水路からも、上記各時代の遺物が確認されている。D区周辺は、波志江地区で最も水に困窮した地区であり、大正用水の完成により、ようやく水を確保することができたという証言を得ている。

各区で出土した遺物のうち、近代期の絵柄をもつ磁器類については、遺物写真と観察表のみの掲載とした。各時代の遺構、遺物の掲載については、発掘調査の順に従い新しい時代から行うこととする。

## 第2節 中世以降

### 1. A区溝状遺構について〔第7～9図 PL.4・8〕

A区では、当該時期の溝状遺構（以下溝）が合計で10条確認されている。

調査区西側から南側にかけて検出された1・11・17・18号溝は、波志江沼方向へ緩く傾斜しているローム堆積面と、その上面にAs-B降下以降に盛土された暗灰褐色土との境界付近に所在する。各遺構は、暗灰褐色土が盛土された範囲を示すように掘り込まれており、何らかの区画を表している可能性も考えられる。埋没土は、As-Bを含む灰褐色土である。時期はAs-B降下以降であるが、暗灰褐色土が盛土された時期が確定できないため、正確には不明である。各遺構の詳細については、遺構一覧表を参照いただきたい。

8号溝は11号溝と重複し、平面により8号溝が新しいと判断している。埋没土は、As-Bを含む灰褐色土である。出土遺物のうち実測対象遺物は、鉄塊が1片である。軸は、11号溝に対してほぼ直交方向である。

7号溝は、8号溝埋没土中に掘り込まれている。埋没土は、上述の各遺構とは異なり、黄褐色ローム粒やAs-Cを含む黒褐色土の混土である。遺物は石が出土している。

23号溝は、As-B降下以降に盛土された暗灰褐色土を除去した際に、調査区中央部で確認されている。埋没土は、暗灰褐色粘質土である。As-Bを掘り込んでいることから、時期は、As-B降下以後で暗灰褐色土が盛土される以前と考えられる。遺物の出土は認められない。

調査区北端で確認された10号溝は、As-Aを少量含んだ灰褐色土で埋没しており、時期は、天明3年以降旧地権者宅が居を構える明治初年までと考えられる。遺物の出土は認められない。

同15号溝は、As-Cを含む黒褐色土で埋没しており、As-A降下以前の遺構と考えられる。畝間跡らしき痕跡をとどめており、畝跡の可能性も考えられる。

### 2. A区畝跡について〔第7・10・11図 PL.6・8〕

A区では、当該時期の畝跡が合計で4箇所確認されている。何れの畝跡も作付面は検出できず、畝間の痕跡として確認したに過ぎない。3号畝跡はAs-Aを少量含む灰褐色土で埋没しており、時期は、As-A降下以降旧地権者宅が居を構える明治初年までと考えられる。1・2・4号畝跡は、As-A混土と比較して新しそうな土砂で埋没しており、時期は、As-A降下以降旧地権者宅が居を構えた明治期までの可能性がある。

1号畝跡は、調査区北寄りに所在し、X273-Y947グリッドに位置する。畝の方向は、N-18°-Eである。畝間の規模は、幅30cm、深さ10cm程度であり、畝間の間隔は、芯々で50cm前後である。埋没土は灰褐色土である。重複関係は存在しない。本遺構の周辺からは、寛永通宝が出土している。

2号畝跡は、1号畝跡の南西に所在し、X267-Y960グリッドに位置する。畝の方向は、N-58°-Wで1号畝跡とはほぼ直交方向にある。畝間の規模は、幅25cm、深さ10cm程度であり、畝間の間隔は、芯々で50cm前後である。埋没土は茶褐色土である。他の遺構との重複関係は存在しないが、20世紀初頭以降に掘り込まれた新しい溝に破壊されている。遺物の出土は認められない。

3号畝跡は、4号畝跡の北東に所在し、調査区境と接している。X293-Y920グリッドに位置する。畝の方向は、N-73°-Wである。畝間の規模は、幅30～60cm、深さ10～20cm程度である。埋没土は、As-Aを少量含む灰褐色土である。重複関係は、10・11・12号土坑との間に存在し、平面により畝跡が何れの土坑よりも古いと判断している。遺物の出土は認められない。

4号畝跡は、1号畝跡の北東に所在し、X285-Y933グリッドに位置する。畝の方向は、N-10°-Eで1号畝跡とはほぼ同軸方向である。畝間の規模は、幅15cm、深さ5cm程度であり、畝間の間隔は、残存状況が悪く不

均等である。埋没土は、1号畠跡と同様の灰褐色土であり、1号畠跡に近い時期のものと考えられる。重複関係は存在しない。遺物の出土は認められない。

### 3. A区土坑・ピットについて〔第7・12図 PL.6〕

A区では、当該時期の土坑19基、ピット1基が確認されている。特に、調査区北東端付近で確認された15基の土坑については、全て長方形乃至は方形の形状を呈しており、何らかの規則性が備わっている可能性が考えられる。埋没土は、As-Aを少量含む灰褐色土である。時期は、天明3年以降旧地権者宅が居を構える明治初年までと考えられる。各遺構の詳細については、遺構一覧表を参照いただきたい。出土遺物は7号土坑に角釘及び金属片があり、8号土坑に金属片がある。

10～15号土坑は、長軸方向がほぼ揃った長方形土坑で、一括性をもった遺構の可能性が想定される。調査の便宜上、土坑名称を付しているが、畠跡の可能性も考えられる。但し、通常の畠跡よりも畝間の寸法が広いなど不自然な面もあるため、想像の域を脱しえない。各土坑間の間隔は、芯々で80cm程度である。重複関係は、4号畠跡との間に存在し、新旧関係は、平面により4号畠跡が古いと判断している。何れの土坑からも遺物の出土は認められない。

16～18号土坑は、調査区南東端に所在する。形状は円形を呈する。埋没土は、両遺構ともに上半部が黄褐色ローム、下半部が暗褐色粘質土である。両遺構は、埋没状況により、平安時代末期から近世初期の所謂「芋穴」遺構と考えられる。重複関係は、18号土坑と17号土坑との間に存在し、新旧関係は、断面により18号土坑が新しいと判断している。何れの土坑からも遺物の出土は認められない。遺構一覧表〔P.37〕参照。

### 4. B区屋敷跡について

調査区南西部の台地上に所在する1・2号掘立柱建物跡（以下掘立）、1号柵列、4・5号ピットは、ともに方向性が一致しており、共通の構造計画に基づいた遺構と捉えることができる。遺構の性格は、2号掘立を母屋とした場合、1号掘立が脇屋、1号柵列が板塀の痕跡、4・5号ピットが門構えの痕跡と考えられ、調査区西端に所在する1号井戸を含めて1軒の屋敷跡と捉えることができる。

しかしながら、屋敷跡を成立させるためには、中心的な建物である2号掘立の規模について考えなくてはならない。2号掘立は、柱穴の配置が1間×5間で、一辺が約20mの方形を呈しているが、ここで問題が生じてしまう。20mの梁行を1本の梁材で通すことは、材の入手と加工に於いて困難で、継手による方法を用いる必要がある。さらに、20mの長大な梁行は、礎石による中間柱を想定せざるを得ず、桁側についても柱間長が4mを越えることから、同様に礎石の存在が必要となる。2号掘立の20m×20mという梁・桁行の規模は、大規模建築、大規模方形という点から、古代・中世建物としては考え難く、近世民家の大型建物と考えることができる。その場合、柱穴は庇と推定される。時期については、台所施設、同様暗渠が確認されなかったこと、庇掘立と礎石との区分は、大型化に対する禁令による区別が考えられること、さらに、大型庇の存在は「赤城型民家」に繋がるものではないこと等から、17世紀頃と考えられる。

2号掘立の成立には、上述の条件が前提となり、同条件が満たされた場合にのみ屋敷跡が成立することになる。以下、各遺構毎に記載を行う。

#### (1) B区1号掘立柱建物跡〔第16・17図 PL.6〕

本遺構は、調査区南西部の台地上の傾斜部分に所在し、X248-Y911グリッドに位置する。長軸方向は、N-70°-Wである。規模は、南側東西辺6m、北側東西辺5.88m、東側南北辺4.08m、西側南北辺4.14mである。柱穴の配置は、1間×3間である。柱間長は約1.8mであり、約30cm=1尺として換算すると、凡そ6尺の柱間寸法となる。柱穴の形状は、円形あるいは方形を呈している。各柱穴の最大幅は約30～50cmで、深さは、

#### 第4章 確認された遺構・遺物について

南側の4柱穴では約60～80cm、北側の4柱穴では約30～40cm程度である。柱痕は確認されていない。北側4柱穴は、地形の傾斜により確認面が下がっており、残存状況が不良であった。本遺構の南側は、遺跡内で最も標高が高い台地部分であり、本遺構の所在地は、泥流丘の縁辺部であると考えられる。

重複関係は、1号掘立P2と7号土坑、同P7と11号土坑との間に存在する。新旧関係については確認できなかったが、7・11号土坑の遺構確認の際に、両柱穴を確認できなかったことをふまえると、1号掘立の方が両土坑よりも古い可能性が高い。本遺構に所属する柱穴からの遺物の出土は認められない。時期は、柱間長に6尺を用いていることから近世以降と考えられるが、2号掘立との同時存在性を考えると、17世紀頃と捉えることができる。2号掘立を母屋と捉えた場合、本遺構は脇屋に位置付けられる。

##### (2) B区2号掘立柱建物跡〔第16・18図 PL.7・8〕

本遺構は、調査区西部の台地の縁辺部に所在し、X257-Y886グリッドに位置する。長軸方向は、N-70°-Wである。用地買収の状況から、遺構の全容を一度に確認することは不可能であった。そのため、発掘調査の段階では、東西方向に軸をもつ2列の柱穴列として扱っている。発掘調査終了後、机上に於いて平面図の接続を行ったところ、大型の掘立柱建物跡（以下掘立）の存在が確認されている。

2号掘立の規模は、南側東西辺20.2m、北側東西辺20.1m、東側南北辺20.7m、西側南北辺20.4mであり、全体の形状は、一辺が約20mの方形を呈している。柱穴の配置は1間×5間で、他に南側東西辺の南側に形状を等しくする柱穴1基が存在する。南北辺については、両辺とも柱穴の確認には至っていない。柱間長は約4～4.5mであり、約30cm=1尺として換算すると、凡そ13～15尺となる。柱穴の形状は、大型方形の外周と、その内部に円形の掘り方をもつものである。柱穴の規模は、方形の外周部分が約90cm×100cm程度である。同部分は上部が削平されており、深度は約20～40cmである。柱穴部分の規模は、最大幅が約40～50cm、深さが約25～40cmで、柱穴間でややバラつきが見られる。埋没土は、外周、柱穴ともにロームブロックを混入している。重複関係は存在しない。本遺構に所属する柱穴からの遺物の出土は認められない。本遺構の時期は、群馬県内に於いては、方形の外周をもつ遺構の類例が古代・中世には未見のため、近世と考えられ、さらに前述判断材料から、17世紀頃と考えられる。

##### (3) B区1号柵列〔第16・19図 PL.4〕

本遺構は、調査区南西部の台地上の傾斜部分に所在し、X238-Y901グリッドとX243-Y914グリッドの間に位置する。長軸方向は、N-70°-Wで、2号掘立とほぼ同軸である。柱穴は合計8基が残存し、総延長は約13mである。柱間長は約1.8mであり、約30cm=1尺として換算すると、凡そ6尺の柱間寸法となる。柱穴の形状は、円形あるいは方形を呈している。各柱穴の最大幅は約20cmで、深さは約20～30cmであるが、各柱穴の最深部の位置については柱穴間で統一されていない。確認面の標高値が高い位置の柱穴に対して、低い柱穴の方がより深くに最深部が位置することから判断すると、本遺構が築造された時期には、地表面にやや傾斜がついていたことが想像できる。時期は、柱間長に6尺が用いられるようになった近世以降と考えられるが、2号掘立との同時存在性を考えると、本遺構は板塀の痕跡と位置付けられ、17世紀頃と捉えることができる。重複関係は存在しない。遺物の出土は認められない。柱痕は確認されていない。

##### (4) B区1号井戸〔第16・19図 PL.6〕

調査区西端の台地上に所在し、X254-Y917グリッドに位置する。形状は円形を呈しており、断面は円筒形である。規模は、直径約80cm、深さ約150cmである。上層部より石が出土しているが、実測対象遺物からは除外している。発掘調査中は、本遺構からの湧水は無く、アグリも確認されていない。旧地権者等の証言によると、B区付近は地下水の流路には該当しないようで、旧地権者宅では、何度井戸を掘削しても、出水

しなかったという。このことから、本遺構でも出水していないことが十分に予想される。或いは、井戸掘削を開始したところが出水しないため、途中で中止したことも考えられる。重複関係は存在しない。時期を特定できる遺物の出土は認められず、埋没土により時期を決定することも不可能であったため、時期は不明であるが、2号掘立に伴う井戸施設と考えた場合、17世紀頃と捉えることができる。

#### (5) B区4・5号ピット〔第16・19図〕

調査区南西部の台地上では、当該時期のピットが3基確認されている。その内の4号・5号ピットの形状は、円形で最大幅は約20cm、深さは約10～15cmである。両ピットは、ほぼ同一の規格であり、何らかの関連があると考えられる。両ピットとも遺物の出土は認められず、時期は不明であるが、2号掘立に伴う門構えの跡と考えた場合、17世紀頃と捉えることができる。重複関係は存在しない。遺物の出土は認められない。柱痕は確認されていない。各遺構の詳細については、遺構一覧表を参照いただきたい。

#### 5. B区4号溝について〔第16・20図 PL.8〕

本遺構は、調査区中央やや南寄りの台地の縁辺部に所在しX254-Y864グリッドからX269-Y877グリッドの間に位置する。規模は全長約19.2m、最大幅約2.88m、深さ約40cmで、東端より16m付近で北へ折れ曲がっている。用地買収の状況から、B区では東半部の調査を先行し後に西半部の調査を行っているため、本遺構の調査は2度に分けて行っている。東半部の調査時には、本遺構は堅穴状遺構として扱っている。掘り方に相当する底面に、テラス状に段が付くなど不自然な点が存在したが、西半部の調査に於いて溝状遺構であることが判明した。他の遺構との重複関係は存在しないが、上面は近年の溝によって攪乱されている。埋没土はAs-Bを含む暗褐色土である。中世の陶器破片が底面付近より出土していることから、時期は中世と考えられる。

#### 6. B区土坑について〔第16・21～23図 PL.5・6〕

調査区南西部の台地の縁辺部では、長方形の形状を呈する土坑が合計で14基確認されている。これらの土坑には、形状以外に共通点はなく、規模や長軸方向にも規則性は存在しない。また、遺構の性格も不明である。残存状況は、確認面の高さの違いにより、良好なものや不良なものが存在する。遺物の出土は、11号土坑にスクレイパーが、20号土坑に鉄製品の銚を出土した。時期を確定するには材料に乏しい。埋没土は、ローム層を主体とする褐色土であり、埋没土から時期を確定することも難しい。各土坑間以外の他の遺構との重複関係は、1号掘立P2と7号土坑、1号掘立P7と11号土坑との間に存在する。新旧関係については確認できなかったが、7・11号土坑の遺構確認の際に両柱穴を確認できなかったことをふまえると、両土坑の方が1号掘立よりも新しい可能性が高い。各遺構の詳細については、遺構一覧表(P.37)を参照いただきたい。

#### 7. D区溝状遺構について〔第25・26図 PL.4〕

調査区中央やや東寄りの台地から低地への地形の変換点では、溝状遺構(以下溝)が2条確認されている。

5号溝は、X347-Y486グリッドからX304-Y470グリッドの間に位置し、走向方位は北から南である。調査区南寄りではやや南東へ走向が傾く。規模は、全長約51m、最大幅約80cm、深さ約12cmである。他の遺構との重複関係は存在しないが、大正時代頃の水路に破壊されている。出土遺物は、S字状口縁台付甕等古墳時代の土器の小破片が多量に出土しているが、本遺構の南東部の埋没土がAs-Bを含む灰褐色土であることから、時期は中世以降と考えられる。

6号溝は、X347-Y486グリッドからX316-Y483グリッドの間に位置し、5号溝の西側をほぼ並行する。走向方位は北から南である。規模は、全長約25.4m、最大幅約38cm、深さは約4cmと浅く、底部付近のみが確認されたと推測される。他の遺構との重複関係は存在しないが、攪乱により残存状況は不良である。埋没

#### 第4章 確認された遺構・遺物について

土は、As-Bを含む灰褐色土であり、5号溝と走向方位も似ていることから、比較的近い時期のものとして推測される。遺物は出土していない。

#### 8. D区ピットについて〔第25・27図〕

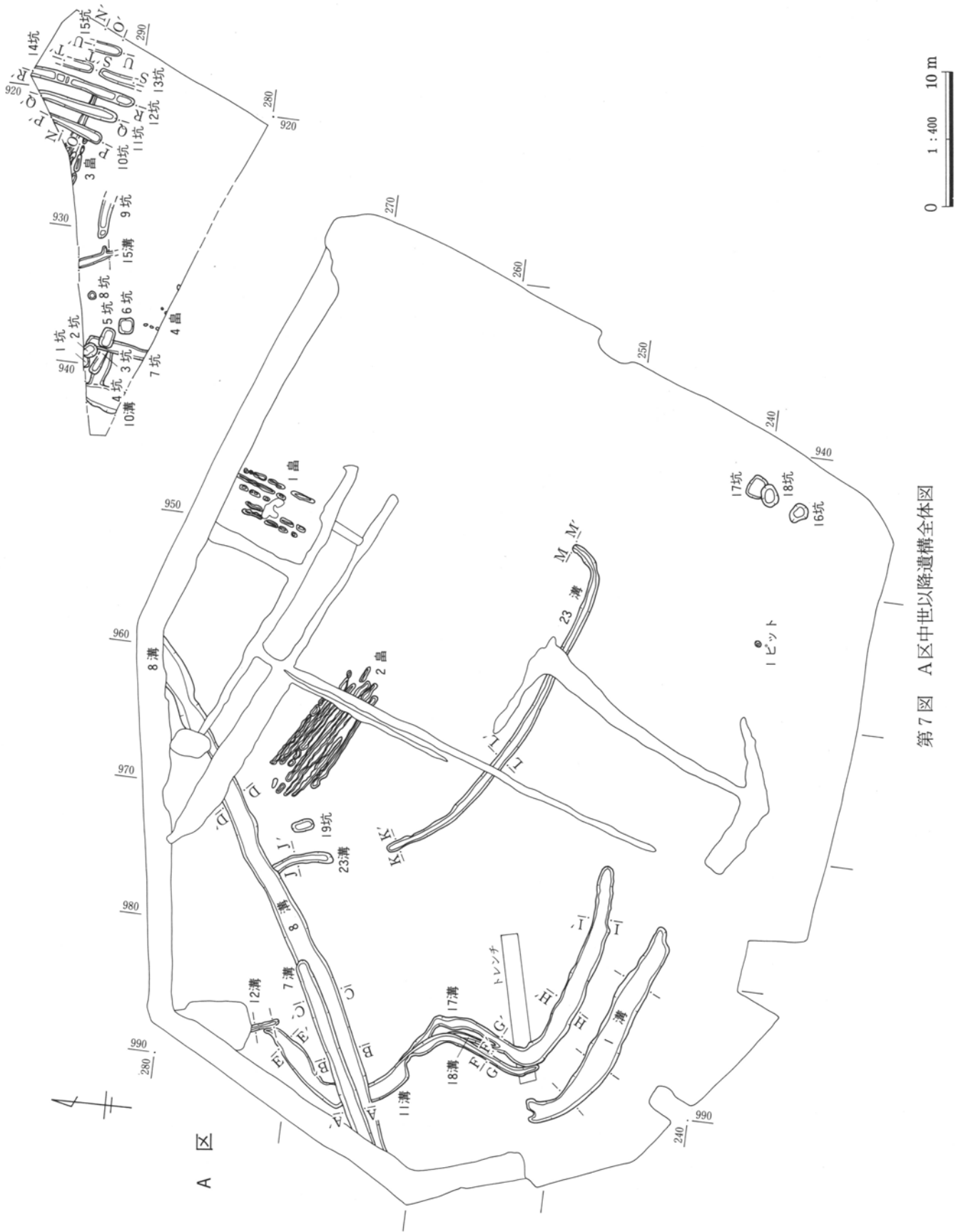
D区では、当該時期のピットが合計で14基確認されている。内訳は、五日牛新田遺跡より続く台地上で4基、台地から低地への地形の変換点付近で1基、中央の低地部分で9基である。台地上の4基については、埋没土から時期を決定することが不可能であった。重複関係は存在せず、遺物も認められない。低地部分に所在する9基については、As-Bよりも上層から掘り込まれていることから、時期は中世以降と考えられる。遺構の名称については、調査の便宜上ピット名称を付しているが、実際は、ピット＝柱穴という通常概念とは全くかけはなれたものであり、土坑よりも規模が小さいことから、ピット名称を付したに過ぎない。これらの遺構は、As-Bを含む灰褐色土で埋没しているものが殆どであり、時期は中世以降と考えられる。ピット群には規則性は存在せず、単に上層から掘り込まれたものである。調査段階では掘立の可能性も考えたが、成立していない。各遺構の詳細については、遺構一覧表(P.37)を参照いただきたい。

第2表 中世以降遺構名称変更一覧

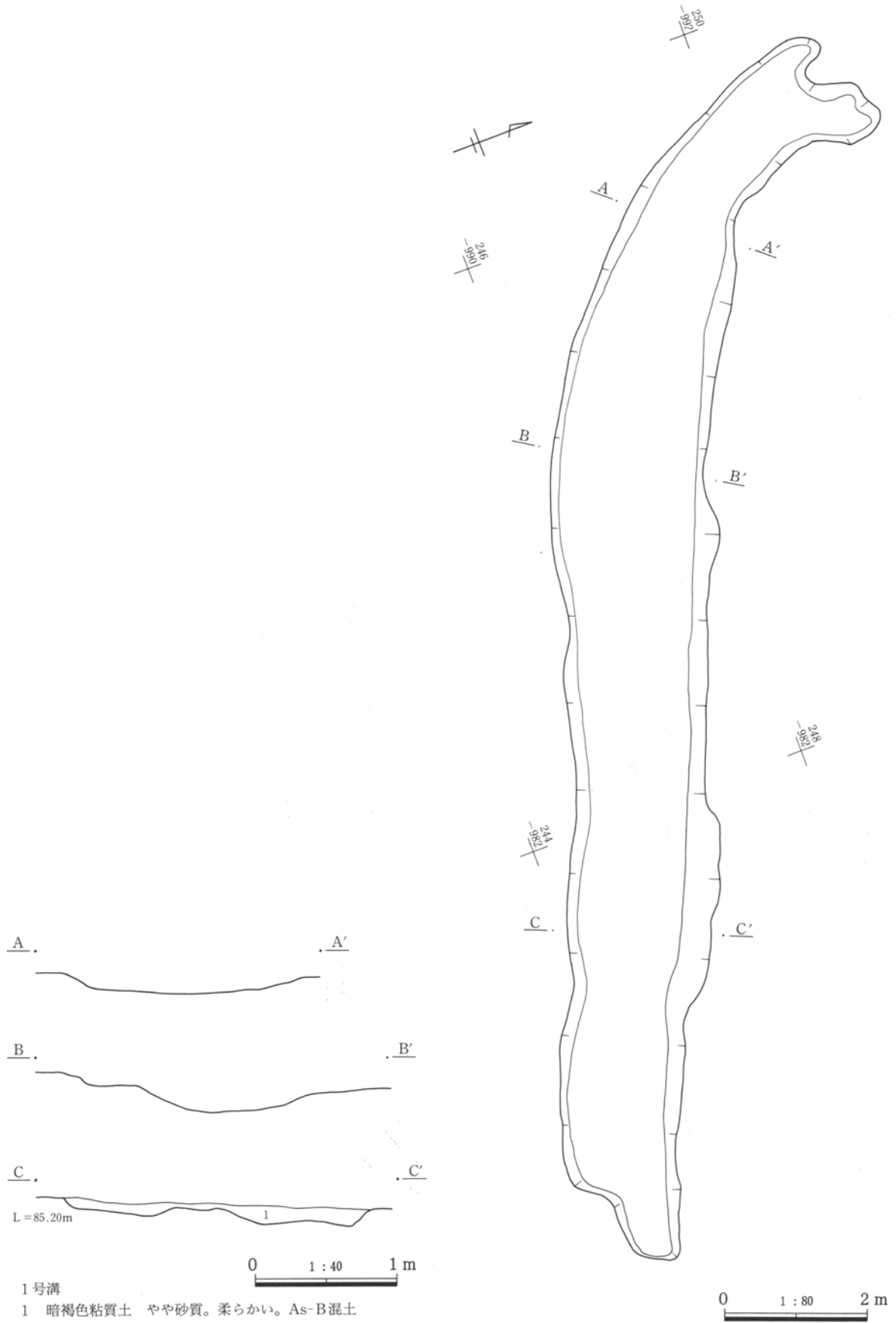
旧名称	新名称	旧名称	新名称
A-3区1号溝	→ A区10号溝	新規	→ B区2号掘立柱建物跡
A-3区2号溝	→ A区15号溝	B区西区画13号ピット	→ B区2号掘立柱建物跡8号ピット
新規	→ A区3号畠跡	B区西区画14号ピット	→ B区2号掘立柱建物跡9号ピット
新規	→ A区4号畠跡	B区西区画15号ピット	→ B区2号掘立柱建物跡10号ピット
A区12号土坑	→ A区16号土坑	B区西区画22号ピット	→ B区2号掘立柱建物跡11号ピット
A区13号土坑	→ A区17号土坑	B区西区画23号ピット	→ B区2号掘立柱建物跡12号ピット
A区14号土坑	→ A区18号土坑	B区西区画24号ピット	→ B区2号掘立柱建物跡13号ピット
A区3面2号土坑	→ A区19号土坑	B区1号土坑	→ B区1号井戸
B区1号竪穴状遺構	→ B区4号溝		

第3表 近代以降報告書未掲載遺構一覧

A区	1～11・15号土坑、2～6・9・13・14・16・19～22号溝
B区	3～5・8～10・12～13・16・17・23～37・39～48・51～129号土坑 1～3・6～10・17～19号溝、8～40号ピット
B区西区画	1～3号井戸、1～9号土坑、1～3号溝、8～12・16～21・25号ピット
C区	1～17号土坑
D区	1～11号土坑、1～4・8号溝、1・2・4～7・10～12・14～19号ピット
D区北区画	1～4号溝、1号土坑

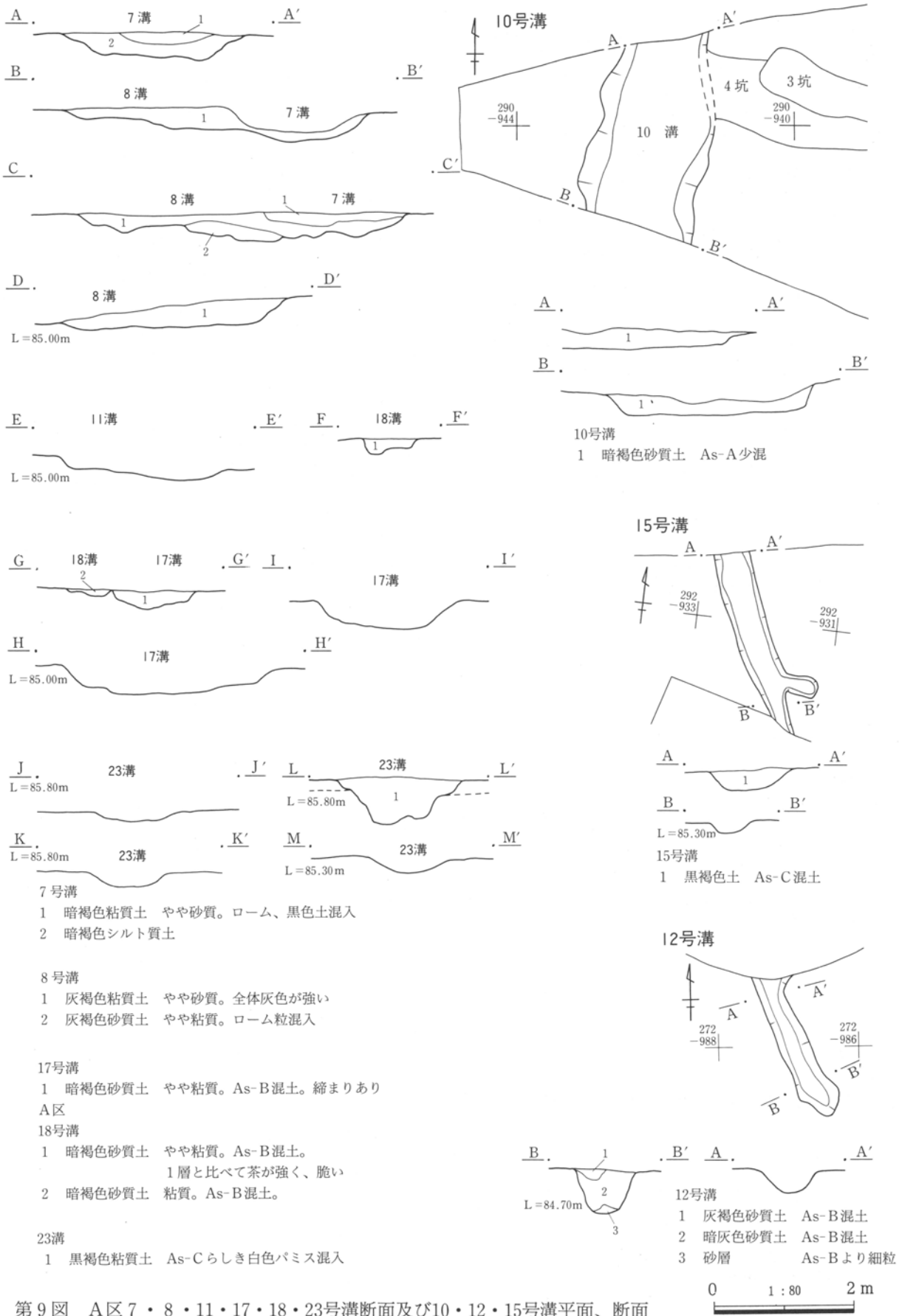


第7図 A区中世以降遺構全体図

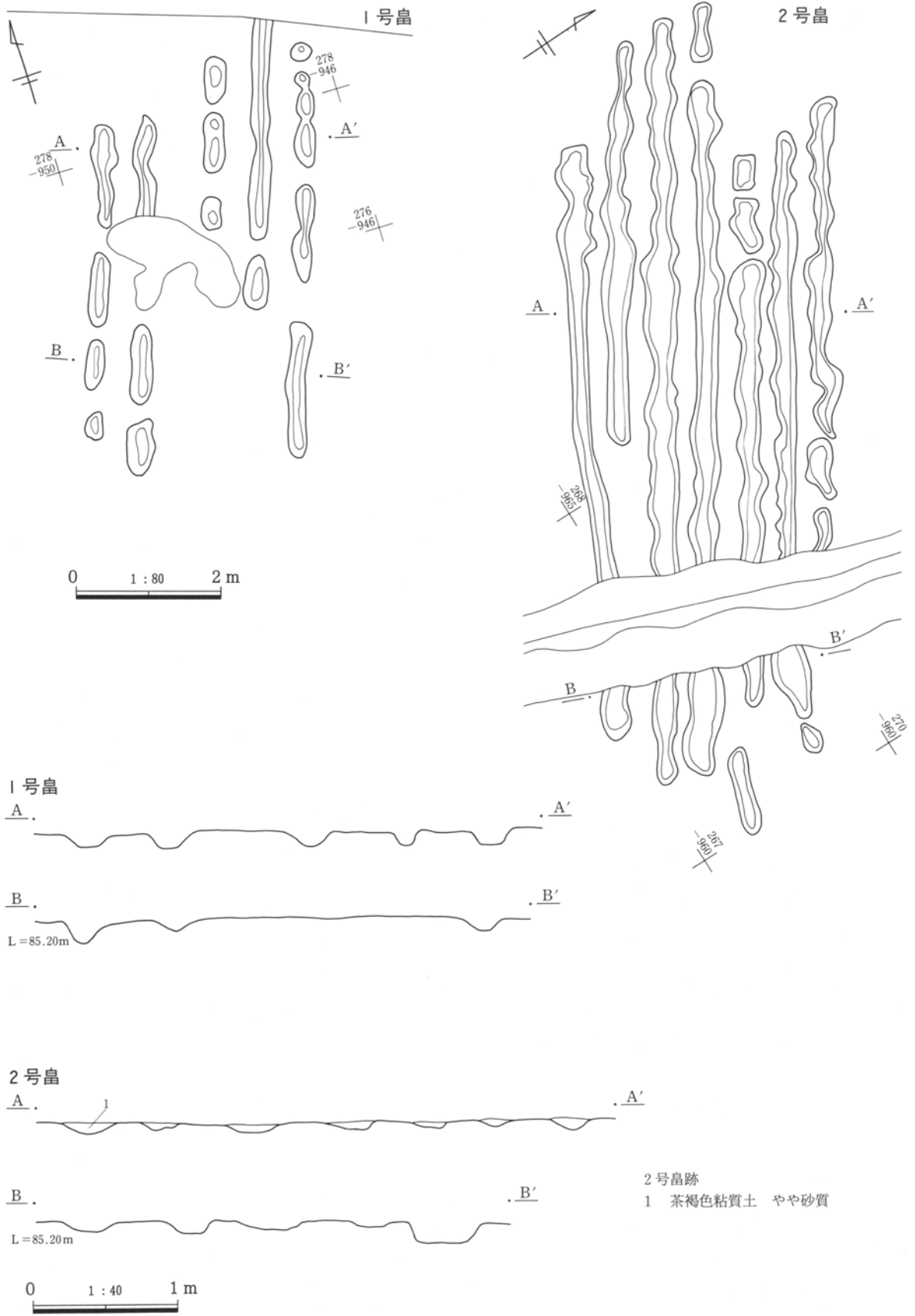


第8図 A区1号溝

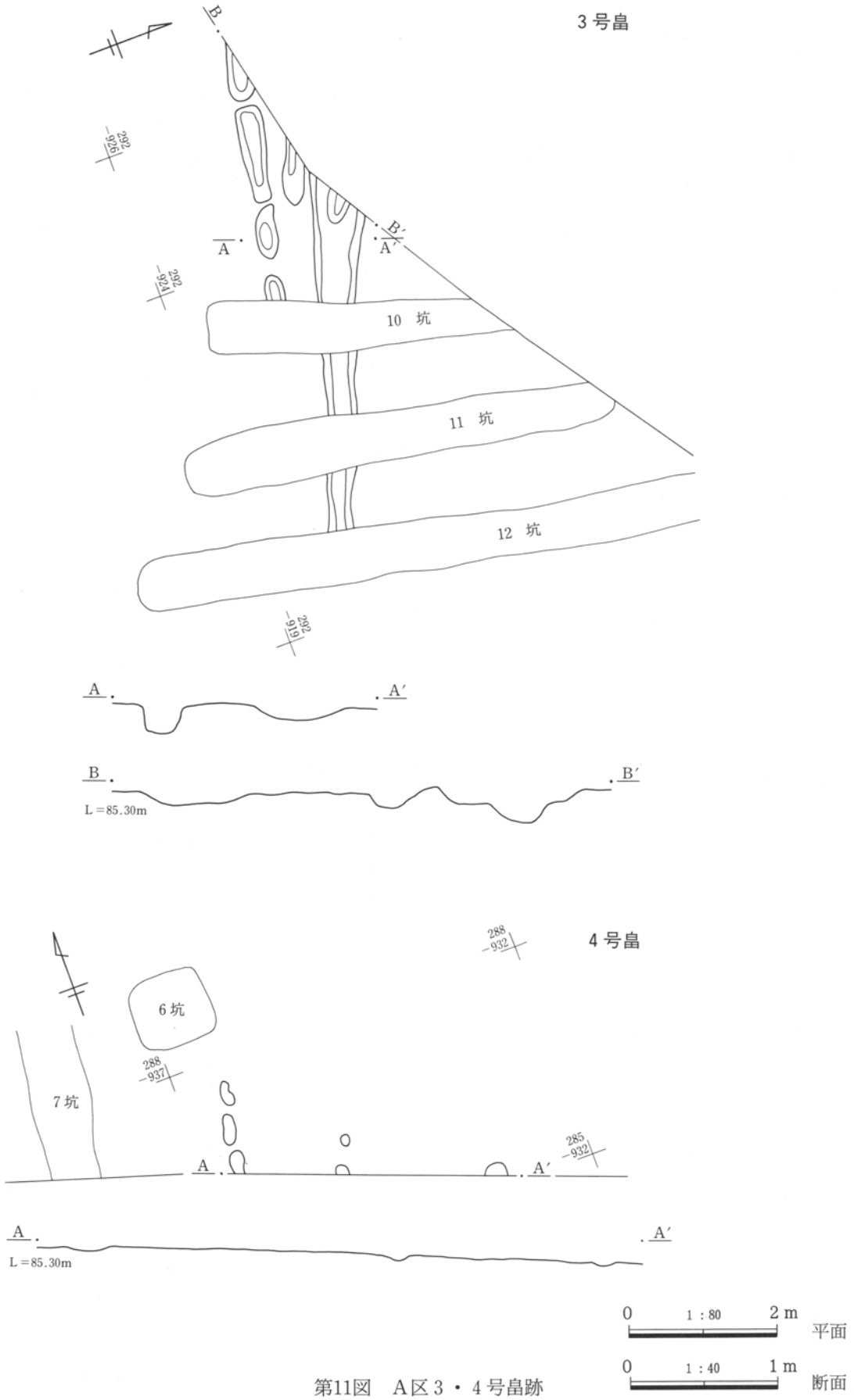




第9図 A区7・8・11・17・18・23号溝断面及び10・12・15号溝平面、断面

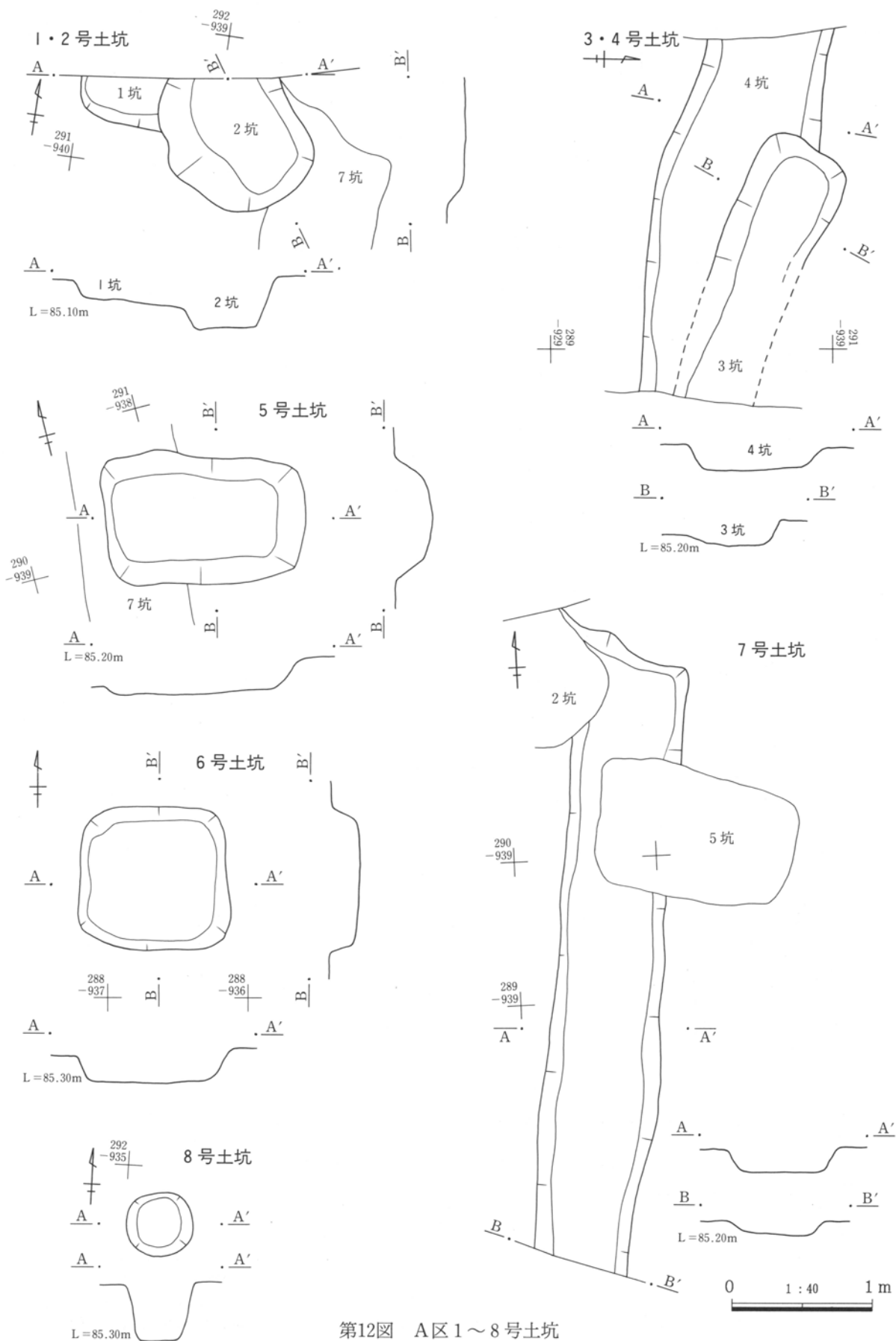


第10図 A区1・2号畠跡

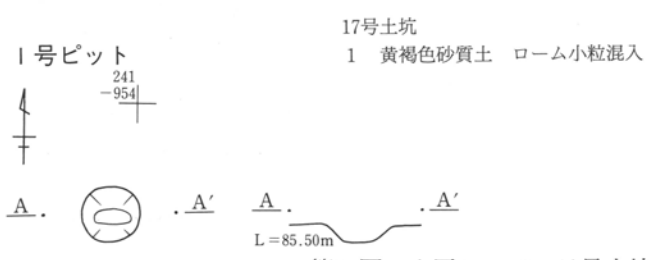
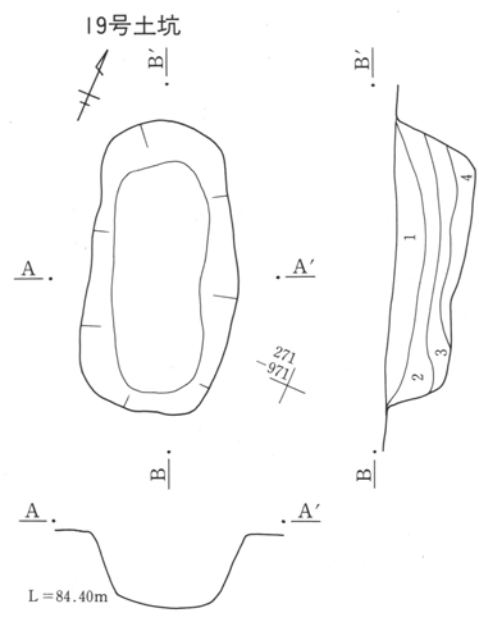
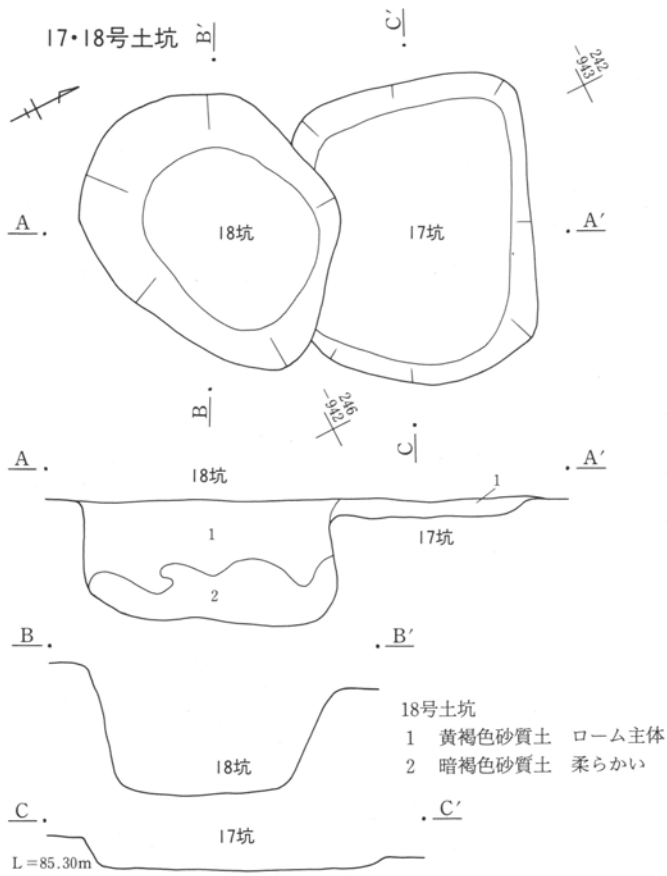
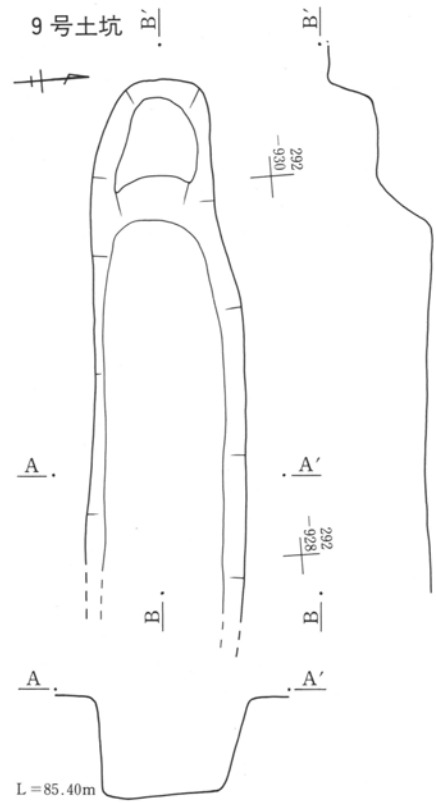
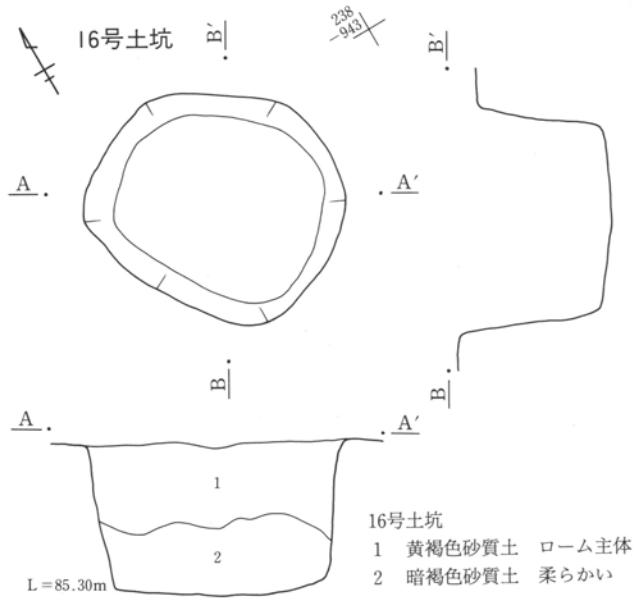


第11図 A区3・4号畠跡

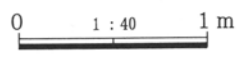
第4章 確認された遺構・遺物について



第12図 A区1～8号土坑

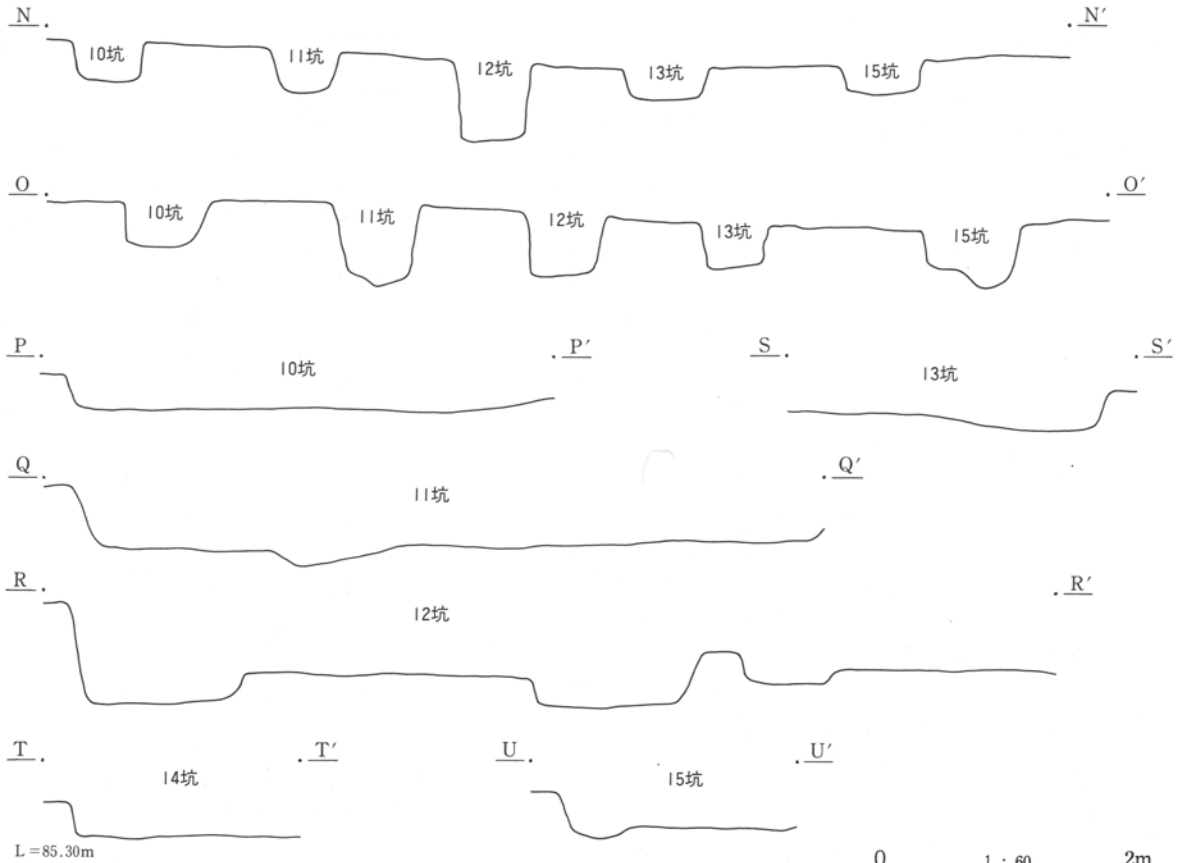


- 19号土坑
- 1 黒褐色粘質土 FAらしき白色パミス多混
  - 2 暗褐色砂質土 白色パミス少混
  - 3 灰白色粘質土 粘土塊混入
  - 4 灰白色粘質土 3層よりも暗灰色。ローム粒混入

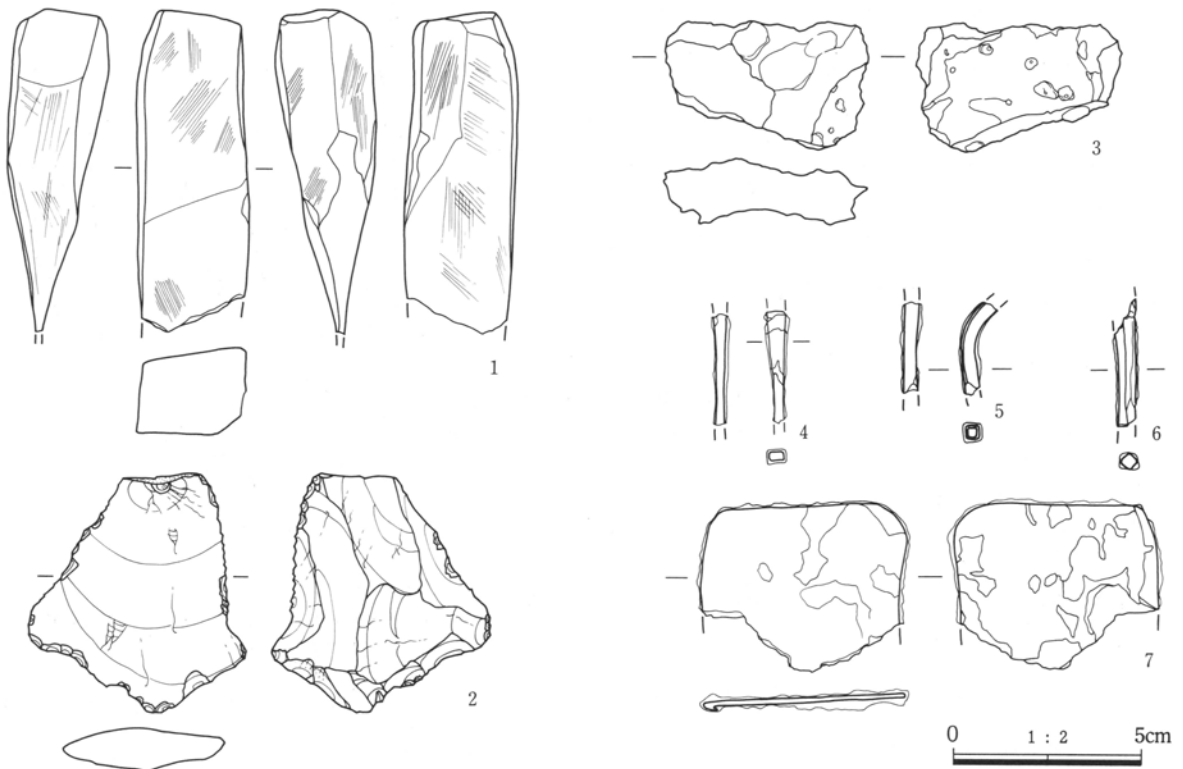


第13図 A区9・16~19号土坑、1号ピット

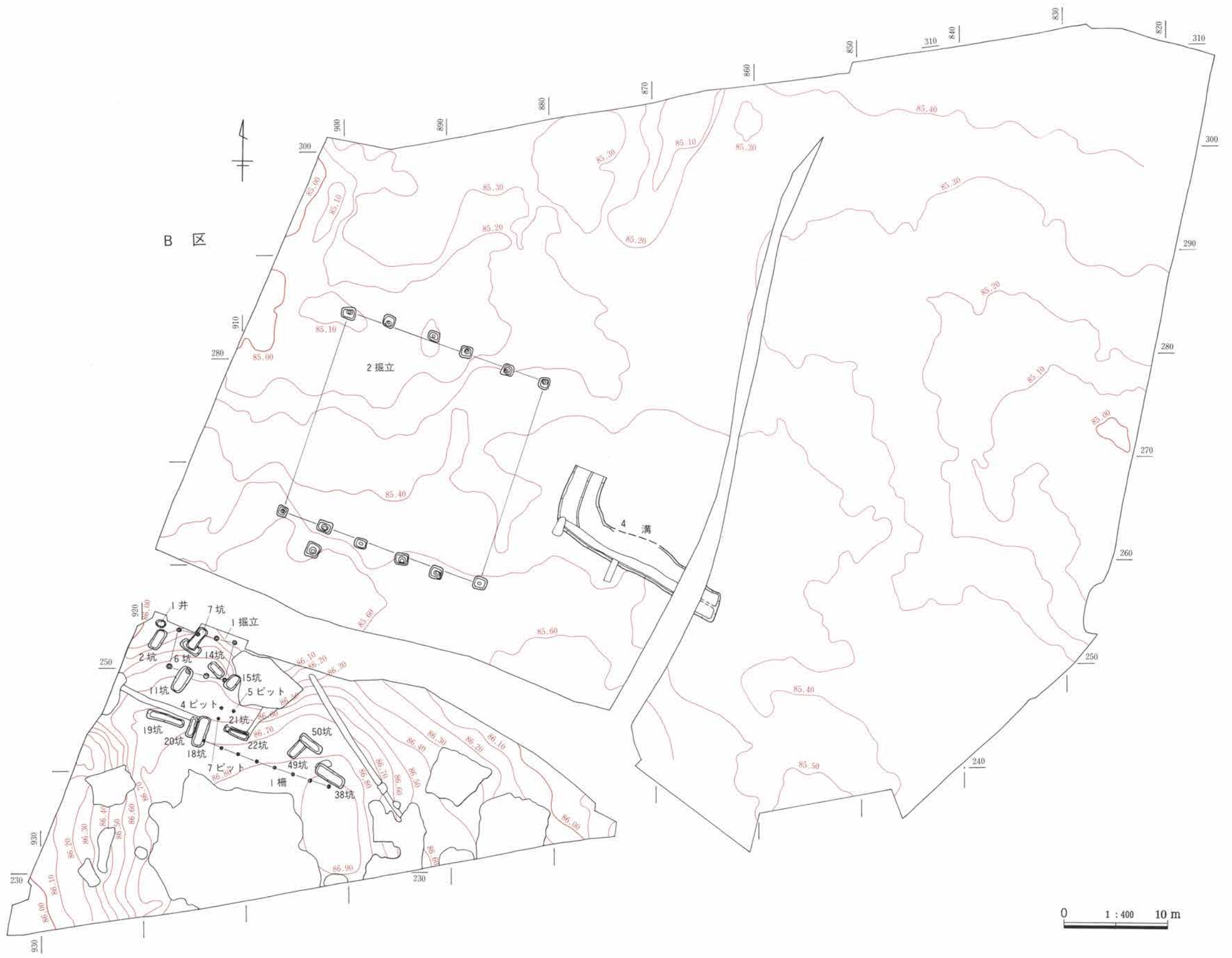
第4章 確認された遺構・遺物について



第14図 A区10~15号土坑断面



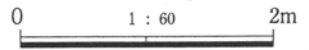
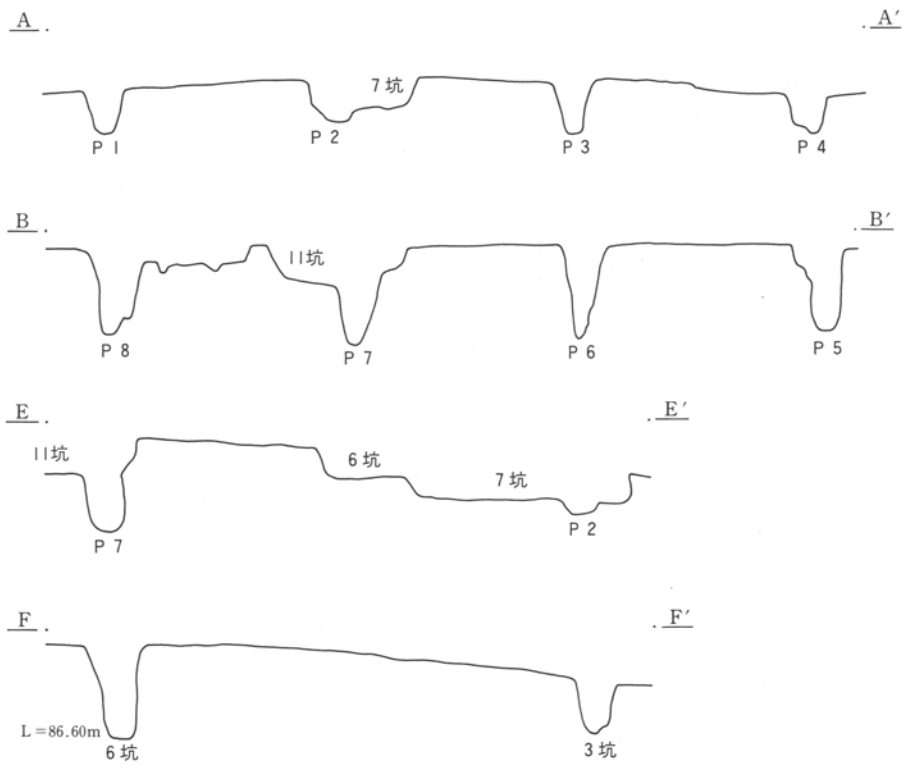
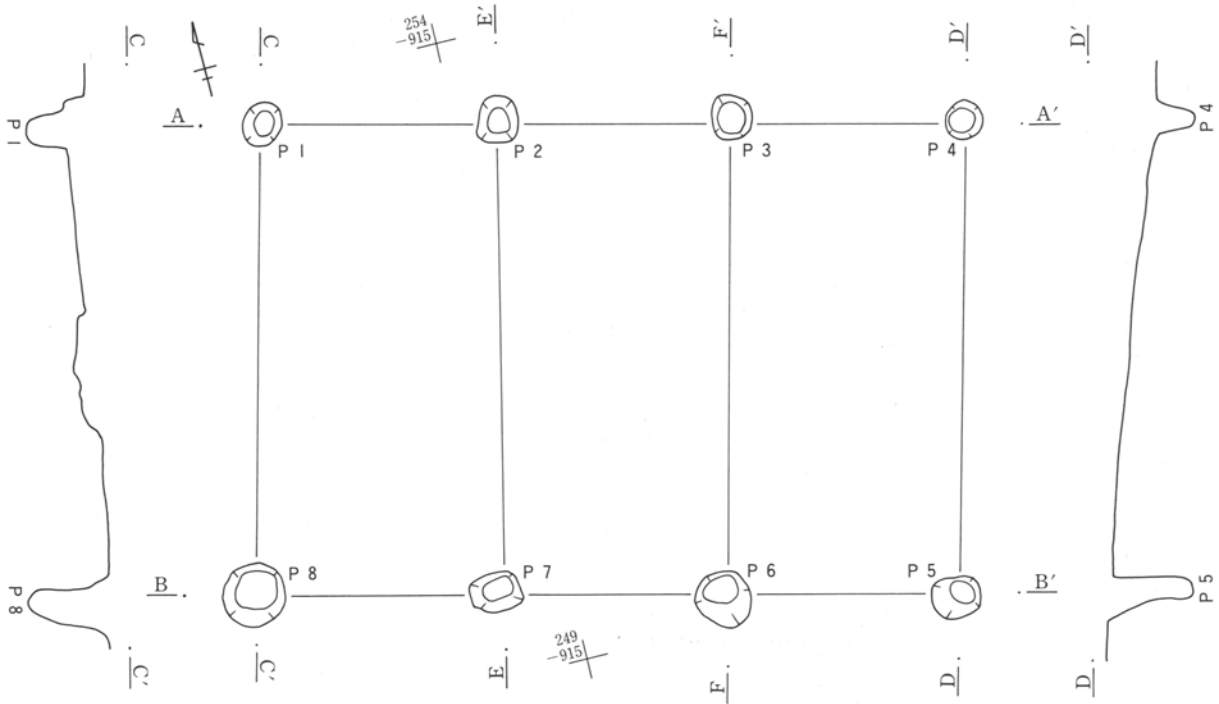
第15図 A区溝、土坑出土遺物



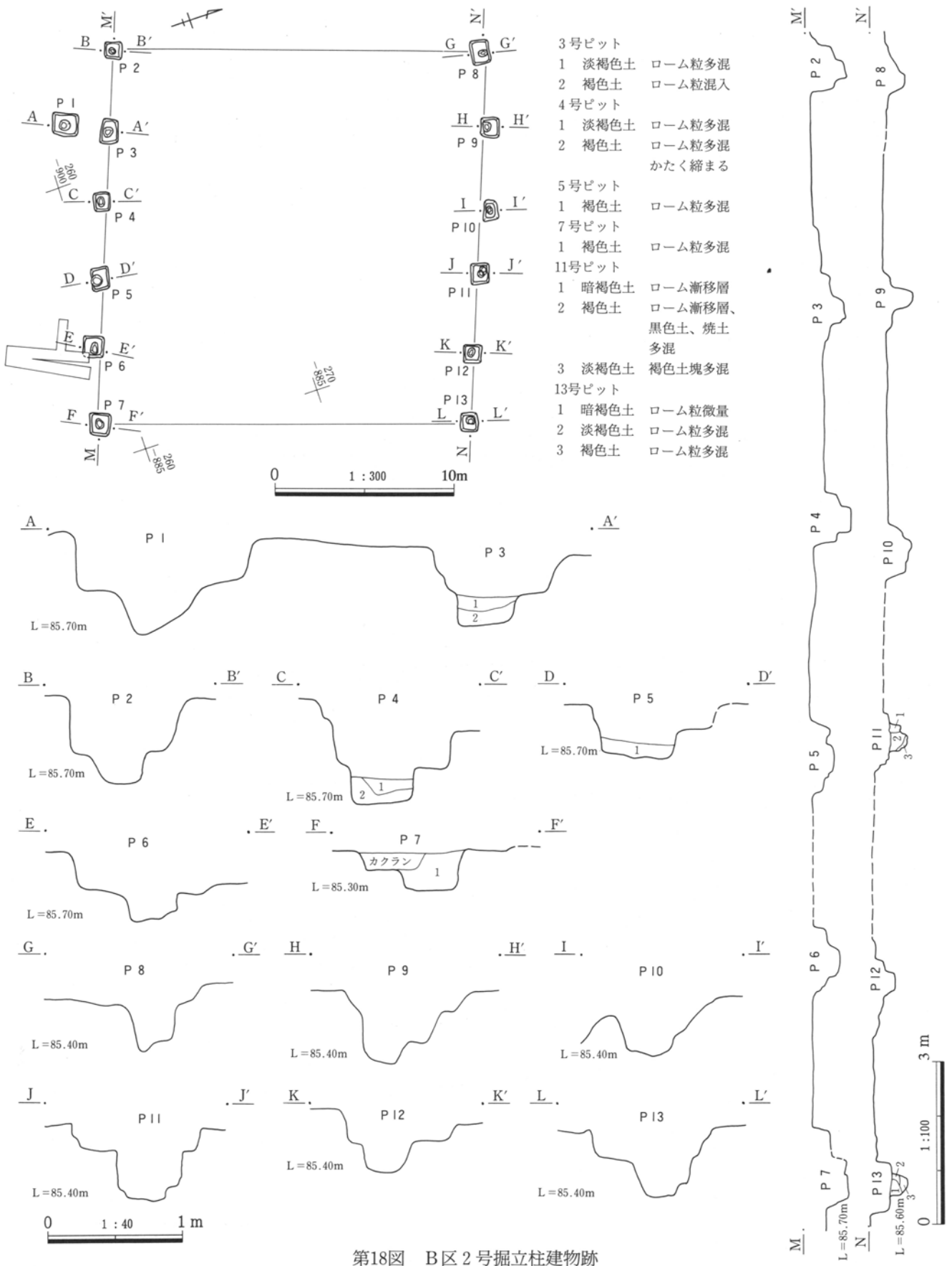
第16図 B区中世以降遺構全体図



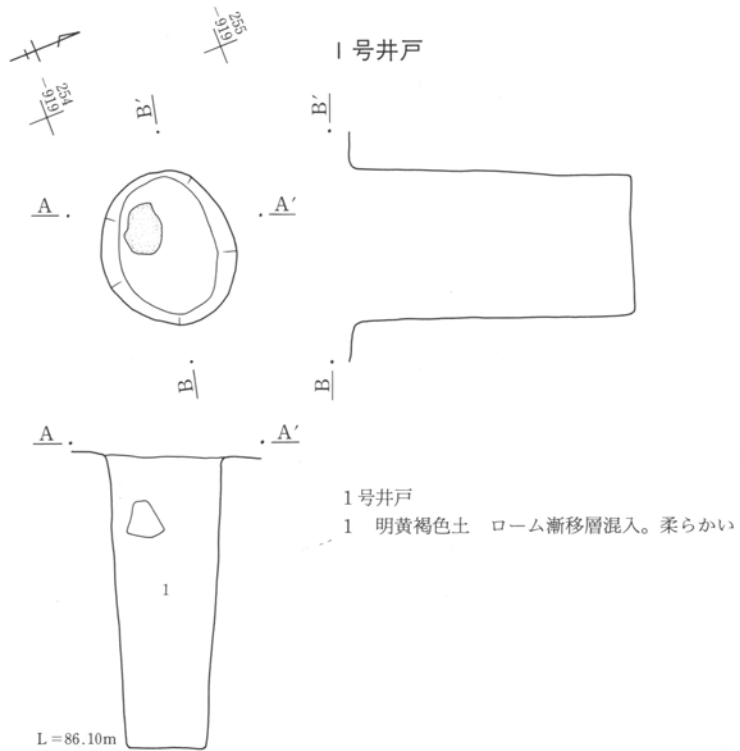
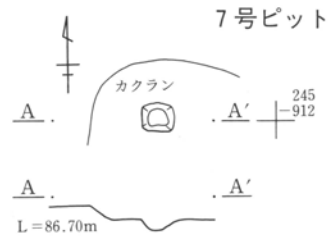
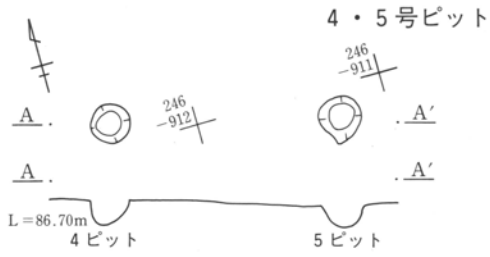
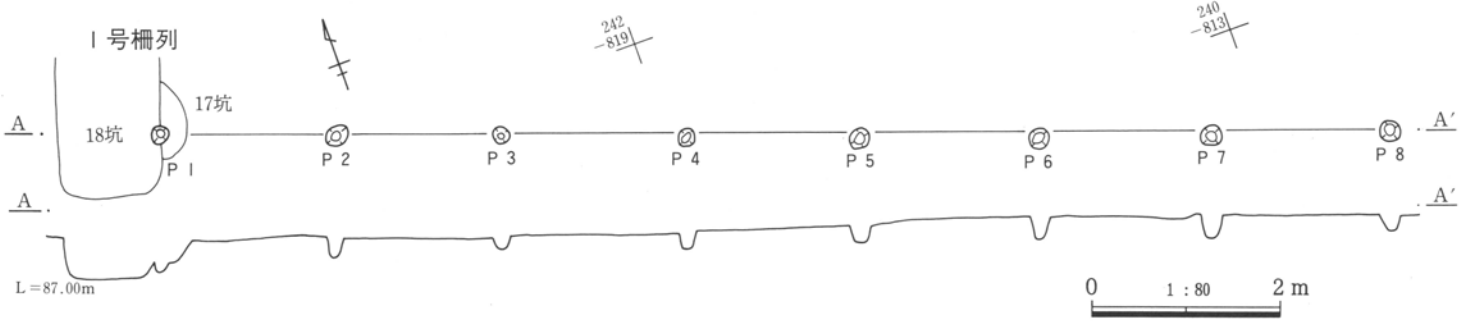




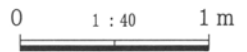
第17図 B区1号掘立柱建物跡

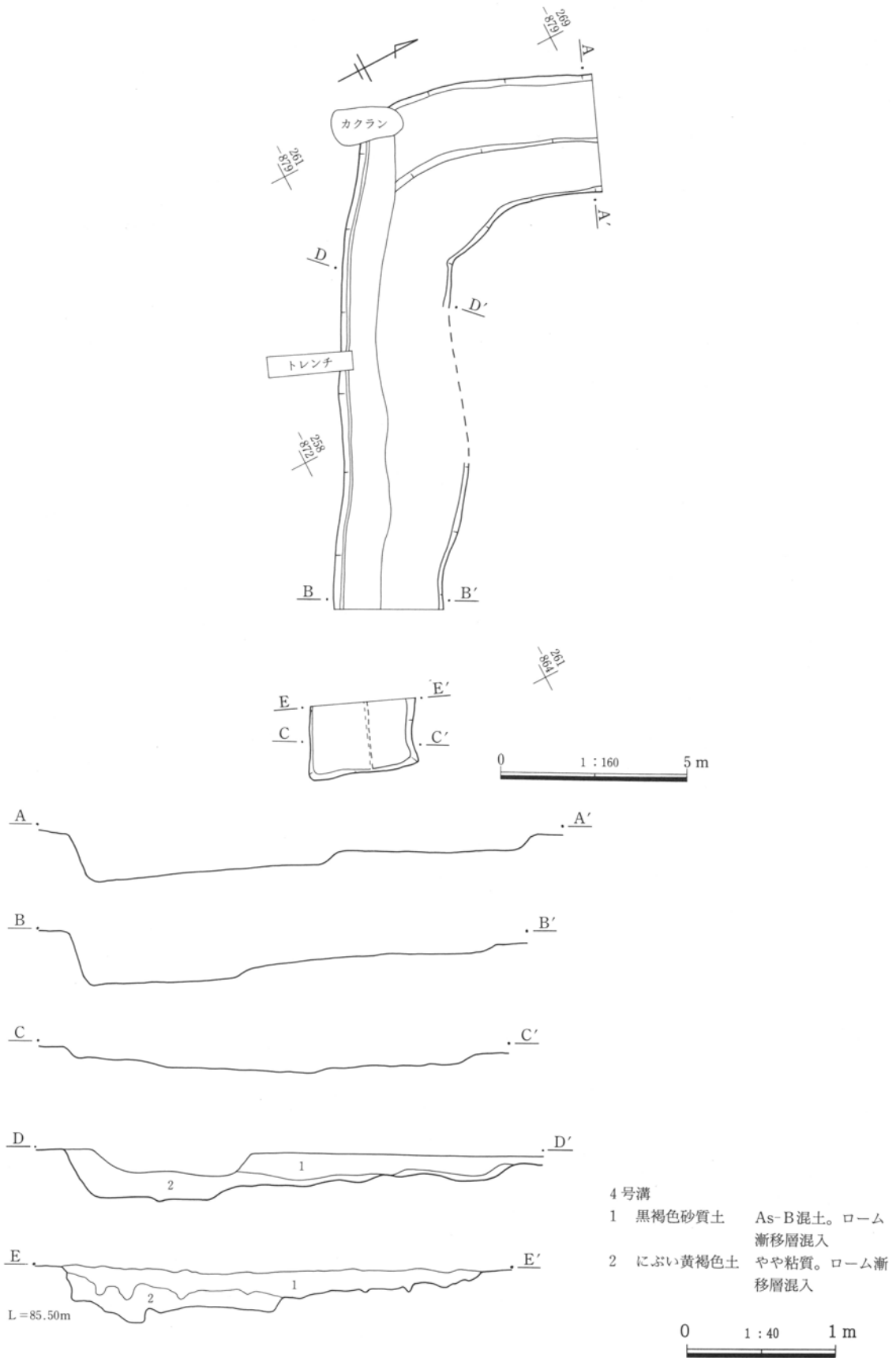


第2節 中世以降

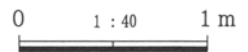
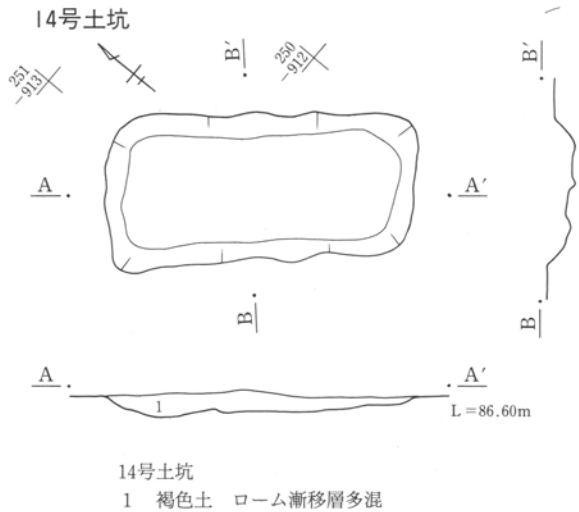
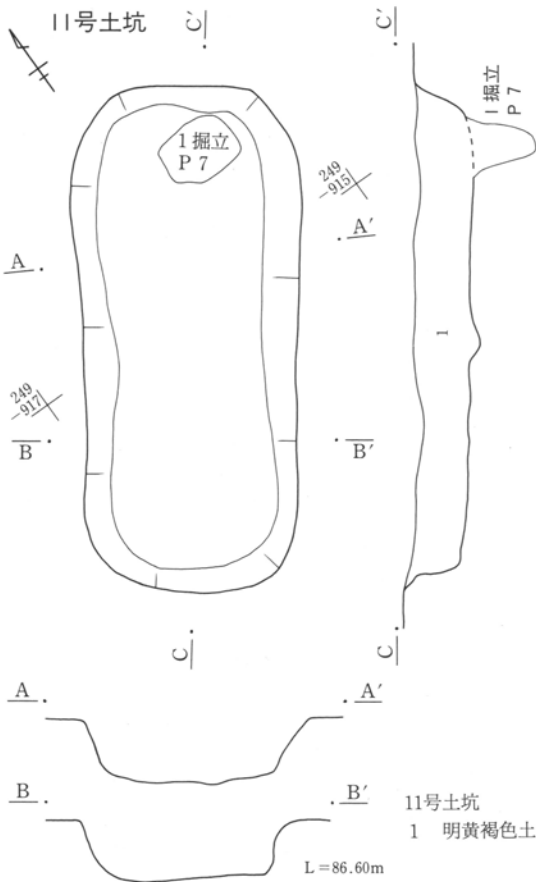
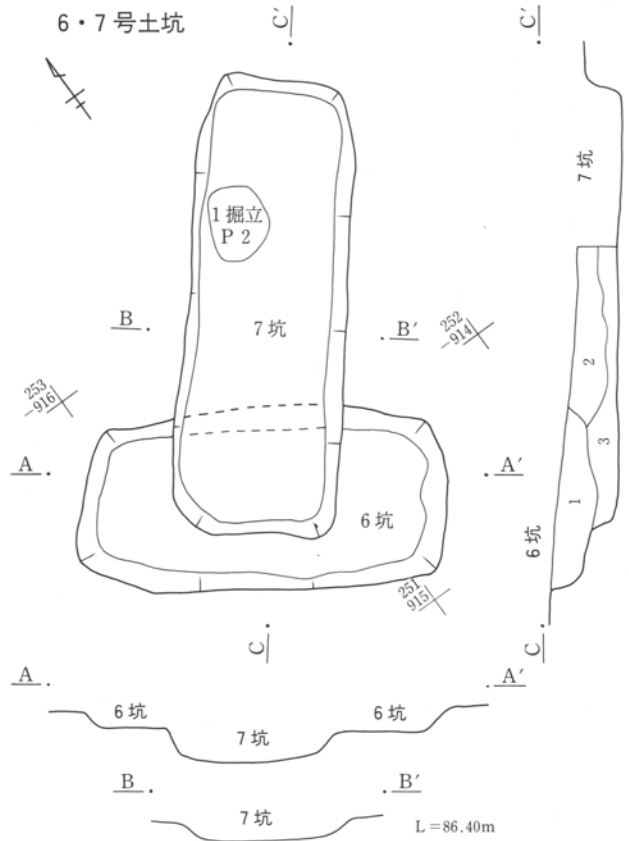
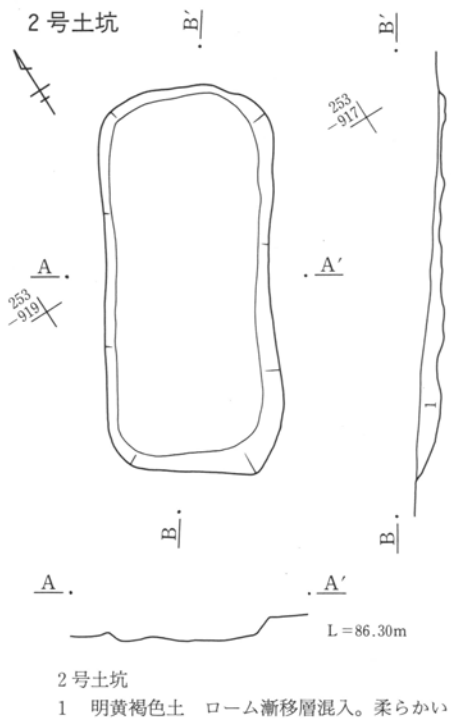


第19図 B区1号柵列、4・5・7号ピット、1号井戸



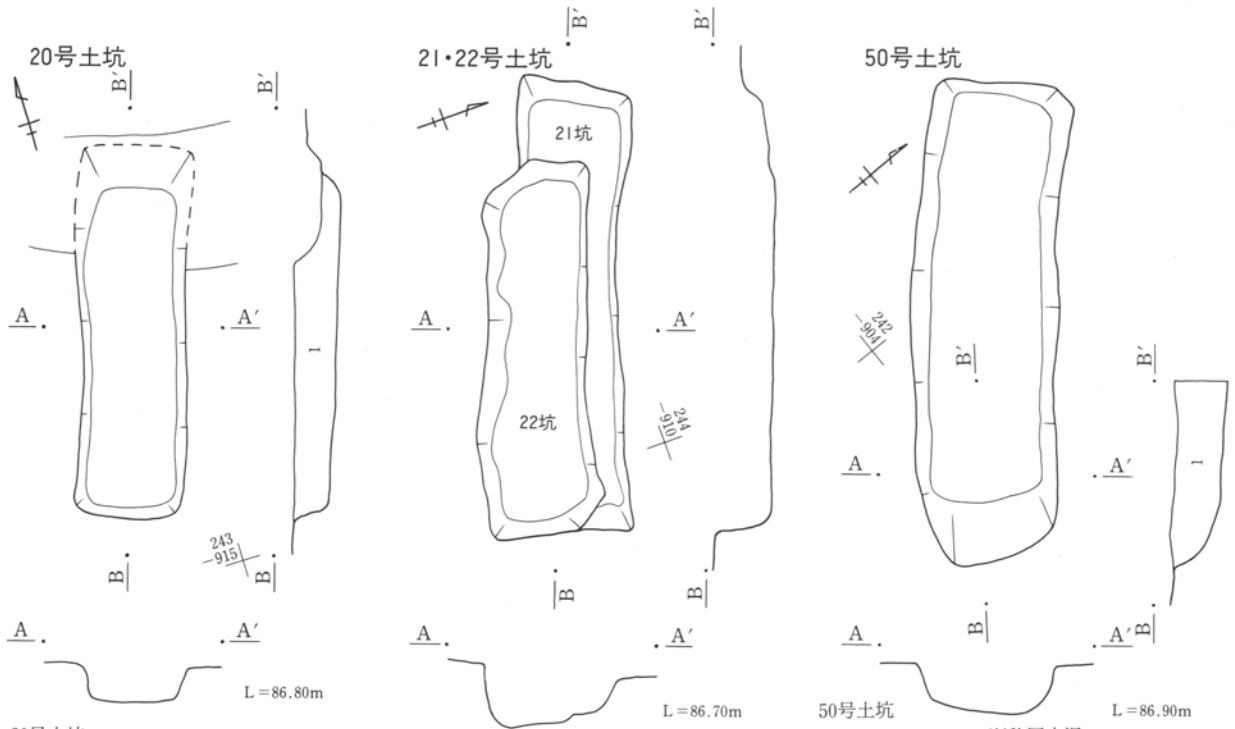


第20図 B区4号溝



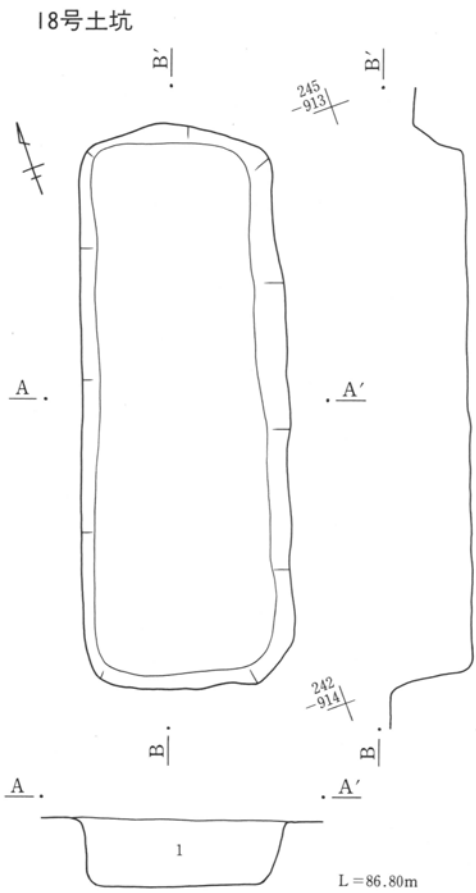
第21図 B区2・6・7・11・14号土坑

第4章 確認された遺構・遺物について

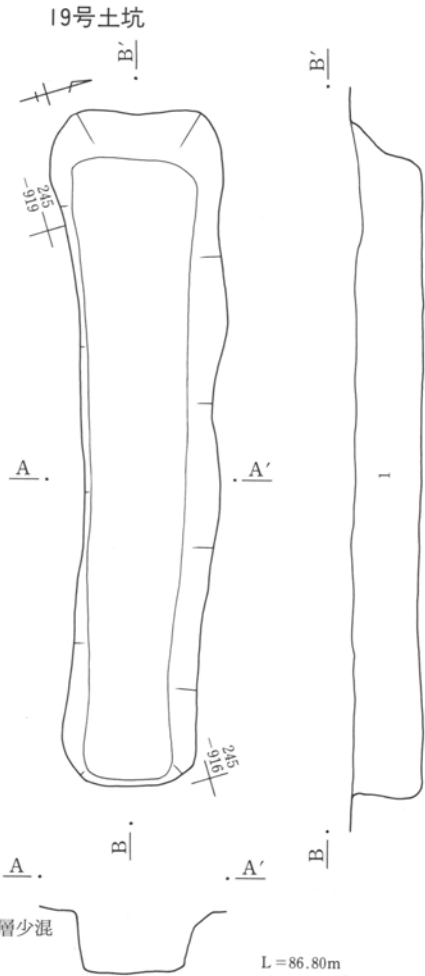


20号土坑  
1 褐色土 ローム漸移層多混

50号土坑  
1 褐色土 ローム漸移層少混

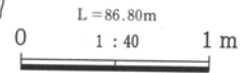


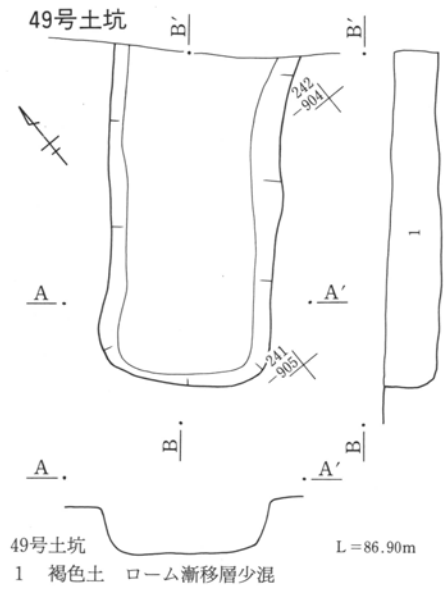
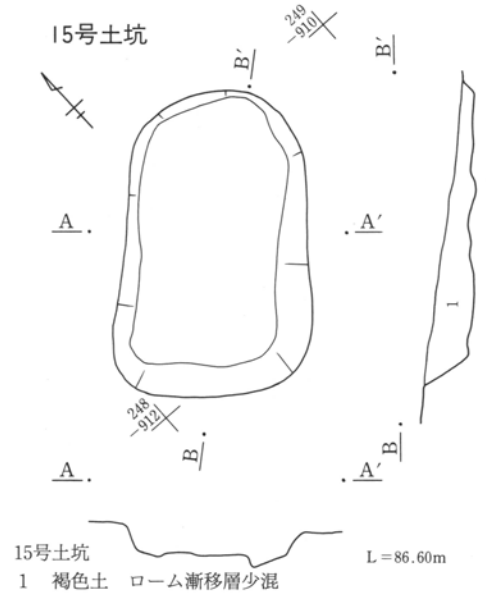
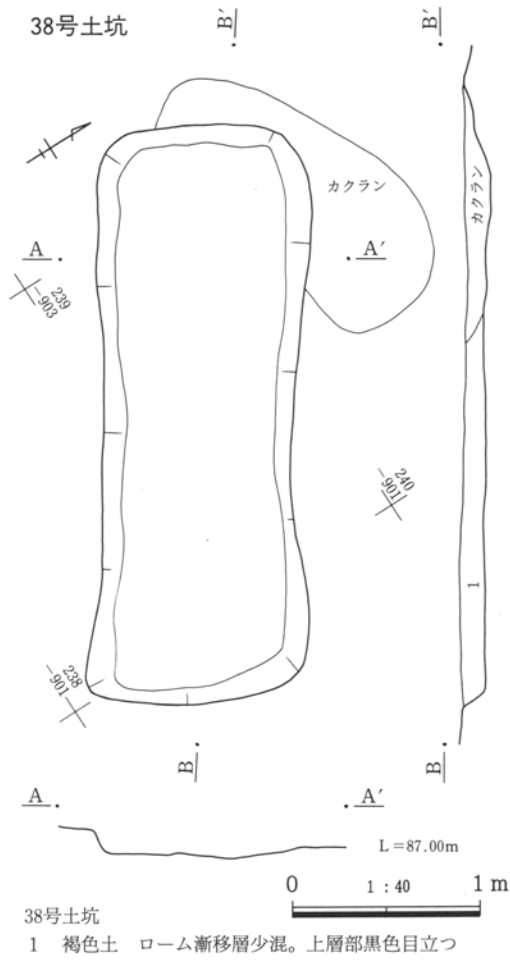
18号土坑  
1 褐色土 ローム漸移層少混



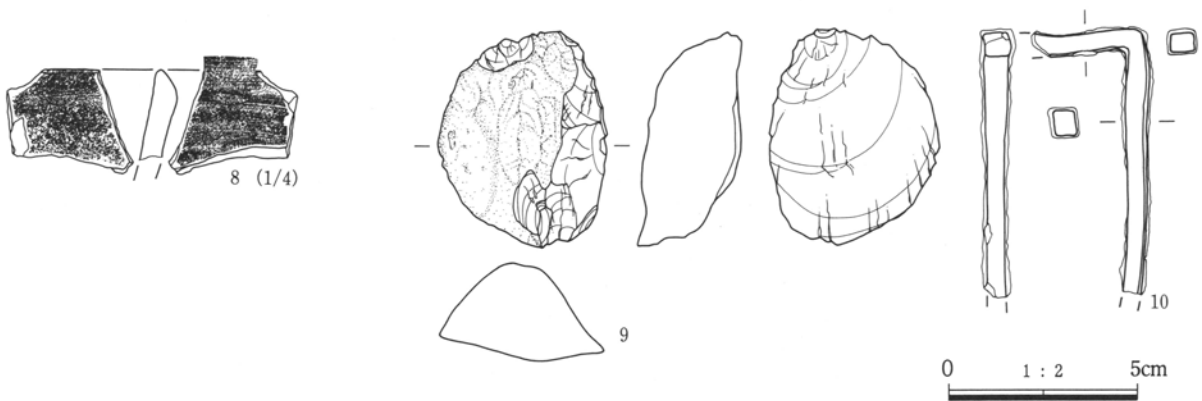
19号土坑  
1 褐色土 ローム漸移層少混

第22図 B区18~22・50号土坑

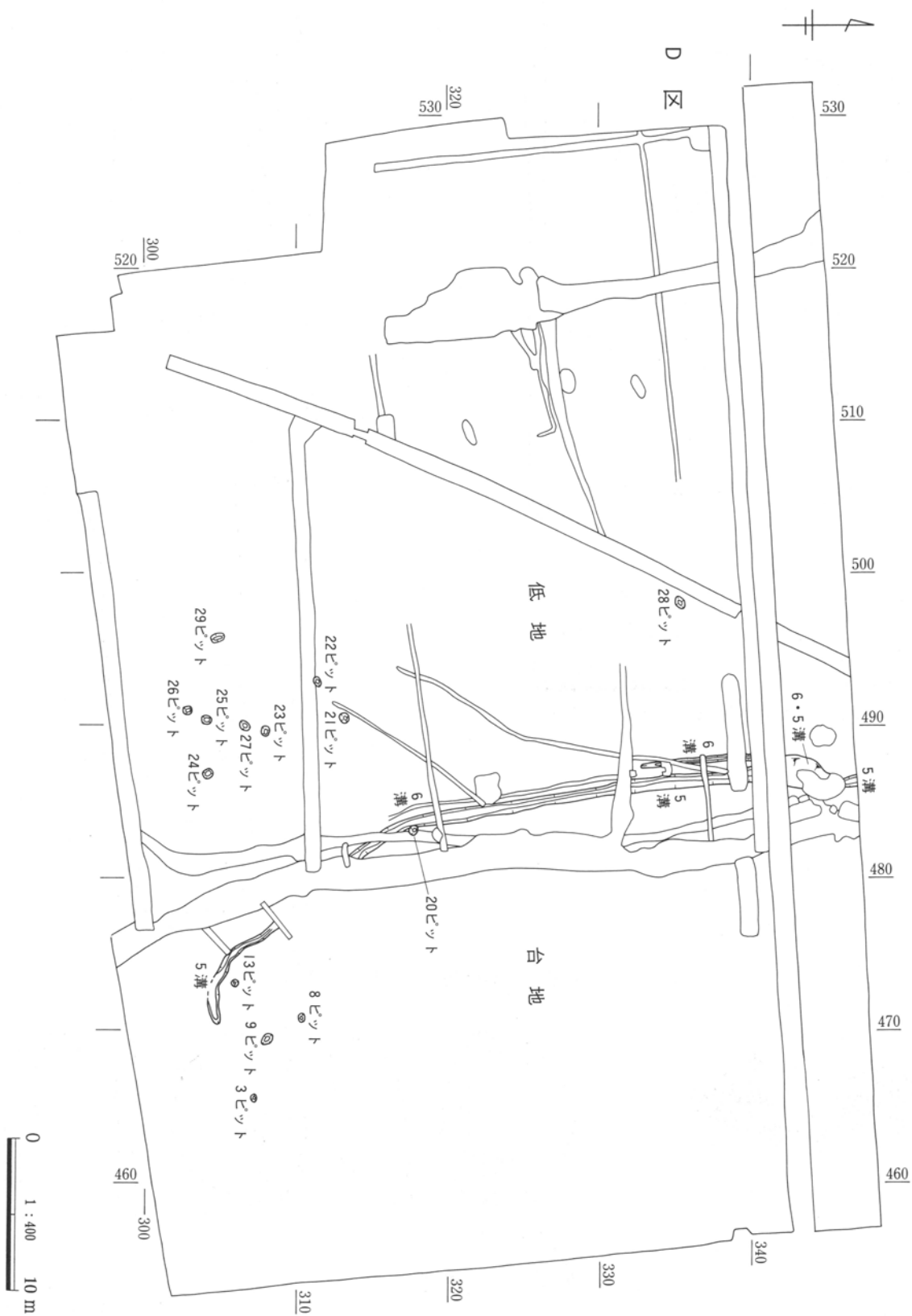




第23図 B区15・38・49号土坑

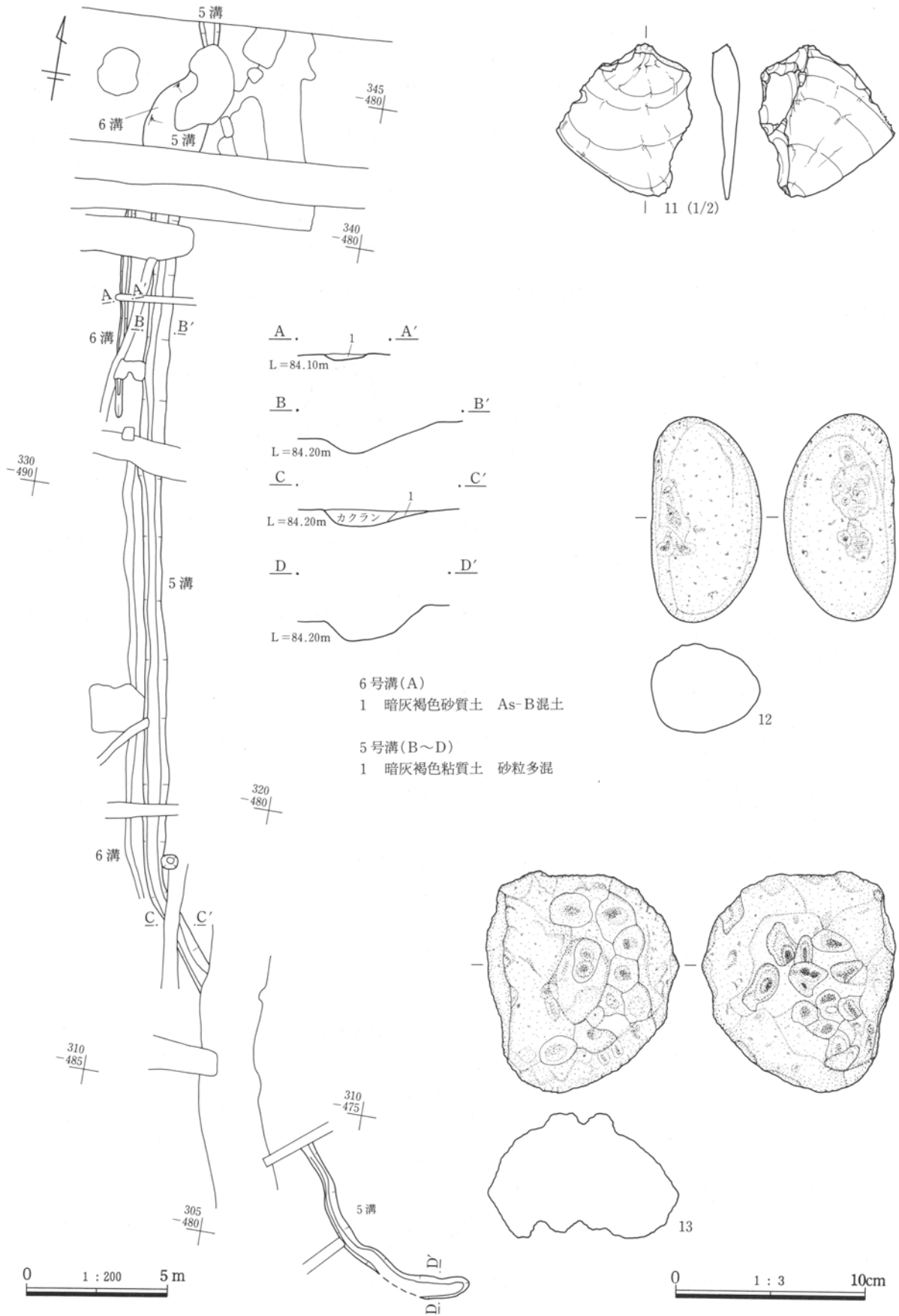


第24図 B区溝、土坑出土遺物



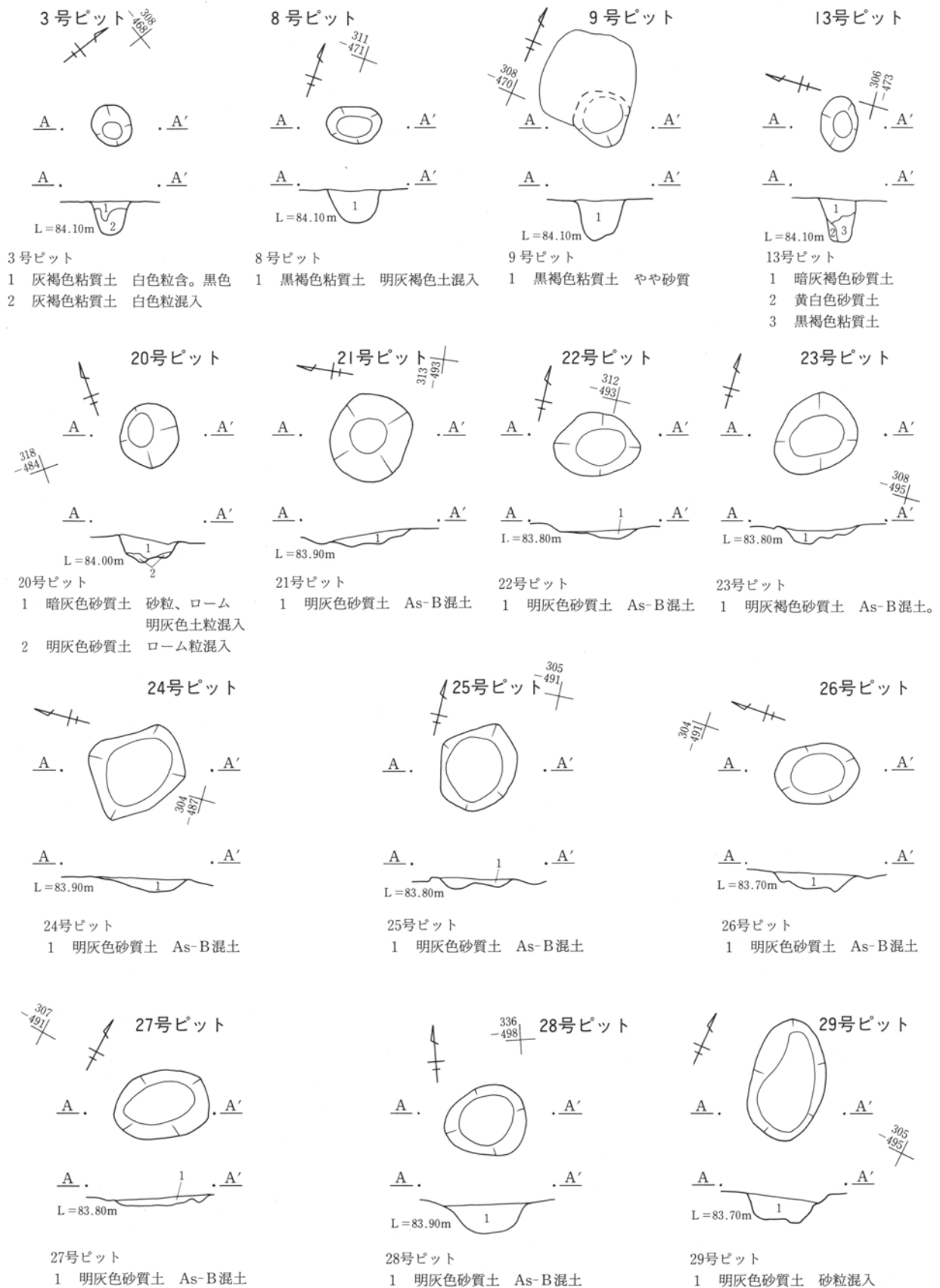
第25図 D区中世以降遺構全体図



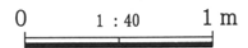


第26図 D区5・6号溝と出土遺物

第4章 確認された遺構・遺物について



第27図 D区3・8・9・13・20～29号ピット



第4表 中世以降 遺構一覧

遺構名称	挿図番号	位置		長・幅・深(m)	走向方位	備考
A区1溝	第7・8図	X252-Y990~X243-Y976		長17.2 幅2.4 深0.18	西から東	
A区7溝	第7・9図	X269-Y982~X262-Y994		長14.0 幅1.2 深0.2	北東から南西	8・11号より新
A区8溝	第7・9図	X283-Y959~X262-Y995		長38.8 幅2.2 深0.24	北東から南西	7溝より古 11・23溝より新
A区10溝	第7・9図	X291-Y941~X288-Y941		長 2.8 幅1.6 深0.16	北から南	
A区11溝	第7・9図	X272-Y987~X251-Y987		長24.4 幅1.2 深0.16	北から南	
A区12溝	第7・9図	X273-Y987~X271-Y986		長 2.2 幅0.44 深0.56	北から南	
A区15溝	第7・9図	X293-Y932~X290-Y931		長 2.6 幅0.48 深0.28	北から南	
A区17溝	第7・9図	X262-Y988~X247-Y972		長26.8 幅1.6 深0.4	西から東	
A区18溝	第7・9図	X258-Y986~X254-Y986		長 4.0 幅0.35 深0.24	北から南	
A区23溝	第7・9図	X273-Y975~X253-Y948		長34.4 幅0.9 深0.3	北西から東	
遺構名称	挿図番号	位置	形状	長・短・深(cm)	長軸方位	備考
A区1土坑	第7・12図	X291-Y939	隅丸長方形	長(60) 短(35) 深14	N-88°-W	2土坑より古い
A区2土坑	第7・12図	X290-Y938	隅丸方形	長100 短 98 深36	N-42°-W	1土坑より新
A区3土坑	第7・12図	X289-Y938	隅丸長方形	長(192) 短 62 深18	N-64°-W	3・4・7・5土坑の順に新
A区4土坑	第7・12図	X289-Y938	隅丸長方形	長 260 短 102 深18	N-80°-W	3・4・7・5土坑の順に新
A区5土坑	第7・12図	X289-Y937	隅丸長方形	長141 短 90 深28	N-75°-W	3・4・7・5土坑の順に新
A区6土坑	第7・12図	X288-Y936	隅丸方形	長104 短 102 深20	N-89°-W	
A区7土坑	第7・12図	X287-Y938	隅丸長方形	長 430 短 84 深17	N-8°-E	3・4・7・5土坑の順に新
A区8土坑	第7・12図	X291-Y934	隅丸方形	長 48 短 44 深42	N-74°-E	
A区9土坑	第7・13図	X290-Y927	隅丸長方形	長(290) 短 80 深50	N-86°-W	
A区10土坑	第7・14図	X292-Y923	隅丸長方形	長 390 短 55 深30	N-18°-E	
A区11土坑	第7・14図	X291-Y921	隅丸長方形	長 590 短 55 深35	N-10°-E	
A区12土坑	第7・14図	X290-Y920	隅丸長方形	長 785 短 65 深62	N-10°-E	
A区13土坑	第7・14図	X290-Y918	隅丸長方形	長(300) 短 55 深35	N-10°-E	
A区14土坑	第7・14図	X293-Y917	隅丸長方形	長(260) 短 70 深28	N-10°-E	
A区15土坑	第7・14図	X291-Y916	隅丸長方形	長(240) 短 65 深28	N-8°-E	
A区16土坑	第7・13図	X237-Y943	隅丸長方形	長 130 短(118) 深78	N-34°-W	
A区17土坑	第7・13図	X240-Y941	隅丸長方形	長 160 短(114) 深 8	N-69°-W	18土坑より古い
A区18土坑	第7・13図	X239-Y942	隅丸長方形	長 156 短 120 深64	N-69°-E	17土坑より新
A区19土坑	第7・13図	X270-Y971	隅丸長方形	長 153 短 78 深40	N-20°-E	
A区1ピット	第7・13図	X239-Y954	円形	長 32 短 30 深10	N-89°-E	
B区2土坑	第16・21図	X251-Y918	隅丸長方形	長 204 短 86 深10	N-32°-E	
B区6土坑	第16・21図	X251-Y914	隅丸長方形	長 195 短 96 深20	N-42°-E	7土坑より新
B区7土坑	第16・21図	X251-Y915	隅丸長方形	長 238 短 84 深22	N-39°-E	6土坑より古い
B区11土坑	第16・21図	X247-Y916	隅丸長方形	長 267 短 106 深30	N-37°-E	
B区14土坑	第16・21図	X249-Y912	隅丸長方形	長 164 短 78 深12	N-41°-W	
B区15土坑	第16・23図	X247-Y911	隅丸長方形	長 162 短 96 深20	N-41°-E	
B区18土坑	第16・22図	X242-Y913	隅丸長方形	長 298 短 108 深34	N-16°-E	
B区19土坑	第16・22図	X244-Y916	隅丸長方形	長 352 短 70 深36	N-71°-W	
B区20土坑	第16・22図	X243-Y915	隅丸長方形	長(196) 短 54 深20	N-17°-E	
B区21土坑	第16・22図	X243-Y909	隅丸長方形	長 238 短 60 深18	N-71°-W	22土坑との新旧不明
B区22土坑	第16・22図	X243-Y909	隅丸長方形	長 198 短 52 深33	N-72°-W	21土坑との新旧不明
B区38土坑	第16・23図	X238-Y900	隅丸長方形	長 307 短 100 深12	N-57°-W	
B区49土坑	第16・23図	X241-Y905	隅丸長方形	長(174) 短 91 深28	N-44°-E	50土坑との新旧不明
B区50土坑	第16・22図	X241-Y902	隅丸長方形	長 252 短 76 深28	N-49°-W	49土坑との新旧不明
B区7ピット	第16・19図	X244-Y912	隅丸方形	長 16 短 15 深 6	N-85°-W	
D区3ピット	第25・27図	X306-Y467	円形	長 30 短 27 深24	N-85°-E	
D区8ピット	第25・27図	X310-Y470	楕円形	長 38 短 26 深22	N-70°-E	
D区9ピット	第25・27図	X307-Y469	隅丸方形	長(36) 短(35) 深25	N-0°	
D区13ピット	第25・27図	X306-Y473	楕円形	長 38 短 27 深30	N-76°-E	
D区20ピット	第25・27図	X317-Y483	隅丸方形	長 42 短 40 深18	N-44°-E	
D区21ピット	第25・27図	X313-Y493	隅丸方形	長 60 短 53 深12	N-78°-W	
D区22ピット	第25・27図	X311-Y492	楕円形	長 60 短 42 深 6	N-70°-E	
D区23ピット	第25・27図	X307-Y489	楕円形	長 60 短 50 深 9	N-46°-E	
D区24ピット	第25・27図	X304-Y486	隅丸方形	長 65 短 58 深 9	N-42°-W	
D区25ピット	第25・27図	X304-Y490	隅丸方形	長 56 短 54 深 8	N-11°-W	
D区26ピット	第25・27図	X302-Y490	楕円形	長 60 短 42 深10	N-20°-W	
D区27ピット	第25・27図	X306-Y489	楕円形	長 68 短 48 深 5	N-45°-E	
D区28ピット	第25・27図	X335-Y498	隅丸方形	長 57 短 48 深18	N-87°-W	
D区29ピット	第25・27図	X304-Y495	楕円形	長 86 短 52 深17	N-10°-W	

第4章 確認された遺構・遺物について

近世以降遺構外出土遺物観察表

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴	備考
24図-8 PL.26	軟質陶器 鉢	B区4溝 X256 -Y864G口縁片	厚1.2	良・にぶい黄褐 10YR5/3・還元	内外面全体に横方向に撫で。内外面ともに一部に剝離が認められる。	中世 在地

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm) 量目(g)	石質	備考
15図-1 PL.26	石製品 砥石	A区15溝 覆土 1/2	長<8.5> 短3.9 厚2.7 重83.6	流紋岩	表、裏、両側面の4面使用。全体にかなり使い込まれている。
15図-2 PL.26	石器 剥片	A区7溝 X265 -Y990G 完形	長6.3 短5.7 厚1.1 重35.6	黒色頁岩	
24図-9 PL.26	石器 剥片	B区11土 覆土 完形	長5.7 短4.5 厚2.5 重71.8	黒色頁岩	
26図-11 PL.26	石器 剥片	D区5溝 X336 -Y486G 完形	長4.8 短4.3 厚0.9 重16.4	黒色頁岩	
26図-12 PL.26	石器 くぼみ石	D区5溝 覆土 完形	長10.7短5.8 厚4.6 重353.6	粗粒輝石安山岩	
26図-13 PL.26	石器 多孔石	D区5溝 覆土 完形	長11.6短10.1厚6.5 重811.5	粗粒輝石安山岩	

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)	形状・技法等の特徴	備考
15図-3 PL.26	鉄滓	A区8溝 X268 -Y984G	長5.3 短3.4 厚1.8	全面に錆がまだらに付着する。気孔が部分的に見られる。表面はざらついている。	
15図-4 PL.26	鉄製品 角釘か	A区7土 覆土 破片	長<3.0> 短0.7 厚0.5	地は黒褐色を呈す。部分的に錆が付着する。	
15図-5 PL.26	鉄製品 角釘か	A区7土 覆土 破片	長<2.6> 短0.4 厚0.4	中央部より「く」の字に折れ曲がる。部分的に錆が付着する。	
15図-6 PL.26	鉄製品 不明	A区11土 覆土 破片	長<3.2> 短0.65 厚0.4	地は黒褐色を呈す。錆の付着は殆ど見られない。	
15図-7 PL.26	鉄製品 金属片	A区8土 覆土 破片	長<5.4> 短4.4 厚0.15	全面に砂粒が付着する。地は黒褐色を呈す。一部に錆が付着する。	
24図-10 PL.26	鉄製品 錠	B区20土 覆土 破片	長<7.0> 短3.0 厚0.6×0.7	地は暗灰褐色を呈す。部分的に錆が付着する。	

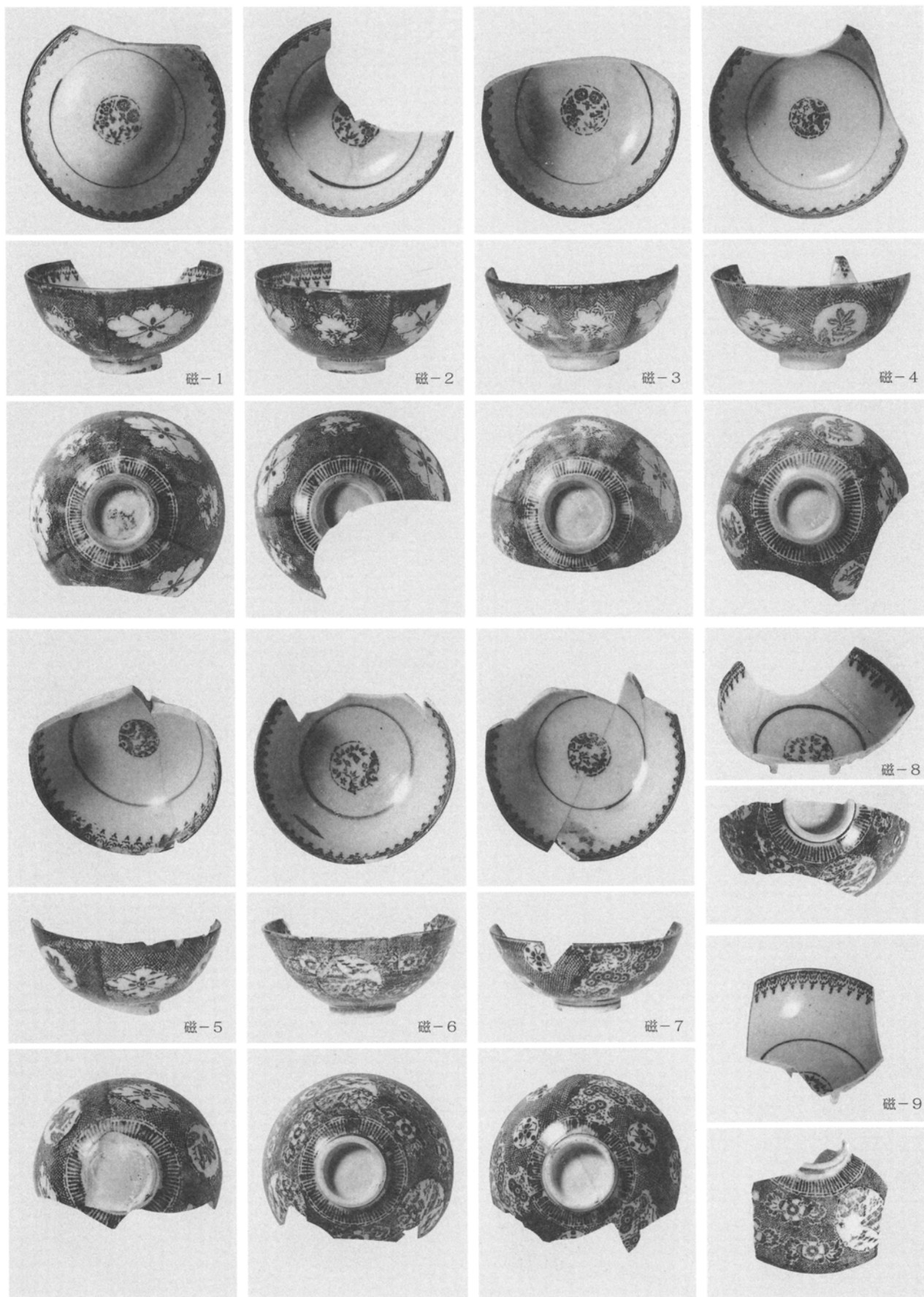
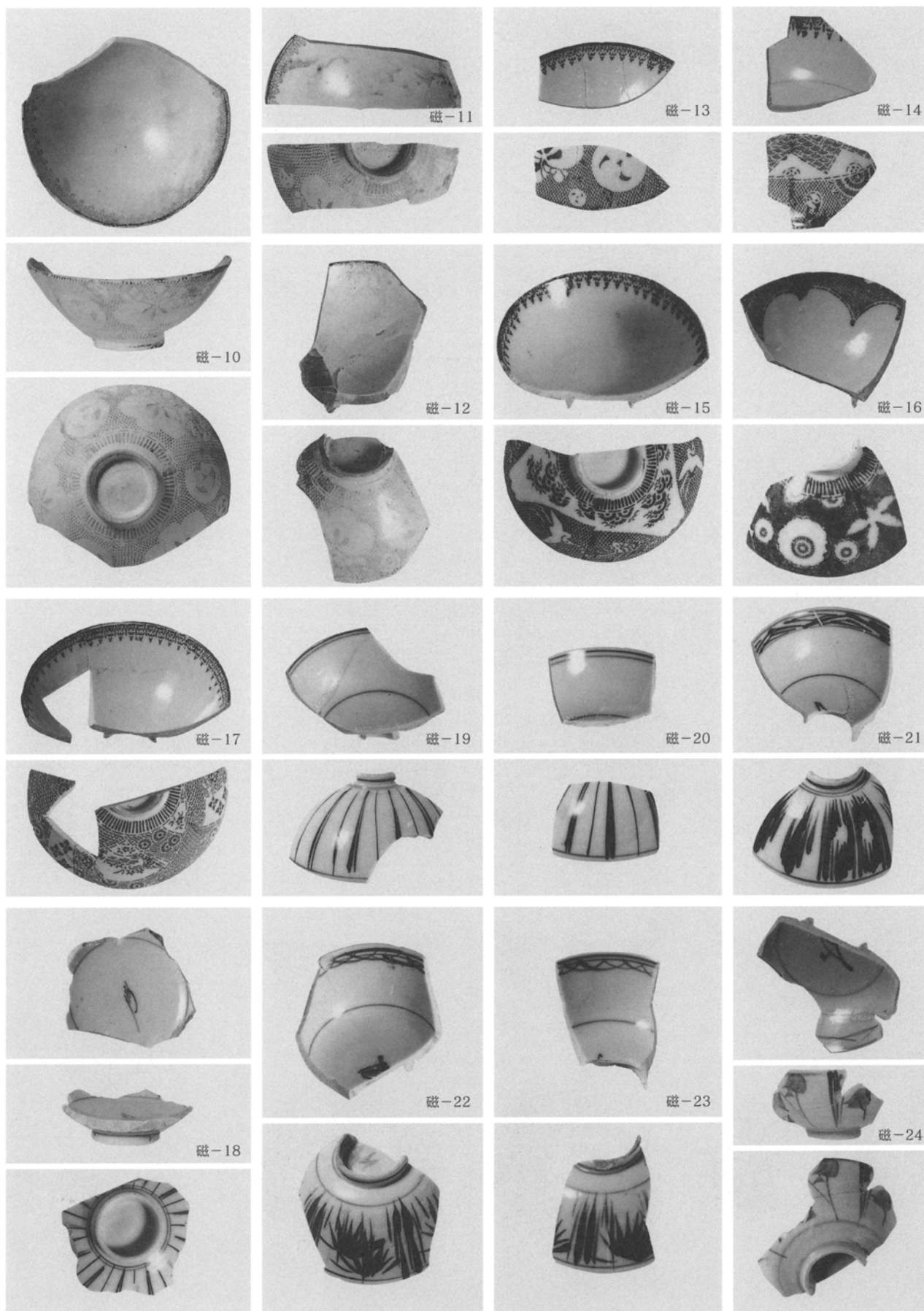


写真1 遺構外出土遺物(1)

第4章 確認された遺構・遺物について



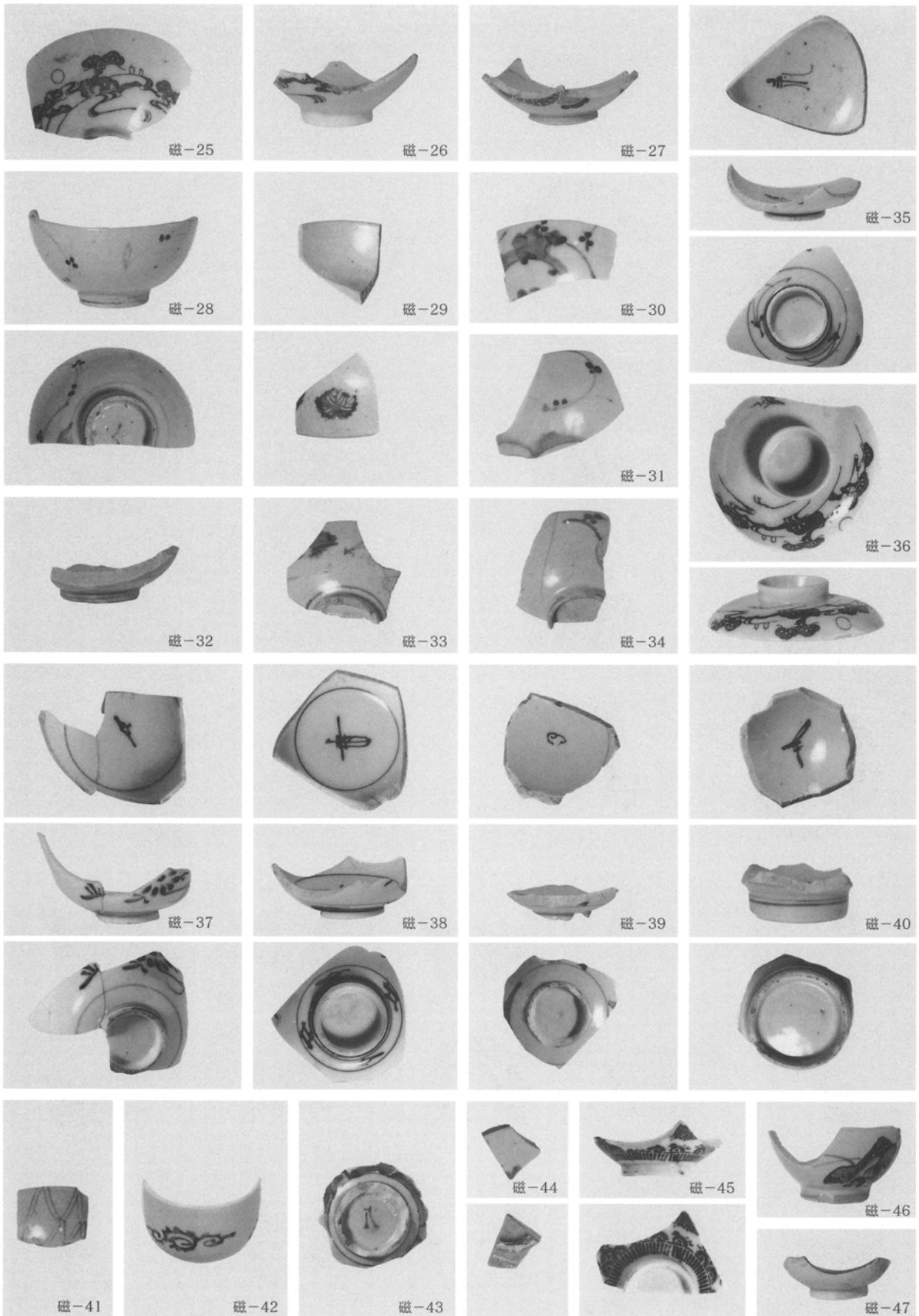


写真3 遺構外出土遺物(3)

第4章 確認された遺構・遺物について





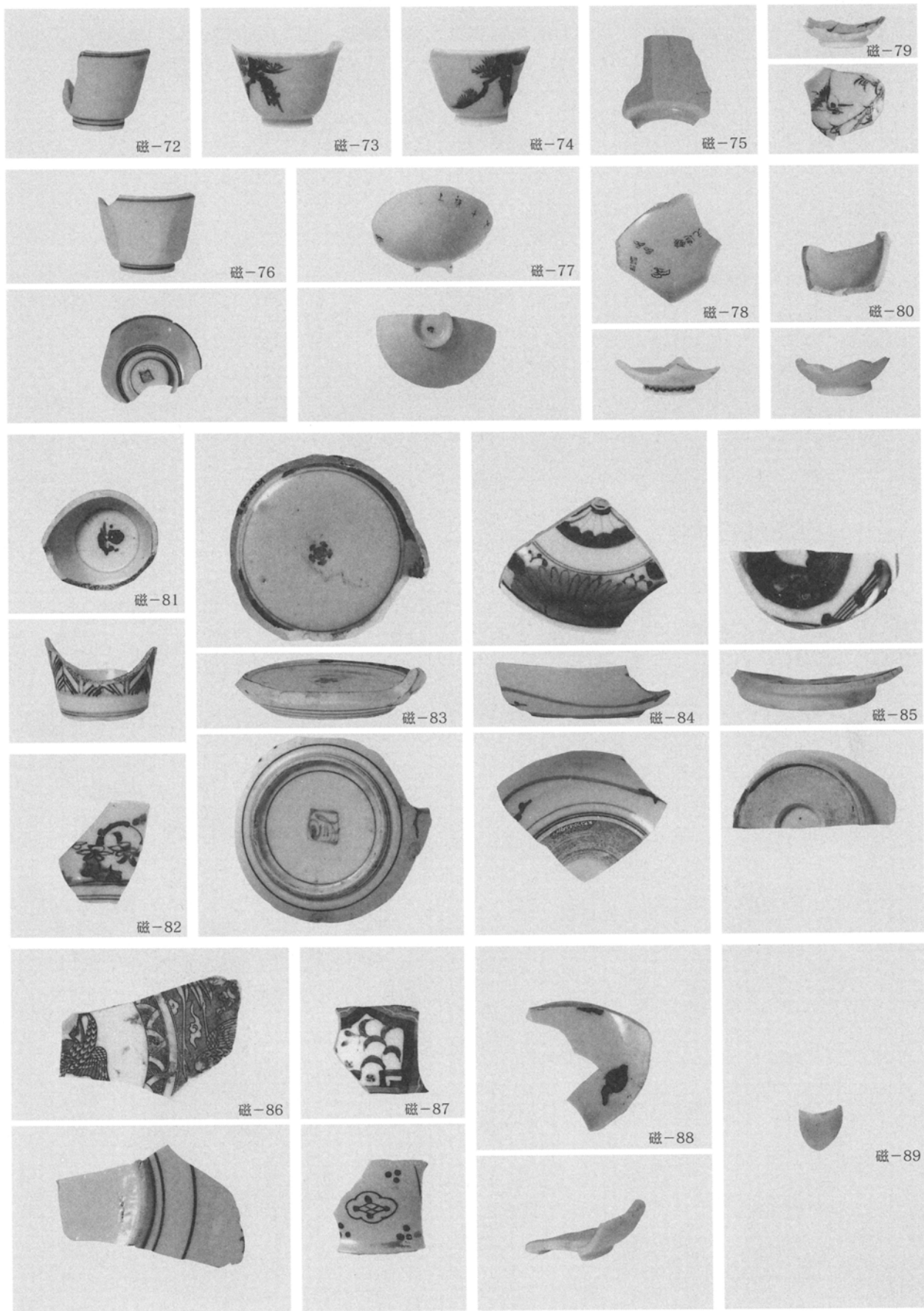


写真5 遺構外出土遺物(5)

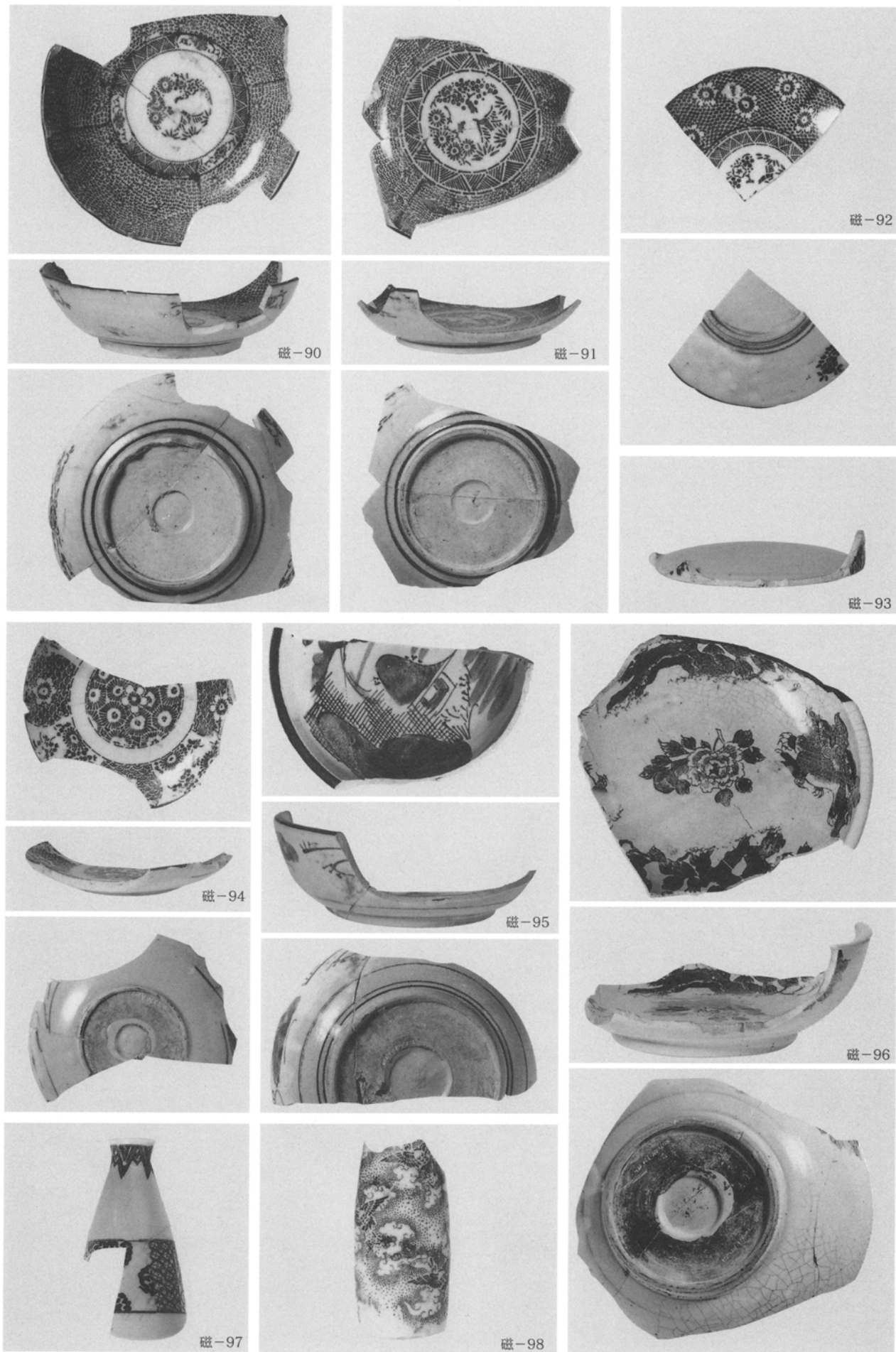
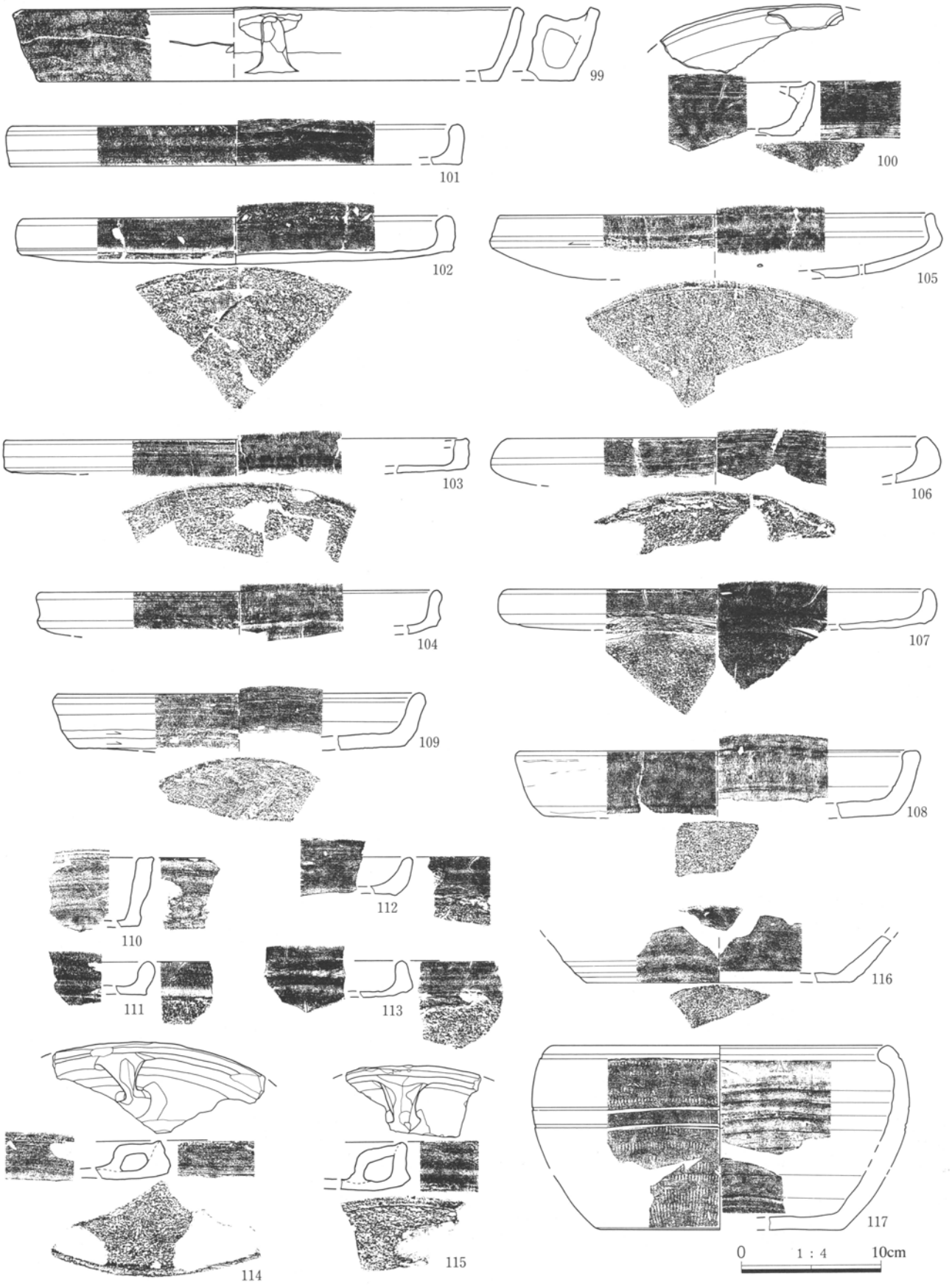
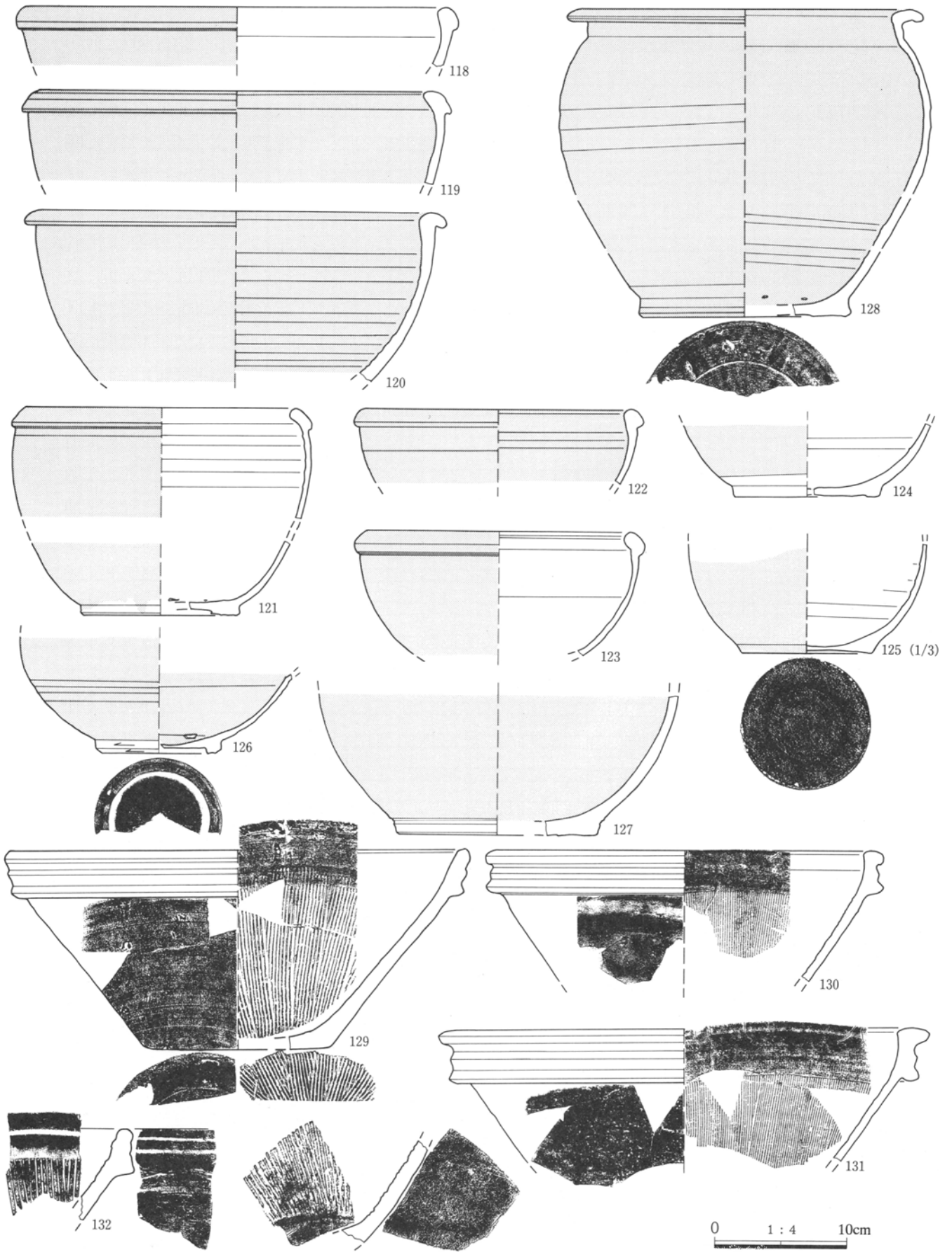


写真6 遺構外出土遺物(6)

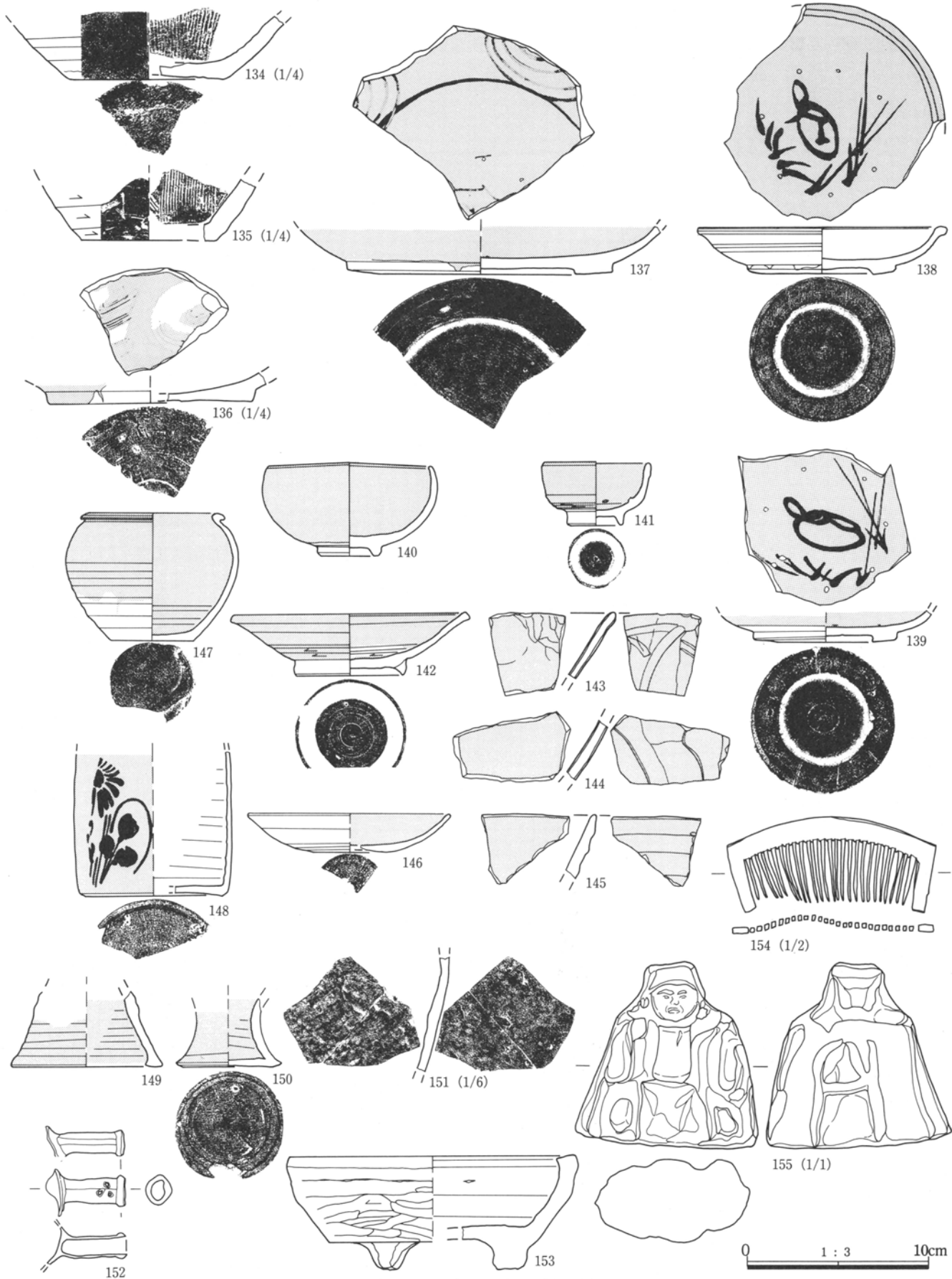


第28図 遺構外出土遺物 (7)

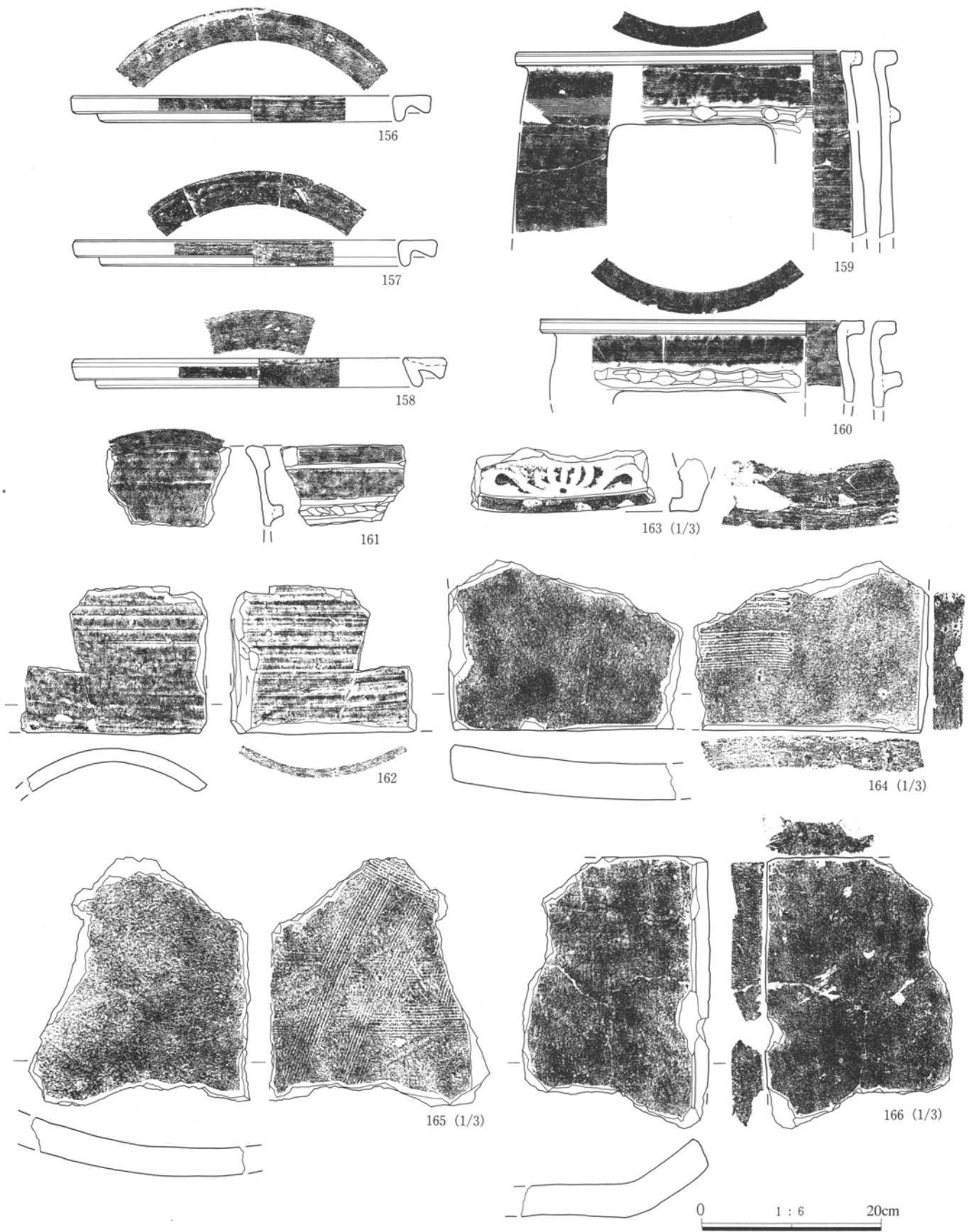
第4章 確認された遺構・遺物について



第29図 遺構外出土遺物 (8)



第30図 遺構外出土遺物 (9)

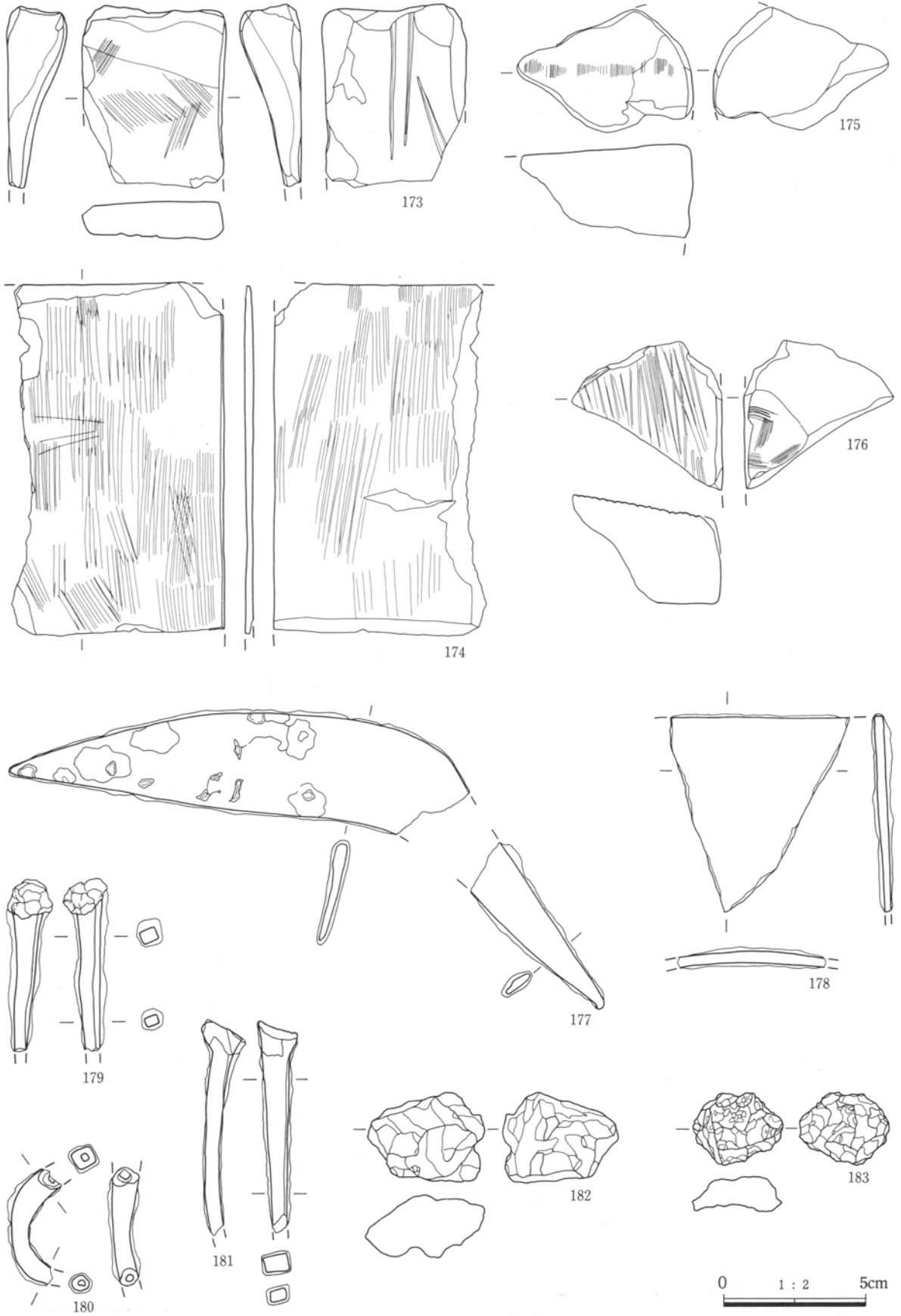


第31図 遺構外出土遺物 (10)



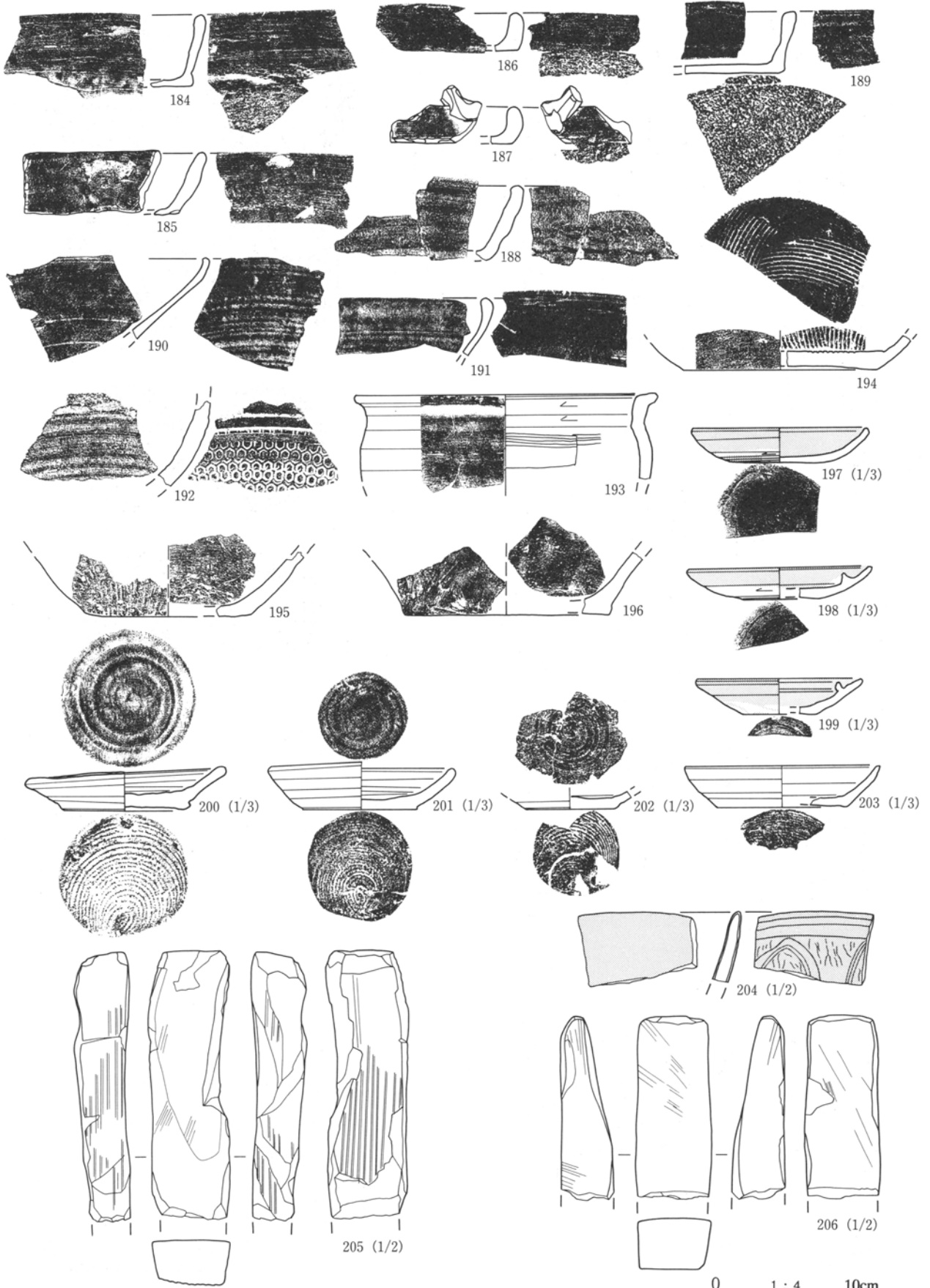
第32図 遺構外出土遺物 (11)

第4章 確認された遺構・遺物について

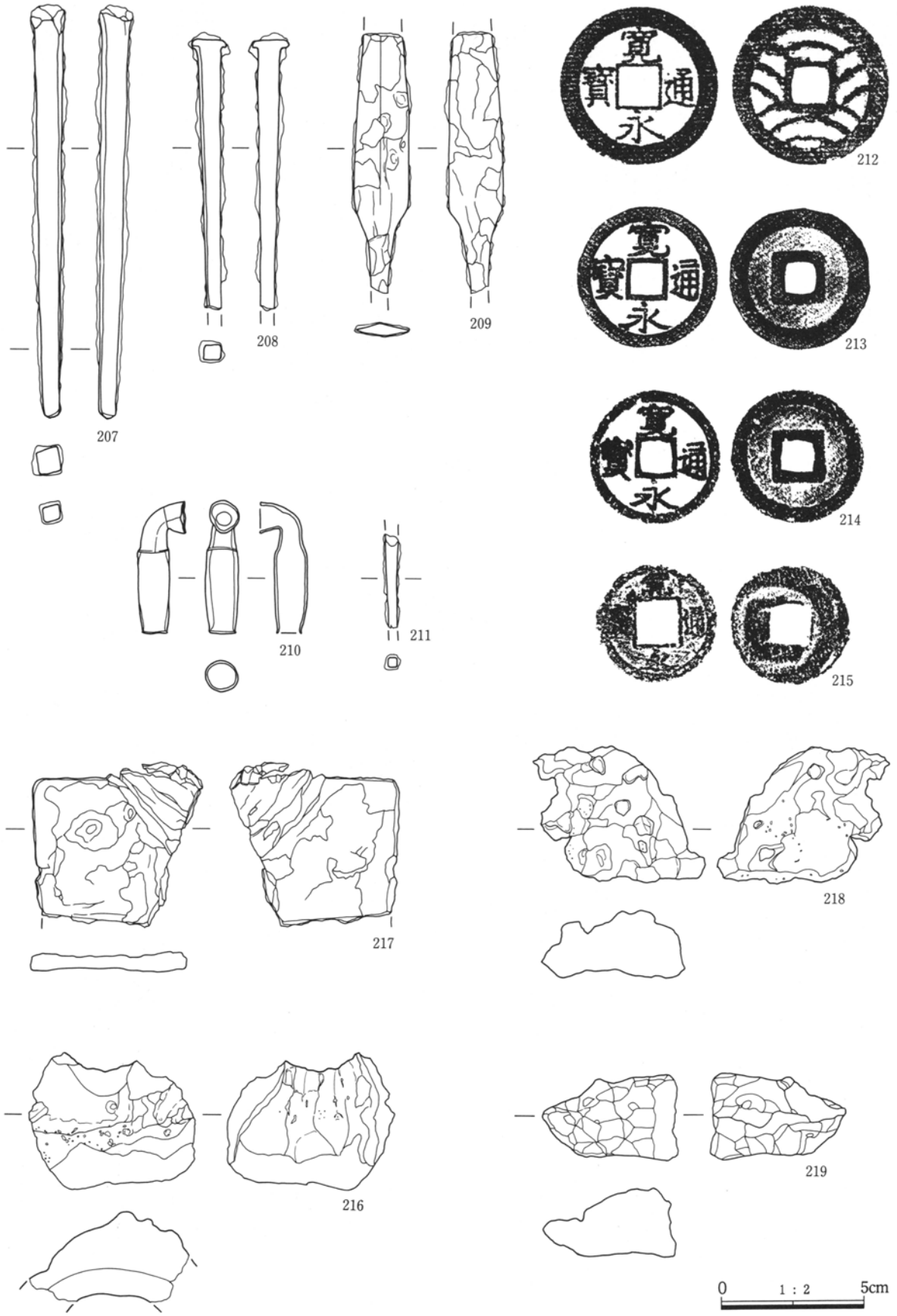


第33図 遺構外出土遺物 (12)

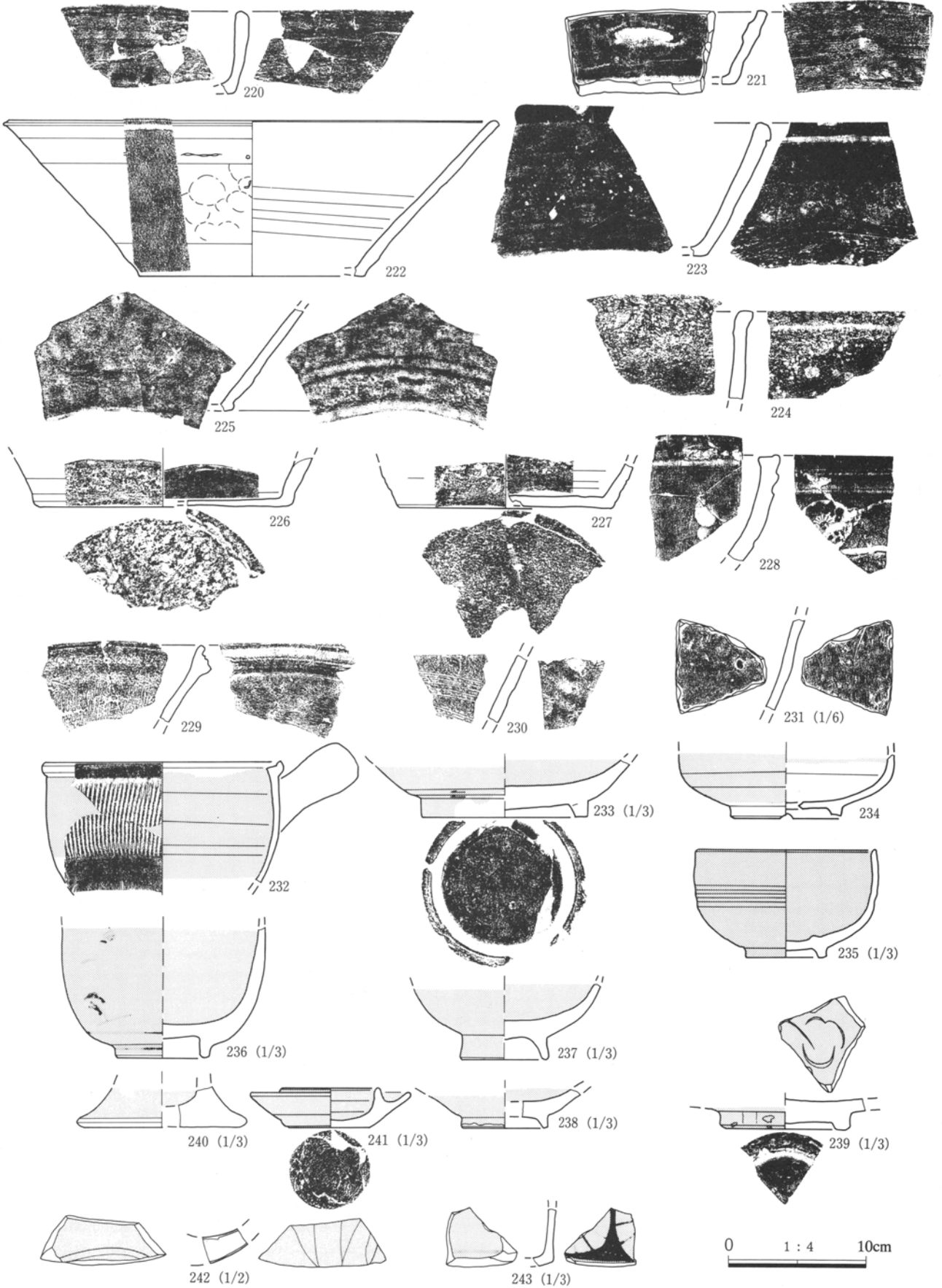




第34図 遺構外出土遺物 (13)

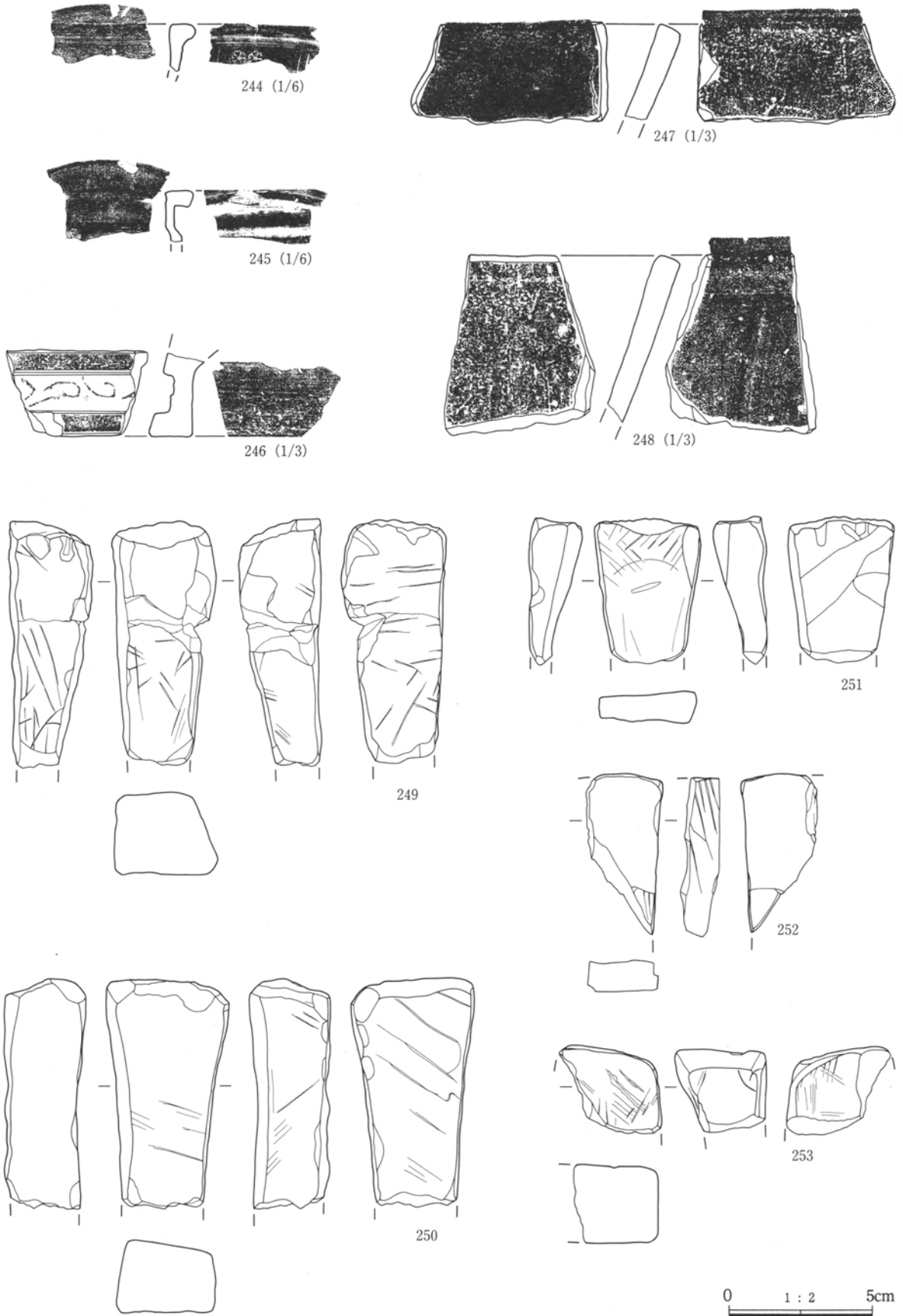


第35図 遺構外出土遺物 (14)

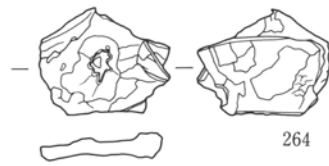
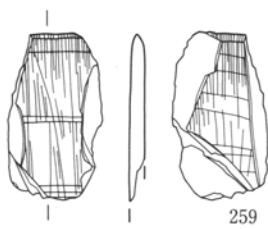
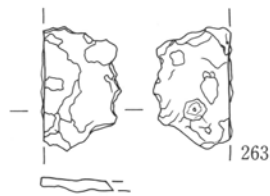
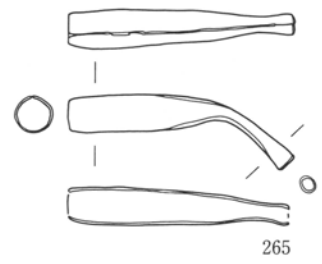
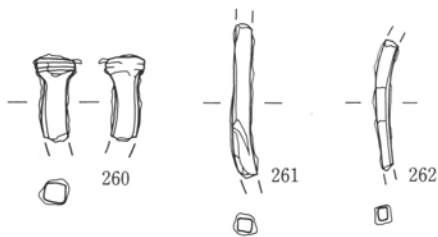
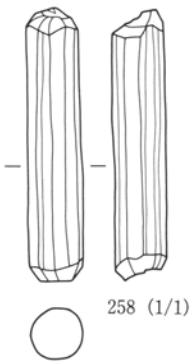
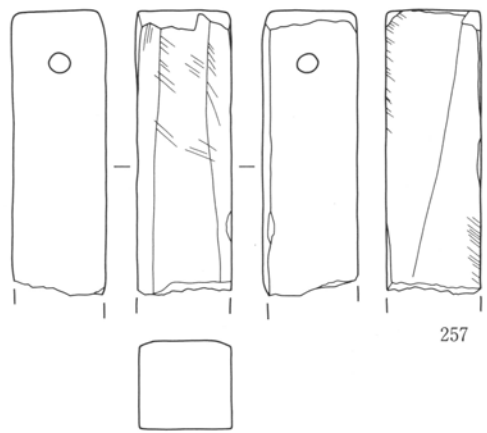
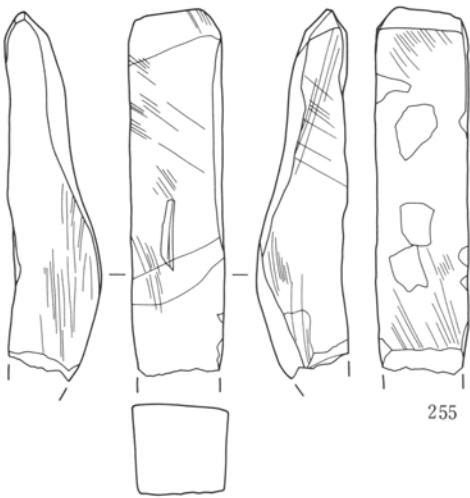
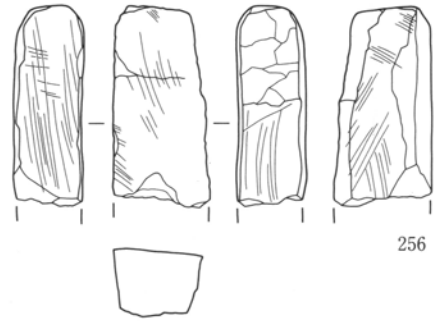
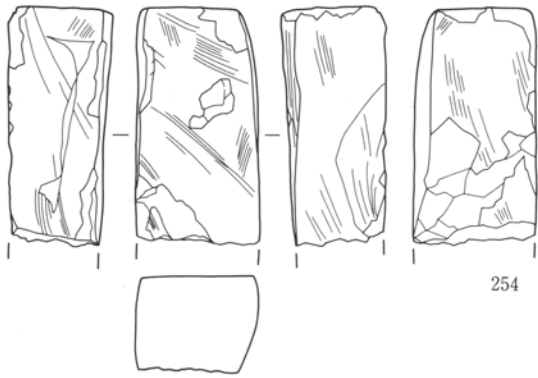


第36図 遺構外出土遺物 (15)

第4章 確認された遺構・遺物について

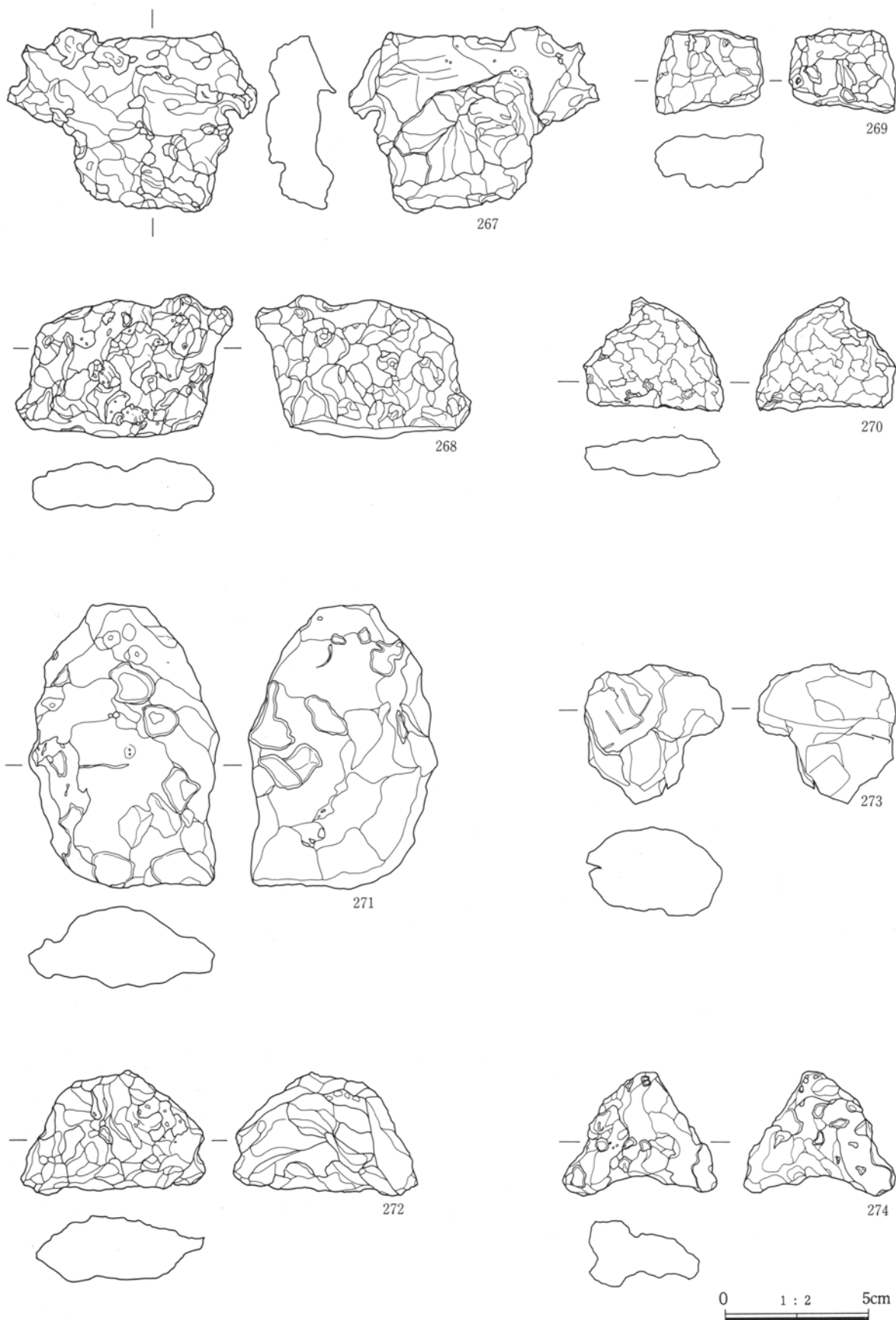


第37図 遺構外出土遺物 (16)

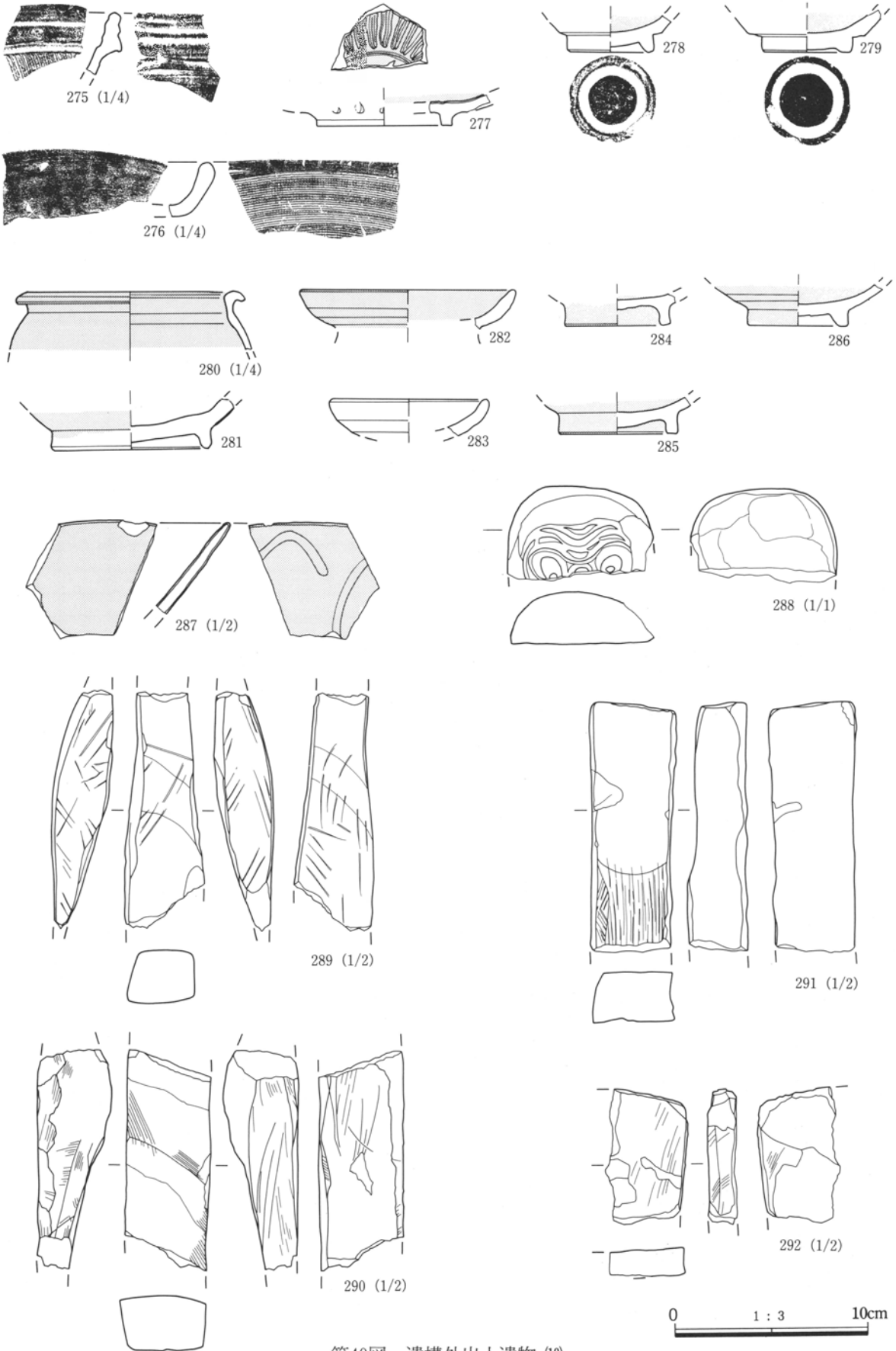


0 1 : 2 5cm

第38図 遺構外出土遺物 (17)

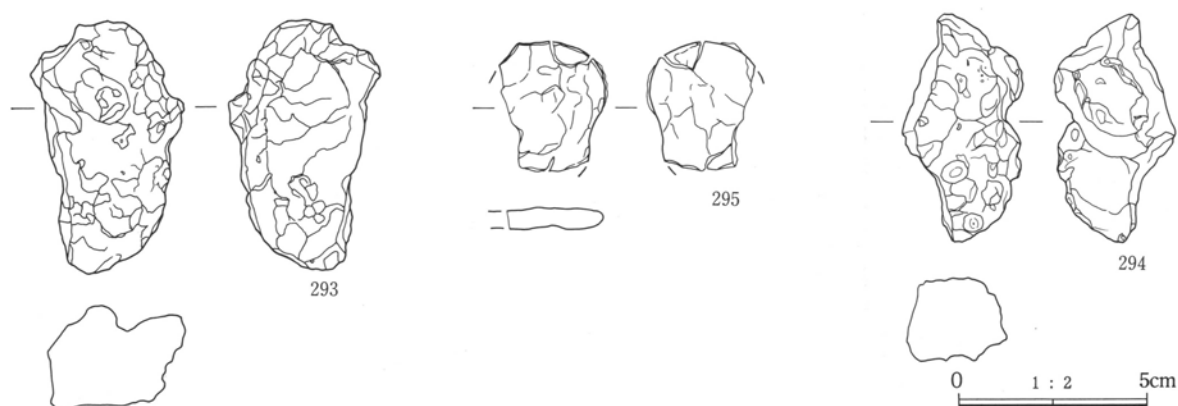


第39図 遺構外出土遺物 (18)



第40図 遺構外出土遺物 (19)

第4章 確認された遺構・遺物について



第41図 遺構外出土遺物 (20)

近世以降遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	出土位置	残存	形状・技法等の特徴
磁写真1-1	飯碗	A区覆土	4/5	型紙染付、青色。桐と笹文。見込に草花文。
磁写真1-2	飯碗	A区覆土	1/2	型紙染付、青色。桐と笹文。見込に草花文。
磁写真1-3	飯碗	A区覆土	2/3	型紙染付、青色。桐と笹文。見込に草花文。1・2と組。
磁写真1-4	飯碗	A区覆土	2/3	型紙染付、青色。桐と松。
磁写真1-5	飯碗	A区覆土	2/3	型紙染付、青色。桐と松。4と組。
磁写真1-6	飯碗	A区覆土	3/4	型紙染付、青色。富士と松草花文。見込に草花文。8・9と組。
磁写真1-7	飯碗	A区覆土	3/4	型紙染付、青色。草花文。見込に草花文。
磁写真1-8	飯碗	A区覆土	1/3	型紙染付、青色。富士と松草花文。見込に草花文。
磁写真1-9	飯碗	A区覆土	1/4	型紙染付、青色。富士と松草花文。見込に草花文。
磁写真2-10	飯碗	A区覆土	3/4	型紙染付、青色。桐と柏文。
磁写真2-11	飯碗	A区覆土	1/4	型紙染付、青色。桐と柏文。
磁写真2-12	飯碗	A区覆土	1/4	型紙染付、青色。桐と柏文。10・11と組。
磁写真2-13	飯碗	A区表土	口縁部片	型紙染付、青色。桐と柏文。
磁写真2-14	飯碗	D区表土	体部片	型紙染付、青色。青海波文。
磁写真2-15	飯碗	A区覆土	1/2	型紙染付、青色。富士、鶴、松文。
磁写真2-16	飯碗	A区覆土	1/3	型紙染付、藍色。草花文。
磁写真2-17	飯碗	A区覆土	1/3	型紙染付、濃青色。扇にあやめ文。
磁写真2-18	飯碗	A区覆土	1/4 底部	染付、濃青と濃緑色。見込に文様。
磁写真2-19	飯碗	A区覆土	1/3	染付、濃青と濃緑色。見込に文様。
磁写真2-20	飯碗	A区覆土	1/5 口縁	染付、濃青と濃緑色。見込に文様。18・19と組。
磁写真2-21	飯碗	A区覆土	1/4	染付、青色。瀬戸・美濃、明治。見込に文様。
磁写真2-22	飯碗	A区覆土	1/3	染付、青色。笹文様。焼き継ぎ。見込に文様。瀬戸・美濃、明治。
磁写真2-23	飯碗	A区覆土	1/4	染付、淡青色。笹文様。見込に文様。見込に文様。瀬戸・美濃、明治。22と組。
磁写真2-24	飯碗	A区覆土	1/3	染付、青色。外面に草木文様。見込に文様。
磁写真3-25	飯碗	A区覆土	1/3	染付、明青色。波に舟、松文。
磁写真3-26	飯碗	A区覆土	1/3	染付、明青色。波に舟、松文。
磁写真3-27	飯碗	A区覆土	1/3 底部	型紙染付、青色と金色。菊に唐草文。
磁写真3-28	飯碗	A区覆土	1/2	染付、淡青色。肥前、波佐見。くらわんか碗。高台に銘。
磁写真3-29	飯碗	D区覆土	口縁部片	断面は灰白色、淡青色。肥前、波佐見。コンニャク印判。くらわんか碗。
磁写真3-30	飯碗	D区覆土	1/8	断面は灰白色、淡青色、梅文様。肥前、波佐見。くらわんか碗。
磁写真3-31	飯碗	D区表土	1/6	断面は灰白色、淡青色。肥前、波佐見。
磁写真3-32	飯碗	D区覆土	底部片	断面は灰白色、淡青色。肥前、波佐見。
磁写真3-33	飯碗	A区覆土	1/4	染付、淡青色。肥前、波佐見。コンニャク印判。くらわんか碗。
磁写真3-34	飯碗	A区覆土	1/4	染付、淡青色。肥前、波佐見。くらわんか碗。
磁写真3-35	飯碗	A区覆土	1/4	染付。見込に文字が書かれるか。肥前、丸碗。
磁写真3-36	蓋	A区覆土	3/4	型紙染付、濃青色。波に舟・松文。25・26と組。
磁写真3-37	飯碗	A区覆土	1/3	染付、青色。外面に花模様の絵柄。瀬戸・美濃、端反碗。幕末。
磁写真3-38	飯碗	A区覆土	1/4 底部	染付、青色。焼き継ぎ「太」か。瀬戸・美濃。幕末～明治。
磁写真3-39	飯碗	A区覆土	底部片	染付、青色。外面の絵柄不明。肥前、丸碗。
磁写真3-40	飯碗	A区覆土	底部片	型紙染付、淡青色。見込に文字か。波佐見、広東碗。19C。



図版番号	器種	出土位置	残存	形状・技法等の特徴
磁写真3-41	湯飲み碗	D区覆土	口縁部片	断面は灰白色、淡青色。肥前、波佐見。二重網目文。
磁写真3-42	湯飲み碗	A区覆土	1/4	染付、淡青色。外面に渦巻模様。肥前。
磁写真3-43	飯碗	A区覆土	底部片	肥前、波佐見。高台に銘。
磁写真3-44	湯飲み碗	A区覆土	底部片	外面緑色。肥前、青磁染付。見込に文様。
磁写真3-45	飯碗	A区覆土	底部片	型紙染付、青色。絵柄は不明。
磁写真3-46	湯飲み碗	A区覆土	1/3	染付、青、黒色。山を表す絵柄。内面緑灰色。
磁写真3-47	碗	A区覆土	底部片	
磁写真4-48	湯飲み碗	B区覆土	ほぼ完形	型紙染付、青色。竹文様。
磁写真4-49	湯飲み碗	A区覆土	1/2	型紙染付、明青色。鳳凰と花の文様。高台に銘。
磁写真4-50	湯飲み碗	A区覆土	1/4	染付、淡青色。肥前。
磁写真4-51	湯飲み碗	A区覆土	1/6	染付、色絵。茶色で焼き継ぎ。花文様。
磁写真4-52	湯飲み碗	A区覆土	口縁部片	染付、淡青色。矢羽根文。肥前。
磁写真4-53	湯飲み碗	A区覆土	1/2	型紙染付、淡緑色。
磁写真4-54	湯飲み碗	A区覆土	1/2	型紙染付、緑色。3箇所に福文。
磁写真4-55	湯飲み碗	A区覆土	1/3	染付、青色。
磁写真4-56	湯飲み碗	A区覆土	ほぼ完形	型紙染付、濃青色。松と「壽福」。
磁写真4-57	湯飲み碗	A区覆土	1/2	型紙染付、濃青色。松と「壽福」。56と組。
磁写真4-58	湯飲み碗	A区覆土	1/4	染付、淡青色。菊花文。肥前、筒型碗。
磁写真4-59	湯飲み碗	A区覆土	1/4	染付、淡青色。菊花文、見込に文様。瀬戸・美濃、筒型碗。19C。
磁写真4-60	湯飲み碗	A区表土	1/8	染付、淡青色。山水、松葉文。筒型碗。
磁写真4-61	盃(猪口)	A区覆土	1/3	染付、濃青色。
磁写真4-62	盃(猪口)	A区覆土	4/5	型紙染付、濃青色。
磁写真4-63	盃(猪口)	A区覆土	1/2	型紙染付、濃青色。
磁写真4-64	盃(猪口)	A区覆土	1/3	型紙染付、濃青色。
磁写真4-65	盃(猪口)	A区覆土	ほぼ完形	型紙染付、濃青色。
磁写真4-66	盃(猪口)	A区覆土	4/5	型紙染付、濃青色。
磁写真4-67	盃(猪口)	A区覆土	1/3	型紙染付、濃青色。
磁写真4-68	盃(猪口)	A区覆土	1/2	型紙染付、茶色。ねずみにかぶら文。「日本東濃…」。
磁写真4-69	盃(猪口)	A区覆土	2/3	型紙染付、濃青色。
磁写真4-70	盃(猪口)	A区覆土	1/2	型紙染付、濃青色。62~67・69と組。
磁写真4-71	盃(猪口)	A区覆土	底部片	型紙染付、濃青色。
磁写真5-72	盃(猪口)	A区覆土	1/3	染付、緑色。
磁写真5-73	盃(猪口)	A区覆土	1/2	青磁染付、濃緑色。松の文様。
磁写真5-74	盃(猪口)	A区覆土	1/2	青磁染付、濃緑色。松の文様。73と組。
磁写真5-75	盃(猪口)	A区覆土	1/4	白磁。
磁写真5-76	盃(猪口)	A区覆土	1/2	染付、青色。高台に銘。
磁写真5-77	盃(猪口)	A区覆土	1/2	染付、青色。高台に銘。内面黒色で焼き継ぎ文字。
磁写真5-78	盃(猪口)	A区覆土	1/5 底部	染付、青色。見込に金色、焼き継ぎ。高台に銘。
磁写真5-79	盃(猪口)	A区覆土	1/8	青色。内面に鶴と竹文様。
磁写真5-80	盃(猪口)	A区覆土	1/8 底部	白磁。見込に型押し。
磁写真5-81	蕎麦猪口	A区覆土	底部片	染付、藍色。矢羽根文。見込に文様。高台に焼き継ぎ。
磁写真5-82	蕎麦猪口	A区覆土	1/5	染付、藍色。梅と竹文様。肥前。
磁写真5-83	なます皿	C区表土	底部片	染付、藍色。唐草文、草花文。見込に五弁花文。高台に銘。
磁写真5-84	なます皿	A区覆土	1/4	染付、藍色。唐草・菊花文。見込に手書き菊花文様。高台釉剥ぎ。
磁写真5-85	なます皿	A区覆土	1/5 底部	染付、濃青色。見込に型押し。
磁写真5-86	皿	C区表土	体~底部	型紙染付、青色。
磁写真5-87	鉢	A区覆土	1/5	染付、青色。草花文。焼き継ぎ。肥前。幕末。
磁写真5-88	小皿	A区覆土	1/4	型紙染付、濃青色。蝸牛文様。
磁写真5-89	急須	A区覆土	口縁部片	
磁写真6-90	なます皿	A区覆土	3/4	型紙染付、青色。鹿子文。見込に松竹梅。
磁写真6-91	なます皿	A区覆土	1/2	型紙染付、濃青色。鹿子文。見込に松竹梅。
磁写真6-92	皿	A区覆土	1/4	型紙染付、濃青色。鹿子・菊花文。見込に松竹梅。
磁写真6-93	段重	A区覆土	底部片	型紙染付、青・緑色。
磁写真6-94	皿	A区覆土	1/2	型紙染付、青色。青海波・菊花文。
磁写真6-95	鉢	A区覆土	1/3	染付、青色。山水文様。
磁写真6-96	鉢	A区覆土	2/3	型紙染付、濃青色。獅子と牡丹文。
磁写真6-97	徳利	A区覆土	1/4	型紙染付、青色。草花文。菱型文。
磁写真6-98	徳利	A区覆土	1/2	型紙染付、青色。鶴と雲文。

第4章 確認された遺構・遺物について

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)	胎土・色調	形状・技法等の特徴	備考
28図-99 PL.27	軟質陶器 内耳焙烙	A区覆土 口縁～底部片	口(36.7) 底(33.0) 高5.2	良・灰7.5Y 4/1	平底。内耳取付部は外面に指頭圧痕あり。 外面は煤が付着する。	
28図-100 PL.27	軟質陶器 内耳焙烙	A区覆土 口縁～底部片	高3.8	良・橙7.5YR 6/6	平底。外面は底面まで煤が付着する。	
28図-101 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 口縁～底部片	口(32.8) 底(32.2) 高2.8	良・にぶい橙 7.5YR 6/4	平底。外面は底面まで煤が付着する。	
28図-102 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 1/5	口30.6 底30.8 高3.4	良・橙5YR 7/6	丸底気味。外面口縁に煤が付着する。内面 は磨滅している。	
28図-103 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 口縁～底部片	口(33.0) 底(32.5) 高<2.6>	良・にぶい橙 2.5YR 6/4	丸底気味。内面は内耳部が剥離。	
28図-104 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 口縁～底部片	口(28.6) 底(28.2) 高<3.1>	良・にぶい黄橙 10YR 7/4	丸底気味。側面は外側へ緩く湾曲する。外 面に煤が付着する	
28図-105 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 1/6	口(31.4) 底32.0 高4.6	良・橙7.5YR 6/6	底部に穿孔1箇所確認、直径10mm。外面口 縁に煤が付着する。	
28図-106 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 口縁～底部片	口(30.0) 底(32.2) 高<3.3>	良・灰5Y 6/1	丸底。内面の一部に炭化物が付着する。	
28図-107 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 口縁～底部片	口(30.1) 底(28.8) 高3.0	良・にぶい褐 7.5YR 5/3	丸底。外面は煤が付着する。内面は炭化物 が付着する。	
28図-108 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 口縁～底部片	口(29.0) 底(25.0) 高4.8	良・灰5Y 5/1	平底。	
28図-109 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 口縁～底部片	口(26.6) 底(23.5) 高(4.2)	良・にぶい黄橙 10YR 6/4	平底。外面、口縁上端部に煤が付着する。	
28図-110 PL.27	軟質陶器 内耳焙烙	D区覆土 口縁～底部片	高<5.0>	良・灰黄2.5Y 7/2	平底。外面は指頭圧痕の上にヘラ削り。口 縁内外面に煤が付着する。	
28図-111 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 口縁～底部片	高<2.4>	良・にぶい黄橙 10YR 7/3	平底。底部外面は磨滅著しい。内面口縁の 一部は剥離。外面は煤が付着する。	
28図-112 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 口縁～底部片	高<2.7>	良・明赤褐 5YR 5/6	平底。外面は底面まで煤が付着、一部に剥 離が認められる。	
28図-113 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 口縁～底部片	高<2.6>	良・橙7.5YR 6/6	丸底気味。外面、底部内面に煤が付着する。	
28図-114 PL.27	軟質陶器 内耳焙烙	A区覆土 口縁～底部片	高<2.8>	良・にぶい橙 7.5YR 7/4	丸底気味。底部内面、内面口縁の一部に剥 離が認められる。	
28図-115 PL.27	軟質陶器 焙烙	A区覆土 口縁～底部片	高<3.4>	良・にぶい橙 7.5YR 6/4	丸底気味。外面口縁に指頭圧痕あり。	
28図-116 PL.27	軟質陶器 内耳鍋	A区覆土 底部片	底(19.0) 高<3.2>	良・淡黄2.5Y 8/3	平底。内外面の一部は焼成時の不完全燃焼 により黒灰色。	
28図-117 PL.27	陶器 鉢	A区覆土 上半部・底部片	口(22.0) 底(15.0) 高(13.2)	良・浅黄2.5Y 7/3	平底。外面タテ平行叩き目の後ヘラミガキ を施す。	
29図-118 PL.27	陶器 鉢	A区覆土 口縁部片	口(33.4) 高<4.4>	良・断面灰白 2.5Y 8/1	内外面に施釉。外面はさらに緑の施釉。	瀬戸・ 美濃
29図-119 PL.27	陶器 鉢	A区覆土 口縁部片	口(16.2) 高<7.0>	良・断面淡黄 7.5Y 8/3	内外面に施釉。内面は釉の一部が剥離。外 面はさらに緑の施釉。	
29図-120 PL.27	陶器 甕	A区覆土 上半部片	口(32.0) 高<12.7>	良・断面淡黄 5Y 8/3	内外面に施釉。外面はさらに緑の施釉。	瀬戸・ 美濃
29図-121 PL.27	陶器 鉢	A区覆土 口縁・底部片	口(22.7) 底(12.0) 高(16.0)	良・灰オリーブ 7.5Y 6/2	外面高台部以外の全面に施釉。高台部は右 回転のヘラ削り。底部内面に重焼痕。	益子
29図-122 PL.28	陶器 鉢	A区覆土 口縁部片	口(31.8) 高<5.6>	良・断面浅黄橙 10YR 8/4	内外面に施釉、光沢あり。	生産地 不詳
29図-123 PL.28	陶器 鉢	A区覆土 口縁部片	口(21.8) 高<9.4>	良・断面淡黄 5Y 8/3	内外面に施釉、光沢あり。釉はオリーブ黄 5Y 6/4。	益子
29図-124 PL.28	陶器 鉢	A区覆土 底部片	底(11.0) 高<5.6>	良・断面灰白 5Y 8/2	外面下部以外の全面施釉、内面は剥離。釉 は灰オリーブ黄5Y 5/3	瀬戸・ 美濃
29図-125 PL.28	陶器 鉢	A区覆土 底部片	底(7.3) 高<8.2>	良・断面灰白 5Y 7/2	底部外面以外の全面施釉、内面は剥離。全 体に貫入。釉はオリーブ黄5Y 6/3。	
29図-126 PL.28	陶器 片口鉢	A区覆土 下半部片	底(9.4) 高<8.6>	良・にぶい黄橙 10YR 7/3	外面高台部以外の全面に施釉。底部内面に 重焼痕。全体に貫入。釉はオリーブ黄5Y 6/3。	
29図-127 PL.28	陶器 甕	A区覆土 下半部片	底(15.1) 高<10.2>	良・にぶい黄橙 10YR 7/3	底部外面以外の全面に施釉、内面は重焼痕。	益子
29図-128 PL.28	陶器 甕	A区覆土 口縁・底部片	口(40.0) 底(23.8) 高(34.6)	良・にぶい赤褐 2.5YR 4/3	底部外面以外の全面施釉、外面はさらに黒 の施釉。内面褐色、底面オリーブ黒、重焼 痕。	

第2節 中世以降

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)	胎土・色調	形状・技法等の特徴	備考
29図-129 PL.28	陶器 鉢	A区覆土 1/4	口(34.2) 底(14.2) 高15.0	良・にぶい黄橙 10YR 7/3	底部外面以外の全面施釉、内面下部は剥離。 釉は暗赤褐5YR 3/3。	益子
29図-130 PL.29	陶器 鉢	A区覆土 口縁部片	口(30.0) 高<7.9>	良・褐灰7.5YR 4/1	口縁内面から外面胴部にかけて施釉。釉は 暗赤褐2.5YR 3/3。	益子
29図-131 PL.29	陶器 鉢	A区覆土 口縁部片	口(37.0) 高<10.0>	良・褐灰10YR 4/1	口縁内面から外面胴部にかけて施釉。釉は 暗赤褐2.5YR 3/3。	益子
29図-132 PL.29	陶器 鉢	A区覆土 口縁部片	厚1.1	良・褐灰7.5YR 4/2	白色粒を多混。	堺・ 明石
29図-133 PL.29	陶器 鉢	A区覆土 胴部片	厚1.0	良・にぶい赤褐 2.5YR 5/4	内外面に薄く施釉、剥離か。内面使用部は 掘り込み深く間隔も広い。釉は褐灰5YR 4/2。	堺・ 明石
30図-134 PL.29	陶器 鉢	A区覆土 底部片	底(12.0) 高<4.6>	良・にぶい赤褐 5YR 5/4	内面磨滅著しい。白色粒を多混。	堺・ 明石
30図-135 PL.29	陶器 鉢	A区 X263-Y 993G 底部片	底(10.0) 高<4.3>	良・断面にぶい黄橙 10YR 7/3	平底。内外面に施釉。内面磨滅著しい。外 面は剥離が認められる。釉は黒褐7.5YR 3/1。	瀬戸・ 美濃
30図-136 PL.29	陶器 鉢	A区覆土 底部片	底(15.0) 高<2.0>	良・灰色2.5Y 8/2	内外面に施釉。底部外面は釉剥離、回転を 伴うヘラ削り。釉は灰白7.5Y 7/2。馬の目 皿。	益子か
30図-137 PL.29	陶器 皿	A区覆土 底部片	底(19.6) 高<3.4>	良・断面にぶい黄橙 10YR 7/3	外面高台以外の全面施釉。底部内面に重焼 痕。馬の目皿。	益子
30図-138 PL.29	陶器 皿	A区覆土 1/2	口(13.7) 底7.8 高2.5	良・灰黄2.5Y 7/2	外面高台以外の全面施釉。底部内面に重焼 痕7箇所、染付は亀の絵柄か。釉は灰5Y 7/2。	益子
30図-139 PL.29	陶器 皿	A区覆土 1/3 口縁欠損	底7.9 高<1.6>	良・断面灰白 7.5Y 7/1	外面高台以外の全面施釉。底部内面に重焼 痕7箇所、染付は亀の絵柄か。	益子
30図-140 PL.29	陶器 碗	A区覆土 1/2	口(9.2) 底(3.2) 高5.2	良・灰白7.5Y 7/2	外面高台以外の全面施釉。全体に貫入。底 部外面は左回転のヘラ削り。	生産地 不詳 江戸
30図-141 PL.30	陶器 碗	A区覆土 ほぼ完形	口6.0 底3.1 高3.5	良・灰白2.5Y 8/2	内外面施釉、外面下部は剥離か。釉は浅黄 5Y 7/3、さらに薄緑。全体貫入。重焼痕3 箇所。	瀬戸・ 美濃
30図-142 PL.30	陶器 皿	A区覆土 1/2	口13.2 底6.2 高3.4	良・灰白7.5Y 8/2	外面高台以外の全面施釉、内面下部の一部 は剥離か。底部外面は左回転のヘラ削り。	美濃 江戸時 代
30図-143 PL.30	磁器 碗	A区 X256-Y 976G 口縁部片	厚3.5	良・灰黄2.5Y 7/2	釉は黄褐2.5Y 5/4。光沢あり。I5b類。	竜泉窯 系青磁 碗
30図-144 PL.30	磁器 碗	A区覆土 体部片	厚4.5	良・断面灰白 2.5Y 7/1	釉はオリーブ灰5GY 6/1。内外面に傷あ り。I5b類。	竜泉窯 系青磁 碗
30図-145 PL.30	陶器 皿	A区覆土 口縁部片	厚0.6	良・灰白5Y 7/1	内外面に施釉。釉は灰白5Y 7/2。外面の 一部はさらに緑の施釉。全体に貫入。	古瀬戸 の大皿 か
30図-146 PL.30	陶器 明皿	A区覆土 1/5	口(11.2) 底(4.0) 高2.1	良・灰白10YR 8/2	外面上半部、内面に施釉。外面下半部は剥 離か。釉は灰白2.5Y 7/1。内面に貫入。	
30図-147 PL.29	陶器 小壺	A区覆土 2/3	口(8.0) 底4.5 高7.0	良・にぶい橙 7.5YR 7/4	轆轤成形、右回転。内外面に施釉。釉は灰 白7.5Y 7/2。	益子
30図-148 PL.29	陶器 德利	A区覆土 下半部片	底(8.2) 高<7.8>	良・断面灰白 7.5Y 8/2	外面に施釉。染付は花柄。底部外面は右回 転のヘラ削り。	
30図-149 PL.29	陶器 明具	A区覆土 台部片	底8.5 高<4.1>	良・灰白 5Y 8/2	内外面に施釉。外面の一部は濃く塗り重ね られる。内面光沢あり。釉はにぶい橙10YR 7/5	瀬戸・ 美濃 江戸
30図-150 PL.29	陶器 ひょう	A区覆土 底部片	底5.8 高<3.7>	良・断面灰白 7.5Y 8/2	内外面に施釉。外面下部、内面は塗りむ らあり。底部外面は右回転のヘラ削り。	生産地 不詳
30図-151 PL.30	陶器 壺	A区覆土 胴部片	厚1.1	良・断面にぶい赤橙 10R 6/4	内外面施釉。外面灰オリーブ5Y 6/2、黒 5Y 2/1。内面灰赤10R5/2、灰白5Y 7/2、 オリーブ黒5Y 3/1	常滑 幕末 ~明治
30図-152 PL.30	陶器 きゆうす	A区覆土 把手部片	把手長3.5	良・灰褐5YR 4/2	端部に花びらをあしらった模様の孔があけ られる。全体に布目が施される。	
30図-153 PL.30	軟質陶器 鉢	A区表土 1/8	口(15.8) 底(11.4) 高6.2	良・灰黄2.5Y 7/2	底部内面に押型あり、花びら模様か。3足 か。	
30図-154 PL.30	くし	A区覆土 完形	長3.1 幅7.7 厚0.2		上端部、右側側面に亀裂が入る。	
30図-155 PL.30	土製品 玩具	A区覆土 完形	幅3.4 高3.4 厚1.5	良・橙 5YR 6/6・酸化	型合わせ。底面は内側へ窪んでいる。	
31図-156 PL.30	軟質陶器 カマ輪	A区覆土 破片	口(32.6) 底(40.2) 高2.9	良・にぶい黄橙 10YR 7/3	内外面の全体に横撫で。一部に煤の付着が 見られる。	
31図-157 PL.30	軟質陶器 カマ輪	A区覆土 破片	口(33.4) 底(40.6) 高2.8	良・橙7.5YR 7/6	内外面の全体に横撫で。	
31図-158 PL.30	軟質陶器 カマ輪	A区覆土 破片	口(35.8) 底(41.8) 高3.2	良・橙5YR 6/6・ 明黄橙10YR 7/4	外面全体に横撫で。外面に接合痕あり。	

第4章 確認された遺構・遺物について

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)	胎土・色調	形状・技法等の特徴	備考
31図-159 PL.31	軟質陶器 甕	A区覆土 口縁~胴部片	口(37.0) 高<20.5>	良・浅黄2.5Y 7/3	内面横撫で。外面上部横方向のハケ目一段。一部に煤付着。焚口上部に庇状の凸帯1箇所。	
31図-160 PL.31	軟質陶器 甕	A区覆土 口縁部片	口(36.8) 高<9.0>	良・浅黄2.5Y 7/4	内面全体に横撫で。内外面、口縁の一部に煤が付着。焚口上部に庇状の凸帯1箇所。	
31図-161 PL.30	軟質陶器 甕	A区覆土 口縁部片	厚0.8 高<9.0>	良・橙5YR 6/6	内外面全体に横撫で。外面口縁の一部に剝離が認められる。	
31図-162 PL.30	軟質陶器 甕	A区覆土 破片	厚1.6	良・灰	内外面全体に横撫で。内面に輪積痕が残存する。	
31図-163 PL.30	瓦 軒平瓦	A区覆土 口縁部片	厚1.8	良・黄灰2.5Y 6/1	内外面全体に横撫で。内面の一部に剝離が認められる。	
31図-164 PL.31	瓦 平瓦	A区覆土 破片	厚2.0	良・灰黄2.5Y 7/2	表、裏、長辺側面に撫で。櫛状工具による模様が施される。	
31図-165 PL.31	瓦 平瓦	A区覆土 破片	厚1.5	良・灰7.5Y 5/1	袈裟懸けに櫛状工具による模様が施される。端部は4面とも欠損。	
31図-166 PL.31	瓦 平瓦	A区覆土 破片	厚1.8	良・灰N5/	表面は縦方向に撫で。	
34図-184 PL.33	軟質陶器 焙烙	B区表土 口縁部片	高<5.1>	良・にぶい黄橙 10YR 7/3	平底。側面に煤が付着する。内部側面は焼成時の不完全燃焼で暗灰色。	
34図-185 PL.33	軟質陶器 焙烙	B区覆土 口縁部片	高<4.4>	良・にぶい橙 7.5YR 7/3	平底。側面に煤が付着。内部は内耳の剝離痕が上下2箇所。	
34図-186 PL.33	軟質陶器 焙烙	B区表土 口縁部片	高<2.7>	良・にぶい黄橙 10YR 7/2	丸底気味。口縁先端に燻し状に煤が付着する。	
34図-187 PL.33	軟質陶器 焙烙	B区覆土 口縁部片	高<2.6>	良・にぶい橙 7.5YR 6/4	平底。側面に煤が付着する。耳部接合部分に剝離が認められる。	
34図-188 PL.33	軟質陶器 焙烙	B区覆土 口縁部片	高<5.6>	良・にぶい黄橙 10YR 7/3	平底か。底部外面は燻し状に煤が付着する。内部側面は焼成時の不完全燃焼で暗灰色。	
34図-189 PL.33	軟質陶器 焙烙	B区表土 口縁~底部片	高<4.4>	良・にぶい黄橙 10YR 7/3	平底。側面に燻し状に煤が付着する。	
34図-190 PL.33	軟質陶器 鉢	B区覆土 口縁部片	厚0.5	良・暗灰N3/	内外面全体に焼成時の煤が付着する。	
34図-191 PL.33	軟質陶器 鉢	B区表土 口縁部片	厚0.4	良・暗灰N3/	内外面に焼成時の煤が付着する。	
34図-192 PL.33	陶器 鉢	B区表土 胴部片	厚1.2	良・灰黄2.5Y 7/2	外面はミガキを施し亀甲模様を押す。内面は横撫で、磨滅している。	
34図-193 PL.33	陶器 甕	B区覆土 口縁部片	口(22.0) 高<6.2>	良・にぶい橙 7.5YR 7/3	内外面上部、口唇部の一部に燻し状に煤が付着。断面は焼成時の不完全燃焼で暗灰色。	江戸時代
34図-194 PL.33	陶器 搦鉢	B区表土 底部片	底(13.8) 高<2.4>	良・にぶい赤褐 2.5YR 5/3	底部外面は砂底。全体に磨滅か。	堺・明石
34図-195 PL.33	陶器 鉢	B区表土 底部片	底(12.0) 高<4.5>	良・にぶい黄橙 10YR 6/3	全体に磨滅、外面は剝離が認められる。	中世
34図-196 PL.33	陶器 鉢	B区 X245-Y 902G 底部片	底(15.0) 高<4.6>	良・にぶい褐 7.5YR 5/3	平底。内外面に施釉、釉はにぶい褐7.5YR 5/4。内面は磨滅。	
34図-197 PL.33	陶器 灯明皿	B区覆土 1/4	口(9.5) 底(3.4) 高1.9	良・灰黄2.5YR 6/2	底部外面は右回転のヘラ削り、底部内面に重焼痕。	瀬戸・美濃 江戸
34図-198 PL.33	陶器 灯明受皿	B区覆土 1/8	口(10.0) 底(4.0) 高1.7	良・灰黄2.5YR 6/2	外面上部、内面全面に施釉。釉は黒褐7.5YR 3/2。	瀬戸・美濃 江戸
34図-199 PL.33	陶器 灯明受皿	B区表土 1/4	口(8.9) 底(4.0) 高1.9	良・黄灰2.5YR 6/1	底部外面に回転を伴うヘラ削り、右回転か。外面上半部、内面全面に施釉。	瀬戸・美濃 江戸
34図-200 PL.33	かわらけ	B区表土 完形	口10.8 底7.0 高2.3	良・にぶい橙 7.5YR 7/4	轆轤成形、左回転。底部回転糸切り。内部底面に渦状の指あて痕。形状は大きく歪む。	
34図-201 PL.33	かわらけ	B区表土 ほぼ完形	口10.1 底3.2 高2.5	良・にぶい橙 7.5YR 7/4	轆轤成形、左回転。底部回転糸切り。内部底面に渦状の指あて痕。形状に歪みあり。	
34図-202 PL.33	かわらけ	B区表土 底部片	底5.0 高<1.2>	良・にぶい橙 7.5YR 7/4	轆轤成形、左回転。底部回転糸切り。内部底面に渦状の指あて痕。	
34図-203 PL.33	かわらけ	B区覆土 1/5	口(10.4) 底(7.0) 高2.2	良・にぶい橙 7.5YR 7/4	轆轤成形、左回転。底部回転糸切り。	
34図-204 PL.33	磁器 碗	B区覆土 口縁部片	厚0.6	良・灰白5Y 7/2	釉はにぶい橙7.5Y 7/2。	中世
35図-216 PL.34	土製品 羽口	B区覆土 破片	先端内径3.0 長<4.7>	良・黄灰2.5Y 6/1	外面は黒色のガラス質及び灰白色の気孔。内面は赤変している。	

第2節 中世以降

挿図番号 PL.番号	種 別 器 種	出土位置 残 存	度 目(cm)	胎土・色調	形 状・技法等の特徴	備 考
36図-220 PL.35	軟質陶器 焙 烙	C区表土 口縁部片	高<5.9>	良・黄灰2.5Y 4/1	断面全体に焼成時の不完全燃焼による黒色。	
36図-221 PL.35	軟質陶器 焙 烙	C区表土 口縁部片	高<5.3>	良・黄灰2.5Y 4/1	外部側面は全体に焦し状に煤が付着。内部側面に剝離痕。	
36図-222 PL.35	軟質陶器 鉢	C区表土 1/8	口(36.0) 底(16.3) 高11.4	良・にぶい黄2.5Y 6/4・黄灰2.5Y 4/1	外面口縁の端部以外の全体に焦し状に煤が付着する。	
36図-223 PL.35	軟質陶器 内耳鍋	C区表土 口縁部片	高<9.6>	良・灰7.5Y 4/1	外面下部はヘラ削り痕著しい。断面は焼成時の不完全燃焼で暗灰色。	
36図-224 PL.35	軟質陶器 器種不明	C区表土 口縁部片	厚0.9 高<6.3>	良・にぶい黄橙 10YR 6/4	内外面ともに剝離著しい。一部に撫での痕跡が残存する。	幕末 ～明治
36図-225 PL.35	軟質陶器 内耳鍋	C区表土 胴部片	厚0.7 高<7.3>	良・にぶい黄2.5Y 6/3・黄灰2.5Y 4/1	外面は全体に焦し状に煤が著しく付着する。	
36図-226 PL.35	軟質陶器 焙 烙	C区表土 胴～底部片	底(19.0) 高<3.5>	良・灰黄2.5Y 6/2・ 暗灰黄2.5Y 4/2	外面全体に煤が著しく付着する。	
36図-227 PL.35	軟質陶器 内耳鍋	C区表土 胴～底部片	底(15.5) 高<3.2>	良・にぶい黄橙 10YR 7/4	外部側面は磨滅著しい。	
36図-228 PL.35	軟質陶器 鉢	C区表土 口縁部片	厚1.2 高<7.5>	良・にぶい橙 7.5YR 6/4	断面は焼成時の不完全燃焼で暗灰色。内面口縁から胴上位に煤付着。外面花紋印。	
36図-229 PL.35	陶 器 器 鉢	C区表土 口縁部片	厚0.7 高<5.7>	良・灰褐7.5YR 5/2	内外面全体に施釉。ほぼ全体に白色粒を含み粗雑な感じを受ける。	丹波
36図-230 PL.35	陶 器 器 鉢	C区表土 胴部片	厚0.9	良・にぶい橙 7.5YR 6/4	内面に5本一単位のハケ目を施す。外面中位に指頭庄痕らしき窪みあり。	丹波
36図-231 PL.35	陶 器 器 甕	C区表土 胴部片	厚1.0	良・明赤褐5 YR 5/6	外面はヘラ削り。内面はヘラ撫で、胎土に小石が含まれる。	
36図-232 PL.35	陶 器 片手鍋	C区表土 口縁～胴部片	口(17.5) 高<8.6>	良・浅黄2.5Y 7/3	内外面体部に施釉、褐色。外面口縁、胴下部に煤付着。	
36図-233 PL.36	陶 器 器 碗	C区表土 底部片	底(9.0) 高<3.1>	良・にぶい黄橙 10YR 7/3	底部外面は右回転のヘラ削り。体部内外面に施釉、黄褐色。底部内面に気泡。	瀬戸・ 美濃
36図-234 PL.35	陶 器 植木鉢	C区表土 胴～底部片	底(8.0) 高<3.5>	良・橙10YR 4/6	体部内外面に施釉、灰白色。断面は焼成時の不完全燃焼で暗灰色	生産地 不詳
36図-235 PL.36	陶 器 器 碗	C区表土 1/3	口(9.6) 底4.4 高4.8	良・浅黄橙10YR 8/3	内外面に施釉、灰白色、褐色。高台端部の釉は剝離、気泡多混。	瀬戸・ 美濃腰 錆碗
36図-236 PL.36	陶 器 器 碗	C区表土 胴～底部片	底(5.0) 高<7.0>	良・オリーブ灰 2.5GY 6/1	内外面全体に施釉、高台端部は剝離、貫入が認められる。	肥前 陶胎染 付
36図-237 PL.36	陶 器 器 碗	C区表土 胴～底部片	底(4.8) 高<4.1>	良・浅黄2.5Y 7/3	内外面全体に施釉、高台端部は剝離、貫入が認められる。	肥前 呉器手 碗
36図-238 PL.36	磁 器 器 碗	C区表土 底部片	底(3.6) 高<2.1>	良・断面浅黄 2.5Y 7/3	内外面に施釉。外面釉は黒褐5 YR 2/1。内面は光沢のある透明釉。	中世
36図-239 PL.36	磁 器 器 皿	C区表土 底部片	底(7.0) 高<1.7>	良・断面灰白 7.5Y 7/1	釉はオリーブ灰5 GY 6/1。高台部はにぶい黄橙。	竜泉窯 系青磁 皿
36図-240 PL.35	陶 器 梅 瓶	C区表土 底部片	底(9.2) 高<2.3>	良・断面灰白5Y 7/2	釉はオリーブ黄5 Y 6/3。底部回転糸切り。	古瀬戸
36図-241 PL.35	陶 器 灯明受皿	C区表土 2/3	口8.6 底4.5 高2.1	良・橙5YR 6/6	轆轤成形、右回転。内外面全体に施釉も剝離著しい。施釉赤褐。土師質。	
36図-242 PL.35	磁 器 器 碗	C区表土 体部片	厚0.8	良・断面灰白10Y 7/1	釉はオリーブ灰10Y 6/2。I5b類。	竜泉窯 系青磁 碗
36図-243 PL.35	陶 器 湯 飲 碗	C区表土 体部片	厚0.4	良・淡黄2.5Y 8/3	内外面に施釉、淡黄色、貫入が認められる。	瀬戸・ 美濃筒 型碗
37図-244 PL.36	陶 器 火 鉢	C区表土 口縁部片	厚1.0 高<5.5>	良・にぶい橙 7.5YR 7/4	外面中位から下位、内面口縁に煤が付着する。	
37図-245 PL.36	陶 器 火 鉢	C区表土 口縁部片	厚0.9 高<5.5>	良・黒褐10YR 3/2	内外面全体、口縁上面に煤が付着する。	
37図-246 PL.36	瓦 軒平瓦	C区表土 破 片	厚1.6	灰黄2.5Y 7/2	外面は磨滅している。	
37図-247 PL.36	瓦	C区表土 破 片	厚1.2	良・浅黄2.5Y 7/3	内外面ともに磨滅著しい。断面は焼成時の不完全燃焼で暗灰色。	
37図-248 PL.36	瓦	C区表土 破 片	厚1.2	良・灰黄2.5Y 7/2	内外面ともに磨滅著しい。断面は焼成時の不完全燃焼で暗灰色。	
40図-275 PL.38	陶 器 播 鉢	D区表土 口縁部片	厚0.7 高<4.3>	良・にぶい赤褐 2.5YR 5/4	口縁部に施釉。白色粒を多量に含む。	堺・ 明石

第4章 確認された遺構・遺物について

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)	胎土・色調	形状・技法等の特徴	備考
40図-276 PL.38	軟質陶器 焙	D区覆土 口縁部片	高<3.8>	良・ぶい黄橙 10YR 7/3	内面の一部に剥離が認められる。外面は横方向に回転伴うハケ目。	
40図-277 PL.38	陶器 器皿	D区覆土 底部片	底(7.0) 高<1.6>	良・断面灰白5Y 8/2	内面に施釉。外面底部に窪みあり。	
40図-278 PL.38	陶器 碗	D区表土 底部片	底(4.5) 高<1.8>	良・断面灰白5Y 8/2	内面に施釉、黒褐7.5YR 3/2。	瀬戸・美濃
40図-279 PL.38	陶器 鉢	D区覆土 底部片	底(4.7) 高<2.1>	良・断面灰白 7.5Y 8/2	内外面に施釉、黒褐7.5YR 2/2。	瀬戸・美濃
40図-280 PL.38	陶器 甕	D区覆土 口縁部片	口16.0 高<4.1>	良・浅黄橙10YR 8/3	内外面に施釉、褐7.5YR 4/4。一部に剥離が認められる。	益子
40図-281 PL.38	陶器 碗	D区覆土 1/4 底部片	底8.0 高<3.5>	良・断面灰黄 10YR 6/2	外面に施釉、剥離著しい。内面は一部に釉の痕跡をとどめるも殆ど剥離。	生産地不詳
40図-282 PL.38	陶器 器皿	D区覆土 口縁部片	口(11.2) 高<2.0>	良・断面灰白2.5Y 8/2	内外面に施釉、一部に剥離、貫入が認められる。	瀬戸・美濃志野皿
40図-283 PL.38	陶器 灯明皿	D区 X321- Y517G 口縁片	口(8.3) 高<1.9>	良・浅黄橙10YR 8/3	口唇部に煤が僅かに附着する。	
40図-284 PL.38	陶器 碗	D区表土 底部片	底(5.5) 高<1.7>	良・断面灰白7.5Y 8/2	内外面に施釉、暗褐7.5YR 3/4。	瀬戸・美濃
40図-285 PL.38	陶器 碗	D区表土 底部片	底(6.0) 高<2.0>	良・断面灰白 2.5Y 8/2	内外面に施釉、ぶい黄褐10YR 4/3、底部外面の一部は剥離。	瀬戸・美濃
40図-286 PL.38	陶器 鉢	D区覆土 底部片	底(5.2) 高<2.1>	良・淡黄5Y 8/3	内外面に施釉、褐10YR 4/4。一部に剥離が認められる。	瀬戸・美濃
40図-287 PL.38	磁器 碗	D区 X307- Y481G 口縁片	厚0.4	良・断面灰7.5Y 6/1	釉は灰オリーブ5Y 6/2。鑄が認められない。	竜泉窯系青磁碗
40図-288 PL.38	土製品 玩具	D区覆土 1/2	縦<2.6> 横2.5 厚0.9	良・橙5YR 6/6	型合せの表側のみの残存か。	
挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)・ 量目(g)	石質	備考	
32図-167 PL.31	石製品 砥石	A区覆土 1/2	長<7.8> 短3.5 厚2.6 重108.4	流紋岩	4面使用。両側面を多用。仕上げ砥。	
32図-168 PL.31	石製品 砥石	A区覆土 1/2	長<8.2> 短3.4 厚3.3 重124.3	デイサイト	裏面を多用している。荒砥。	
32図-169 PL.31	石製品 砥石	A区覆土 1/2	長<7.9> 短3.5 厚2.8 重115.2	流紋岩	4面使用。裏、左側面を多用。仕上げ砥。	
32図-170 PL.32	石製品 砥石	A区 X272- Y965G 1/4	長<4.5> 短3.15 厚0.8 重28.2	珪質粘板岩	表、裏の2面使用。表面は滑らか。仕上げ砥。	
32図-171 PL.32	石製品 砥石	A区覆土 破片	長<3.3> 短2.6 厚1.7 重23.4	砥沢石	表、裏の2面使用。仕上げ砥。	
32図-172 PL.32	石製品 砥石	A区覆土 1/2	長<11.8> 短7.6 厚4.3 重494.1	凝灰質砂岩	表、裏の2面使用。表面中央部は大きく窪む。荒砥。	
33図-173 PL.32	石製品 砥石	A区覆土 1/4	長<6.2> 短5.0 厚2.1 重74.5	砂岩	表、裏、右側面の3面使用。表面多用。荒砥。	
33図-174 PL.32	石製品 砥石	A区覆土 破片	長<12.2> 短<7.4> 厚0.3 重62.3	頁岩	表裏に無数の傷あり。	
33図-175 PL.32	石製品 砥石	A区覆土 破片	長<6.0> 短<6.0> 厚<3.2> 重21.8	珪藻土か	コンロの一部か。	
33図-176 PL.32	石製品 砥石	A区覆土 破片	長<5.2> 短<4.3> 厚4.3 重21.7	珪藻土か	コンロの一部か。	
34図-205 PL.34	石製品 砥石	B区覆土 2/3	長<9.2> 短2.8 厚2.6 重82.0	砥沢石	研ぎ面は滑らか。仕上げ砥。	
34図-206 PL.34	石製品 砥石	B区表土 1/2	長<6.6> 短2.7 厚1.8 重52.9	砥沢石	4面使用。表面の端部は極度に磨滅。表裏面は滑らか。仕上げ砥。	
37図-249 PL.36	石製品 砥石	C区表土 1/2	長<8.4> 短3.7 厚2.8 重104.6	砥沢石	4面使用。左側面は使用頻度が低い。仕上げ砥。	
37図-250 PL.36	石製品 砥石	C区 X288- Y788G 1/2	長<7.9> 短4.2 厚2.5 重126.1	砥沢石	4面使用。仕上げ砥。	
37図-251 PL.36	石製品 砥石	C区表土 破片	長<5.0> 短3.6 厚1.1 重32.6	砥沢石	4面使用。仕上げ砥。	
37図-252 PL.36	石製品 砥石	C区表土 1/2 破片	長<5.5> 短<2.6> 厚1.1 重20.5	頁岩	仕上げ砥。	

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度量 目(cm)・ 目(g)	石質	備考
37図-253 PL.36	石製品 砥石	C区表土 破片	長<3.6> 短2.9 厚2.7 重38.0	砥沢石	4面使用。摩滅著しい。仕上げ砥。
38図-254 PL.36	石製品 砥石	C区表土 1/2	長<6.3> 短3.2 厚2.5 重100.0	砥沢石	4面使用。裏面以外の3面の使用頻度が高い。仕上げ砥。
38図-255 PL.36	石製品 砥石	C区表土 2/3	長<9.7> 短2.4 厚2.4 重80.4	砥沢石	4面使用。右側面以外の3面の使用頻度が高い。仕上げ砥。
38図-256 PL.37	石製品 砥石	C区表土 1/3	長<5.3> 短2.6 厚1.7 重37.5	砥沢石	仕上げ砥。
38図-257 PL.37	石製品 砥石	C区表土か 1/2	長<7.4> 短2.5 厚2.3 重89.0		4面使用。表面以外の3面の使用頻度が高い。仕上げ砥。
38図-258 PL.37	石製品 石棒	C区表土 破片	長3.6 短0.7 厚0.7 重3.3	滑石	
38図-259 PL.37	石製品 石板	C区表土 破片	長<4.4> 短<2.5> 厚0.4 重5.6	粘板岩	裏表面に擦痕。
40図-289 PL.38	石製品 砥石	D区覆土 1/2	長<8.2> 短2.8 厚1.8 重49.7	砥沢石	4面使用。仕上げ砥。
40図-290 PL.38	石製品 砥石	D区表土 1/3	長<7.6> 短2.9 厚1.9 重72.8	砥沢石	4面使用。表の使用頻度が著しい。仕上げ砥。
40図-291 PL.38	石製品 砥石	D区覆土 1/3	長<8.7> 短3.0 厚2.1 重87.8	砥沢石	表・左側面の2面使用。表の使用頻度が高い。仕上げ砥。
40図-292 PL.38	石製品 砥石	D区覆土 破片	長<4.7> 短<2.3> 厚0.9 重20.2	砥沢石	仕上げ砥。
挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度量 目(cm)	形状・技法等の特徴	備考
33図-177 PL.32	鉄製品 鎌	A区覆土 3/4	長(22.3) 幅5.0 厚0.2~0.4	ほぼ全面に錆が付着する。腐食著しい。	
33図-178 PL.32	鉄製品 鍋	A区覆土 破片	長<6.9> 短<6.3> 厚 0.7	表裏ともに錆が付着する。緩く湾曲する。表はざらついている。	
33図-179 PL.32	鉄製品 角釘か	A区覆土 1/2	長<6.0> 短1.5 厚0.4×0.6	各面とも部分的に錆が付着する。上端部は腐食により粒子が粗い。	
33図-180 PL.32	鉄製品 不明	A区覆土 破片	長<4.1> 短1.5 厚0.6~0.8	中央より「く」の字状に折れ曲がる。各面とも部分的に錆が付着する。断面に空洞あり。	
33図-181 PL.32	鉄製品 角釘か	A区覆土 1/2	長<7.4> 短1.4 厚0.9×0.5	各面とも部分的に錆が付着する。頭部に輝割れ。	
33図-182 PL.32	鉄滓	A区覆土	長4.1 短3.1 厚1.9	地は黒褐色を呈す。ほぼ全面に錆が付着する。気孔は殆ど見られない。	
33図-183 PL.32	鉄滓	A区表土	長3.1 短2.5 厚1.2	地は黒褐色を呈す。一部に錆が付着する。気孔は一部に確認できる。	
35図-207 PL.34	鉄製品 角釘	B区覆土 ほぼ完形	長14.4 短1.1 厚1.0	地の色は黒褐色を呈す。全体に錆が付着する。先端は磨滅。	
35図-208 PL.34	鉄製品 角釘	B区覆土 3/4	長<6.6> 短2.7 厚1.8	全体に錆が付着する。一部に剝離が認められる。先端は欠損。	
35図-209 PL.34	鉄製品 鎌	B区覆土 1/2	長<9.1> 短2.0 厚0.4	地の色は黒褐色を呈す。全体に錆が付着する。一部に剝離が認められる。	
35図-210 PL.34	銅製品 煙管	B区覆土 完形	長4.7 短1.1 厚1.1	全体に緑青が付着する。雁首。	
35図-211 PL.34	鉄製品 角釘か	B区覆土 破片	長<3.3> 短0.6 厚0.5	全体に錆が付着する。一部に剝離が認められる。	
35図-212 PL.34	銅製品 銭	B区覆土 完形	長2.85 短0.7 厚0.15	寛永通寶。裏面は10波。裏面はやや磨滅。初鑄は1769年。	
35図-213 PL.34	銅製品 銭	B区覆土 完形	長2.5 短0.6 厚0.1	寛永通寶。黒褐色を呈す。裏面はやや磨滅。表面の一部に緑青が付着する。	
35図-214 PL.34	銅製品 銭	B区表土 完形	長2.35 短0.6 厚0.1	寛永通寶。裏面は磨滅著しい。全体に緑青が付着する。	
35図-215 PL.34	銅製品 銭	B区覆土 完形	長2.1 短0.8 厚0.1	寛永通寶。表裏ともに磨滅著しい。全体に緑青が付着する。	
35図-217 PL.34	鉄製品 不明	B区覆土 破片	長<6.0> 短5.8 厚0.7	地の色は黒褐色を呈す。全体に錆が付着する。側面はほぼ形状をとどめる。	
35図-218 PL.34	鉄滓	B区覆土	長6.0 短5.8 厚0.7	地の色は黒褐色を呈す。全体に錆が付着する。一部に気孔が認められる。	

第4章 確認された遺構・遺物について

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)	形状・技法等の特徴	備考
35図-219 PL.34	鉄 滓	B区表土	長6.0 短5.8 厚0.7	地の色は黒褐色を呈す。全体に錆が付着する。一部に気孔が認められる。	
38図-260 PL.37	鉄製品 不明	C区表土 破片	長<2.3> 短1.2 厚0.6	全体に錆が付着する。	
38図-261 PL.37	鉄製品 角釘か	C区表土 破片	長<4.1> 短0.8 厚0.6	全体に錆が付着する。一部に剝離が認められる。	
38図-262 PL.37	鉄製品 角釘か	C区表土 破片	長<3.4> 短0.6 厚0.5	地の色は黒褐色を呈す。全体に錆が付着する。	
38図-263 PL.37	鉄製品 不明	C区表土 破片	長<3.2> 短<2.1> 厚0.3	全体に錆が付着する。一部に剝離が認められる。	
38図-264 PL.37	鉄製品 不明	C区表土 破片	長3.4 短2.9 厚0.7	全体に錆が付着する。一部に剝離が認められる。	
38図-265 PL.37	銅製品 煙管	C区表土 完形	長5.9 短0.45~1.0	吸口は「く」の字状に曲がる。裏面接合部はやや離れている。使用時は緑色。吸い口。	
38図-266 PL.37	銅製品 古銭	C区表土 ほぼ完形	長2.75 短0.7 厚0.1	痛み激しい。折れ曲がる。全体に緑青が付着する。文久永宝。裏面は10波。	
39図-267 PL.37	鉄 滓	C区表土	長8.6 短5.9 厚1.8	表裏ともに錆が付着、気孔が認められる。地の色は黒褐色を呈す。	
39図-268 PL.37	鉄 滓	C区表土	長4.9 短7.4 厚1.8	表裏ともに錆が付着、一部に気孔が認められる。地の色は黒褐色を呈す。	
39図-269 PL.37	鉄 滓	C区表土	長3.7 短2.6 厚1.8	表裏ともに錆が付着。内面に気孔が認められる。地の色は黒褐色を呈す。	
39図-270 PL.37	鉄 滓	C区表土	長4.7 短3.6 厚1.5	表面に錆が付着する。外面に気孔が認められる。地の色は黒褐色を呈す。	
39図-271 PL.37	鉄 滓	C区表土	長9.8 短6.4 厚2.7	表裏ともに錆が付着。端部に気孔が認められる。地の色は黒褐色を呈す。	
39図-272 PL.37	鉄 滓	C区表土	長6.3 短4.3 厚2.1	表裏ともに錆が付着。外面に気孔が認められる。地の色は黒褐色を呈す。	
39図-273 PL.37	鉄 滓	C区表土	長4.8 短4.8 厚2.9	表裏ともに錆が付着、一部に気孔が認められる。地の色は黒褐色を呈す。罫割れ著しい。	
39図-274 PL.37	鉄 滓	C区表土	長5.3 短4.3 厚2.3	一部に錆が付着、一部に気孔が認められる。地の色は黒褐色を呈す。	
41図-293 PL.38	鉄 滓	D区表土	長6.6 短4.1 厚2.7	表裏ともに錆が付着する。	
41図-294 PL.38	鉄 滓	D区表土	長6.1 短4.2 厚2.2	表裏ともに錆が付着する。気孔が認められる。	
41図-295 PL.38	鉄製品 不明	D区表土 破片	長<3.5> 短<2.9> 厚0.6	表裏ともに錆が付着する。	



### 第3節 古代1面 (As-B直下)

当該時期の遺構は、B・C・D区で確認されたAs-B下水田跡と、D区水田跡に伴う9号溝である。

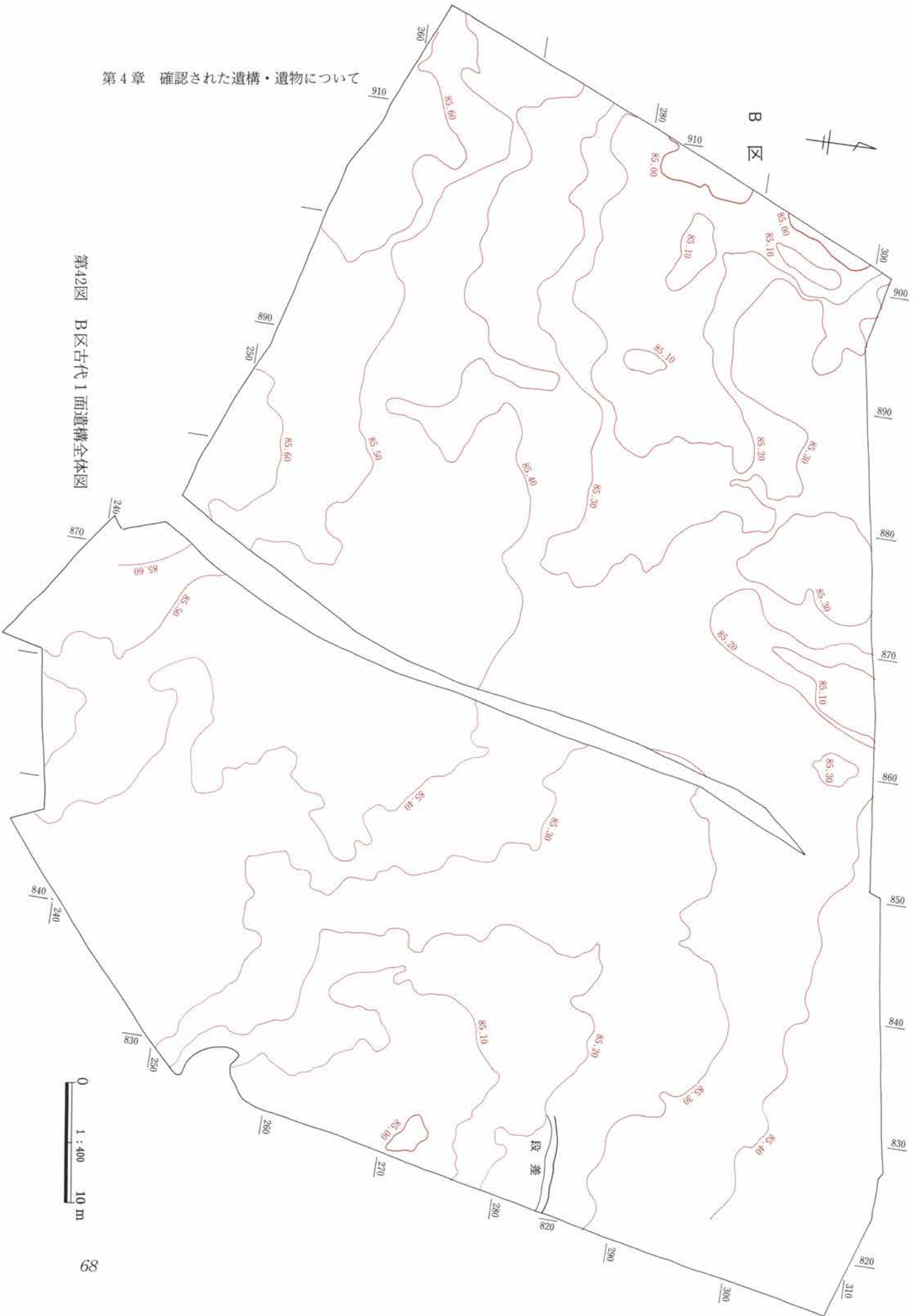
As-Bで覆われた水田跡は、B・C・D区に於いて検出されている。As-Bの堆積が認められたのは、B区では、概ねX252-Y827グリッドとX290-Y905グリッドを結ぶ線よりも北側の低地部全域である。C区では、調査区南西端及び、一級河川西桂川の河川改修以前の旧河道部以外のほぼ全域である。D区では、調査区中央の谷地部分である。As-Bの堆積状況は、各調査区とも比較的良好で、厚い部分は約10cm、薄い部分でも約5cmの計測値がある。以後、As-Bの堆積範囲を水田域として記載を行う。また、各区の水田面は、土地改良前後に受けた攪乱が上層部から達しており、所々で破壊されている。

水田跡の残存状況は、B・C区では明瞭な畦畔状の高まりが確認できず、僅か数cmの段差が生じる程度で余り良好ではない。段差は、B区で東西方向に1条、C区で東西方向に7条、南北方向に1条と、C区南西端で北西から南東方向に1条の合計10条が検出されている。段差の勾配は、北が高く南が低いものと、西が高く東が低いものが殆どである。段差は畦畔の残骸と考えられるが、それがすべて天仁元(1108)年当時の畦畔とは言い切れない。区画が狭く不自然な箇所もあり、2時期以上のものが同時に検出されている可能性がある。両区の水田域の旧地形は谷地である。古い時代に埋没した谷地を利用して水田経営がなされたと考えられる。水田域の最高標高はC区北西部の85.5mで、最低標高はC区南西部の84.5mである。直線距離約30mに対して、比高差は約1mである。両区の水田耕土は、FA・As-Cを多量に含む暗褐色土層である。同層は、As-C降下以降に混土化された暗褐色土の上面にFAが降下し、さらに混土化されたものと推測される。〔第42・43図 PL.2～4・11〕

D区では、畦畔状の高まりが確認されているが、高低差は5cm程度で余り良好ではない。水田域は、西桂川と推定される旧河道が、古墳時代頃までに埋没した低地部分である。畦畔の残存状況は良好ではないものの、一定の区画を表しており、3箇所水口が確認されている。水田域の最高標高は北西端の84.2mで、最低標高は中央南端の83.5mである。直線距離約21mに対して、比高差は約70cmである。D区台地部の最高標高は、84.6mであり、土地改良で破壊されてはいるものの、台地部と低地部で110cmの比高差が生じている。水田耕土は、所謂As-B下黒色粘質土で、厚さは5cm程度である。

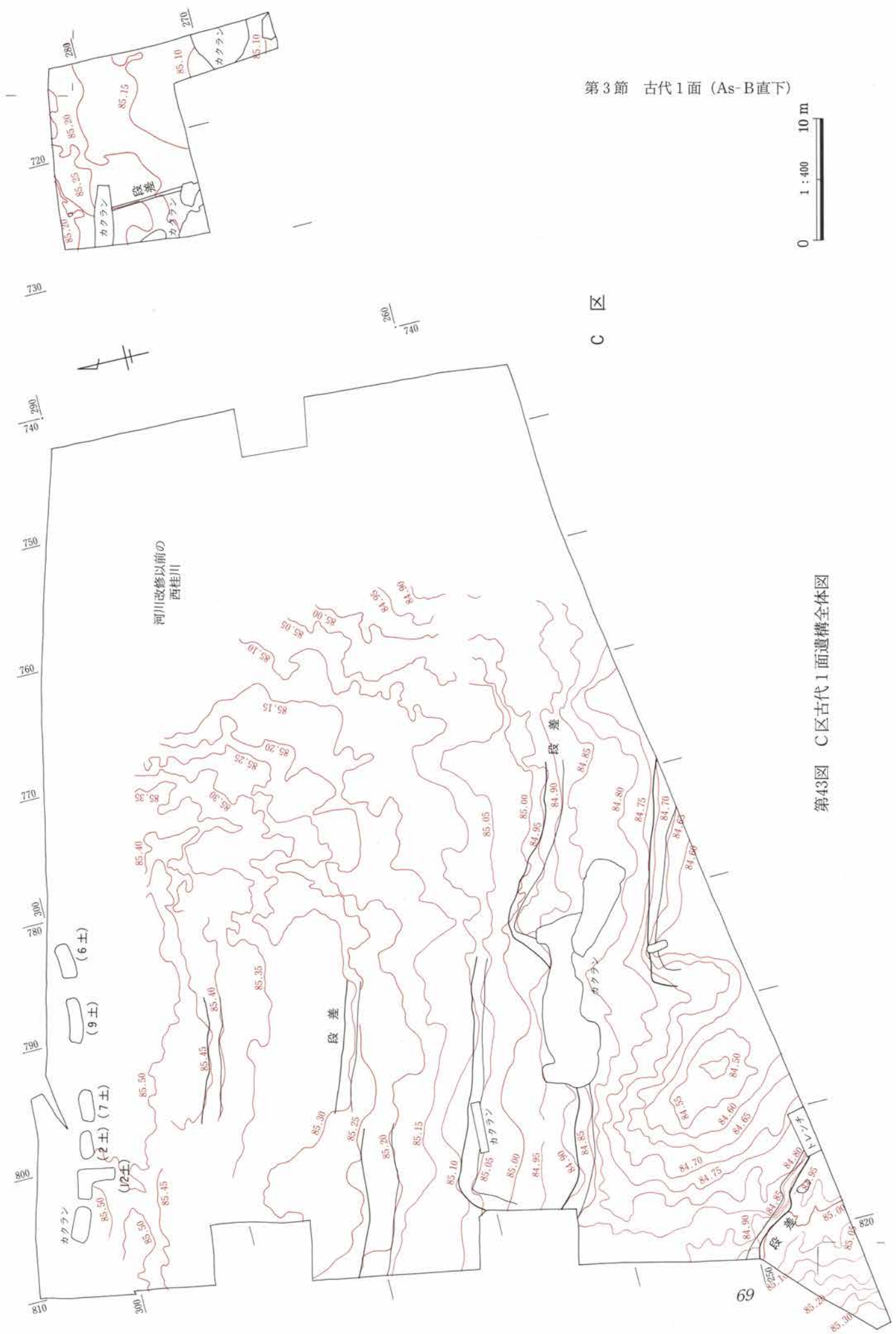
本遺跡では、各区の畦畔の残存状況が良好でなかったため、水田耕作の有無の判断材料の一つとして、プラント・オパール分析を行っている。詳細は、第5章「理科学分析」を参照されたいが、分析結果は、各区に於いて水田耕作の可能性が考えられるとの見解である。また、A区西半部でもAs-Bの堆積が認められているが、古墳時代の粘土採掘坑の埋没跡にAs-Bが堆積したものであり、水田跡とは考えられない。

D区9号溝は、調査区中央やや東寄りの台地から低地への地形の変換点部分に所在する。X347-Y488グリッドからX302-Y482グリッドの間に位置し、走向方位は北から南である。規模は全長約45m、最大幅約1m、深さ約15cmである。本遺構は、当初As-Bの除去中に浅い溝状遺構として確認されている。その後、As-B下水田の耕土である黒色粘質土の除去中に、上記溝状遺構の下面で本遺構が確認されている。As-B下水田の南北畦に隣接していること、FA・As-C混土上面水田の畦畔との間に重複関係が存在し、平面により本遺構が新しいと判断している。本遺構は、As-B下水田の畦畔築造に関係する溝と考えられる。但し、調査区南部では、本遺構の上面に東西畦が築造されている部分も存在することから、本遺構がAs-B降下時点で存在していた可能性は少ない。よって、As-B下水田の南北畦築造に伴う溝であり、同畦築造後に東西畦が築造されたと考えられる。遺物の出土は、古墳時代から平安時代頃の土器小破片等が北側の一角で多量に出土しており、そのうち7点を実測対象遺物としている。〔第44・45・46図 PL.3・8～11〕



第42図 B区古代1面遺構全体図

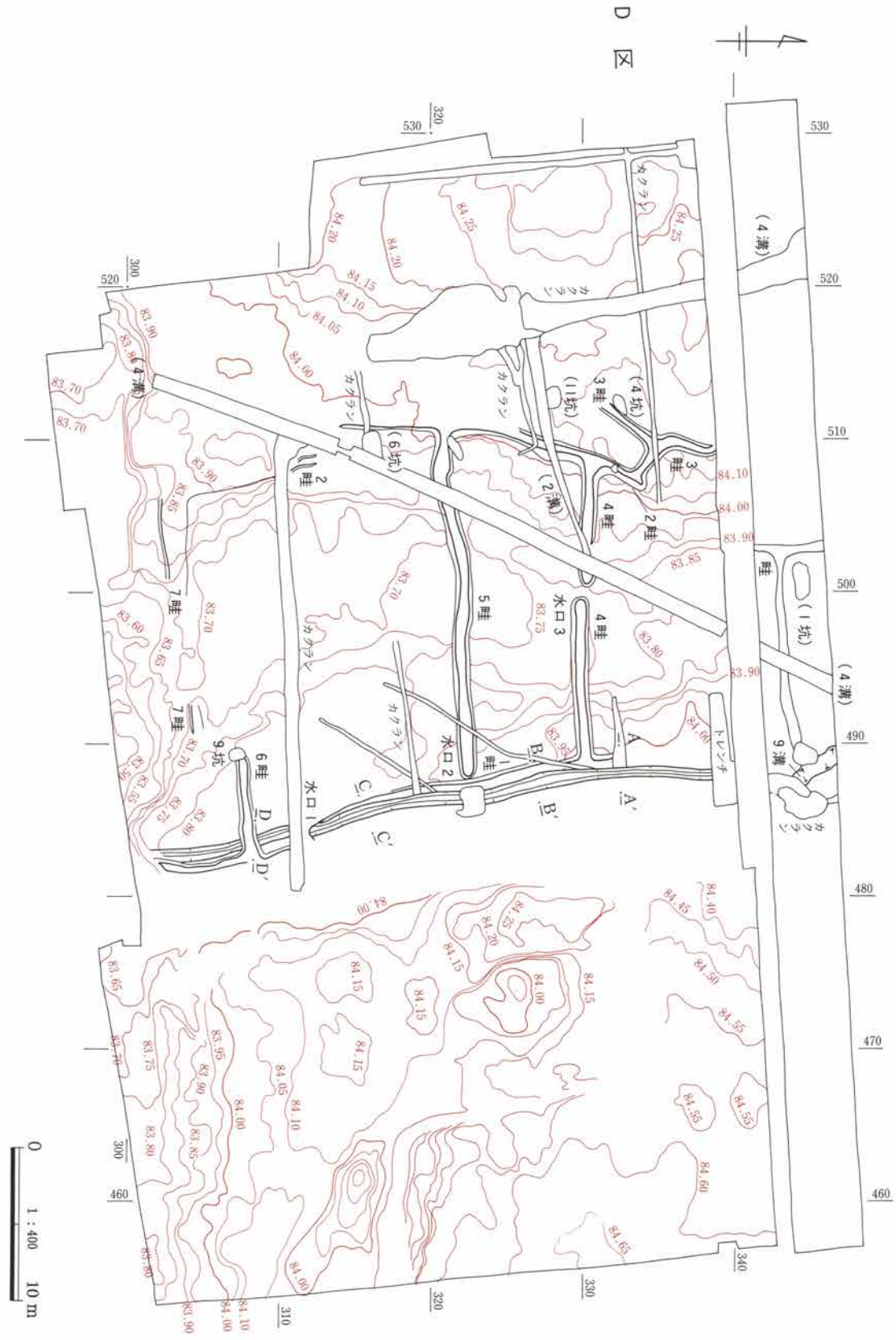
第3節 古代1面 (As-B直下)



0 1 : 400 10 m

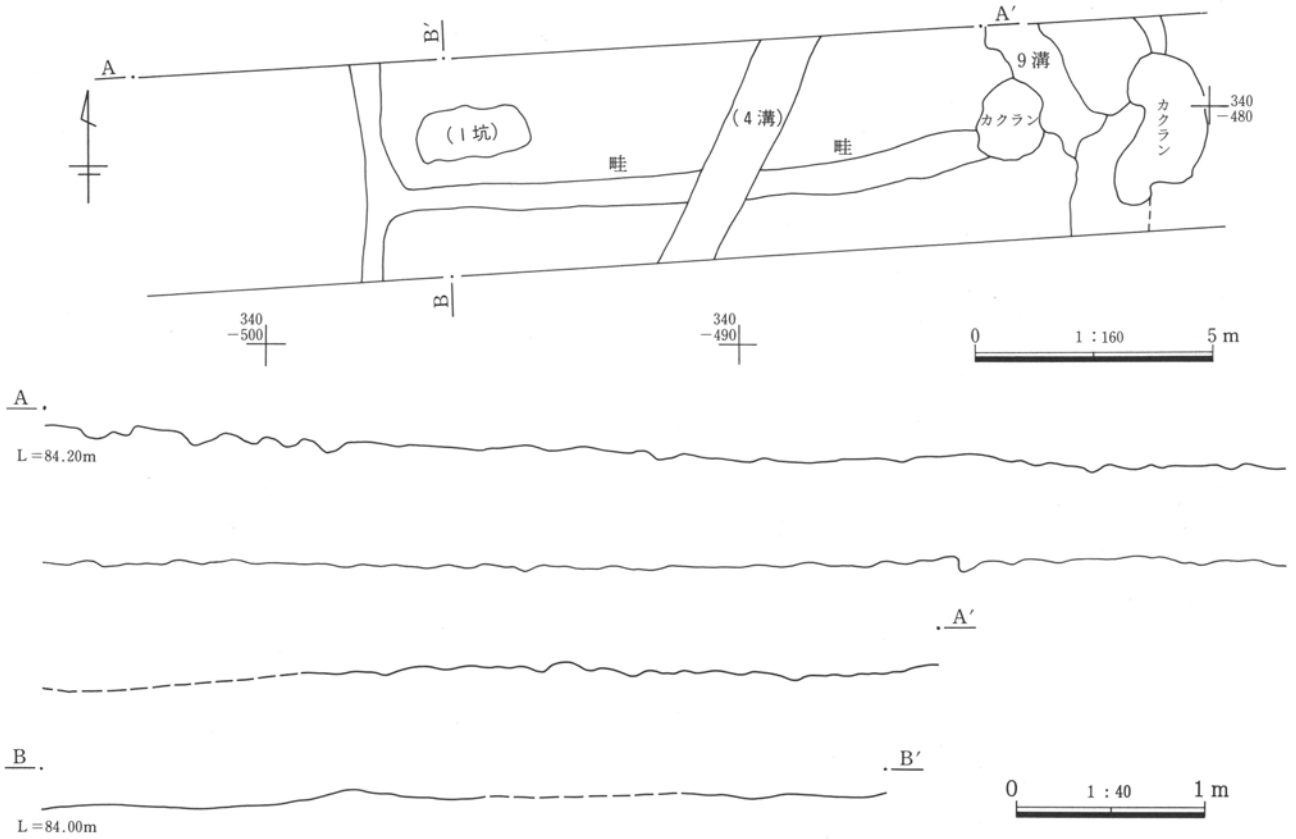
C 区

第43図 C区古代1面遺構全体図

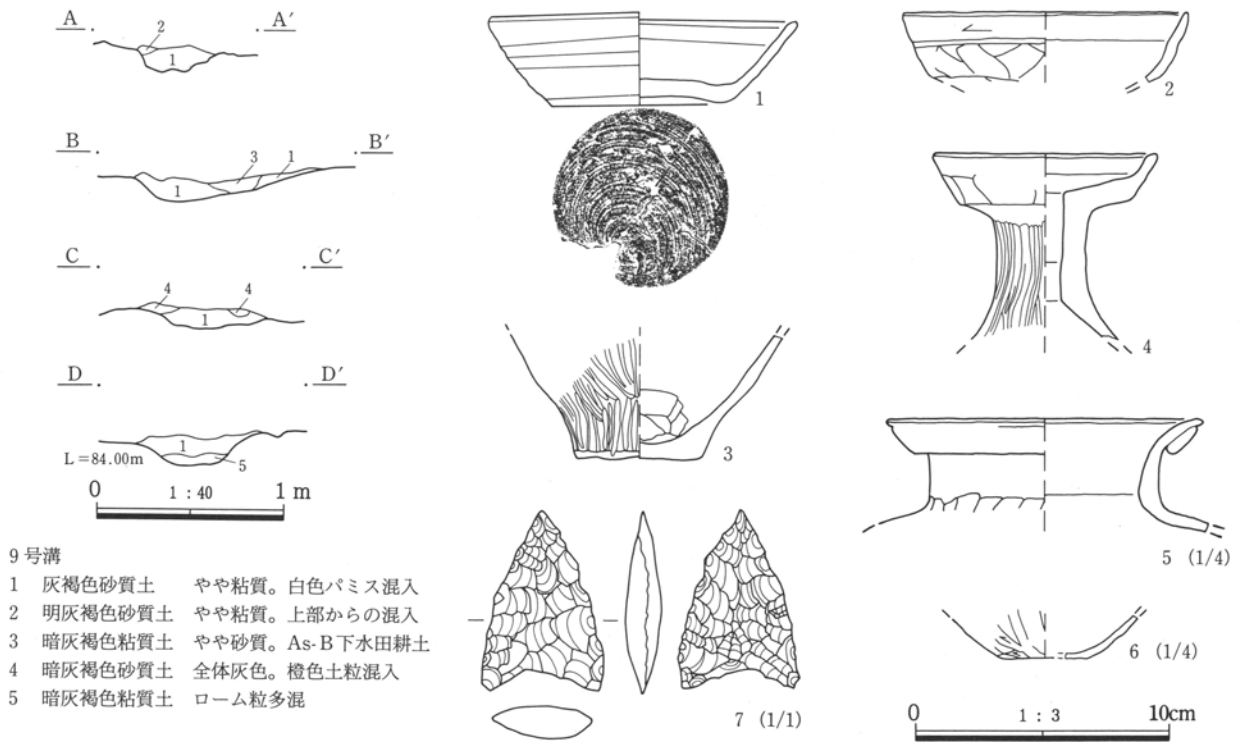


第44図 D区古代1面遺構全体図

第3節 古代1面 (As-B直下)



第45図 D区北区画古代1面水田



- 9号溝
- 1 灰褐色砂質土 やや粘質。白色パミス混入
  - 2 明灰褐色砂質土 やや粘質。上部からの混入
  - 3 暗灰褐色粘質土 やや砂質。As-B下水田耕土
  - 4 暗灰褐色砂質土 全体灰色。橙色土粒混入
  - 5 暗灰褐色粘質土 ローム粒多混

第46図 D区9号溝断面と出土遺物

第4章 確認された遺構・遺物について

古代1面遺構外出土遺物観察表

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm) 残存	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴	備考
46図-1 PL.39	須恵器 坏	D区9溝 X320-Y485G	口(12.3) 底7.0 高3.6 2/3	良・灰N5/・還元	轆轤成形、左回転。回転糸切り。白色粒を多量に含む。	
46図-2 PL.39	土師器 坏	D区9溝覆土	口(11.2) 高<2.8> 口縁部片	良・にぶい赤褐 5YR5/4・酸化	内外面ともに磨滅著しい。	
46図-3 PL.39	土師器 小型甕	D区9溝 X337-Y487G	底(5.0) 高<5.0> 底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	外面底部、ヘラ削り。	
46図-4 PL.39	土師器 器台	D区9溝 X313-Y483G	口8.8 高<7.3> 1/4	良・にぶい橙 7.5YR 7/3・酸化	全体に磨滅著しい。坏部底部中央に穿孔、直径17mm。脚部内面はヘラ削り。	
46図-5 PL.39	土師器 壺	D区9溝 X317-Y485 X318-Y485	口(16.6) 高<4.5> 口縁部片	良・にぶい橙 7.5YR 7/3・酸化	内外面ともに磨滅著しい。折り返し口縁。外面頸部に薄くハケ目が残存する。	
46図-6 PL.39	土師器 甕	D区9溝 X313-Y484G	底(4.6) 高<2.2> 底部片	良・灰褐 7.5YR 6/2・酸化	内外面ともに磨滅著しい。	
挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm) 量目(g)	石質	備考	
46図-7 PL.39	石器 石鏃	D区9溝覆土	長2.4 短1.6 厚0.4 重1.37	黒曜石		



第47図 遺構外出土遺物

古代1面遺構外出土遺物観察表

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)	形状・技法等の特徴	備考
47図-1 PL.39	銅製品 古銭	C区表土 完形	長2.45 短0.6 厚0.1	聖元元寶、篆書体。2片に割れる。裏面は磨滅著しい。初鑄1101年。	

## 第4節 古代2面 (As-B降下以前)

当該時期の遺構は、B・C区で溝状遺構、D区でFA・As-C混土上面水田跡が確認されている。

B・C区では、As-B下水田跡の調査終了後、水田耕土下面において合計4条の溝状遺構（以下溝）が確認されている。内訳は、B区からC区へ通じる溝が2条、B区北西端で1条、C区の西桂川東側の区画で1条である。これらの溝は、As-B降下の時点では、水田耕作により破壊されていたことが判明している。各溝間の重複関係は、B区で12号溝と5号溝、12号溝と11号溝との間に存在する。新旧関係は、5号溝よりも12号溝が新しく、12号溝よりも11号溝が新しいことが断面により確認されている。遺物の出土は、全ての遺構とも認められていない。時期は、FA降下後に混土化された暗褐色土層を掘り込んでいることから、FA降下よりも新しく、As-B下水田以前と考えられるが、遺構の一部がAs-B下水田に伴う段差と近接しており、走向方位も似ていることから、As-B降下に比較的近い時期の可能性が考えられる。埋没土は、As-B下水田の耕土が主体である。B区11・12号溝については、調査を先行させたC区では、As-B下水田耕土を除去した段階で同遺構が確認されたため、確認面が低く残存状況は不良である。また、B区では、As-Bを除去した段階で浅い溝状の窪みが確認されたため、水田耕土であるFA・As-Cを多量に含む暗褐色土のうち、便宜的に上半部の特にFAを多量に含む土層を除去して、下部に存在する遺構の確認を行っている。

B区12号溝は、調査区北西端よりC区南西端付近まで、両調査区中央の谷地部分に沿って確認されている。全長は約110mで、最大幅約1m、深さ約50cmである。

B区北西端で確認された5号溝は、全長約4.8mで、最大幅約2m、深さ約28cmである。12号溝と直交する。

B区11号溝は、B区調査区中央やや東寄りのX275-Y856グリッドで12号溝から分岐する。北東方向へ進んだのち、C区境の現道下付近で東西方向へ進路を変更し、河川改修以前の西桂川の旧流路付近で消滅する。C区では土地改良時の攪乱で破壊されている。全長は約79.2mで、最大幅約80cm、深さ約28cmである。

C区3号溝は、X284-Y723グリッドからX272-Y722グリッドに所在し、走向方位は北から南である。全長約11.6m、最大幅約70cm、深さ約16cmで、長軸方向は、As-B下水田面の畦畔状の段差とほぼ同様である。

D区As-B下水田跡の下面では、水田耕土である黒色粘質土の除去後に、FA・As-Cを多量に含む暗灰褐色土（以下FA・As-C混土）を耕土とする水田跡が確認されている。位置は調査区中央の谷地部分で、水田域はAs-B下水田跡（以下上面水田）とほぼ同様である。畦畔の残存状況は、高低差が5cm程度で上面水田と同様あまり良好ではない。水口は3箇所確認されている。畦畔は、上面水田とほぼ同位置で確認されているが、中央付近で南北方向の畦畔が確認されているため、上面水田よりも数は多い。水田域の最高標高は北西端の84.17mで、最低標高は中央南端の83.45mである。直線距離約20mに対して、比高差は約72cmである。水田耕土であるFA・As-C混土は、As-C降下以降に混土化された暗褐色土の上面にFAが降下し、さらに混土化されたものと推測される。

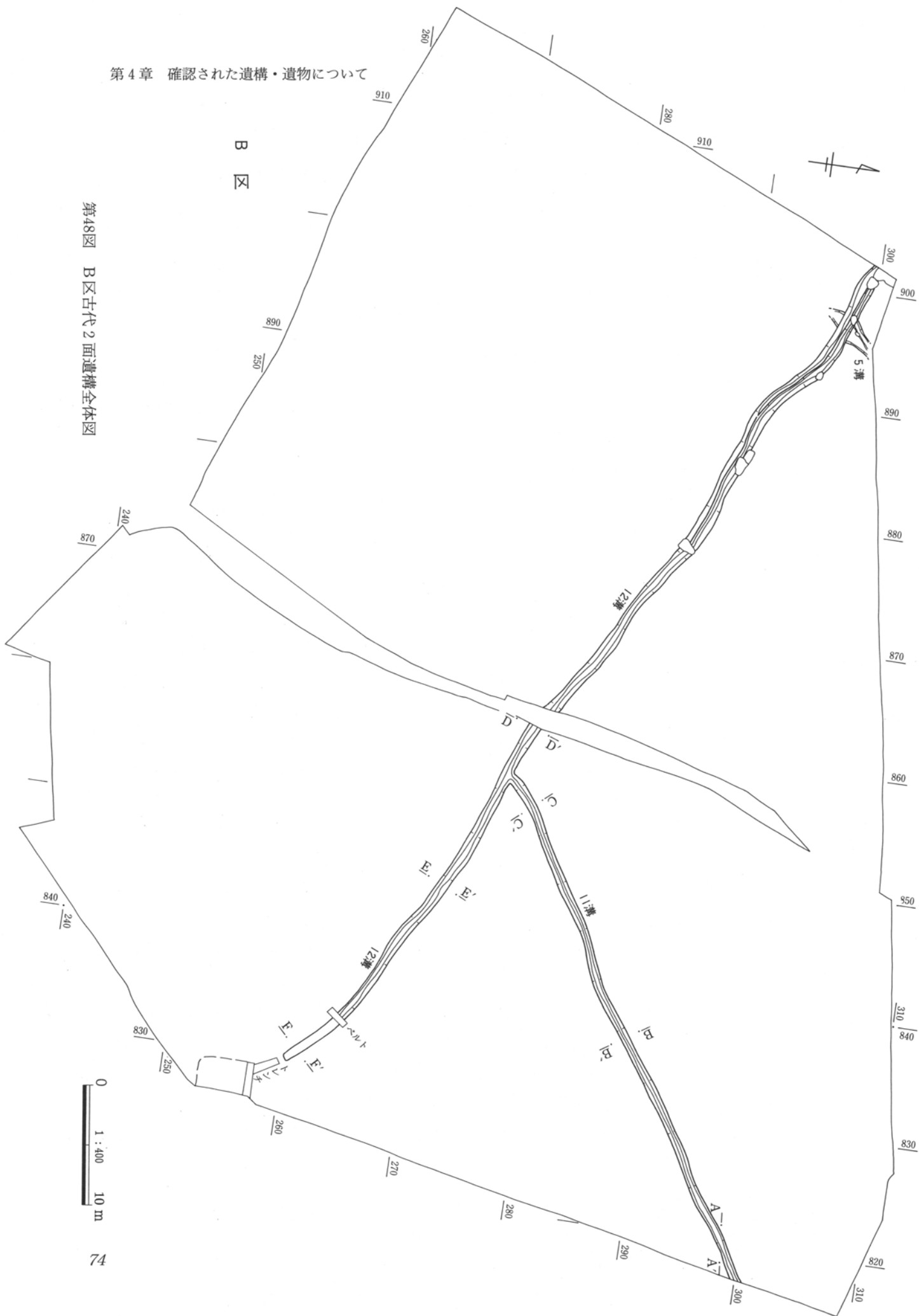
本水田跡は、上面水田と畦畔の位置がほぼ重なっていることから、調査段階では疑似畦畔の可能性を考えたが、南北方向の畦畔の残存状況や水口の位置が異なること、下面水田は、上面水田の耕土である黒色粘質土で覆われていることから、時期の異なる2つの水田跡が存在すると判断している。但し、両水田跡の畦畔の位置がほぼ一致することから、時間差は少なく、比較的近い時期のものであることが推測される。As-B降下以前に、D区旧河道付近に何らかの要因により黒色土が堆積し、その後もAs-B降下まで水田耕作が継続されたと考えられる。重複関係は9号溝との間に存在し、断面により9号溝が新しいと判断している。

〔第48～54図 PL.2～4・9～11〕

第5表 古代2面遺構名称変更一覧

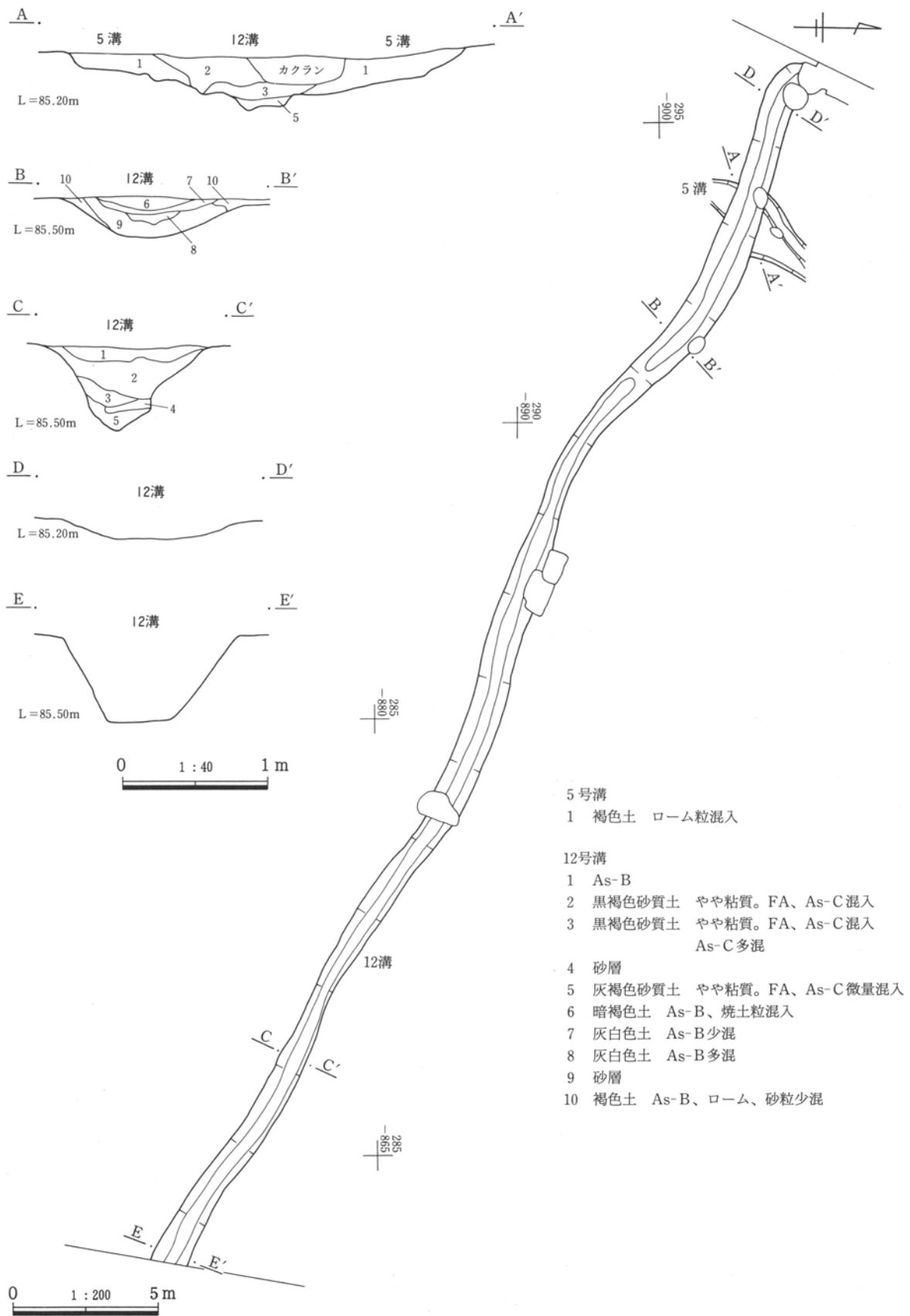
旧名称	新名称	旧名称	新名称
A-1区6号溝	→ B区12号溝	A-1区7号溝	→ B区5号溝

第48図 B区古代2面遺構全体図



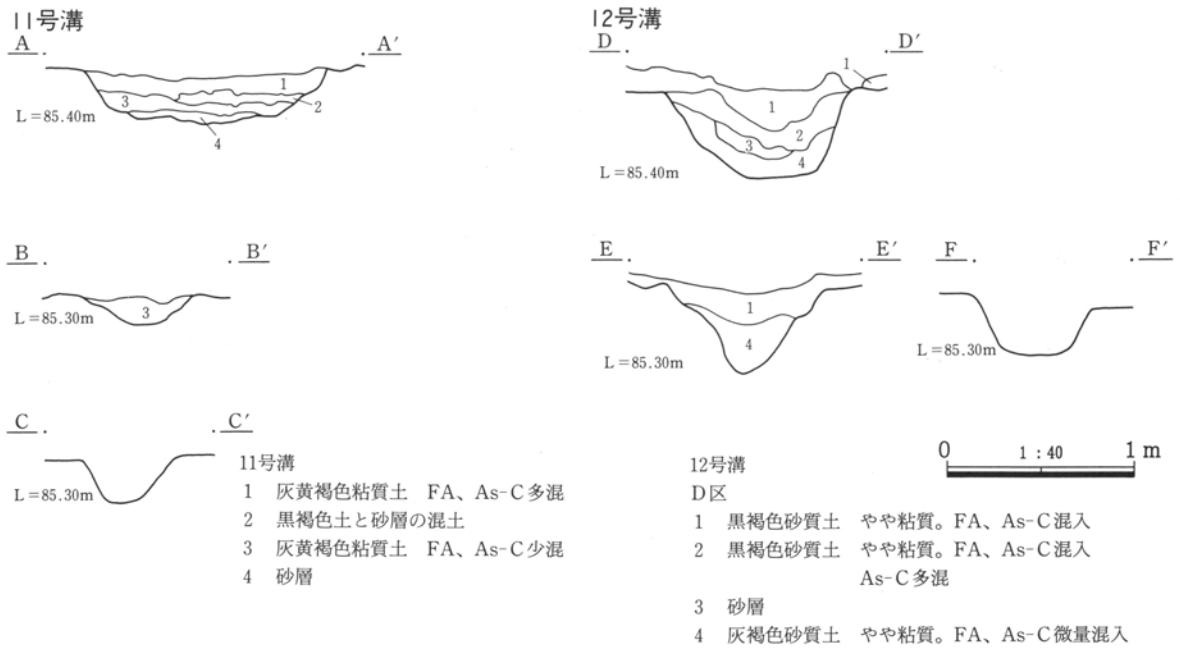


第4節 古代2面 (As-B降下以前)

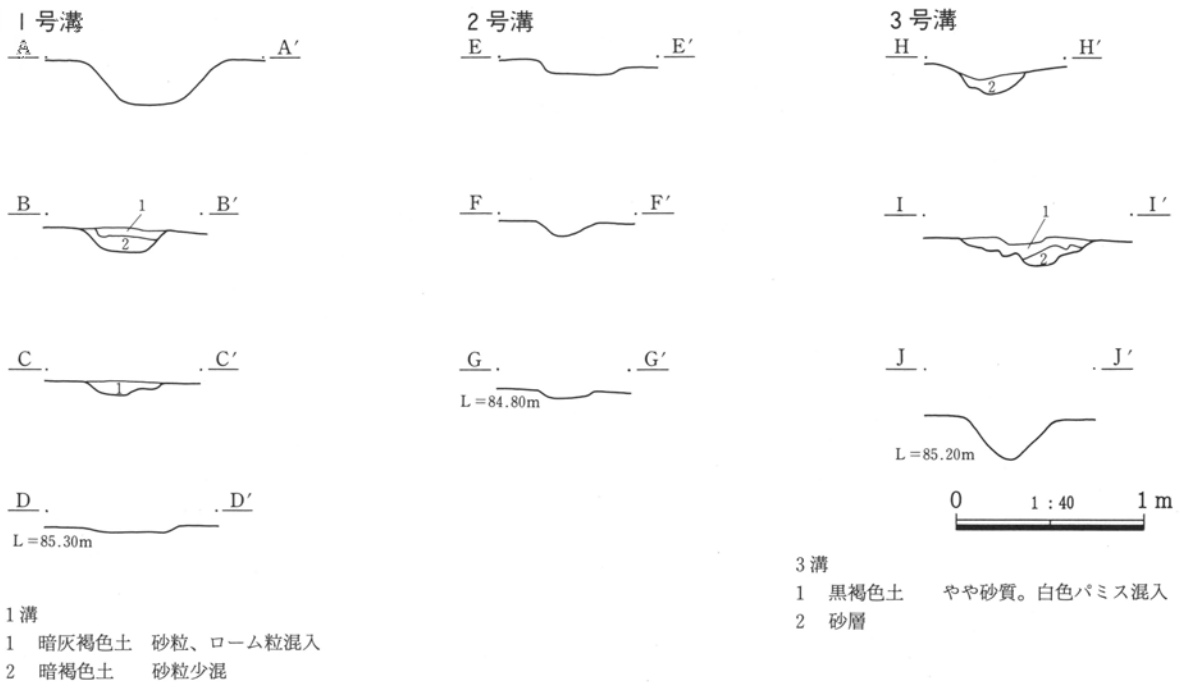


第49図 B区5・12号溝

第4章 確認された遺構・遺物について



第50図 B区11・12号溝断面



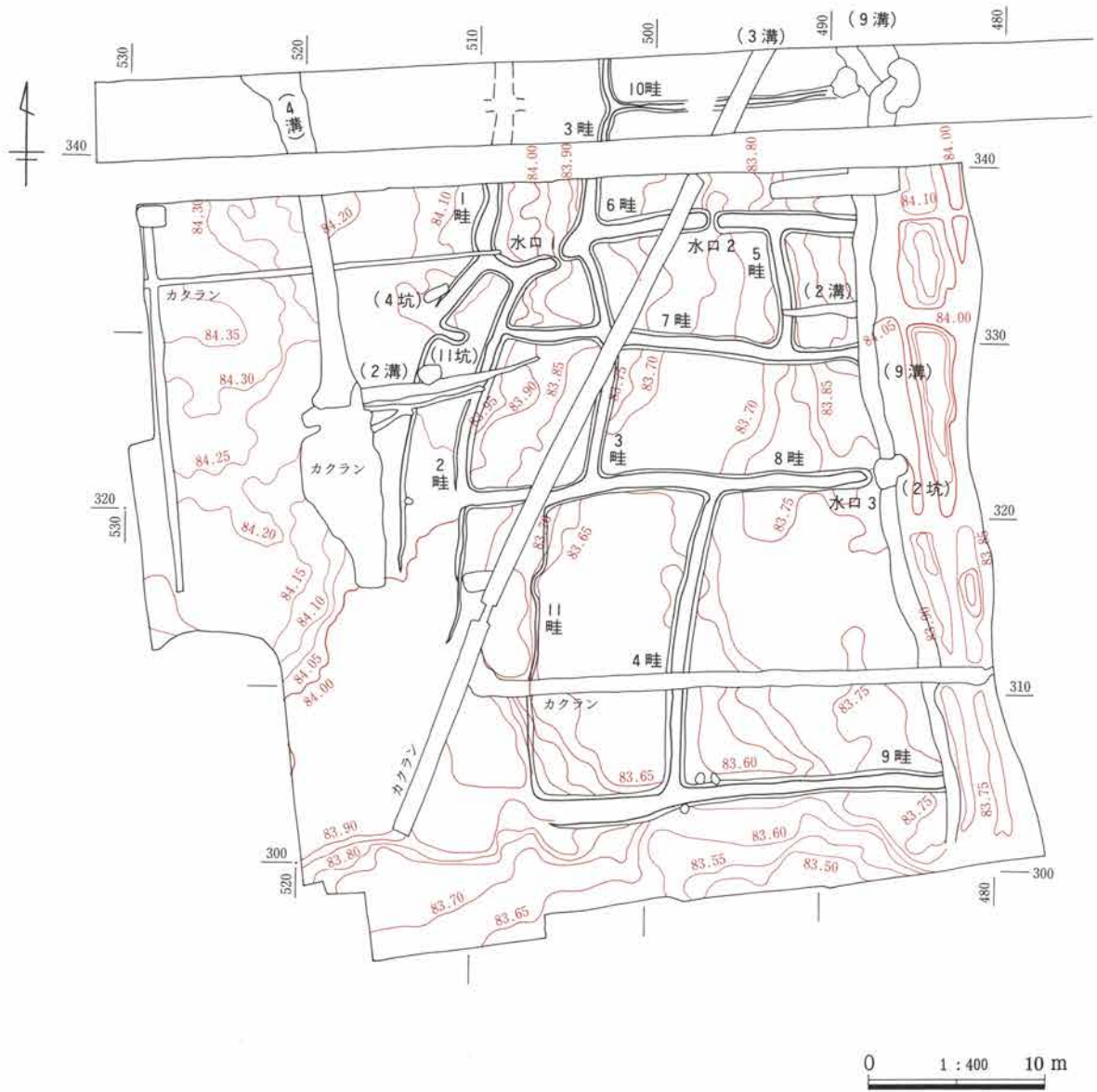
第51図 C区1～3号溝断面

第4節 古代2面 (As-B降下以前)



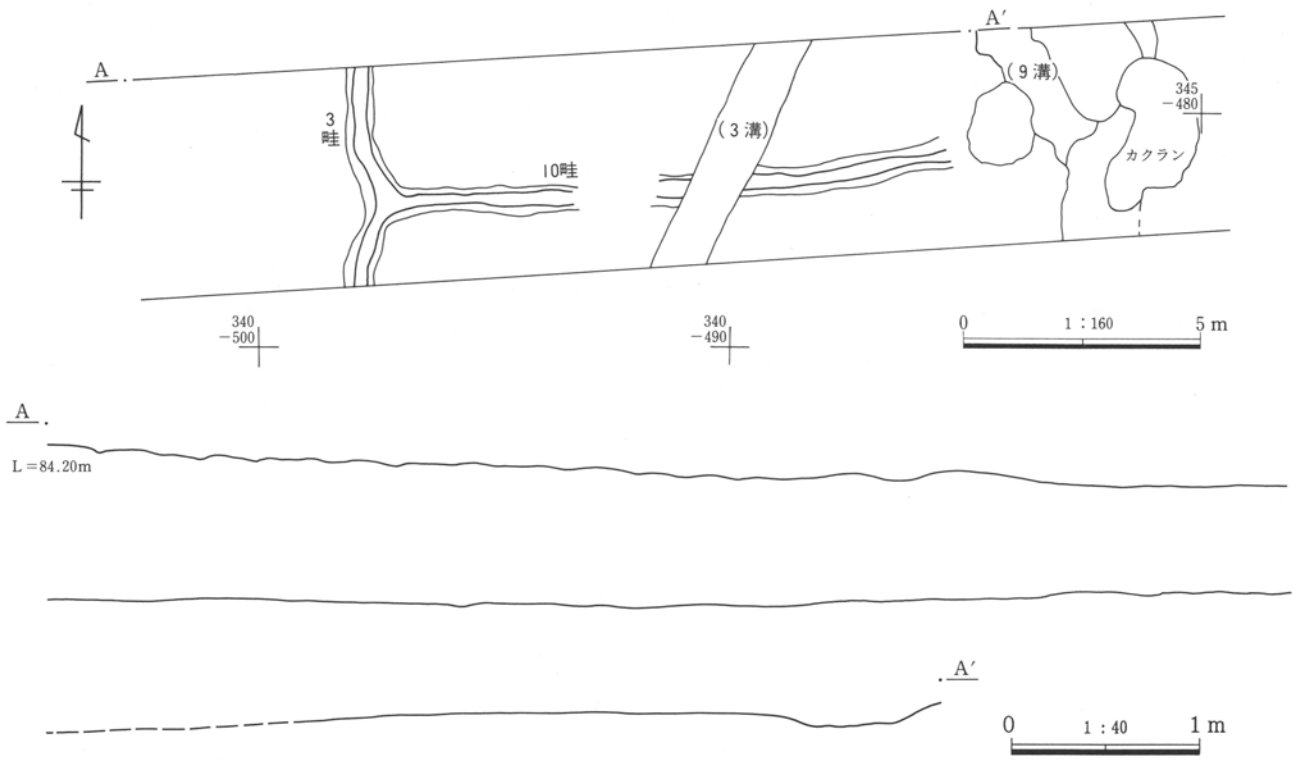
第52図 C区古代2面遺構全体図

D 区

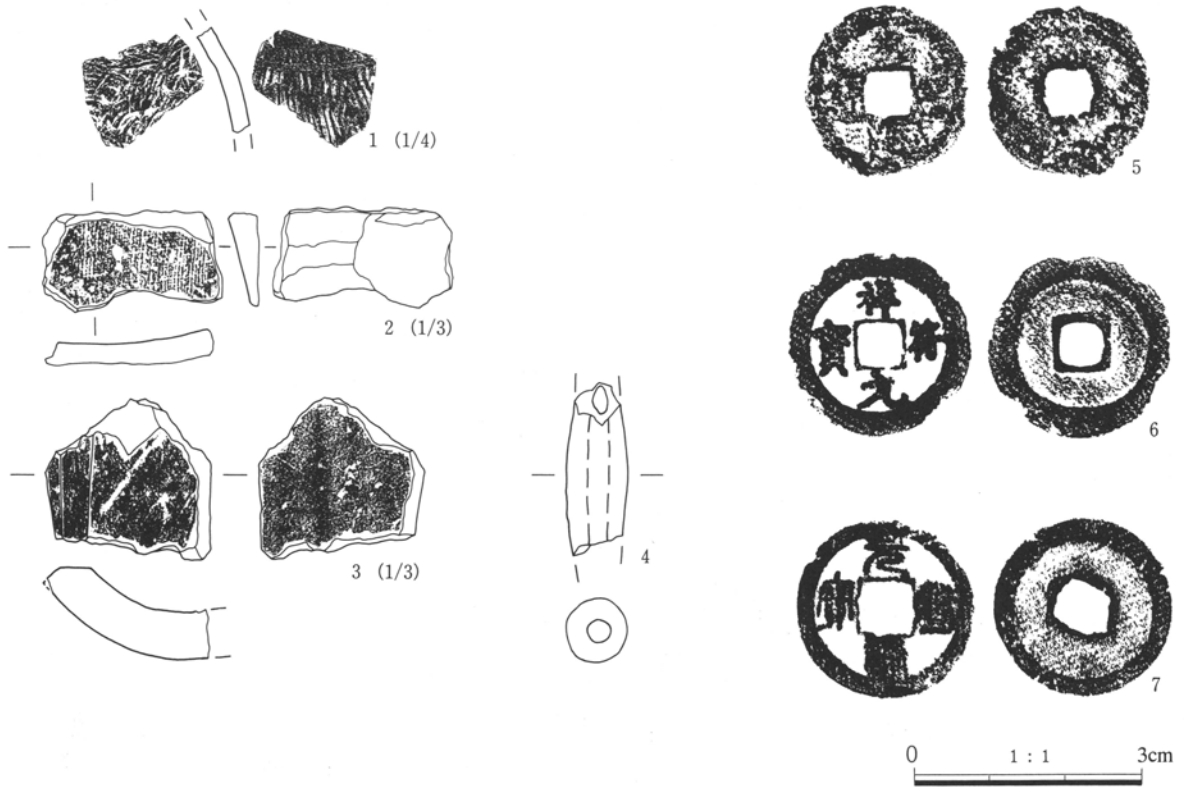


第53図 D区古代2面遺構全体図

第4節 古代2面 (As-B降下以前)

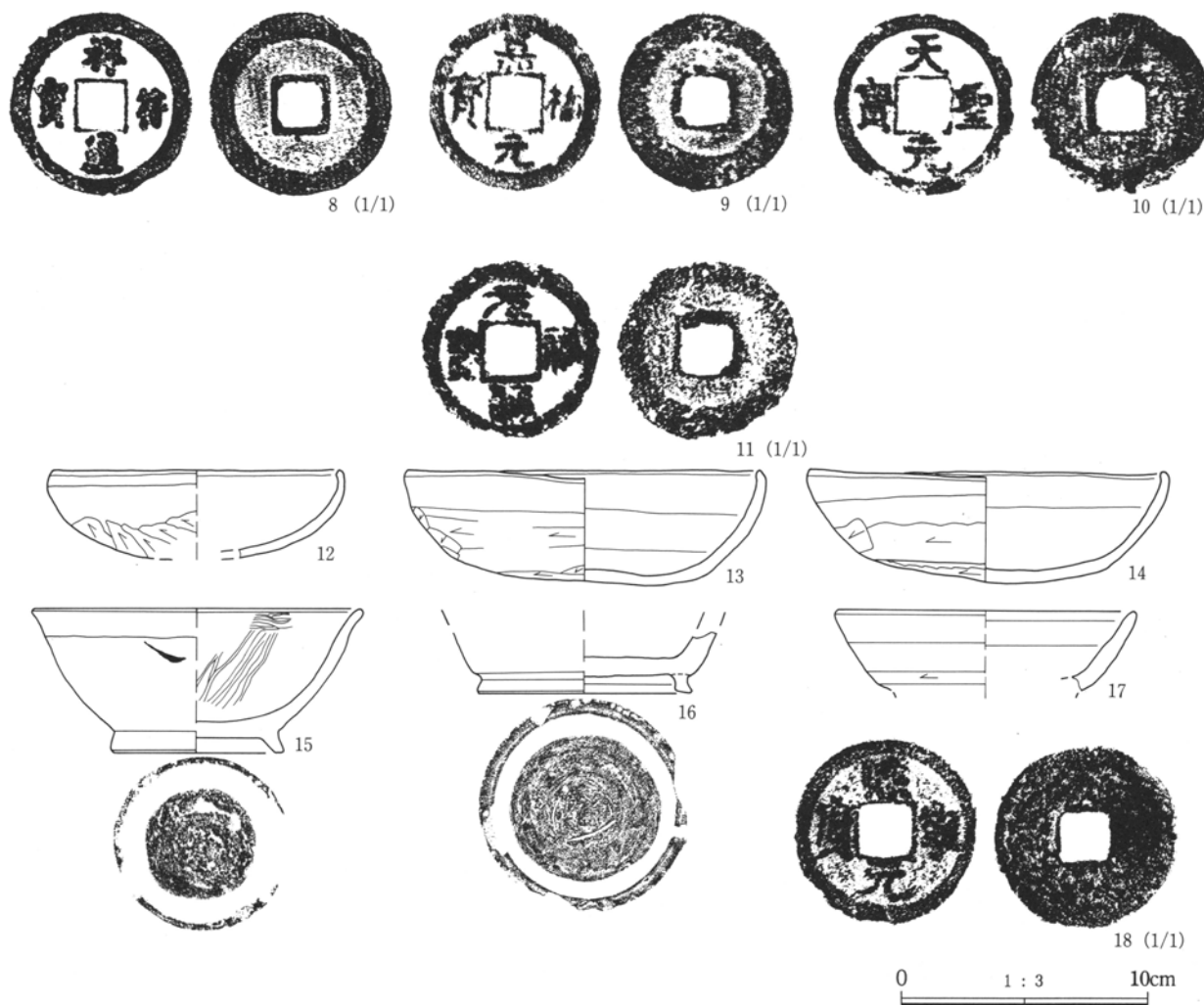


第54図 D区北区画古代2面水田



第55図 遺構外出土遺物 (1)

第4章 確認された遺構・遺物について

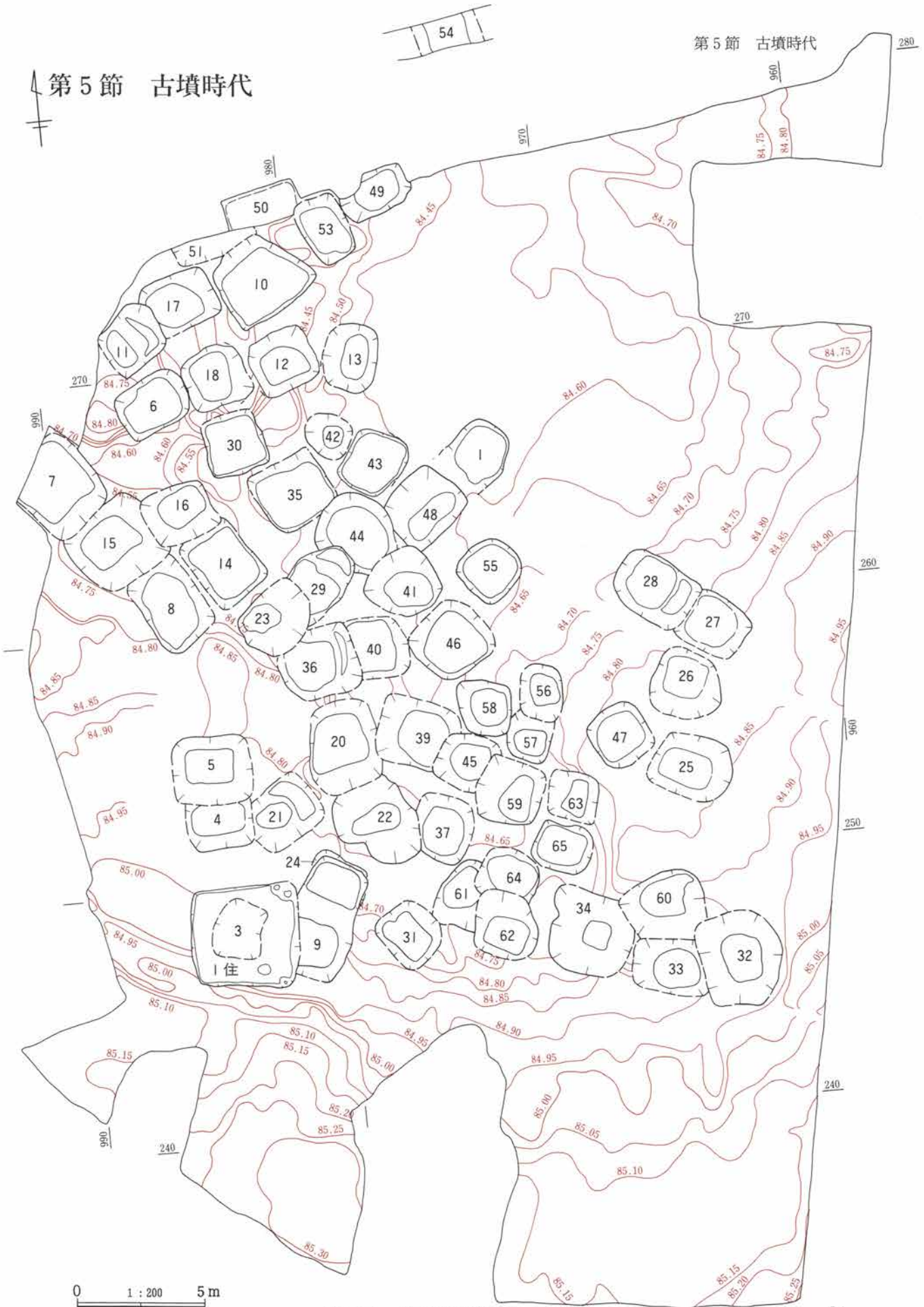


第56図 遺構外出土遺物(2)

古代2面遺構外出土遺物観察表

挿図・PL番号	種別	器種	出土位置	残存	度目(cm)	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴
55図-1・39	須恵器	甕	A区表土	胴部片	厚0.9	良・灰5Y 6/1・還元	外面平行叩き。内面青海波文。
55図-2・39	古代瓦		A区覆土	破片	厚1.0	良・灰N4/	全体に磨滅。内面布目。
55図-3・39	古代瓦		A区覆土	破片	厚1.9	良・灰N4/	外面ヘラあて痕。内面布目。
55図-4・39	土製品	土錘	A区覆土	1/2	直径0.8 長<2.0> 内径0.2	良・にぶい褐7.5YR 6/3・酸化	外面はやや磨滅している。
56図-12・40	土師器	坏	D区覆土	1/4	口(12.0) 高(3.5)	良・にぶい褐7.5YR 5/4・酸化	底部外面ヘラ削り。
56図-13・40	土師器	坏	D区覆土	3/4	口14.5 高4.7	良・にぶい橙7.5YR 6/4・酸化	底部外面ヘラ削り。全体磨滅。
56図-14・40	土師器	坏	D区覆土	3/4	口14.6 高4.6	良・橙5YR 6/6・酸化	底部外面ヘラ削り。外面黒斑。
56図-15・40	須恵器	碗	D区覆土	1/3	口(13.4) 底7.0 高5.8	良・淡黄2.5Y 8/3・酸化	内黒。外面墨書か。10C。
56図-16・40	須恵器	壺	D区覆土	底部片	底(11.6) 高<2.5>	良・灰N4/・還元	底面左回転のヘラ削り。9C。
56図-17・40	須恵器	碗	D区表土	口縁部片	口(12.2) 高<3.2>	良・灰N6/・還元	内外面にヘラ削り。8C。
55図-5・39	銅製品	古銭	A区覆土	ほぼ完形	直径2.2 内径0.6 厚0.1		元豊通寶か。初鑄1078年。
55図-6・39	銅製品	古銭	A区覆土	ほぼ完形	直径2.45 内径0.6 厚0.1		祥符元寶。初鑄1008年。
55図-7・39	銅製品	古銭	A区表土	完形	直径2.35 内径0.7 厚0.1		元豊通寶か。初鑄1078年。
56図-8・40	銅製品	古銭	B区覆土	ほぼ完形	直径2.5 内径0.65 厚0.1		祥符通寶。初鑄1009年。
56図-9・40	銅製品	古銭	B区表土	完形	直径2.35 内径0.7 厚0.1		嘉祐元寶。初鑄1056年。
56図-10・40	銅製品	古銭	B区覆土	完形	直径2.5 内径0.7 厚0.1		天聖元寶。初鑄1023年。
56図-11・40	銅製品	古銭	C区表土	完形	直径2.45 内径0.7 厚0.1		元祐通寶。初鑄1086年。
56図-18・40	銅製品	古銭	D区表土	完形	直径2.5 内径0.7 厚0.1		熙寧元寶。初鑄1068年。

第5節 古墳時代



第57図 A区古墳時代遺構全体図



第58図 A区 As-B堆積範囲



### 1. A区ローム漸移層上面

**確認** 古墳時代の粘土採掘坑は、波志江下沼に隣接するA区西半部の台地の縁辺部で合計66基確認された。ローム漸移層上面（粘土採掘坑確認面）の標高は、85.0m前後（第57図）である。粘土採掘坑（以下、採掘坑）と断定したのは、壁面の粘土層部分が抉り取られていることと、埋没土中に粘土が殆ど含まれていないことによる。

A区西半部では、上面の調査時にAs-Bが部分的に確認されている（第58図）が、これは採掘坑の埋没後に、その上面の窪みにFA・As-Cを含む黒褐色土が自然堆積し、さらにAs-Bが堆積した痕跡である。As-Bの堆積範囲は、採掘坑が確認された範囲にほぼ合致している。同層除去後には、ローム漸移層の上面で、As-Bの堆積範囲のほぼ全域に、ローム漸移層やローム層が入り乱れた風倒木痕に似た状況が確認され、数ヶ所で「S字状口縁台付甕」（以下、S字甕）の破片が確認された。そこで、調査当初に調査区北側から西側にかけて、湧水対策のために掘削したトレンチの北側壁面を精査したところ、As-Bよりも下層で、明らかに人為的に埋没したと判断できる土坑（粘土採掘坑）が4基存在することが認められた。平成11年1月20日のことである。このうちの54号採掘坑では、As-Bの下層にFAの堆積が確認されている。採掘坑は、FA下の自然埋没土の下層に位置していることから、FA降下の時期には既に埋没していたことが理解できる。採掘坑の掘削年代は、人為埋没土中にAs-Cが含まれていること、S字甕が出土土器の大半を占めていることから、As-C降下以降の4世紀と推定される。

**試掘** 採掘坑の発掘調査事例は、全国的に見ても数少なく、しかも、その形状から採掘坑1基当たりの規模や、採掘坑同士の新旧関係を把握することは非常に困難とされている。そのため、本遺跡の採掘坑の調査は、効率を上げるため確認面よりさらに20cm程重機での掘削を行い、採掘坑上層部の埋没土をある程度除去した状態で再度遺構確認を実施した（採掘坑確認面）。その結果、円形及び方形を呈する遺構が確認され、この時点では円形遺構を採掘坑、方形遺構を住居跡と捉えていた。方形遺構として確認されたのは、後に3・4・5・8・9・14・15・16号採掘坑とした部分である。平成10年度末に、両種遺構のうち確認範囲の端部に所在し、比較的容易に確認できたものについて各々1基ずつ半裁調査を行っている。1号採掘坑と1号住居跡である。住居跡は年度内に調査を終了したが、採掘坑は確認面から2m程掘り込まれていることが判明したため、完掘調査は安全対策として鋼矢板打設工事を行った後に実施されることとなった。

1号住居跡は、炉や竈は確認されていない。ただし出土遺物が、13号採掘坑と接合関係にあることから、採掘坑と同時期の遺構であることは間違いなく、採掘坑に伴う工房跡の可能性も考えられる。

また、採掘坑の周辺では、確認面での焼土の埋没状況や柱穴らしき円形の掘り込みが確認されているが、それらが採掘坑に関連する遺構かどうかの判断を下すことは困難であるため、本報告書では文章のみの記載に留めておく。

**調査** 採掘坑の発掘調査は、平成11年4月より実施した。当初予定4ヶ月という短期間での実施である。調査にあたっては、各遺構の範囲が臆気ながらも円形状に確認できるため、採掘坑の確認範囲全体にトレンチを設定することを避け、採掘坑1基ごとに範囲を確認し、半裁する方法を採用した。なかには輪郭を捉え誤ったものもあり、採掘坑の端部付近でセクション図を作成せざるを得なかったものもある。

土層断面図については、各遺構ごとに最低1ヶ所作成することを基本としたが、鋼矢板周辺では危険なため作成しなかったものがある。また、上・下半部の2度に分けて作成したものや、一夜にして壁面が崩落したために、作図不可能となったものもある。

平面図については、平板測量を原則としているが、それを補うために調査後半に航空写真測量を実施して

#### 第4章 確認された遺構・遺物について

いる。第63図は採掘坑の全景写真撮影時のものであるが、一部の採掘坑では、降雨等により壁面の崩落が激しく、各採掘坑の個別の平面図と多少異なるものがある。個別の平面図では、可能な限り上層部までの推定復元を行っており、各採掘坑の上端の推定輪郭線を重ね合わせたものがA区遺構全体図（第57図）である。

調査の順序については、新しい採掘坑から順番に行うことが不可能であった。それは、調査区北壁及び西壁に鋼矢板の打設が行われ、先に調査の終了したA区東半分が、工事工程に従って返却されたことによる。調査区は南側のみの出入口しかもたない袋小路となり、排土の運搬路に限られることから、調査区北西奥から南東方向へ向かって順番に調査せざるを得なかった。

**粘土** 採掘された粘土は、AT下の暗色帯からHr-HP混土層の間の粘土化した4層のうち、良質な上位3層のものと推測される。3層の粘土層は、上位から黒灰色層、青灰色層、褐色層である。AT下の暗色帯が変化したと考えられる黒灰色層は、非常に粘性が強く指先で捏ねるうちに罅割れるほど乾燥が早い粘土である。暗色帯下の黄褐色土層が変化したと考えられる青灰色層は、捏ねるうちに表面に塊が現れ、使用には余り適さないとされる粘土である。Hr-HP混土層が変化したと考えられる褐色層は、非常に伸びがあり乾燥が遅い粘土である。褐色層の下部にはHr-HPや植物繊維等の夾雑物が多量に含まれており、使用には適さないよう、採掘は行われていない。また、一部箇所では、黒灰色層の上層に黄橙色粘土層が確認されているが、同層は、層位から判断するとローム層が変化した可能性が高い。

採掘坑の壁面は、黒灰色層部分が抉り取られていることから、同層が最も必要とされた粘土と考えられる。採掘坑の確認位置から東、南へ向かって標高が高くなるに従って、粘土層は、黒灰色層が乱れて薄くなり、褐色層が消滅し、青灰色層が厚くなる状況が確認されている。採掘坑が確認されたのは、黒灰色層がほぼ良好に堆積する範囲内に限られており、最も必要とされた黒灰色層の堆積状況が良好でなくなることにより、粘土の採掘が終了したと推測される。粘土層は、A区東端部では、基本土層図の暗色帯以下の各層に変化して確認できなくなる一方で、B区低地部やC区西半部に於いても確認されている。しかし、両区の調査では採掘坑の確認はない。

**形状** 採掘坑の平面の形状は、遺構確認時には円形と見えたが、完掘時（第63図）には長方形のものが殆どで、一部に正方形や台形のものも確認されており、円形のものも皆無となった。方形を呈することから当初、住居跡と考えていた4・5号採掘坑部分や8・14・15・16号採掘坑部分も、調査の結果全ての方形の採掘坑であることが確認され、数軒存在すると予測された住居跡は、1軒のみの確認に留まった。ここでは、方形区画の中央部分に十字にベルトを設定したところ、採掘坑の壁面上となり、底面までのセクション図を作成できなかったものがある。また、8・14・15・16号採掘坑では、その範囲内に黄白色ローム層が確認され、住居跡の掘り方面が露出している可能性も考えられたが、その下層から暗褐色土が現れたことにより、この黄白色ロームも埋没土と断定している。

幾つかの採掘坑では、四隅の一角が掘り残されて内部に中段が形成されており、そこからS字甕が確認されたものもある。採掘坑の完掘状態での規模は、長軸3m、短軸2m程度のものが多く、確認面から底面までの深さは1.8m程度である。

採掘坑の断面の形状は、上記黒灰色粘土層部分が抉られ、袋状を呈しているものが多い。抉れ部分の奥行は5～40cm程度であるが、採掘坑の確認面から底面までの深さが大人の身長を越えており、調査期間も梅雨から夏期にかけての多雨時期に重なったため、安全を期して多くの採掘坑の抉れ部分の完掘を断念せざるを得なかった。本遺跡の採掘坑は、一部の例外を除いて、隣接する採掘坑との間に最低でも厚さ40cm程度以上の壁が残存している。採掘すべき粘土層がかなり深い位置に存在することから、他の遺跡で確認されている

採掘坑のように、壁面を崩しながら横方向へ次々と粘土層を掘り抜いていくことが危険であり、不可能であったためと考えられる。それでも壁面の粘土層は、両側から大なり小なり抉られており、壁面が残存しない箇所については、粘土の採掘時に崩落したものと考えられる。さらに、殆どの採掘坑では、隣接する採掘坑との間の壁上面が、確認面よりもテラス状に一段低いことが確認されている。

**埋没土** 採掘坑の埋没土には、所謂天地返し現象が確認されている。埋没土は、一部の例外を除いて下層からAs-Cを含む黒褐色土、ローム漸移層暗褐色土、ローム層黄褐色土であり、当時の地表面の土層から順に埋没していることが理解できる。先に掘られた採掘坑は、次の採掘坑が掘られる際に発生する余分な土砂を用いて埋め戻され、目的の粘土層に達した段階で、土砂の投げ込みが終了したことが推定される（口絵2）。壁面まで達しなかったものは、降雨等により土砂が崩落して本来の壁面が現れたことから、掘削された土砂が直ちに周囲の採掘坑へ投げ込まれたことが推測される。換言すれば、幾つかの採掘坑が連続して掘削されていたことの証明になる。

**作業道** 採掘坑の埋没状況は、上層部と中、下層部とで大きく異なる。中、下層部が前述の天地返し現象で埋没しているのに対して、上層部は全く異なる埋没土である（第64図）。上層部の埋没状況は、採掘坑ごとに異なり、一括埋没土や薄く層状の堆積が確認できる。このことから、中、下層部が埋没した後で時間差をもって上層部が埋没したことが考えられる。この時間差の要因については、上層部まで埋没していた天地返しの土砂がてん圧された後に別の土砂が埋没したことも考えられるが、上、中層部の境界付近の埋没土に粘土塊が混入し、一部の採掘坑では、粘土が貼られたような状況も確認できることから、先に掘削された採掘坑の埋没後、次の採掘坑を掘削する際に利用された作業道（踏み込み跡）の痕跡と捉えたい。隣接する採掘坑との間の壁面が確認面よりもテラス状に一段低い状況も、そこを作業道として利用するために掘り下げた跡と推測される。

**重複** 隣接する採掘坑の重複関係は、埋没土の最上層部で重複しているものが殆どで、壁面を破壊して下層部で重複しているものはごく少数である。上層部での重複関係は、必ずしも採掘坑の掘削された順番を表している訳ではない。まして、上層部を作業道と捉えたことにより、新旧関係はより一層複雑になっている。そのため、採掘坑同士の新旧関係については、中・下層部に見られる天地返しの埋没土の投げ込み方向、各採掘坑から出土した遺物による遺構間接合等から総合的に判断する以外に方法はなく、今後十分な検討を要すると考えられる。

**単位** 採掘坑は、数基を1単位として掘削されたと推測される。遺構範囲確認の段階では、採掘坑中央部にFA・As-Cを含む黒褐色土で埋没した溝状遺構が確認されている。同遺構は、外側へ枝状に分岐し、先端には円形状の輪郭が確認されている（口絵1）。あたかも、貨幣を鑄造する際の枝銭のようであった。採掘坑の数基を1単位とするまともは、各々の先端の円形状の輪郭部分で顕著（第57・63図）であり、埋没土により、中央から先端へ向かって順番に掘削されたことが明らかである。

一例として、47・25・26・27・28号採掘坑を1単位と考えることができる。掘削の順序は、47号採掘坑から28号採掘坑方向である。それは、前述の天地返し現象により明白である。47号採掘坑の埋没土は東から投げ込まれており、25号採掘坑掘削の際に発生した土砂で埋め戻されたことが明らかである。同様に、25号採掘坑は26号採掘坑、26号採掘坑は27号採掘坑、27号採掘坑は28号採掘坑掘削の際に発生した土砂で埋め戻されていた。28号採掘坑は、埋没土中に砂粒が含まれており、天地返しの土砂で埋没していないことから、これら5基の中で最後に掘削され、そのまま放置されていたことが推測される。掘削の単位の先端に所在する5・32・55号採掘坑等においても同様な状況が確認されていることから、粘土の採掘は、中央から枝部分先

#### 第4章 確認された遺構・遺物について

端へ向かって掘り進められたと考えられる。

確認面では数箇所、2基の採掘坑を繋ぐように溝状遺構が確認されている(第63図)。当時の地表面は確認面よりもさらに上位であることから、何れも底部付近のみの残存に過ぎない。残存状況が比較的良好なものの断面を表したものが第64図である。調査の段階では、水路、作業道の両面から検証を行っているが、埋没土中に砂粒を確認できなかったこと、底部に粘土が貼り付いている箇所が存在することから、作業道との見解が強まっていた。そして、前述のように採掘坑埋没土の上層部が作業道であると断定したことにより、最終的には、溝状遺構についても作業道の一部であるとの結論が下された。詳細については、「3. 粘土採掘坑に伴う作業道」を参照されたい。

**土器** 採掘坑出土遺物のうち実測対象遺物は、土器129点、木製品57点である。土器の器種は、高坏、埴が数点出土している以外は、S字甕を主とする甕類の占める割合が圧倒的である。土器は、採掘坑の底部付近よりも、上層部から出土しているものが多い。上層部出土の土器は、作業道部分と、採掘坑と作業道の埋没土の境界付近から出土しているものがある。後者はてん圧等の問題もあり、採掘坑の埋没に伴うものなのか、作業道の廃棄に伴うものなのかを判断することは困難である。上層部出土遺物のうち、テラス状に壁面が一段下がっている部分から出土しているものには、現場で確認できた採掘坑の上端輪郭線よりも外へ出てしまうものがあるが、隣接する採掘坑との間に掘り込まれた、当該採掘坑上層部の作業道部分から出土した遺物と考えられる。

採掘坑より出土した土器の殆どは、輝石、角閃石類、石英、白色粒を混入しており、赤城山南麓末端地域で一般的に見られる鋳物を含む胎土であることが判明している。S字甕の整形技法では、頸部に指が入る程度の伸びがあること、頸部付近に刷毛目を施した後横撫でが入ることが特徴として認められる。

A区古墳時代の出土遺物は、採掘坑、採掘坑に伴う作業道、1号住居跡の相互に遺構間接合が多数確認され、完形状態まで復元されたものも多い。各遺物については、本来どの遺構に帰属するかの判断が難しいため、1号住居跡出土遺物以外については、採掘坑関連遺構出土遺物として一括で掲載する。

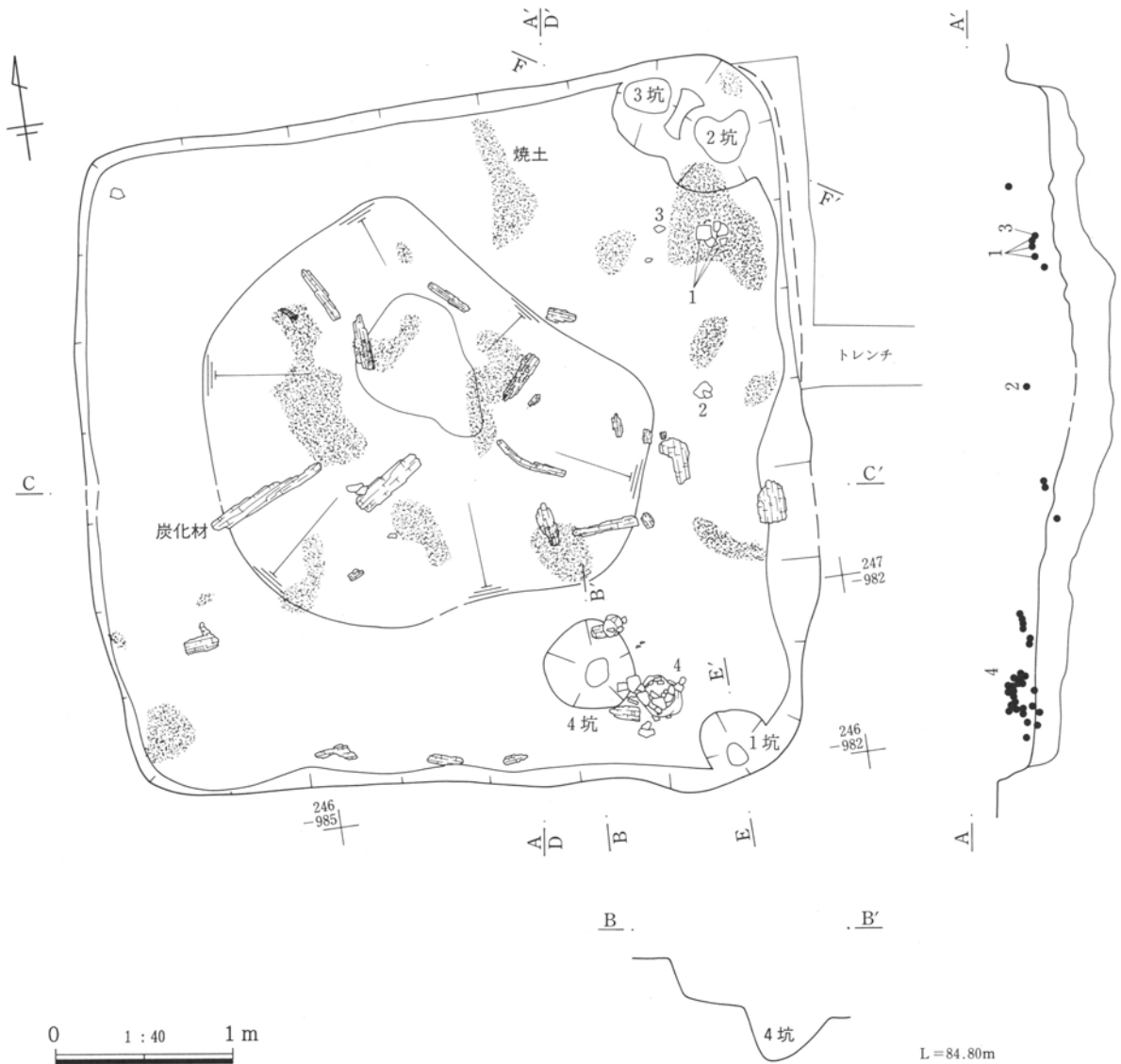
**木器** 粘土の採掘に使用された木製品は、鋤・鋤・斧の柄、梯子、盆、板材、掘り棒等が、採掘坑の底部付近より出土している。この中で、直接粘土の採掘に使用したものは掘り棒と考えられる。掘り棒は棍棒状を呈し、比較的残存状況が良好なもので、長さは70cm程度である。発掘調査時には、粘土層に突き刺さった移植鏝を抜き取るにも一苦労であったことを考えると、上層部では鋤や鋤を用いて掘削し、粘土の採掘には鈍器である掘り棒を用いて、最終的には手でもぎ取ったことが推測される。

50号採掘坑出土の梯子は、残存部が約2mの大型のもので、採掘坑の深さを反映している。36号採掘坑出土の盆は、排土あるいは採取した粘土を運んだものと考えられる。数基の採掘坑から出土した板材は、建築部材の転用で足場板として用いられたと考えられる。39号採掘坑出土の斧の柄は、調整具の柄であるとの見解を得ている。樹種はクリ、カシ、クスノキ等の一部の搬入品以外は、周辺地域に自生していたコナラ、クヌギが殆どである。粘土の採掘に使用された各種木製品が一括して出土したことは、当時の粘土採掘の様子を知る上で意義が大きい。

以上が、古墳時代の採掘坑の概要である。66基確認された採掘坑の内、民地境及び鋼矢板に伴うトレンチ壁面に所在し調査を行えなかった2・19・38・52・66号採掘坑の5基を除く61基について次項に記載を行う。

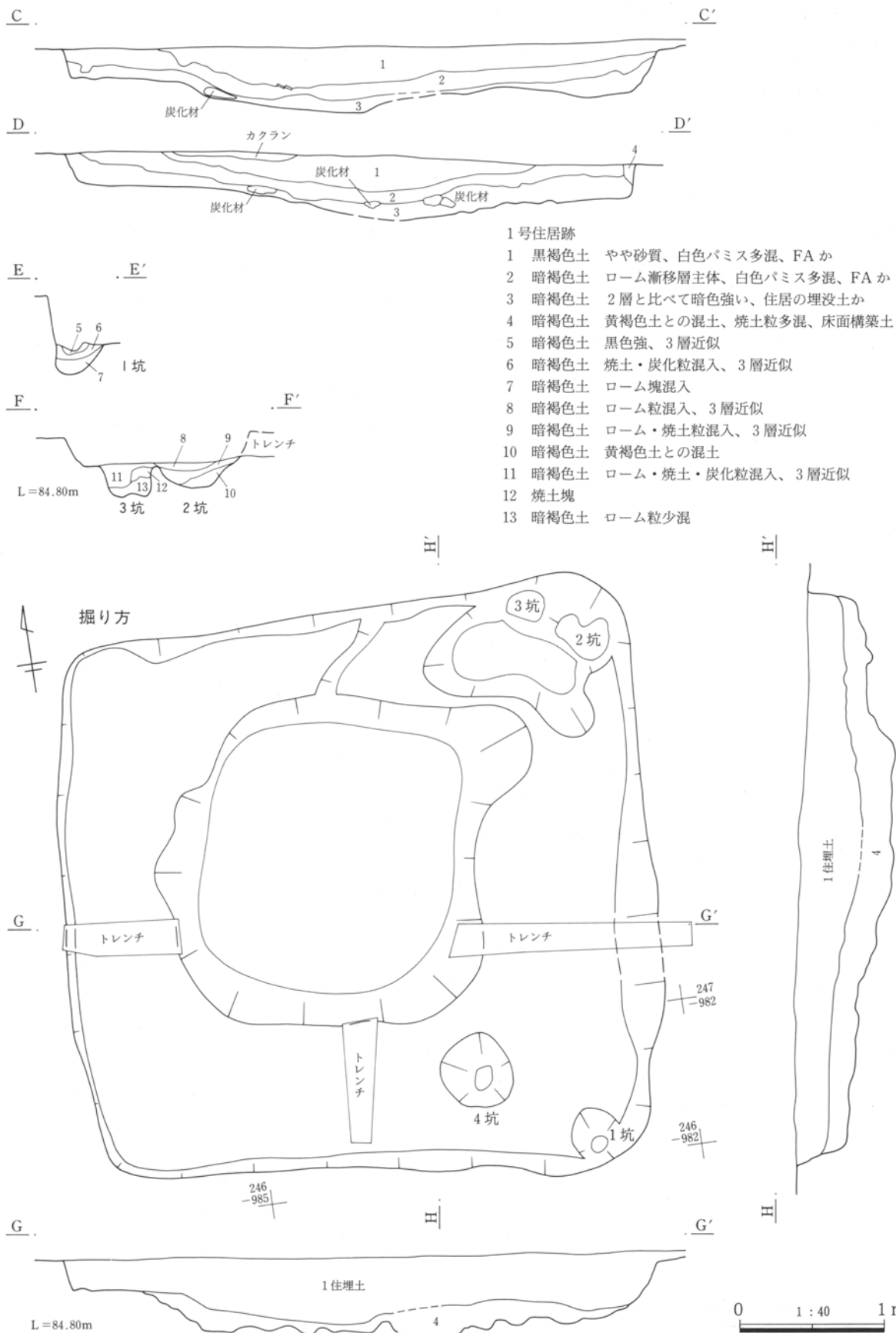
2. A区1号住居跡〔第59・60図 PL.11〕

調査区南西端、X246-Y982グリッドに位置する。形状はほぼ隅丸方形を呈す。規模は東西4.08m、南北3.84m、壁高は40cm程度、長軸方位はN-89°-Wである。床面構築土は、暗褐色土を主体とするローム塊の混土で厚さは16cm程である。竈、炉、硬化面は確認されない。埋没土に焼土粒が多量に含まれ、上層では炭化材が出土している。遺構内には4基の土坑が所在する。住居跡と類似した埋没土であることから、住居使用時のもので廃棄時に埋没したと考えられる。下面に3・9号採掘坑が重複する。中央部が沈んでいるのは3号採掘坑の影響と考えられる。3号採掘坑と同一遺構かどうかの検証を行ったが、3号採掘坑は本遺構の中心に位置しないこと、出土遺物に接合関係が認められないことから別の遺構と判断している。遺物は1～4の4点である。器種はS字甕、甕、壺、高杯、埴で、採掘坑とは異なる様相を呈している。9号採掘坑上層部の作業道廃棄後に本遺構が構築されたことが断面から判断できる。本遺構は生活の痕跡に乏しく住居跡としては疑問が残る。採掘坑に伴う何らかの工房跡の可能性が考えられる。

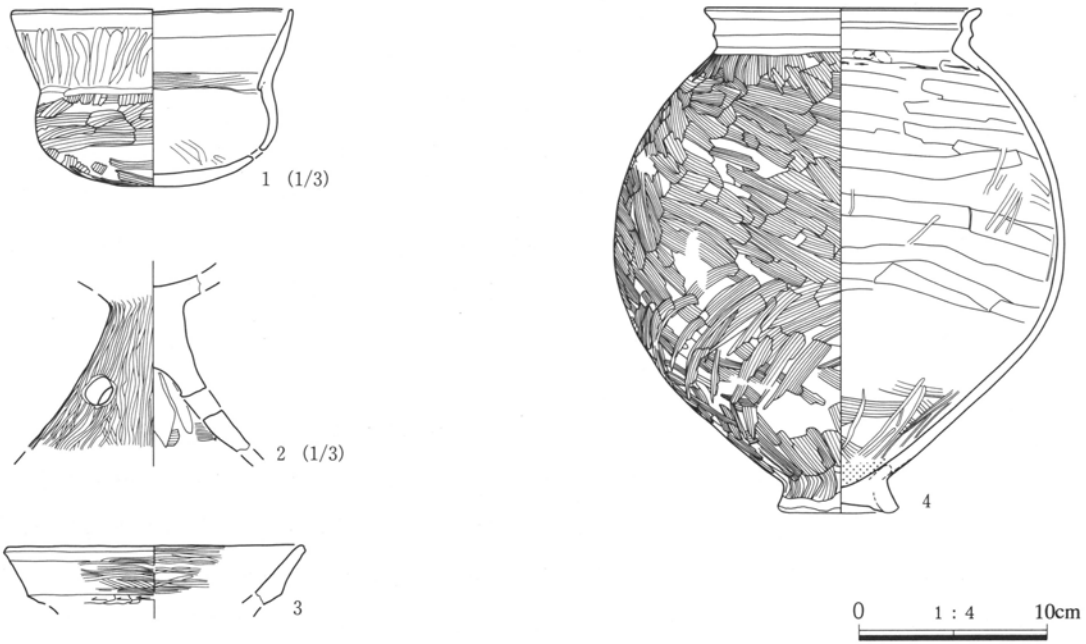


第59図 A区1号住居跡 (1)

第4章 確認された遺構・遺物について



第60図 A区1号住居跡(2)



第61図 A区1号住居跡出土遺物

古墳時代遺構出土遺物観察表 [1号住居跡]

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置	度目(cm) 残存	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴
61図-1 PL.41	土師器 埴	(+12)	口11.1 高7.0 ほぼ完形	良・ふい橙 5YR 6/4・酸化	扁平な丸底。胴部中央に焼成前に直径5mmの穿孔。内面剝離著しい。全体に燻し状。
61図-2 PL.41	土師器 高坏	(+27)	高<7.0> 厚0.7 1/3 坏底部～脚部片	良・明赤褐 5YR 5/6・酸化	脚部中央に3箇所の穿孔、直径12mm。坏部内面底部にヘラ削り後ミガキ。
61図-3 PL.41	土師器 壺	(+10)	口(16.0) 口縁部片	良・赤褐 5YR 4/6・酸化	外面口縁の一部に黒斑。
61図-4 PL.41	土師器 S字甕	(+6)・覆土	口14.6 底6.5 高<26.5> ほぼ完形	良・赤褐 5YR 4/8・酸化	胴張型。台部欠損後も使用か、端部を調整している。

### 3. 粘土採掘坑に伴う作業道

採掘坑の上層部では、溝状遺構が確認されている。現場での調査をもとに、整理事業時に総合的に判断した結果、本遺構は採掘坑に伴う作業道（踏み込み跡）との見解を得ている。

採掘坑の確認時には、ローム漸移層の上で、採掘坑の範囲内の中央にFA・As-Cを多量に含む黒褐色土で埋没する溝状遺構が確認され、そこから枝銭のように外側へ分岐する状況が確認されている（口絵1）。同遺構は、採掘坑の上部に位置するため、先行して調査を行い同黒褐色土を除去している。しかしながら、採掘坑の調査が進むにつれて、同黒褐色土は自然埋没土で、溝状遺構の本来の埋没土が下層にあることが、採掘坑の断面から明らかとなった。溝状遺構と採掘坑の埋没土とは酷似しており、平面では区別することが不可能であった。

溝状遺構が中央より外側へ分岐する部分では、溝状遺構が採掘坑同士を繋ぐような状態で、断片的に確認されている。具体的には、14号採掘坑と35号採掘坑の間、16号採掘坑と35号採掘坑の間、21号採掘坑と24号採掘坑の間、48号採掘坑と35号採掘坑の間、60号採掘坑と32号採掘坑の間、47号採掘坑と25号採掘坑の間、25号採掘坑と26号採掘坑の間である。そのうち残存状況が比較的良好なものを掲載したのが第64図であるが、当時の地表面は確認面よりも高いことから、底部付近のみの残存と考えられる。調査時には、本遺構について水路と作業道の両面からの検証を行ったが、底部付近に粘土が貼り付いていること、砂粒を確認できなかったことから、作業道としての見解が強まっていた。そして、整理事業時に総合的に判断した結果、本遺構は採掘坑に伴う作業道（踏み込み跡）と断定した。

採掘坑の断面図では、採掘坑の埋没状況が、上層部と中、下層部で大きく異なることがわかる。中、下層部が所謂天地返し現象で埋没しているのに対して、上層部の埋没状況は、一括埋没土や薄く層状の堆積である（第64図）。このことから、採掘坑は中、下層部が埋没した後で時間差をもって上層部が埋没したと考えられる。この時間差の要因については、上層部まで埋没していた天地返しの土砂が填圧された後に別の土砂が埋没したことも考えられるが、上、中層部の境界付近の埋没土に粘土塊が混入し、一部の採掘坑では粘土層が貼られたような状況も確認できることから、先に掘削された採掘坑の埋没後、次の採掘坑を掘削する際に利用された作業道と捉えたい。粘土採掘坑の、採掘坑同士が隣接する間の壁面が確認面よりもテラス状に一段低い状況も、そこを作業道として利用するために掘り下げた跡と推測される。作業道と採掘坑の関係については、47号採掘坑と25号採掘坑の間の作業道を例にとると、47号採掘坑は東から投げ込まれた天地返しの土砂で埋没していることから、25号採掘坑掘削時に埋没していると考えられ、同作業道は25号採掘坑掘削に伴うものと考えられる。

第62図は、採掘坑に伴う作業道を可能な限り復元したものである。ローム漸移層上面の遺構確認図、採掘坑確認面での遺構確認図、実際に調査を行った部分、採掘坑の断面図等から総合的に判断したものである。ローム漸移層上面の遺構確認図で確認できた作業道は、採掘坑埋没後に新たに掘り込まれたものである。換言すれば、その下にある採掘坑は比較的早く埋没していると言える。粘土採掘坑確認面で確認された作業道の範囲は、確認面での上端の最大範囲を表しているが、地山の崩落範囲等も含まれるため、実際に作業道として使われていた範囲は上端よりも狭まると考えられる。作業道は、各地点で埋没状況が異なるため、全体が同時に使用されたものではなく、部分的に随時使用されていたと考えられる。

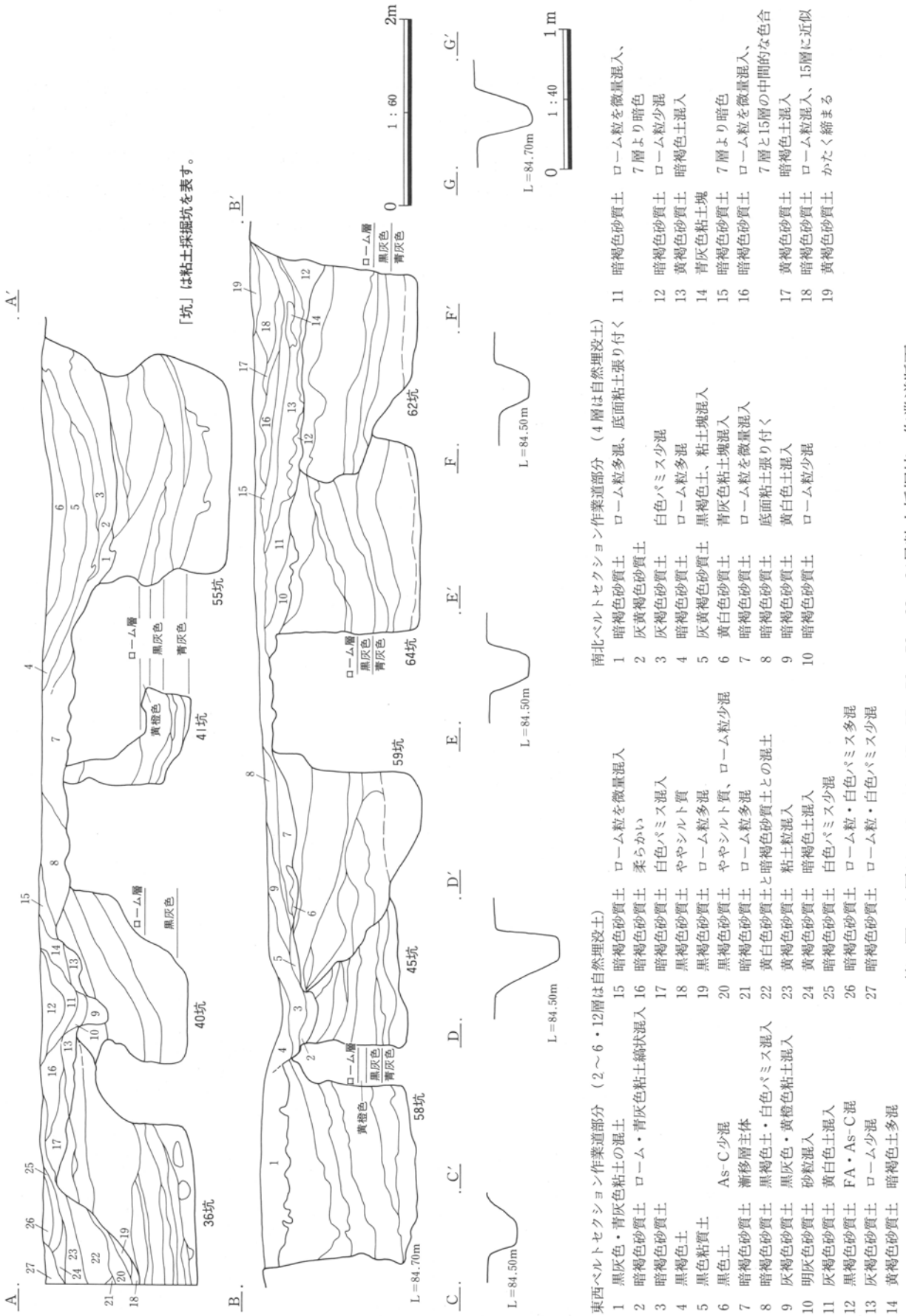




第62図 A区粘土採掘坑に伴う作業道復元図



第63図 A区粘土採掘坑完掘状態図

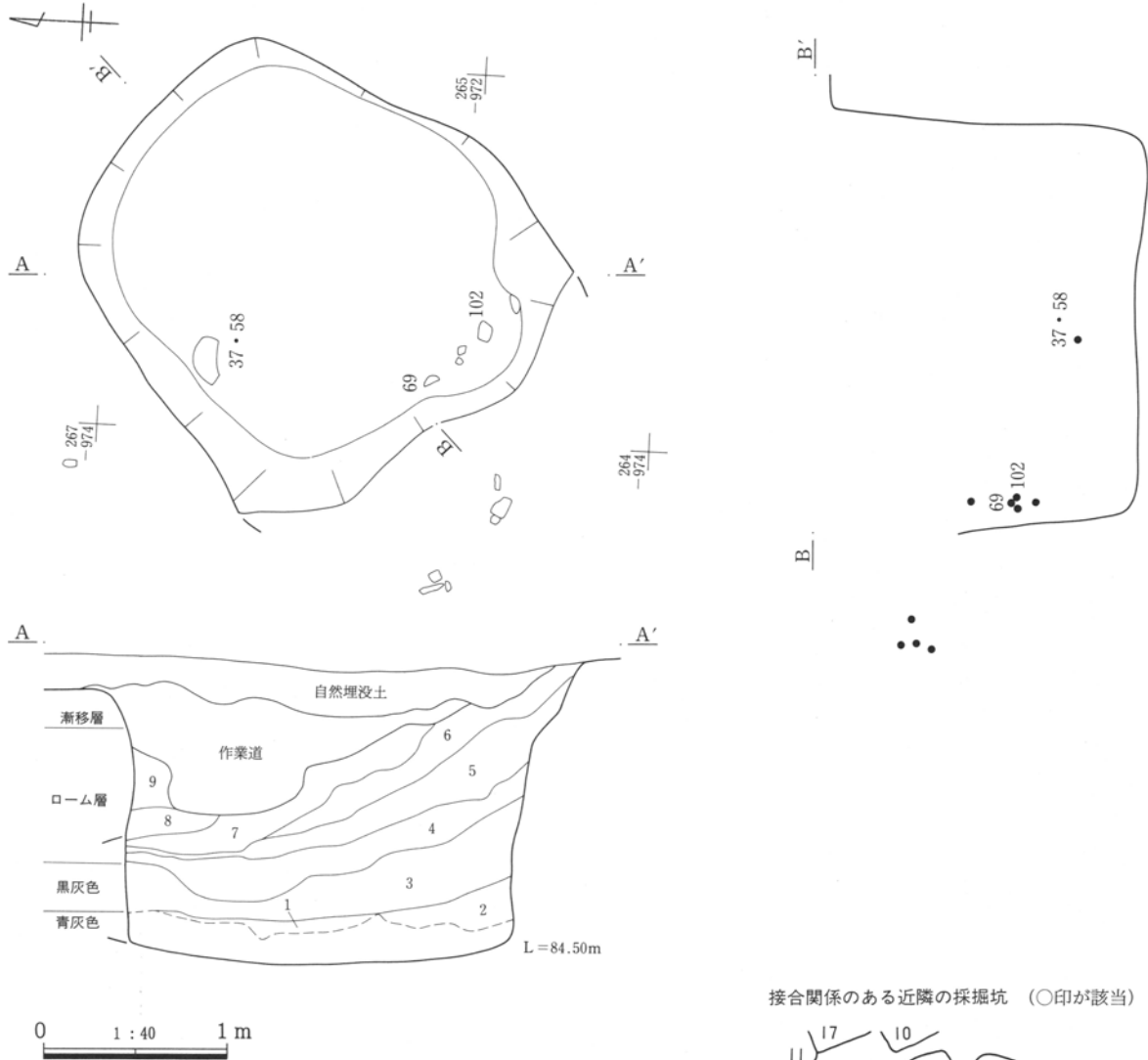


第64図 A区36・40・41・45・55・58・62・64号粘土採掘坑、作業道断面

4. 調査した粘土採掘坑

1号粘土採掘坑〔第65図 PL.12・24〕

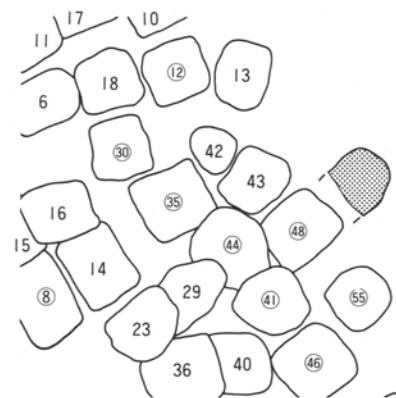
X264-Y972グリッドに位置し、ほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-43°-Eである。規模は、長軸(2.34)m、短軸2.12m、確認面からの深さは1.60mである。粘土層の厚さは54cmで、黒灰色26cm、青灰色28cmである。採掘された粘土は2.7m<sup>3</sup>である。上部が作業道と推定される南西壁が、確認面より65cm程低い。北西壁は大きく抉れているが、精査されていない。土砂は南から投げ込まれており、天地返しである。遺物は37・58・69・102である。接合関係は8・12・30・35・41・44・45・46・48・55・57・62号採掘坑、作業道である。



1号採掘坑

- |   |        |                        |     |
|---|--------|------------------------|-----|
| 1 | 灰白色粘質土 | やや砂質                   | IV  |
| 2 | 黄白色粘質土 | 灰色粘質土との混土              | IV  |
| 3 | 灰褐色砂質土 | ローム粒少混、下部に黒灰色・青灰色粘土塊混入 | II  |
| 4 | 暗褐色砂質土 | 全体灰色強い、ローム粒少混          | II  |
| 5 | 灰褐色砂質土 | ローム塊少混、黒灰色粘土塊混入        | II  |
| 6 | 黄白色粘質土 | 地山に近似                  | III |
| 7 | 灰褐色砂質土 | ローム塊・黒灰色粘土塊多混          | II  |
| 8 | 黄褐色粘質土 | 灰褐色砂質土との混土、ローム塊少混      | II  |
| 9 | 黄褐色砂質土 | 灰褐色砂質土との混土             | II  |

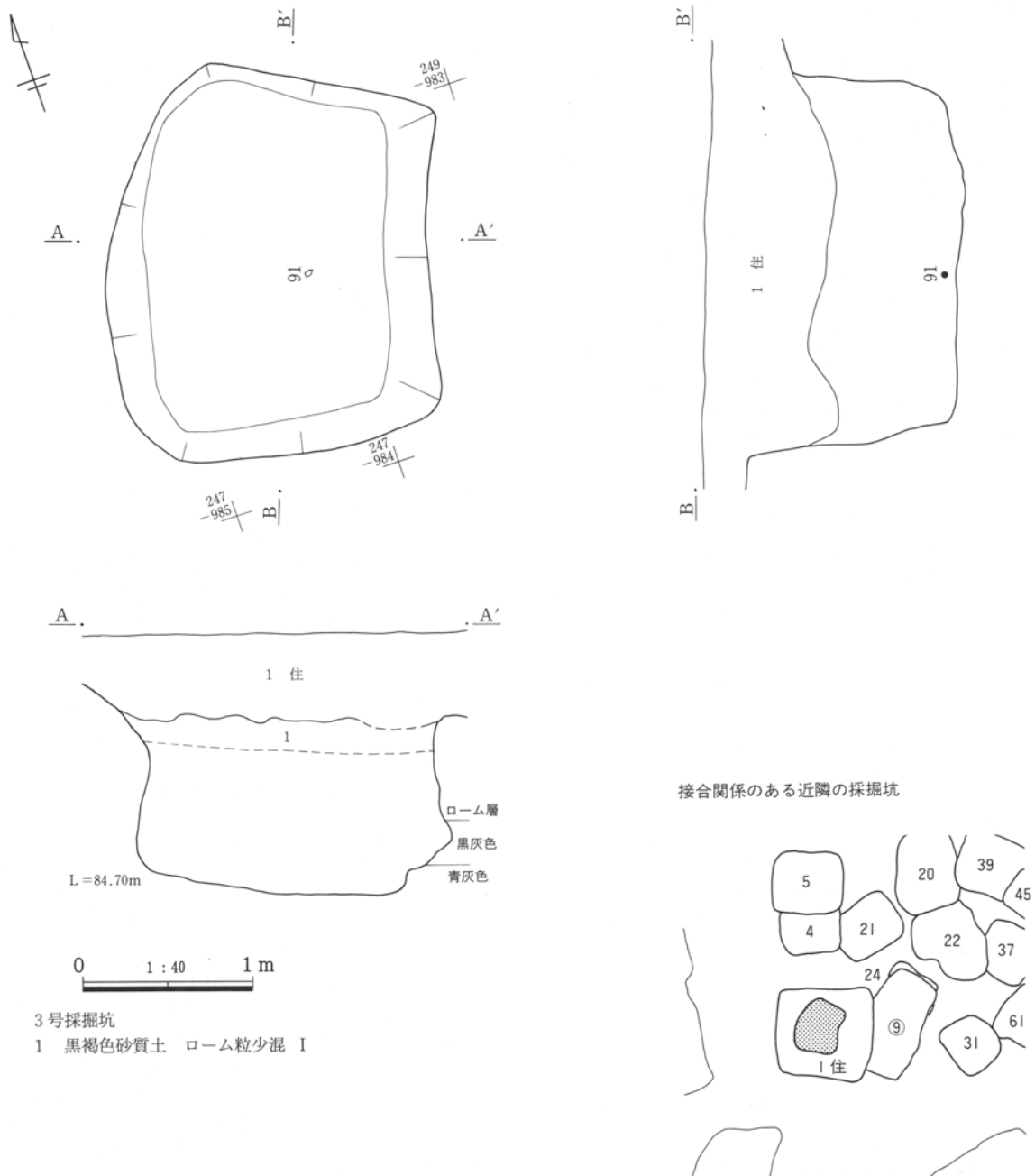
接合関係のある近隣の採掘坑 (○印が該当)



第65図 A区1号粘土採掘坑

3号粘土採掘坑〔第66図 PL.12〕

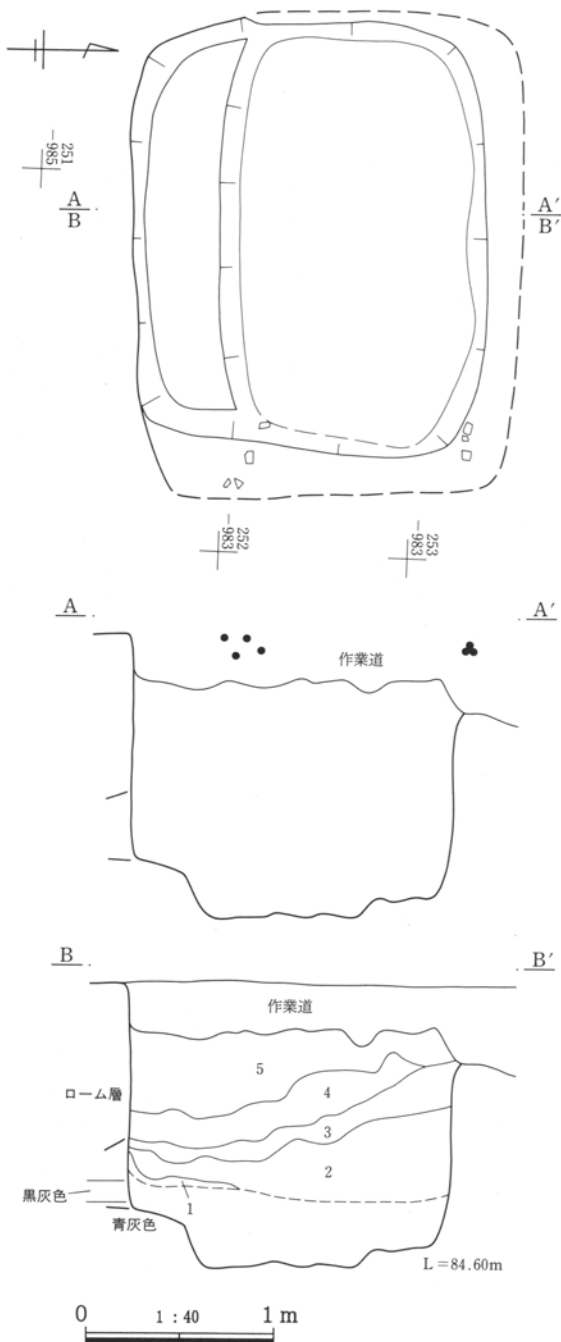
採掘坑全体の南西端、枝状に分岐する先端に所在する。X247-Y983グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-20°-Eである。規模は、長軸2.22m、短軸1.88m、確認面からの深さは1.52mである。壁面の粘土層の厚さは42cmで、黒灰色26cm、青灰色16cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は1.8<sup>3</sup>mである。上面には1号住居跡が重複する。本遺構は、1号住居跡の中心に位置していないこと、同住居跡の出土遺物との間に接合関係が確認されていないことから、同一の遺構ではないと考えられる。壁は全面とも抉れているが、東壁の抉れは大きい。土砂の投げ込み方向は不明である。遺物は91である。接合関係は9号採掘坑、作業道とある。



第66図 A区3号粘土採掘坑

4号粘土採掘坑〔第67図 PL.12〕

採掘坑全体の南西端、枝状に分岐する部分に所在する。X251-Y983グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-90°である。規模は長軸(2.54)m、短軸(2.07)m、確認面からの深さは1.50mである。粘土層の厚さは46cmで、黒灰色12cm、青灰色34cmであり、褐色は確認されていない。採掘された粘土は2.0㎡である。北壁が確認面より40cm程低く、東壁は21号採掘坑との重複で破壊されている。平面から4号採掘坑が新しいと判断している。西、南壁は大きく、北壁はやや抉れているが、精査されていない。土砂は北から投げ込まれており、天地返しである。遺物の接合関係は5・15・20・23・29・36・65号採掘坑、作業道とある。



4号採掘坑

- |   |        |             |     |
|---|--------|-------------|-----|
| 1 | 黄白色粘質土 | ローム主体       | IV  |
| 2 | 黒褐色粘質土 | やや砂質、ローム粒多混 | I   |
| 3 | 暗褐色砂質土 | 全体暗灰色強い     | II  |
| 4 | 黄橙色粘質土 | 底部に灰色砂質土混入  | III |
| 5 | 黄白色粘質土 | 褐色混入乱れている   | III |

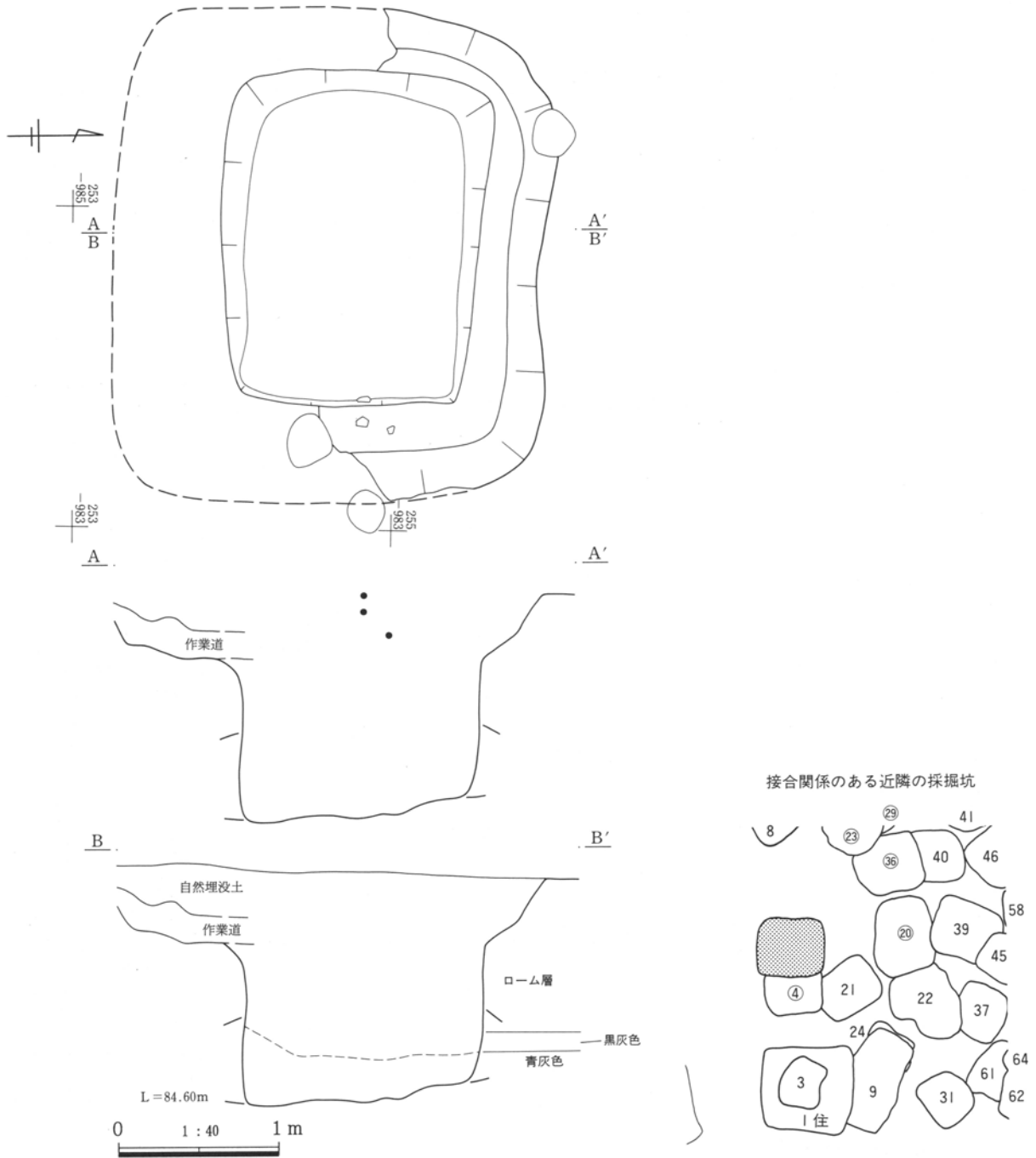
接合関係のある近隣の採掘坑



第67図 A区4号粘土採掘坑

5号粘土採掘坑〔第68図 PL.12〕

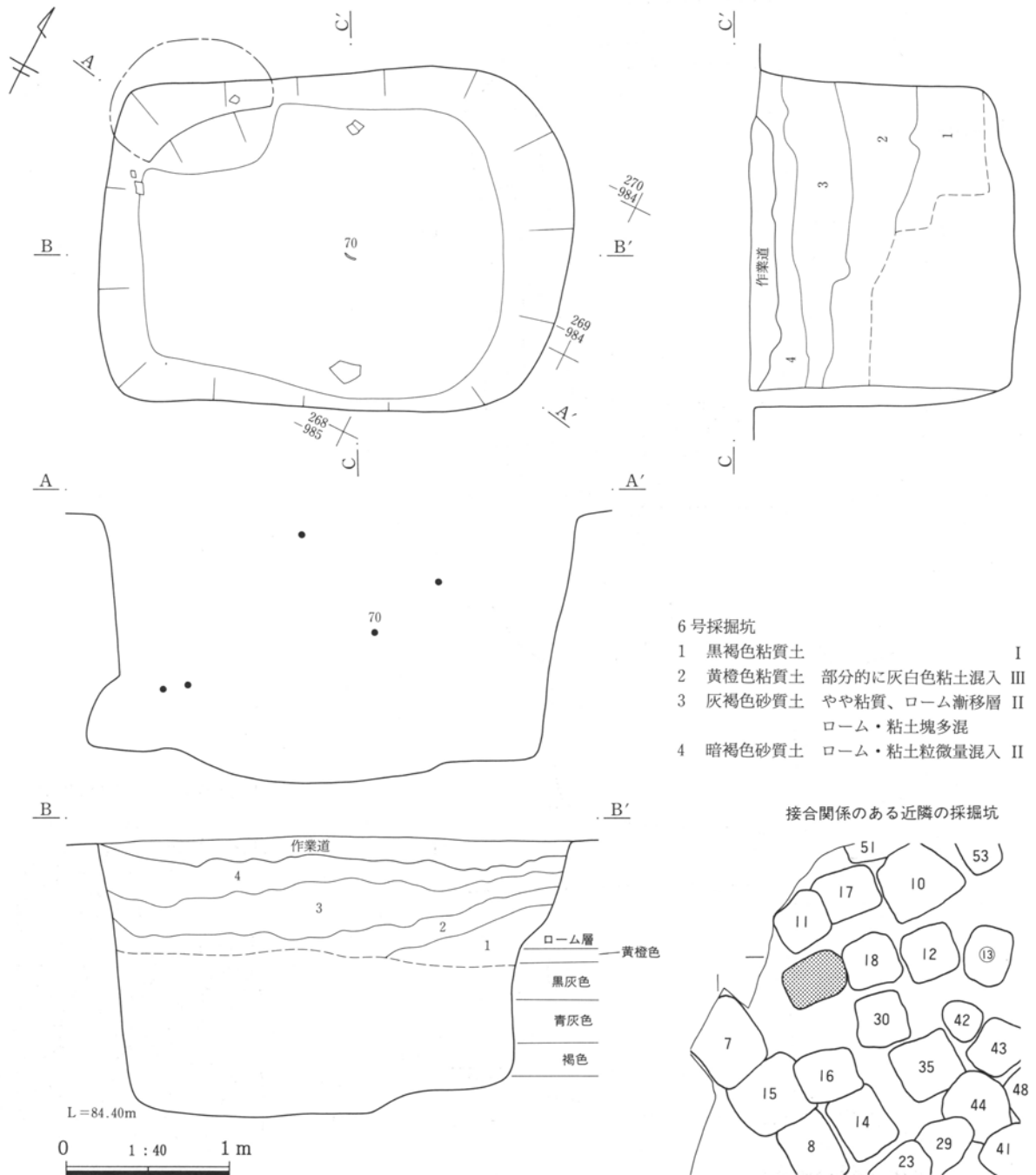
採掘坑全体の西端、枝状に分岐する先端に所在する。X253-Y983グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-86°-Wである。規模は、長軸(3.05)m、短軸(2.64)m、確認面からの深さは1.44mである。壁面の粘土層の厚さは46cmで、黒灰色13cm、青灰色33cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は1.5m<sup>3</sup>である。上部が作業道と推定される南壁が、確認面より48cm程低い。全壁面とも大きく抉れているが、精査されていない。降雨により土層断面が崩落したため埋没土については不明であるが、大半は自然埋没土であり、暫く完掘状態のままであったことが予想される。遺物の接合関係は4・20・23・29・36・65号採掘坑、作業道とある。



第68図 A区5号粘土採掘坑

6号粘土採掘坑〔第69図 PL.12〕

採掘坑全体の北西端で、X267-Y984グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-63°-Eである。規模は、長軸2.88m、短軸2.06m、確認面からの深さは1.70mである。壁面の粘土層の厚さは1.00mで、黄橙色8cm、黒灰色23cm、青灰色26cm、褐色43cmである。採掘された粘土は5.9m<sup>3</sup>である。壁面は西、東壁が抉れている。北西隅の抉れ部分を試掘したところ50cm以上の奥行が確認されたが、それ以外については精査されていない。土砂は東から投げ込まれており、天地返し of 埋没土である。遺物は70である。接合関係は1号住居、13号採掘坑とある。

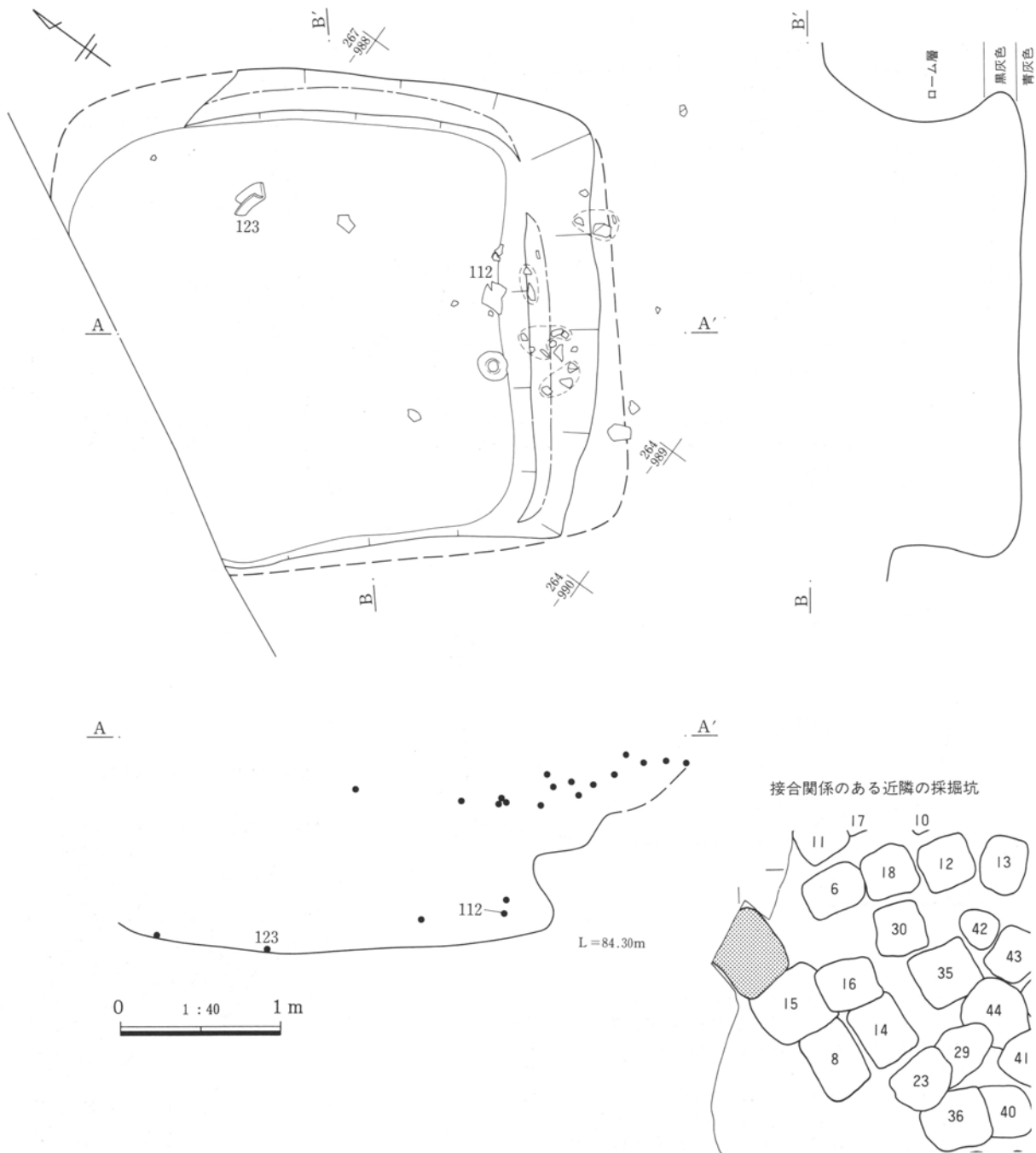


第69図 A区6号粘土採掘坑



7号粘土採掘坑〔第70図 PL.12〕

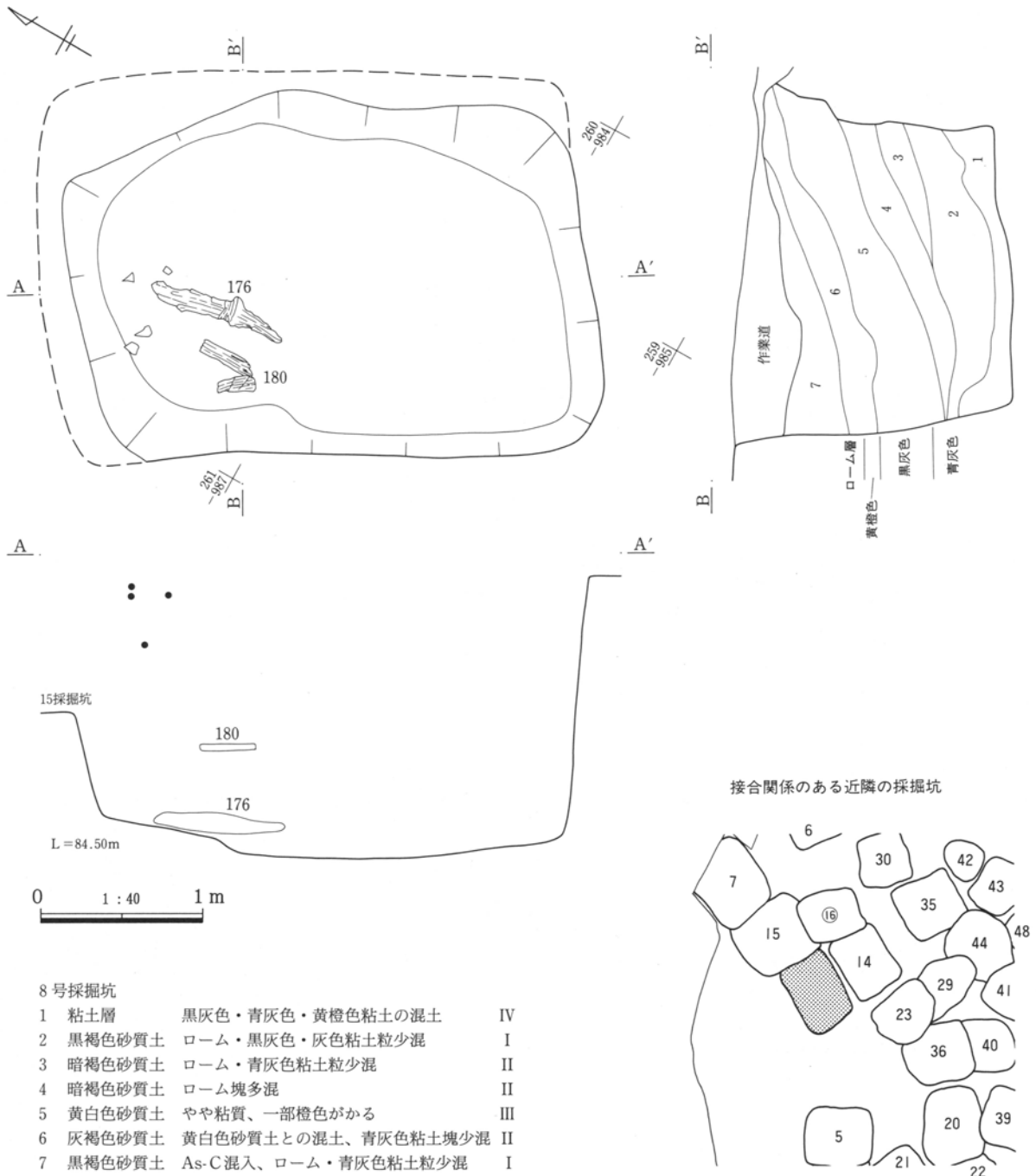
採掘坑全体の北西端、X264-Y987グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-37°-Wである。規模は、長軸(3.46)m、短軸は(3.04)m、確認面からの深さは1.20mである。壁面の粘土層の厚さは19cmで、黒灰色19cm、青灰色の上面まで掘り込まれている。採掘された粘土は1.6m<sup>3</sup>である。上部が作業道と推定される南東壁が、確認面より37cm程低い。北西壁は鋼矢板打設工事で破壊されている。壁面残存部分は、全体にやや抉れている。最大輪郭は、埋没後の崩落範囲の可能性もある。遺物は112・123である。接合関係は21号採掘坑、作業道とある。



第70図 A区7号粘土採掘坑

8号粘土採掘坑〔第71図 PL.12・13〕

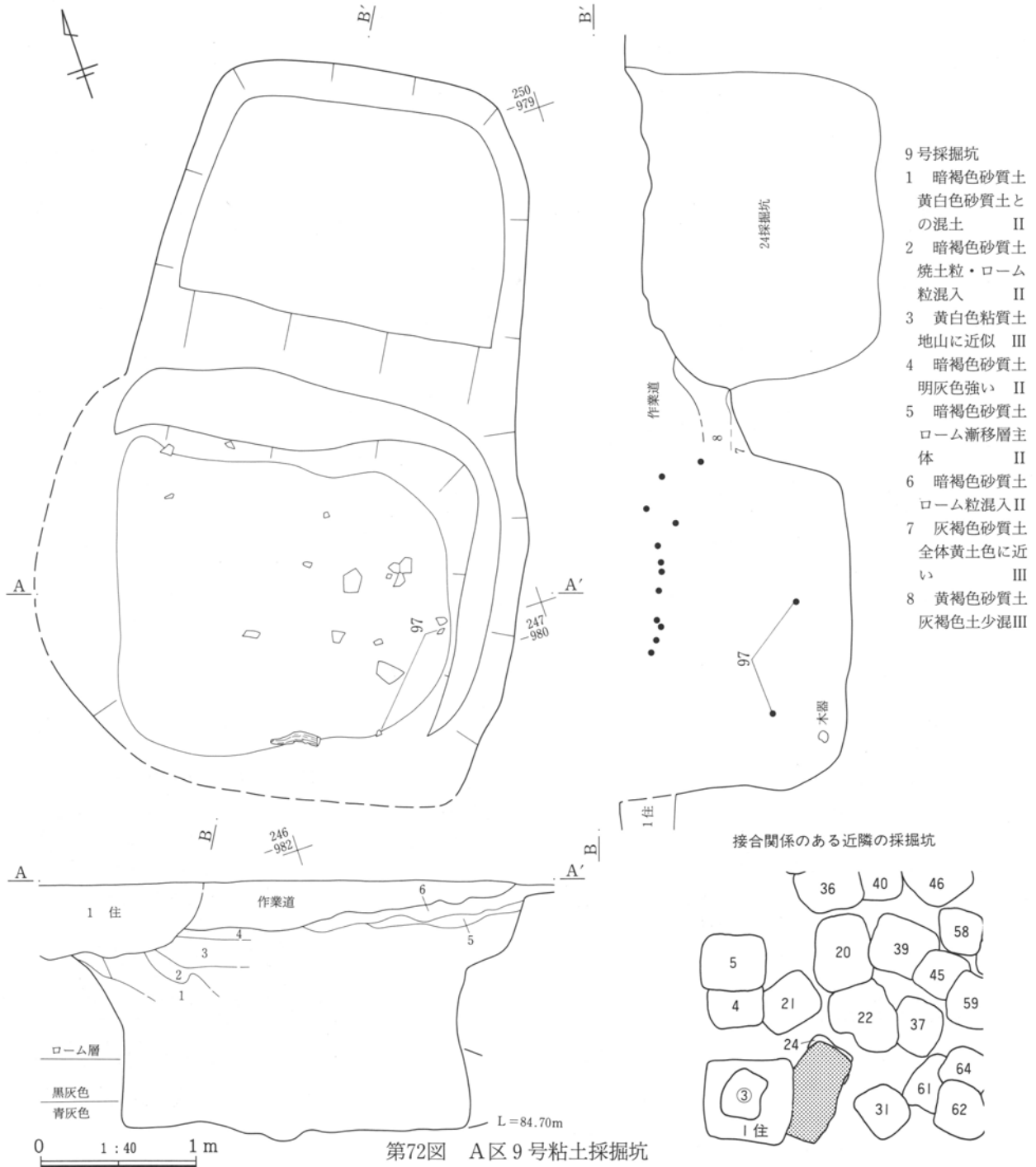
採掘坑全体の西端、X259-Y984グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-30°-Wである。規模は、長軸(3.36)m、短軸(2.32)m、確認面からの深さは1.73mである。壁面の粘土層の厚さは92cmで、黄橙色11cm、黒灰色33cm、青灰色48cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は6.5㎡である。上部が作業道と推定される北東壁が30cm程、北西壁が82cm程確認面より低い。土砂は東から投げ込まれており、天地返して埋没している。底部にはまがりの粘土が堆積する。遺物は176・180である。接合関係は1・12・16号採掘坑、作業道とある。



第71図 A区8号粘土採掘坑

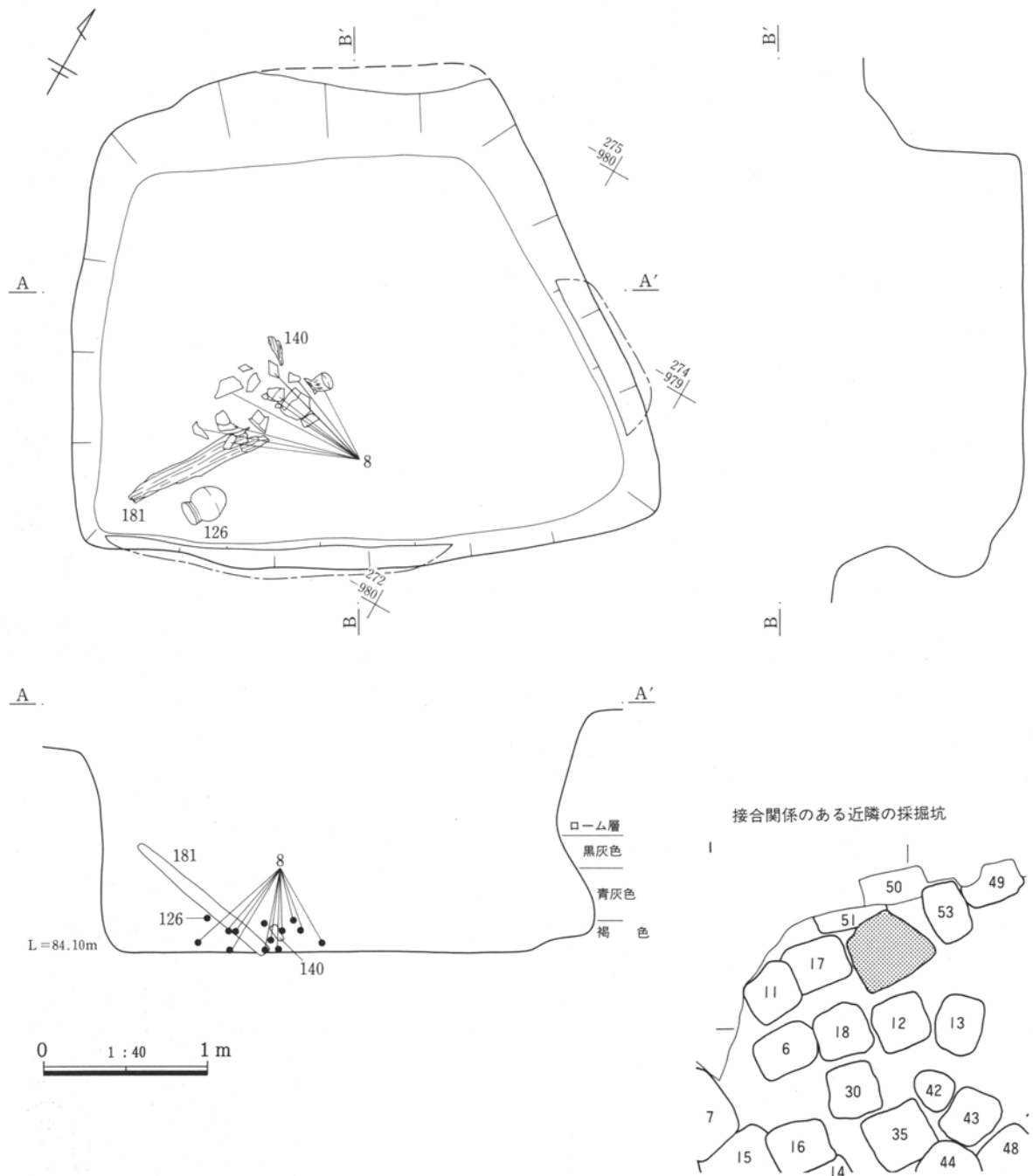
9号粘土採掘坑〔第72図 PL.12・13〕

採掘坑全体の南西端、X246-Y980グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-62°-Wである。規模は、長軸(4.70)m、短軸(3.07)m、確認面からの深さは1.60mである。壁面の粘土層の厚さは46cmで、黒灰色28cm、青灰色18cmである。採掘された粘土は2.4m<sup>3</sup>である。24号採掘坑と重複し、断面より9号採掘坑が新しい。上面で1号住居跡と重複し、南側は風倒木に破壊される。上部が作業道と推定される北東壁が74cm程、北西壁が48cm程確認面より低い。南東壁は大きく、他はやや決れているが、精査されていない。土砂は西から投げ込まれ、天地返しの可能性はある。最大輪郭は、埋没後の崩落範囲の可能性はある。遺物は97である。接合関係は3号採掘坑、作業道とある。



10号粘土採掘坑〔第73図 PL.13〕

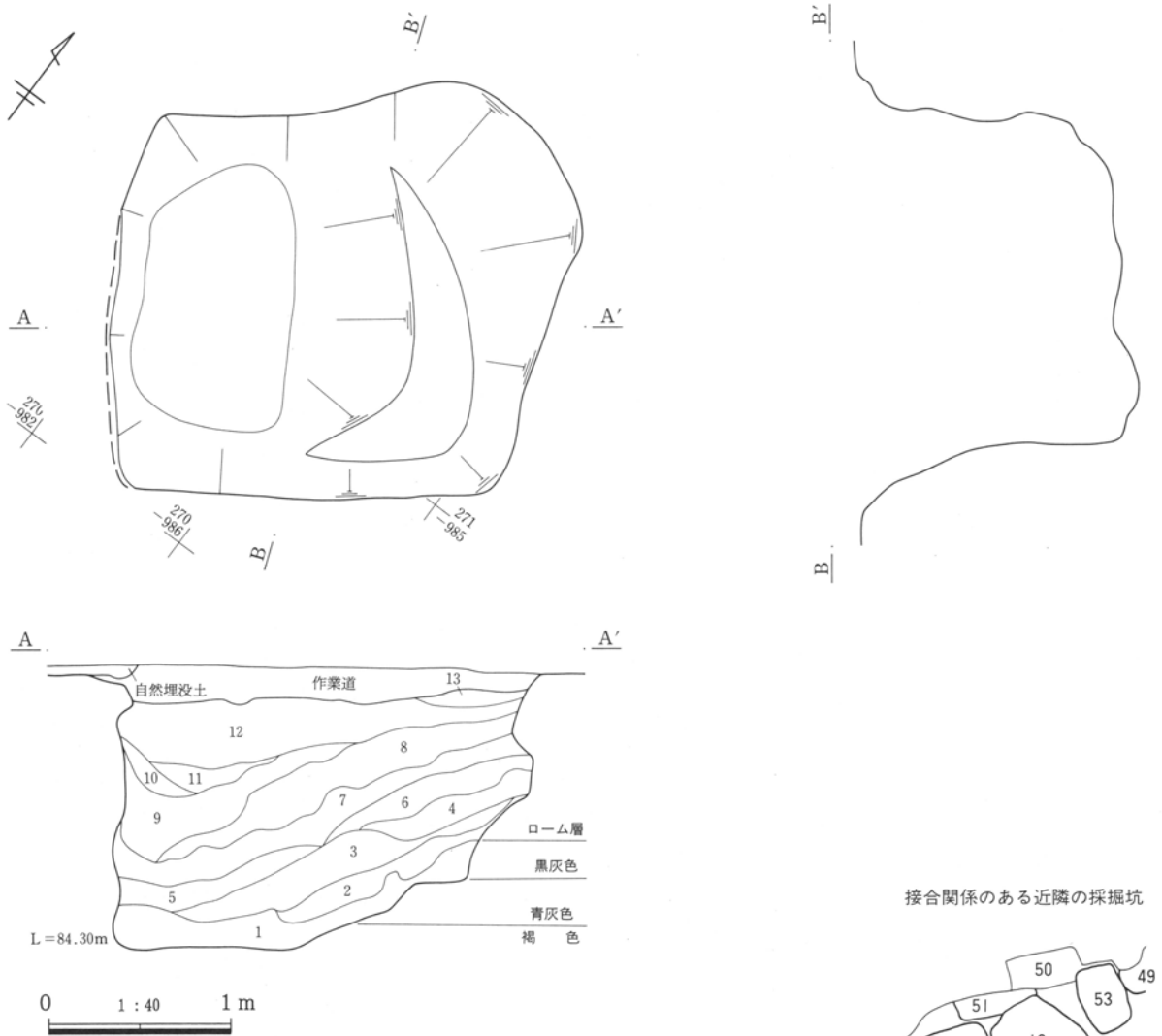
採掘坑全体の北端、X271-Y978グリッドに位置し、形状は台形を呈す。壁面崩落等の結果と想像される。垂直方位はN-30°-Wである。規模は、北東辺(2.84)m、南東辺3.52m、南西辺2.40m、北西辺2.30m、確認面からの深さは1.46mである。壁面の粘土層の厚さは72cmで、黒灰色20cm、青灰色33cm、褐色19cmである。採掘された粘土は8.7m<sup>3</sup>である。上面には作業道が重複する。上部が作業道と推定される北西壁が48cm程、南東壁が28cm程確認面より低い。北東、南東壁の一部は大きく抉れている。埋没土については不明である。遺物は8・126・140・181である。接合関係は作業道とある。



第73図 A区10号粘土採掘坑

11号粘土採掘坑〔第74図 PL.13〕

採掘坑全体の北西端、X270-Y984グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-54°-Eである。規模は、長軸2.40m、短軸2.12m、確認面からの深さは1.54mである。壁面の粘土層の厚さは62cmで、黒灰色22cm、青灰色26cm、褐色14cmである。採掘された粘土は3.2m<sup>3</sup>である。東側底面はやや高まっており、掘り鉢状を呈している。必要量の粘土が得られたために、途中で採掘をやめてしまったことが推測される。17号採掘坑と重複し、断面により本遺構が新しいと判断される。西、北壁がやや決れている。東壁は17号採掘坑の埋没土である。土砂は東から投げ込まれており、天地返し埋没土である。遺物は破片状態で出土している。



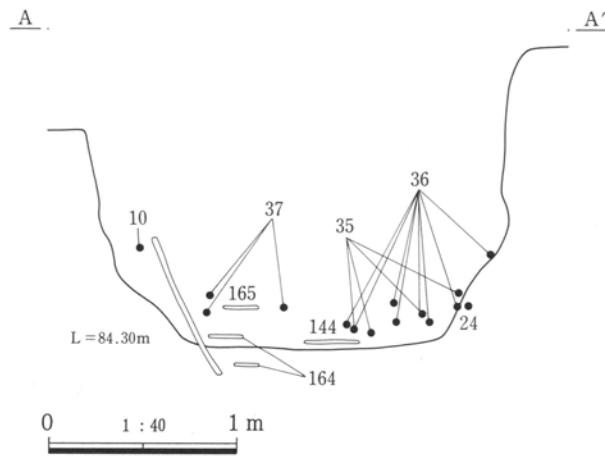
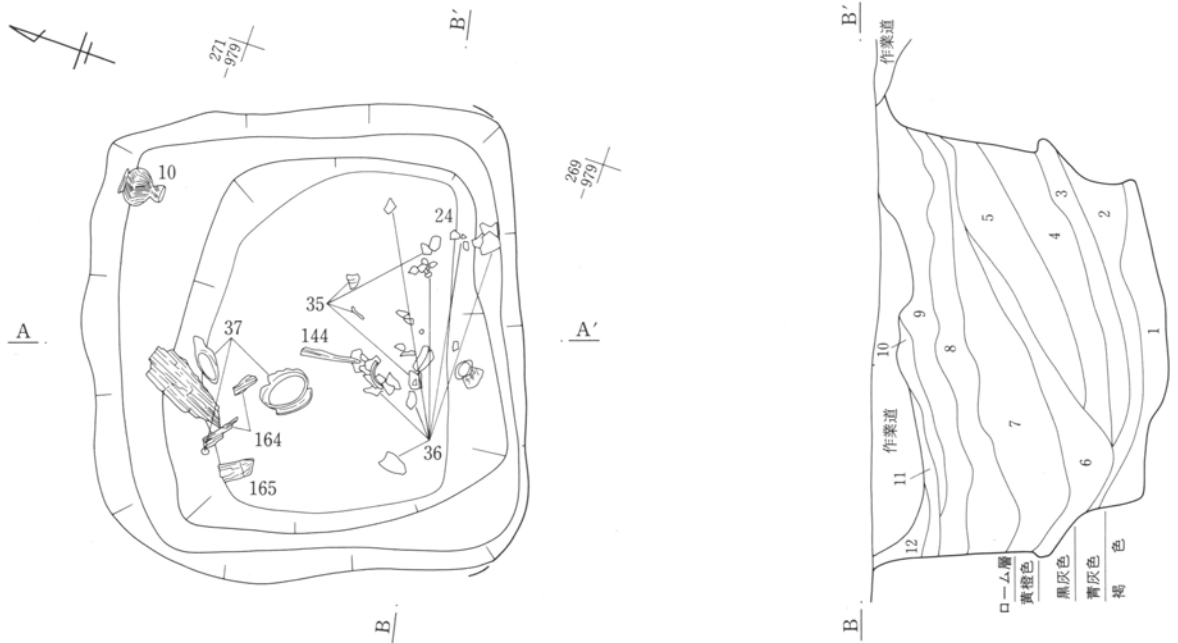
11号採掘坑

1	黄白色粘質土	底部粘土混入	III	8	黄白色粘質土	黒灰色粘土粒・砂粒混入	III
2	黒褐色粘質土	ローム塊混入	I	9	黄白色粘質土	黒灰色・黄橙色粘土粒混入	III
3	暗褐色砂質土	黄白色砂質土との混土、粘土塊少混	II	10	暗褐色砂質土	白色パミス混入	II
4	粘土層	黒灰色・黄橙色・黄白色	IV	11	黄白色粘質土	砂粒混入	III
5	黒褐色砂質土	ローム無	I	12	暗褐色砂質土	黄白色砂質土との混土、黒灰色・青灰色粘土粒少混	II
6	黒褐色砂質土	ローム少混	I	13	暗褐色砂質土	ローム粒少混	II
7	暗褐色砂質土	粘土、ローム少混	II				

第74図 A区11号粘土採掘坑

12号粘土採掘坑〔第75図 PL.13・14〕

採掘坑全体の北寄り、X269-Y979グリッドに位置し、ほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-69°-Eである。規模は長軸2.46m、短軸2.34m、確認面からの深さは1.60mである。粘土層の厚さは84cmで、黄橙色14cm、黒灰色20cm、青灰色16cm、褐色34cmである。採掘された粘土は4.8m<sup>3</sup>である。上部が作業道と推定される北壁が44cm程、東壁が5cm程確認面より低い。東、西、南壁はやや抉れ、下部には全面ともテラス状に中段が存在する。土砂は西から投げ込まれ、天地返しである。底部にはまぎりの粘土層が堆積する。遺物は10・24・35・36・37・144・164・165である。接合関係は1・8・14・21・34・39・45号採掘坑、作業道とある。

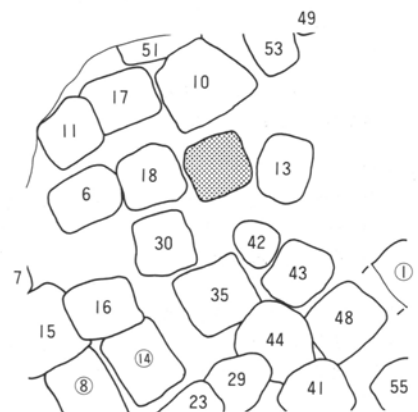


- |    |         |             |     |
|----|---------|-------------|-----|
| 7  | 暗褐色砂質土  | やや粘質、ローム粒少混 | II  |
| 8  | 暗褐色砂質土  | 黄白色砂質土との混土  | II  |
| 9  | 黄白色砂質土  | 地山に近似       | III |
| 10 | 黄橙色粘質土塊 |             | IV  |
| 11 | 暗褐色砂質土  | 黄白色砂質土との混土  | II  |
| 12 | 暗褐色砂質土  | 地山に近似       | II  |

12号採掘坑

- |   |        |             |    |
|---|--------|-------------|----|
| 1 | 粘土層    | 青灰色と褐色の混土   | IV |
| 2 | 黒褐色砂質土 | ローム塊混入      | I  |
| 3 | 黒褐色砂質土 | ローム粒全体にちらばる | I  |
| 4 | 黒褐色砂質土 | ローム塊混入      | I  |
| 5 | 黒褐色砂質土 | ローム粒全体にちらばる | I  |
| 6 | 暗褐色砂質土 | ローム粒多混      | II |

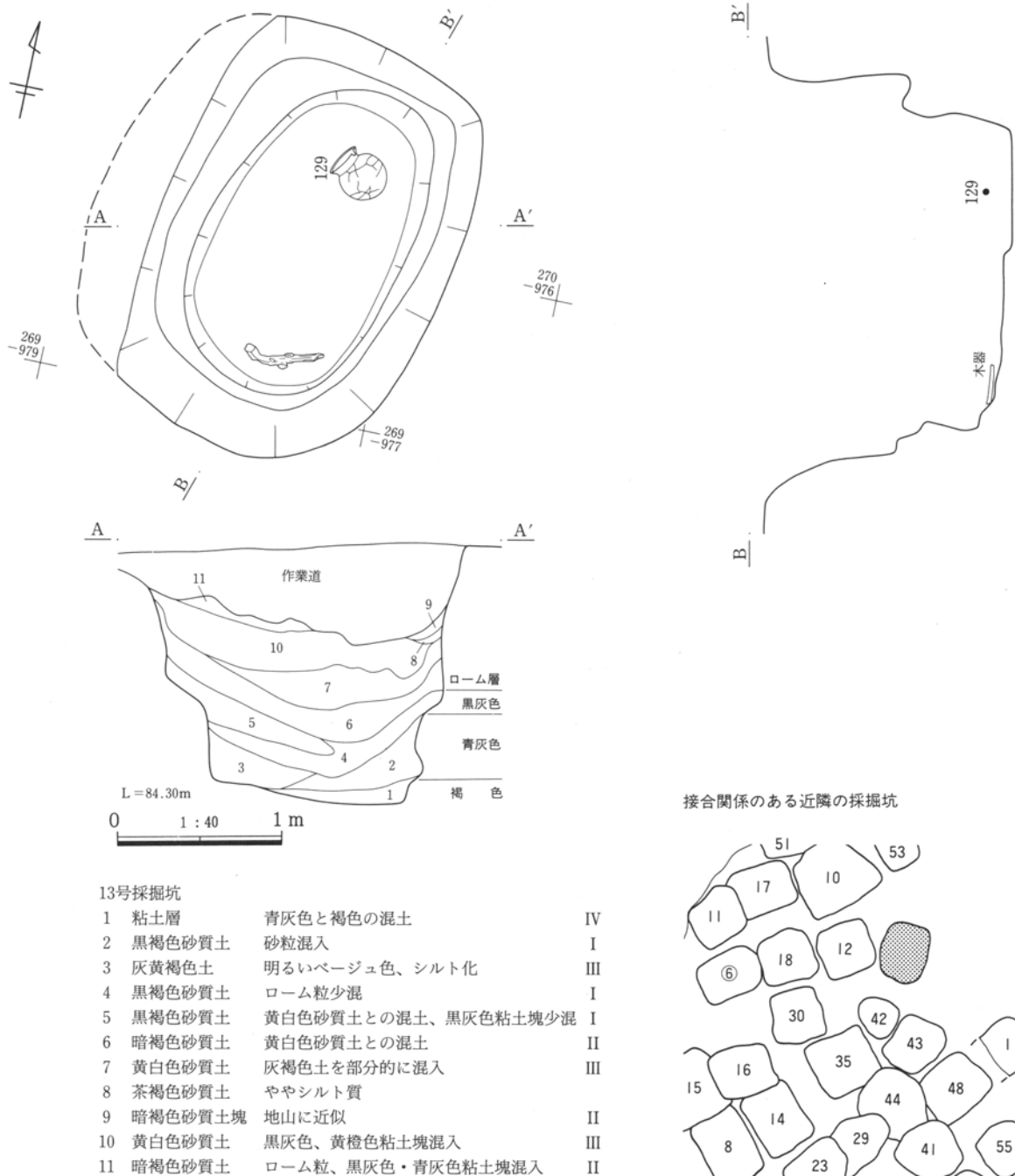
接合関係のある近隣の採掘坑



第75図 A区12号粘土採掘坑

13号粘土採掘坑〔第76図 PL.14・24〕

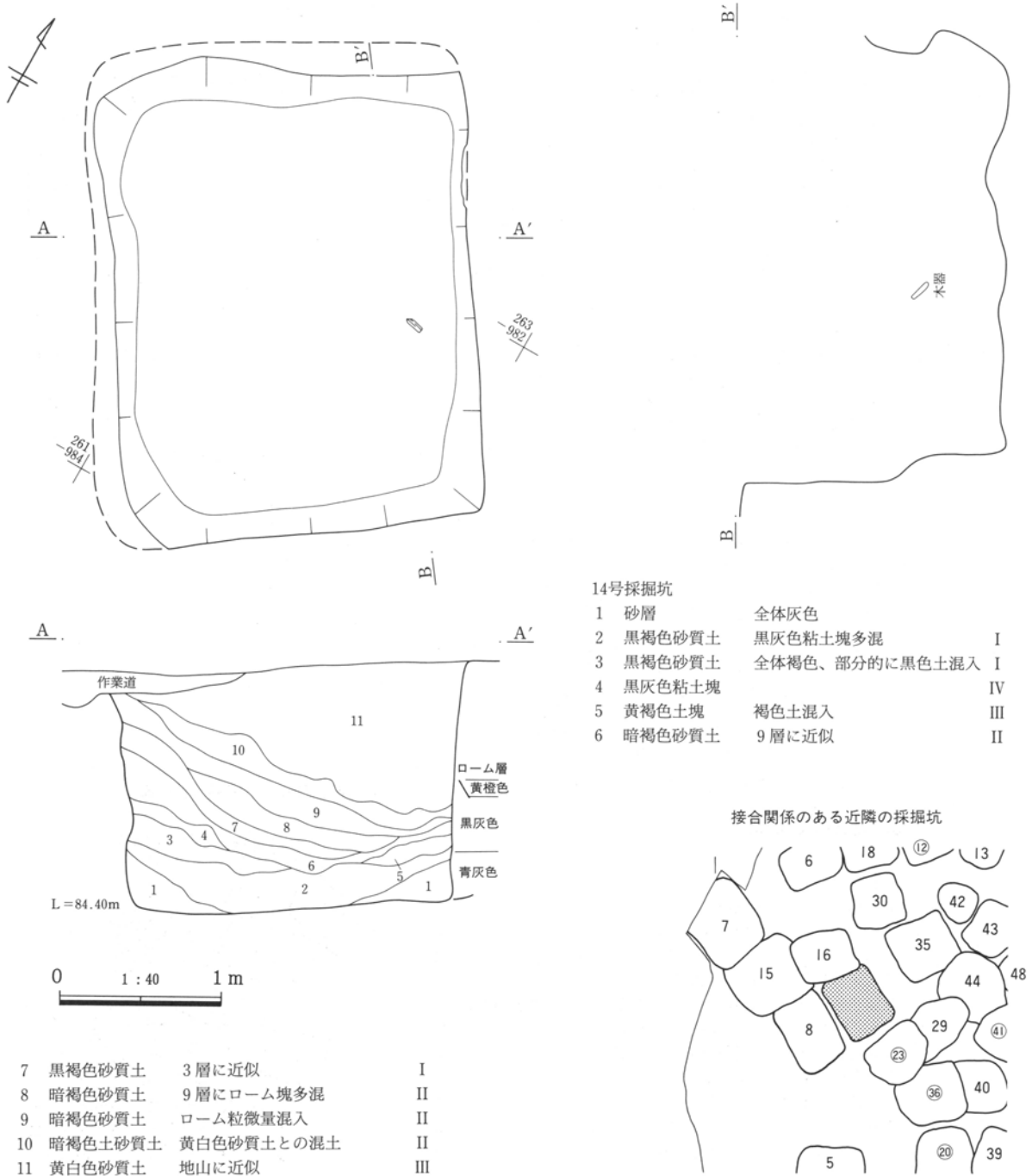
採掘坑全体の北西端で、X268-Y976グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-18°-Eである。規模は、長軸2.60m、短軸(2.16)m、確認面からの深さは1.50mである。壁面の粘土層の厚さは70cmで、黒灰色15cm、青灰色40cm、褐色15cmである。採掘された粘土は3.2m<sup>3</sup>である。上部が作業道と推定される西壁が確認面より12cm程低い。南壁の一部は風倒木に破壊されている。下部には全面ともテラス状に中段が存在する。土砂は西から投げ込まれており、天地返しで埋没している。底部にはまざりの粘土層が堆積する。遺物は129である。接合関係は1号住居、6号採掘坑とある。



第76図 A区13号粘土採掘坑

14号粘土採掘坑〔第77図 PL.12・13〕

採掘坑全体の中央西寄り、X261-Y981グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-31°-Wである。規模は、長軸(3.01)m、短軸(2.32)m、確認面からの深さは1.50mである。壁面の粘土層の厚さは74cmで、黄橙色10cm、黒灰色34cm、青灰色10cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は4.7m<sup>2</sup>である。上部が作業道と推定される北西壁が76cm程、南西壁が20cm程確認面より低い。35号との間に作業道の底部がある。壁は4面とも抉れているが、精査されていない。特に東壁は大きく抉れている。土砂は西から投げ込まれており、天地返しの埋没土である。遺物の接合関係は12・20・21・23・31・36・41号採掘坑、作業道とある。

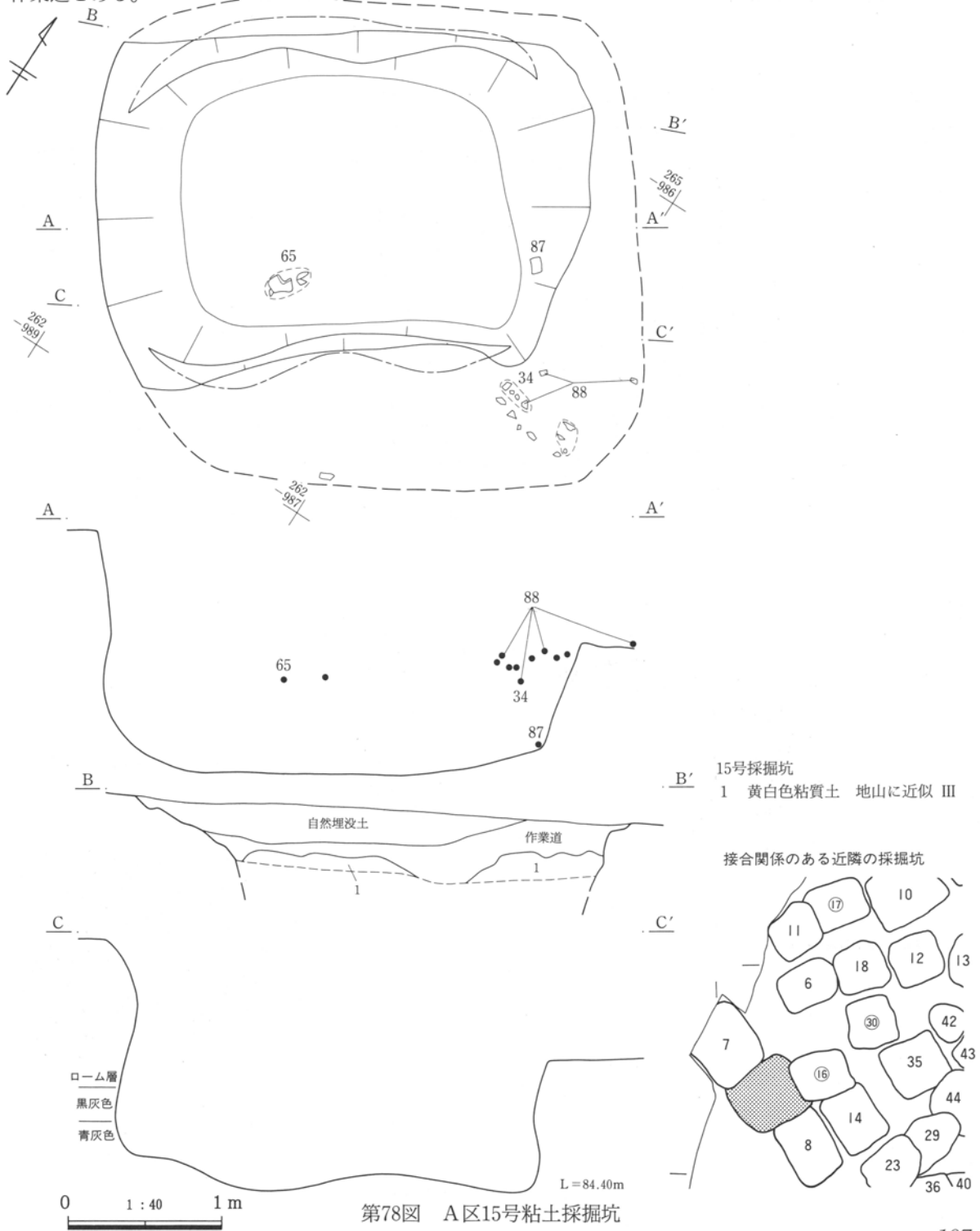


第77図 A区14号粘土採掘坑



15号粘土採掘坑〔第78図 PL.13〕

X262-Y986グリッドに位置し、隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-51°-Eである。規模は長軸(3.52)m、短軸(3.12)m、確認面からの深さは1.54mである。粘土層の厚さは68cmで、黒灰色22cm、青灰色46cmである。採掘された粘土は4.5m<sup>3</sup>である。上部が作業道と推定される北東壁が80cm、南東壁が77cm、北西壁が32cm程確認面より低い。北西、南東壁が大きく抉れる。土砂の投げ込み方向は不明である。最大輪郭は埋没後の崩落範囲の可能性もある。遺物は34・65・87・88である。接合関係は4・16・17・30・45・56・57・59・62号採掘坑、作業道とある。

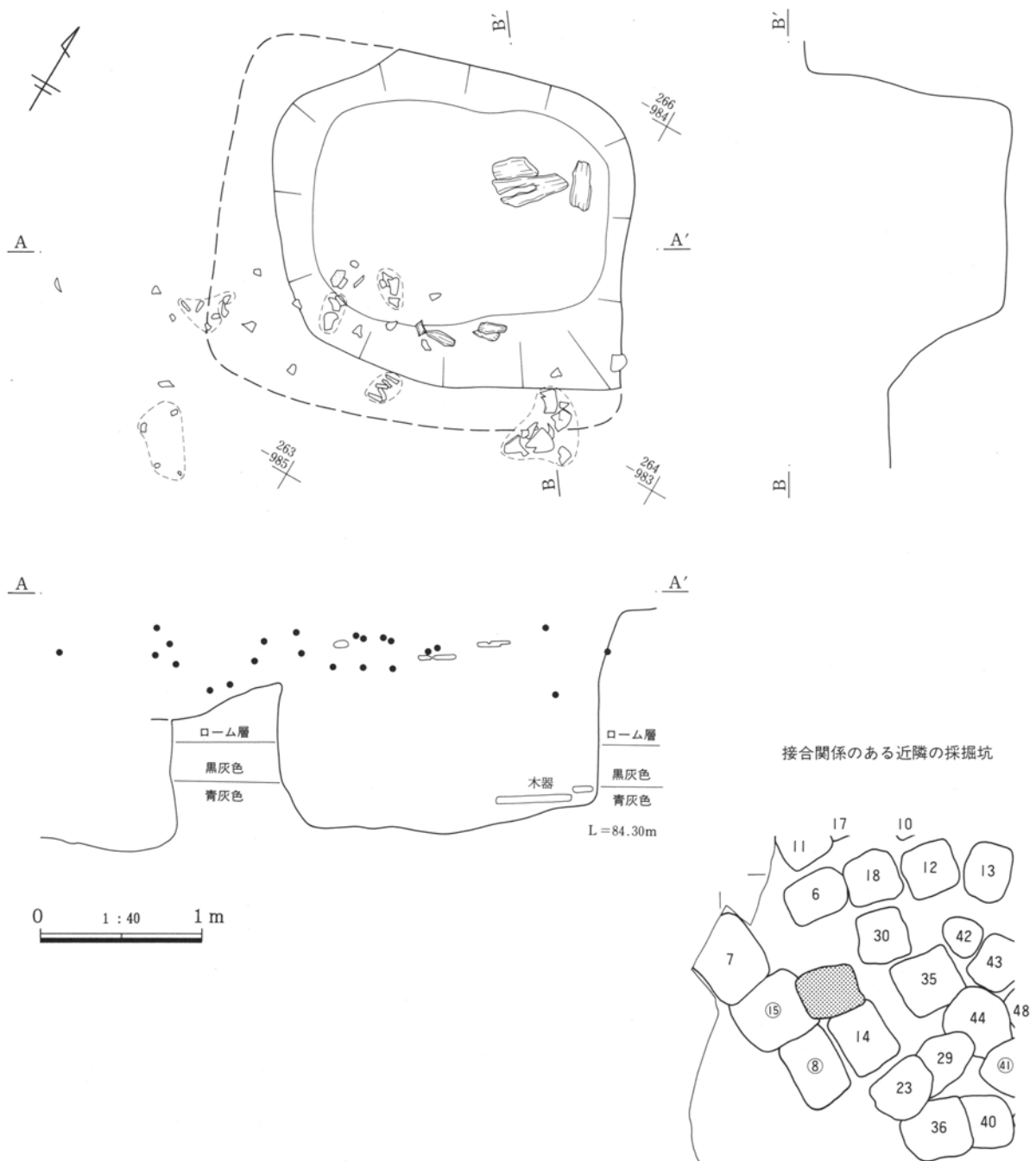


15号採掘坑  
1 黄白色粘質土 地山に近似 III

接合関係のある近隣の採掘坑

16号粘土採掘坑〔第79図 PL.13〕

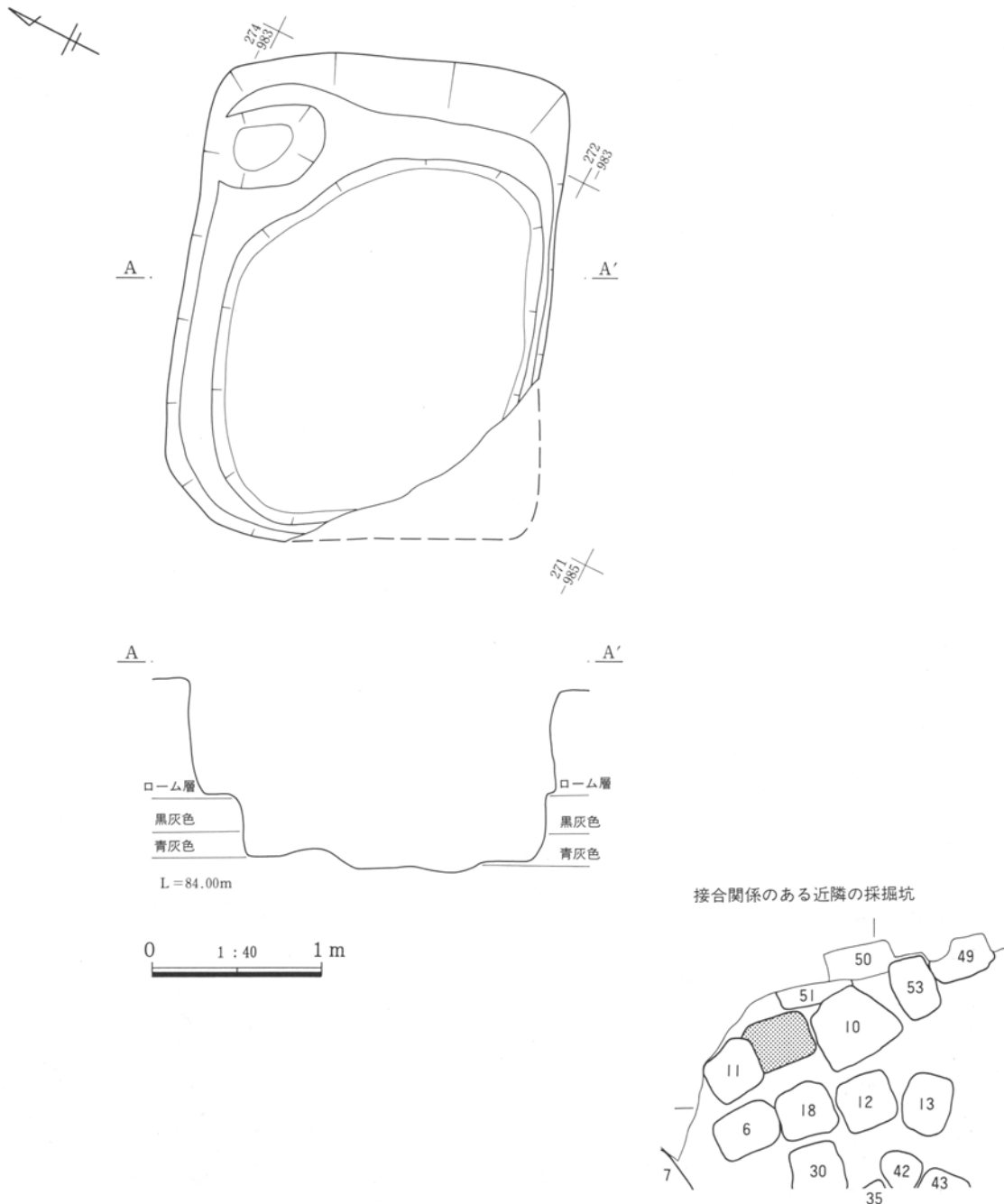
採掘坑全体の西寄り、X264-Y983グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-70°-Eである。規模は、長軸(2.52)m、短軸(2.12)m、確認面からの深さは1.38mである。壁面の粘土層の厚さは54cmで、黒灰色25cm、青灰色29cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は2.3m<sup>3</sup>である。35号採掘坑との間に作業道の底部が存在する。上部が作業道と推定される南東壁が52cm、南西壁が47cm程確認面より低い。壁は4面とも抉れているが、精査されていない。土砂の投げ込み方向は不明。遺物の接合関係は8・15・39・41号採掘坑、作業道とある。



第79図 A区16号粘土採掘坑

17号粘土採掘坑〔第80図 PL.14〕

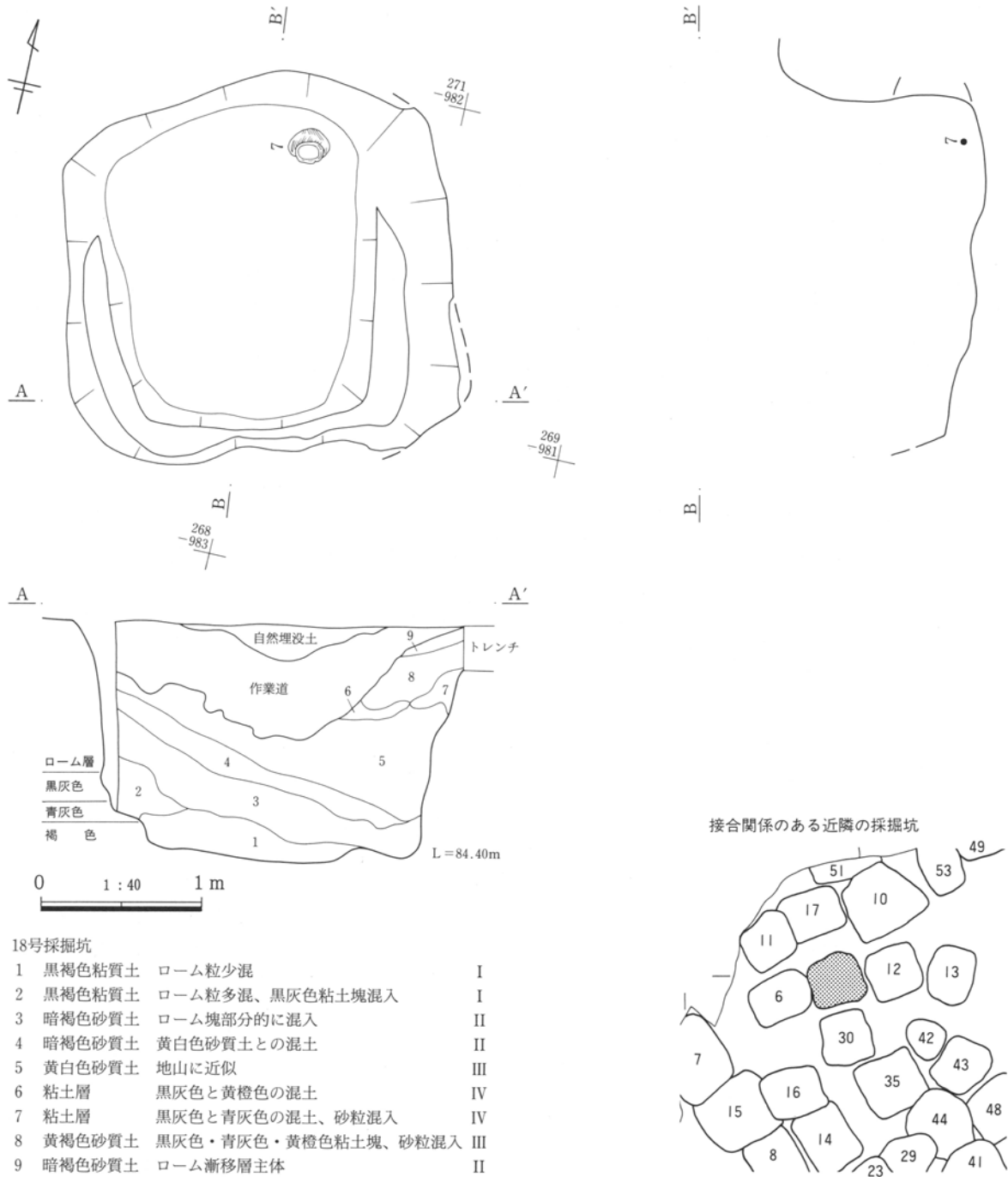
採掘坑全体の北西端、X272-Y982グリッドに位置し、長軸方位はN-68°-Eである。形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸2.86m、短軸2.15m、確認面からの深さは1.10mである。壁面の粘土層の厚さは42cmで、黒灰色22cm、青灰色20cm、褐色上面まで掘り込まれている。採掘された粘土は2.6m<sup>3</sup>である。11号採掘坑と重複し、断面から11号採掘坑が新しいと判断される。上部が作業道と推定される東壁が確認面より5cm程低い。西壁は11号採掘坑との重複で破壊される。下部には全面テラス状に中段がつき、北東隅に円形の窪みがある。土砂の投げ込み方向は不明である。遺物の接合関係は15号採掘坑、作業道とある。



第80図 A区17号粘土採掘坑

18号粘土採掘坑〔第81図 PL.14〕

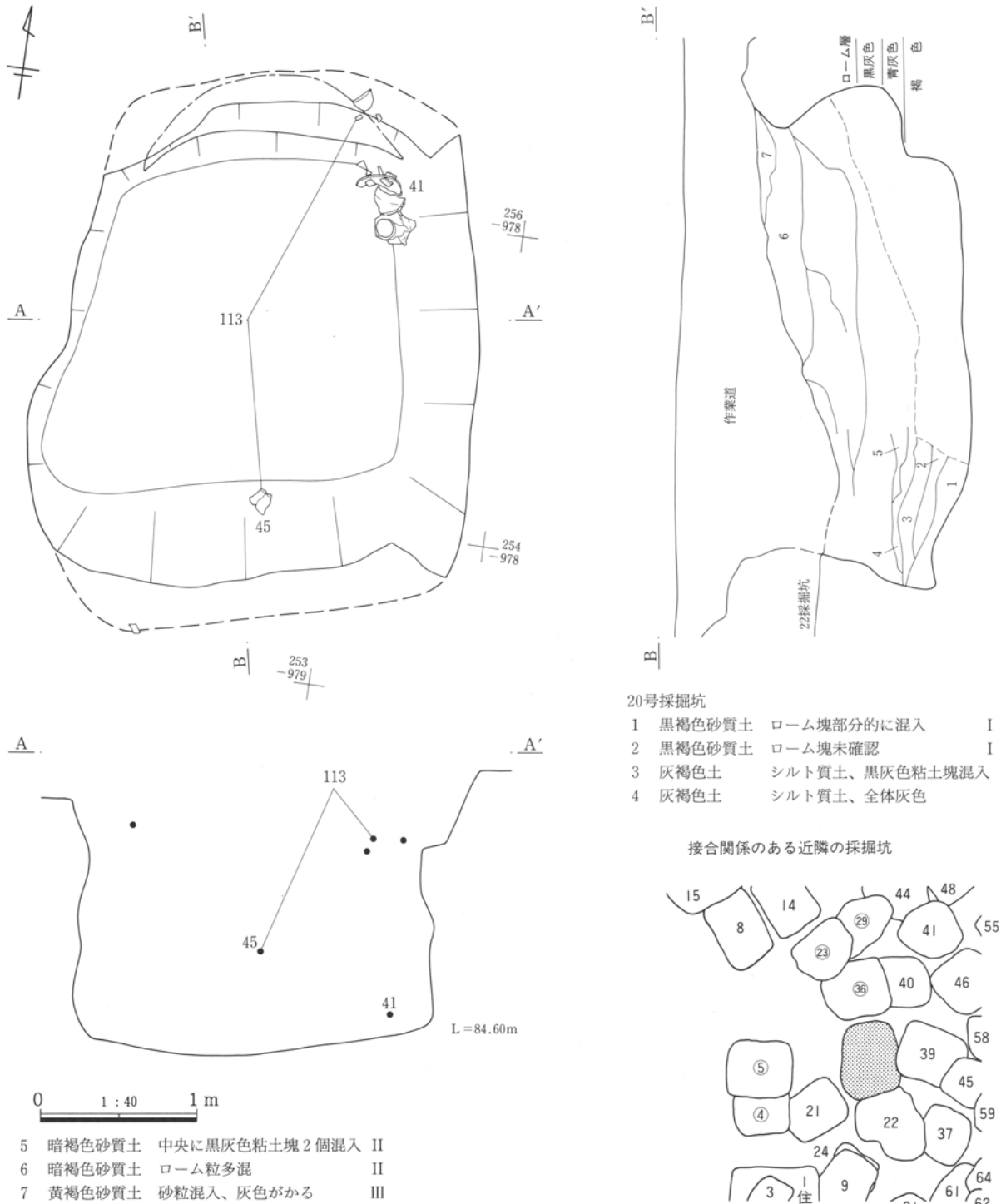
採掘坑全体の北寄り、X268-Y981グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-71°-Eである。規模は長軸2.40m、短軸2.28m、確認面からの深さは1.46mである。壁面の粘土層の厚さは56cmで、黒灰色19cm、青灰色13cm、褐色24cmである。採掘された粘土は3.1m<sup>3</sup>である。上面には作業道が重複する。南壁が作業道により破壊される。北壁は大きく抉れているが、精査されていない。土砂は西から投げ込まれており、天地返し埋没土である。北側底部にはまぎりの粘土層が堆積する。遺物は7である。



第81図 A区18号粘土採掘坑

20号粘土採掘坑〔第82図 PL.14〕

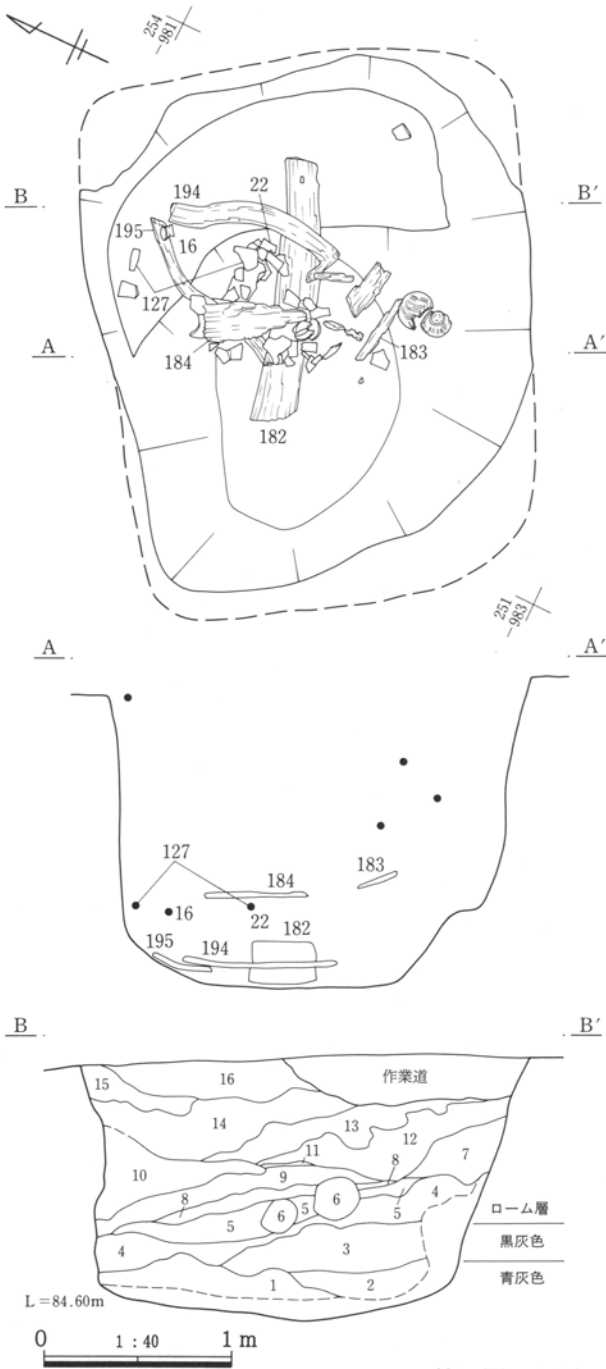
X253-Y978グリッドに位置し、台形に近い隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-10°-W。規模は長軸(3.12)m、短軸2.60m、確認面からの深さは1.82mである。粘土層の厚さは73cmで、黒灰色16cm、青灰色14cm、褐色43cm。採掘された粘土は5.8m<sup>3</sup>。上面に作業道が重複。上部が作業道と推定される東壁が50cm、西壁が18cm、南壁が33cm、北壁が40cm程確認面より低い。壁は全面とも抉れているが、東・西壁は精査されていない。土砂は北から投げ込まれる。崩落のため底部埋没土は不明。底部にまぎりの粘土が堆積する。遺物は41・45・113である。接合関係は4・5・23・29・36・65号採掘坑、作業道とある。



第82図 A区20号粘土採掘坑

21号粘土採掘坑〔第83図 PL.15〕

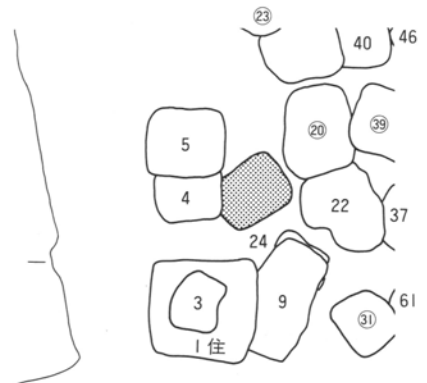
X251-Y980グリッドに位置し、隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-60°-Eである。規模は長軸(2.92)m、短軸2.24m、確認面からの深さは1.68mである。粘土層の厚さは52cmで、黒灰色20cm、青灰色32cmである。採掘された粘土は3.1m<sup>3</sup>である。底面は東から西へ緩く傾斜する。24号採掘坑との間に作業道の底部が残存する。上部が作業道と推定される北東壁が48cm程、東壁が31cm程確認面より低い。北西壁は4号採掘坑との重複で破壊される。平面から4号採掘坑が新しいと判断される。壁は全面ともやや抉れている。土砂は南から投げ込まれているが、天地返しではない。底部にはまぎりの粘土が堆積する。遺物は16・22・127・182～184・194・195である。接合関係は7・12・14・20・23・31・34・36・39・41・45・58・63号採掘坑、作業道とある。



21号採掘坑

- |    |        |                   |     |
|----|--------|-------------------|-----|
| 1  | 黄褐色砂質土 | 一部に暗褐色砂質土、底部に粘土混入 | IV  |
| 2  | 黒褐色砂質土 | ローム粒少混            | I   |
| 3  | 黒褐色砂質土 | ローム・粘土塊多混         | I   |
| 4  | 褐色砂質土  | ローム粒・黒灰色粘土塊混入     | II  |
| 5  | 黄白色砂質土 | 黒灰色・青灰色粘土塊、灰褐色土混入 | III |
| 6  | 粘土層塊   | 黒灰色と青灰色の混土        | IV  |
| 7  | 暗褐色砂質土 | 漸移層主体             | II  |
| 8  | 暗褐色砂質土 | 黄白色砂質土との混土        | II  |
| 9  | 暗褐色砂質土 | ローム塊混入            | II  |
| 10 | 暗褐色砂質土 | ローム粒多混            | II  |
| 11 | 灰褐色砂質土 | 砂層                |     |
| 12 | 黒褐色砂質土 | ローム粒多混            | I   |
| 13 | 黒褐色砂質土 | 黄白色砂質土との混土        | I   |
| 14 | 黄白色砂質土 | 地山に近似             | III |
| 15 | 暗褐色砂質土 | ローム粒多混、青灰色粘土塊混入   | II  |
| 16 | 暗褐色砂質土 | ローム塊混入            | II  |

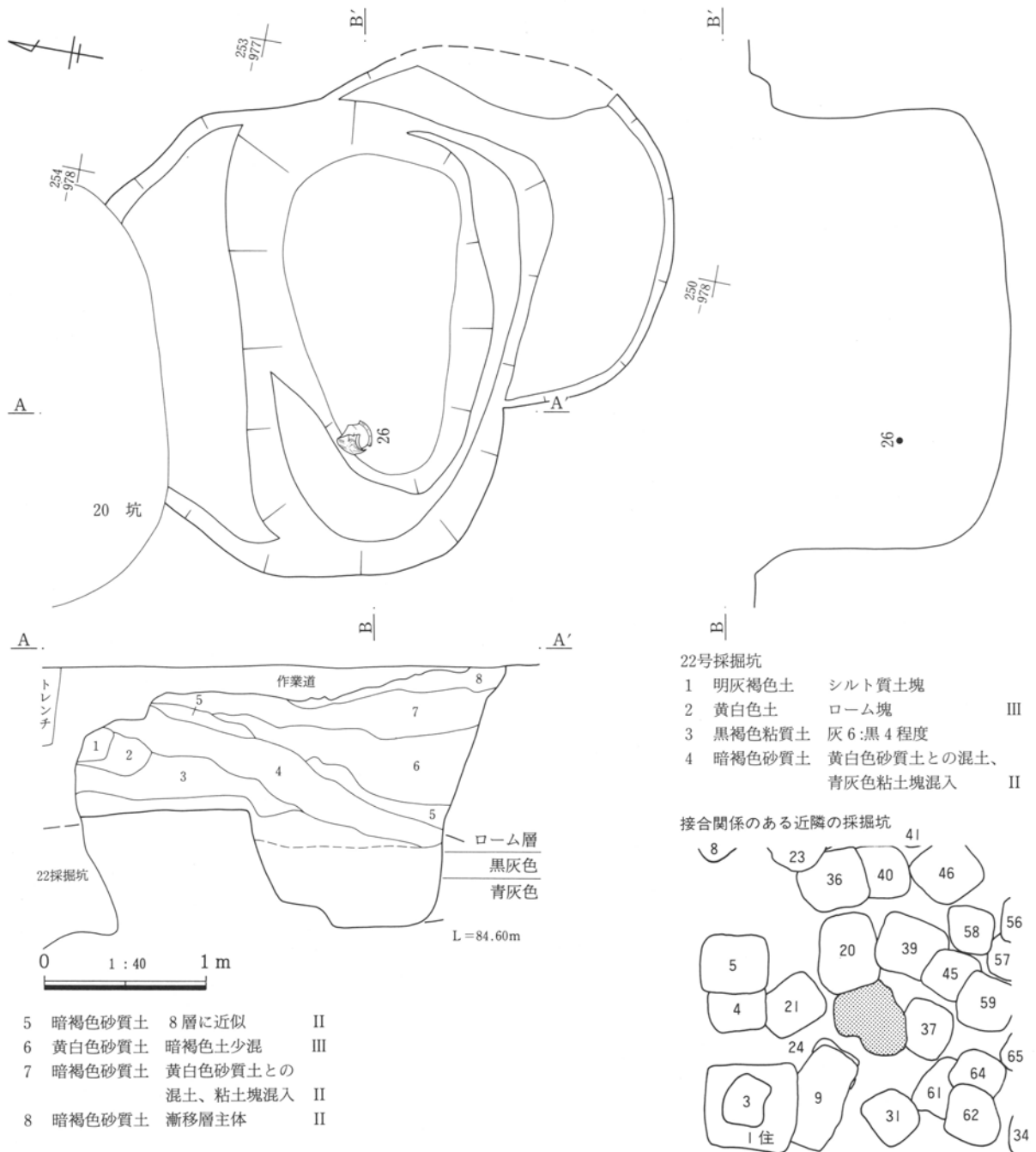
接合関係のある近隣の採掘坑



第83図 A区21号粘土採掘坑

22号粘土採掘坑〔第84図 PL.15〕

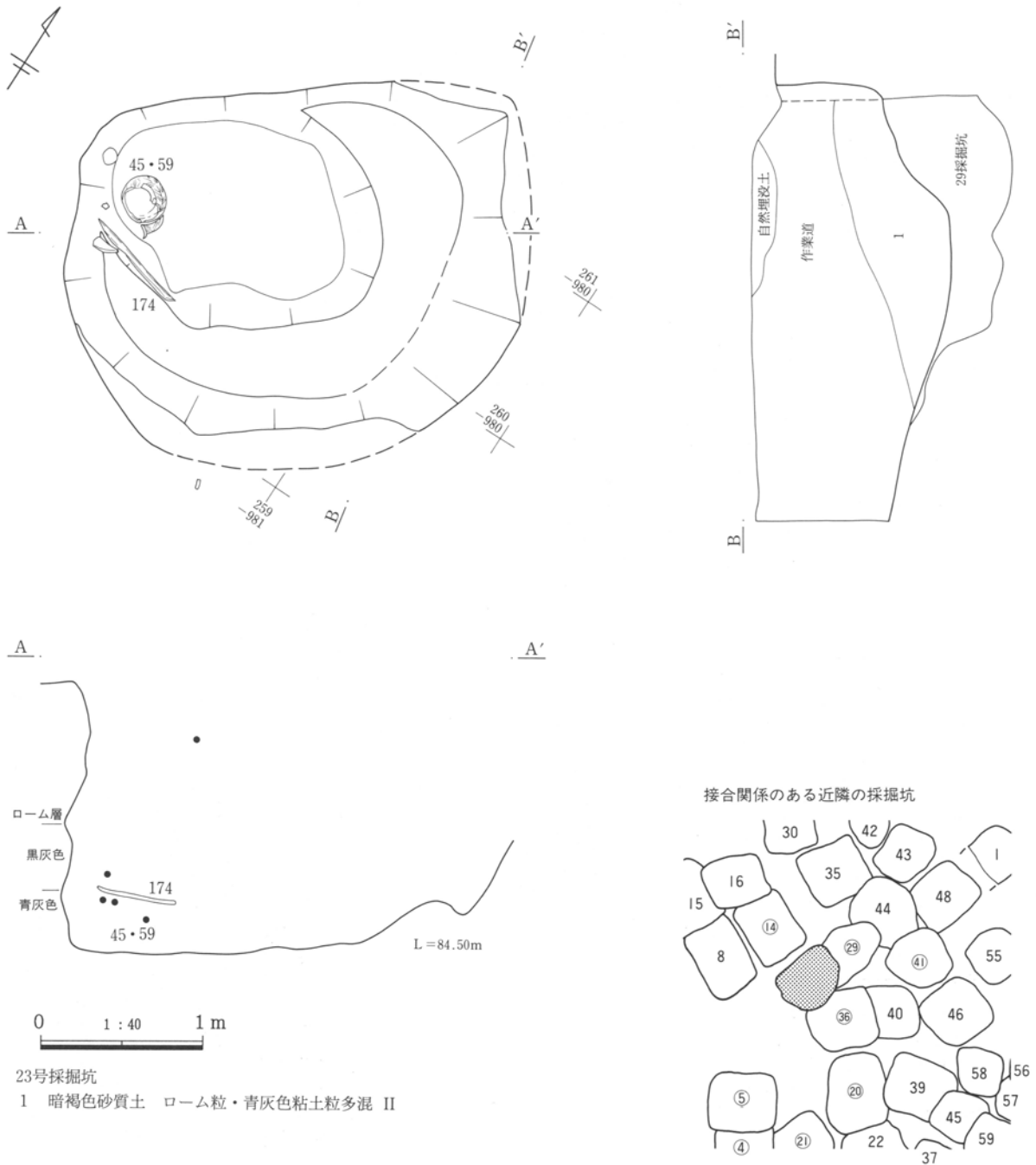
採掘坑全体の南西寄り、X250-Y977グリッドに位置し、形状は台形に近い隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-80°-Eである。規模は、長軸(3.54)m、短軸(3.08)m、確認面からの深さは1.58mである。壁面の粘土層の厚さは46cmで、黒灰色17cm、青灰色29cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は2.3m<sup>3</sup>である。東壁から南壁の外側は、半円形に掘り込まれているが、作業道の一部の可能性はある。上部が作業道と推定される東壁が14cm程、北壁が34cm程確認面より低い。南壁が大きく抉れているが、精査されていない。土砂は北から投げ込まれており、天地返しで埋没している。底部にはまぎりの粘土が堆積する。遺物は26である。



第84図 A区22号粘土採掘坑

23号粘土採掘坑〔第85図 PL.15〕

採掘坑全体の中央付近、X259-Y980グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-57°-Eである。規模は、長軸2.82m、短軸(2.30)m、確認面からの深さは1.64mである。壁面の粘土層の厚さは80cmで、黒灰色40cm、青灰色40cm、褐色の上面まで掘り込まれている。採掘された粘土は4.5m<sup>3</sup>である。底面は、緩く掘り鉢状に中央が窪んでいる。29・36号採掘坑と重複関係にあり、断面から本遺構が両採掘坑よりも新しいと判断される。北東壁と南壁が29・36号採掘坑との重複で破壊されている。西壁はやや抉れているが、精査されていない。土砂は北から投げ込まれているが、天地返し of 埋没土ではない。遺物は45・59・174である。接合関係は4・5・14・20・21・29・31・36・41・65号採掘坑、作業道とある。

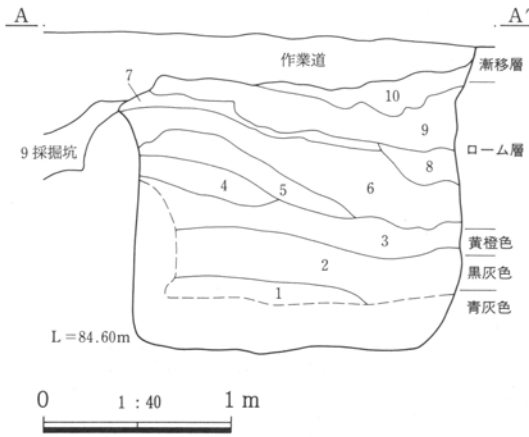
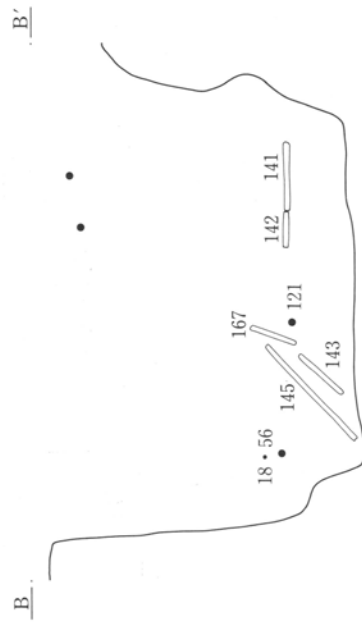
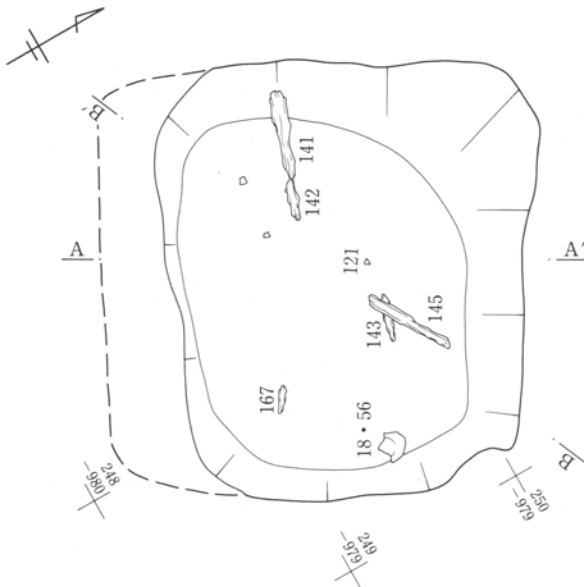


第85図 A区23号粘土採掘坑



24号粘土採掘坑〔第86図 PL.15〕

採掘坑全体の南西、X248-Y979グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-61°-Wである。規模は、長軸2.31m、短軸(2.24)m、確認面からの深さは1.68mである。壁面の粘土層の厚さは66cmで、黄橙色14cm、黒灰色20cm、青灰色32cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は2.0m<sup>3</sup>である。9号採掘坑と重複し、断面から本遺構が古いと判断される。21号採掘坑との間に作業道の底部が残存する。上部が作業道と推定される南壁が確認面より42cm程低い。壁は全面ともやや抉れている。土砂は南から投げ込まれており、天地返しに埋没土である。遺物は18・56・121・141~143・145・167である。接合関係は32・39・45・48・57・63・65号採掘坑、作業道とある。



24号採掘坑

1	黒褐色砂質土	ローム粒未確認	I
2	黒褐色砂質土	ローム粒多混	I
3	黒褐色粘質土	やや砂質、As-C混入	I
4	暗褐色砂質土	ややシルト質、漸移層主体	II
5	暗褐色砂質土	やや粘質、4層に比べて黒色が強い	II
6	黄白色砂質土	地山に近似	III

接合関係のある近隣の採掘坑

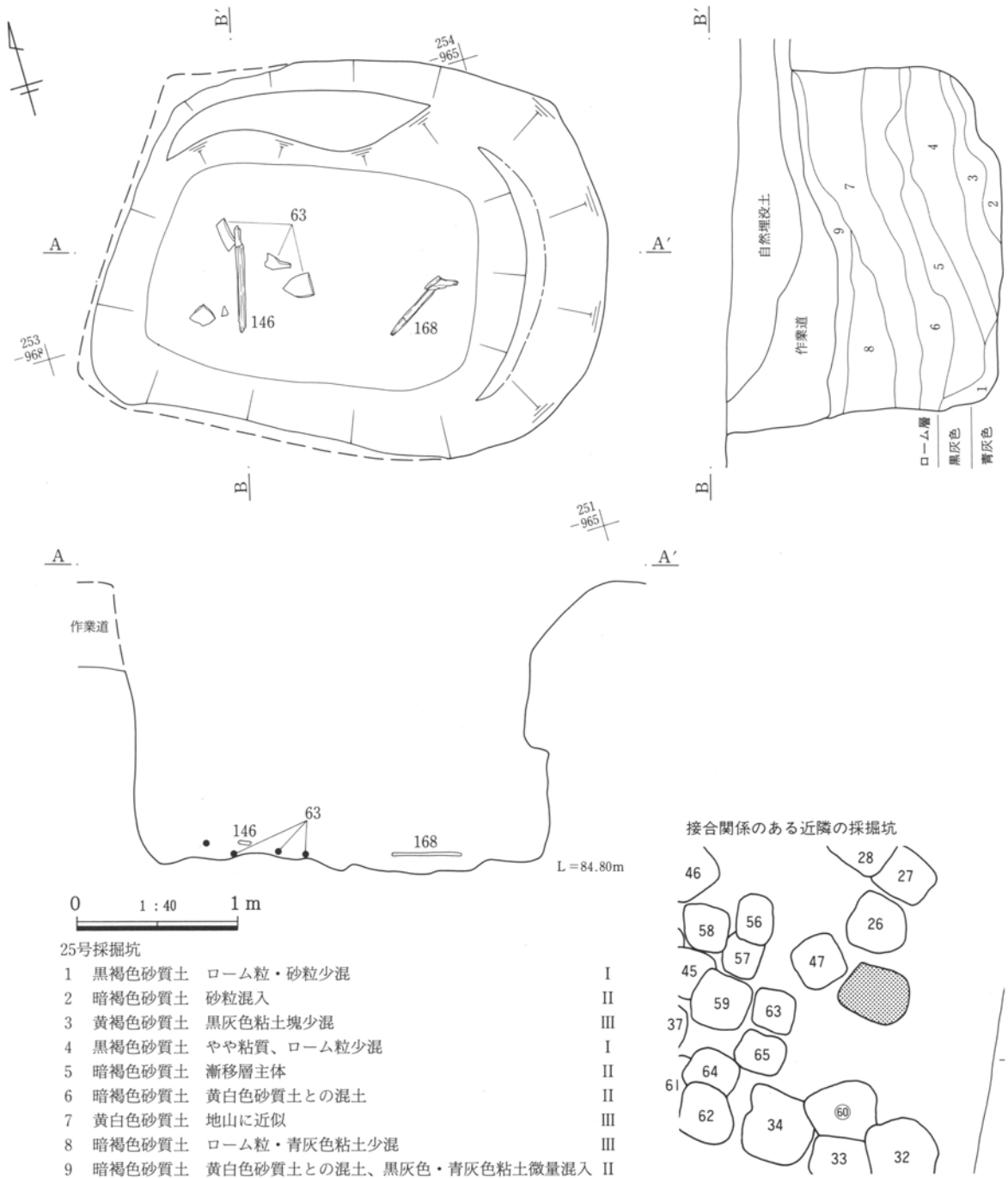


7	暗褐色砂質土	黄白色砂質土との混土	II
8	黄白色砂質土	砂粒混入、乱れている	III
9	黄褐色砂質土	暗褐色砂質土少混	III
10	黄褐色砂質土	黒灰色・黄橙色粘土混入	III

第86図 A区24号粘土採掘坑

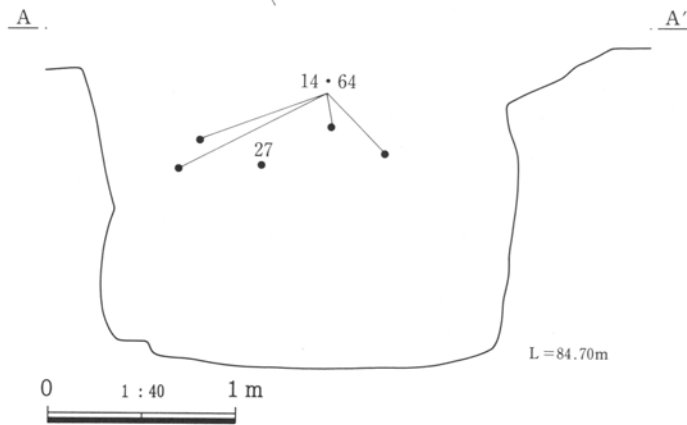
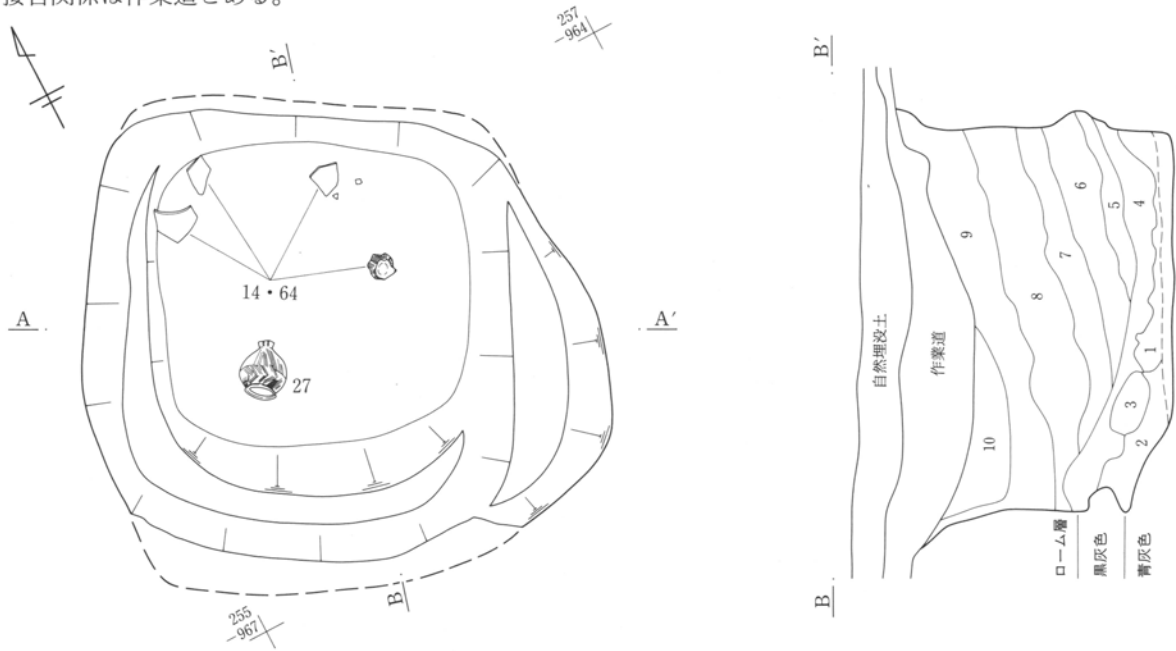
25号粘土採掘坑〔第87図 PL.24〕

全体の東端、枝状に分岐する部分に所在する。X 251-Y964グリッドに位置し、隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-63°-Wである。規模は長軸(3.05)m、短軸2.30m、確認面からの深さは1.80mである。粘土層の厚さは54cmで、黒灰色20cm、青灰色34cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は3.2m<sup>2</sup>である。26・47号採掘坑との間に作業道の底部が残存する。上部が作業道と推定される西壁が53cm程、北壁が31cm程確認面より低い。東、南、西壁の一部がやや抉れている。土砂は北から投げ込まれており、天地返し埋没土である。底部にまざりの粘土が堆積する。最大輪郭は埋没後の崩落範囲の可能性ある。遺物は63・146・168である。接合関係は60号採掘坑、作業道とある。



26号粘土採掘坑〔第88図 PL.16〕

採掘坑全体の東端、枝状に分岐する部分に所在する。X255-Y964グリッドに位置し、ほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-61°-Wである。長軸(2.76)m、短軸(2.54)m、確認面からの深さは1.78mである。壁面の粘土層の厚さは50cmで、黒灰色25cm、青灰色25cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は2.6㎡である。25・27号採掘坑との間には作業道の底部が残存する。上部が作業道と推定される南壁が30cm程、北壁が15cm程確認面より低い。壁は全面ともやや抉れている。土砂は北から投げ込まれており、天地返し埋没土である。底部にはまざりの粘土が堆積する。最大輪郭は埋没後の崩落範囲の可能性ある。遺物は14・27・64である。接合関係は作業道とある。



26号採掘坑

- |    |        |                    |     |
|----|--------|--------------------|-----|
| 1  | 粘土層    | 黒灰色・青灰色粘土の混入       | IV  |
| 2  | 粘土層    | 黄橙色塊               | IV  |
| 3  | 黄白色砂質土 | ローム塊               | III |
| 4  | 暗褐色砂質土 | 黄白色砂質土との混入、底部に砂粒混入 | I   |
| 5  | 黒褐色砂質土 | ローム粒少混             | I   |
| 6  | 黒褐色砂質土 | ローム粒微量混入           | I   |
| 7  | 暗褐色砂質土 | 漸移層主体              | II  |
| 8  | 黄白色砂質土 | 部分的に暗褐色砂質土混入       | III |
| 9  | 黄褐色砂質土 | 黒灰色粘土塊混入           | III |
| 10 | 黄褐色砂質土 | 黄橙色粘土粒多混           | III |

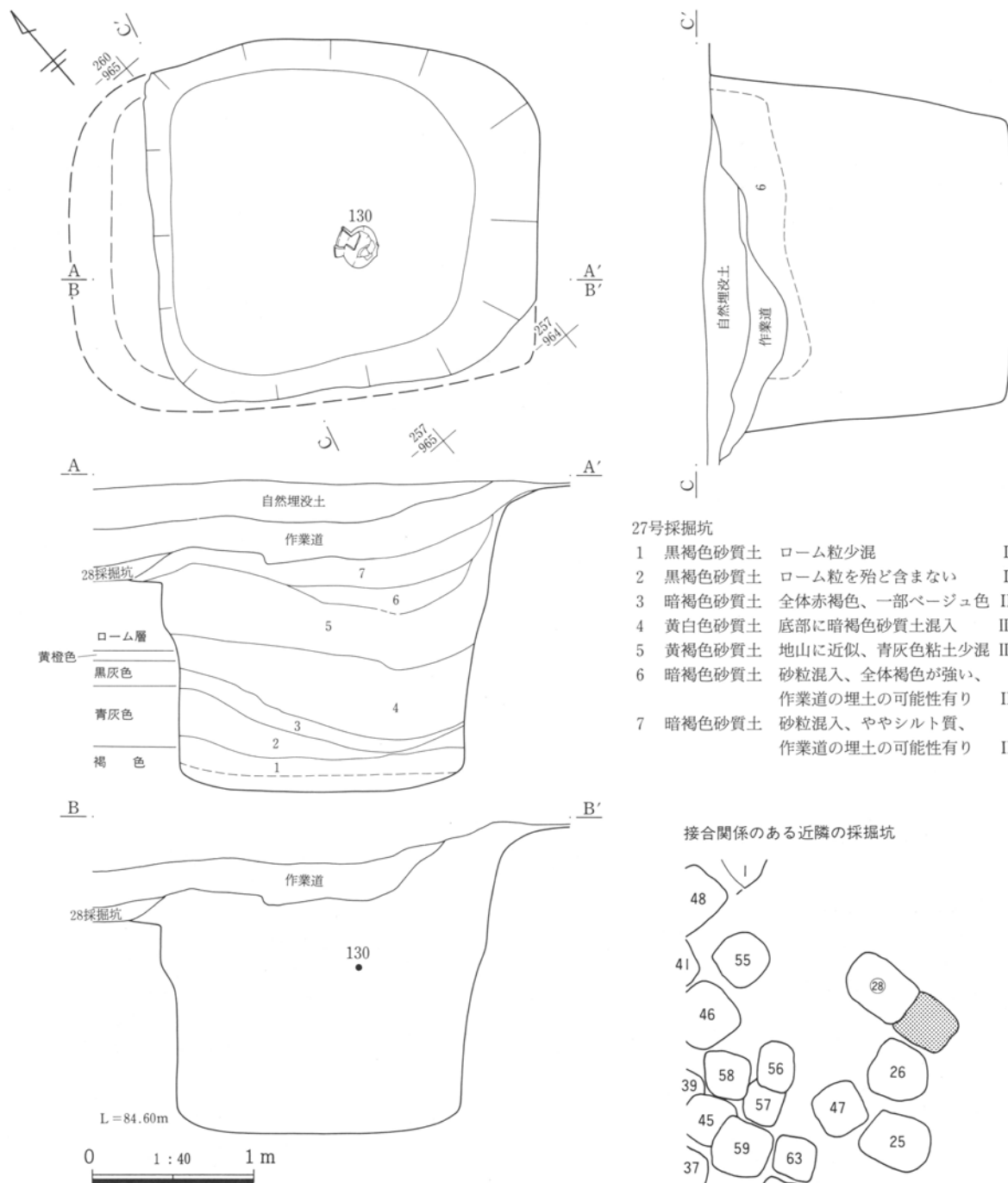
接合関係のある近隣の採掘坑



第88図 A区26号粘土採掘坑

27号粘土採掘坑〔第89図 PL.16〕

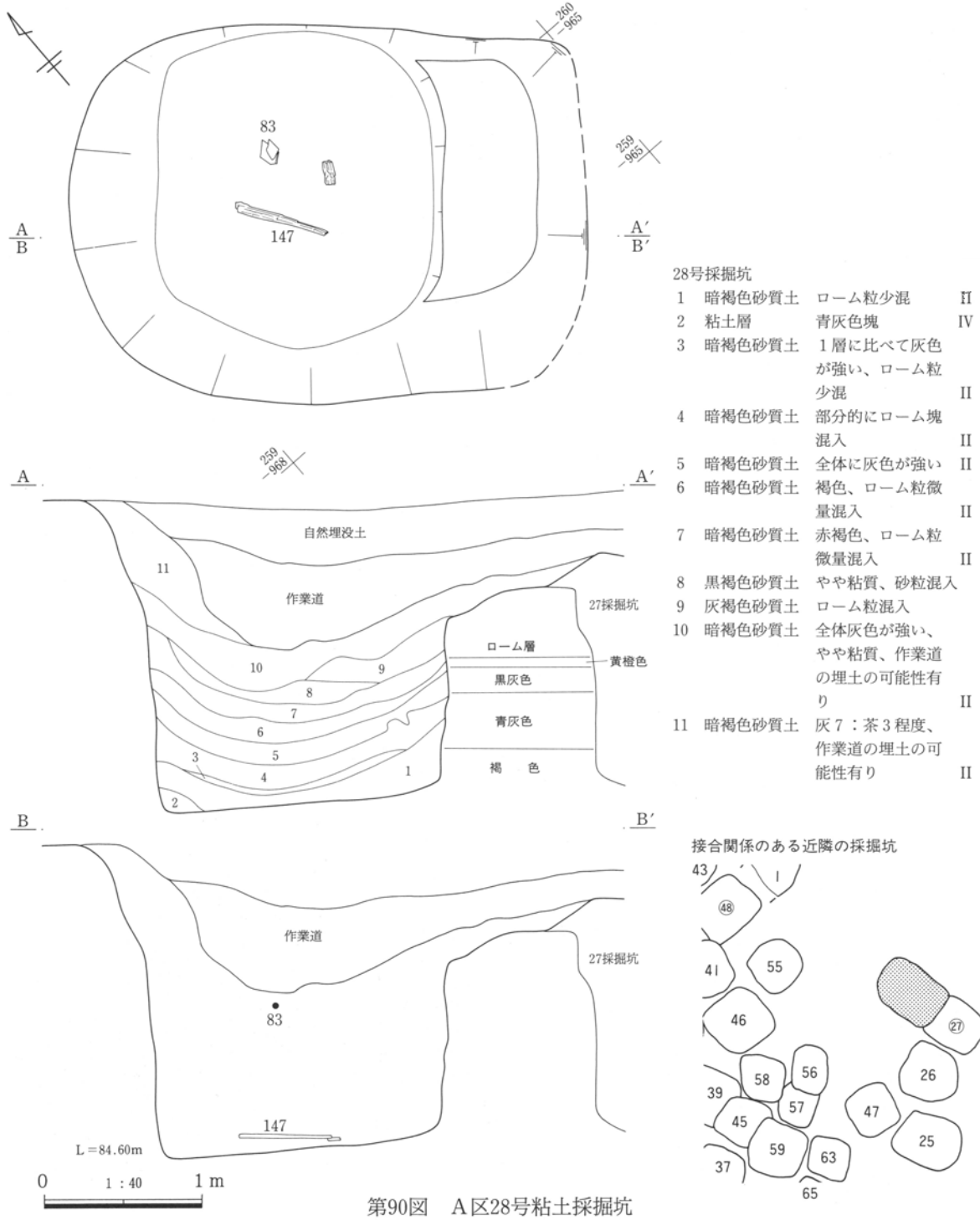
採掘坑全体の東端、枝状に分岐する部分に所在する。X257-Y963グリッドに位置し、ほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-53°-Wである。長軸(2.90)m、短軸(2.22)m、確認面からの深さは1.90mである。粘土層の厚さは88cmで、黄橙色6cm、黒灰色16cm、青灰色38cm、褐色は28cmである。採掘された粘土は4.6m<sup>3</sup>である。28号採掘坑と重複し、断面から本遺構が古いと判断される。26号採掘坑との間に作業道の底部が残存する。上部が作業道と推定される南壁が7cm程、西壁が58cm程確認面より低い。土砂は西から投げ込まれ、天地返しのできない埋没土である。最大輪郭は埋没後の崩落範囲の可能性ある。遺物は130である。接合関係は28号採掘坑、作業道とある。



第89図 A区27号粘土採掘坑

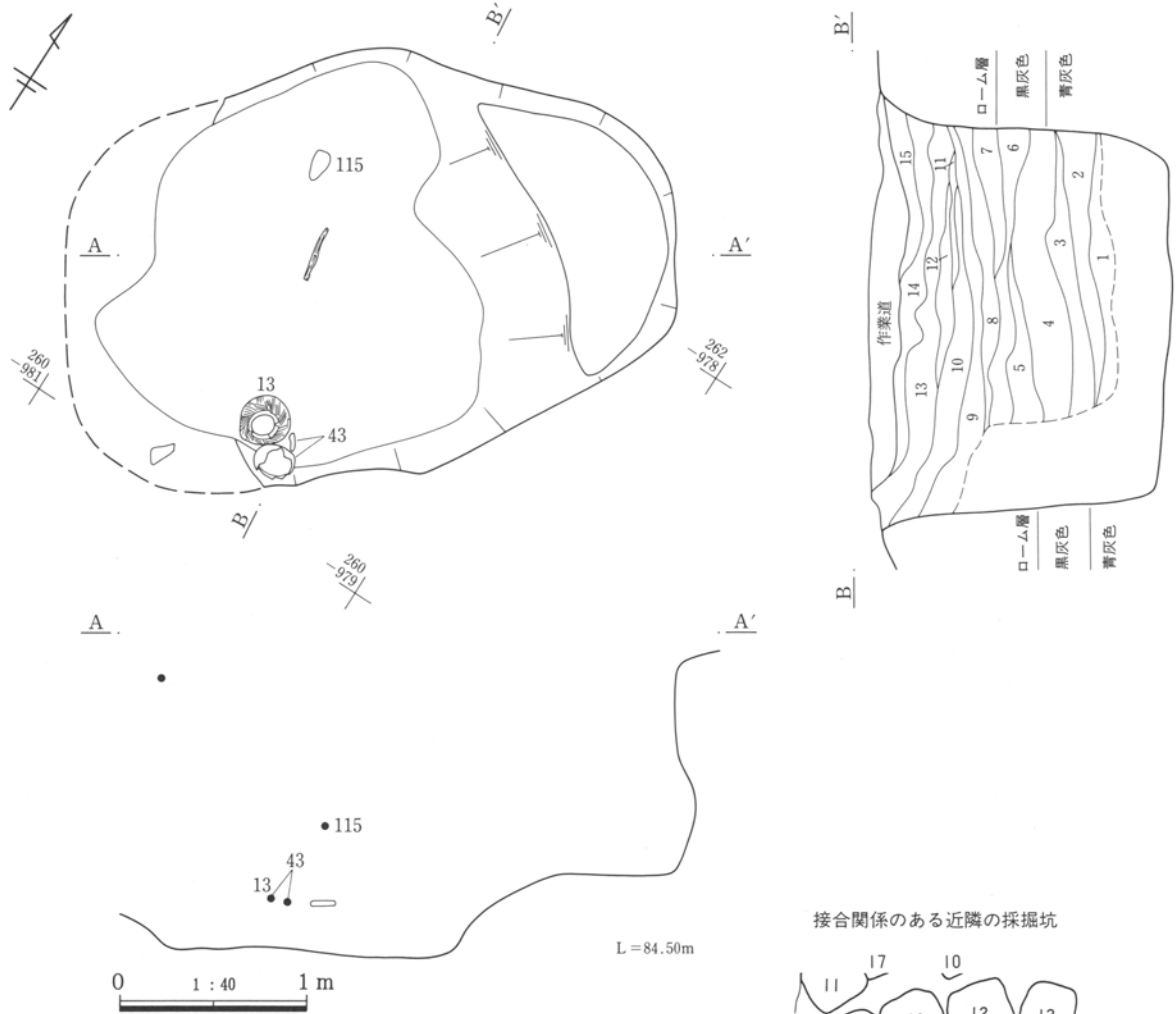
28号粘土採掘坑〔第90図 PL.16〕

X258-Y965グリッドに位置、隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-49°-Wである。規模は長軸3.30m、短軸2.40m、確認面からの深さは1.85m。粘土層の厚さは92cmで、黄橙色6cm、黒灰色16cm、青灰色35cm、褐色35cmである。採掘された粘土は7.2m<sup>2</sup>である。27号採掘坑と重複し、断面から本遺構が新しいと判断される。上部が作業道と推定される東壁が57cm程確認面より低い。下半部は砂層と黒色土が互層に堆積する自然埋没土の上層に人為埋没土が堆積する。最大輪郭は埋没後の崩落範囲の可能性もある。遺物は83・147である。接合関係は27・48号採掘坑、作業道とある。



29号粘土採掘坑〔第91図 PL.16〕

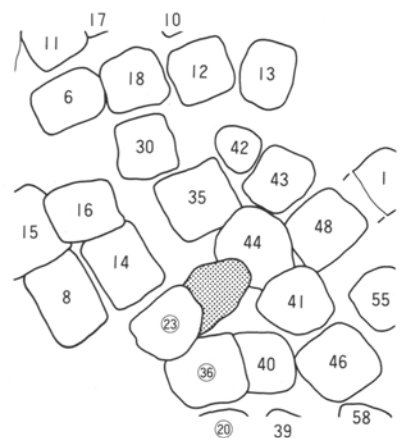
採掘坑全体の中央、X260-Y978グリッドに位置し、楕円形に近い隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-46°-Eである。規模は長軸推定(3.30)m、短軸2.20m、確認面からの深さは1.60mである。粘土層の厚さは90cmで、黒灰色27cm、青灰色63cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は6.5m<sup>2</sup>である。上面には作業道が重複する。23・44号採掘坑と重複し、断面から23号採掘坑よりも古く、44号採掘坑よりも新しいと判断される。南西壁が23号採掘坑に破壊されている。壁面残存部分はほぼ全面抉れている。土砂は東・西方向から投げ込まれており、天地返しの埋没土である。底部にはまざりの粘土が堆積する。遺物は13・43・115である。接合関係は4・5・20・23・36・65号採掘坑、作業道とある。



29号採掘坑

1	粘土層	青灰色粘土・ローム粒・3層微量混入	10	黒褐色砂質土	暗褐色土粒微量混入	I	
2	黒褐色砂質土	3層に1層の塊少混	IV	11	黒褐色砂質土	白色バミス・ローム粒微量混入	I
3	黒褐色砂質土	暗褐色土粒少混	I	12	暗褐色砂質土	ローム粒微量混入	II
4	暗褐色砂質土	ローム粒微量混入	II	13	暗褐色砂質土	ローム粒少混	II
5	暗褐色砂質土	ローム粒少混	II	14	暗褐色砂質土	黄褐色砂質土との混土、15層より黄褐色土多混	II
6	黄白色砂質土	暗褐色土粒少混	III	15	暗褐色砂質土	黄褐色砂質土との混土	II
7	黄白色粘質土	黄褐色土を全体に混入	III				
8	黄褐色粘質土	地山に近似、黒灰色粘土塊混入	III				
9	黄灰色粘質土	ローム・黒褐色土・黒灰色粘土混入	III				

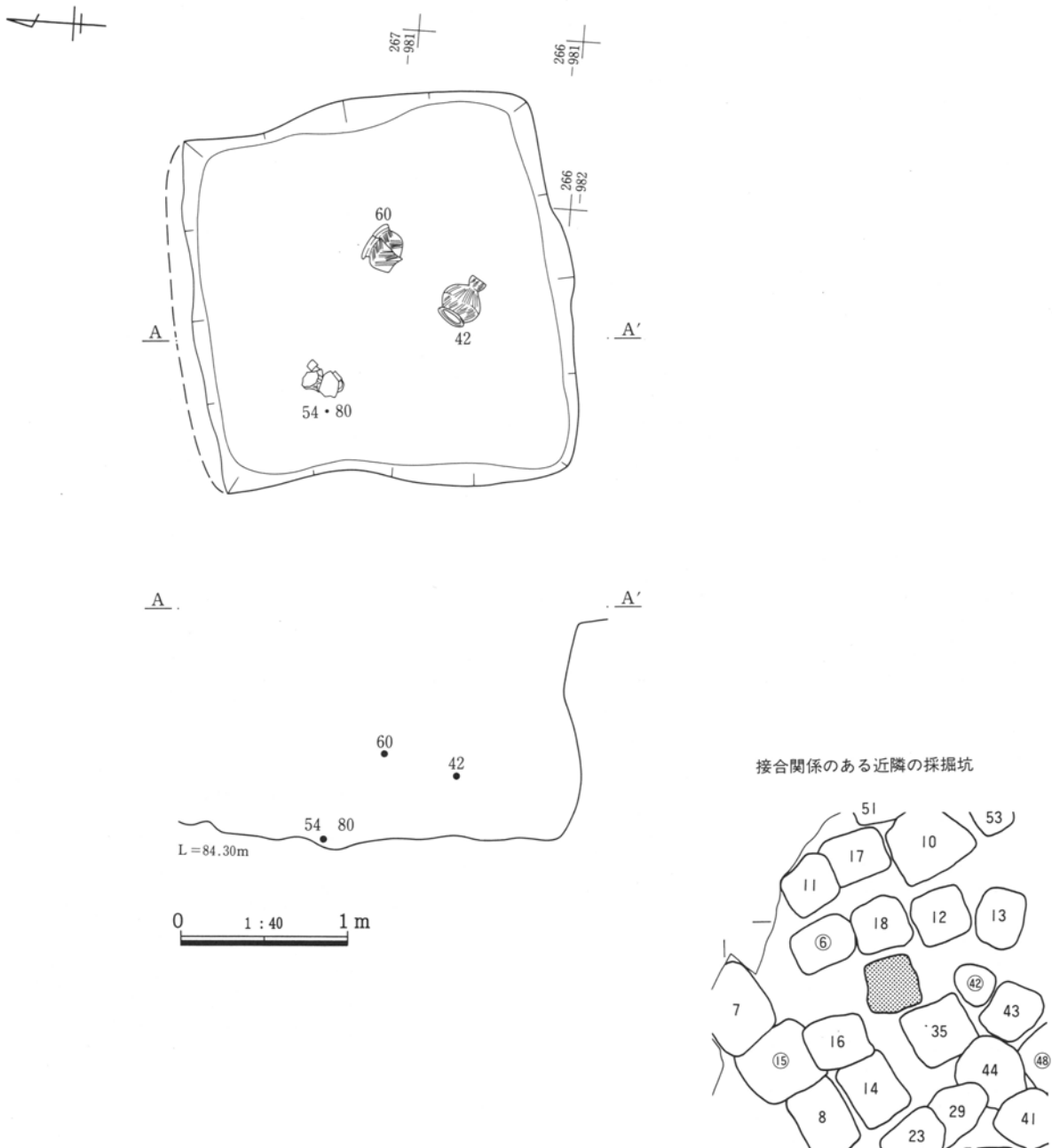
接合関係のある近隣の採掘坑



第91図 A区29号粘土採掘坑

30号粘土採掘坑〔第92図 PL.16・17〕

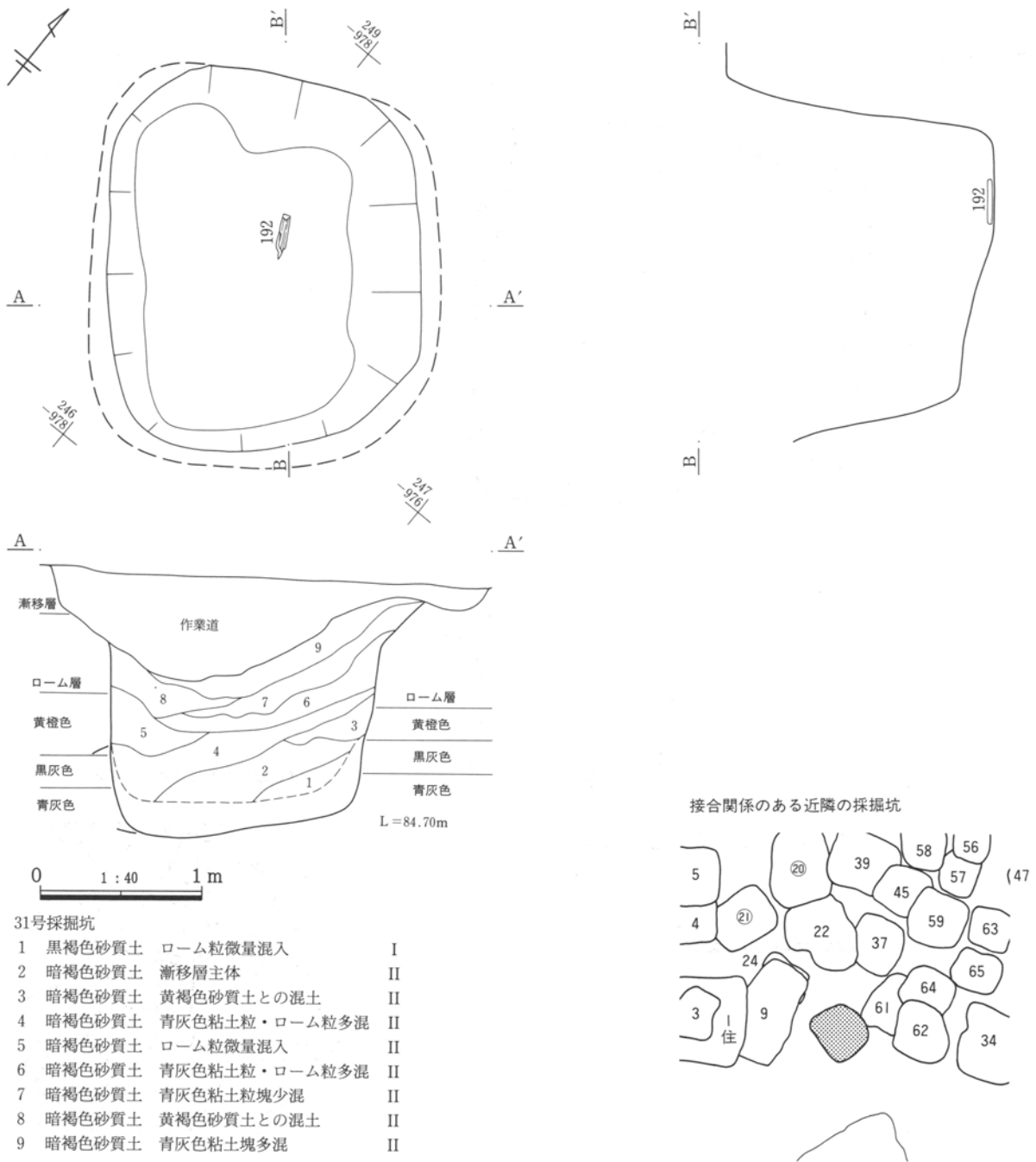
採掘坑全体の北寄り、X266-Y981グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-9°-Wである。規模は、長軸2.28m、短軸(2.22)m、確認面からの深さは1.30mである。壁面の粘土層の厚さは確認されていない。上面には作業道が重複する。42号採掘坑との間に作業道の底部が残存する。北壁が作業道に破壊されている。壁面残存部分はほぼ全面決れているが、東、西壁は精査されていない。土砂の投げ込み方向は不明である。底部には、シルト質土が堆積している。遺物は42・54・60・80である。接合関係は1・6・15・34・42・45・46・48・57・62号採掘坑、作業道とある。



第92図 A区30号粘土採掘坑

31号粘土採掘坑〔第93図 PL.17〕

採掘坑全体の南端、X246-Y976グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-39°-Wである。規模は、長軸(2.40)m、短軸(2.16)m、確認面からの深さは1.60mである。壁面の粘土層の厚さは85cmで、黄橙色39cm、黒灰色20cm、青灰色26cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は3.8㎡である。上部が作業道と推定される北東壁が確認面より14cm程低い。南西壁は大きく抉れている。土砂は北東から投げ込まれているが、天地返し埋没土ではない。上部は埋没後の崩落により広がっている可能性がある。遺物は192である。接合関係は14・20・21・23・36・41号採掘坑とある。



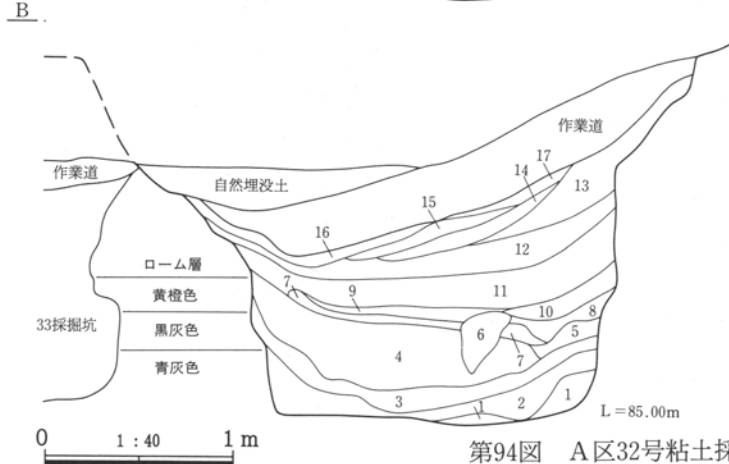
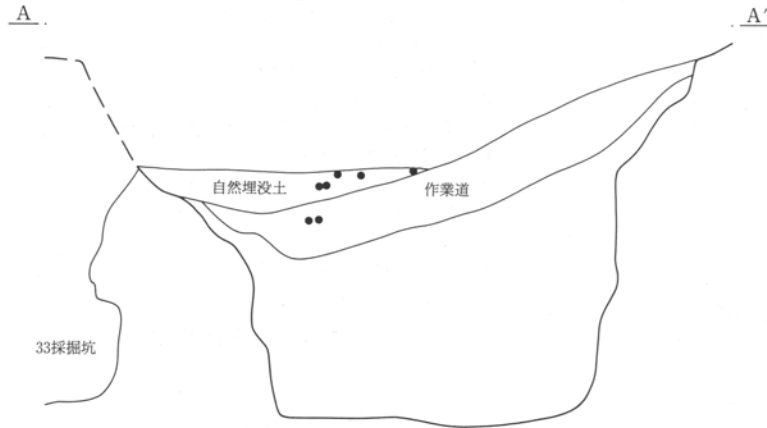
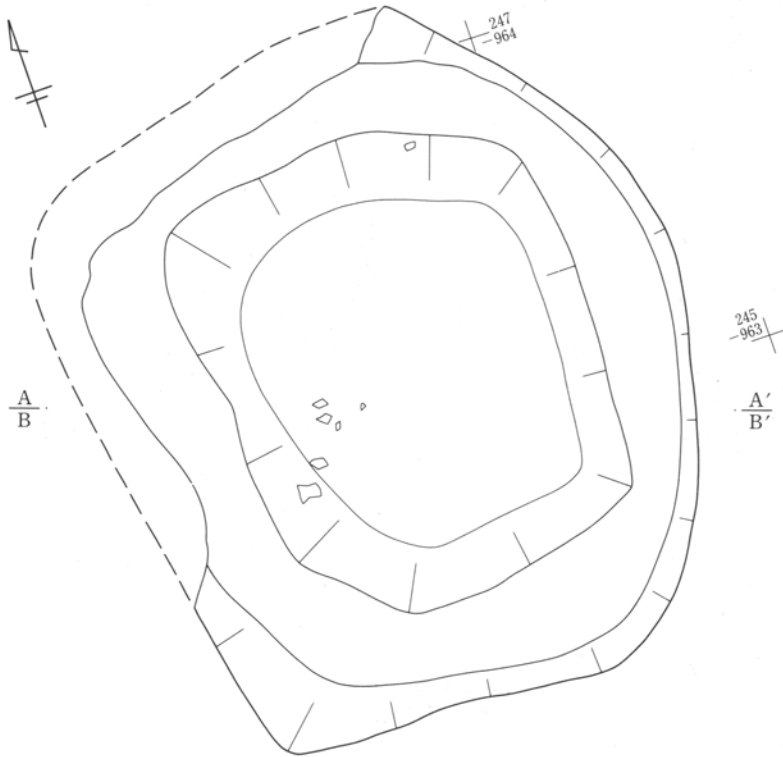
第93図 A区31号粘土採掘坑



32号粘土採掘坑〔第94図 PL.17〕

X243-Y963グリッドに位置し、隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-7°-Wである。規模は長軸(3.68)m、短軸2.86m、確認面からの深さは2.04mである。粘土層の厚さは78cmで、黄橙色19cm、黒灰色21cm、青灰色38cmである。採掘された粘土3.9m<sup>3</sup>。

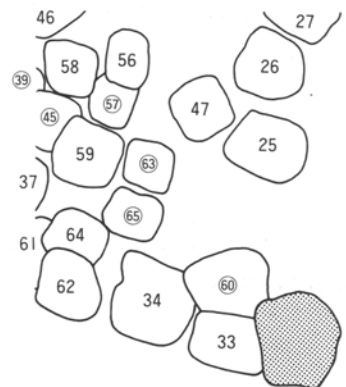
60号との間に作業道の底部が残存。上部が作業道と推定される西壁が確認面より80cm程低い。南西壁は抉れているが、精査されていない。下部に砂層を含み自然埋没の可能性がある。最大輪郭は埋没後の崩落範囲の可能性がある。遺物の接合関係は24・39・45・48・57・60・63・65号採掘坑、作業道とある。



32号採掘坑

- |    |         |              |     |
|----|---------|--------------|-----|
| 1  | 粘土層     | 黒灰色・青灰色粘土の混土 | IV  |
| 2  | 暗褐色砂質土  | 黄褐色砂質土との混土   | II  |
| 3  | 暗褐色砂質土  | ローム粒微量混入     | II  |
| 4  | 黄褐色砂質土  | 暗褐色砂質土との混土   | III |
| 5  | 暗褐色砂質土  | 黄褐色砂質土との混土   | II  |
| 6  | 暗褐色砂質土塊 |              | II  |
| 7  | 暗褐色砂質土  | 黒灰色粘土粒少混     | II  |
| 8  | 暗褐色砂質土  | 黄褐色砂質土との混土   | II  |
| 9  | 暗褐色砂質土  | 黄褐色砂質土との混土   | II  |
| 10 | 黄褐色砂質土  | 部分的に暗褐色砂質土混入 | III |
| 11 | 暗褐色砂質土  | 灰3:茶7程度      | II  |
| 12 | 暗褐色砂質土  | 部分的に白色パミス混入  | II  |
| 13 | 暗褐色砂質土  | 灰2:茶8程度、砂っぽい | II  |
| 14 | 暗褐色砂質土  | 灰6:茶4程度      | II  |
| 15 | 暗褐色砂質土  | 砂粒多混         | II  |
| 16 | 暗褐色砂質土  | 漸移層主体        | II  |
| 17 | 暗褐色砂質土  | 全体に褐色が強い     | II  |

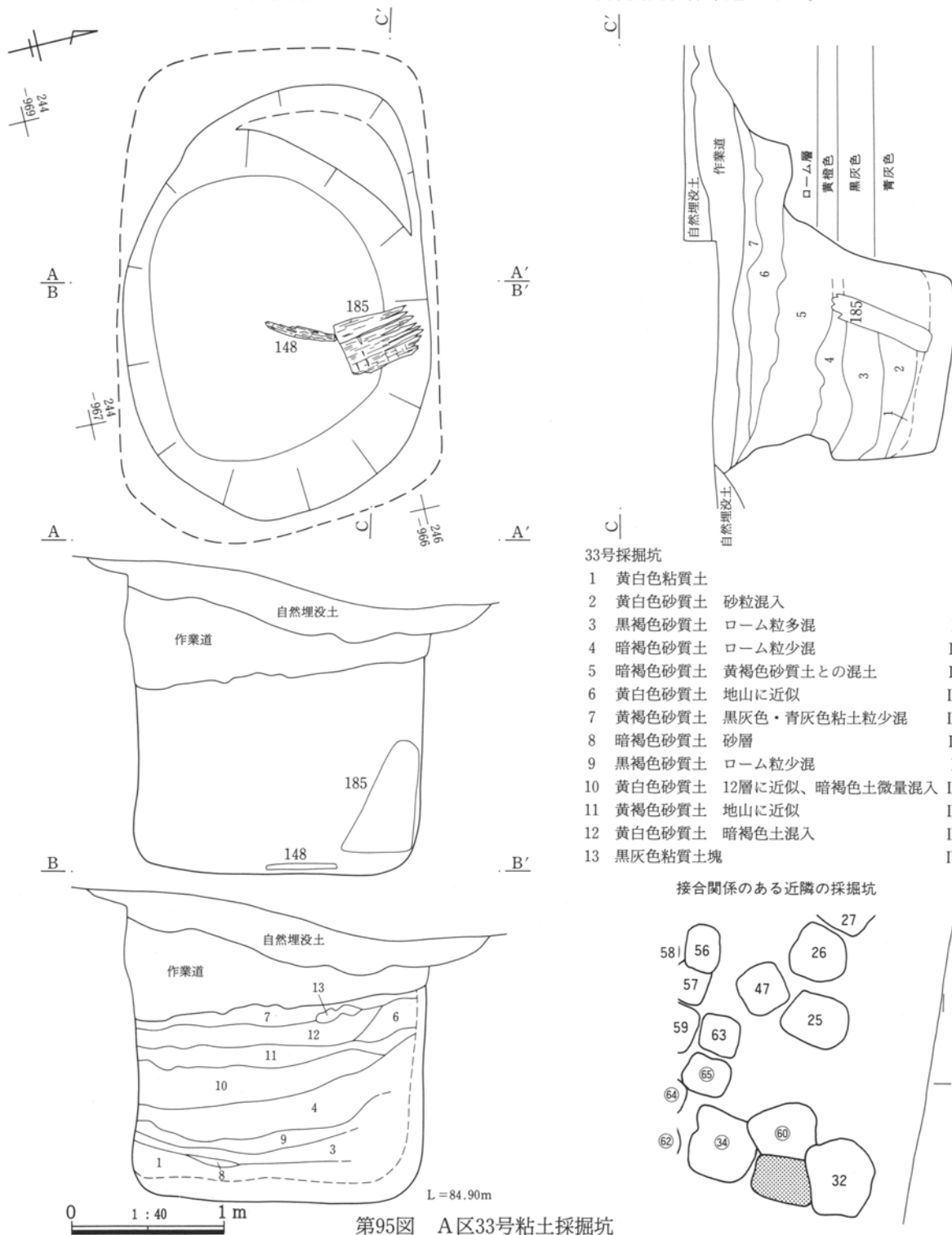
B' 接合関係のある近隣の採掘坑



第94図 A区32号粘土採掘坑

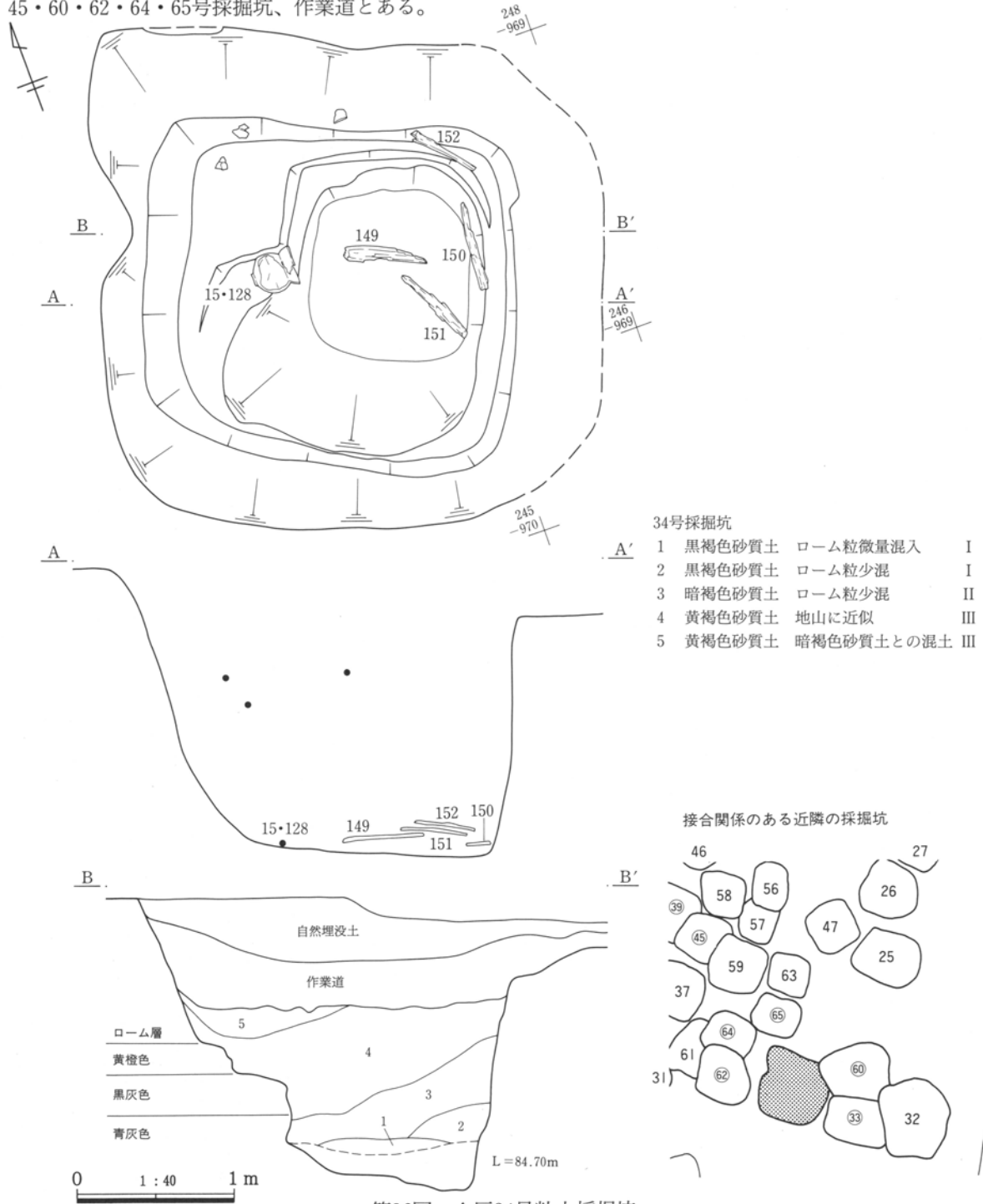
33号粘土採掘坑〔第95図 PL.17〕

X244-Y966グリッドに位置し、隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-82°-Wである。長軸(3.12)m、短軸(2.10)m、確認面からの深さは1.75mである。壁面の粘土層の厚さは90cmで、黄橙色14cm、黒灰色24cm、青灰色52cmである。採掘された粘土は4.9m<sup>2</sup>である。上部が作業道と推定される東壁が30cm程、西壁が18cm程、北壁が70cm程確認面より低い。断面は東壁がやや抉れる。土砂は北から投げ込まれており、天地返し埋没土である。遺物は148・185である。接合関係は34・36・60・62・64・65号採掘坑、作業道とある。



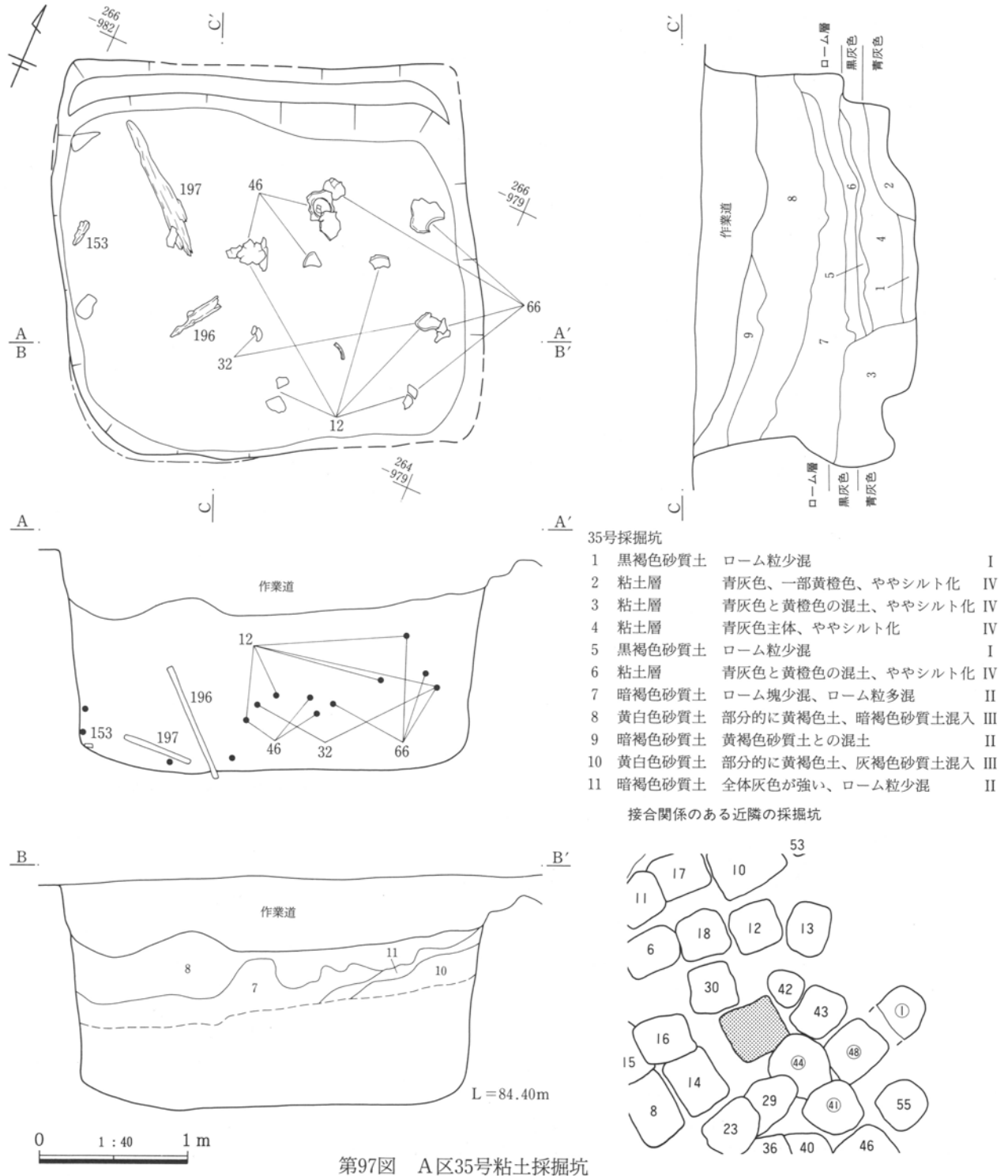
34号粘土採掘坑〔第96図 PL.17・18〕

X245-Y969グリッドに位置、ほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-23°-Eである。規模は長軸(3.20)m、短軸(3.04)m、確認面からの深さは1.88mである。粘土層の厚さは94cmで、黄橙色20cm、黒灰色26cm、青灰色48cmである。採掘された粘土は4.7m<sup>3</sup>。65号採掘坑との間に作業道の底部が残存する。上部が作業道と推定される東壁が32cm、北東壁が63cm程確認面より低い。南壁はやや決れる。東、北、西壁の下部はテラス状に中段がつき、北西隅は方形に残存する。土砂は東から投げ込まれ、天地返し埋没土である。最大輪郭は埋没後の崩落範囲の可能性ある。遺物は15・128・149~152である。接合関係は12・20・21・30・33・36・39・45・60・62・64・65号採掘坑、作業道とある。



35号粘土採掘坑〔第97図 PL.18〕

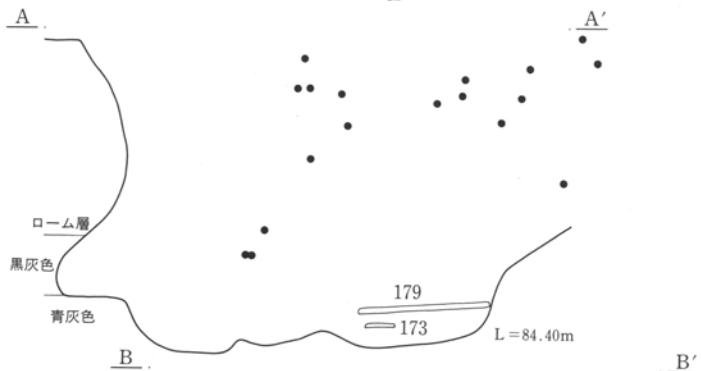
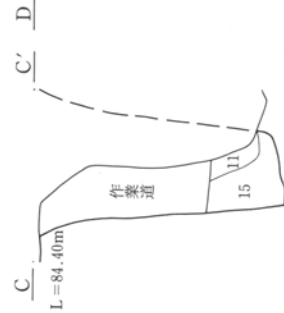
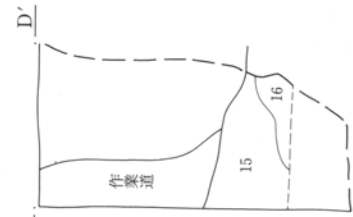
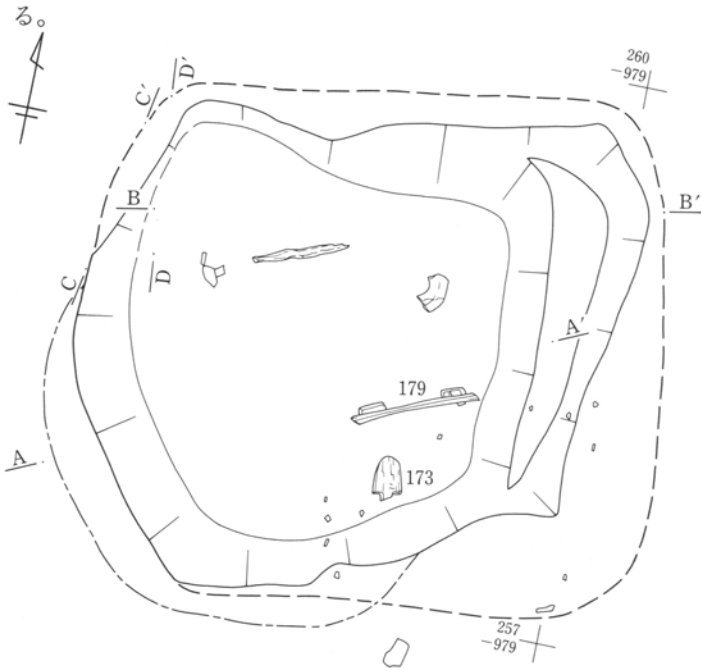
X 263-Y 978グリッドに位置し、ほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位N-65°-E。規模は長軸2.80m、短軸(2.60)m、確認面からの深さは1.53m。粘土層の厚さは50cmで、黒灰色15cm、青灰色35cm。採掘された粘土は3.6m<sup>2</sup>。上面に作業道が重複する。14・16号採掘坑との間に作業道の底部が2条残存する。上部が作業道と推定される南東隅が確認面より22cm程低い。南壁は大きく抉れる。土砂は南東から投げ込まれ天地返し。底部にシルト化した粘土堆積。遺物は12・32・46・66・153・196・197である。接合関係は1・38・41・44・48・49・65号採掘坑、作業道とある。



第97図 A区35号粘土採掘坑

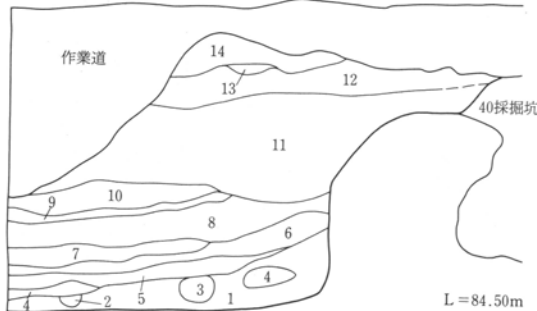
36号粘土採掘坑〔第63・64・98図 PL.18〕

X257-Y978グリッドに位置し、台形に近い隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-80°-Eである。規模は長軸(3.10)m、短軸(2.70)m、確認面からの深さは1.66mである。粘土層の厚さは60cmで、黒灰色31cm、青灰色29cmである。採掘された粘土は3.9m<sup>3</sup>である。上面には作業道が重複する。20号採掘坑との間に作業道の底部が残存する。上部が作業道と推定される南壁が確認面より48cm程低い。北壁は23号採掘坑、東壁は40号採掘坑との重複で破壊される。23号採掘坑よりも古く40号採掘坑よりも新しいと判断される。南、西壁は大きく抉れている。土砂は東から投げ込まれており天地返し of 埋没土である。底部にシルト化した粘土が堆積する。遺物は173・179である。接合関係は14・20・21・23・31・33・34・41・60・62・64・65号採掘坑、作業道とある。

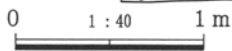
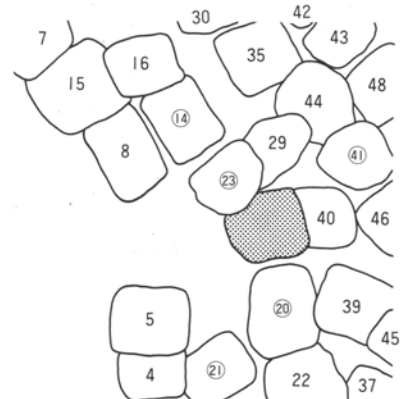


36号採掘坑

- |    |            |              |     |
|----|------------|--------------|-----|
| 1  | 黄白色砂質土     | 部分的に砂粒混入     | III |
| 2  | 青灰色・褐色粘土層塊 |              | IV  |
| 3  | 黒灰色粘土層塊    |              | IV  |
| 4  | 黒灰色粘土層塊    | 黄色がかかる       | IV  |
| 5  | 黒褐色砂質土     | 全体黒色         | I   |
| 6  | 黒褐色砂質土     | 褐色がかかる       | I   |
| 7  | 青灰色粘土層     | 暗褐色砂質土との混土   | IV  |
| 8  | 黄白色砂質土     | 暗褐色砂質土との混土   | III |
| 9  | 明灰色砂質土     | 橙色がかかる       | III |
| 10 | 黄白色砂質土     | 灰色がかかる       | III |
| 11 | 黄白色砂質土     | 橙色がかかる       | III |
| 12 | 黄褐色砂質土     | 青灰色粘土塊混入     | III |
| 13 | 黒灰色粘土層塊    |              | IV  |
| 14 | 暗褐色砂質土     | 白色パミス・ローム粒多混 | II  |
| 15 | 黄白色砂質土     | 7・8・9・10層と同一 | III |
| 16 | 暗褐色砂質土     | 4・5・6層と同一    | I   |



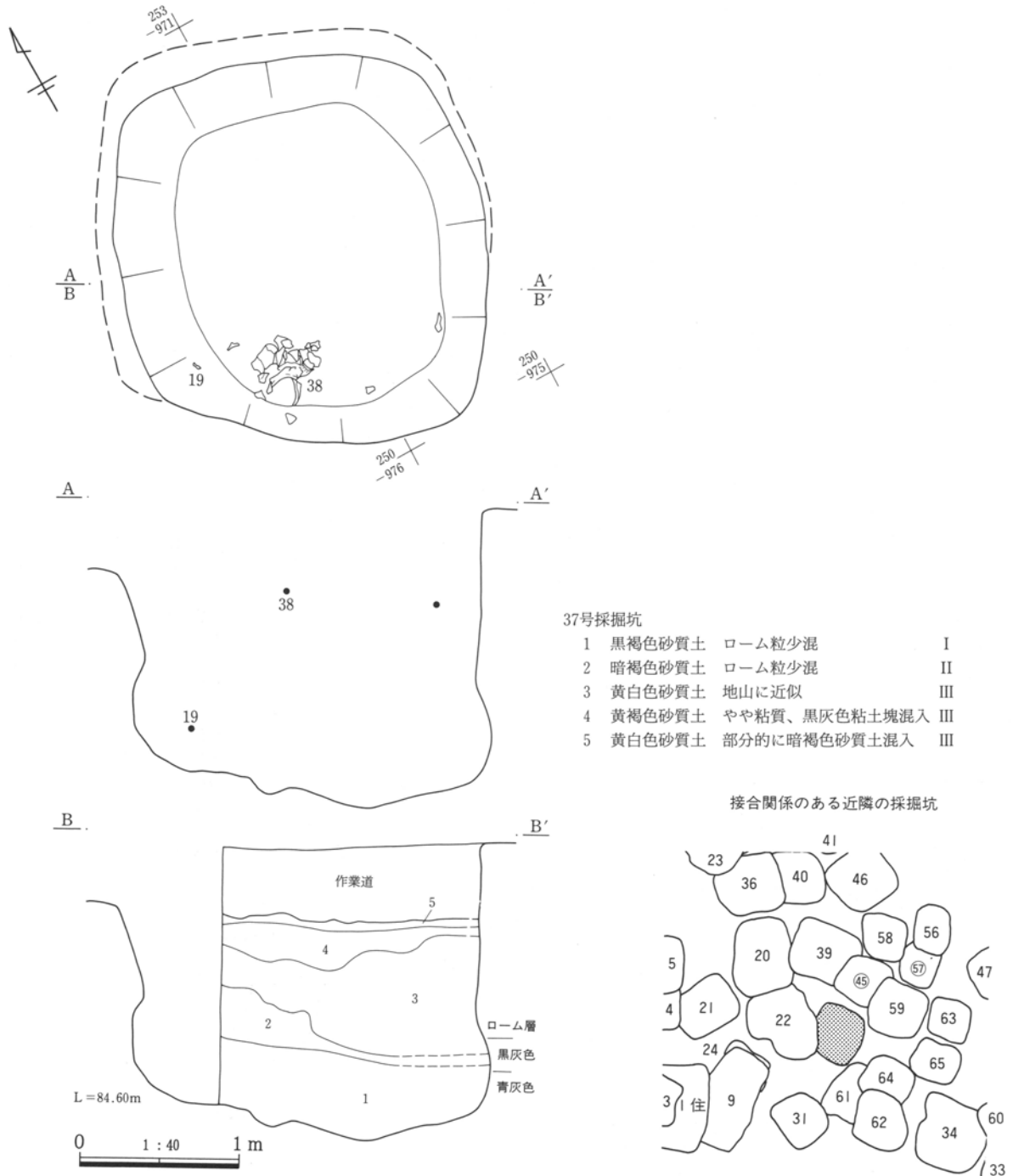
接合関係のある近隣の採掘坑



第98図 A区36号粘土採掘坑

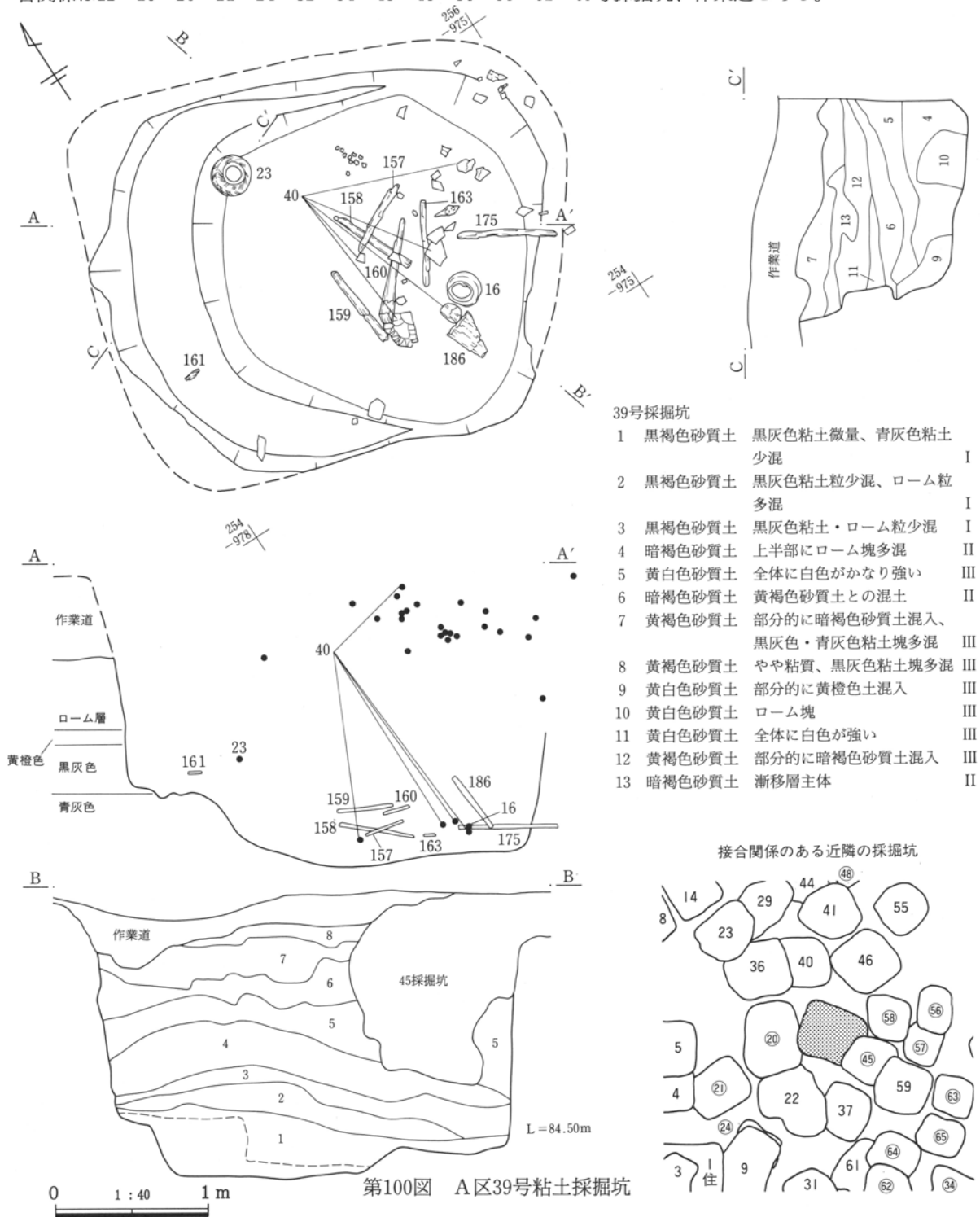
37号粘土採掘坑〔第99図 PL.18〕

採掘坑全体の南寄り、X250-Y975グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-26°-Eである。規模は、長軸(2.55)m、短軸(2.45)m、確認面からの深さは1.84mである。壁面の粘土層の厚さは64cmで、黒灰色20cm、青灰色44cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は3.5m<sup>3</sup>である。上部が作業道と推定される北、西壁が36cm程、東壁、南東隅が23cm程確認面より低い。壁は全面とも抉れている。土砂は西から投げ込まれており、天地返し埋没土である。上層部は作業道の埋没土である。遺物は19・38である。接合関係は45・57号採掘坑、作業道とある。



39号粘土採掘坑〔第100図 PL.19〕

X254-Y975グリッドに位置し、隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-70°-W。規模は長軸(3.15)m、短軸(2.57)m、確認面からの深さ1.85m。粘土層の厚さは90cmで、黄橙色10cm、黒灰色32cm、青灰色48cm。採掘された粘土は6.2m<sup>3</sup>。上面は作業道が重複し分岐する。上部が作業道と推定される南壁が52cm、北東隅が37cm程確認面より低い。東壁は45号採掘坑と重複し破壊され、本遺構が古い。底面西半部は地山粘土の崩落でテラス状である。土砂は東から投げ込まれ、天地返し。遺物は16・23・40・157~161・163・175・186である。接合関係は12・16・20・21・24・32・34・45・48・56~58・62~65号採掘坑、作業道とある。



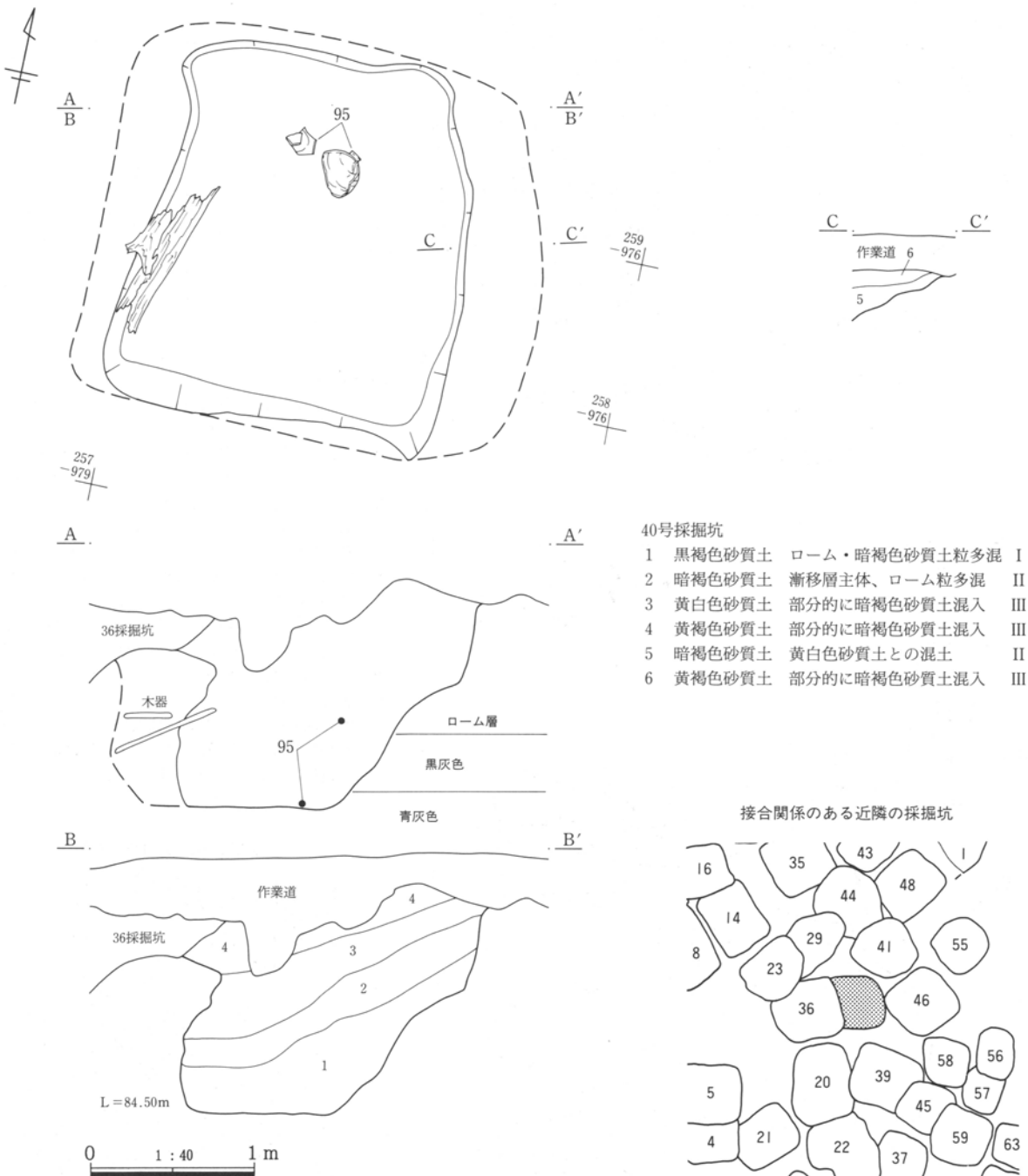
- 39号採掘坑
- |    |        |                           |     |
|----|--------|---------------------------|-----|
| 1  | 黒褐色砂質土 | 黒灰色粘土微量、青灰色粘土少混           | I   |
| 2  | 黒褐色砂質土 | 黒灰色粘土粒少混、ローム粒多混           | I   |
| 3  | 黒褐色砂質土 | 黒灰色粘土・ローム粒少混              | I   |
| 4  | 暗褐色砂質土 | 上半部にローム塊多混                | II  |
| 5  | 黄白色砂質土 | 全体に白色がかなり強い               | III |
| 6  | 暗褐色砂質土 | 黄褐色砂質土との混土                | II  |
| 7  | 黄褐色砂質土 | 部分的に暗褐色砂質土混入、黒灰色・青灰色粘土塊多混 | III |
| 8  | 黄褐色砂質土 | やや粘質、黒灰色粘土塊多混             | III |
| 9  | 黄白色砂質土 | 部分的に黄橙色土混入                | III |
| 10 | 黄白色砂質土 | ローム塊                      | III |
| 11 | 黄白色砂質土 | 全体に白色が強い                  | III |
| 12 | 黄褐色砂質土 | 部分的に暗褐色砂質土混入              | III |
| 13 | 暗褐色砂質土 | 漸移層主体                     | II  |

接合関係のある近隣の採掘坑

第100図 A区39号粘土採掘坑

40号粘土採掘坑〔第63・64・101図 PL.19〕

X257-Y977グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-2°-Wである。長軸(2.70)m、短軸(2.40)m、確認面からの深さは1.55mである。粘土層の厚さは45cmで、黒灰色35cm、青灰色10cmである。採掘された粘土は1.9m<sup>3</sup>である。上面に作業道が重複する。20号採掘坑との間に作業道の底部が残存する。壁面は、上部が作業道と推定される東壁が30cm程、36号採掘坑との重複により西壁が60cm程確認面より低い。断面から36号採掘坑が新しいと判断している。土砂は東から投げ込まれており、天地返し埋没土である。底部にはまぎりの粘土層が堆積する。遺物は95である。

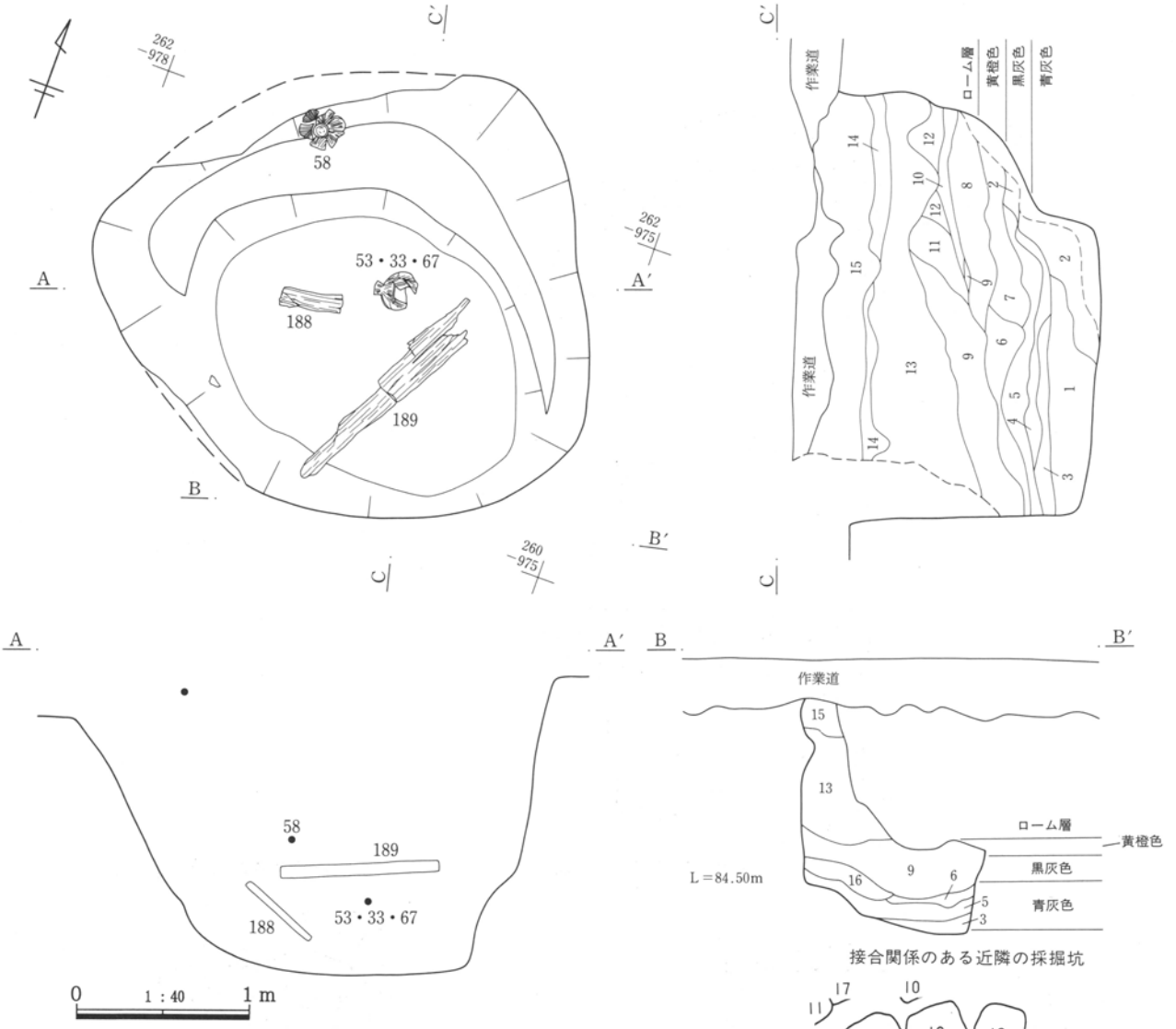


第101図 A区40号粘土採掘坑



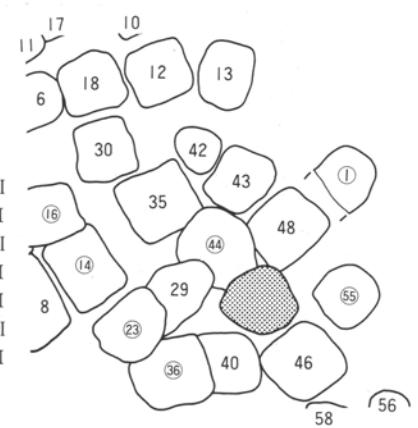
41号粘土採掘坑〔第63・64・102図 PL.19〕

X260-Y975グリッドに位置し、形状はほぼ円形を呈す。長軸方位はN-55°-E。規模は長軸(2.60)m、短軸2.40m、確認面からの深さ1.75m。粘土層の厚さは71cmで、黄橙色17cm、黒灰色15cm、青灰色39cmである。粘土量は4.2m<sup>3</sup>。上部が作業道と推定される南東隅が43cm程確認面より低い。北壁は44号採掘坑との重複で破壊され、平面から本遺構が新しいと判断される。底面北半部テラス状に段差。土砂は北から投げ込まれ天地返し。底部にシルト化した粘土堆積。遺物は33・53・58・67・188・189である。接合関係は1・14・16・20・21・23・31・36・44・55号採掘坑、作業道とある。



41号採掘坑

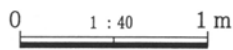
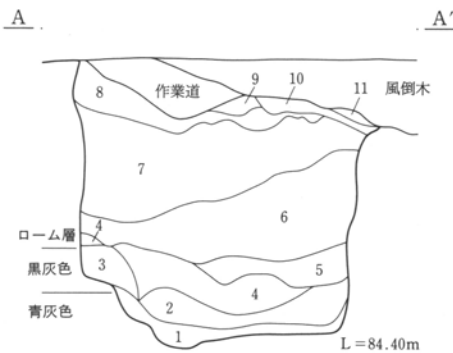
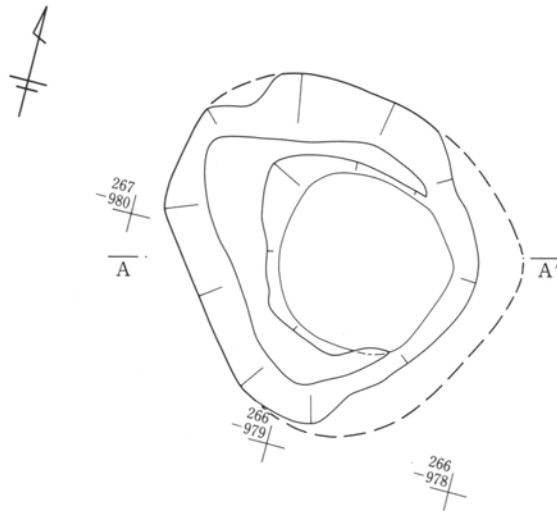
- |          |               |     |           |            |     |
|----------|---------------|-----|-----------|------------|-----|
| 1 黒褐色砂質土 | 青灰色粘土・ローム粒多量混 | I   | 9 黒褐色砂質土  | ローム粒微量混入   | I   |
| 2 粘土層    | 黒灰色・青灰色粘土の混土  | IV  | 10 黄褐色砂質土 | 全体に橙色がかかる  | III |
| 3 黒褐色砂質土 | 黒灰色粘土・ローム粒少混  | I   | 11 暗褐色砂質土 | 壁面崩落土      | II  |
| 4 黒褐色砂質土 | ローム粒少混        | I   | 12 黄白色砂質土 | 壁面崩落土      | III |
| 5 粘土層    | 黒灰色・青灰色粘土の混土  | IV  | 13 暗褐色砂質土 | ローム塊多混     | II  |
| 6 黄白色砂質土 | 黒灰色・青灰色粘土混入   | III | 14 暗褐色砂質土 | 黄白色砂質土との混土 | II  |
| 7 黄褐色砂質土 | 部分的に黄白色土混入    | III | 15 黄白色砂質土 | 黒灰色粘土塊混入   | III |
| 8 黄白色砂質土 | 地山近似          | III | 16 暗褐色砂質土 | ローム粒多混     | II  |



第102図 A区41号粘土採掘坑

42号粘土採掘坑〔第103図 PL.19〕

採掘坑全体の北寄り、X266-Y978グリッドに位置し、形状は楕円形を呈す。長軸方位はN-50°-Wである。規模は、長軸(1.92)m、短軸1.62m、確認面からの深さは1.52mである。壁面の粘土層の厚さは50cmで、黒灰色24cm、青灰色26cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は1.2m<sup>2</sup>である。30号作業坑との間に作業道の底部が残存する。上面は風倒木に破壊されている。上部が作業道と推定される南東壁が確認面より40cm程低い。壁面は部分的にやや抉れている。底部西半部にはテラス状に中段がつく。土砂は南・北方向から投げ込まれており、天地返し埋没土である。接合関係は30号採掘坑、作業道とある。



42号採掘坑

1	粘土層	褐色主体	IV
2	黒褐色砂質土	ローム塊多混	I
3	粘土層	黒灰色・青灰色粘土の混土	IV
4	黒褐色砂質土	ローム粒多混	I
5	黒褐色砂質土	ローム粒少混	I
6	暗褐色砂質土	黒褐色砂質土塊少混	II
7	暗褐色砂質土	黒褐色砂質土塊多混	II
8	黄褐色砂質土	青灰色粘土粒少混	III
9	青灰色粘土層	ローム粒少混	IV
10	青灰色粘土層	採掘坑埋没土の最上層か	IV
11	黄灰色土	ローム粒少混	III

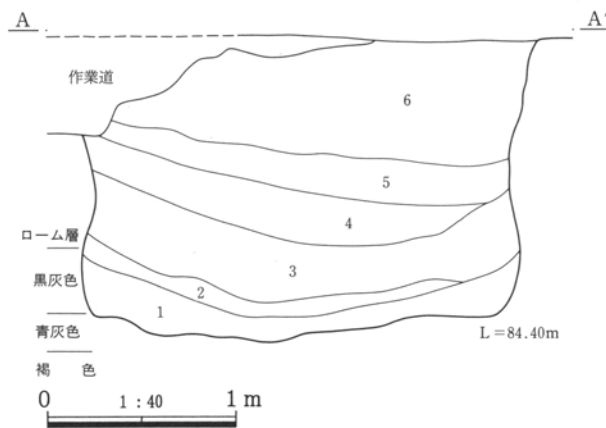
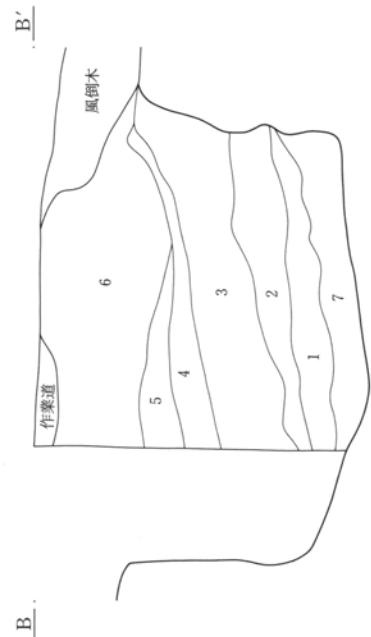
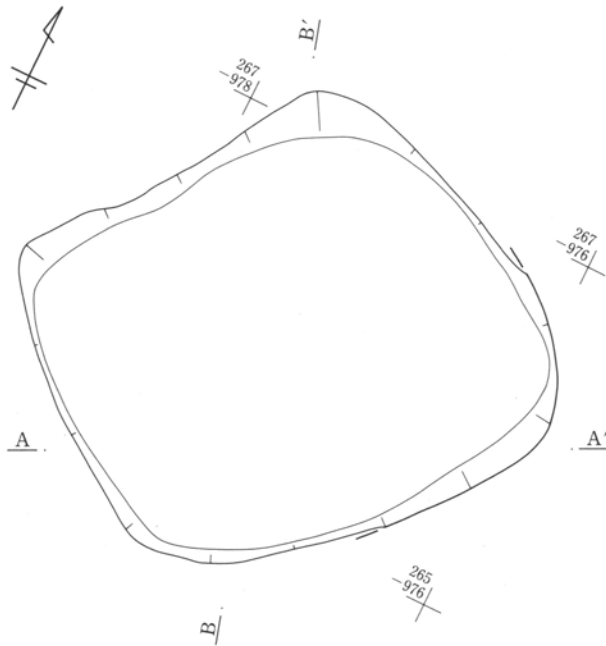
接合関係のある近隣の採掘坑



第103図 A区42号粘土採掘坑

43号粘土採掘坑〔第104図 PL.20〕

採掘坑全体の北寄り、X264-Y976グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-35°-Eである。規模は、長軸2.45m、短軸2.13m、確認面からの深さは1.63mである。壁面の粘土層の厚さは46cmで、黒灰色35cm、青灰色11cm、褐色上面まで掘り込まれている。採掘された粘土は2.4m<sup>2</sup>である。上部が作業道と推定される南東壁が45cm程、南西壁が50cm程、北西壁が40cm程確認面より低い。壁は全面的にやや抉れている。土砂は、西から投げ込まれており、天地返し埋没土である。遺物は確認されていない。



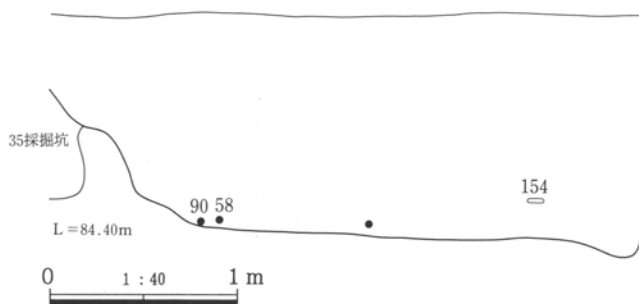
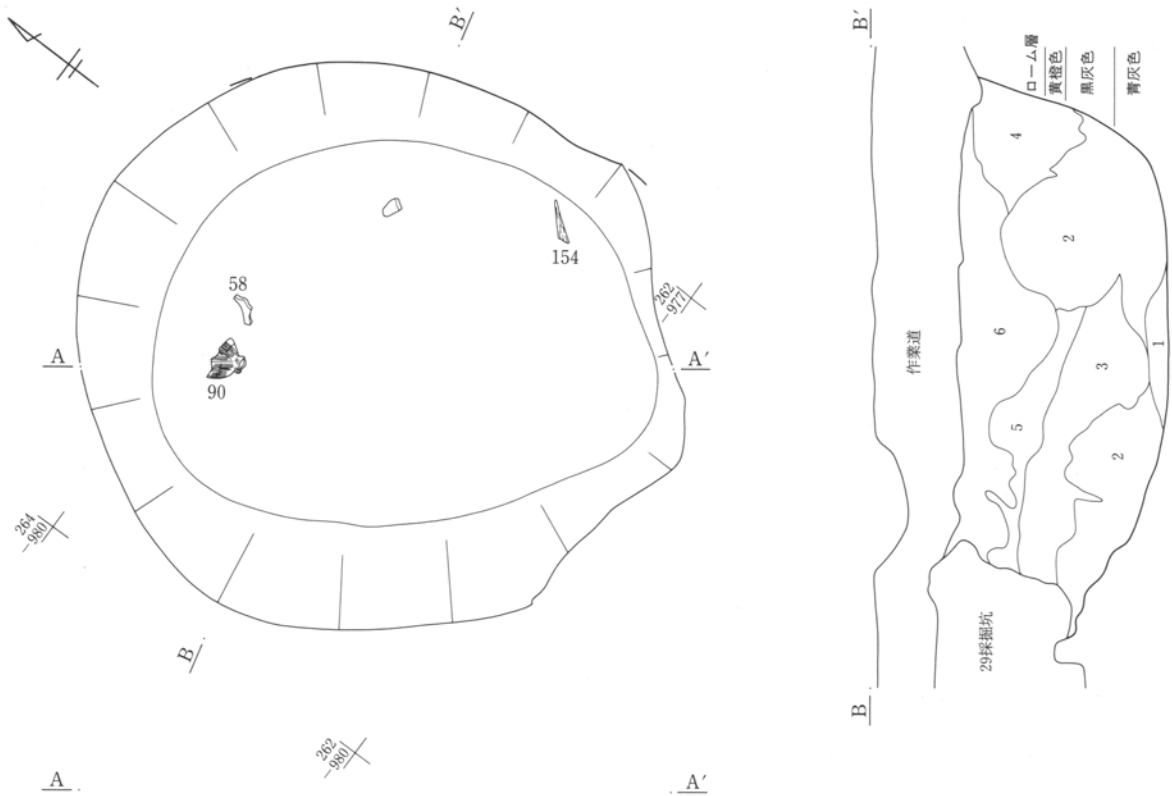
43号採掘坑

- |   |        |                   |     |
|---|--------|-------------------|-----|
| 1 | 黒褐色砂質土 | 砂粒多混、青灰色粘土・ローム粒少混 | I   |
| 2 | 黒褐色砂質土 | 砂粒少混              | II  |
| 3 | 暗褐色砂質土 | ローム粒微量混入          | II  |
| 4 | 暗褐色砂質土 | ローム塊少混            | II  |
| 5 | 黄褐色砂質土 | 黒褐色砂質土粒多混         | III |
| 6 | 黄褐色砂質土 | 黒灰色粘土・黒褐色砂質土粒少混   | III |
| 7 | 粘土層    | 褐色主体              | IV  |

第104図 A区43号粘土採掘坑

44号粘土採掘坑〔第105図 PL.20〕

X261-Y976グリッドに位置し、形状はほぼ円形を呈す。長軸方位はN-47°-Wである。規模は、長軸(3.03)m、短軸(3.02)m、確認面からの深さは1.56mである。粘土層の厚さは65cmで、黄橙色11cm、黒灰色26cm、青灰色28cmである。採掘された粘土は6.3m<sup>3</sup>である。上面に作業道が重複する。上部が作業道と推定される北東壁が45cm程確認面より低い。南西壁は29号採掘坑と、南東壁は41号採掘坑との重複で破壊される。断面から29号採掘坑が、平面から41号採掘坑が、本遺構よりも新しいと判断される。土砂は南・北方向から投げ込まれているが、天地返し埋没土ではない。底部にはまざりの粘土層が堆積する。遺物は58・90・154である。接合関係は1・35・41・48・55号採掘坑、作業道とある。



44号採掘坑

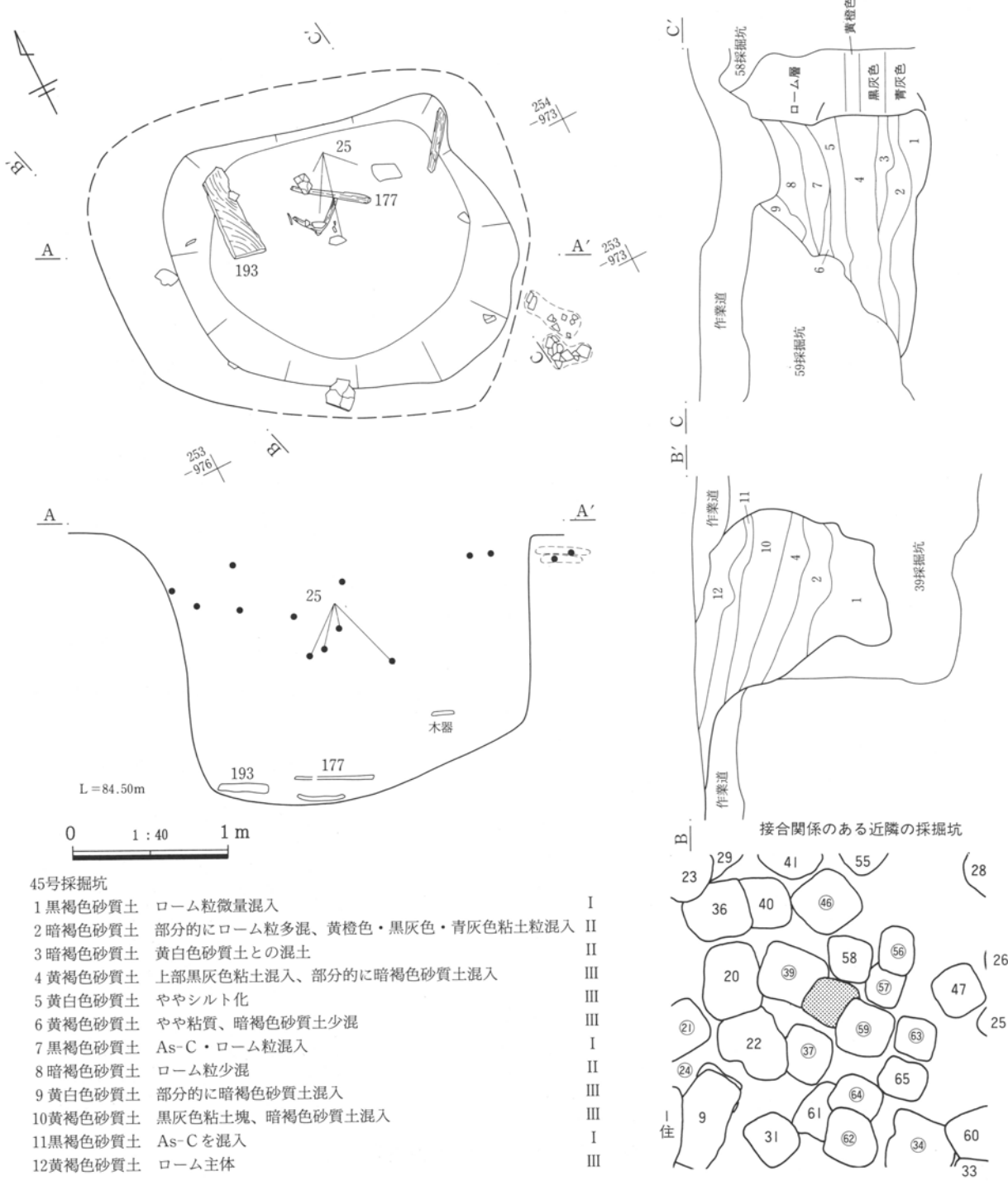
- |                               |                    |     |
|-------------------------------|--------------------|-----|
| 1 粘土層                         | ローム、黒灰色・青灰色粘土の混土   | IV  |
| 2 壁面崩落土                       | 漸移層暗褐色土、ローム層       |     |
| 3 黒褐色砂質土                      | ローム粒多混             | I   |
| 4 ローム・黒褐色土・暗褐色土の互層各土の厚さは5cm前後 |                    |     |
| 5 暗褐色土                        | 黒褐色土との混土           | II  |
| 6 黄褐色砂質土                      | 下半部黄白色、黒褐色土霜降り状に多混 | III |



第105図 A区44号粘土採掘坑

45号粘土採掘坑〔第63・64・106図 PL.20〕

X252-Y973グリッドに位置し、隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-64°-Wである。規模は、長軸(2.70)m、短軸(1.64)m、確認面からの深さは1.75mである。粘土層の厚さは77cmで、黄橙色10cm、黒灰色17cm、青灰色50cmである。採掘された粘土は3.4m<sup>2</sup>である。上面に作業道が重複する。壁面は、上部が作業道と推定される北壁が40cm程、南壁が25cm程確認面より低い。西壁は39号採掘坑と、東壁は59号採掘坑との重複で破壊される。断面から39号採掘坑より新しく、59号採掘坑より古いと判断される。北壁が大きく抉れている。土砂は東・西方向から投げ込まれており、天地返し埋没土である。遺物は25・177・193である。接合関係は1・12・15・21・24・30・32・34・37・39・46・48・56・57・59・62~64号採掘坑、作業道とある。

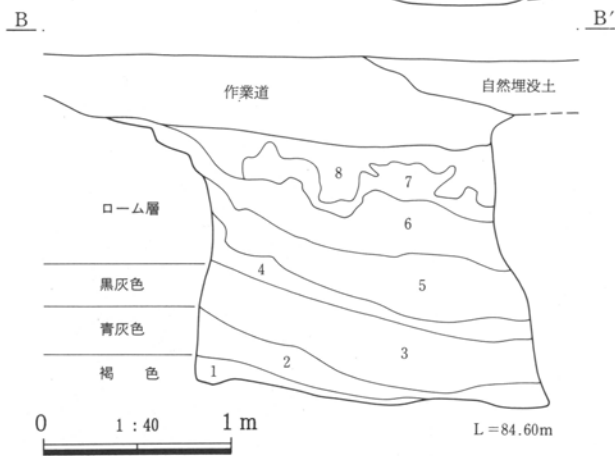
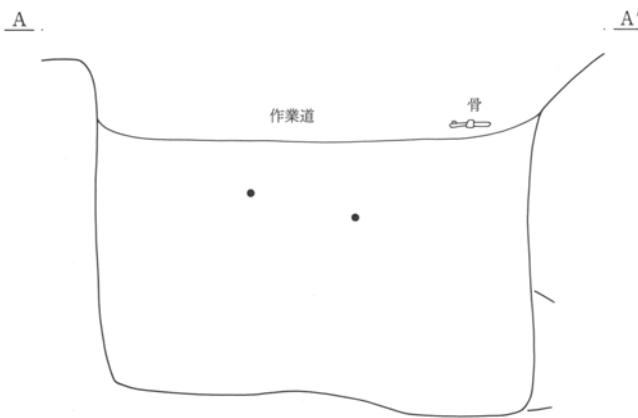
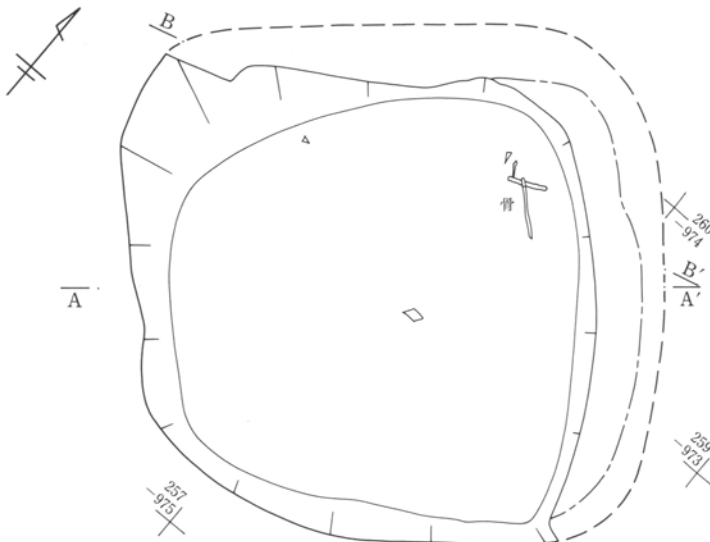


- 45号採掘坑
- 1 黒褐色砂質土 ローム粒微量混入
  - 2 暗褐色砂質土 部分的にローム粒多混、黄橙色・黒灰色・青灰色粘土粒混入
  - 3 暗褐色砂質土 黄白色砂質土との混土
  - 4 黄褐色砂質土 上部黒灰色粘土混入、部分的に暗褐色砂質土混入
  - 5 黄白色砂質土 ややしルト化
  - 6 黄褐色砂質土 やや粘質、暗褐色砂質土少混
  - 7 黒褐色砂質土 As-C・ローム粒混入
  - 8 暗褐色砂質土 ローム粒少混
  - 9 黄白色砂質土 部分的に暗褐色砂質土混入
  - 10 黄褐色砂質土 黒灰色粘土塊、暗褐色砂質土混入
  - 11 黒褐色砂質土 As-Cを混入
  - 12 黄褐色砂質土 ローム主体

第106図 A区45号粘土採掘坑

46号粘土採掘坑〔第107図 PL.20〕

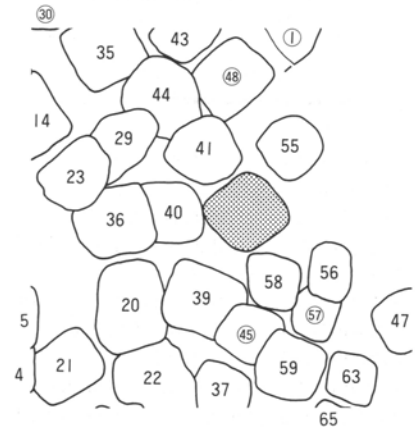
X257-Y973グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-50°-Eである。規模は長軸(2.45)m、短軸(2.40)m、確認面からの深さは1.84mである。粘土層の厚さは76cmで、黒灰色23cm、青灰色26cm、褐色27cmである。採掘された粘土は4.5m<sup>2</sup>である。上部が作業道と推定される北東壁が28cm、北西壁が33cm程確認面より低い。北東壁は大きく抉れる。土砂は西から投げ込まれ、下部に砂層が堆積した後に天地返しで埋没。底部にまぎりの粘土が堆積する。遺物の接合関係は1・30・45・48・57・62号採掘坑、作業道とある。上層部出土の骨は、人骨としては細すぎるという見解を得ている。



46号採掘坑

- |           |                        |     |
|-----------|------------------------|-----|
| 1 粘土層     | 黒灰色・青灰色粘土、ローム粒混入       | IV  |
| 2 暗褐色砂質土  | 灰7：茶3程度                | II  |
| 3 灰黄褐色砂質土 | ややシルト質、黒灰色粘土・砂粒混入      |     |
| 4 青灰色粘質土  | 黄橙色・黒灰色粘土混入            | IV  |
| 5 黒褐色砂質土  | 黄橙色粘土粒・ローム粒混入          | I   |
| 6 暗褐色砂質土  | 青灰色粘土粒・ローム粒多混、黄橙色粘土粒少混 | II  |
| 7 暗褐色砂質土  | ローム粒・黒褐色砂質土少混          | II  |
| 8 黄白色砂質土  | 暗褐色砂質土との混土             | III |

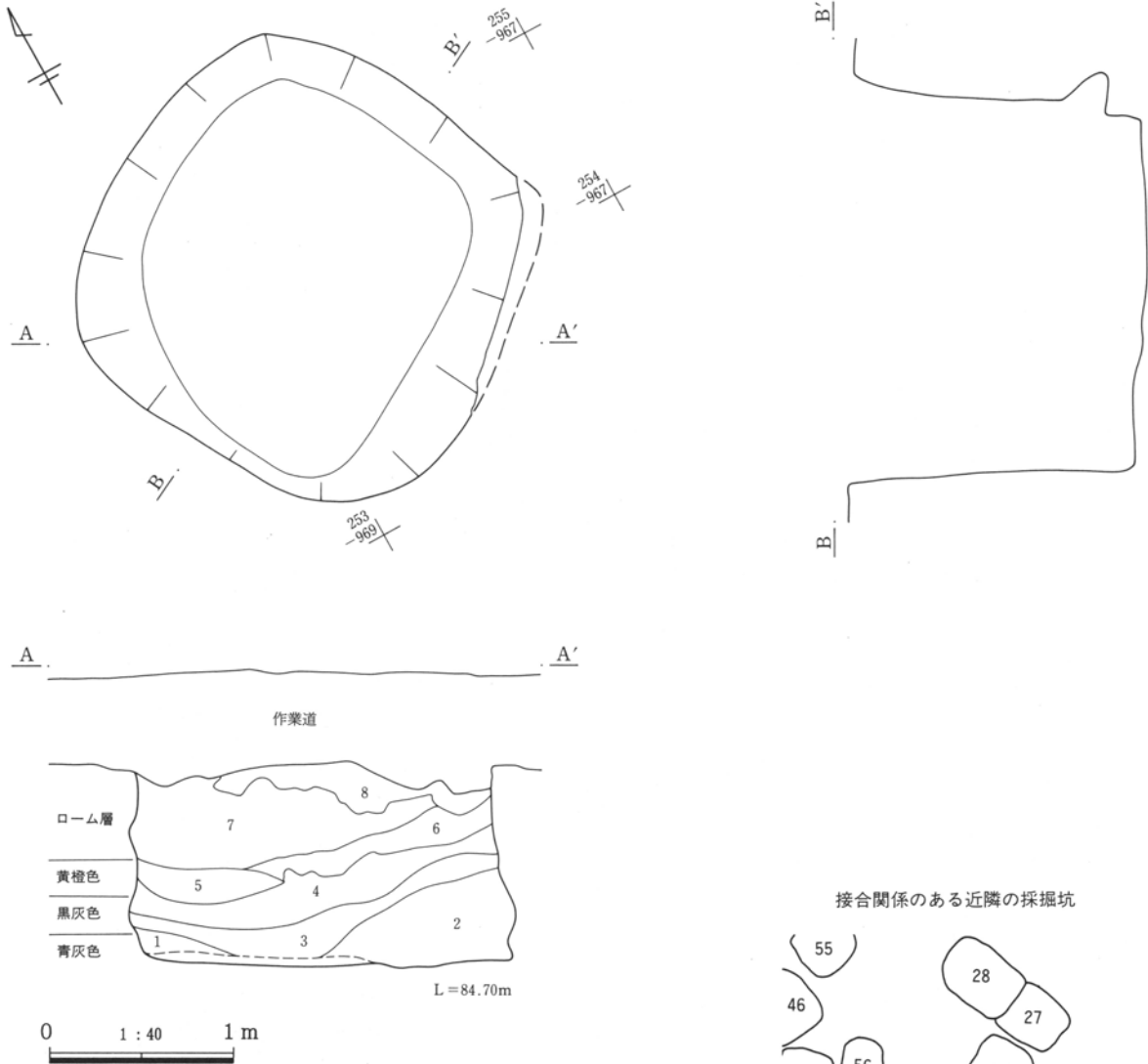
接合関係のある近隣の採掘坑



第107図 A区46号粘土採掘坑

47号粘土採掘坑〔第108図 PL.20〕

採掘坑全体の東寄り、枝状に分岐する部分に所在する。X253-Y967グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-26°-Wである。規模は、長軸2.25m、短軸2.22m、確認面からの深さは1.60mである。壁面の粘土層の厚さは60cmで、黄橙色20cm、黒灰色20cm、青灰色20cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は3.0m<sup>2</sup>である。25・56号採掘坑との間に作業道の底部が残存する。上部が作業道と推定される南東壁が50cm程、北西壁が47cm程確認面より低い。壁面はやや抉れている。土砂は東から投げ込まれており、天地返し埋没土である。遺物は確認されていない。



47号採掘坑

- |   |        |                  |     |
|---|--------|------------------|-----|
| 1 | 粘土層    | 黒灰色・青灰色粘土の混土     | IV  |
| 2 | 黒褐色砂質土 | 黒灰色・青灰色粘土、ローム粒混入 | I   |
| 3 | 黒褐色砂質土 | As-C混入、全体に黒色が強い  | I   |
| 4 | 暗褐色砂質土 | ローム粒少混           | II  |
| 5 | 黄白色砂質土 | 部分的に暗褐色砂質土混入     | III |
| 6 | 黄白色砂質土 | 暗褐色砂質土との混土       | III |
| 7 | 黄褐色砂質土 | 部分的に暗褐色砂質土混入     | III |
| 8 | 黄白色砂質土 | 青灰色粘土・暗褐色砂質土混入   | III |

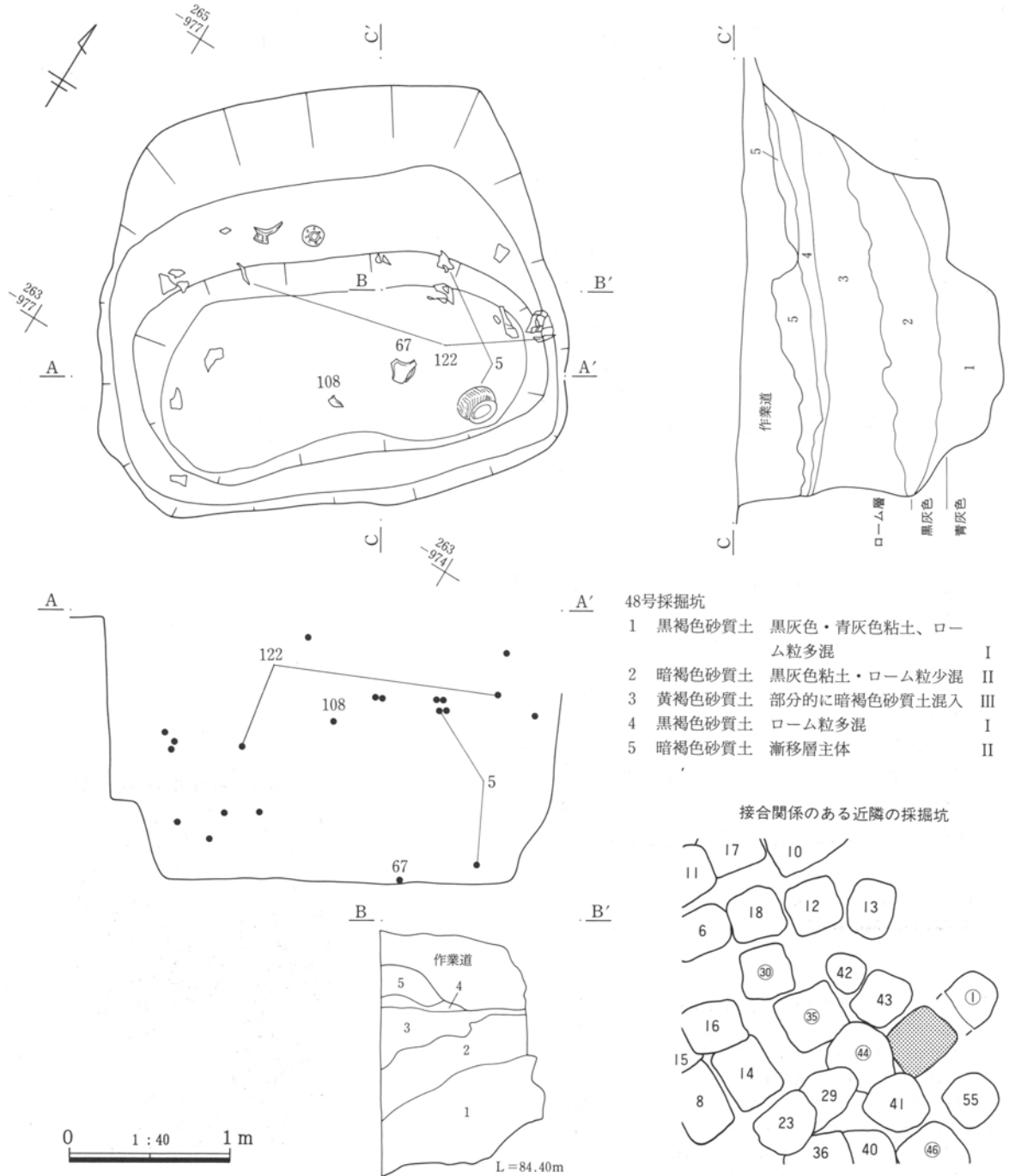
接合関係のある近隣の採掘坑



第108図 A区47号粘土採掘坑

48号粘土採掘坑〔第109図 PL.20・21〕

採掘坑全体の東寄り、枝状に分岐する部分に所在する。X262-Y973グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-50°-Eである。長軸2.84m、短軸2.54m、確認面からの深さは1.64mである。壁面の粘土層の厚さは58cmで、黒灰色22cm、青灰色36cmである。採掘された粘土は3.5m<sup>3</sup>である。上部が作業道と推定される北東壁が45cm程、北西壁が7cm程確認面より低い。北東、北西壁がやや抉れる。下部は全面ともテラス状に中段が存在する。土砂は東から投げ込まれており、天地返しである。遺物は5・67・108・122である。接合関係は1・24・28・30・32・35・39・44~46・49・56・57・62・63・65号採掘坑、作業道とある。

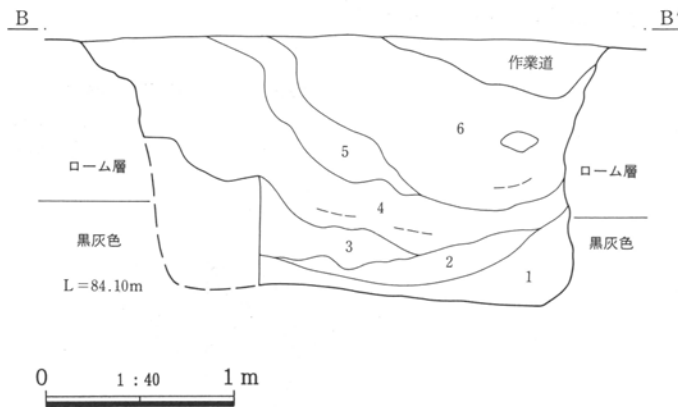
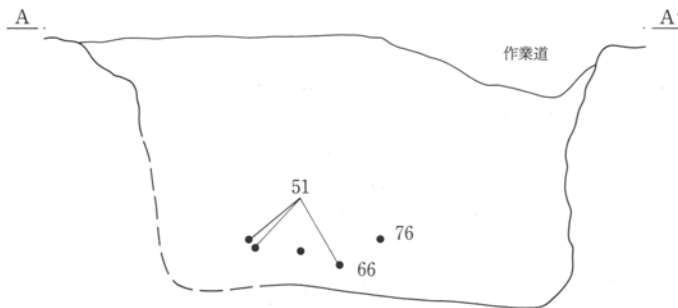
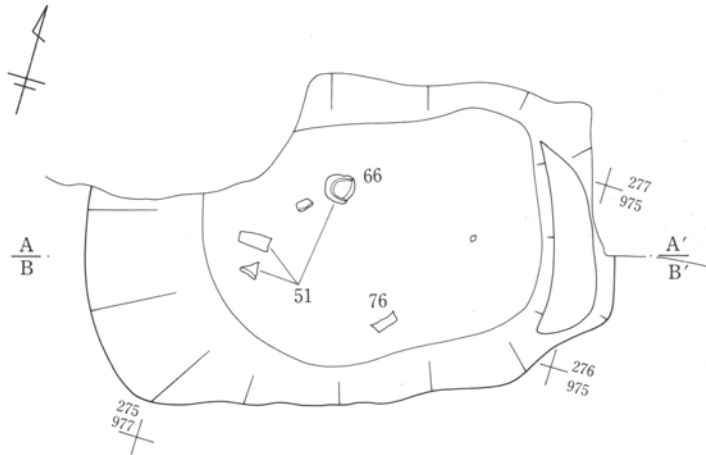


第109図 A区48号粘土採掘坑



49号粘土採掘坑〔第110図 PL.21〕

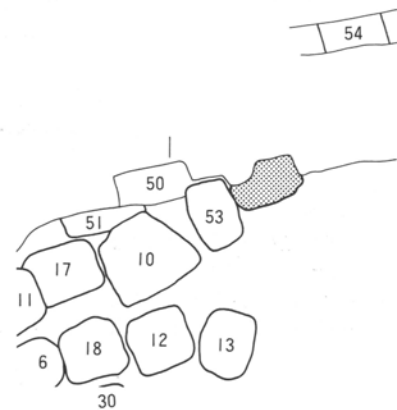
採掘坑全体の北端、X275-Y975グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-71°-Eである。規模は、長軸2.73m、短軸1.74m、確認面からの深さは1.40mである。壁面の粘土層の厚さは46cmで、黒灰色46cm、青灰色の上面まで掘り込まれている。地山下層部は青灰色層と乱れており、黒灰色層として扱っている。採掘された粘土は2.2m<sup>3</sup>である。北半部は、鋼矢板打設工事に伴い破壊されている。上部が作業道と推定される北西隅が確認面より30cm程低い。壁面残存部は、全体にやや抉れている。土砂は西から投げ込まれており、天地返し埋没土である。遺物は51・66・76である。接合関係は35・48・65号採掘坑とある。



49号採掘坑

- |   |        |                       |     |
|---|--------|-----------------------|-----|
| 1 | 黒褐色砂質土 | 砂粒多混、厚さ1cm<br>程で互層に堆積 | I   |
| 2 | 黒褐色粘質土 | 有機質混入                 | I   |
| 3 | 暗褐色砂質土 | ローム・黒褐色土粒・<br>ブロック混入  | II  |
| 4 | 暗褐色砂質土 | ローム粒少混、下位<br>にブロック集中  | II  |
| 5 | 黄褐色砂質土 | ローム2次体積               | III |
| 6 | 黄白色砂質土 | 黒褐色・暗褐色砂質<br>土との混土    | III |

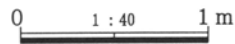
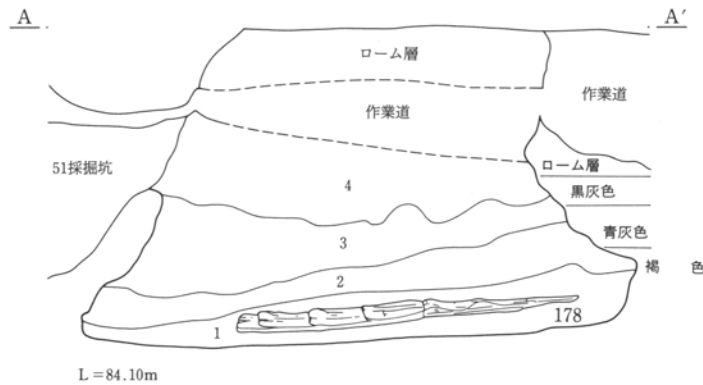
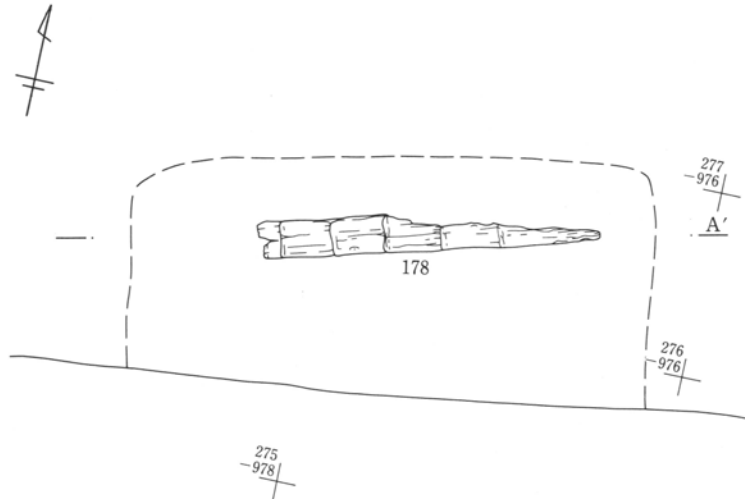
接合関係のある近隣の採掘坑



第110図 A区49号粘土採掘坑

50号粘土採掘坑〔第111図 PL.21〕

採掘坑全体の北端、X276-Y979グリッドに位置する。本遺構は鋼矢板打設工事に伴うトレンチ掘削により破壊されており、トレンチ南壁に北側底部の一部が残存したに過ぎない。底部東西辺は2.90m、南北辺は70cm弱の残存である。本遺構の上端は、調査区内では確認されていない。断面図は、トレンチ南壁の傾斜部分で作成している。51号採掘坑と重複し、断面から51号採掘坑が新しいと判断される。東、西壁は大きく抉れている。土砂は南・北方向から投げ込まれており、天地返しの埋没土と考えられる。上層部には51号採掘坑から53号採掘坑方向へ通じる作業道の埋没土があると推測される。遺物は178である。

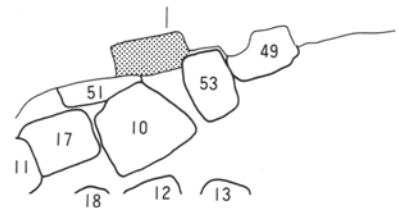


接合関係のある近隣の採掘坑



50号採掘坑

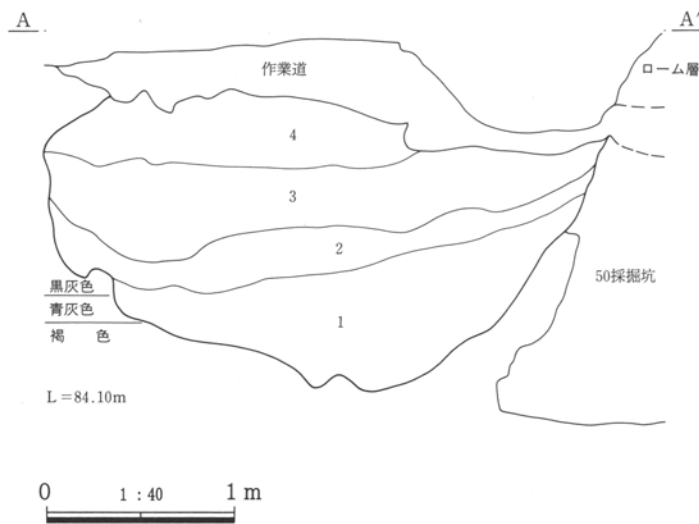
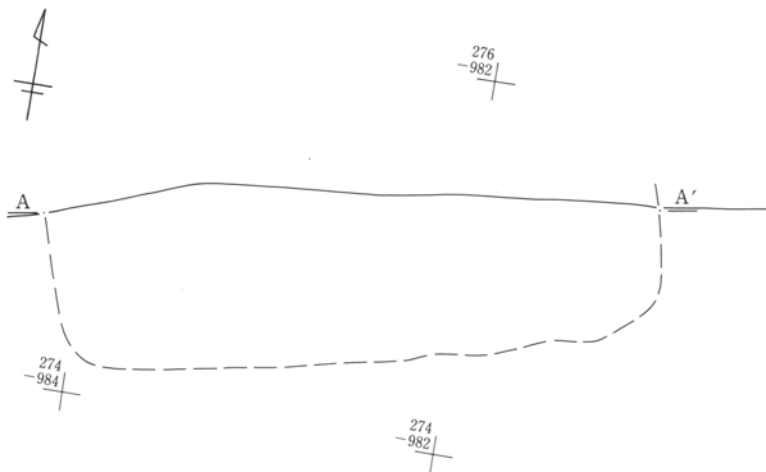
- |   |                    |     |
|---|--------------------|-----|
| 1 | 黒褐色粘質土 有機質に富む      | I   |
| 2 | 灰白色シルト質土           |     |
| 3 | 暗褐色砂質土 ローム粒少混      | II  |
| 4 | 黄白色砂質土 黒褐色砂質土を微量混入 | III |



第111図 A区50号粘土採掘坑

51号粘土採掘坑〔第112図 PL.13〕

採掘坑全体の北端、X274-Y981グリッドに位置する。本遺構は鋼矢板打設工事に伴うトレンチ掘削により破壊されており、トレンチ南壁に遺構の南側が残存したに過ぎない。本遺構の上端は、調査区内の最北端で平面において確認されているが、調査段階では、鋼矢板打設工事に伴う攪乱と判断していたため、上端の正確な範囲を図示することができなかった。そのため、本遺構の上端は航空写真から推定したものである。断面図は、トレンチ南壁の傾斜部分で作成している。50号採掘坑と重複し、断面から本遺構が新しいと判断される。上面には、作業道が重複する。土砂は、東から投げ込まれており、天地返し埋没土である。遺物は確認されていない。



51号採掘坑

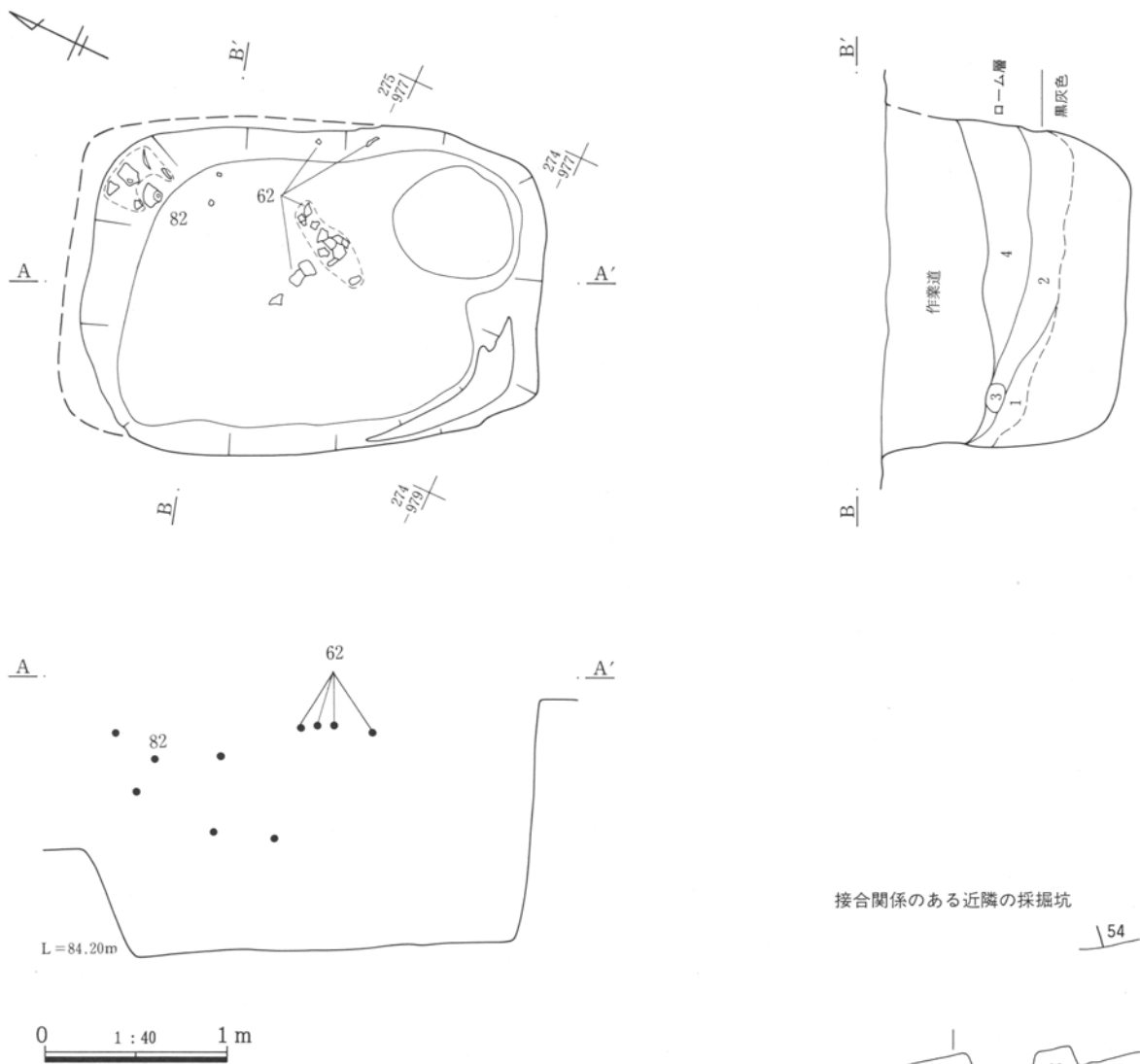
- |   |        |                   |     |
|---|--------|-------------------|-----|
| 1 | 暗褐色砂質土 | As-BP ブロック混入      | II  |
| 2 | 黄白色砂質土 | As-BP を主体の縞状の互層   | III |
| 3 | 黒褐色砂質土 | 暗褐色砂質土・ロームブロックを混入 | I   |
| 4 | 暗褐色砂質土 | ロームブロック混入         | II  |



第112図 A区51号粘土採掘坑

53号粘土採掘坑〔第113図 PL.21〕

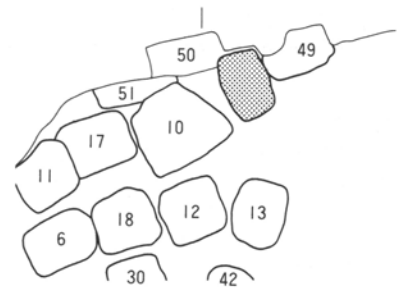
採掘坑全体の北端、X273-Y977グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-26°-Wである。規模は、長軸(2.50)m、短軸1.75m、確認面からの深さは1.30mである。壁面の粘土層の厚さは46cmで、黒灰色46cm、青灰色の上面まで掘り込まれている。地山下層部は青灰色層と乱れており、黒灰色層として扱っている。採掘された粘土は2.0m<sup>2</sup>である。北端部は、鋼矢板打設工事に伴い破壊されている。近代以降に掘り上部が作業道と推定される東壁が25cm程、北西隅が82cm程確認面より低い。土砂は西から投げ込まれており、天地返し埋没土である。遺物は62・82である。



53号採掘坑

- |   |           |                 |     |
|---|-----------|-----------------|-----|
| 1 | 黄白色砂質土    | As-BPを主とした縞状の互層 | III |
| 2 | 黒褐色粘質土    |                 | I   |
| 3 | 黒灰色粘土ブロック |                 | IV  |
| 4 | 暗褐色砂質土    | ローム粒少混          | II  |

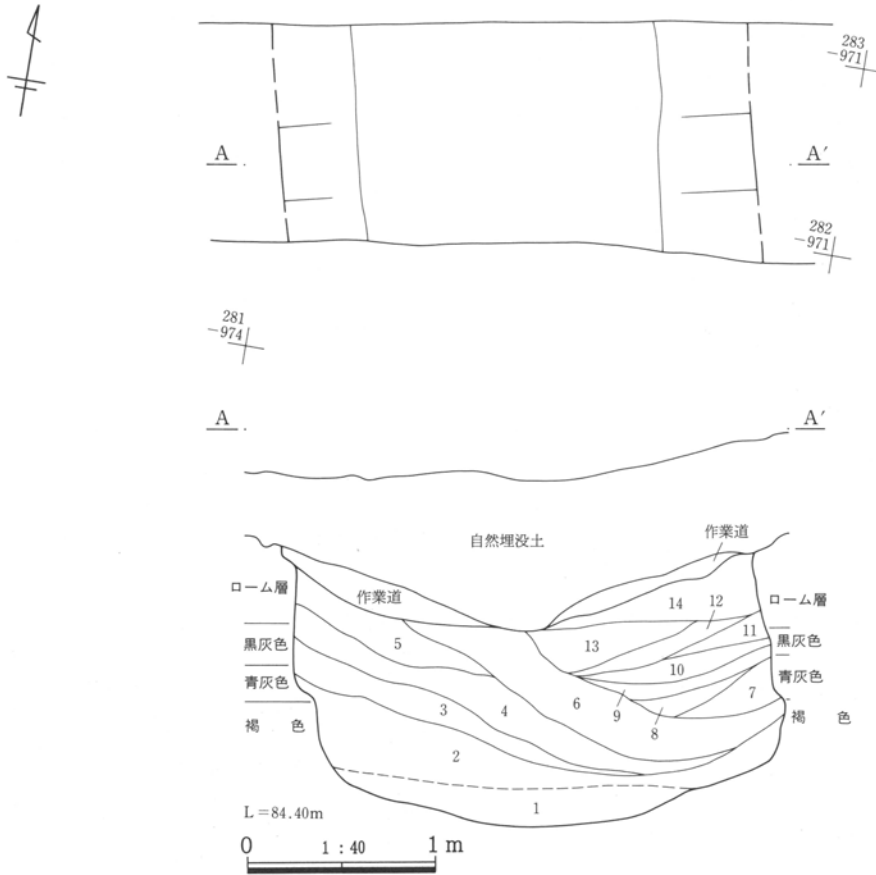
接合関係のある近隣の採掘坑



第113図 A区53号粘土採掘坑

54号粘土採掘坑 (第114図)

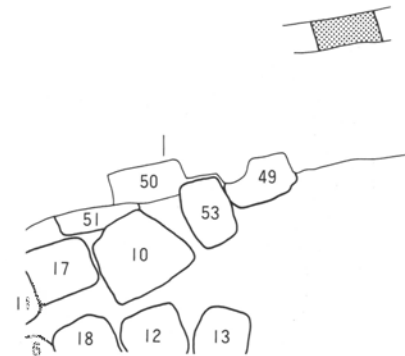
採掘坑全体の北端、調査区北壁に所在し、X282-Y971グリッドに位置する。本遺構は、最初に調査した粘土採掘坑の1つである。断面図は、調査区北壁の段掘り部分で作成している。東西辺は2.40m、深さは1.45mである。壁面の粘土層の厚さは90cmで、黒灰色23cm、青灰色19cm、褐色48cmである。土砂は西側から投げ込まれている。埋没土には、壁面が崩落したものも確認されている。自然埋没土の上層には、FA・As-Bが確認されており、粘土採掘坑の時期を確定するための資料となる。遺物は確認されていない。



54号採掘坑

- |    |        |                |     |
|----|--------|----------------|-----|
| 1  | 褐色粘質土  | 全体暗赤褐色         | IV  |
| 2  | 灰白色粘質土 | 植物繊維多混、黒褐色土縞状  | IV  |
| 3  | 黒褐色砂質土 | 植物繊維多混         | I   |
| 4  | 暗褐色砂質土 | 植物繊維多混         | II  |
| 5  | 暗褐色砂質土 | 植物繊維多混、青灰色粘土混入 | II  |
| 6  | 粘土層    |                | IV  |
| 7  | 暗褐色砂質土 | 植物繊維多混         | II  |
| 8  | 灰白色粘質土 |                | IV  |
| 9  | 暗褐色砂質土 |                | II  |
| 10 | 黄褐色ローム |                | III |
| 11 | 黄白色ローム |                | III |
| 12 | 黄褐色ローム |                | III |
| 13 | 黄白色ローム |                | III |
| 14 | 暗褐色砂質土 |                | II  |

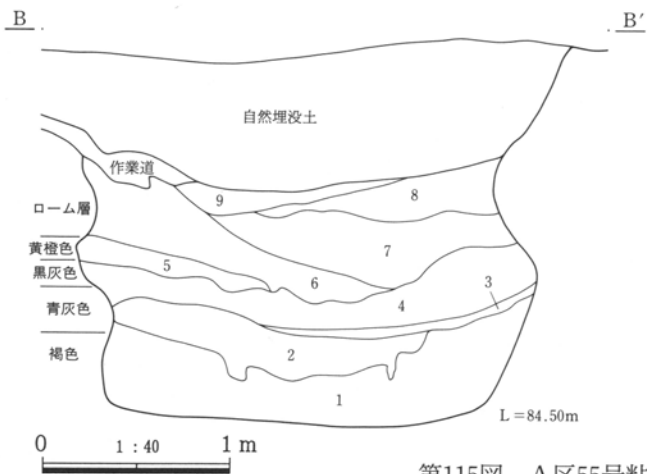
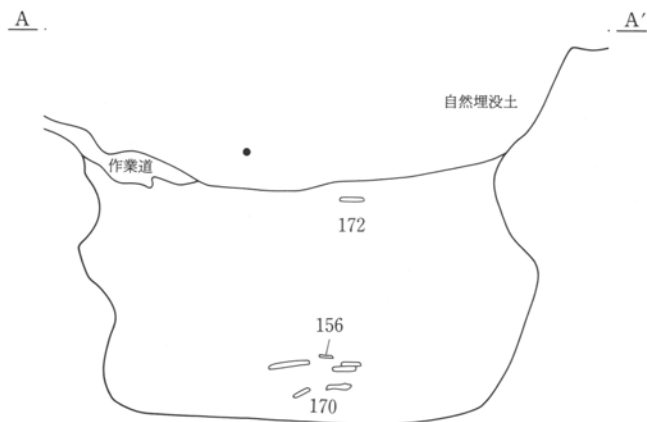
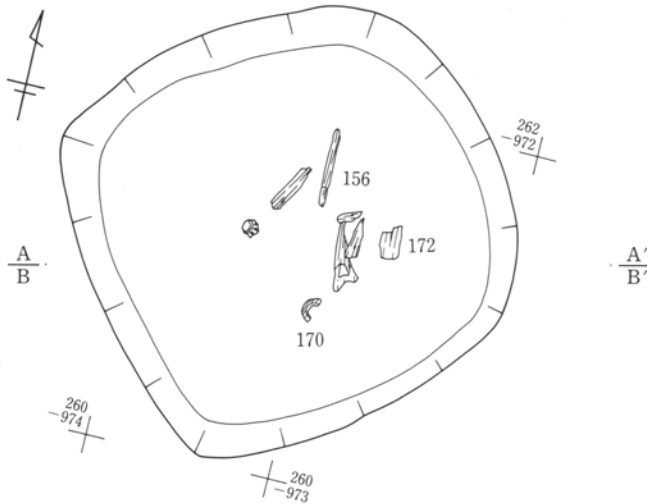
接合関係のある近隣の採掘坑



第114図 A区54号粘土採掘坑

55号粘土採掘坑〔第63・64・115図 PL.21〕

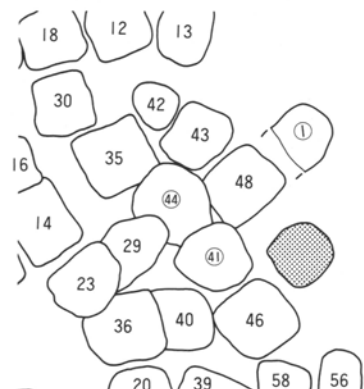
X260-Y972グリッドに位置し、ほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-51°-Eである。規模は長軸2.25m、短軸2.20m、確認面からの深さは2.00mである。粘土層の厚さは1.00mで、黄橙色12cm、黒灰色14cm、青灰色24cm、褐色は50cmである。採掘された粘土は5.0m<sup>3</sup>である。上部が作業道と推定される南西壁が確認面より50cm程低い。壁は全面とも大きく抉れる。土砂は西から投げ込まれているが、天地返しではない。最大輪郭は、埋没後の崩落範囲の可能性もある。遺物は156・170・172である。接合関係は1・41・44号採掘坑、作業道とある。



55号採掘坑

- |   |        |                        |     |
|---|--------|------------------------|-----|
| 1 | 暗褐色砂質土 | ローム縞状に混入厚さ1cm強の互層      | II  |
| 2 | 暗褐色砂質土 | ローム塊混入                 | II  |
| 3 | 灰褐色粘質土 |                        | IV  |
| 4 | 暗褐色砂質土 | 1層に同様                  | II  |
| 5 | 暗褐色砂質土 | ローム、黒灰色・青灰色粘土が斑状混入     | II  |
| 6 | 黄褐色砂質土 | 暗褐色砂質土、黒灰色・青灰色粘土塊が斑状混入 | III |
| 7 | 暗褐色砂質土 | 5層に同様                  | II  |
| 8 | 暗褐色砂質土 | ローム・青灰色粘土全体に混入         | II  |
| 9 | 黒褐色粘質土 | ローム・青灰色粘土小塊混           |     |

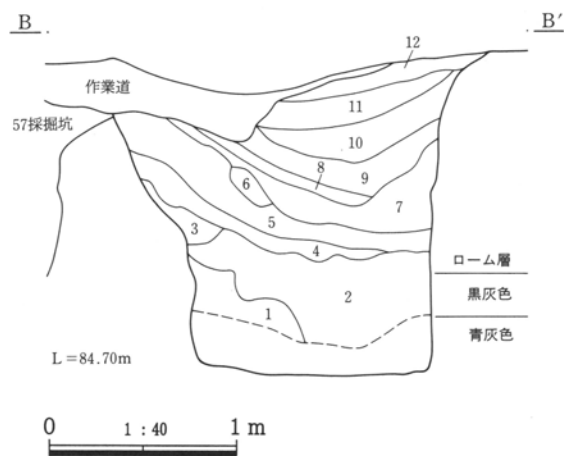
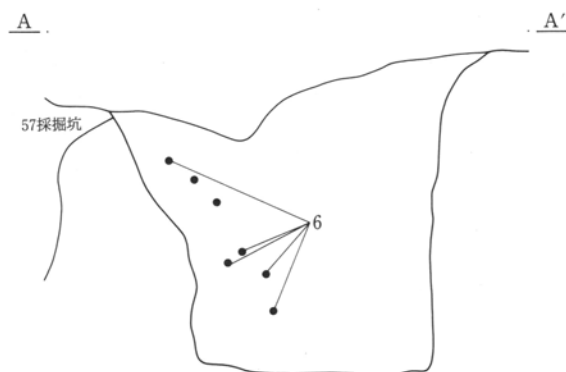
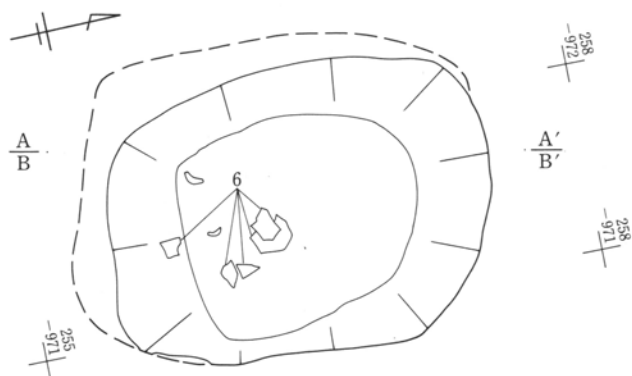
接合関係のある近隣の採掘坑



第115図 A区55号粘土採掘坑

56号粘土採掘坑〔第116図 PL.22〕

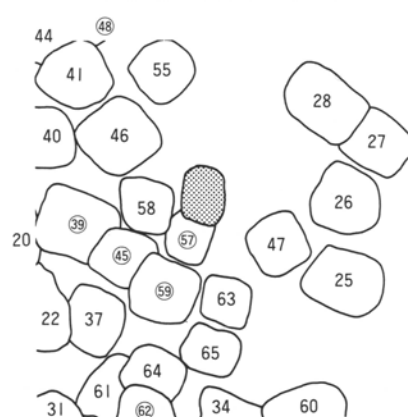
採掘坑全体の中央東寄り、X255-Y970グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-6°-Eである。長軸(2.04)m、短軸(1.50)m、確認面からの深さ1.70mである。粘土層の厚さは55cmで、黒灰色23cm、青灰色32cmである。採掘された粘土は1.7m<sup>3</sup>である。57号採掘坑と重複し、本遺構が新しい。上面に作業道が重複する。47号採掘坑との間に作業道の底部が残存。上部が作業道と推定される南壁が確認面より25cm程低い。壁は全面やや決れる。土砂は南から投げ込まれるが、天地返しではない。底部にまざりの粘土層が堆積する。遺物は6である。接合関係は15・39・45・48・57・59・62号採掘坑、作業道とある。



56号採掘坑

- |                           |     |
|---------------------------|-----|
| 1 黒灰色粘土層                  | IV  |
| 2 にぶい黄橙色シルト質土             |     |
| 3 黄褐色砂質土 As-BPを主体とする壁面崩落土 | III |
| 4 黒褐色砂質土 部分的に暗褐色砂質土混入     | I   |
| 5 暗褐色砂質土 黒褐色砂質土・ローム粒多混    | II  |
| 6 暗褐色砂質土 漸移層主体のブロック       | II  |
| 7 暗褐色砂質土 やや粘質、ローム粒多混      | II  |
| 8 黄褐色砂質土ブロック              | III |
| 9 暗褐色砂質土 黒褐色砂質土、ローム粒縞状混入  | II  |
| 10 暗褐色砂質土 やや粘質、鉄分のしみこみあり  | II  |
| 11 黄白色砂質土ブロック             | III |
| 12 暗褐色砂質土 As-C・ロームブロック少混  | II  |

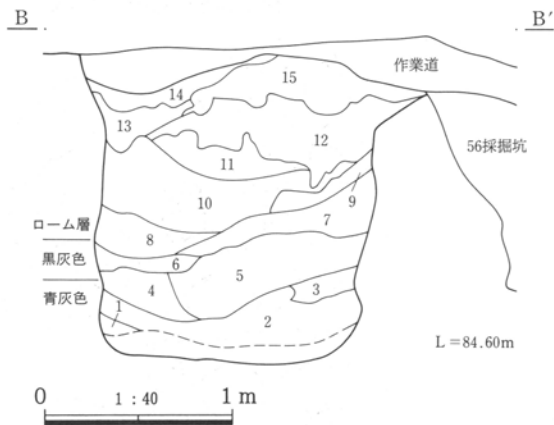
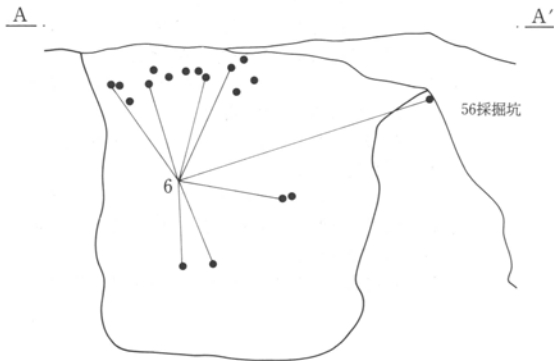
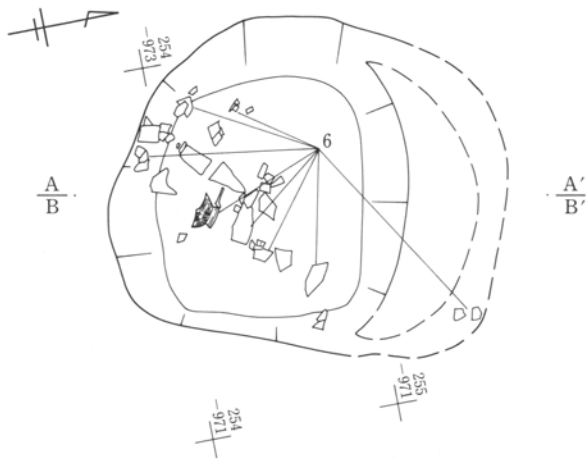
接合関係のある近隣の採掘坑



第116図 A区56号粘土採掘坑

57号粘土採掘坑〔第117図 PL.21・22〕

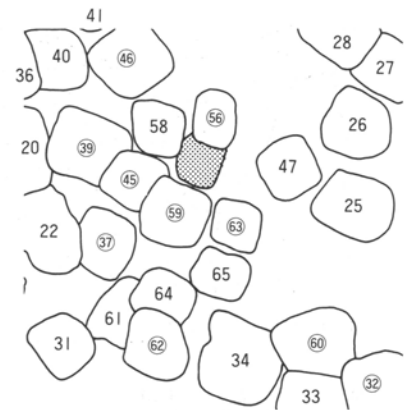
採掘坑全体の中央東寄り、X253-Y971グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-20°-Eである。規模は、長軸推定(1.90)m、短軸1.72m、確認面からの深さは1.64mである。壁面の粘土層の厚さは64cmで、黒灰色22cm、青灰色42cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は1.8m<sup>3</sup>である。56号採掘坑と重複し、断面から本遺構が古いと判断される。上面には作業道が重複する。上部が作業道と推定される西壁が30cm程、南壁が25cm程、北壁が32cm程確認面より低い。壁は全面にやや決れている。土砂は、北から投げ込まれており、天地返し埋没土である。遺物は6である。接合関係は1・15・24・30・32・37・39・45・46・48・56・59・60・62・63号採掘坑、作業道とある。



57号採掘坑

- |    |                      |     |
|----|----------------------|-----|
| 1  | 青灰色シルト質土             |     |
| 2  | 暗褐色砂質土 粘土・ローム混入      | II  |
| 3  | 黄褐色砂質土 暗褐色砂質土混入      | III |
| 4  | にぶい黄橙色シルト質土          |     |
| 5  | 黄白色砂質土               | III |
| 6  | 黄白色砂質土 黒灰色粘土ブロック混入   | III |
| 7  | 黄褐色砂質土 やや粘質          | III |
| 8  | 黒褐色砂質土 下位鉄分凝縮        | I   |
| 9  | 黒褐色砂質土 暗褐色砂質土混入      | I   |
| 10 | 暗褐色砂質土 鉄分のしみこみあり     | II  |
| 11 | 黄褐色砂質土 暗褐色砂質土混入      | III |
| 12 | 暗褐色砂質土 黒灰色・青灰色粘土混入   | II  |
| 13 | 暗褐色砂質土 ローム粒混入        | II  |
| 14 | 暗褐色砂質土 黒褐色砂質土・ローム粒混入 | II  |
| 15 | にぶい褐色土 黒褐色砂質土・ローム粒混入 | II  |

接合関係のある近隣の採掘坑

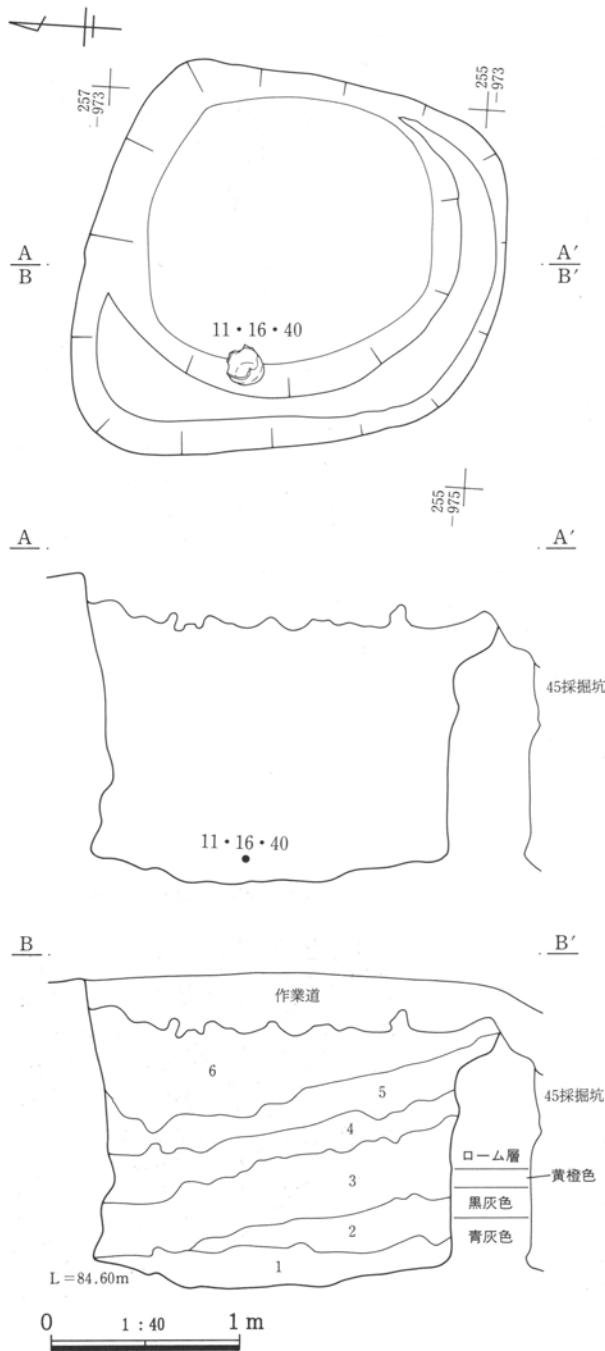


第117図 A区57号粘土採掘坑



58号粘土採掘坑〔第63・64・118図 PL.22〕

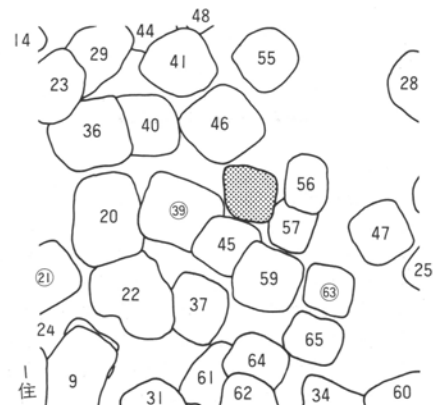
採掘坑全体の中央東寄り、X254-Y973グリッドに位置し、形状は台形に近い隅丸方形を呈す。長軸方位はN-2°-Eである。規模は、長軸2.20m、短軸2.00m、確認面からの深さは1.65mである。壁面の粘土層の厚さは65cmで、黄橙色10cm、黒灰色16cm、青灰色39cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は2.8m<sup>3</sup>である。上部が作業道と推定される南壁が30cm程、西壁が45cm程確認面より低い。壁は全面にやや扶れている。土砂は、南から投げ込まれており、天地返し埋没土である。遺物は11・16・40である。接合関係は21・39・63号採掘坑、作業道とある。



58号採掘坑

- |   |        |               |     |
|---|--------|---------------|-----|
| 1 | 黒褐色砂質土 | ローム粒混入、As-C混入 | I   |
| 2 | 黒褐色砂質土 | ローム粒混入        | I   |
| 3 | 暗褐色砂質土 | 黒褐色土・ローム粒少混   | II  |
| 4 | 暗褐色砂質土 | ロームブロックを多混    | II  |
| 5 | 暗褐色砂質土 | 黄白色砂質土との混土    | II  |
| 6 | 黄白色砂質土 | 部分的に暗褐色砂質土混入  | III |

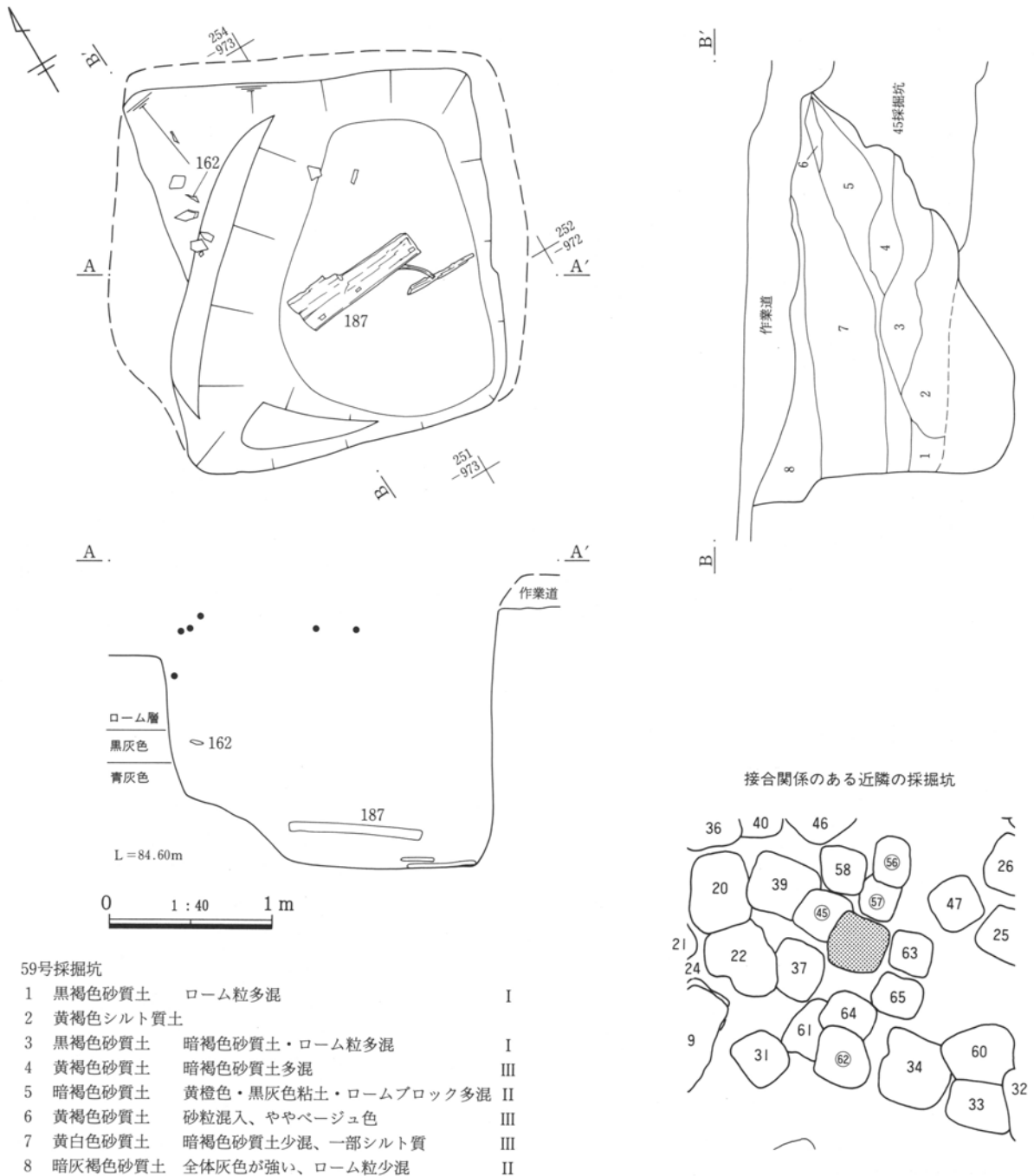
接合関係のある近隣の採掘坑



第118図 A区58号粘土採掘坑

59号粘土採掘坑〔第63・64・119図 PL.22〕

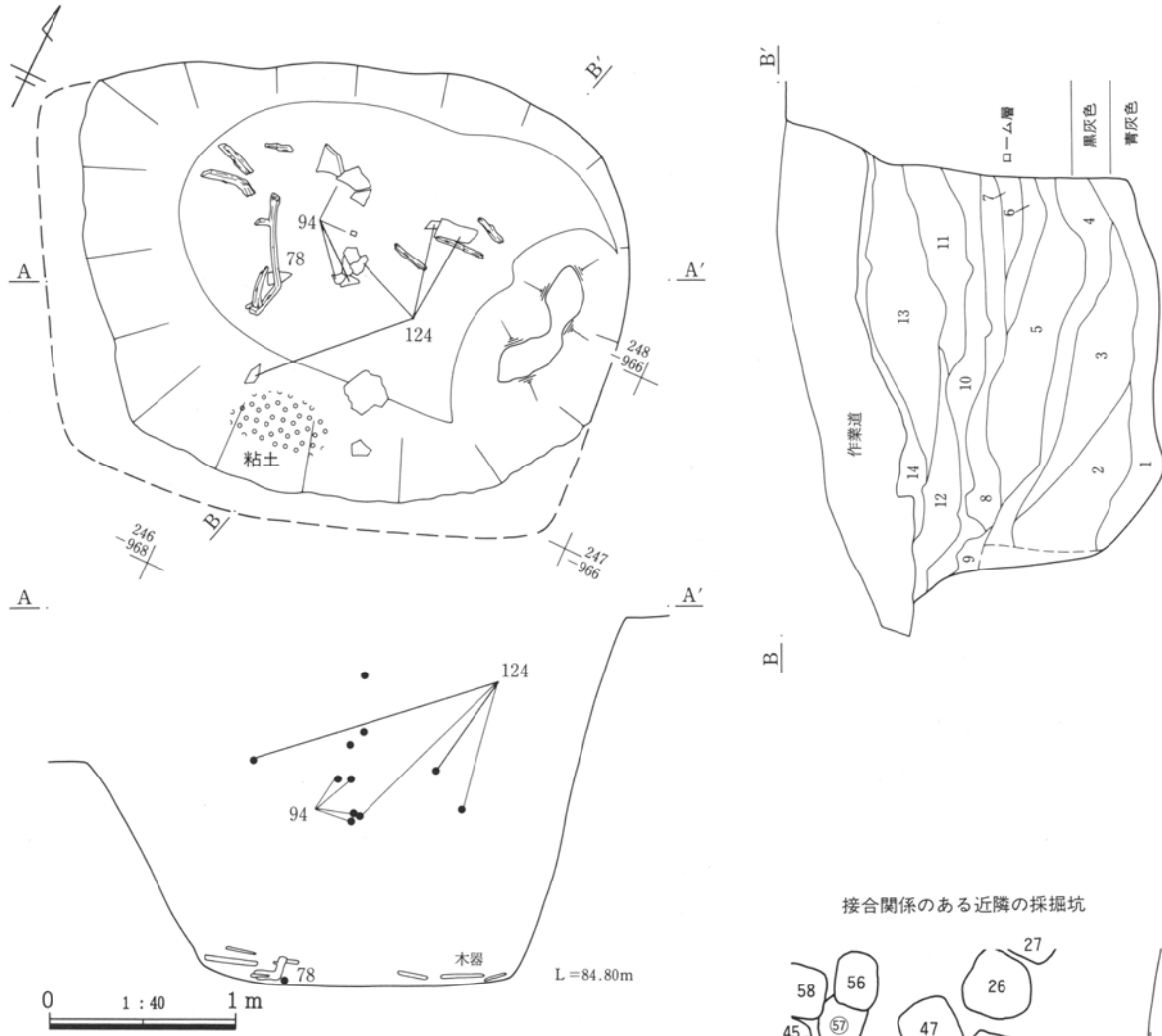
採掘坑全体の南東寄り、X251-Y972グリッドに位置し、形状は隅丸方形を呈す。長軸方位はN-21°-Eである。規模は長軸(2.23)m、短軸(1.87)m、確認面からの深さは1.80mである。粘土層の厚さは85cmで、黒灰色20cm、青灰色65cmである。採掘された粘土は3.4㎡である。上面には作業道が重複し、分岐する。上部が作業道と推定される南壁が10cm程、作業道が重複する東壁が58cm程、北壁が26cm程確認面より低い。西壁は45号と重複し、破壊されている。断面から本遺構が新しいと判断される。土砂は北から投げ込まれており、天地返しである。遺物は162・187である。接合関係は15・45・56・57・62号採掘坑、作業道とある。



第119図 A区59号粘土採掘坑

60号粘土採掘坑〔第120図 PL.22〕

採掘坑全体の南東端、X246-Y966グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-67°-Eである。規模は、長軸(2.90)m、短軸(2.30)m、確認面からの深さは2.02mである。壁面の粘土層の厚さは46cmで、黒灰色22cm、青灰色24cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は3.1m<sup>3</sup>である。32号採掘坑との間に作業道の底部が残存する。上部が作業道と推定される南壁が66cm程、西壁が76cm程確認面より低い。土砂は南から投げ込まれており、天地返し埋没土である。底部には、崩落した粘土層が堆積する。遺物は78・94・124である。接合関係は25・32~34・36・57・62・64・65号採掘坑、作業道とある。



接合関係のある近隣の採掘坑



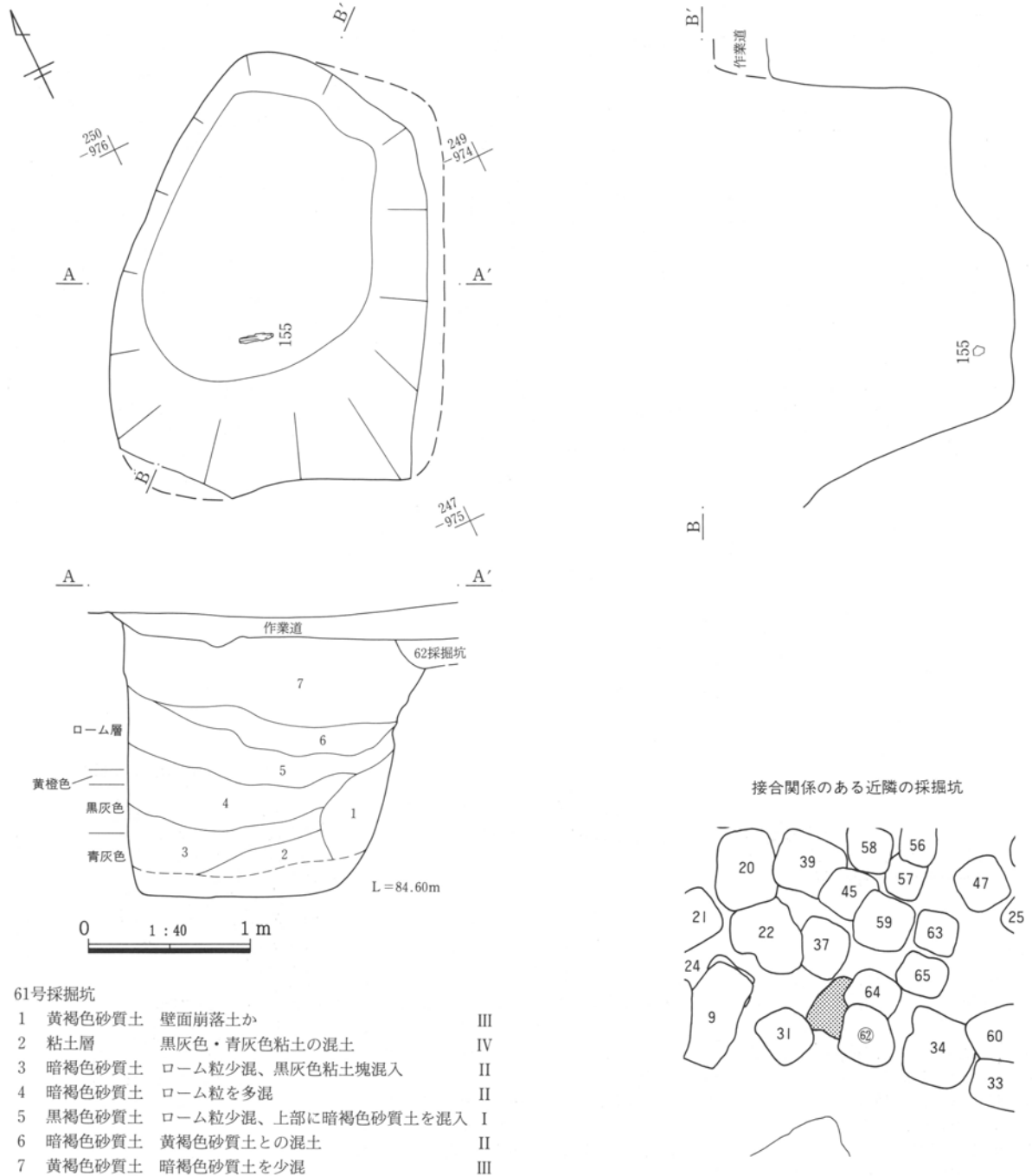
60号採掘坑

- |           |                    |     |           |                 |     |
|-----------|--------------------|-----|-----------|-----------------|-----|
| 1 暗褐色砂質土  | 黄褐色砂質土との混土         | II  | 9 黄白色砂質土  |                 | III |
| 2 黒褐色砂質土  | 暗褐色砂質土・As-C・ローム粒混入 | I   | 10 暗褐色砂質土 | ローム、黒灰色・青灰色粘土少混 | II  |
| 3 暗褐色砂質土  | 黄褐色砂質土との混土         | II  | 11 暗褐色砂質土 | 黄褐色砂質土との混土      | II  |
| 4 黄白色砂質土  | 白色強                | III | 12 黄白色砂質土 |                 | III |
| 5 黄白色砂質土  | 地山近似               | III | 13 暗褐色砂質土 | ローム粒少混、黒灰色粘土塊混入 | II  |
| 6 黄褐色砂質土  | ややシルト化             | III | 14 暗褐色砂質土 | 黒褐色土混入          | II  |
| 7 灰黄褐色砂質土 |                    |     |           |                 |     |
| 8 黄褐色砂質土  | 黄橙色粘土混入            | III |           |                 |     |

第120図 A区60号粘土採掘坑

61号粘土採掘坑〔第121図 PL.22〕

採掘坑全体の南端、X247-Y974グリッドに位置し、形状は隅丸長方形を呈す。長軸方位はN-42°-Eである。長軸2.64m、短軸(1.82)m、確認面からの深さは1.80mである。粘土層の厚さは78cmで、黄橙色10cm、黒灰色30cm、青灰色38cmである。採掘された粘土は3.7m<sup>2</sup>である。62・64号採掘坑と重複し、断面から本遺構が古いと判断される。上部が作業道と推定される東壁が40cm程、南西隅が46cm程、西壁が23cm程確認面より低い。南、西壁がやや抉れている。土砂は西から投げ込まれており、天地返し埋没土である。底部にはまぎりの粘土層が堆積する。遺物は155である。接合関係は62号採掘坑とある。

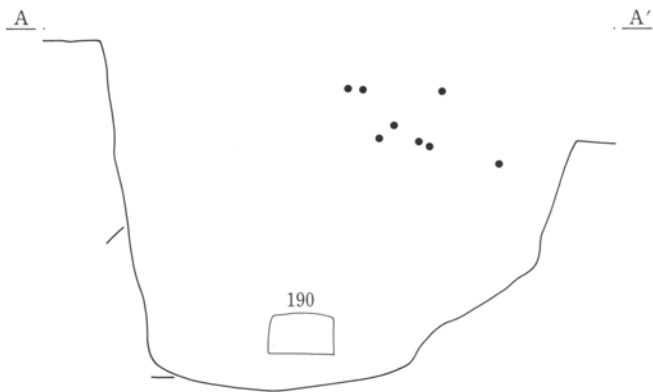
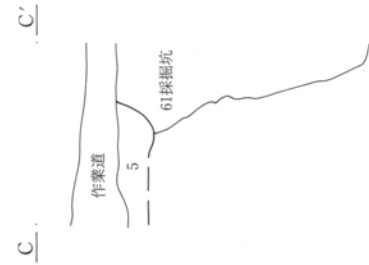
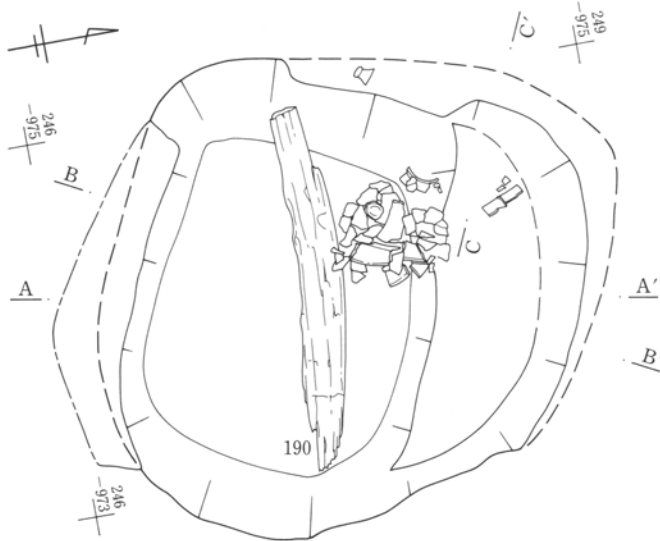


- 61号採掘坑
- |   |        |                     |     |
|---|--------|---------------------|-----|
| 1 | 黄褐色砂質土 | 壁面崩落土か              | III |
| 2 | 粘土層    | 黒灰色・青灰色粘土の混土        | IV  |
| 3 | 暗褐色砂質土 | ローム粒少混、黒灰色粘土塊混入     | II  |
| 4 | 暗褐色砂質土 | ローム粒を多混             | II  |
| 5 | 黒褐色砂質土 | ローム粒少混、上部に暗褐色砂質土を混入 | I   |
| 6 | 暗褐色砂質土 | 黄褐色砂質土との混土          | II  |
| 7 | 黄褐色砂質土 | 暗褐色砂質土を少混           | III |

第121図 A区61号粘土採掘坑

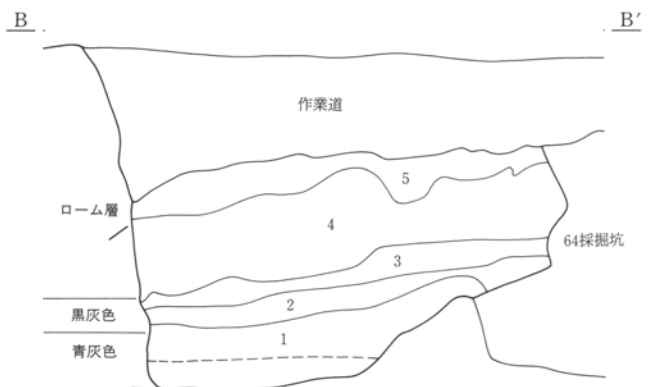
62号粘土採掘坑〔第63・64・122図 PL.22～24〕

X246-Y972グリッドに位置し、形状はほぼ楕円形を呈す。長軸方位はN-61°-Wである。規模は長軸(2.40)m、短軸2.30m、確認面からの深さ1.76mである。粘土層の厚さは49cmで、黒灰色19cm、青灰色30cmである。採掘された粘土は2.7m<sup>3</sup>である。61・64号採掘坑と重複し、断面から本遺構が新しいと判断される。上部が作業道と推定される西壁が24cm程、北壁が46cm程確認面より低い。南壁面は大きく抉れ、北壁は64号採掘坑との重複で破壊される。土砂は東・西方向から投げ込まれ、天地返し埋没土である。遺物は190である。接合関係は1・15・30・33・34・36・39・42・45・46・48・56・57・59～61・64・65号採掘坑、作業道とある。



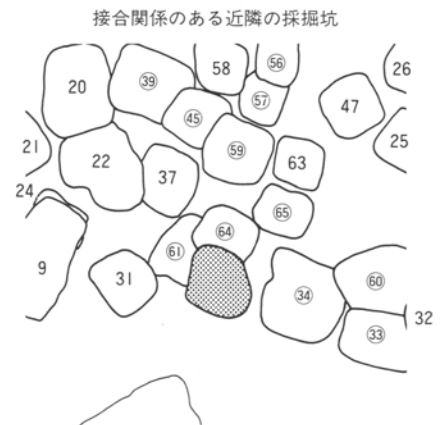
62号採掘坑

- |   |        |                  |     |
|---|--------|------------------|-----|
| 1 | 黄白色砂質土 | 黒灰色・青灰色粘土混入      |     |
| 2 | 黒褐色砂質土 | 上部暗褐色土・底部シルト質土混入 | I   |
| 3 | 暗褐色砂質土 | 漸移層主体            | II  |
| 4 | 黄白色砂質土 | 地山に近似            | III |
| 5 | 黄褐色砂質土 | 黒灰色粘土ブロック混入      | III |



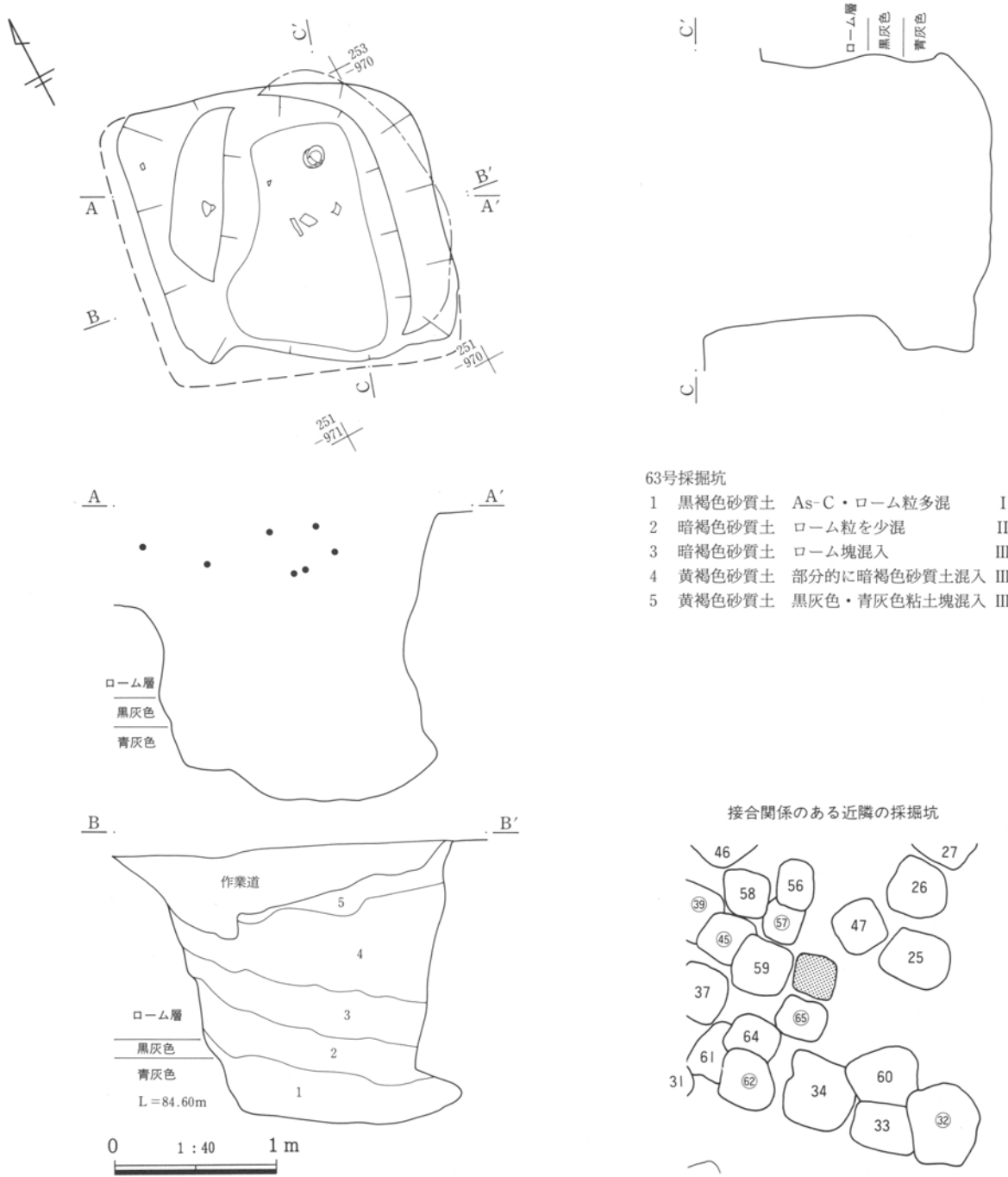
L = 84.70m

第122図 A区62号粘土採掘坑



63号粘土採掘坑〔第123図 PL.23〕

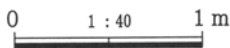
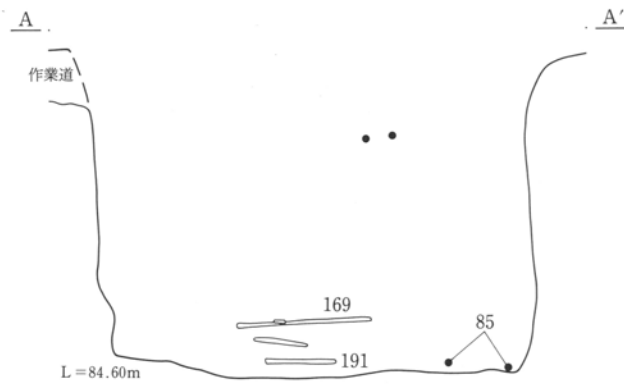
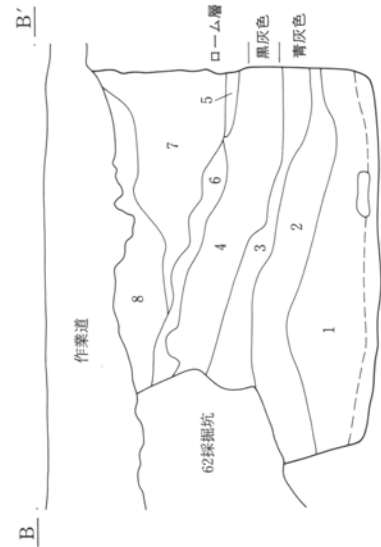
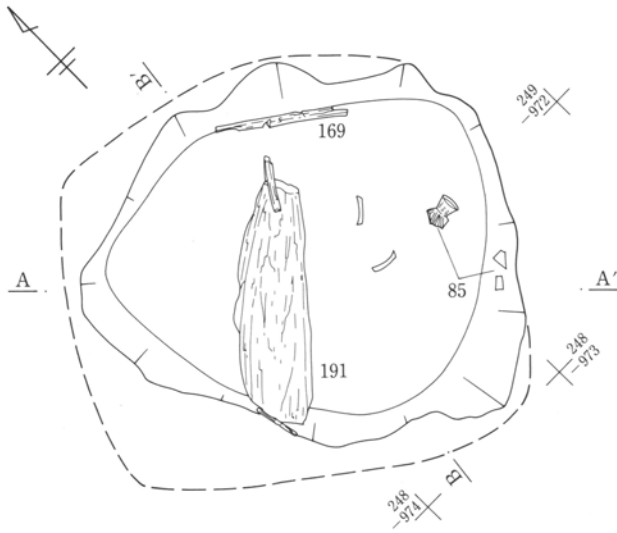
採掘坑全体の南寄り、X251-Y969グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-70°-Wである。規模は、長軸(1.80)m、短軸(1.65)m、確認面からの深さは1.76mである。壁面の粘土層の厚さは66cmで、黒灰色18cm、青灰色48cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は2.0m<sup>3</sup>である。上面には作業道が重複する。上部が作業道と推定される南壁が38cm程、西壁が60cm程確認面より低い。東、北壁面が大きく抉れている。土砂は西から投げ込まれており、天地返し埋没土である。底面西側は、緩くテラス状に傾斜している。接合関係は24・32・39・45・48・57・62・65号採掘坑、作業道とある。



第123図 A区63号粘土採掘坑

64号粘土採掘坑〔第63・64・124図 PL.23〕

採掘坑全体の南寄り、X248-Y972グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-53°-Wである。規模は、長軸(2.34)m、短軸(2.05)m、確認面からの深さは1.78mである。壁面の粘土層の厚さは68cmで、黒灰色7cm、青灰色61cmである。採掘された粘土は3.3m<sup>2</sup>である。62号採掘坑と重複し、断面から本遺構が古いと判断される。上部が作業道と推定される西壁が30cm、北壁が20cm、北東隅が38cm程確認面より低い。南壁は62号採掘坑との重複で破壊されている。土砂は南から投げ込まれ、天地返し埋没土である。遺物は85・169・191である。接合関係は33・34・36・39・45・60・62・65号採掘坑、作業道とある。



64号採掘坑

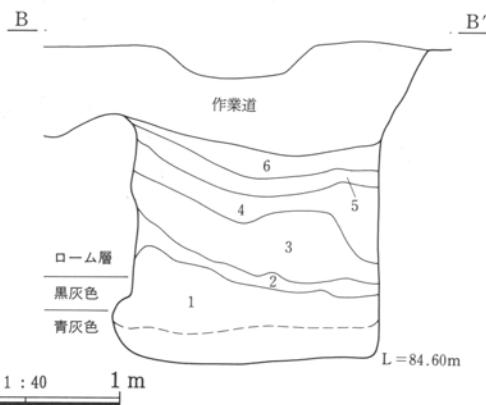
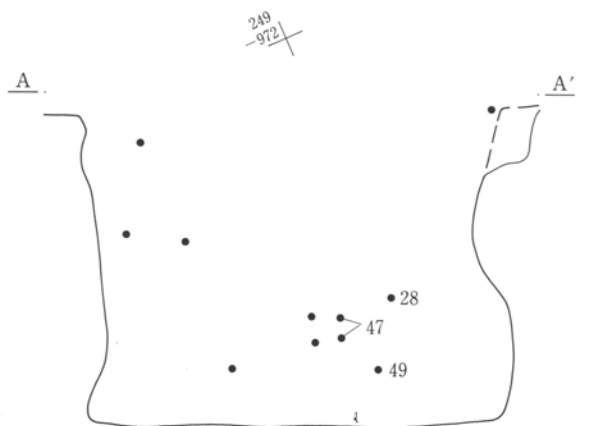
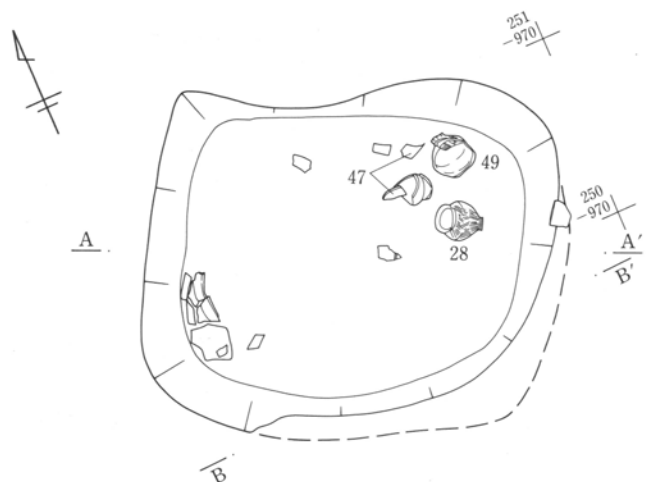
- |   |        |              |     |
|---|--------|--------------|-----|
| 1 | 黒褐色砂質土 | ローム粒微量混入     | I   |
| 2 | 黒褐色砂質土 | ローム粒少混       | I   |
| 3 | 黒褐色砂質土 | ローム塊少混       | I   |
| 4 | 暗褐色砂質土 | ローム塊多混       | II  |
| 5 | 暗褐色砂質土 | ややシルト化       | II  |
| 6 | 暗褐色砂質土 | 黄白色砂質土との混土   | II  |
| 7 | 黄白色砂質土 | 地山に近似        | III |
| 8 | 黄褐色砂質土 | 黒灰色・青灰色粘土塊多混 | III |



第124図 A区64号粘土採掘坑

65号粘土採掘坑〔第125図 PL.23〕

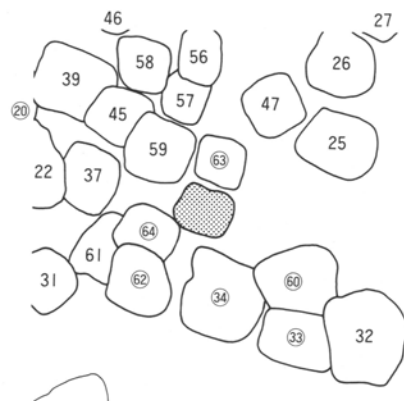
採掘坑全体の南寄り、X249-Y970グリッドに位置し、形状はほぼ隅丸方形を呈す。長軸方位はN-65°-Wである。規模は長軸2.15m、短軸1.65m、確認面からの深さは1.66mである。壁面の粘土層の厚さは46cmで、黒灰色18cm、青灰色28cm、褐色は確認されていない。採掘された粘土は1.6m<sup>2</sup>である。上面には作業道が重複する。上部が作業道と推定される南西隅が35cm程、北壁が38cm程確認面より低い。壁は全面ともやや抉れている。土砂は北から投げ込まれているが、天地返し埋没土ではない。底部にはまぎりの粘土層が堆積する。遺物は28・47・49である。接合関係は4・5・20・23・29・33~36・48・49・60・62~64号採掘坑、作業道とある。



65号採掘坑

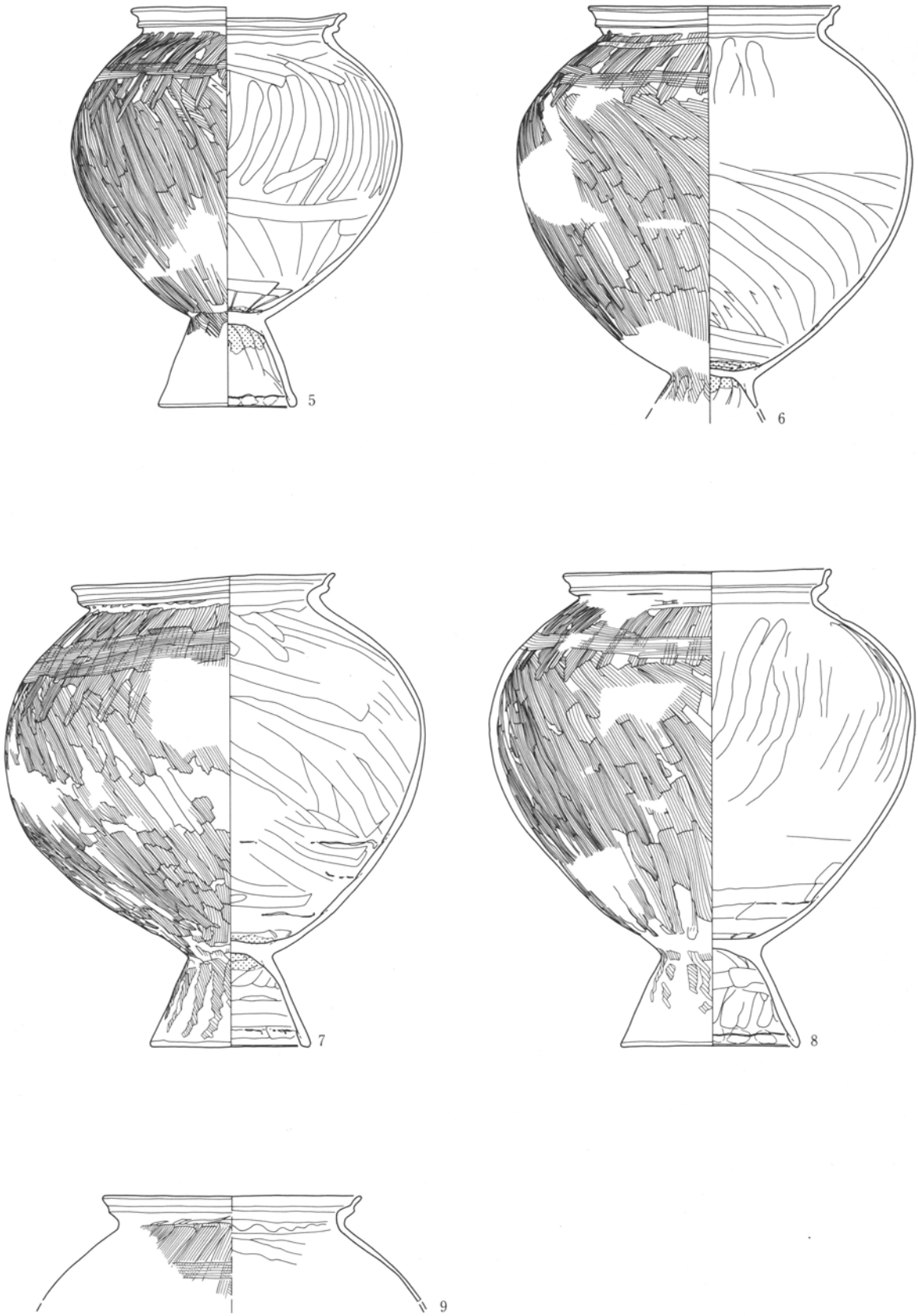
- |             |                         |     |
|-------------|-------------------------|-----|
| 1 灰黄褐色シルト質土 | 全体明るいベージュ色              |     |
| 2 黄褐色砂質土    | 黒灰色・青灰色粘土粒少混            | III |
| 3 暗褐色砂質土    | 黄白色砂質土との混土、砂粒・青灰色粘土粒を少混 | II  |
| 4 黄褐色砂質土    | 砂粒混入                    | III |
| 5 黄白色砂質土    | ややシルト化                  | III |
| 6 暗褐色砂質土    | ローム粒少混                  | II  |

接合関係のある近隣の採掘坑

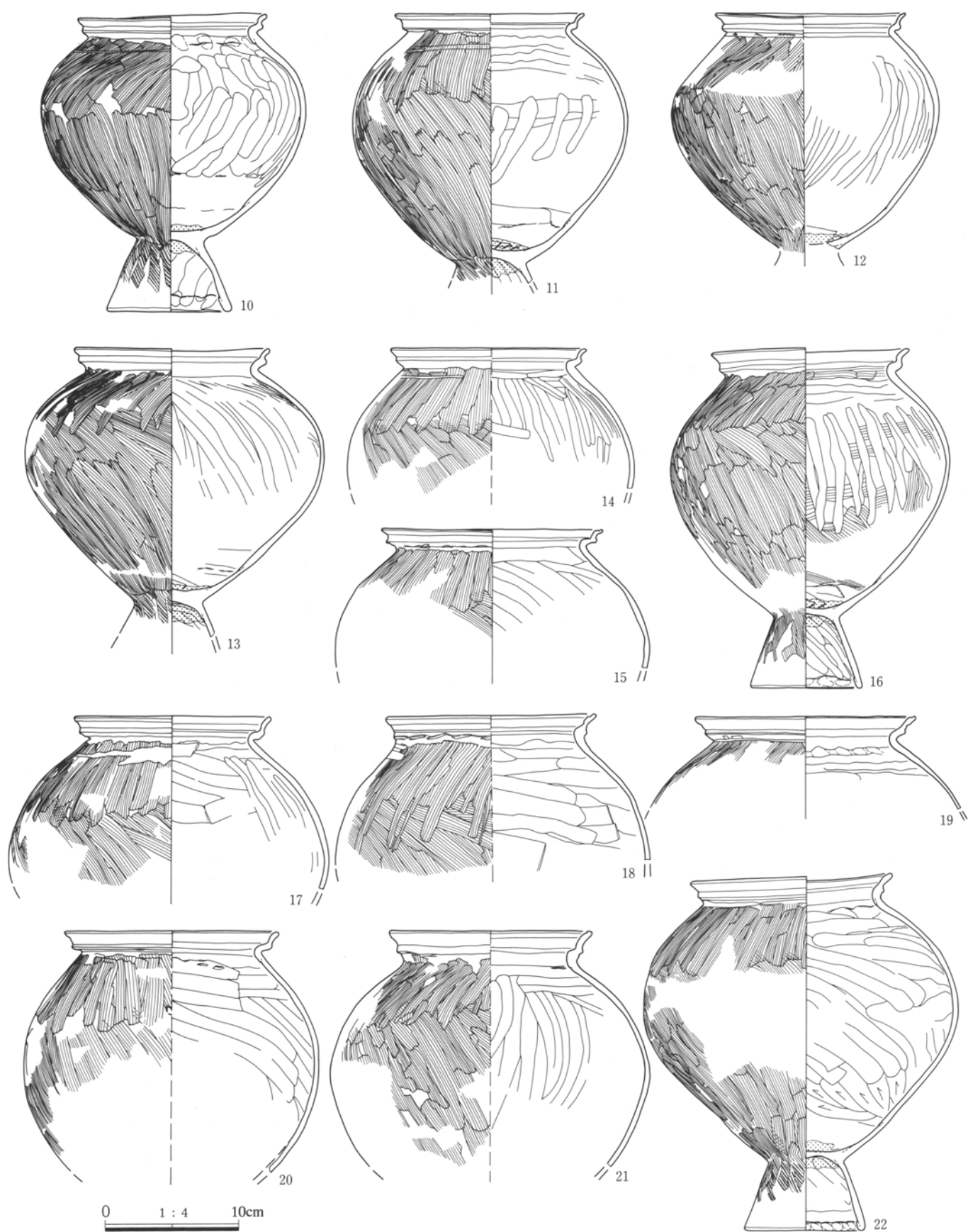


第125図 A区65号粘土採掘坑

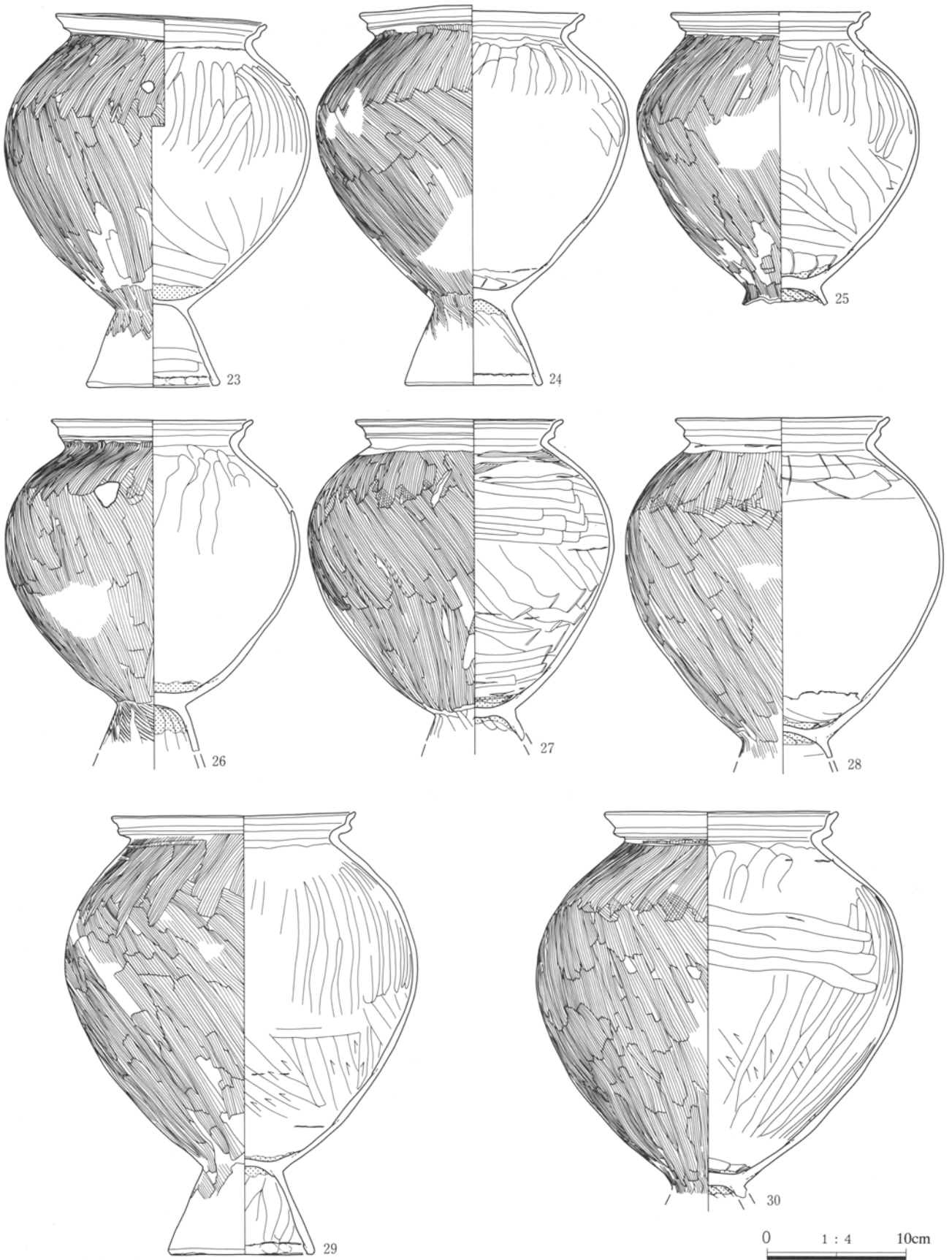




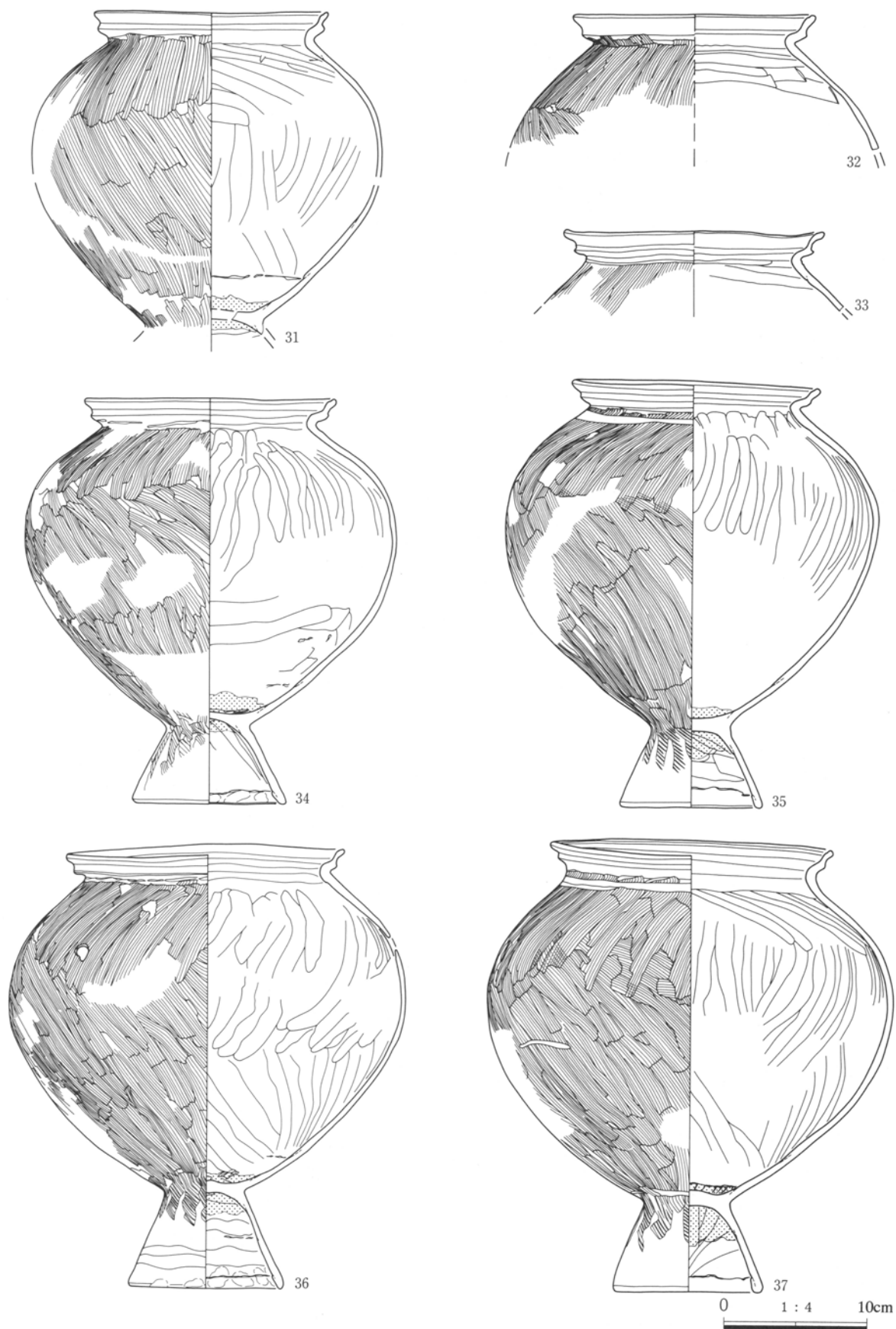
第126図 A区粘土採掘坑出土遺物(1)



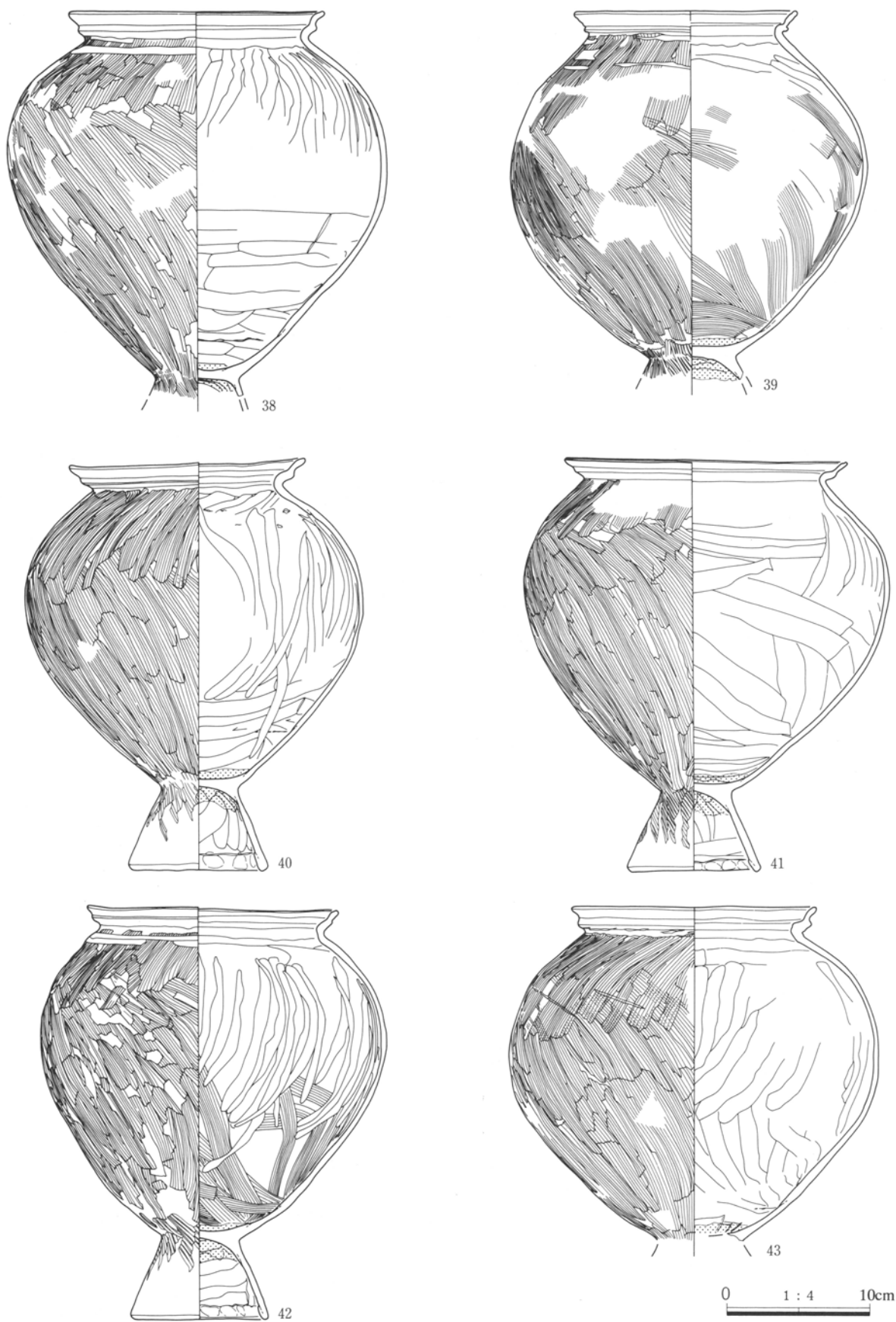
第127図 A区粘土採掘坑出土遺物(2)



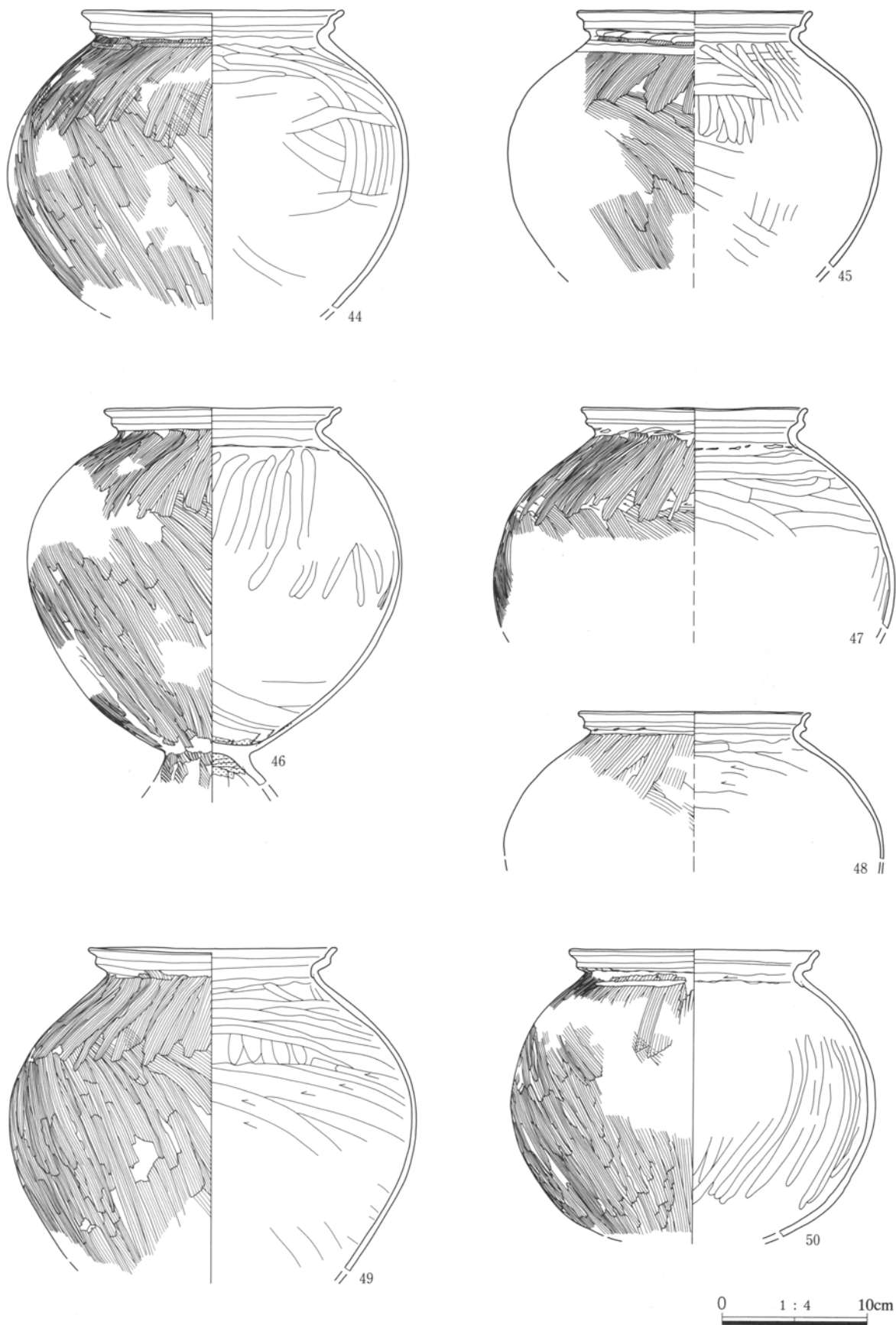
第128図 A区粘土採掘坑出土遺物 (3)



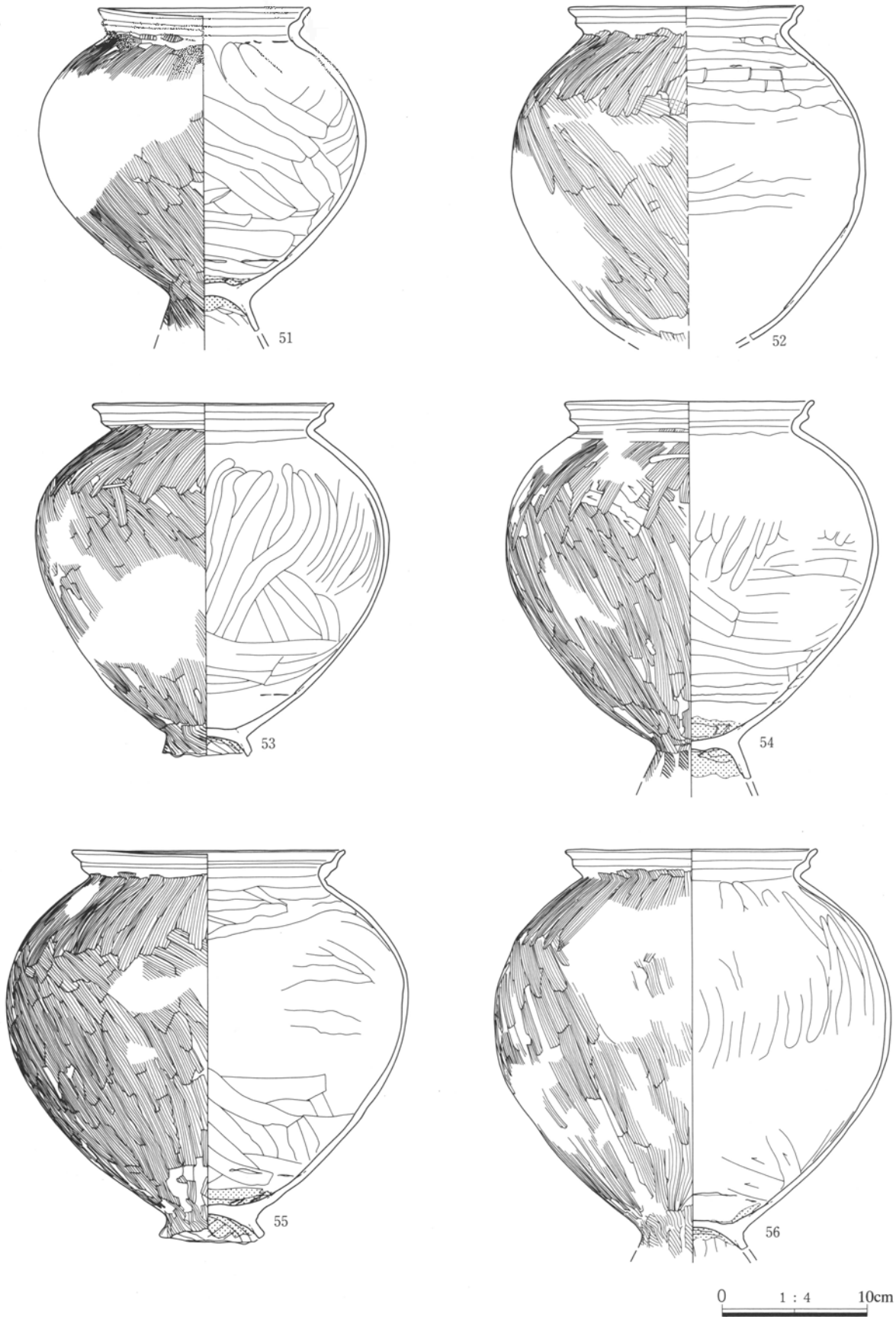
第129図 A区粘土採掘坑出土遺物(4)



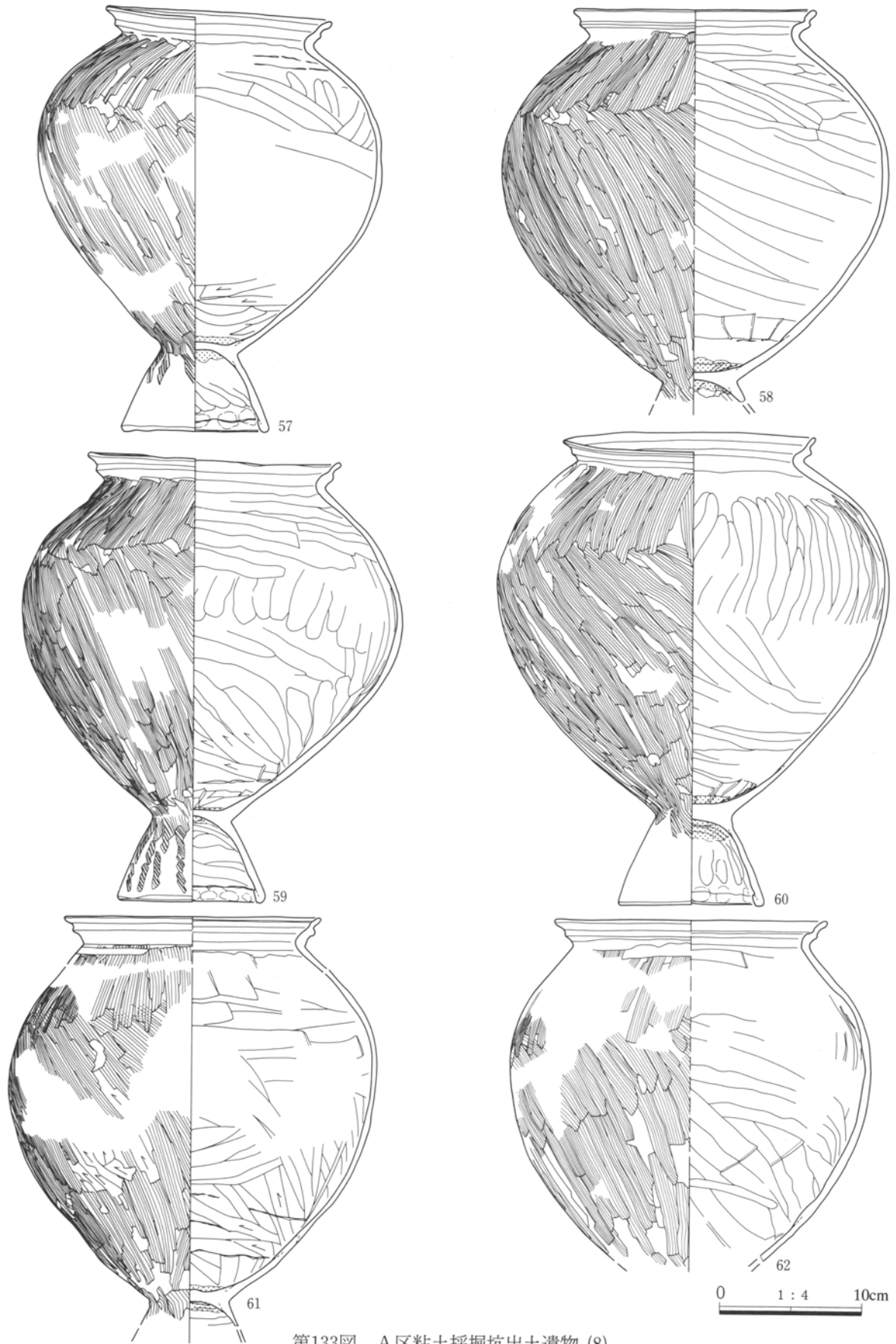
第130図 A区粘土採掘坑出土遺物(5)



第131図 A区粘土採掘坑出土遺物 (6)

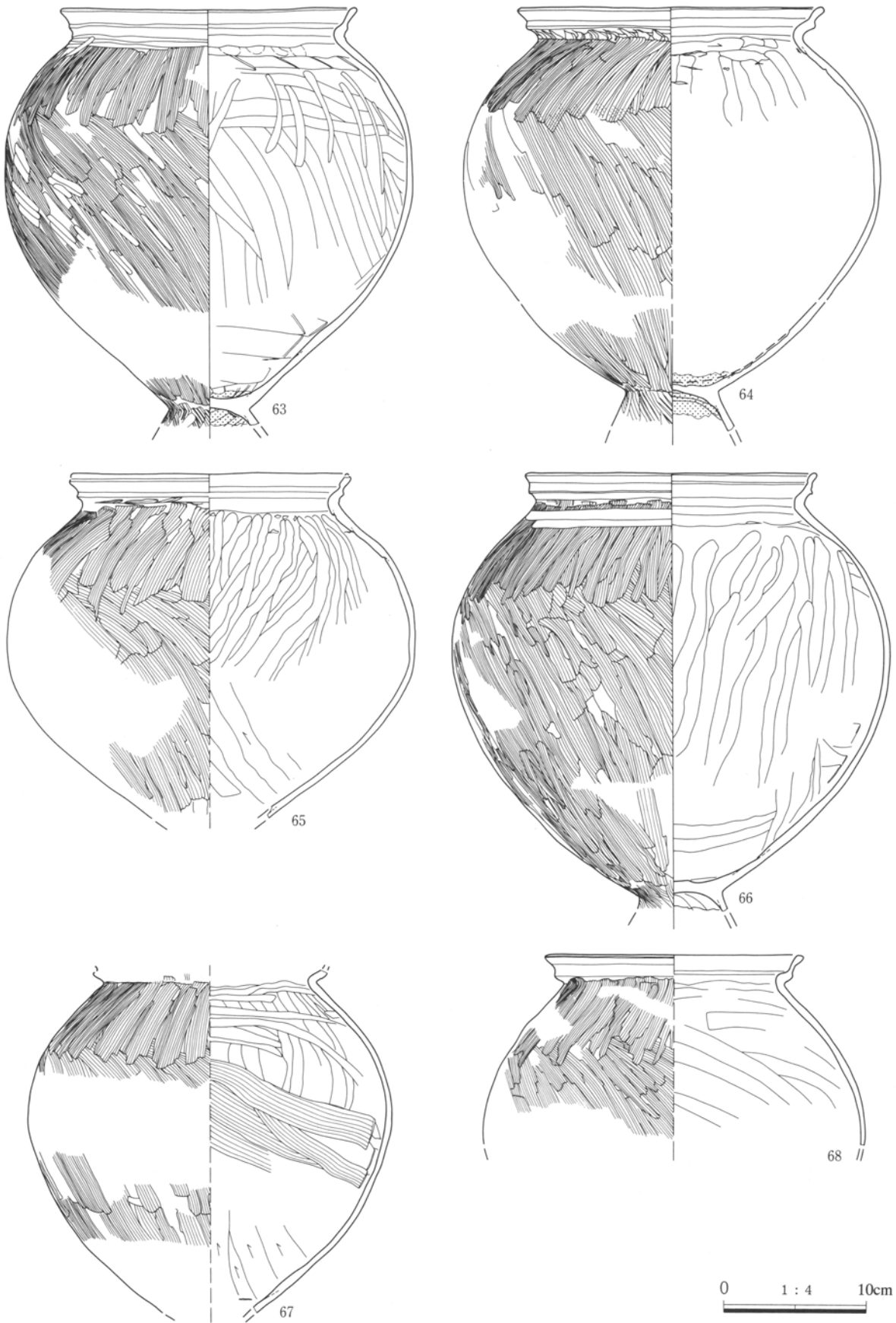


第132図 A区粘土採掘坑出土遺物(7)

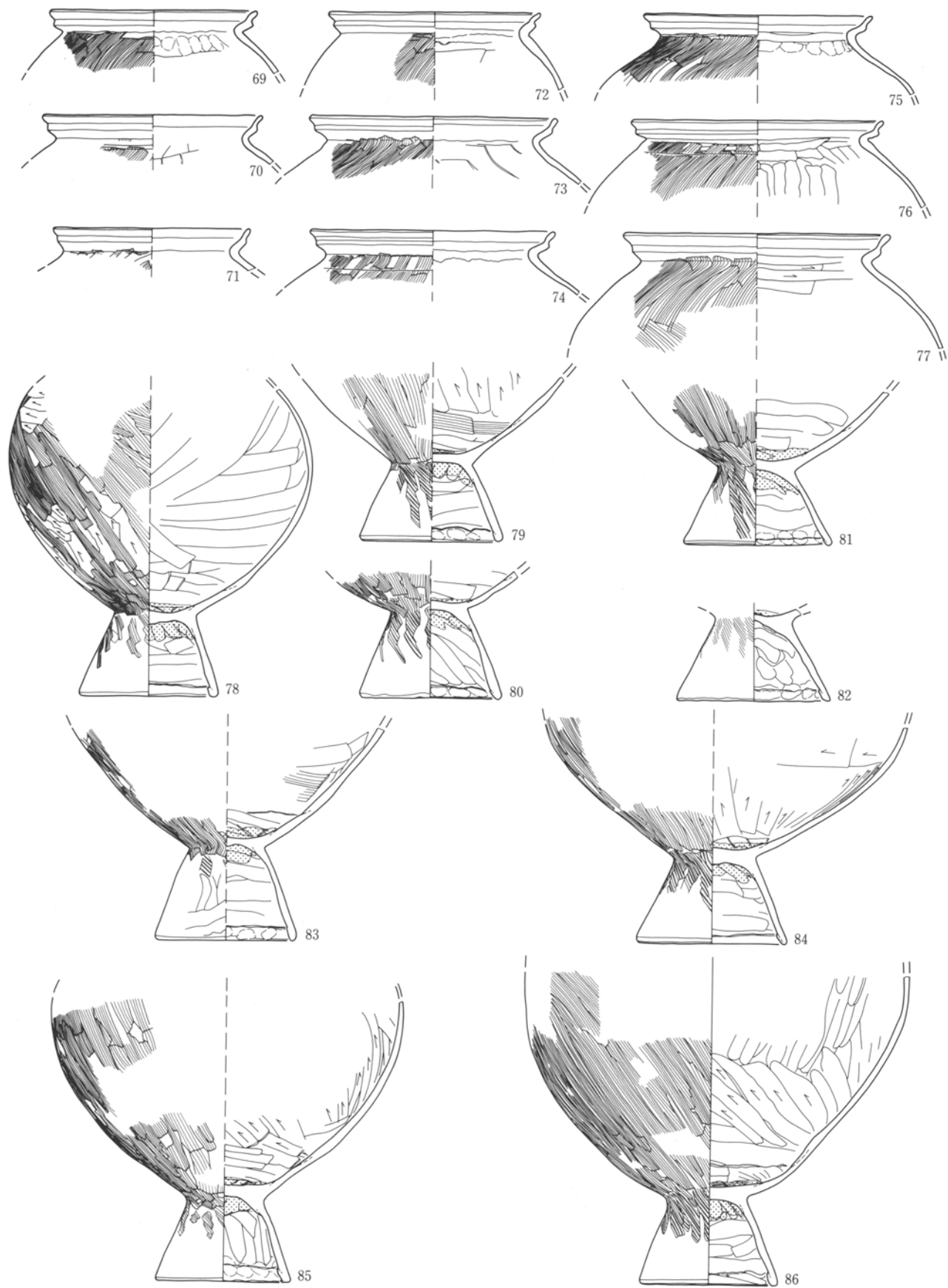


第133図 A区粘土採掘坑出土遺物(8)



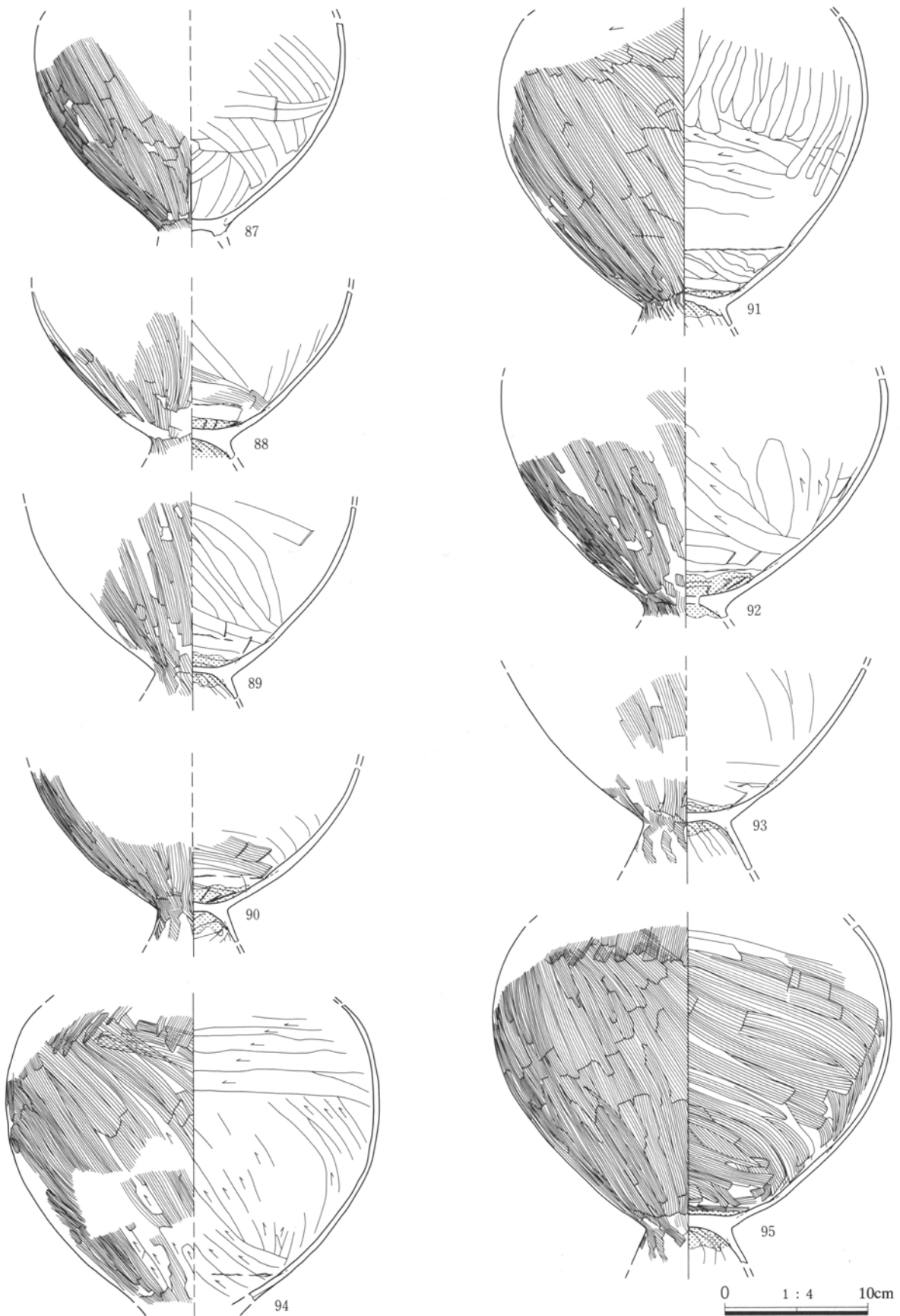


第134図 A区粘土採掘坑出土遺物(9)

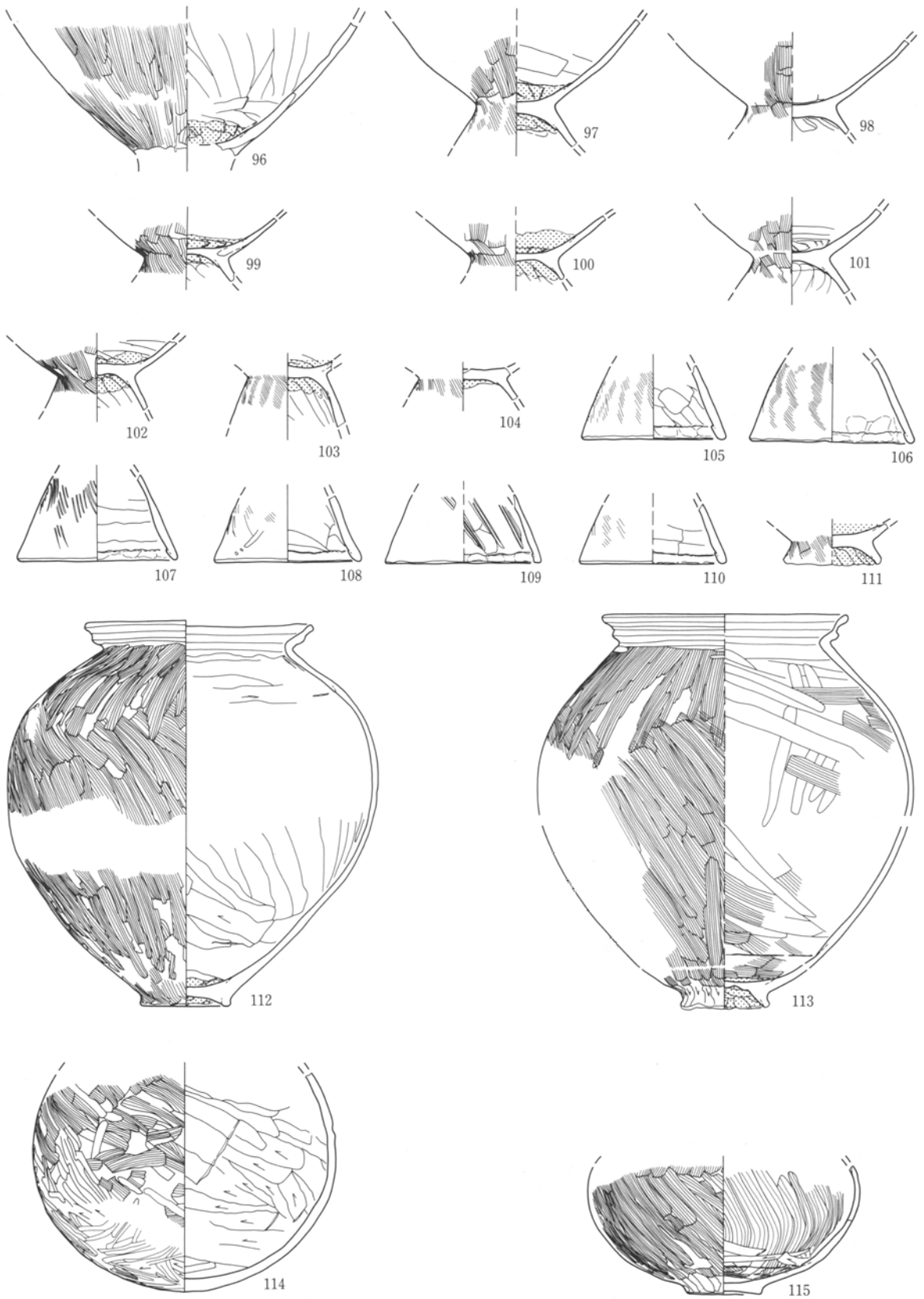


第135図 A区粘土採掘坑出土遺物 (10)

0 1 : 4 10cm

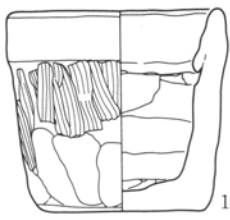


第136図 A区粘土採掘坑出土遺物 (11)

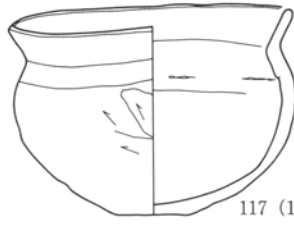


0 1 : 4 10cm

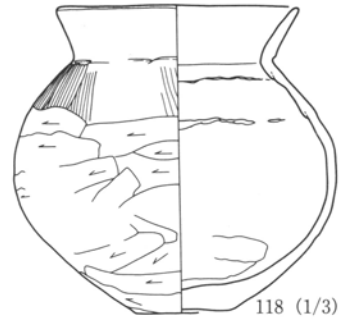
第137図 A区粘土採掘坑出土遺物 (12)



116 (1/2)



117 (1/3)



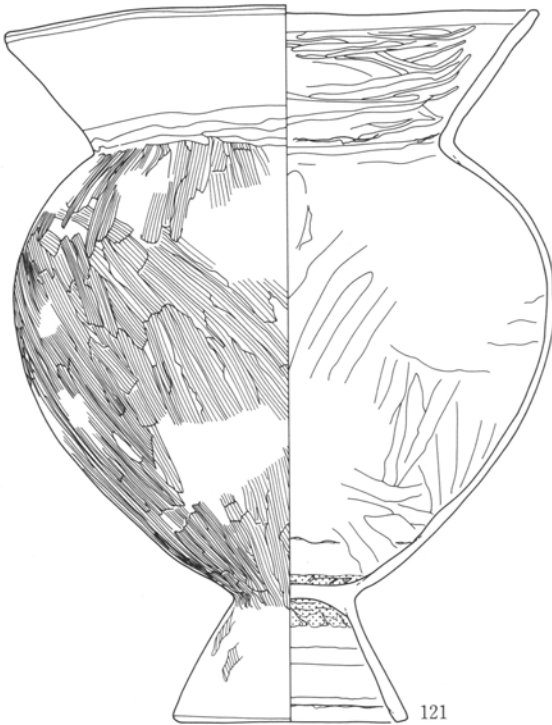
118 (1/3)



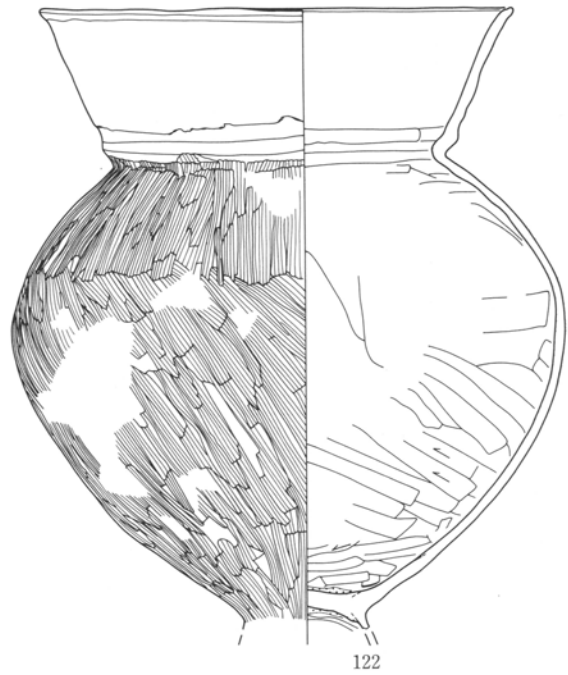
119



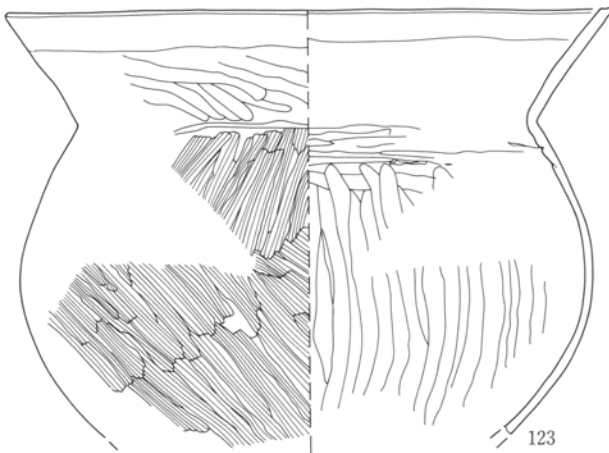
120



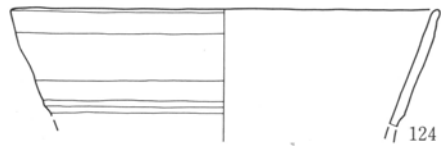
121



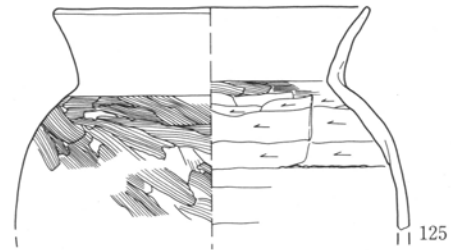
122



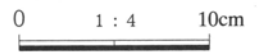
123



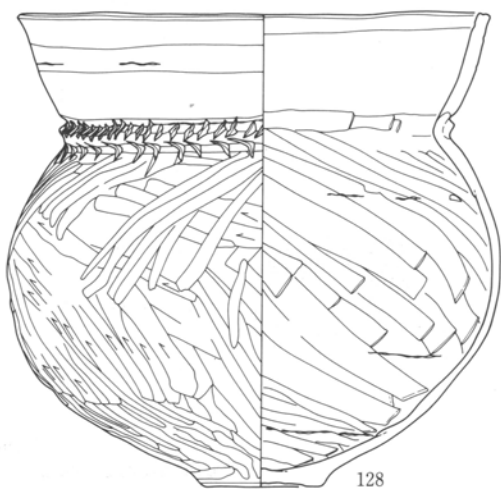
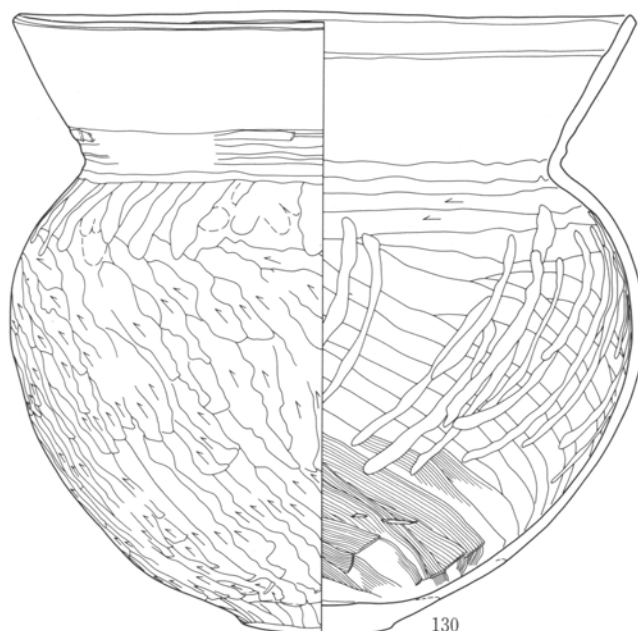
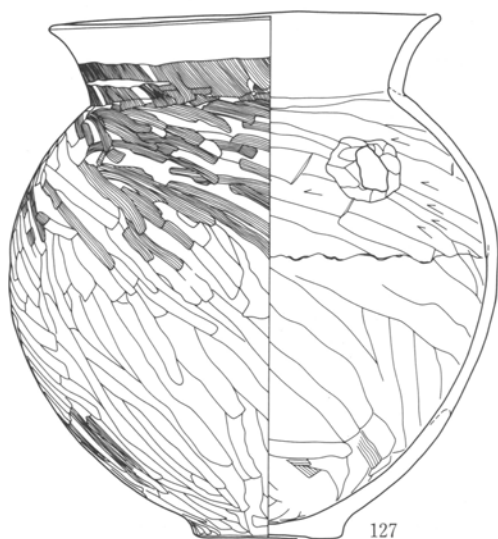
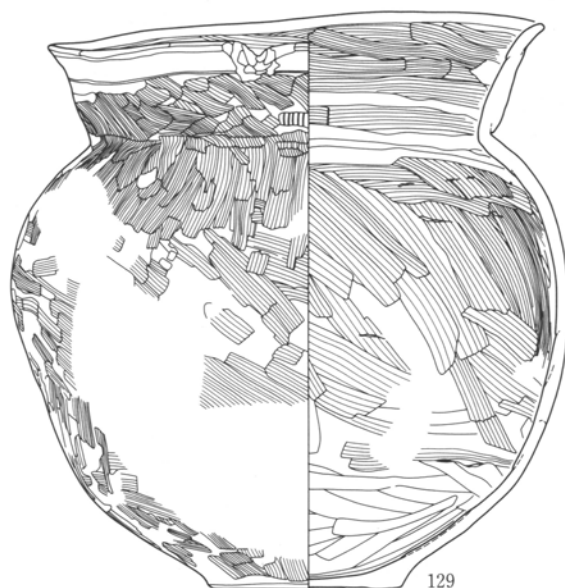
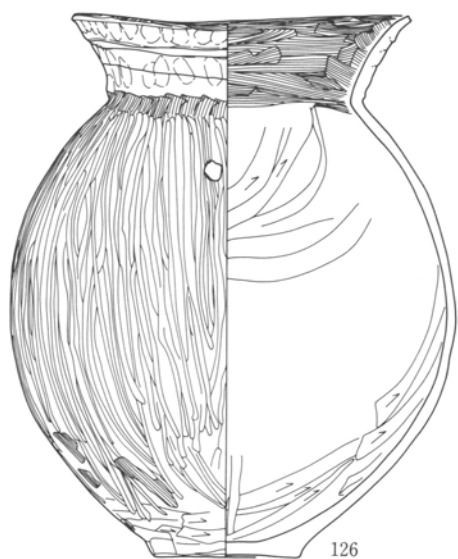
124



125

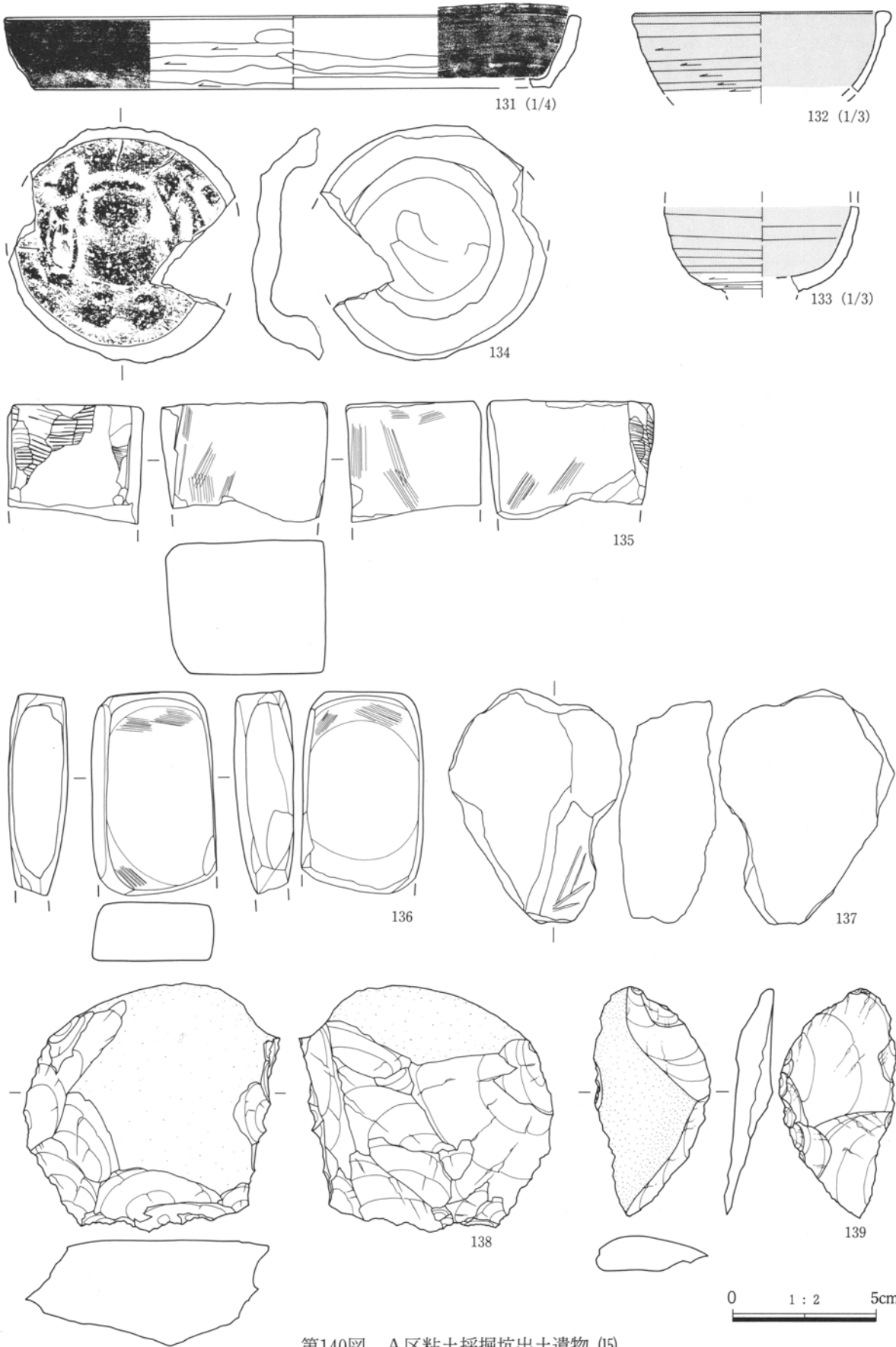


第138図 A区粘土採掘坑出土遺物 (13)

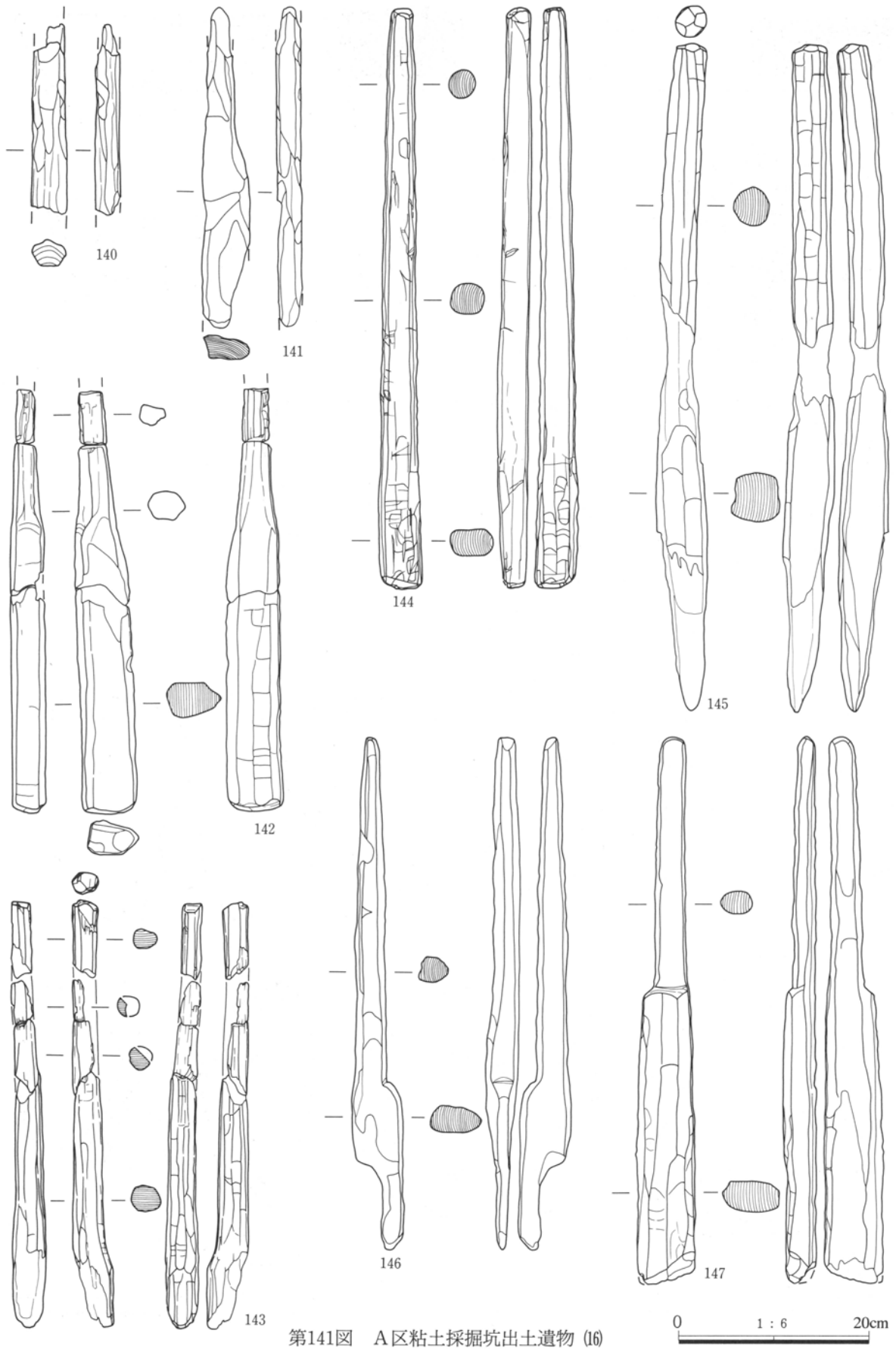


0 1 : 4 10cm

第139図 A区粘土採掘坑出土遺物 (14)

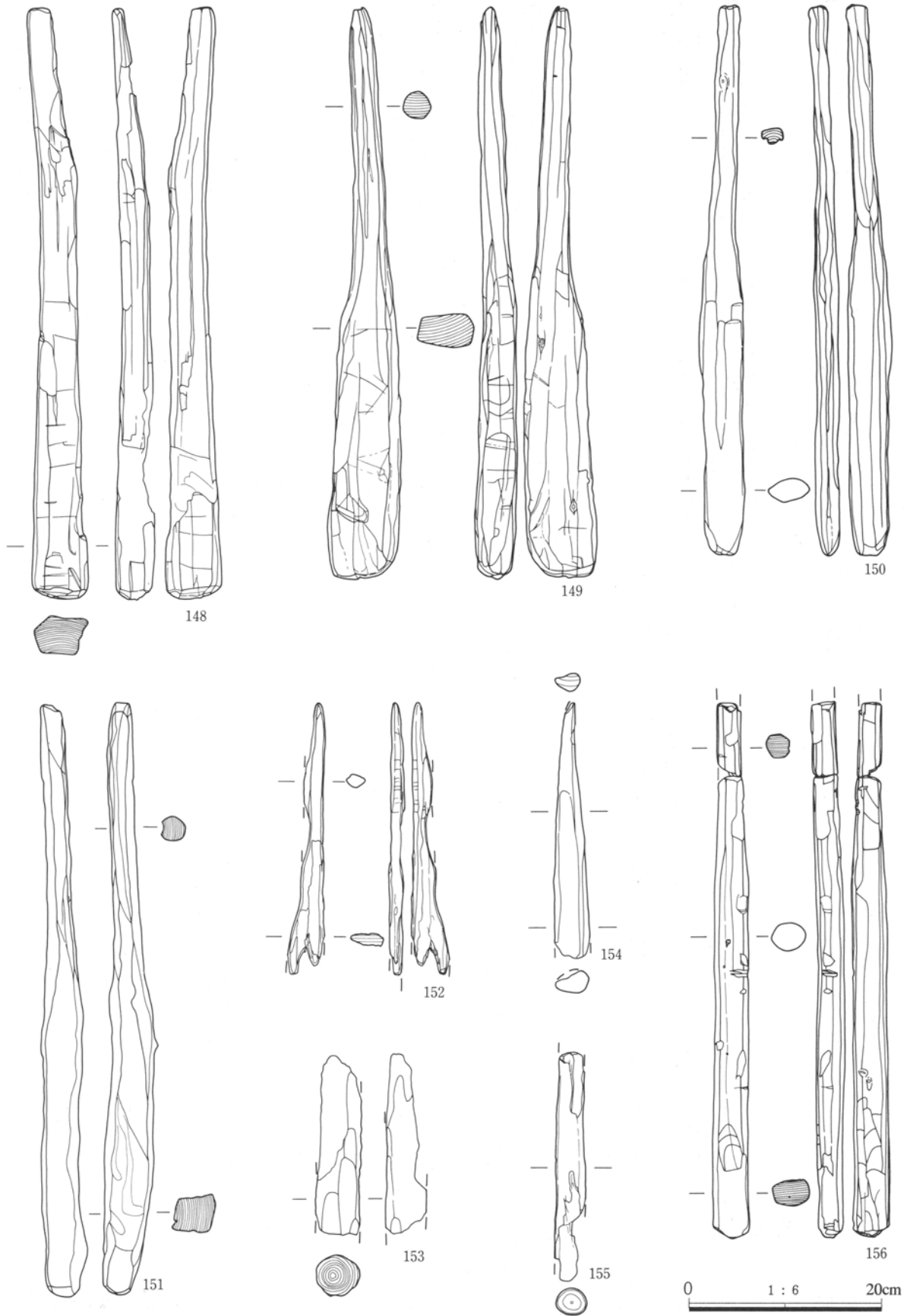


第140図 A区粘土採掘坑出土遺物 (15)

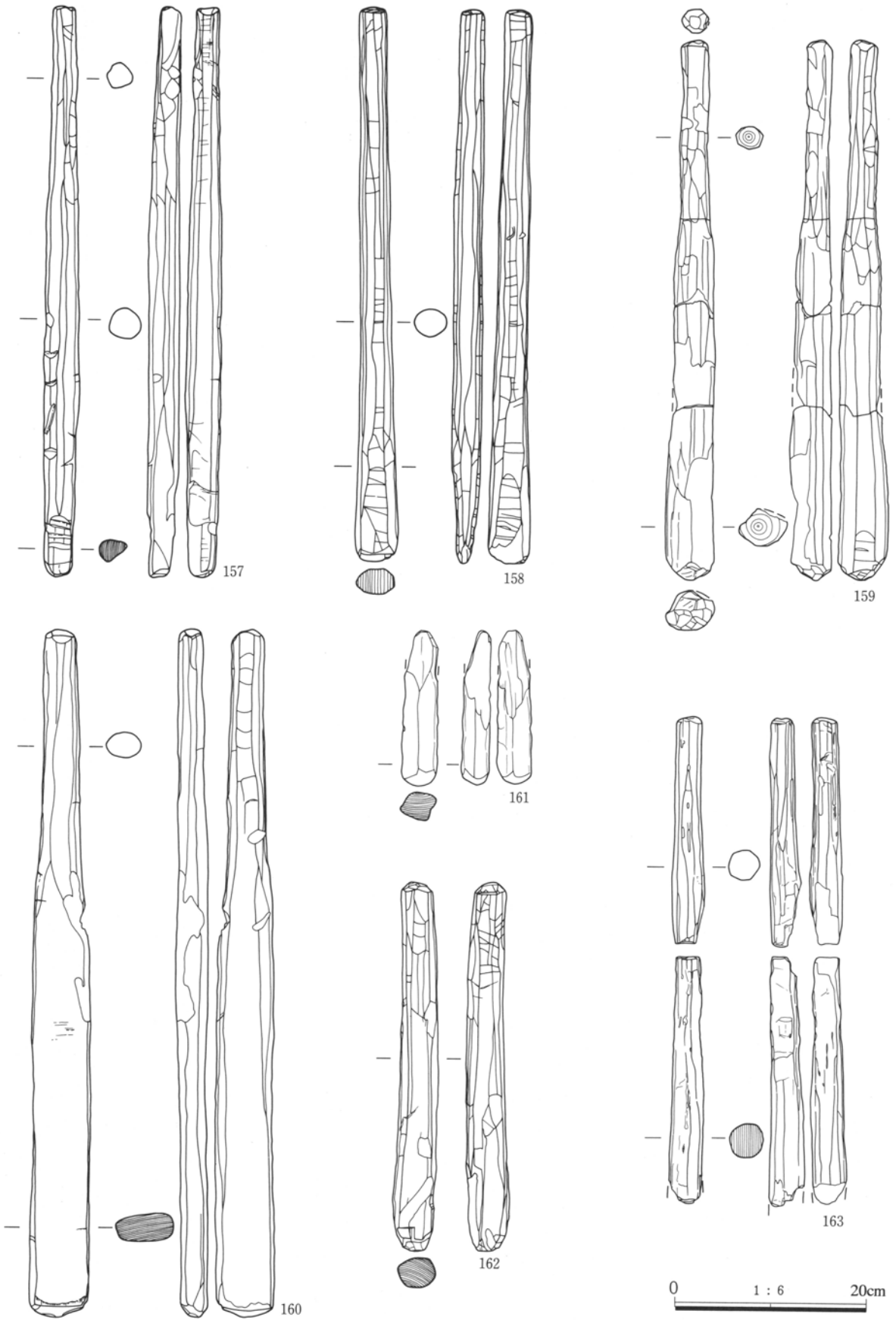


第141図 A区粘土採掘坑出土遺物 (16)

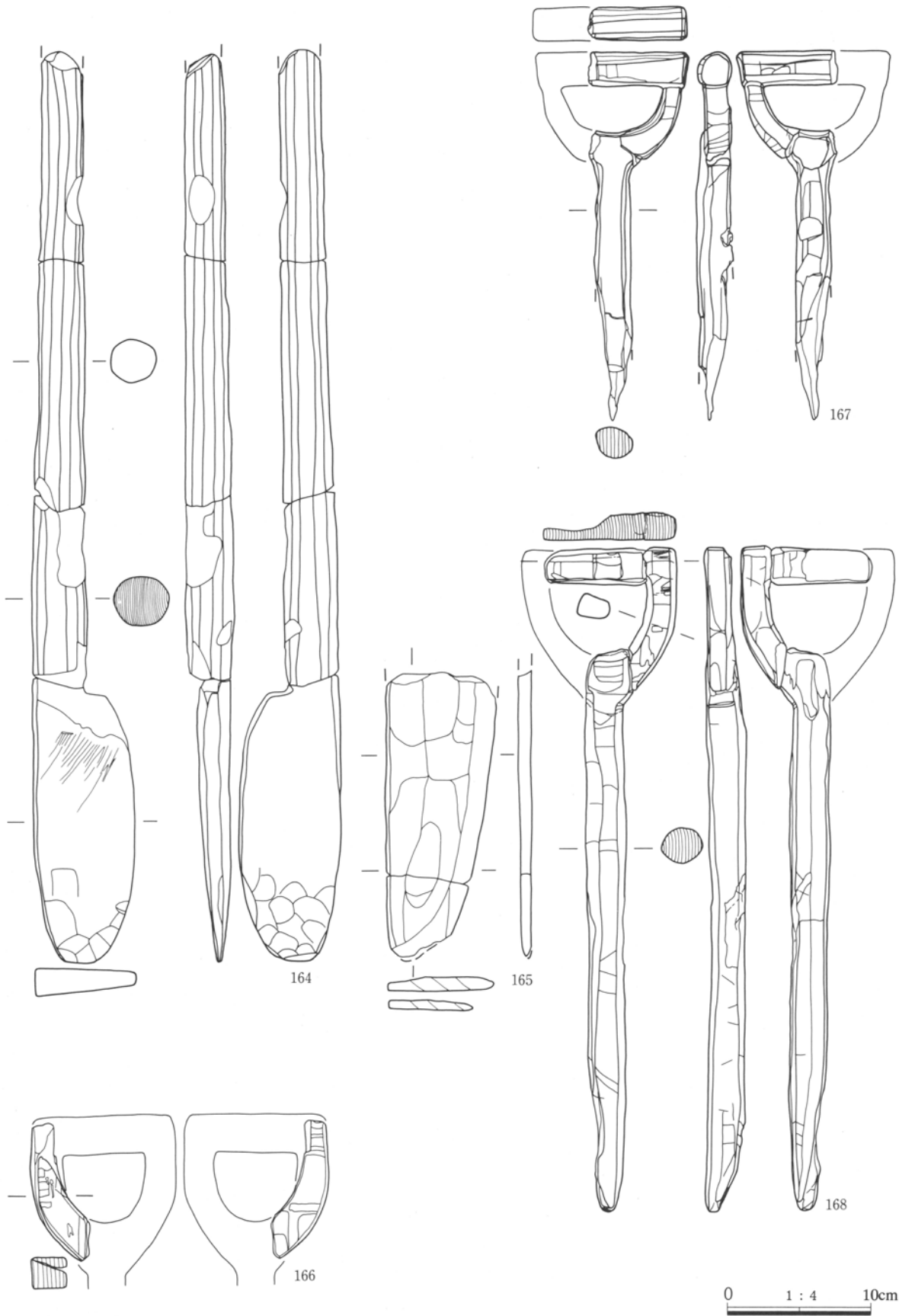




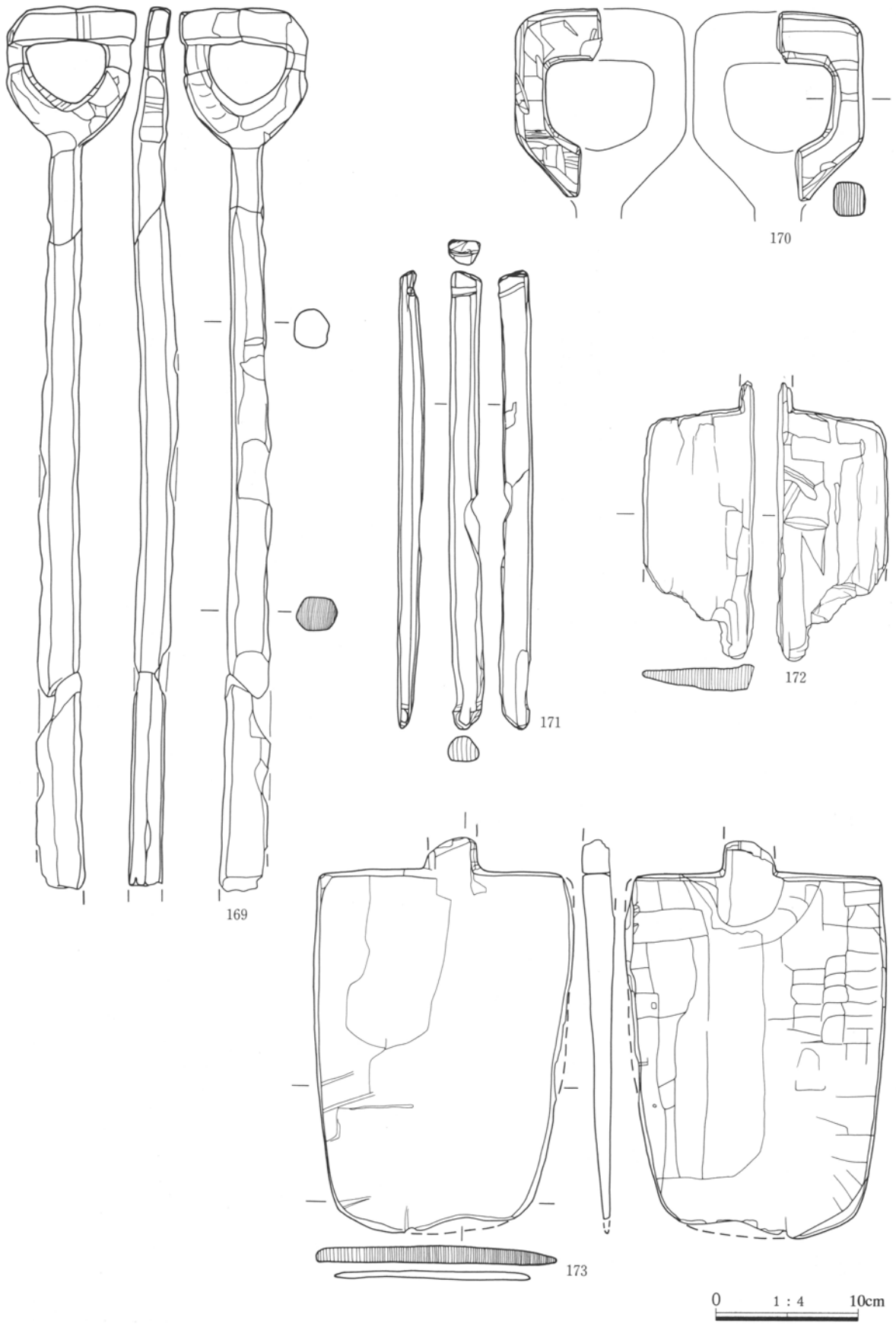
第142図 A区粘土採掘坑出土遺物 (17)



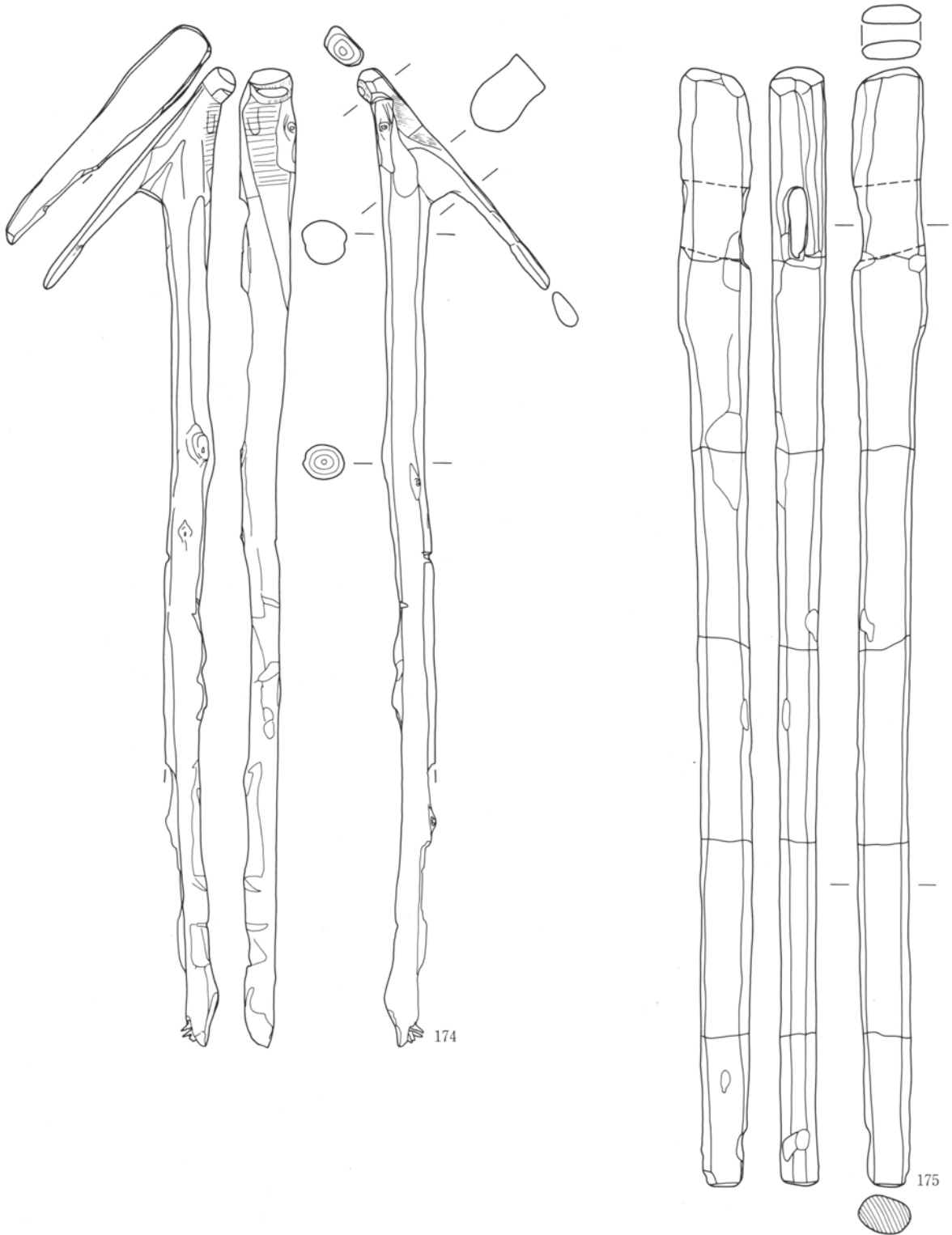
第143図 A区粘土採掘坑出土遺物 (18)



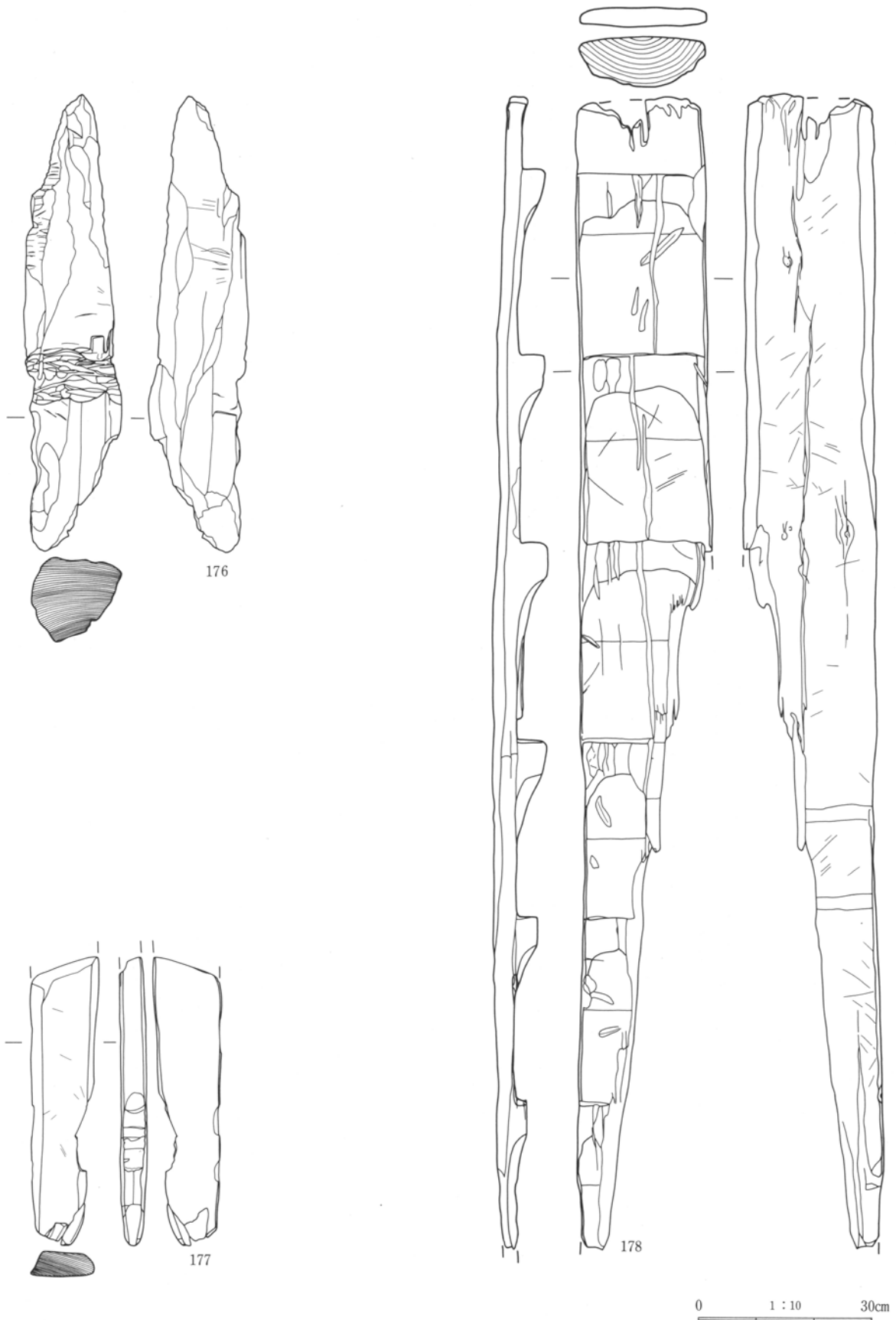
第144図 A区粘土採掘坑出土遺物 (19)



第145図 A区粘土採掘坑出土遺物 (20)



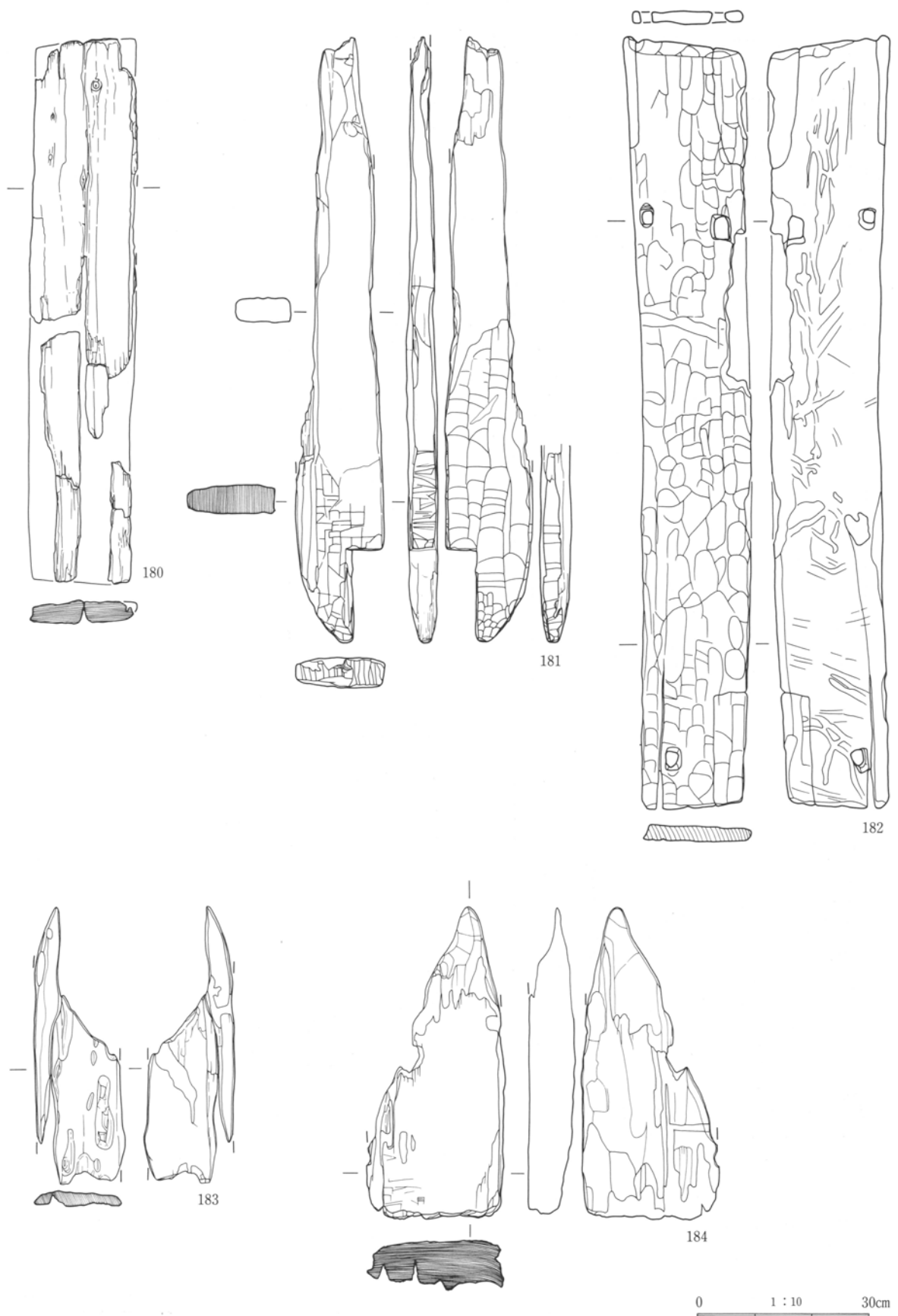
第146図 A区粘土採掘坑出土遺物(2)



第147図 A区粘土採掘坑出土遺物 (2)

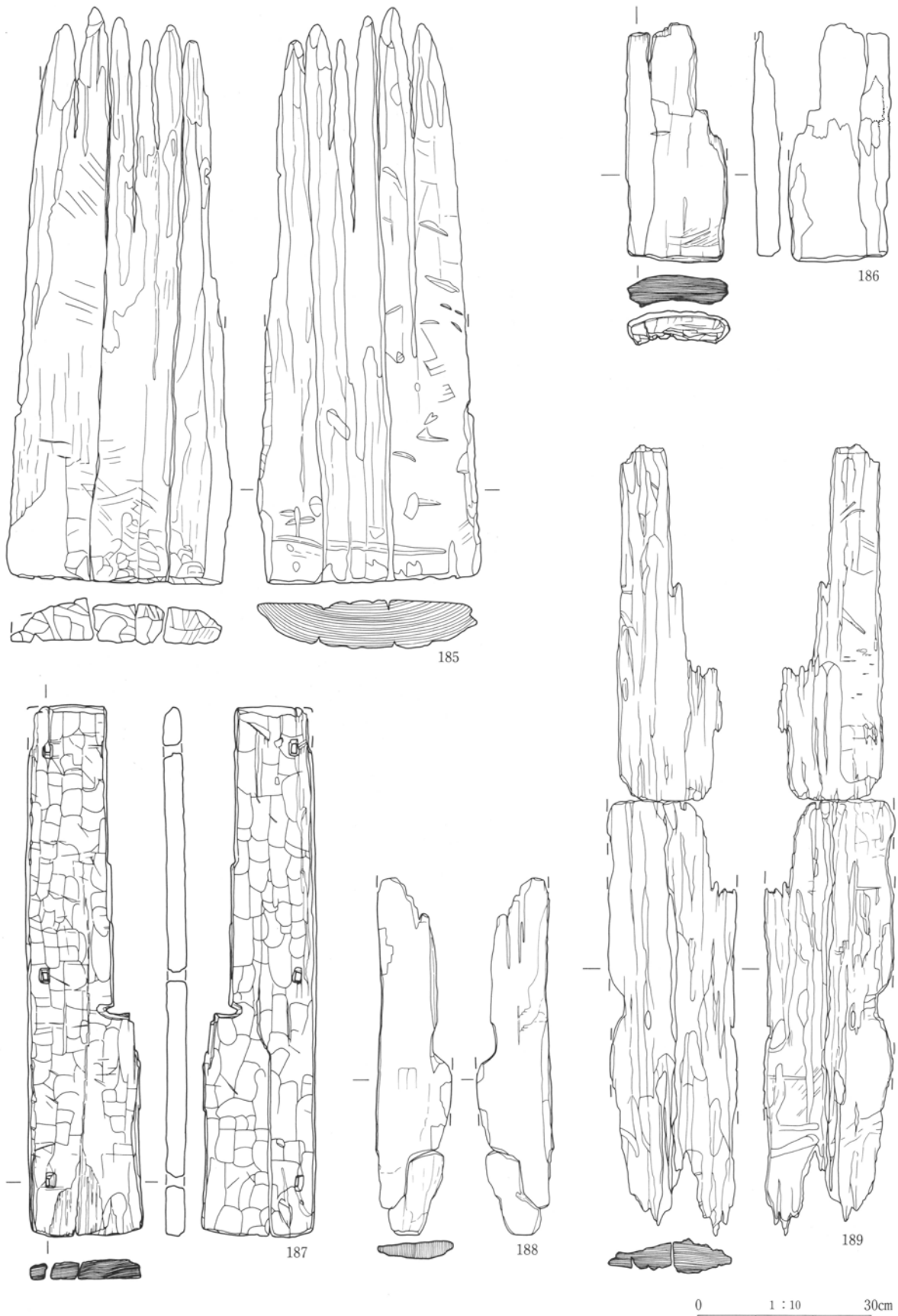


第148図 A区粘土採掘坑出土遺物(23)



第149図 A区粘土採掘坑出土遺物 (2)



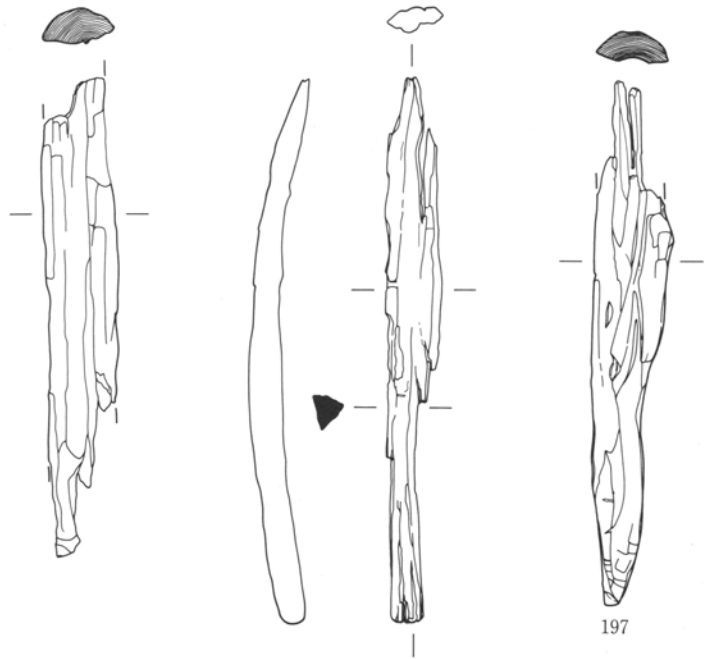
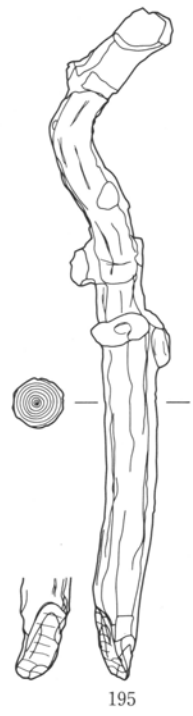
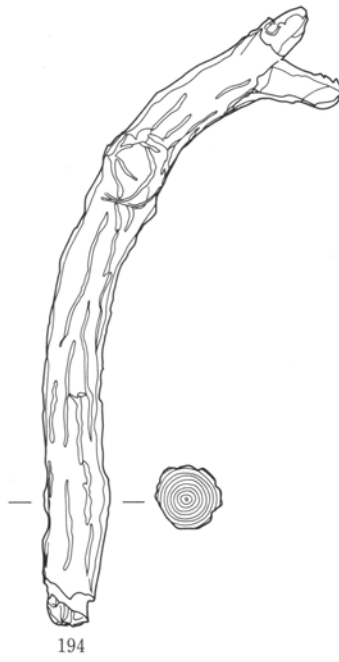
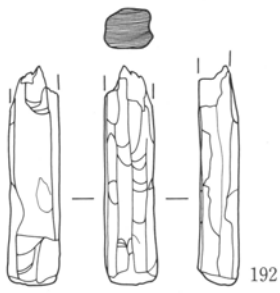


第150図 A区粘土採掘坑出土遺物(25)



0 1 : 10 30cm

第151図 A区粘土採掘坑出土遺物 (26)

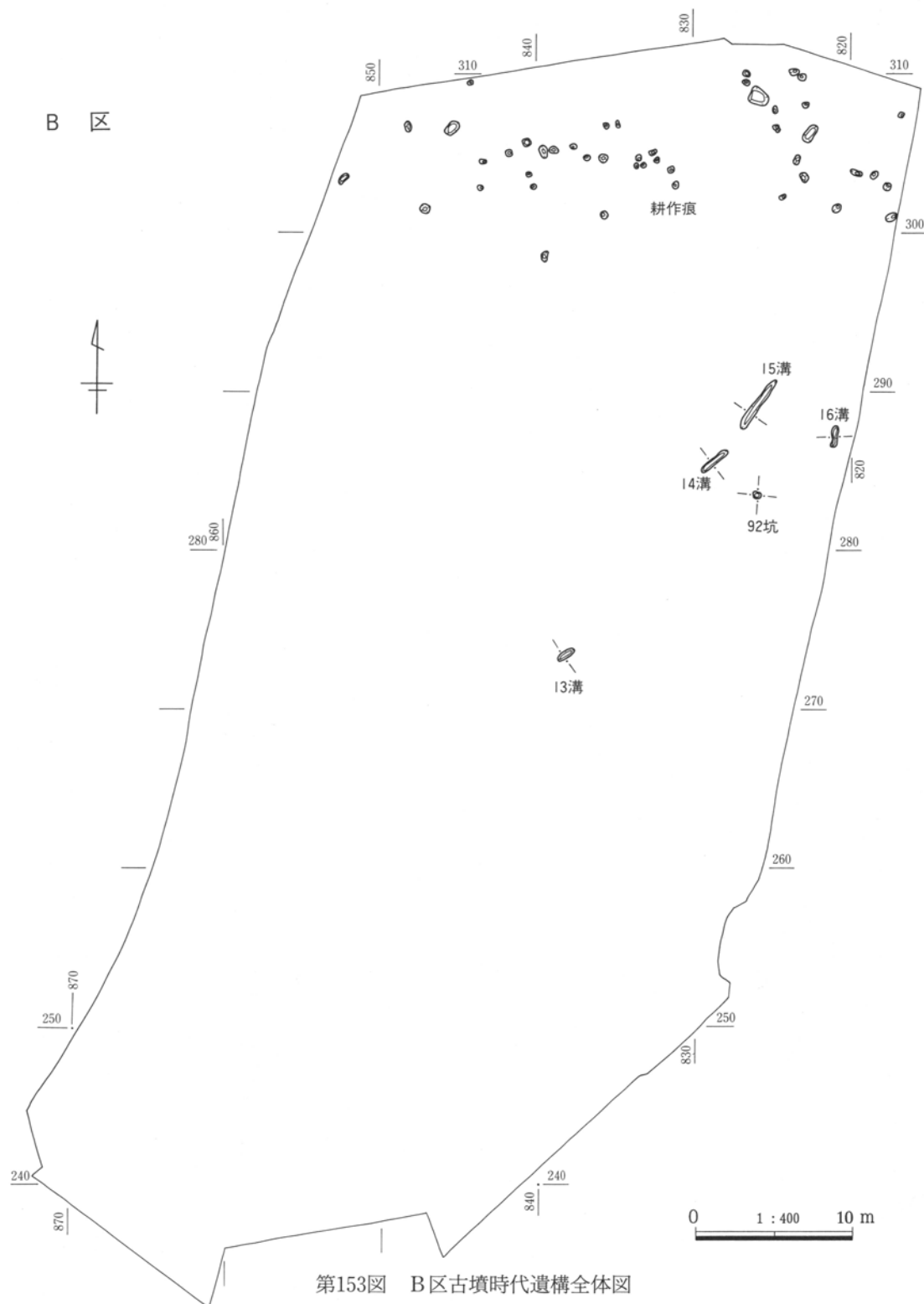


0 1 : 10 30cm

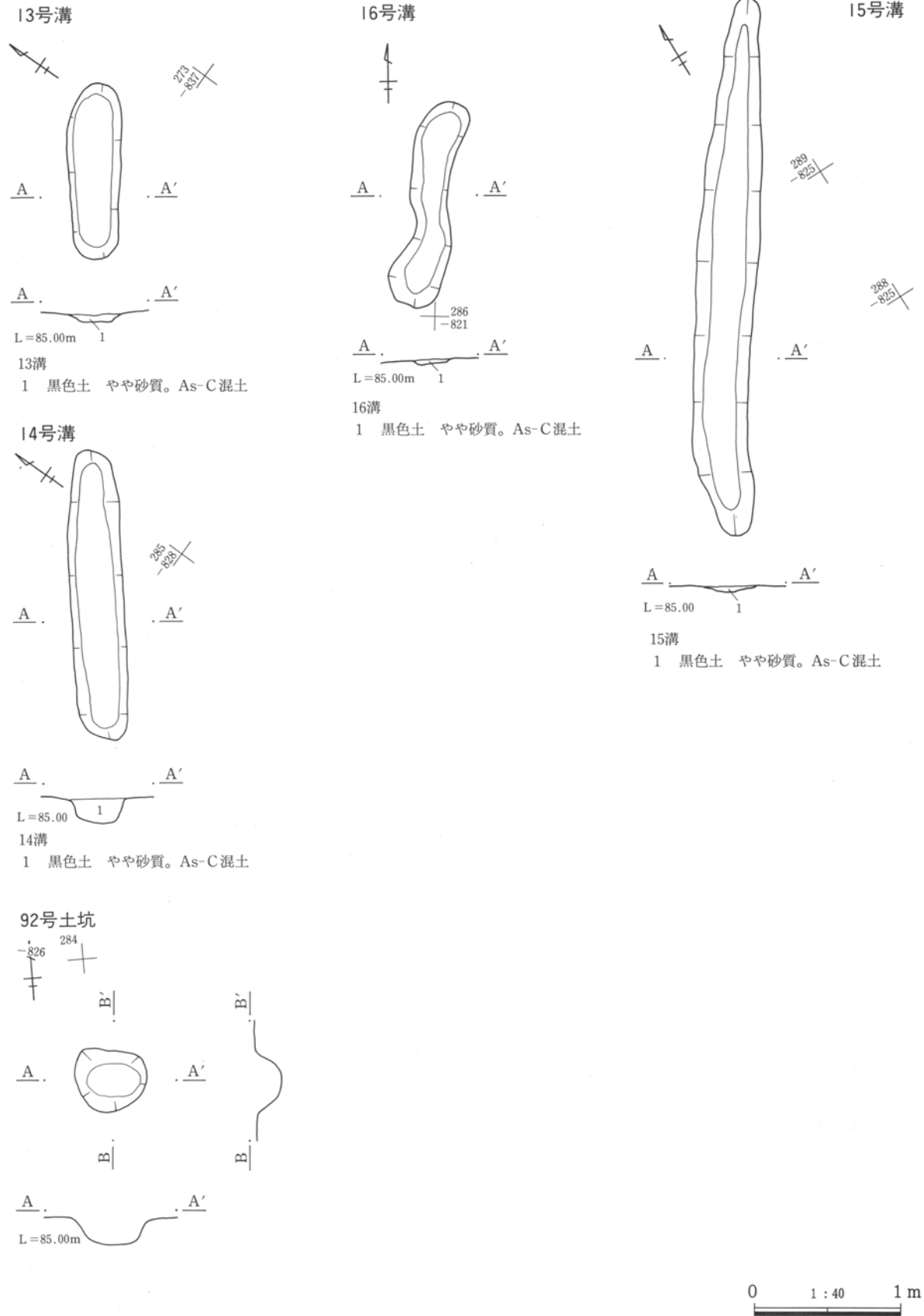
第152図 A区粘土採掘坑出土遺物 (27)

5. B区古墳時代の遺構について〔第153・154図〕

B区では、As-Cを含む暗褐色土を除去した段階で、調査区北半部で溝状や円形の掘り込みを確認した。これらは上記暗褐色土で埋没しており、時期はAs-C降下以降FA降下以前と推定される。4条の遺構については、溝の底部付近のみが残存したものと考えられる。調査区北端部分の掘り込みについては、水田耕作等で上層から掘り込まれたものの残骸と考えられる。遺物の出土は全ての遺構とも認められない。



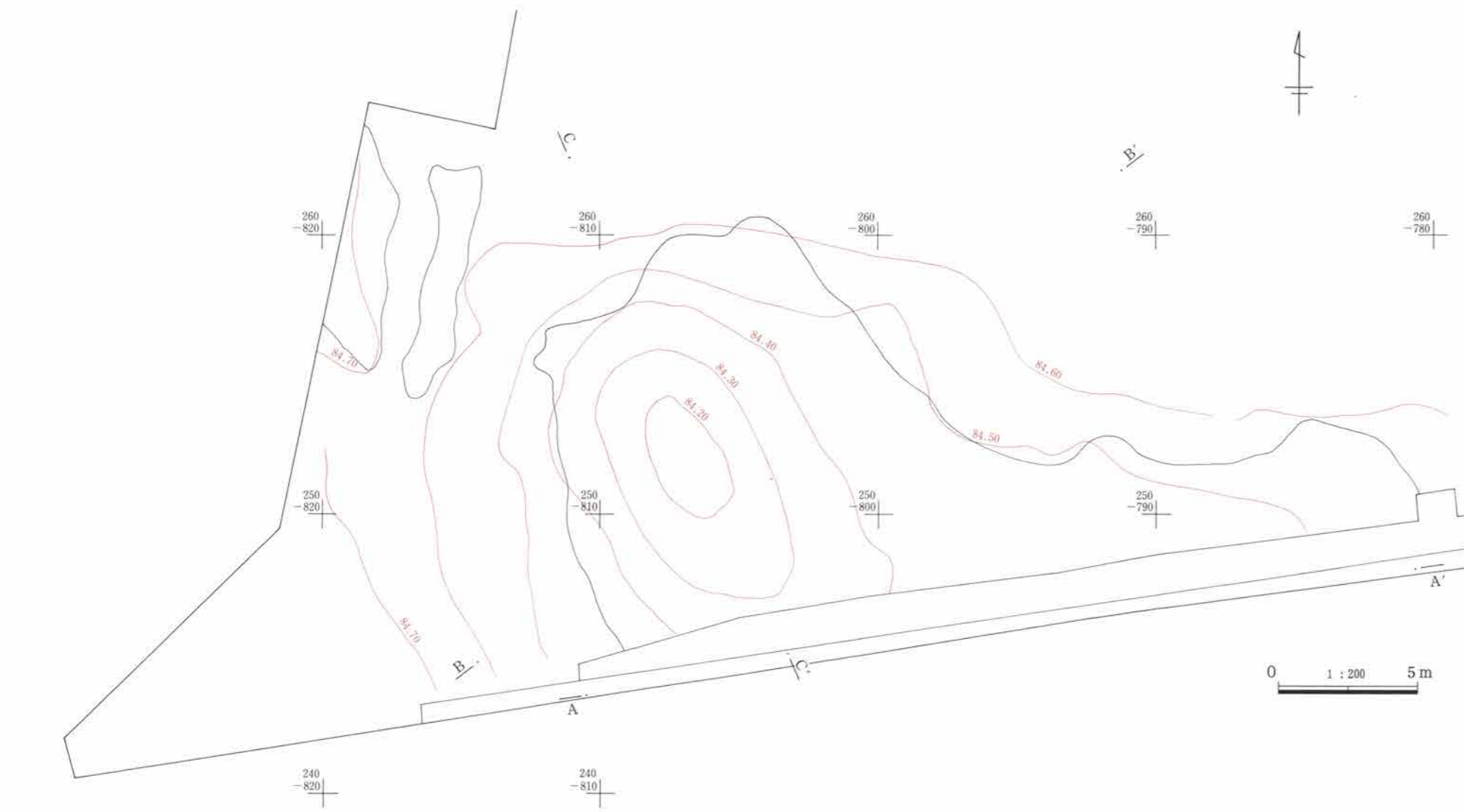
第153図 B区古墳時代遺構全体図



第154図 B区13~16号溝、92号土坑



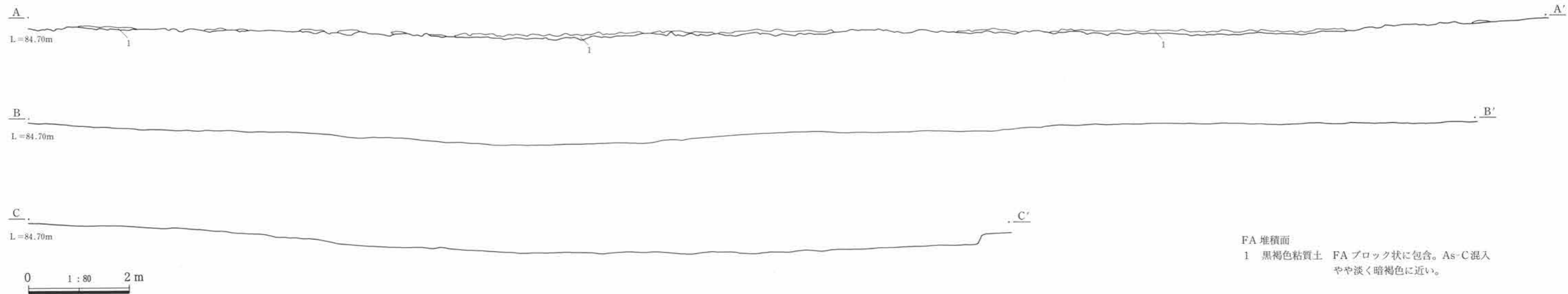
第155図 C区古墳時代遺構全体図



6. C区FA堆積面について〔第155・156図〕

C区では、As-B下水跡の水田耕土を除去したところで、部分的にFAの自然堆積が確認されている。位置は、調査区南部から南西部であり、X250-Y780、X245-Y809、X260-Y804、X266-Y812グリッドの4点を結んだ範囲内及び、その西側の一角にほぼ収まっている。本遺跡では、全ての調査区でFA・As-Cを含む暗褐色土層が確認されている。同土層は、As-C降下以降に混土化された暗褐色土の上面にFAが降下し、さらに混土化されて成立したと推測される。同土層は、B・C区ではAs-Bの降下の頃まで水田耕土になっていたと考えられる。当該位置は、B区より続く古い時代の谷地部分に属しており、周囲に比べて標高も84.2mと低いため、後の時代の水田耕作によるFA堆積面の混土化を免れたと考えられる。

FAが堆積する土層は、厚さは約10cmで、淡く暗褐色に近い黒褐色土中に橙色のFAがブロック状に包含されている状態である。FA自体の堆積は部分的にみられる程度であり、層状に厚く堆積する箇所は確認されていない。本遺跡内で他にFAの堆積が確認できるのは、A区古墳時代の採掘坑のうち、北壁に所在する54号採掘坑の埋没土上面のみである。



第156図 C区FA堆積範囲





## 7. D区古墳時代の遺構について〔第157・158・160 PL.4・24〕

当該時期の遺構は溝状遺構4条と、As-C混土上面水田が確認されている。また、古墳時代前期頃迄に埋没した旧河道についても一部に重機を使用しながら調査を行っている。

FA・As-Cを多量に含む暗灰褐色土（以下FA・As-C混土）の除去後、As-Cを含む暗灰褐色土の上面で、合計4条の溝状遺構（以下溝）を確認している。遺構確認面は、旧河道が埋没した最上位である。これらの遺構は、As-C降下以降に混土化された暗褐色土の上面にFAが降下し、さらに混土化されて成立したFA・As-C混土層を掘り込み、FA・As-C混土上面水田の耕作により破壊されている。時期は、FA降下以降の古墳時代後期と考えられる。

11号溝は、旧河道が埋没した谷地部分の東端に所在する。X314-Y488グリッドからX335-Y494グリッドの間に位置し、走向方位は北から南である。規模は全長約21m、最大幅約1.34m、深さ約32cmである。重複関係はAs-C混土上面水田の畦畔との間に存在し、11号溝が新しいと判断している。出土遺物には、7・8世紀のものも認められるが、上層が薄く詰まっており、上位から流れ込んだ可能性が考えられる。

12号溝は、台地の縁辺端部に所在する。X307-Y480グリッドからX334-Y488グリッドの間に位置し、走向方位は北から南である。規模は全長約28.8m、最大幅約1.05m、深さ約20cmである。重複関係は、9号溝との間に存在し、断面から12号溝の方が古いと判断している。遺物の出土は認められない。

13号溝は、旧河道が埋没した谷地部分の中央に所在する。X322-Y497グリッドからX333-Y497グリッドの間に位置し、走向方向は北から南である。規模は全長約11.4m、最大幅約0.8m、深さ約14cmである。重複関係は存在しない。遺物の出土は認められない。

14号溝は、旧河道が埋没した谷地部分の中央に所在する。X323-Y496グリッドからX328-Y495グリッドの間に位置し、走向方向は北から南である。規模は全長約4.4m、最大幅約0.8m、深さ約14cmである。重複関係は存在しない。遺物の出土は認められない。

調査区中央の谷地部分では、同様にFA・As-C混土を除去したところで、上面の水田区画とは全く異なる水田畦畔が確認されている。遺構確認面は、As-Cを含む暗灰褐色土（以下As-C混土）の上面で、旧河道が埋没した最上位である。調査区中央で確認された畦畔は基底部のみの残存で、実際の耕作面はさらに高いと推測される。本遺構の水田耕土はAs-C混土であるが、上面にFAが降下し、さらに混土化されたために識別不可能である。従って、時期はFA降下以前の古墳時代と考えられる。

畦畔は、旧河道の両岸際及び中央やや南寄りの3箇所を確認されている。具体的には、X322-Y504グリッドからX336-Y506グリッドの間、X310-Y499グリッド付近を南東端とする、東西8m、南北4m程の範囲内、X303-Y487グリッドからX335-Y492グリッドの間である。水田域の最高標高は、旧河道右岸畦畔部の83.81mで、最低標高は中央南寄りの83.12m程度で、比高差は約69cmである。水田区画は全く不明で、水口は確認されていない。

尚、テフラ分析では、本遺構の下面で確認されたAs-Cの直上までFAが含まれているとの結果を得ているが、調査所見では、本遺構の確認面以下については、FA・As-C混土とは異なる暗灰褐色土で、FAを肉眼で確認できなかったことから、As-C混土と確定している。分析結果については、何らかの要因でFAが上層より混入したと考えたい。

調査区中央の谷地部分は、古墳時代前期頃までに埋没した旧河道である。旧河道の調査は、最上面、中位層、底面の3面で実施している。第1面は、FA・As-C混土を除去したAs-C混土の上面で、As-C混土上面水田跡及び4条の溝状遺構の確認面である。尚、掲載した平面図は第1面のものである。第2面は、As-C混

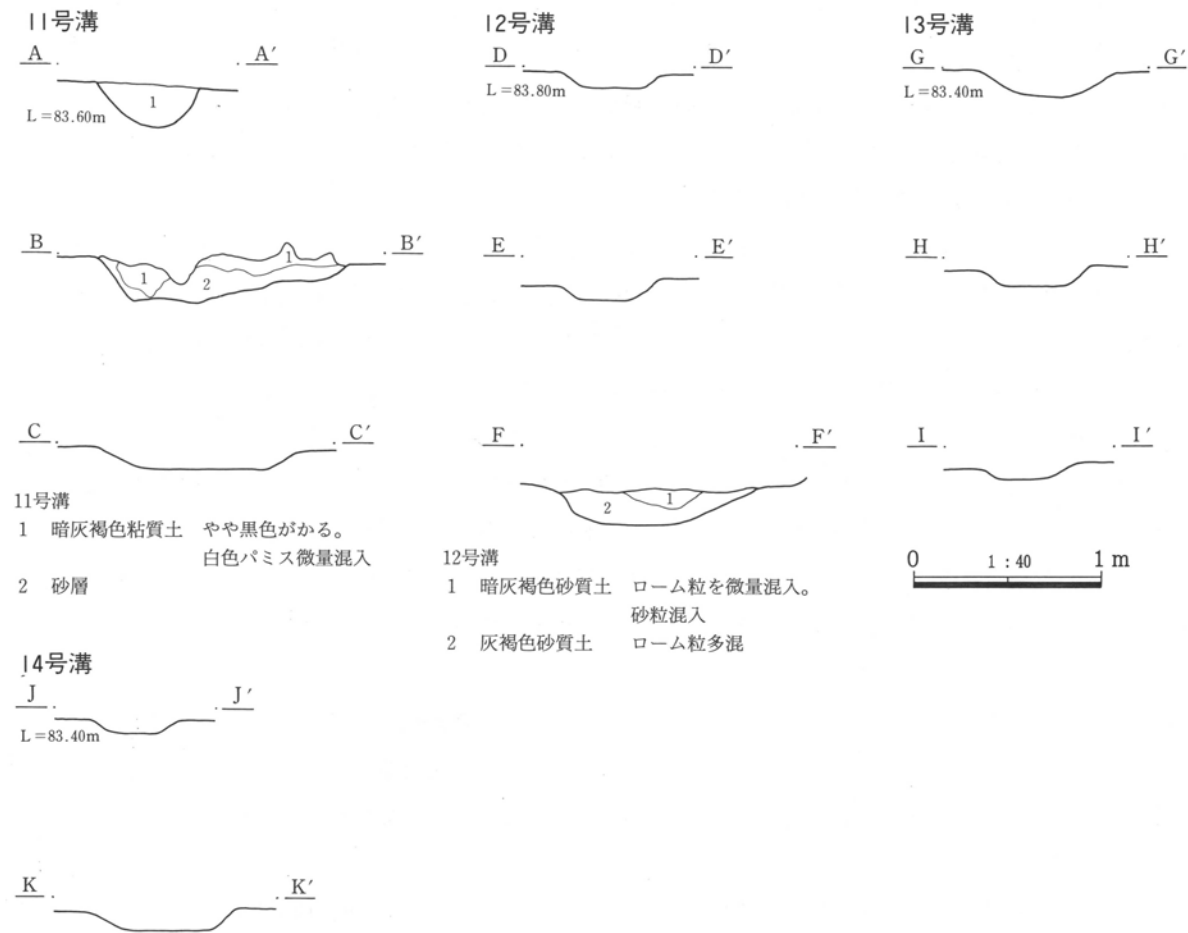
第4章 確認された遺構・遺物について

土を除去した暗灰褐色土の上面で、第3面は、埋没土を全て除去したシルト層の上面である。As-C混土の下層には、部分的にAs-Cの堆積するが、テフラ分析では水で流された形跡が確認されている。また、同分析では、As-Cの直上までFAが混入するとの結果を得ているが、先述のように、調査所見では、As-Cの直上層はFA・As-C混土と異なる暗灰褐色土で、FAを肉眼で確認できなかったことから、As-C混土と確定している。分析結果については、何らかの要因でFAが上層より混入したと考えたい。

遺物の出土は、主に旧河道の最上面及び中位層で、多量の土師器片と約240点の自然流木が確認されている。土師器片は、東に隣接する「五目牛新田」遺跡で確認された、古墳時代の集落跡と何らかの関わりがあることが予想されるが、詳細については、同遺跡の発掘調査報告書の刊行を待ちたい。自然流木の材は、当時周辺地域に自生していたと考えられるコナラ・クヌギが大多数である。中には若干の加工が見られる木材も存在するが、残存状況は不良で、数も極少量である。旧河道は、同地点より西へ約200mの位置に所在する、一級河川西桂川であると推定される。

第6表 古墳時代遺構名称変更一覧

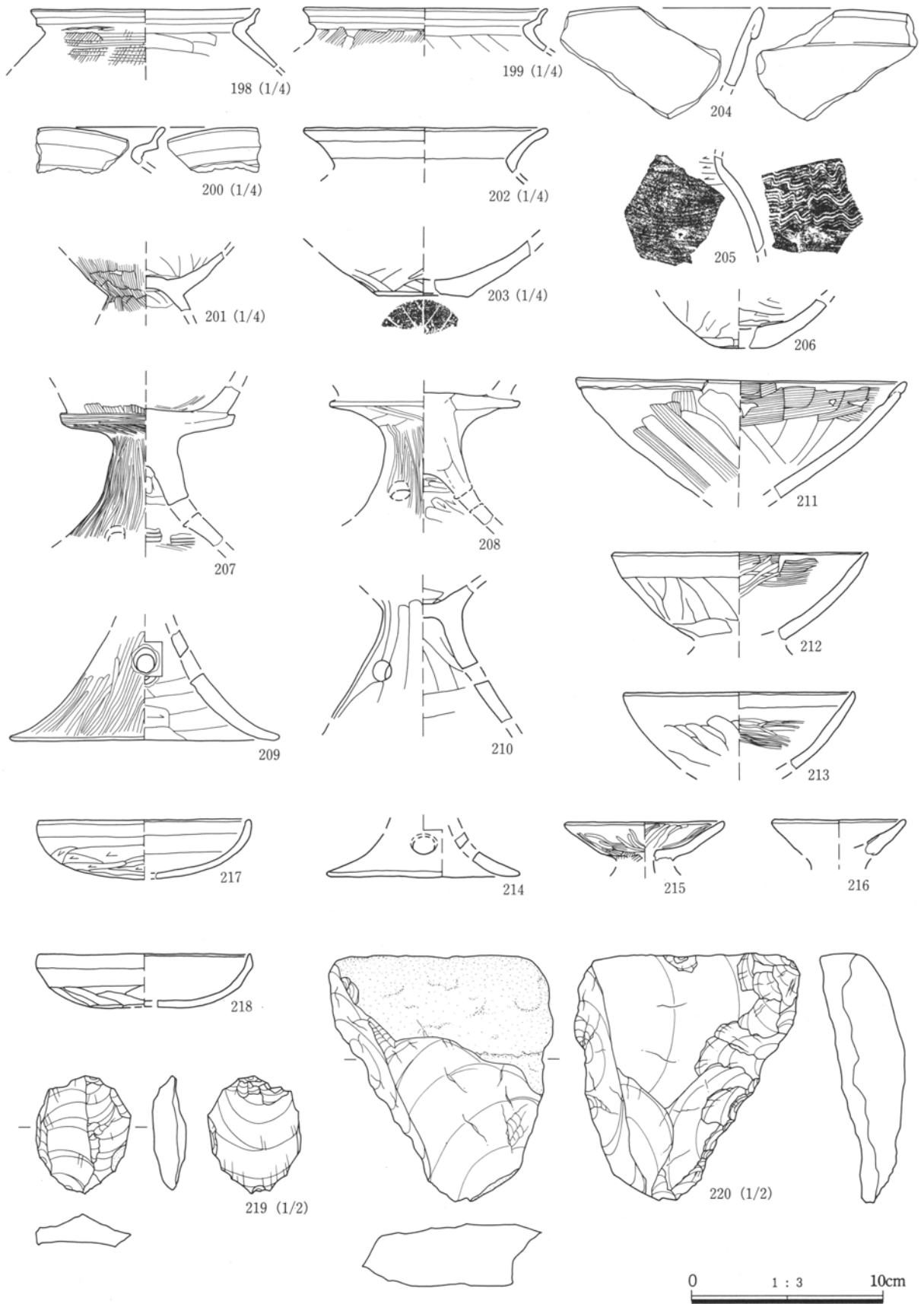
旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称
D区10号溝	→ D区旧河道	新規	→ D区13号溝	新規	→ D区14号溝



第157図 D区11～14号溝断面



第4章 確認された遺構・遺物について

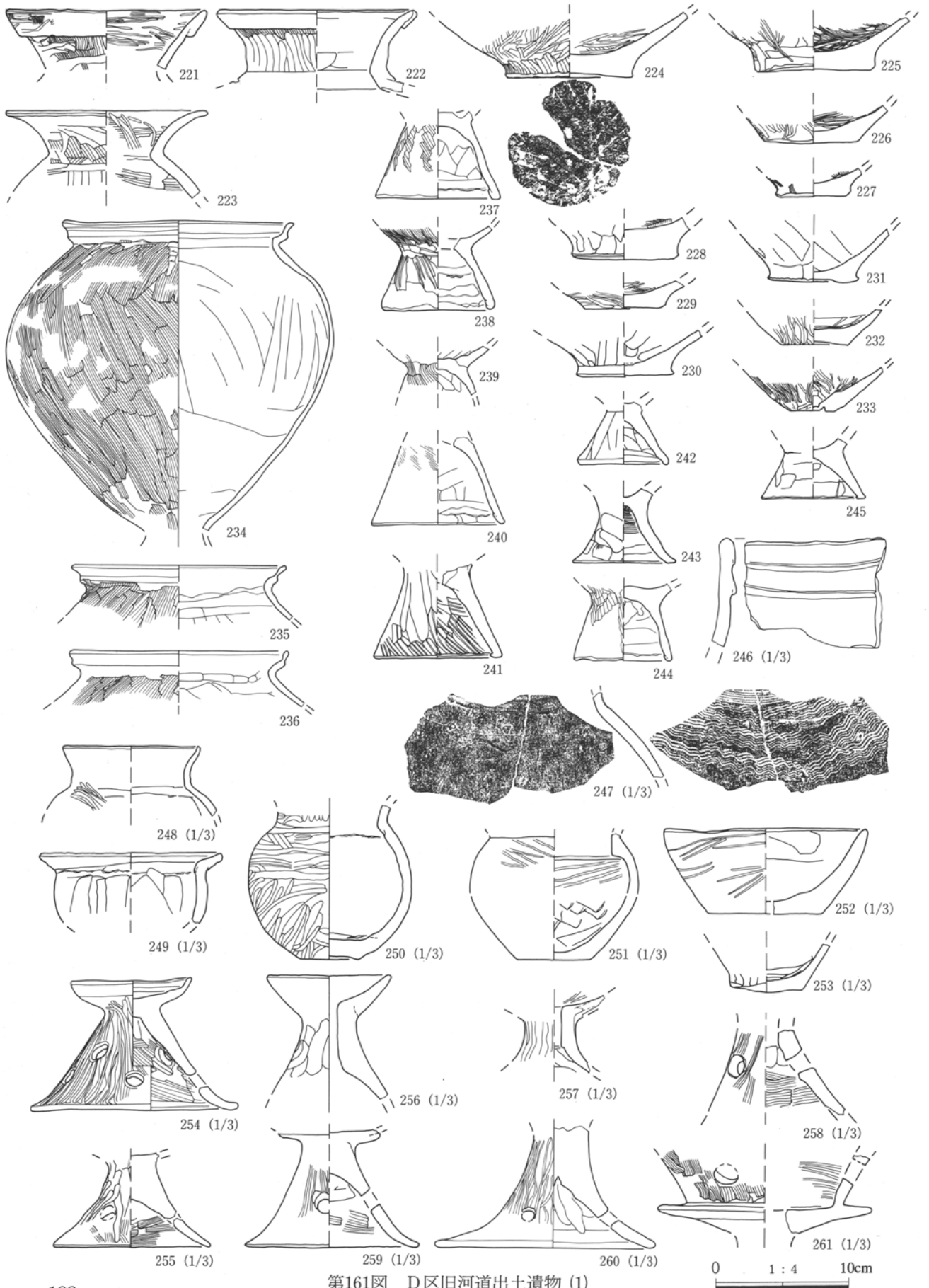


第159図 D区11号溝出土遺物

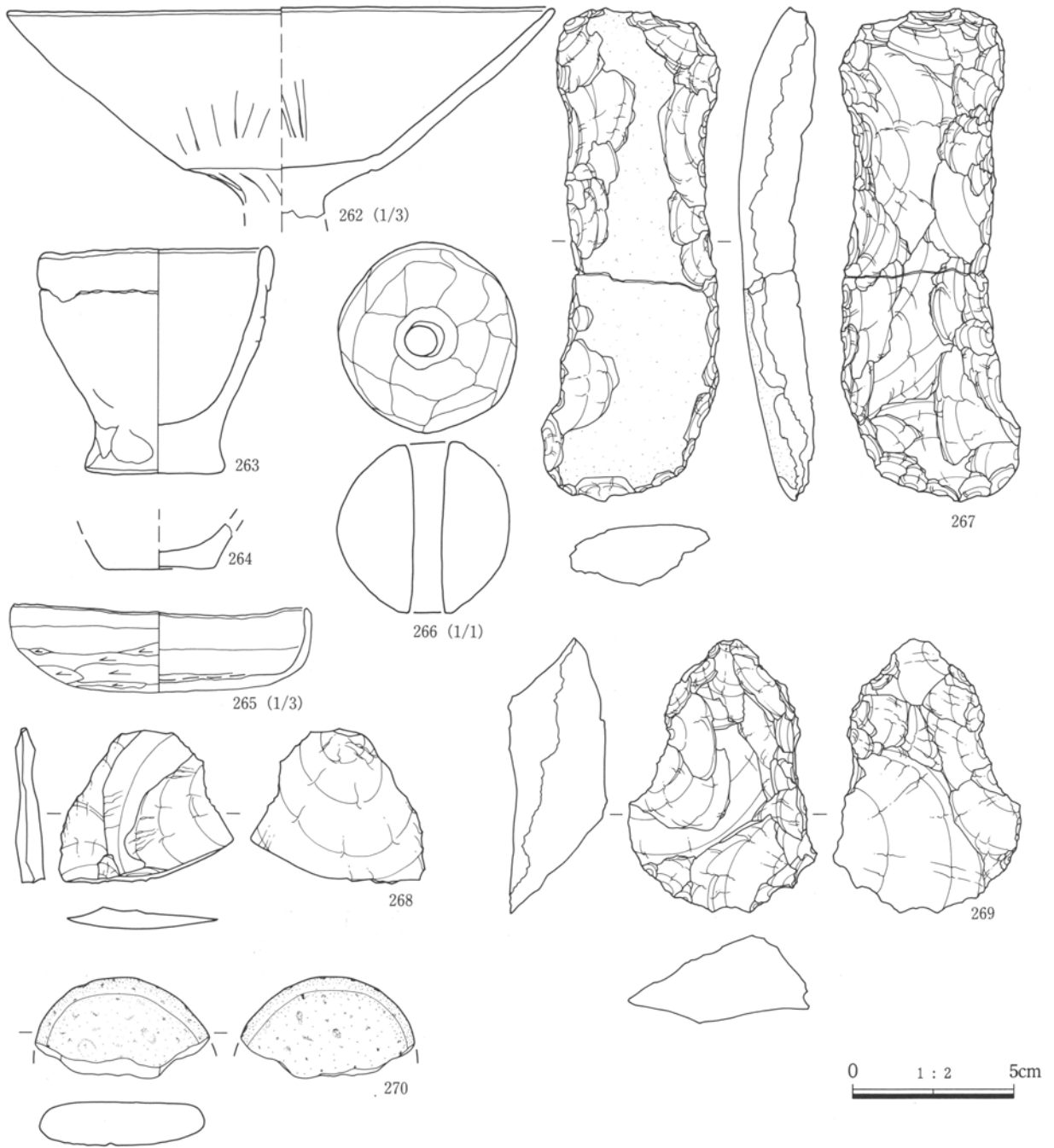


- 旧河道
- 1 黒褐色粘質土 FA、As-C多混。かたく締まる
  - 2 黒褐色粘質土 FA少混、As-C多混。
  - 3 暗灰色粘質土 植物繊維多混。As-C混相当
  - 4 灰褐色土 As-C混土
  - 5 As-C 水に流された痕跡
  - 6 As-C下暗褐色粘質土
  - 7 砂層
  - 8 灰褐色粘質土 やや砂質
  - 9 砂層
  - 10 暗灰色粘質土
  - 11 砂層
  - 12 黒色粘質土
  - 13 灰褐色粘質土
- 明灰色。ローム粒混入  
ローム粒混入  
やや砂質。ローム粒混入

第160図 D区旧河道



第161図 D区旧河道出土遺物(1)



第162図 D区旧河道出土遺物(2)

第4章 確認された遺構・遺物について

古墳時代遺構出土遺物観察表

挿図番号 PL番号	種別 器種	出土位置	度目(cm) 残存	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴
126図-5 PL.41	土師器 S字甕	48粘土(+12)、A区覆土	口14.5 底9.4 高26.7 ほぼ完形	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	胴張型。肩部に横ハケを施す。胴部外面煤付着、内面黒色。外面赤変。口縁部歪む。
126図-6 PL.41	土師器 S字甕	56(+34)・57・59粘土	口16.8 高<26.8> 3/4 台裾部欠損	良・浅黄橙 7.5YR 8/3・酸化	胴張型。肩部に横ハケを施す。胴部外面中に煤付着、内面胴下半部黒色。外面赤変。
126図-7 PL.41	土師器 S字甕	18粘土(+11)	口17.7 底10.8 高31.4 ほぼ完形	良・ぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	胴張型。肩部に横ハケを施す。外面胴下部と台部は煤が付着し、胴半部は赤変。
126図-8 PL.41	土師器 S字甕	10粘土(+1)、A区覆土	口17.8 底11.4 高31.7 ほぼ完形	良・灰白 2.5Y 7/1・酸化	肩張型。肩部に横ハケを施す。外面口縁部、胴部黒色。胴下半部に煤が付着。
126図-9 PL.41	土師器 S字甕	35粘土	口(17.4) 高<7.0> 口縁部片	良・灰白 10YR 8/2・酸化	肩部に横ハケを施す。内外面、磨滅。
127図-10 PL.41	土師器 S字甕	12粘土(+50)	口14.2 底9.3 高21.8 完形	良・ぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	胴張型。外面肩部、内面胴下半部に煤が付着。台部磨滅。
127図-11 PL.41	土師器 S字甕	58(+14)・39粘土	口(14.3) 高<20.0> 3/4 台裾部欠損	良・ぶい橙 7.5YR6/4・酸化	胴張型。胴部内外面黒色、外面の胴下部に煤が付着。
127図-12 PL.41	土師器 S字甕	35粘土(+34)	口(14.2) 高<17.5> 3/4 底～台部欠損	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	胴張型。内外面全体に磨滅著しい。口縁部、外面胴部は黒色。外面胴下部は灰変。
127図-13 PL.41	土師器 S字甕	29粘土(+26)	口14.7 高<21.5> 3/4 台裾部欠損	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	胴張型。外面胴部、内面底部は黒色。外面の一部に煤が付着。
127図-14 PL.42	土師器 S字甕	26粘土(+101)、作業道	口(15.2) 高<10.5> 口縁部片	良・ぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	口縁先端に面取りを意識した無で。外面肩部は黒色。
127図-15 PL.42	土師器 S字甕	34(+2)・30粘土	口16.6 高<10.3> 1/6 上半部	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	口縁先端は面取り加工が施される。内外面は磨滅する。
127図-16 PL.42	土師器 S字甕	58(+14)・21・39・63粘土	口14.8 底8.5 高25.3 ほぼ完形	良・ぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	胴張型。外面肩部に煤が付着、下半部は赤変。口縁部は黒色。
127図-17 PL.42	土師器 S字甕	55粘土、作業道	口14.8 高<12.8> 1/6 上半部	良・ぶい橙 7.5Y 7/4・酸化	口縁の形状は楕円形に近く歪んでいる。胴部は黒色。
127図-18 PL.42	土師器 S字甕	24粘土(+44)	口(15.8) 高<10.9> 口縁部片	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	外面胴部は黒色、口縁部は煤付着。
127図-19 PL.42	土師器 S字甕	37(+27)・45・57粘土	口16.5 高<6.9> 1/6 口縁部片	良・ぶい黄 2.5Y 6/3・酸化	外面肩部の一部がやや磨滅、口縁部に一部黒色。
127図-20 PL.42	土師器 S字甕	39粘土	口(16.1) 高<17.8> 1/6 胴下部～台部欠損	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	肩部に焼成後外部からの穿孔か。径は6mm。内外面は磨滅。
127図-21 PL.42	土師器 S字甕	16粘土	口(15.3) 高<17.5> 口縁～胴部片	良・灰黄 2.5Y 6/2・酸化	内外面煤付着、磨滅著しい。
127図-22 PL.42	土師器 S字甕	21粘土(+43)	口14.8 底9.0 高26.2 ほぼ完形	良・ぶい橙 7.5YR 7/3・酸化	胴張型。外面口縁部に煮こぼれ痕、胴部に煤が付着、下半部は赤変。内面胴部は黒色。
128図-23 PL.42	土師器 S字甕	39(+48)・16粘土	口15.3 底9.6 高26.5 完形	良・明黄褐 10YR 7/6・酸化	胴張型。肩部に焼成後外部から11×10mmの穿孔。外面胴下部に煤が付着。台部は磨滅。
128図-24 PL.42	土師器 S字甕	12(+17)・21・34・39・ 45粘土	口(16.4) 底(10.0) 高27.4 3/4	良・ぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	肩張型。口縁部に歪みあり。外面口縁部と胴部は黒色。台部は赤変。
128図-25 PL.42	土師器 S字甕	45粘土(+81)	口(14.4) 底<6.2> 高<21.0> 3/4 台裾部欠損	良・ぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	胴張型。台部欠損後も使用。外面口縁部と胴部、内面底部は黒色。外面下部は赤変。
128図-26 PL.42	土師器 S字甕	22粘土(+64)	口14.6 高<24.0> 3/4 台裾部欠損	良・ぶい橙 5YR 6/4・酸化	胴張型。肩部に焼成後外部から17×19mmの穿孔。外面胴部は黒色。内面下部黒色。
128図-27 PL.42	土師器 S字甕	26粘土(+108)	口15.2 高<23.2> ほぼ完形 台裾部欠損	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	肩張型。肩部に焼成後外部から42×3mm直線状の穿孔。外面口縁部と胴部に煤が付着。
128図-28 PL.43	土師器 S字甕	65粘土(+69)	口15.6 高<24.5> ほぼ完形 台裾部欠損	良・ぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	胴張型。外面胴部に煤が付着、内面胴部は黒色。外面の一部は赤変。
128図-29 PL.43	土師器 S字甕	62・61粘土、表採	口17.6 底10.7 高31.6 3/4	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	胴張型。外面胴部に煤が付着、赤変。内面下半部は磨滅。
128図-30 PL.43	土師器 S字甕	20・34・39粘土	口(16.9) 高<27.8> 3/4 台裾部欠損	良・灰白 2.5YR 8/2・酸化	胴張型。外面上半部に煤が付着、下半部は赤変。内面胴部は黒色。
129図-31 PL.43	土師器 S字甕	62・34・39・45・64粘土	口16.4 高<22.2> 1/4	良・黄橙 10YR 8/6・酸化	胴張型。外面口縁部、胴部と内面底部は黒色。一部磨滅。
129図-32 PL.43	土師器 S字甕	35粘土(+44)	口(16.8) 高<9.3> 1/6 口縁部片	良・ぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	外面肩部に煤が付着。内面肩部は黒色。
129図-33 PL.43	土師器 S字甕	41粘土(+42)	口(18.0) 高<5.3> 1/6 口縁部片	良・ぶい黄橙 10Y R7/2・酸化	口縁部は歪み著しい。内外面の一部は磨滅。外面口縁部の一部黒色。



第5節 古墳時代

挿図番号	種別 器種	出土位置	度目(cm) 残存	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴
129図-34 PL.43	土師器 S字甕	15(+48)・30粘土 A区覆土	口17.6 底10.6 高27.9 3/4	良・浅黄橙 10YR 8/4・酸化	胴張型。内外面胴部は黒色。外面下部は赤変。
129図-35 PL.43	土師器 S字甕	12(+8)・14粘土 A区覆土	口17.2 底10.0 高29.4 ほぼ完形	良・におい黄橙 10YR 7/2・酸化	胴張型。外面口縁部、胴部に煤が付着、下半部は赤変。内面胴部は黒色。口縁部は歪む。
129図-36 PL.43	土師器 S字甕	12粘土(+11) A区覆土	口19.4 底10.6 高30.6 ほぼ完形	良・灰白 10YR 7/1・酸化	胴張型。肩部に焼成後8×10mmの楕円形の穿孔。口縁部は歪む。外面胴部に煤が付着。
129図-37 PL.43	土師器 S字甕	12(+20)・1・8粘土 A区覆土	口19.6 底10.4 高31.1 ほぼ完形	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	胴張型。口縁部は歪む。外面口縁部に煮こぼれ痕、胴部に煤が付着。
130図-38 PL.43	土師器 S字甕	37粘土(+124)	口17.7 高<26.7> ほぼ完形、台裾部欠損	良・浅黄橙 7.5YR8/3・酸化	肩張型。外面胴下部は帯状に褐色。内面は一部剝離。
130図-39 PL.43	土師器 S字甕	15(+58)・45・56・57・59・ 62粘土、作業道	口(15.7) 高<26.0> 3/4 台裾部欠損	良・におい橙 5Y 7/4・酸化	胴張型。外面口縁部、胴部は黒色、胴下部は赤変し、磨滅。
130図-40 PL.44	土師器 S字甕	58(+14)・39粘土	口(16.5) 底9.6 高28.3 ほぼ完形	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	胴張型。口縁部は歪む。外面胴部に煤が付着。
130図-41 PL.44	土師器 S字甕	20粘土(+14)	口(19.6) 底(9.2) 高28.5 3/4	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	肩張型。外面口縁部、胴部は黒色、下半部は赤変。
130図-42 PL.44	土師器 S字甕	A区覆土	口17.6 底9.6 高28.6 完形	良・黄 2.5Y 8/4・酸化	肩張型。胴部と台部の中心軸にズレあり。外面胴部に煤が付着。
130図-43 PL.43	土師器 S字甕	29粘土(+25)	口17.0 高<23.2> 3/4 底～台部欠損	良・におい黄橙 10YR 7/3・酸化	胴張型。外面胴部に煤が付着。内面胴中位は黒色。
131図-44 PL.44	土師器 S字甕	48(+12)・1・30・45・46・ 57・62粘土、作業道	口18.2 高<20.7> 1/2 下半部欠損	良・浅黄橙 7.5YR 8/4・酸化	内外面胴部は黒色。
131図-45 PL.44	土師器 S字甕	23(+21)・14・20・21・31・ 36・41粘土	口(16.3) 高<17.5> 口縁部片	良・におい黄橙 10YR 7/3・酸化	外面口縁部は黒色。内外面胴部、一部黒色。
131図-46 PL.44	土師器 S字甕	35(+34)・1粘土 A区覆土	口16.5 高<25.8> 3/4 台裾部欠損	良・におい黄橙 10YR 7/4・酸化	胴張型。外面口縁部に煮こぼれ痕、胴部黒色、上半部は赤変。内面底部に焦げつき痕。
131図-47 PL.44	土師器 S字甕	65(+45)・63粘土	口15.6 高<15.2> 1/4 下半部欠損	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	外面胴部は黒色、磨滅。内面頸部には帯状に煮こぼれ痕。
131図-48 PL.44	土師器 S字甕	16・15粘土	口(16.0) 高<10.1> 口縁部片	良・灰黄 2.5Y 6/2・酸化	外面、一部褐色。内外面はやや磨滅。
131図-49 PL.44	土師器 S字甕	65粘土(+31)	口17.4 高<22.2> 1/2 下半部欠損	良・におい黄橙 酸化	外面口縁部、胴部中位に煤が付着。口縁部は歪む。
131図-50 PL.44	土師器 S字甕	35・44粘土 作業道、A区覆土	口17.2 高<19.8> 1/6	良・灰白 10YR 7/2・酸化	外面胴下部、黒色。
132図-51 PL.44	土師器 S字甕	49粘土(+13)	口(14.6) 高<22.5> 3/4 台裾部欠損	良・灰白 10YR 8/2・酸化	胴張型。口縁部は歪む。外面胴部の一部に煤が付着。内面の一部に焦げつき痕。
132図-52 PL.44	土師器 S字甕	36・19粘土 A区覆土	口(16.2) 高<23.3> 1/6	良・灰白 2.5Y 8/1・酸化	外面口縁部、胴部に煤が付着。
132図-53 PL.44	土師器 S字甕	41粘土(+42)	口(16.8) 底<6.2> 高<24.3> 3/4	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	肩張型。台部欠損後も使用。外面口縁部、胴部に煤が付着。
132図-54 PL.45	土師器 S字甕	30粘土(+5)	口17.2 高<26.0> 3/4 台裾部欠損	良・におい赤褐 5YR 4/3・酸化	胴張型。外面口縁部煮こぼれ痕か、胴部煤付着、台部赤変。内面は胴部黒色。
132図-55 PL.45	土師器 S字甕	30粘土	口18.9 底<7.2> 高<26.9> 3/4	良・灰白 5Y 8/2・酸化	肩張型。台部欠損後も使用。内外面胴部は黒色。外面台部は赤変。
132図-56 PL.45	土師器 S字甕	24(+43)・45粘土 A区覆土	口17.2 高<28.0> 1/2	良・淡黄 2.5Y 8/4・酸化	胴張型。外面胴部は黒色。台部は赤変。
133図-57 PL.45	土師器 S字甕	39・45・56・62粘土 作業道	口15.9 底10.4 高29.1 ほぼ完形	良・におい黄橙 10YR 6/4・酸化	胴張型。口縁部は歪む。胴部と台部の中心軸にズレあり。内外面胴部は黒色。
133図-58 PL.45	土師器 S字甕	1(+32)・41・44・55粘土 作業道	口16.9 高<27.2> 3/4	良・におい黄橙 10YR 7/3・酸化	胴張型。台部欠損後も使用か。外面胴部に煤が付着。
133図-59 PL.45	土師器 S字甕	23粘土(+21)	口17.4 底10.1 高30.8 ほぼ完形	良・におい黄橙 10YR 7/4・酸化	胴張型。外面口縁部に煮こぼれ痕、胴部に煤が付着。台部は赤変。
133図-60 PL.45	土師器 S字甕	30(+50)・42粘土 A区覆土	口(17.5) 底10.2 高32.9 ほぼ完形	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	肩張型。口縁部は歪む。内外面の一部は黒色。外面下半部は赤変。
133図-61 PL.45	土師器 S字甕	33・34・36・60・62・64・65粘 土	口(18.0) 高<28.3> 胴25.6 1/2	良・におい黄橙 10YR 7/4・酸化	胴張型。内外面胴部は黒色。外面下半部は赤変。
133図-62 PL.45	土師器 S字甕	53粘土	口(16.0) 高<24.4> 1/6 底～台部欠損	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	外面は赤変。内面上半部は黒色。
134図-63 PL.45	土師器 S字甕	25(+2)・60粘土	口20.8 高<28.9> 1/4 口縁部片、胴部片	良・浅黄橙 10YR 8/4・酸化	胴張型。外面胴部に煤が付着。

第4章 確認された遺構・遺物について

挿図番号	種別 器種	出土位置	度目(cm) 残存	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴
134図-64 PL.45	土師器 S字甕	26粘土(+101) 作業道、A区覆土	口21.4 高<29.4> 1/2 裾部欠損	良・明褐灰 7.5YR 7/2・酸化	胴張型。内面底部は剥離、磨滅する。
134図-65 PL.45	土師器 S字甕	15(+62)・4粘土	口(19.6) 高<24.0> 1/6 底～台部欠損	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	口唇部欠損する。外面胴部は赤変。
134図-66 PL.46	土師器 S字甕	49(+13)・35・48・65粘土 作業道	口20.3 高<30.5> 3/4 台裾部欠損	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	肩張型。外面胴部は黒色、赤変。
134図-67 PL.46	土師器 S字甕	48(+2)・35・41粘土	胴(25.2) 高<23.6> 胴部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	外面胴部に煤が付着、一部は赤変し、磨滅する。
134図-68 PL.46	土師器 S字甕	16・41粘土 A区覆土	口(17.9) 高<13.2> 口縁部片	良・酸化	口縁先端に面取りを意識した撫で。外面胴部は磨滅し、細かい輝割れ。
135図-69 PL.46	土師器 S字甕	1粘土(+66)	口(15.0) 高<4.5> 口縁部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	口縁下段が鋭角に外側へ張り出ている。
135図-70 PL.46	土師器 S字甕	6(+91)・30粘土	口(15.9) 高<3.5> 口縁部片	良・にぶい橙 7.5YR 6/4・酸化	内外面、磨滅。
135図-71 PL.46	土師器 S字甕	32粘土	口(14.2) 高<3.0> 口縁部片	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	内外面、磨滅。
135図-72 PL.46	土師器 S字甕	41・55粘土	口(15.3) 高<5.5> 口縁部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	内外面、磨滅。
135図-73 PL.46	土師器 S字甕	A区覆土	口(18.0) 高<4.6> 口縁部片	良・灰白 2.5Y 8/2・酸化	口縁先端に面取りを意識した撫で。
135図-74 PL.46	土師器 S字甕	A区覆土	口(17.6) 高<5.5> 口縁部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	内外面、磨滅。
135図-75 PL.46	土師器 S字甕	30粘土	口(16.4) 高<5.6> 口縁部片	良・灰白 10YR 8/2・酸化	内外面、磨滅。
135図-76 PL.46	土師器 S字甕	49粘土(+30)	口(18.0) 高<6.2> 口縁部片	良・黄灰 2.5Y 5/1・酸化	口縁下段が鋭角に外側へ張り出ている。
135図-77 PL.46	土師器 S字甕	35粘土 A区覆土	口(19.0) 高<8.1> 口縁部片	良・灰白 10YR 8/2・酸化	内外面、磨滅。
135図-78 PL.46	土師器 S字甕	60(+2)・32・57粘土	底10.0 高<22.0> 1/2 口縁部欠損	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	胴張型。胴部の中心軸にズレあり。
135図-79 PL.46	土師器 S字甕	作業道 A区覆土	底(10.2) 高<12.4> 1/5 胴下部～台部片	良・淡赤橙 2.5Y 7/4・酸化	内外面胴部は黒色。外面台部、赤変。
135図-80 PL.46	土師器 S字甕	30粘土(+5)	底10.2 高<9.1> 1/5 胴下部～台部片	良・浅黄 2.5Y 8/3・酸化	台部外面に黒斑。
135図-81 PL.46	土師器 S字甕	45・46・48粘土	底11.0 高<10.9> 1/4 胴下部～台部片	良・にぶい橙 5YR 7/3・酸化	内外面胴部は黒色。外面下部、赤変。
135図-82 PL.46	土師器 S字甕	53粘土	底11.0 高<6.5> 1/6 底部～台部片	良・灰白 10YR 8/2・酸化	底面中央にキレツあり。裾部、黒色。
135図-83 PL.46	土師器 S字甕	28(+93)・48粘土	底(10.2) 高<14.8> 1/4 胴下部～台部片	良・浅黄 2.5Y 7/3・酸化	外面胴部、煤付着。台部、灰変。
135図-84 PL.46	土師器 S字甕	1・35・44・48粘土	底10.8 高<15.8> 1/4 胴下部～台部片	良・灰白 2.5Y 8/2・酸化	外面胴部は黒色、台部赤変。内面胴部は一部黒色。磨滅。
135図-85 PL.46	土師器 S字甕	64粘土(+2) A区覆土	底9.6 高<20.2> 1/4 下半部	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	内外面胴部、煤付着。外面胴下部は赤変。
135図-86 PL.46	土師器 S字甕	1粘土	底10.0 高<22.2> 1/2 上半部欠損	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	外面胴部は煤付着。内面胴部は一部黒色。
136図-87 PL.47	土師器 S字甕	15粘土(+2)	高<14.6> 台頸4.6 胴～底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	内外面胴部、煤付着。
136図-88 PL.47	土師器 S字甕	15(+48)・17粘土	高<11.7> 台頸5.5 胴～底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	外面下半部は灰変、磨滅。
136図-89 PL.47	土師器 S字甕	A区覆土	高<13.5> 台頸5.3 胴～底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	内外面は黒色。
136図-90 PL.47	土師器 S字甕	44粘土(+2)	高<12.0> 台頸4.8 胴～底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	台部欠損後も使用か。外面下部は黒色、赤変する。内面に炭化物が付着。
136図-91 PL.47	土師器 S字甕	3(+7)・9粘土	高<21.5> 胴25.7 台頸5.9 1/2口・台部欠損	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	台部は人為的に打ち欠かれたか・欠損後も使用。外面胴部は煤付着。
136図-92 PL.47	土師器 S字甕	A区覆土、表採	高<16.5> 胴27.0 台頸6.0 胴～底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	外面胴部は黒色、磨滅。内面胴部、褐色。
136図-93 PL.47	土師器 S字甕	30粘土	高<13.8> 台頸6.1 胴～底部片	良・灰白 10YR 8/2・酸化	外面胴部、黒色。内面底部に炭化物が付着。

第5節 古墳時代

挿図番号	種別 器種	出土位置	度 目(cm) 残 存	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴
136図-94 PL.47	土師器 S字甕	60粘土(+88) A区覆土	高<20.6> 胴25.9 1/4 肩~胴下部片	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	外面胴部は黒色、下部赤変。
136図-95 PL.47	土師器 S字甕	40粘土(+2)	高<23.5> 胴28.0 台頸5.9 1/2 口縁・台裾部欠損	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	胴部に穿孔2箇所、7×5・10×10mm、焼成後に内側からか。内外面胴部は黒色。
137図-96 PL.47	土師器 S字甕	A区覆土	高<9.0> 台頸6.6 胴下部片	良・にぶい橙 7.5YR 7/4・酸化	外面胴下部は二次焼成により、帯状に剝離が甚だしい。内外面は黒色。
137図-97 PL.47	土師器 S字甕	9粘土(+35)	高<8.5> 台頸5.4 胴下~台部中位	良・灰白 10YR 8/2・酸化	台部欠損後も使用か。内外面胴部、黒色。
137図-98 PL.47	土師器 S字甕	8・16粘土	高<6.3> 台頸6.2 1/8 底~台部上半	良・にぶい橙 7.5YR 7/3・酸化	内外面の一部に黒色。
137図-99 PL.47	土師器 S字甕	62粘土	高<4.3> 台頸5.6 1/8 底~台部中位	良・浅黄 2.5Y 8/3・酸化	外面は灰変、磨滅。内面、黒色。
137図-100 PL.47	土師器 S字甕	30粘土 A区覆土	高<4.2> 台頸6.0 底~台部上半	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	内面は黒色。
137図-101 PL.47	土師器 S字甕	14粘土	高<5.6> 台頸5.2 底~台部中位	良・灰白 10YR 7/1・酸化	外面底部は成形後に胎土と同様の粘土を貼付、補強か。外面は、黒色、赤変。
137図-102 PL.47	土師器 S字甕	1粘土(+62)	高<4.6> 台頸5.2 底~台部上半	良・浅黄橙 7.5YR 8/3・酸化	断面は黒色。
137図-103 PL.47	土師器 S字甕	55粘土	高<4.4> 台頸5.5 底~台部中位	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	内面台部の天井は、黒色。ハケ目整形は整然と並んでいる。
137図-104 PL.47	土師器 S字甕	27・28粘土	高<2.2> 台頸6.0 底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	外面台部、やや磨滅。
137図-105 PL.47	土師器 S字甕	A区覆土	高<5.0> 底9.8 台部片	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	内外面は一部黒色。
137図-106 PL.47	土師器 S字甕	A区覆土	高<5.6> 底11.2 台部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	台径はやや大きく、器厚は薄い。
137図-107 PL.47	土師器 S字甕	48粘土	高<5.8> 底10.9 台部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/4・酸化	台部上位は器厚が薄い。
137図-108 PL.47	土師器 S字甕	48粘土	高<4.4> 底10.0 台部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	外面、磨滅。
137図-109 PL.47	土師器 S字甕	36粘土 A区覆土	高<4.6> 底(10.6) 台部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	外面は磨滅。内面にハケ目を施す。
137図-110 PL.47	土師器 S字甕	57粘土・作業道 A区覆土	高<4.1> 底(10.0) 台部片	良・浅黄 5Y 7/3・酸化	一部に燻し状に煤が付着する。外面は磨滅。
137図-111 PL.47	土師器 S字甕	A区覆土	高<2.8> 底<6.8> 台頸5.7 底~台部上半	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	台部欠損後も使用。内外面は磨滅する。
137図-112 PL.48	土師器 S字甕	7(+16)・21粘土	口15.6 底6.0 高26.0 ほぼ完形	良・にぶい黄橙 10YR 7/4・酸化	肩張型。台部はこの状態で焼成。口縁部歪む。底部との中心軸にズレ。外面胴部に煤付着。
137図-113 PL.48	土師器 S字甕	20(+66)・4・5・19・23・ 29・36・65粘土、A区覆土	口(16.6) 底6.0 高26.4 1/4	良・浅黄橙	胴張型。肩部に内側から7×5mmの穿孔。台部はこの状態で焼成か。内外面の一部、磨滅。
137図-114 PL.48	土師器 甕	7粘土 A区覆土	高<14.8> 胴20.5 3/4 口縁部欠損	良・にぶい赤褐 5YR 5/4・酸化	底面は丸底。残存部はほぼ球形を呈す。外面上半は煤付着。内面底部、黒色。
137図-115 PL.48	土師器 甕	29粘土(+68)	底5.0 胴18.3 1/3 口縁部欠損	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	底部はヘラケズリ、平底。内外面胴部は黒色。外面は赤変する。
138図-116 PL.48	土師器 手づくね	A区覆土	口(5.8) 底4.0 高5.3 3/4	良・にぶい黄橙 10YR 6/3・酸化	内外面下部から底面にかけて黒斑。平底。
138図-117 PL.48	土師器 甕	63粘土	口11.3 底2.8 高8.2 ほぼ完形	良・橙 5YR 6/6・酸化	全体に磨滅著しい。口縁部は歪み著しい。
138図-118 PL.48	土師器 甕	32粘土	口(9.5) 底3.8 高12.2 ほぼ完形	良・にぶい赤褐 5YR 5/4・酸化	底部はヘラケズリ、平底。外面胴部ハケ目の後、ヘラ削り。内外面胴部、黒色。
138図-119 PL.48	土師器 台付甕	7粘土	底(9.4) 台頸5.3 台部片	良・にぶい黄横 10YR 7/3・酸化	内外面ともに二次焼成のために磨滅著しい。外面の一部に剝離が認められる。
138図-120 PL.48	土師器 甕	作業道	口(18.0) 高<3.5> 口縁部片	良・にぶい橙 7.5YR 6/4・酸化	口縁部の外面は煤付着、内面は黒色。
138図-121 PL.48	土師器 台付甕	24(+33)・32・39・45・48・ 57・63粘土、作業道	口29.0 底12.4 高38.0 ほぼ完形	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	肩張型。口縁は歪み著しい。内外面ともに磨滅著しい。口縁内面に炭化物が付着する。
138図-122 PL.48	土師器 台付甕	48(+81)・62粘土	口25.0 高<32.7> 3/4 台部欠損	良・明黄褐 10YR 7/6・酸化	胴張型。台部と口縁部・胴部と中心軸のズレ。外面下半部黒色し、磨滅。内面頸部黒色。
138図-123 PL.48	土師器 台付甕	7粘土(+2)	口(32.0) 高<23.2> 上半部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	内外面ともに磨滅著しい。

第4章 確認された遺構・遺物について

挿図番号	種別器種	出土位置	度目(cm) 残存	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴
138図-124 PL.48	土師器 台付甕か	60粘土(+91)	口22.6 高<6.2> 口縁部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	内外面ともに横方向のヘラ撫で。121~123と同様の器種か。
138図-125 PL.48	土師器 甕	4・5粘土	口(16.8) 高<11.9> 上半部片	良・明赤褐 2.5YR 5/6・酸化	内外面にハケ目の後、口縁に横方向のヘラ撫で。外面胴部に煤付着、肩部の一部に剝離。
139図-126 PL.48	土師器 壺	10粘土(+21)	口17.9 底7.7 高28.1 完形	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	肩部に焼成後外部から12×9mmの穿孔。底部外面ヘラ削り。内面胴部に炭化物が付着する
139図-127 PL.48	土師器 甕	21粘土(+43)	口21.1 底7.9 高27.6 ほぼ完形	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	肩部に焼成後外部から25×15mmの穿孔。外面胴下部剝離、底面木葉痕。内外面磨滅著しい
139図-128 PL.48	土師器 甕	34粘土(+2)	口24.9 底6.6 高24.8 3/4	良・淡黄 2.5Y 8/4・酸化	底部外面にヘラ削り。頸部突帯の上下、2段にヘラ状工具による刺突を巡らす。
139図-129 PL.49	土師器 甕	13(+16)・6粘土 1住	口26.4 底10.0 高30.2 ほぼ完形	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	口縁に焼成後の打欠痕、他に3箇所。外面、磨滅。底部、周辺は回転伴なうヘラ削り。
139図-130 PL.49	土師器 甕	27粘土(+102)	口33.0 底7.8 高32.8 ほぼ完形	良・浅黄 5YR 8/4・酸化	底部外面は剝離。口縁外面の一部に煤が付着する。底部はやや丸底。

挿図・PL.	種別・器種	出土位置	残存	度目(cm)	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴
140図-131・49	軟質陶器焙烙	8粘土覆土	口縁部片	口(40.2)底(35.6)高5.0	良・黒5Y 2/1・還元	外面下部に剝離。
140図-132・49	陶器鉢	8粘土覆土	口縁部片	口(13.0)高<4.2>	良・淡黄色2.5Y 8/4	内外面に施釉、明黄褐。
140図-133・49	陶器碗	8粘土覆土	体部片	厚0.6高<4.3>	良・灰白2.5Y 7/1	内外面に施釉、黄褐・緑。
140図-134・49	軟質陶器火鉢	20粘土覆土	把手部	直径8.1厚0.9	良・にぶい褐7.5YR5/4・還元	大黒天をあしらう。粗雑。

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置	度目(cm) 残存	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴	備考
159図-198 PL.59	土師器 S字甕	D区11溝覆土 旧河道	口(16.0) 高<4.2> 口縁部片	良・黄灰 2.5Y 4/1・酸化	外面肩部に横ハケを施す。	
159図-199 PL.59	土師器 S字甕	D区11溝覆土 旧河道	口(17.0) 高<3.0> 口縁部片	良・灰黄褐 10YR 5/2・酸化	S字状口縁部は、緩やかなライン。	
159図-200 PL.59	土師器 S字甕	D区11溝覆土	厚0.4 口縁部片	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	口唇部は丸みを帯びる。磨滅気味。	
159図-201 PL.59	土師器 S字甕	D区11溝覆土	高<4.0> 台頸5.2 底部片	良・灰黄 2.5Y 6/2・酸化	胴下部は厚みを持つ。内外面、黒色。	
159図-202 PL.59	土師器 甕	D区11溝覆土	口(17.0) 高<3.1> 口縁部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/4・酸化	口縁部は、大きく外反する。	
159図-203 PL.59	土師器 甕	D区11溝覆土	高<3.9> 底(6.2) 底部片	良・灰黄 2.5Y 6/1・酸化	底部外面に木葉痕。内面は薄くハケ目が残る。	
159図-204 PL.59	弥生土器 壺	D区11溝覆土	厚0.6 口縁部片	良・にぶい黄橙 10YR 6/3・酸化	折り返し口縁。外面は磨滅著しい。内面はヘラ削り。	
159図-205 PL.59	弥生土器 壺	D区11溝覆土	厚0.5 肩部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	外面肩部に櫛描き波状文を3~4段か。内面肩部下位に横ハケ。	
159図-206 PL.59	土師器 小型甕	D区11溝覆土	高<2.6> 底(3.6) 底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	外面は磨滅著しい。底面の穿孔は直径13mm。	
159図-207 PL.59	土師器 高坏	D区11溝覆土	高<8.3> 脚頸(3.4) 1/4 坏底面~脚中位	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	全体に磨滅著しい。脚部中位に穿孔2箇所、下位に1箇所確認、直径10mm。	
159図-208 PL.59	土師器 高坏	D区11溝覆土	高<7.0> 脚頸(4.0) 坏底部~脚中位	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	全体に磨滅著しい。脚部中位に穿孔2箇所確認、径不明。	
159図-209 PL.59	土師器 高坏	D区11溝覆土	高<5.8> 底(14.0) 裾部片	良・にぶい褐 7.5YR 5/4・酸化	脚部中位に穿孔2箇所確認、直径15mm。	
159図-210 PL.59	土師器 高坏	D区11溝覆土	高<7.2> 脚頸(4.1) 脚部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	全体に磨滅著しい。坏部底面中央は窪んでいる。脚部中位に穿孔3箇所確認、直径11mm。	
159図-211 PL.59	土師器 高坏	D区11溝覆土	口(17.0) 高<6.1> 口縁部片	良・にぶい橙 7.5YR 7/4・酸化	外面は磨滅著しい。	
159図-212 PL.59	土師器 高坏	D区11溝覆土	口(13.0) 高<5.0> 坏部片	良・灰白 2.5Y 8/2・酸化	内外面ともに磨滅著しく、一部に剝離が認められる。	
159図-213 PL.59	土師器 高坏	D区11溝覆土	口(12.0) 高<4.3> 口縁部片	良・浅黄 2.5Y 7/3・酸化	内面はヨコ方向にヘラミガキ。外面、磨滅。	
159図-214 PL.59	土師器 高坏	D区11溝覆土	高<2.4> 底10.0 裾部片	良・灰白 2.5Y 8/2・酸化	内外面ともに磨滅著しい。穿孔2箇所確認、直径は14mmと10mm。	
159図-215 PL.59	土師器 器台	D区11溝覆土	口(8.4) 高<2.0> 坏部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	坏部中央に穿孔。径は10mm。	
159図-216 PL.59	土師器 器台	D区11溝覆土	口(7.0) 高<1.8> 1/2 坏部片	良・灰白 2.5Y 8/1・酸化	内外面ともに磨滅著しい。	

第5節 古墳時代

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置	度 目(cm) 残 存	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴	備考
159図-217 PL.59	土師器 坏	D区11溝覆土	口(11.0) 高3.1 1/3	良・明赤褐 5YR 5/6・酸化	内外面ともにやや磨滅。底部外面へラ削り。 外面口縁に横撫で。	8 C
159図-218 PL.59	土師器 坏	D区11溝覆土	口(11.0) 高2.8 1/4	良・橙 5YR 6/6・酸化	内外面ともに磨滅著しい。底部は扁平気味。	7 C末
161図-221 PL.60	土師器 壺	旧河道X306-Y 497G(+70)	口(15.0) 高<4.4> 口縁部片	良・灰白 2.5Y 8/2・酸化	折り返し口縁、一部剝離。外面磨滅著しい。	
161図-222 PL.60	土師器 壺	旧河道 D区11溝覆土	口(15.0) 高<2.9> 口縁部片	良・灰 5Y 6/1・酸化	内外面ともに磨滅著しい。折り返し口縁。 口縁内面に薄く横ハケ。内外面肩部に横ハケ。	
161図-223 PL.60	土師器 壺	旧河道 X330-Y490G	口(15.3) 高<6.5> 口縁部片	良・にぶい橙 7.5YR 7/3・酸化	口縁部は大きく外反。内面は磨滅著しい。	
161図-224 PL.60	土師器 壺	旧河道 X333-Y487G	高<4.6> 底(9.4) 底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	底部外面に木葉痕。	
161図-225 PL.60	土師器 壺	旧河道X305-Y 491G(+37)	高<4.6> 底(9.0) 底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	外部胴部はやや磨滅。底部外面はへラ削り、 一部に剝離が認められる。	
161図-226 PL.60	土師器 壺	旧河道X324-Y 496G(+83)	高<2.9> 底(7.7) 底部片	良・にぶい黄橙 10YR 6/4・酸化	内外面ともにやや磨滅。底部外面はへラ削り。	
161図-227 PL.60	土師器 甕	旧河道覆土	高<2.1> 底(5.6) 底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/4・酸化	内面は磨滅著しい。 底部外面へラ削り。	
161図-228 PL.60	土師器 甕	旧河道 X305-Y483G	高<3.2> 底(8.1) 底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/4・酸化	内外面ともに磨滅著しい。底部外面へラ削り	
161図-229 PL.60	土師器 甕	旧河道X306-Y 492G(+80)	高<2.0> 底(5.7) 底部片	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	内外面ともに磨滅著しい。底部外面はへラ削り。	
161図-230 PL.60	土師器 甕	旧河道 X316-Y493G	高<3.5> 底(7.3) 底部片	良・浅黄橙 10YR 8/4・酸化	内外面ともに磨滅著しい。底部内面の一部 に剝離が認められる。	
161図-231 PL.60	土師器 甕	旧河道 D区11溝覆土	高<4.0> 底(6.8) 底部片	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	内外面ともに磨滅著しい。底面中央の器厚 は薄い。	
161図-232 PL.60	土師器 甕	旧河道覆土	高<2.7> 底(4.8) 底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	底部外面は剝離著しい。内面は全体に焼成 時の不完全燃焼で黒色。	
161図-233 PL.60	土師器 甕	旧河道覆土	高<3.3> 底(3.0) 台頸4.8 底部片	良・にぶい橙 7.5YR 6/4・酸化	内面は磨滅著しい。底部外面へラ削り。	
161図-234 PL.60	土師器 S字甕	旧河道X326-Y 494G(+46)	口17.3 高<23.2> 3/4 台部欠損	良・灰黄 2.5Y 6/2・酸化	胴張型。内外面胴部は黒色。肩部に煤付着。	
161図-235 PL.60	土師器 S字甕	旧河道覆土	口(8.0) 高<4.2> 口縁部片	良・淡黄 2.5Y 8/4・酸化	内外面、やや磨滅。	
161図-236 PL.60	土師器 S字甕	旧河道覆土	口(16.0) 高<4.0> 口縁部片	良・淡黄 5Y 8/3・酸化	S字状口縁部は、緩やかなライン。	
161図-237 PL.60	土師器 S字甕	旧河道X305-Y 493G(+64)	高<6.5> 底9.2 台部片	良・にぶい橙 5YR 7/4・酸化	内外面、やや磨滅。	
161図-238 PL.60	土師器 S字甕	旧河道X329-Y 494G(+55)	高<6.3> 底8.4 台部片	良・明黄褐 10YR 7/6・酸化	台部野器高は低く、端部の折り返しは、不 明瞭。	
161図-239 PL.60	土師器 S字甕	旧河道 X325-Y490G	高<3.8> 台頸4.4 台部片	良・にぶい橙 7.5YR 7/3・酸化	内外面、やや磨滅。	
161図-240 PL.60	土師器 S字甕	旧河道 X325-Y495G	高<6.6> 底(10.0) 台部片	良・にぶい黄橙 10YR 6/3・酸化	器厚は、やや薄い。内外面、磨滅する。	
161図-241 PL.60	土師器 台付甕	旧河道 X338-Y492G	高<7.1> 底(9.6) 台部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	端部は平らで、安定がある。内外面、やや 磨滅。	
161図-242 PL.60	土師器 台付甕	旧河道覆土	高<4.7> 底(6.8) 台部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	内外面、磨滅。	
161図-243 PL.60	土師器 台付甕	旧河道X327-Y 494G(+33)	高<5.5> 底(7.8) 脚部片	良・灰白 5Y 8/2・酸化	内外面、やや磨滅。	
161図-244 PL.60	土師器 S字甕	旧河道X306-Y 493G(+65)	高<5.9> 底7.4 台部片	良・橙 5YR 7/6・酸化	台部は器高が低く、端部は広がらない。外 面ハケ目の沈線は、やや広い。	
161図-245 PL.60	土師器 台付甕	旧河道 X316-Y494G	高<4.5> 底(7.8) 台部片	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	台部の器高は低い。端部は平らで安定する。	
161図-246 PL.60	縄文土器 深文鉢	旧河道 X300-Y495G	厚0.7 口縁部片	良・灰白 2.5Y 8/2・酸化	口縁部はやや内傾する。外面上部は2段の 折り返し口縁。内外面ともに磨滅。	
161図-247 PL.60	弥生土器 壺	旧河道 X329-Y491G 他	厚0.5 肩部片	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	外面頸部に簾状文、肩部に約6段の波状文。 外面、黒色。	
161図-248 PL.60	土師器 小型甕	旧河道覆土	口(7.6) 高<5.2> 口縁部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	内外面、磨滅。	

第4章 確認された遺構・遺物について

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置	度目 残存 (cm)	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴	備考
161図-249 PL.60	土師器 小型甕	旧河道 X305-Y495G	口(10.2) 高<3.9> 口縁部片	良・灰白 10YR 8/1・酸化	全体に磨滅著しい。	
161図-250 PL.60	土師器 小型甕	旧河道 X331-Y491G	高<8.6> 底3.2 口縁部欠損	良・灰白 2.5Y 8/2・酸化	外面やや磨滅。底部外面へラ削り。	
161図-251 PL.60	土師器 小型甕	旧河道 X300-Y485G	高<7.1> 底(4.0) 肩部、底部片	良・にぶい黄橙 10YR 6/4・酸化	平底。口縁部の立ちあがりは直線的。	
161図-252 PL.60	土師器 坏	旧河道 X300-Y495G	口(11.2) 底(6.2) 高4.8 1/4	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	内外面ともに磨滅著しい。底部外面はへラ削り。	
161図-253 PL.60	土師器 小型甕	旧河道 X321-Y486G	高<2.7> 底(4.0) 底部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	全体に磨滅著しい。底部外面はへラ削り。	
161図-254 PL.61	土師器 器台	旧河道X331-Y 497G(+59)他	口6.7 底15.6 高7.2 ほぼ完形	良・にぶい黄橙 10YR 7/4・酸化	器台部内外面ともに磨滅。脚部に穿孔、4箇所ずつ2段に8個、直径10mm。	
161図-255 PL.61	土師器 高坏	旧河道 X306-Y485G	高<5.1> 底(8.7) 坏底部～裾部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	脚部中位に穿孔3箇所、うち1個は焼成後の穿孔で直径3mm。焼成前の2個は径不明。	
161図-256 PL.61	土師器 器台	旧河道覆土	口7.0 高<7.0> 1/2	良・灰白 7.5YR 8/2・酸化	底面～台部は長さ3.8cmに及び、直径1.6cmの穿孔。	
161図-257 PL.61	土師器 器台	旧河道 X322-Y489G	高<4.3> 1/4 坏底～脚部中位	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	全体に磨滅著しい。台部底面中央に長さ2.2cm穿孔、直径8mm。	
161図-258 PL.61	土師器 高坏	旧河道 X336-Y487G	高<4.7> 厚0.7 1/3 脚部片	良・明赤褐 2.5YR 5/8・酸化	全体に磨滅著しい。脚部中位に穿孔3箇所、直径13mm。	
161図-259 PL.61	土師器 高坏	旧河道 X322-Y489G	高<6.5> 底(9.8) 1/4 坏底～裾部	良・浅黄橙 10YR 8/3・酸化	全体に磨滅著しい。脚部中位に穿孔3箇所確認、直径10mm。	
161図-260 PL.61	土師器 高坏	旧河道X305-Y 490G(+17)	高<6.8> 底(12.6) 1/2 脚部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	内外面ともに磨滅。脚部中央に穿孔3箇所確認、直径9mm。	
161図-261 PL.61	土師器 高坏	旧河道覆土	坏部(12.0) 高<4.4> 坏部片	良・灰白 2.5Y 8/2・酸化	全体に磨滅著しい。口縁部に穿孔、径は不明。	
162図-262 PL.61	土師器 高坏	旧河道X307-Y 492G(+14)他	口(25.4) 高<9.8> 坏部片	良・にぶい黄橙 10YR 7/4・酸化	内外面ともに磨滅著しい。	
162図-263 PL.61	土師器 手づくね	旧河道覆土	口7.3 底4.3 高7.1 1/2	良・浅黄 2.5Y 7/2・酸化	形状は歪んでいる。外部側面に大きく黒斑。	
162図-264 PL.61	土師器 手づくね	旧河道覆土	高<1.4> 底3.6 底部片	良・灰白 2.5Y 8/2・酸化	全体に磨滅著しい。	
162図-265 PL.61	土師器 坏	旧河道X327-Y 492G(+4) 11溝	口14.0 高4.0 ほぼ完形	良・橙 5YR 6/6・酸化	底部外面はへラ削り。底部内面は剥離著しい。口縁内外面に横撫で。	
162図-266 PL.61	土製品 丸玉	旧河道 X310-Y495G	長2.2 径2.7 完形	良・にぶい黄橙 10YR 6/3・酸化	外面に黒斑。	

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目 (cm)	木取り 樹種	加工形状の特徴	備考
141図-140 PL.50	木製品 掘り棒	10粘土(+8) 上半部の一部	長19.8 幅3.6 厚2.7	割材 クヌギ節	両端を欠損。太さから上半部と考えられる。	
141図-141 PL.50	木製品 掘り棒	24粘土(+30) 軸～身の破片	長33.1 幅4.7 厚2.6	板目 クヌギ節	軸部の先端は腐る。肩口は「ハ」の字状に削り出される。	
141図-142 PL.50	木製品 掘り棒	24粘土(+30) 軸の上部欠損	長43.7 幅5.8 厚3.6	柁目 クヌギ節	肩口は「ハ」の字状に削り出される。下端は斜めに削り出される。	3分割
141図-143 PL.50	木製品 掘り棒	24粘土(+7) 下部欠損	長44.0 幅4.5 厚3.5	板目 クヌギ節	肩口「ハ」の字状に削り出される。身の部分の下部は腐りにより欠損。	4分割
141図-144 PL.50	木製品 掘り棒	12粘土(+3) 完存	長60.2 幅4.4 厚3.2	板目 クヌギ節	軸部の中央に丸み有り。身の部分は表裏2面から、下端は斜めに削り出し。	
141図-145 PL.50	木製品 掘り棒	24粘土(+3) 下部欠損	長69.5 幅5.2 厚5.0	板目 コナラ節	軸部の断面は円形。身の部分の断面は方形。中央部、身の部分の先端は腐る。	
141図-146 PL.50	木製品 掘り棒	25粘土(+5) 両端部欠損	長53.1 幅5.3 厚2.8	板目 クヌギ節	軸部の断面は蒲鉾状を呈す。肩口「ハ」の字状に削り出される。側面の最厚部分に段差。	
141図-147 PL.50	木製品 掘り棒	28粘土(+10) 完存	長56.9 幅6.1 厚3.2	板目 クヌギ節	肩口に片面のみ段差あり、軸部と身の部分が区別される。下端が斜めに削り落とされる。	
142図-148 PL.50	木製品 掘り棒	33粘土(+2) ほぼ形状残す	長61.3 幅5.8 厚4.0	板目 コナラ節	全体に痩せ。上半部は腐り。土圧により緩く「く」の字状に折れる。	
142図-149 PL.51	木製品 掘り棒	34粘土(+10) 完存	長59.3 幅7.5 厚3.5	板目 コナラ節	軸部は握り部まで削りにより丸く仕上げる。身の部分は裂け面を利用して下端は面取り。	
142図-150 PL.51	木製品 掘り棒	34粘土(+7) 完存	長56.5 幅4.6 厚2.6	板目 コナラ節	全体に腐りが入り削りとは不明瞭。肩口「ハ」の字状に削り出される。下端丸みをおびる。	

第5節 古墳時代

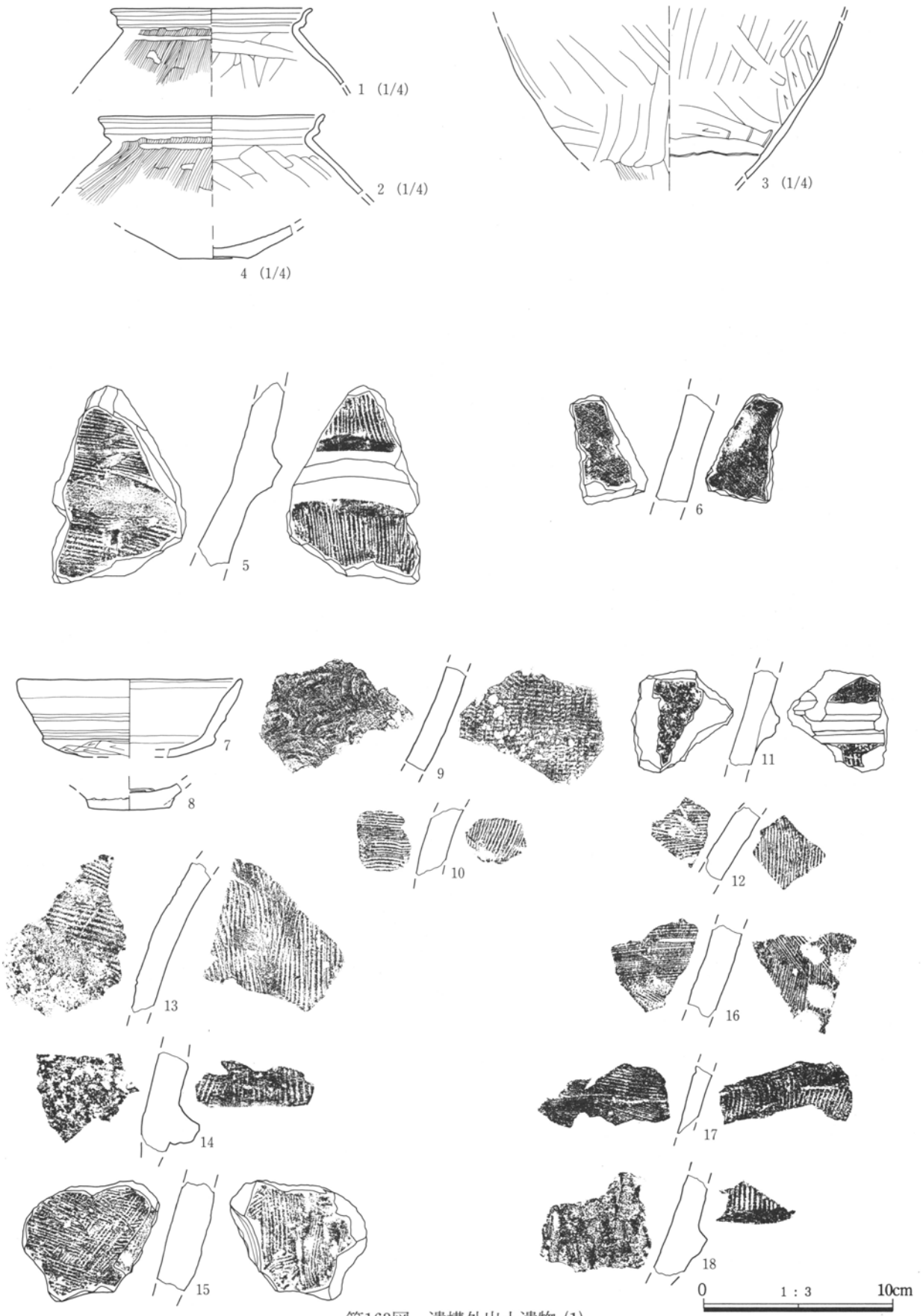
挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)	木取り 樹種	加工形状の特徴	備考
142図-151 PL.51	木製品 掘り棒	34粘土(+15) 完存	長61.5 幅5.1 厚4.0	柾目 コナラ節	軸部は裂け面から稜を削り込んで仕上げる。 身の部分は裂け面を利用して下端部に削り。	
142図-152 PL.51	木製品 掘り棒	34粘土(+20) 上半部の一部	長28.0 幅3.9 厚1.8	板目 コナラ節	両端欠損。側面は痩せ。太さから上半部と考えられる。	
142図-153 PL.51	木製品 掘り棒	35粘土(+1) 上半部の一部	長18.6 幅4.4 厚4.2	有芯材 フジキカ	上端部から側面にかけて埋没時に腐る。 下端部は調査時の欠損か。削りが認められる	
142図-154 PL.51	木製品 掘り棒	44粘土(+18) 下端の一部	長26.6 幅3.6 厚2.2	板目 コナラ節	一方の端部が鋭利に尖る。加工か埋没時に痩せたのかは不明。	
142図-155 PL.51	木製品 掘り棒	61粘土(+17) 上半部の一部	長23.6 幅3.1 厚2.8	有芯材 クスギ節	両端欠損。自然木をそのまま利用したと考えられる。	
142図-156 PL.51	木製品 掘り棒	55粘土(+34) ほぼ完存	長55.3 幅2.8~2.6 厚2.8	板目 クスギ節	軸部上端欠損。握り略八角形の削り出し。中央部略円形。下端山形、両側からの削り出し	2分割
143図-157 PL.51	木製品 掘り棒	39粘土(+20) 完存	長59.3 幅3.7 厚3.2	板目 アカガシ亜属	表裏下端部に強い削りが認められる。端面は摩耗している。	
143図-158 PL.51	木製品 掘り棒	39粘土(+14) 完存	長57.8 幅4.6 厚3.1	板目 クスギ節	身の部分の表裏に大きく削りを入れ、両側面を調整してやや扁平に仕上げる。	
143図-159 PL.52	木製品 掘り棒	39粘土(+36) ほぼ完存	長56.0 幅2.8~5.0 厚2.4~3.8	有芯材 ヤマグワ	上下両端を除いて加工痕無し。使用による潰れも無し。表面は炭化している。	4分割
143図-160 PL.52	木製品 掘り棒	39粘土(+32) 完存	長68.5 幅6.2 厚3.4	板目 クスギ節	肩口「ハ」の字状に削り出される。下端が斜めに削り落とされる。	
143図-161 PL.52	木製品 掘り棒	39粘土(+13) 下端の一部	長16.0 幅3.65 厚2.9	板目 クスギ節	上部は腐る。破損後に埋没か。表裏は削り不明瞭で、裂け面に近いままか。下端部は摩耗	
143図-162 PL.52	木製品 掘り棒	59粘土(+33) 上半部の一部	長38.3 径3.0	板目 ムクロジ	全体に痩せ。下端は欠損。	
143図-163 PL.52	木製品 掘り棒	39粘土(+13) 下部欠損	長49.1 径3.4	柾目 クスギ節	中央部に痩せ。軸部の断面は方形。身の部分の断面は円形。	
144図-164 PL.52	木製品 一木鋤	12粘土(+5) 軸の先端欠損	長63.3 幅2.9~7.1 厚1.0~3.4	柾目 アカガシ亜属	身は權状を呈す。軸部の先端を欠損。刃部は片刃仕様である。農具の転用か。	
144図-165 PL.52	木製品 一木鋤	12粘土(+20) 刃の一部	長20.0 幅7.6 厚0.9	矩柾 アカガシ亜属	刃部は片刃仕様である。裏面は平滑状を呈す 断面は蒲鉾状を呈す。	
144図-166 PL.53	木製品 鋤の柄	46粘土底部付近 握りの一部	長9.5 幅3.0 厚2.2	柾目 クスギ節	側面に面取り加工が施される。	
144図-167 PL.53	木製品 一木鋤	24粘土(+31) 柄の一部	長25.6 幅7.0 厚2.5	柾目 クスギ節	握りの部分と軸の部分とに割れる。	2分割
144図-168 PL.53	木製品 一木鋤	25粘土(+10) 柄の一部	長46.2 幅2.8 厚2.5	柾目 クスギ節	握りの側縁部は面取り。軸部は丸く削り出される。先端腐り、本来破損していたものか。	
145図-169 PL.53	木製品 鋤の柄	64粘土(+28) 柄~軸部	長61.0 幅2.4~9.0 厚2.4	柾目 アカガシ亜属	握りの側面は面取り加工が施される。	
145図-170 PL.53	木製品 鋤の柄	55粘土(+12) 握りの1/2	長13.0 幅6.0 厚2.2	柾目 クスギ節	一木仕上げ。	
145図-171 PL.52	木製品 緯打具	64粘土(+28) ほぼ完存	長31.7 幅2.3 厚1.8	柾目 アカガシ亜属	中央部は腐る。両端部に結締痕残存。	
145図-172 PL.53	木製品 一木鋤	55粘土(+118) 鋤先の1/2	長19.2 幅7.8 厚2.0	柾目 アカガシ	鋤身の一部先端部欠損。	
145図-173 PL.53	木製品 一木鋤	36粘土(+11) 鋤先部	長27.5 幅18.0 厚1.2~2.0	柾目 クスギ節	表裏ともほぼ一様の厚さで平滑に仕上げられる。	
146図-174 PL.54	木製品 膝柄	23粘土(+31) ほぼ完存	長64.0	有芯材 クリ	斧台裏面と漆柄に緊縛痕が残る。自然木の枝部分をそのまま使用。	傷み激しい
146図-175 PL.54	木製品 直柄	39粘土(+15) 完存	長73.3 幅2.9~4.8 厚2.5	柾目 ケヤキ	板状鉄斧着装と推定。軸部は上半がやや方形 下半は均整のとれた楕円形。入念な仕上げ。	2分割
147図-176 PL.54	木製品 梯子	8粘土(+10) 破片	長79.0 幅16.0 厚14.5	柾目 コナラ節	両端を欠損。一部炭化している。	傷み激しい
147図-177 PL.54	木製品 梯子	45粘土(+16) 破片	長49.7 幅11.8 厚4.6	柾目 ケヤキ	2段の踏み面が残存する。厚さ4cm前後の板の 木端面に切り込みをもつ。	
147図-178 PL.55	木製品 梯子	50粘土(+8) 2/3	長196.0 幅23.0 厚2.8~9.0	柾目 コナラ節	上端の一部と下半欠損。6段の踏み面が残存する。	傷み激しい
148図-179 PL.55	木製品 盆	36粘土(+17) 1/2	長73.0 幅11.6~17 厚1.4~6.0	矩柾 カエデ属	平面は長方形。4箇所に脚が付く大皿。明瞭な稜線 で内外面ともに整形されている。	
149図-180 PL.56	木製品 厚板	8粘土(+60) 1/2	長93.8 幅14.1 厚4.0	板目 クスギ節	両端部に潰れあり。	

第4章 確認された遺構・遺物について

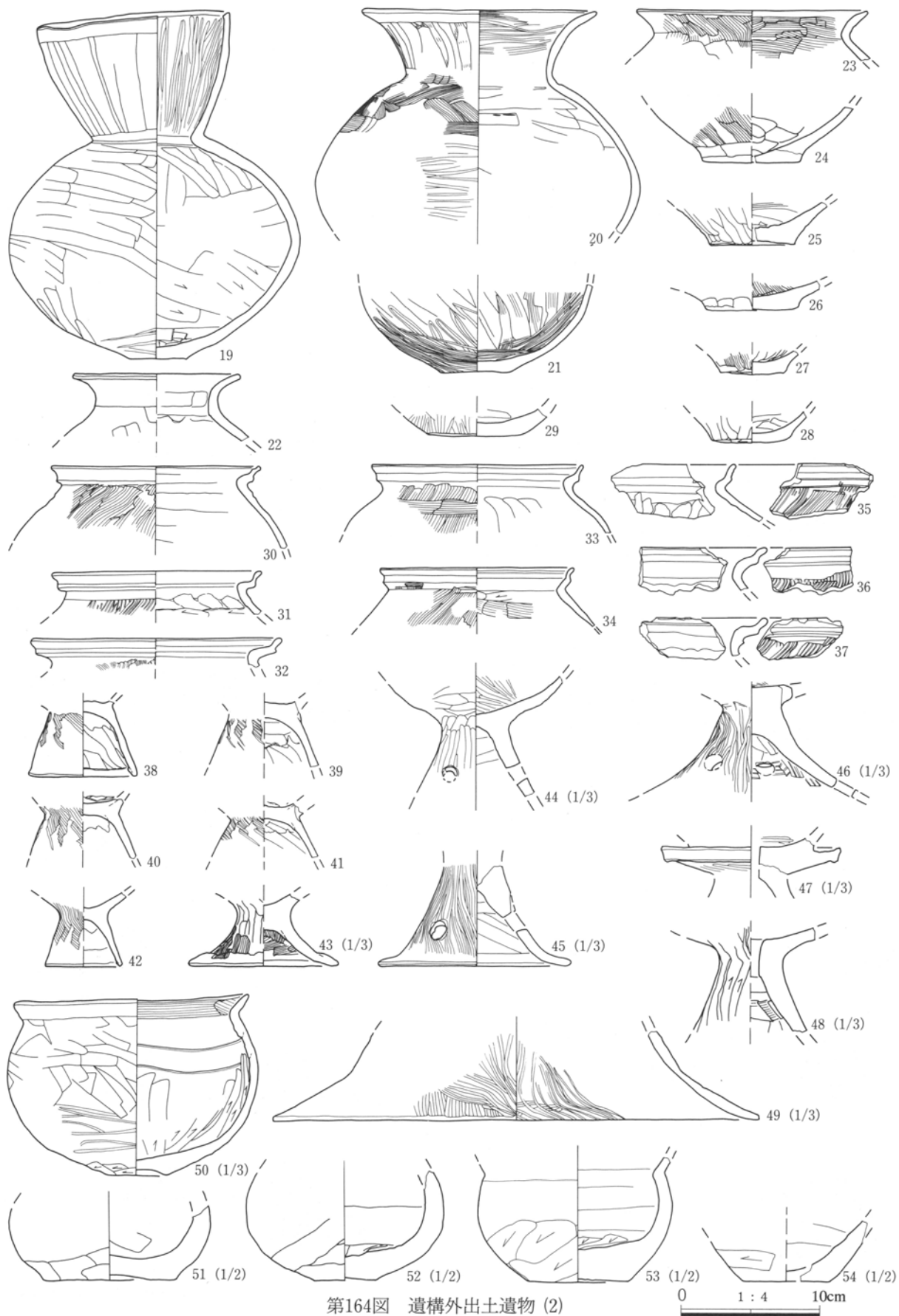
挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)	木取り 樹種	加工形状の特徴	備考
149図-181 PL.56	木製品 板材	10粘土(-2) 1/2	長115.0 幅15.0 厚5.2	柁 クヌギ節	上端部欠損。上端から中央にかけて痩せ。下端にL形の切りこみあり。	
149図-182 PL.56	木製品 板材	21粘土(+3) ほぼ完存	長140.2 幅20.8 厚2.6	矩 ムクロジ	板壁を転用。柄杓から蹴離し材とも考えられる。表面に弧状のスレがある。	他に小破片2
149図-183 PL.56	木製品 板材	21粘土(+52) 破片	長48.0 幅15.0 厚2.5	柁 コナラ節	全体に磨滅。表裏とも痩せて木目が瘤状に浮き出る。鋤身の可能性あり。	3分割
149図-184 PL.56	木製品 厚板	21粘土(+48) 破片	長54.0 幅24.0 厚8.5	板 コナラ節	両側面は分割時の裂け面が残存。下端木口面は平坦に削り出し。削りは下方向へ規則的。	
150図-185 PL.57	木製品 厚板	33粘土(+15) 1/2	長98.4 幅17.6 厚8.0	板 コナラ節	上半部は痩せ。芯側を表にし緩い弧を描く。	
150図-186 PL.57	木製品 厚板	39粘土(+15) 破片	長41.0 幅17.5 厚5.0	板 コナラ節	緩く窪み、井戸枠のような厚さと形状。ハツリ方向からさらに上方へ伸びると予想される	
150図-187 PL.57	木製品 板材	59粘土(+17) ほぼ完存	長91.4 幅20.0 厚3.5	板 コナラ節	板壁を転用。左側端に3つの柄杓、右中央にV字形の切りこみ。	真ん中輝割れ
150図-188 PL.57	木製品 板材	41粘土(+19) 破片	長61.4 幅13.0 厚2.9	柁 クヌギ節	上下両端、一方の側端が腐りおよび欠損。	2分割
150図-189 PL.56	木製品 板材	41粘土(+52) 2/3	長136.6 幅22.2 厚6.6	板 コナラ節	腐りや裂けが著しい。	
151図-190 PL.57	木製品 板材	62粘土(+15) ほぼ完存	長201.6 幅18.6 厚4.0	柁 ハンノキ節	両側面は一部欠損。側面は緩く弧状を呈す。上端表面に、アタリ痕。	他に小破片1
151図-191 PL.58	木製品 厚板	64粘土(+6) 1/2	長131.4 幅40.2 厚4.6	柁 ハンノキ節	両端欠損、両側面はイキ。側面は緩く弧状を呈す。	他に小破片2
152図-192 PL.58	木製品 角材	31粘土(+1) 上端部欠損	長28.8 幅6.8 厚5.1	板 コナラ節	下方に向けて僅かに幅広くなる。下端部に削りあり	
152図-193 PL.58	木製品 角材	45粘土(+2) 2/3	長56.7 幅12.6 厚5.1	板 サクラ属	上端炭化。下端は弧状に削り出される。芯側は裂け面のまま、残る2面は削りが見られる。	先端焼け
152図-194 PL.58	木製品 杭	21粘土(+10) 先端欠損	長93.0 幅8.8 厚8.4	有芯材 コナラ節	先端部より50cm程度が直幹状を呈す。先端部は押し潰れたようである。	他に小破片1
152図-195 PL.58	木製品 杭	21粘土(+1) ほぼ完存	長88.2 幅6.6 厚6.5	有芯材 クヌギ節	「く」の字に折れ曲がる太枝。先端部は片面のみ削られたようである。	他に小破片1
152図-196 PL.58	木製品 杭	35粘土(-4) 3/4	長85.7 幅13.3 厚8.0	半割材 コナラ節	上端部は炭化。下部は埋没中の痩せ。乾燥して筋状に亀裂が入り変形する。	
152図-197 PL.58	木製品 杭	35粘土(+7) 3/4	(1)長69.2 幅10.5 厚4.2 (2)長72.2 幅8.0 厚3.0 (3)長63.0 幅9.8 厚4.7	割材 コナラ節	直径10cm強の材を半裁した杭。腐りや裂けが著しい。	3分割

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度量目(cm)・ 重量(g)	石質	備考
140図-135 PL.49	石製品 砥石	4・5粘土覆土 1/4	長5.8 短<4.2> 厚4.7 重187.0	流紋岩	4面使用。表、右面を多用。
140図-136 PL.49	石製品 砥石	10粘土覆土 ほぼ完形	長<7.0> 短4.2 厚2.1 重114.6	流紋岩	表、裏、左使用。表裏多用。
140図-137 PL.49	石製品 破片	16粘土覆土 破片	長12.1 短9.0 厚5.0 重518.3	デイサイト	
140図-138 PL.49	石器 スクレイパー	3粘土覆土 完形	長8.5 短8.4 厚3.6 重342.9	黒色頁岩	
140図-139 PL.49	石器 刮片	8粘土覆土 完形	長7.9 短4.0 厚1.1 重35.2	珪質頁岩	
159図-219 PL.59	石器 鏃	D区11溝覆土 完形	長2.1 短1.6 厚0.5 重1.52	黒曜石	
159図-220 PL.59	石器 鏃	D区11溝覆土 完形	長8.5 短7.8 厚2.9 重173.5	黒色頁岩	スクレイパーかコア
162図-267 PL.61	石器 打斧	旧河道X309-Y 482G ほぼ完形	長15.2 短5.5 厚1.9 重213.5	デイサイト	
162図-268 PL.61	石器 刮片	旧河道覆土 完形	長5.4 短4.6 厚0.8 重16.4	黒色頁岩	
162図-269 PL.61	石器 スクレイパー	旧河道覆土 完形	長8.4 短5.8 厚3.0 重129.7	珪質頁岩	
162図-270 PL.61	石器 すり石	旧河道X335-Y 488G 1/3	長<8.1> 短<4.5> 厚2.0 重94.1	粗粒輝石安山岩	

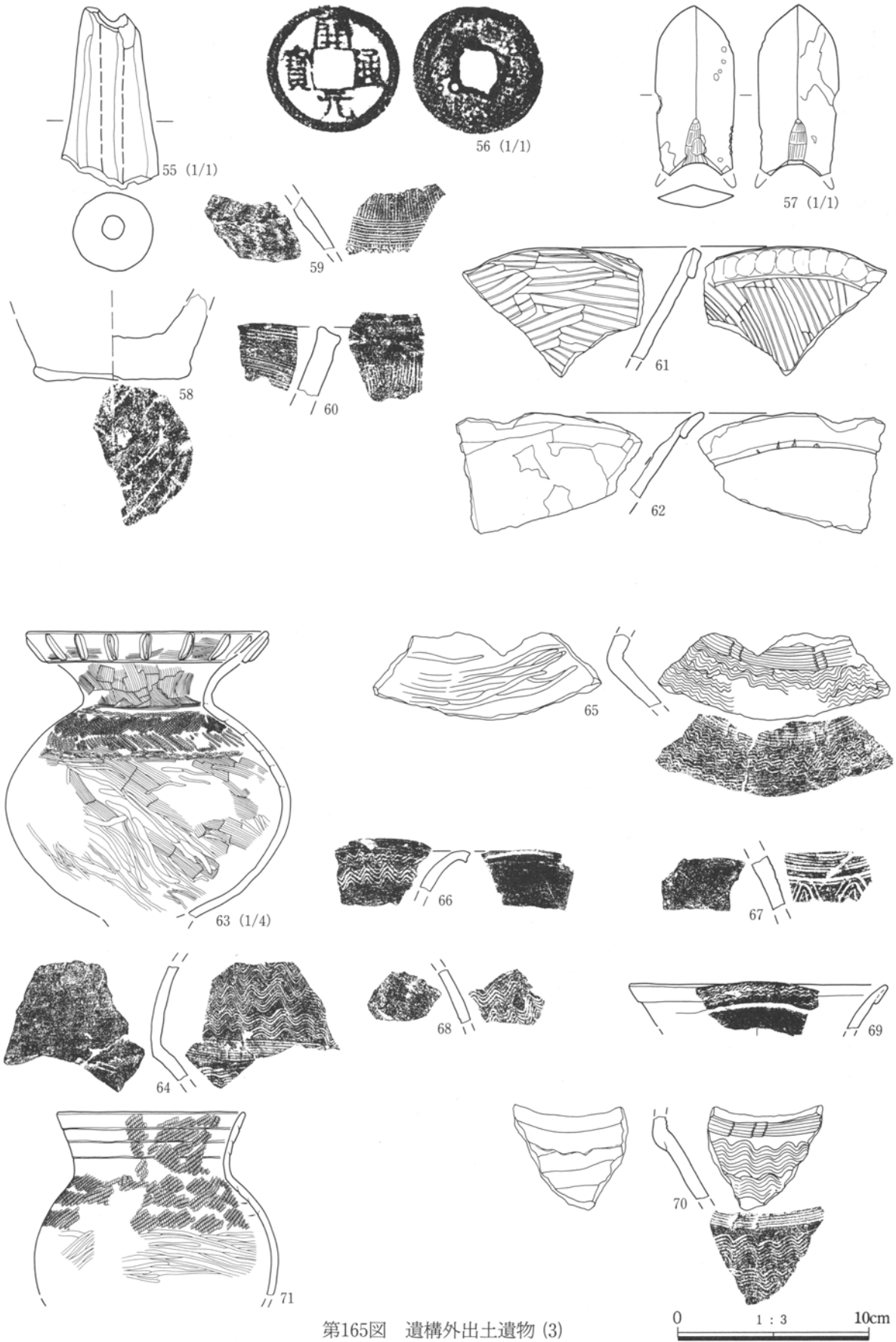




第163図 遺構外出土遺物 (1)



第164図 遺構外出土遺物 (2)



第165図 遺構外出土遺物 (3)

第4章 確認された遺構・遺物について

古墳時代遺構外出土遺物観察表

挿図番号 PL.番号	種別 器種	出土位置 残存	度目(cm)	胎土・色調・焼成	形状・技法等の特徴	備考
163図-1 PL.62	土師器 S字甕	A区覆土 口縁部片	口(14.3) 高<5.8>	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	S字状口縁部は、稜が強い。	
163図-2 PL.62	土師器 S字甕	A区覆土 口縁部片	口(16.0) 高<5.6>	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	S字状口縁部は、緩やかなライン。内外面、磨滅。	
163図-3 PL.62	土師器 S字甕	A区覆土 胴下部片	高<11.6>	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	外面胴部は、ほぼ全体が、ヘラ削り。内面は黒色。	
163図-4 PL.62	土師器 甕	A区X243-Y 976G 底部片	高<2.5> 底(5.0)	良・にぶい赤褐 5YR 5/4・酸化	外面はヘラ削り、ハケ目。底部外面にヘラ削り。内面に裂け目、全体にハケ目を施す。	
163図-5 PL.62	埴輪 円筒埴輪	B区表土 破片	厚1.6	良・橙 2.5YR 6/6・酸化	外面縦方向にハケ目の後凸帯接合。内面横方向にハケ目。	
163図-6 PL.62	埴輪 円筒埴輪	B区X245-Y 901G 破片	厚1.5	良・橙 7.5YR 7/6・酸化	内外面にハケ目が施される。内外面ともに磨滅著しい。	
163図-7 PL.62	土師器 坏	C区表土 口縁部片	口11.8 底9.2 高4.2	良・にぶい黄橙 10YR 7/4・酸化	扁平な丸底。外部底面はヘラ削り。	
163図-8 PL.62	土師器 甕	C区覆土 底部片	高<1.4> 底5.7	良・にぶい橙 5YR 6/4・酸化	底部内外面にヘラ削り。	
163図-9 PL.62	須恵器 甕	C区表土 胴部片	厚1.2	良・黄灰 2.5YR 6/1・酸化	外面は平行叩き目、一部に剥離が認められる。内面は青海波文様が残る。	
163図-10 PL.62	埴輪 円筒埴輪	C区表土 破片	厚1.4	良・橙 5YR 6/6・酸化	外反。外面は縦方向にハケ目、内面は横方向にハケ目が施される。	
163図-11 PL.62	埴輪 円筒埴輪	C区表土 破片	厚1.2	良・橙 7.5YR 6/6・酸化	外面に縦方向のハケ目の後凸帯を接合。内外面ともに磨滅著しい。	
163図-12 PL.62	埴輪 円筒埴輪	C区表土 破片	厚1.2	良・橙 7.5YR 6/6・酸化	外反。内面は焼成時の不完全燃焼で暗灰色。外面は縦方向、内面は横方向のハケ目。	
163図-13 PL.62	埴輪 円筒埴輪	C区表土 破片	厚1.1	良・明赤褐 5YR 5/6・酸化	外反。外面の一部剥離、内面は磨滅著しい。	
163図-14 PL.62	埴輪 円筒埴輪	C区表土 破片	厚1.6	良・橙 7.5YR 6/6・酸化	外面に縦方向のハケ目の後、凸帯を接合。内外面ともに磨滅著しい。	
163図-15 PL.62	埴輪 形象埴輪	C区表土 破片	厚1.9	良・明赤褐 5YR 6/6・酸化	内外面ともに磨滅著しい。内面に比べて外面がより赤色が強い。一部に円窓を確認。	
163図-16 PL.62	埴輪 円筒埴輪	C区表土 破片	厚1.5	良・橙 5YR 6/6・酸化	内外面とも、2方向のハケ目が重なる。外面に比べて内面のハケ目の間隔が狭い。	
163図-17 PL.62	埴輪 円筒埴輪	C区表土 破片	厚0.8	良・橙 7.5YR 6/6・酸化	外反内外面ともに磨滅著しい。内面に施されたハケ目の間隔は2種類ある。	
163図-18 PL.62	埴輪 円筒埴輪	C区表土 破片	厚1.3	良・橙 5YR 6/6・酸化	外面は縦方向にハケ目後、凸帯接合。内面は磨滅著しい。	
164図-19 PL.63	土師器 壺	D区覆土 ほぼ完形	口13.8 底4.1 高24.7	良・にぶい黄褐 10YR 5/3・酸化	口縁部は歪み、中心軸がズれる。底部外面にヘラミガキ。外面下部から底面にかけて黒斑。	
164図-20 PL.63	弥生土器 壺	D区覆土 1/4 口縁～胴部片	口(16.8) 高<15.8>	良・にぶい橙 5YR 7/4・酸化	外面頸部に3連止の簾状文。肩部櫛描き波状文。櫛描き施文具II種か。	
164図-21 PL.63	土師器 壺	D区覆土 胴下～底部片	高<6.3> 底3.8	良・にぶい橙 7.5YR 7/4・酸化	底部外面にヘラミガキ。外面は部分的に黒斑。	
164図-22 PL.63	土師器 甕	D区X335-Y 487G 口縁部片	口(11.7) 高<4.9>	良・にぶい黄橙 10YR 7/2・酸化	内外面ともに磨滅著しい。口縁内外面は横方向にヘラ撫で。	
164図-23 PL.63	土師器 甕	D区覆土 口縁部片	口(16.6) 高<3.7>	良・灰黄 2.5Y 6/2・酸化	口縁部は大きく外反する。外面磨滅著しい。頸部に煤が付着する。	
164図-24 PL.63	土師器 甕	D区X335-Y 506G 底部片	高<4.1> 底(7.0)	良・にぶい黄橙 10YR 7/3・酸化	内外面ともに磨滅著しい。底部外面はヘラ削り。	
164図-25 PL.63	土師器 甕	D区表土 1/2 底部片	高<3.3> 底(6.0)	良・灰白 10YR 8/2・酸化	内外面磨滅著しい。胴は大きく外へ立ちあがる。	
164図-26 PL.63	土師器 甕	D区X311-Y 482G 底部片	高<2.0> 底(6.4)	良・灰黄 2.5Y 7/2・酸化	内外面ともに磨滅著しい。底部外面はヘラ削り。	
164図-27 PL.63	土師器 甕	D区表土 底部片	高<1.9> 底4.6	良・灰黄褐 10YR 6/2・酸化	内外面ともに磨滅著しい。底部外面に回転を伴うヘラ削り、黒色。	
164図-28 PL.63	土師器 甕	D区覆土 底部片	高<2.3> 底5.6	良・にぶい橙 7.5YR 7/3・酸化	底部は不安定な平底、外面にヘラ削り。底部内面は二次焼成のために赤変、やや磨滅。	
164図-29 PL.63	土師器 甕	D区表土 底部片	高<2.0> 底7.4	良・にぶい橙 7.5YR 6/4・酸化	底部外面にヘラミガキ。外面は磨滅。	